

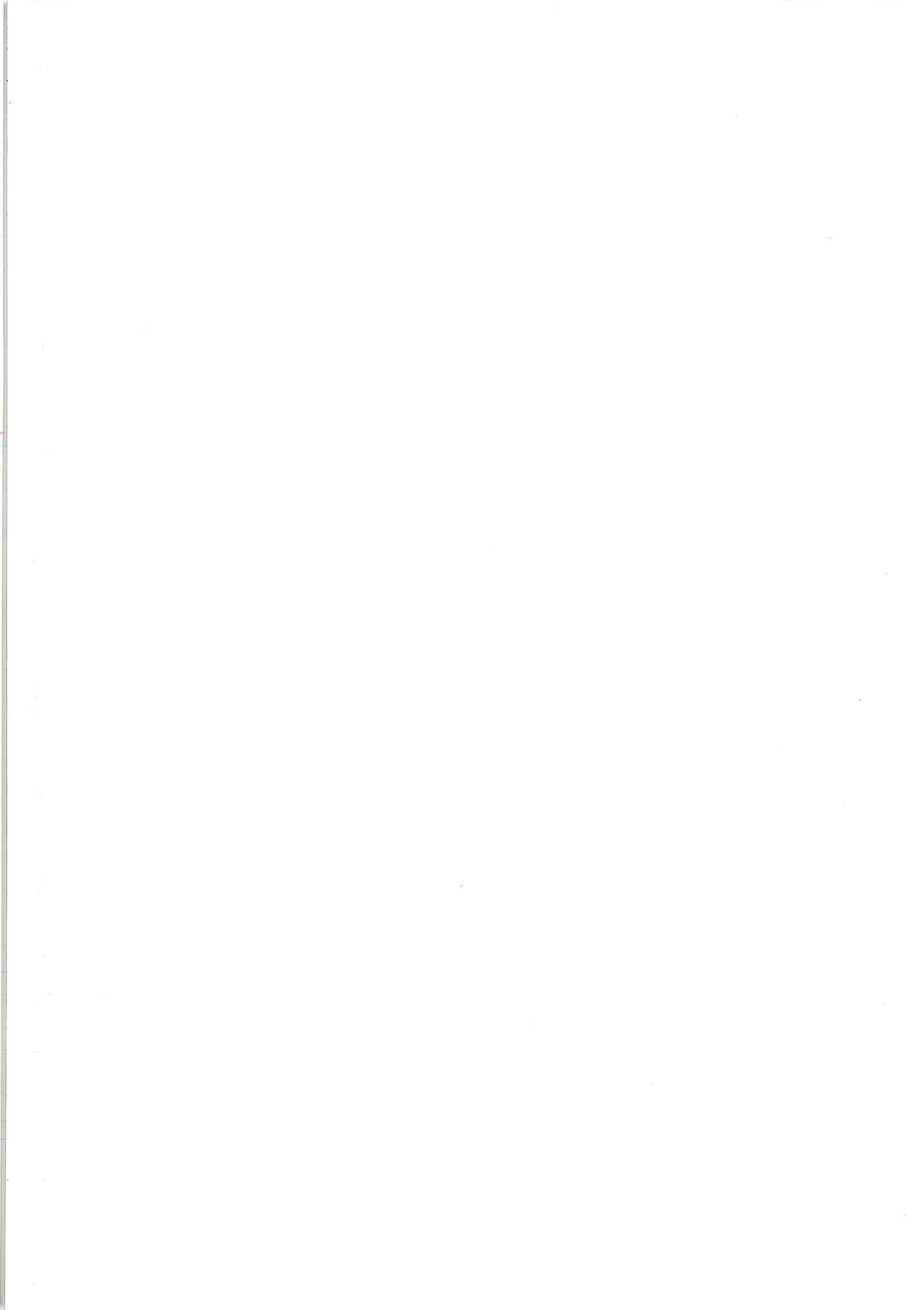
RyohazamaHiwatashi

両迫間日渡遺跡

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2009 平成21年3月
玉名市教育委員会



玉名市文化財調査報告 第19集

Ryohazama Hiwatashi
両迫間日渡遺跡

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2009（平成21）年. 3月

玉名市教育委員会



調査Ⅲ区 祭祀遺構S-14



- 1 調査Ⅲ区 祭祀遺構S-14出土土器
- 2 調査Ⅲ区 祭祀遺構S-18出土土器
- 3 調査Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区出土ガラス玉



調査Ⅲ区 祭祀遺構S-14出土石製品



1 調査I区 杭列

両迫間日渡遺跡 の発掘

1) 両迫間日渡遺跡は

これまでの発掘調査で、県内最古となる弥生時代の水田跡や当時の人たちの足跡が発見されています。古くは約3千年前（縄文時代晩期）の土器や石器が見つかっていて、その後も弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代、さらには室町時代から江戸時代まで、遺跡では数千年にわたる人々の生活の跡が見つかっています。



所在地：熊本県玉名市玉名・両迫間
調査期間：平成19（2007）年4月～平成20（2008）年3月上旬
調査機関：玉名市教育委員会文化課
調査面積：約4,800㎡
調査原因：九州新幹線新玉名駅周辺整備事業

2) 今回の発見

2000年前 弥生時代中期（紀元前後）の 水田、米づくり



現代の水田に実る稲穂



2000年前の弥生時代人がつ
くった水田のあぜ（杭列）

遺跡のまわりは現在、水田がひろがっていますが、現代の水田の地下2mから、2000年前の水田の跡が見つかりました。これは熊本県内で見つかった水田で最古のものです。

見つかったのは水田を区画する畦畔（あぜ）の部分で、盛り上げた土がくずれない工夫としてたくさんの杭が打ち込まれていました。

遺跡からは、イネを刈り取るのに使う「石庖丁」や、クワ・スキといった木製の農具も出土しています。

1500年前 古墳時代中期（5世紀）の 祭祀、神まつり

5m四方ほどの高まりに、古墳時代の人が置き並べたままのような状態で土器や石製品が発見されました。

これらの土器や石製品はおそなえされた様な状態で発見されたこと、土器の多くは日用品ではないミニチュアで、石製品も剣や鏡、まが玉などを真似た模造品であることから、およそ1500年前の神まつりの跡であると考えられます。少しずつ場所を変えて時期の違う神まつりの跡が3ヶ所あり、少なくとも50年以上繰り返し、この地で神まつりが行われていたと考えられます。



神まつりの風景想像図
（たんぷ画）

古墳時代人が置き並
べた土器と石製品

3) 出土したもの

〔神まつりの跡から〕

(1) ミニチュア土器 日常生活用ではない、とても小さなミニチュア土器が多数出土しました。粘土のかたまりをこねて作った特別な土器で、神まつりに使われたものです。



(2) 剣形石製模造品 鉄剣の形をまねして造られたと考えられている古墳時代のまつりの道具です。

九州ではこれまで福岡を中心として 20 遺跡近くから出土していますが、このような丁寧なつくりのものは初めての発見です。



*実物大



(3) 有孔円板 *実物大 青銅鏡をまねして作られたと考えられている古墳時代のまつりの道具で、石製模造品の一種です。

中央に小さな孔が2つあり、ヒモで木の枝から吊り下げたと考えられています。



*実物大

(4) まが玉・白玉 まが玉や白玉（ビーズ）、管玉などが300点以上出土しました。もともとまが玉や白玉は身につけるためのアクセサリーなのでガラスやキレイな輝きのある石で作られますが、これはまつりの道具なので白や濃緑色のやわらかい石で作られています。いちばん小さなまが玉は7ミリしかなく、飾りにはつかえないくらい小さいものです。

(5) 土製模造品

土製まが玉（土で造られた勾玉）や、土製模造鏡（土で造られた銅鏡の模造品）が出土しました。これらもまつりの道具です。



(6) 土師器（はじき）・須恵器（すえき）

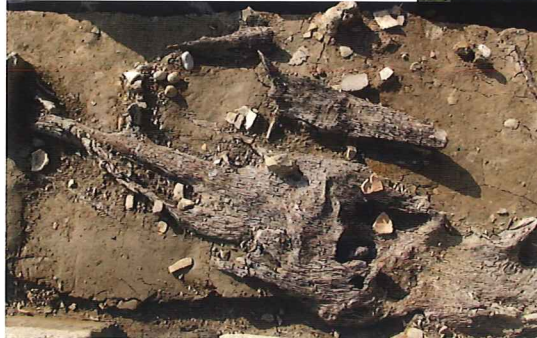
古墳時代の焼き物には、土師器（素焼きの土器）と須恵器（灰色のかたい土器）の2種類があります。土師器には形や大きさが様々なものがあります。須恵器は容器の蓋（ふた）が出土しました。土師器にくらべて作るのに技術が必要なことから、この時代にはまだ貴重で、出土した数はごく少数です。



(7) クスノキの根 土器が多数見つかった神まつり跡のすぐ横には大きなクスノキの根っこがありました。水田地帯のなかにそびえるクスノキの根元で神まつりがおこなわれていたのでしょうか。現代でも玉名市内の多くの神社にはクスノキの大木がそびえています。



貴船神社のクスノキ（玉名市指定天然記念物）



出土したクスノキの根

〔田んぼから〕

米作りの道具 弥生時代に稲穂を

刈り取るのに使った「石庖丁」とい



石庖丁

う石器や、耕すための木製クワ（約千七百年前のもの）など、昔の人々が米作りに使った農具が見つかりました。

二又鍬



4) 発掘の成果



九州新幹線新玉名駅前の工事で壊されることになった両迫間日渡遺跡の発掘調査では、玉名の古代を明らかにする大きな成果が得られました。狭い範囲に500点以上の土器や石製品が集中し、古墳時代には50年以上の時を越えて繰り返しこの場所で祭祀（神まつり）が行われていたことがわかりました。このように重複して祭祀が行われた場が発見されることは非常に珍しく、九州では福岡県の沖ノ島を別格として例のない貴重な発見です。剣や鏡などの石製模造品を使うのは当時の中央の近畿地方を中心とした祭りの形式で、その波及の状況を知る上で貴重な発見です。またクスノキは、神社のご神木の源流につながる存在かもしれません。

周辺に住居跡がなく集落（ムラ）の中とは考えられないこと、1度だけではなく繰り返し祭祀が行われ、周辺は2000年前（弥生時代）からすでに水田であったことから豊作を祈願、感謝する儀式に使われたものと想像できます。

これらの発見は現在も田園のひろがる玉名平野が、日本に水田稲作が伝わった当初から二千年以上もの間、人々が協力して水田を開き、ときに神に祈りを捧げつつ連綿と守りつがれてきた風景であることを物語ります。人々の生活を支えた穀倉地帯、玉名平野を見渡せる高台には古墳時代の指導者たちの巨大なお墓（大坊古墳・永安寺東古墳など）が築かれています。



国指定史跡 永安寺東古墳



国指定史跡 大坊古墳出土の金製耳飾りと、首飾り・耳飾り

発刊のことば

玉名市は、旧石器時代から今日に至るまで長い歴史を持ち、各所に豊富な文化財が所在しています。それらは縄文時代の貝塚、弥生時代の甕棺・支石墓、装飾古墳、古代郡衙跡、海外貿易港だった伊倉・高瀬のまちなみなど、熊本県の歴史を語る上で重要な文化財であり、どの時代においても歴史的資源の豊富なことは本市の特色であります。近年は、国道 208 号玉名バイパスの建設も進み、九州新幹線の整備も着々と進行しており、熊本県北部における政治経済、教育文化、観光の中心都市としてさらなる発展を遂げようとしています。

このような中で、玉名市教育委員会ではさまざまな開発事業との調整を図り、発掘調査をはじめとする文化財調査の円滑な遂行のため、専門職員の増員を図るなど、体制の充実に努めてまいりました。1市3町の合併後増加した指定文化財の見直し作業や、進行している九州新幹線をはじめとする各種事業に対応するため、玉名市内に所在する文化財の状況把握にも常に取り組み、埋蔵文化財行政の改善・充実に努力しているところであります。また、その成果の公開・活用を通じて、広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、平成 18 年度から 19 年度にかけて九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴い発掘調査を行いました玉名市玉名・両迫間に所在する両迫間日渡遺跡の調査成果をまとめたものです。本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解の一助となり、また、学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査、報告書作成にあたって、各方面で多くの方々にご指導、ご協力を賜ったことに対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成 21 年 3 月 31 日

玉名市教育委員会

教育長 菊川茂男

例 言

1. 本書は、熊本県玉名市大字玉名及び大字両迫間に所在する両迫間日渡遺跡の発掘調査報告書である。
2. この発掘調査は九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴い、記録保存を目的として実施した。
3. 確認調査及び発掘調査は玉名市教育委員会文化課が担当した。
4. 発掘調査は平成19年3月24日～平成20年3月21日までの期間で実施した。詳細な日程は第I章第2節に記した。
5. 発掘調査における遺構実測、遺物取上、写真撮影等の担当者は第I章第2節に記した。
6. 発掘調査における基準杭設定、自然科学分析、航空写真撮影、及び調査IV区の発掘調査業務については業務委託により実施し、その詳細は第I章第2節第3項に記した。
7. 整理・報告書作成作業は、玉名市教育委員会において平成20年5月1日から平成21年3月31日までの期間で実施した。詳細な日程は第I章第3節に記した。
8. 整理・報告書作成作業の一部は業務委託により実施し、その詳細は第I章第3節第3項に記した。出土遺物の実測・トレース作業、遺物実測図以外の挿図のトレース作業等の担当者は第I章第3節第2項に記した。
9. 遺物の写真撮影は、調査I区出土遺物を兵谷有利が、それ以外を末永崇、荒木隆宏が行った。
10. 方位及び座標は、国土地理院「平面直角座標系Ⅱ系」による。標高値は海拔高である。なお、九州新幹線建設に係る設計及び埋蔵文化財発掘調査はすべて日本測地系によっているため、本調査及び本書もこれに準じている。なお各調査区の測量基準点座標を下表に示した。
11. 本書で用いた土壌・胎土色調名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」に基づく。
12. 本書の編集は荒木が担当し、一部を末永（第Ⅲ章第2節）、兵谷（第Ⅳ章）が行った。執筆分担については目次に執筆者名を記した。第Ⅷ章については執筆者名を節の頭に記した。
13. 発掘調査記録および出土遺物は玉名市教育委員会文化財整理室（玉名市繁根木72-3）にて保管している。広く活用されることを望む。

調査区	日本測地系		世界測地系	
	X	Y	X	Y
I区	-6830.0000	-39760.0000	-6457.3962	-39980.8766
II区	-6740.0000	-39710.0000	-6367.3951	-39930.8831
III区	-6820.0000	-39760.0000	-6447.3959	-39980.8775
IV区	-6850.0000	-39700.0000	-6477.3974	-39920.8745

本文目次

第Ⅰ章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	荒木 3
1. 事業照会	3
2. 確認調査に基づく協議	3
3. 発掘調査への協議	3
4. 民間委託の活用	4
第2節 発掘作業の経過	荒木 4
1. 全体計画	4
2. 調査体制	5
3. 業務委託	7
4. 作業の経過	7
5. 発掘調査日誌抄録	兵谷・荒木・齋父・宮崎 9
6. 調査成果の公開と報告	17
7. 謝辞	19
第3節 整理作業の経過	荒木 20
1. 全体計画	20
2. 調査体制	20
3. 業務委託	21
4. 作業の経過	21
5. 保存処理の概要	22
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	23
第1節 玉名の位置と環境	荒木 25
1. 地理的環境	25
2. 玉名平野	26
第2節 歴史的環境	荒木 26
1. 玉名の歴史的環境	26
2. 玉名平野周辺の弥生時代・古墳時代遺跡	31
(1) 弥生時代遺跡	31
(2) 古墳時代遺跡	31
第Ⅲ章 調査の方法	37
第1節 遺跡の概要	荒木 39
1. 両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡の概要	39
第2節 確認調査の成果	末永 39
1. 調査の経緯及び方法	末永 39
2. 調査の成果	41
(1) 各トレンチの概要	末永 45
(2) 15 トレンチ・19 トレンチ検出の遺物集中について	齋父 75
(3) 遺物	古閑 78
(4) まとめ	末永 78
3. 玉名平野の水利を中心とした現況について	末永 80
(1) 近代以降の水田の変遷	80
(2) 現在の灌漑状況について	82
(3) 地形及び地割について	84
第3節 調査の方法	荒木 87
1. 調査区の設定	87
2. 調査の方法	87
(1) 調査Ⅰ区	兵谷 87

(2) 調査Ⅱ区	荒木	89
(3) 調査Ⅲ区	荒木・蠶父	91
(4) 調査Ⅳ区	宮崎	92
第Ⅳ章 調査Ⅰ区の調査成果		95
第1節 層序	兵谷	97
第2節 遺構	兵谷	119
1. 畦畔状遺構		119
(1) SX01		119
(2) SX02		126
(3) SX03		133
(4) SX04		140
(5) SX05		143
(6) SX06		143
2. 杭列		149
(1) 杭列第1群(1対)		149
(2) 杭列第2群(1対)		152
(3) 杭列第3群(1対)		152
(4) 杭列第4群		155
3. 溝状遺構		156
(1) SD01		156
第3節 遺物	兵谷	163
1. 遺物		163
第Ⅴ章 調査Ⅱ区の調査成果		183
第1節 層序	荒木	185
第2節 遺構	荒木	191
1. 杭列		191
(1) A列		191
(2) B列		191
(3) C列		191
(4) D群		191
2. 畦畔状遺構		196
3. 自然流路		202
第3節 遺物とその分布	荒木	202
1. 遺物出土状況	荒木	202
2. 包含層出土の遺物	荒木・古閑	207
第Ⅵ章 調査Ⅲ区の調査成果		215
第1節 層序	荒木・蠶父	217
第2節 遺構	荒木・蠶父	222
1. 杭	蠶父	222
2. 畝状遺構	蠶父	222
3. 溝状遺構	蠶父	227
4. 畦畔状遺構	蠶父	229
5. 土坑	蠶父	229
6. ピット	蠶父	232
7. 祭祀遺構とその関連遺構	荒木	232
(1) AA-20 グリッドⅢ-1層における遺物出土状況と祭祀遺構検出状況	蠶父	232
(2) 祭祀遺構の配置	荒木	234
(3) 祭祀遺構周辺の土層堆積状況	荒木	241

(4) 水洗選別	荒木	241
(5) 祭祀遺構	荒木 (遺構・遺物)・古閑 (遺物)	245
8. 畦畔状遺構	荒木 (遺構)・古閑 (遺物)	288
第3節 遺物とその分布		295
1. 遺物出土状況	荒木	295
2. 包含層出土の遺物	古閑	295
第七章 調査IV区の調査成果		315
第1節 層序	宮崎・荒木	317
第2節 遺構	宮崎 (遺構)・古閑 (遺物)	323
1. 水田面		323
2. 杭列		323
3. 溝状遺構		326
4. 土杭		336
5. ピット		363
第3節 遺物とその分布		366
1. 遺物出土状況	宮崎	366
2. 出土遺物	古閑	370
第八章 自然科学分析		375
第1節 両迫間日渡遺跡調査 I 区の自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	377
第2節 両迫間日渡遺跡 (調査 I 区・II 区) における自然科学分析	株式会社 古環境研究所	361
I. 植物珪酸体		394
II. 花粉分析		405
第3節 両迫間日渡遺跡 (調査 III 区・IV 区) における自然科学分析	株式会社 古環境研究所	413
I. 植物珪酸体分析		413
II. 花粉分析		429
第4節 両迫間日渡遺跡 (調査 I 区) 出土木製品の樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社	436
第5節 両迫間日渡遺跡 (調査 II 区・III 区・IV 区) における自然科学分析	株式会社 古環境研究所	443
I. 両迫間日渡遺跡における放射性炭素年代測定		443
II. 両迫間日渡遺跡における種実同定		448
III. 両迫間日渡遺跡における樹種同定		453
IV. 両迫間日渡遺跡における植物珪酸体分析		456
V. 両迫間日渡遺跡における花粉分析		462
VI. 両迫間日渡遺跡における動物遺存体		468
VII. 両迫間日渡遺跡出土石製品の石材鑑定 (肉眼鑑定・薄片作成)		470
VIII. 両迫間日渡遺跡出土石製品の蛍光 X 線分析および X 線回折分析		474
第6節 玉名市両迫間日渡遺跡 (調査 I 区) 出土木製品の樹種調査結果	株式会社 吉田生物研究所	485
第7節 玉名市両迫間日渡遺跡 (調査 I 区) 出土木製品の放射性炭素年代測定	株式会社 吉田生物研究所	501
第8節 玉名市両迫間日渡遺跡 (調査 II 区・III 区・IV 区) 出土木製品の樹種調査結果		
株式会社 吉田生物研究所		507
第9節 玉名市両迫間日渡遺跡 (調査 II 区・III 区・IV 区) 出土木製品の放射性炭素年代測定		
株式会社 吉田生物研究所		511
第九章 総括	荒木	515

図 版 目 次

- 図版 1 1 伊倉丘陵性台地上空からみた玉名平野と小代山、菊池川
- 図版 2 1 玉名市街地と玉名平野（南から） 2 発掘調査地遠景（南東から）
- 図版 3 1 玉名平野とその東方遠景（西から） 2 玉名平野とその南方遠景（北から）
- 図版 4 1 玉名地域医療センター屋上からみた玉名平野と新幹線路線建設予定地
2 玉名地域医療センター屋上からみた玉名平野と調査地周辺
- 図版 5 1 玉名地域医療センター屋上からみた玉名平野 2 玉名小学校屋上からみた調査地周辺（北から）
- 図版 6 1 調査地北側（西から） 2 調査地北西側（南から）
- 図版 7 1 調査地西側水路（南から） 2 調査地西側水路（北から）
- 図版 8 1 調査Ⅱ区付近（南西から） 2 調査地南西側（南から）
- 図版 9 1 中央水路（北から） 2 中央水路（南から）
- 図版 10 1 調査地南西側（北から） 2 中央水路と西側水路の合流点（南東から）
- 図版 11 1 調査地南東側（東から） 2 調査地北東側（東から）
- 図版 12 1 1 トレンチ掘削状況（東から） 2 1 トレンチ土層 3 2 トレンチ東壁土層
4 3 トレンチ水路際掘削状況（北東から） 5 3 トレンチ北壁水路際土層
6 5 トレンチ北壁土層 7 5 トレンチ西側水路北壁土層 8 6 トレンチ土層
- 図版 13 1 6 トレンチ北壁土層 2 7 トレンチ掘削状況（南から） 3 7 トレンチ西壁土層
4 9 トレンチ西壁土層 5 10 トレンチ西壁土層 6 11 トレンチ掘削状況（北から）
7 11 トレンチ西壁土層 8 12 トレンチ掘削状況（東から）
- 図版 14 1 12 トレンチ土層 2 15 トレンチ南側水路部分 3 17 トレンチ東壁土層
4 17 トレンチ西壁土層 5 18 トレンチ杭検出部分 6 18 トレンチ杭出土状況
7 18 トレンチ西側水路部分北壁土層 8 20 トレンチ西壁土層
- 図版 15 1 20 トレンチ杭検出部分西壁土層 2 23 トレンチ北側西壁土層 3 24 トレンチ杭検出状況
4 26 トレンチ中央水路北壁土層 5 26 トレンチ 281 番地付近（東から） 6 27 トレンチ土層
7 29 トレンチ杭検出部分 8 34 トレンチ杭検出状況
- 図版 16 1 35 トレンチ東壁土層 2 40 トレンチ土層 3 44 トレンチ杭検出状況 4 47 トレンチ北壁
5 54 トレンチ南壁 6 57 トレンチ掘削状況（西から） 7 57 トレンチ土層
8 58 トレンチ土層
- 図版 17 1 15 トレンチ遺物出土状況 2 15 トレンチ遺物出土状況 3 15 トレンチ遺物出土状況
4 15 トレンチ遺物出土状況 5 確認調査 15 トレンチ遺物（S-01）遺物出土状況
- 図版 18 1 確認調査 15 トレンチ中央部遺物出土状況（S-01）
2 確認調査 15 トレンチ中央部遺物出土状況（S-01）
- 図版 19 1 確認調査 19 トレンチ サブトレンチ遺物出土状況
2 確認調査 19 トレンチ サブトレンチ遺物出土状況
- 図版 20 1 確認調査 15 トレンチ樹木根出土状況 2 確認調査 15 トレンチ樹木根出土状況
- 図版 21 1 確認調査 トレンチ出土遺物 2 確認調査 トレンチ出土遺物
- 図版 22 1 調査区全景
- 図版 23 1 調査Ⅰ区のⅠ区からⅦ区 2 調査Ⅰ区のⅤ区からⅭ区
- 図版 24 1 杭列全景（北より） 2 杭列全景（南より） 3 杭列全景（西より）
- 図版 25 1 杭列Ⅰ群（東より） 2 杭列Ⅱ群（西より）
- 図版 26 1 杭列Ⅰ群（西より） 2 杭列Ⅰ群杭の密集部分（西より） 3 杭列Ⅱ群側面（西より）
4 杭列Ⅱ群と杭列Ⅲ群（K-6ベルト下） 5 杭列Ⅰと土層（南より）
6 杭列Ⅰ北端部土層（南より）
- 図版 27 1 Ⅶ区の畦畔状遺構（北より） 2 Ⅷ区の畦畔状遺構（南より） 3 Ⅸ区の畦畔状遺構（南より）
4 Ⅹ区の畦畔状遺構（北より） 5 Ⅺ区の畦畔状遺構（西より） 6 Ⅻ区の畦畔状遺構（南より）
7 Ⅼ区の畦畔状遺構（西より） 8 Ⅽ区の畦畔状遺構（東より）
- 図版 28 1 Ⅶ区の畦畔状遺構（南より） 2 Ⅶ区の畦畔状遺構作業風景（北より）
3 Ⅷ区の畦畔状遺構（南より） 4 Ⅸ区の畦畔状遺構（北より） 5 Ⅸ区の畦畔状遺構（南より）
6 Ⅸ区の畦畔状遺構と杭（西より） 7 Ⅸ区の畦畔状遺構と杭（南より）
- 図版 29 1 Ⅰ区の畦畔状遺構（北より） 2 Ⅱ区の畦畔状遺構（南より） 3 Ⅲ区の畦畔状遺構（南より）

- 4 4区の畦畔状遺構(北より) 5 5区の畦畔状遺構(南より) 6 6区の畦畔状遺構(北より)
7 7区の畦畔状遺構(南より) 8 8区の畦畔状遺構(南より)
- 図版 30 1 9区の畦畔状遺構(北より) 2 10区の畦畔状遺構(北より) 3 11区の畦畔状遺構(西より)
4 12区の畦畔状遺構(東より) 5 13区の畦畔状遺構(西より) 6 14区の畦畔状遺構(西より)
- 図版 31 1 1区の畝状遺構(北より) 2 2区の畝状遺構(北より) 3 3区の畝状遺構(北より)
4 4区の畝状遺構(北より) 5 5区の畝状遺構(北より) 6 6区の畝状遺構(北より)
7 7区の畝状遺構(北より)
- 図版 32 1 8区の畝状遺構(北より) 2 9区の畝状遺構(北より) 3 10区の畝状遺構(北より)
4 11区の南北・東西方向の畝状遺構(西より) 5 12区の畝状遺構(西より)
6 13区の畝状遺構(西より) 7 14区の畝状遺構(西より)
- 図版 33 1 1区の畦畔状遺構(北より) 2 2区の畦畔状遺構(北より) 3 3区の畦畔状遺構(北より)
4 4区の畦畔状遺構(北より) 5 5区の畦畔状遺構(北より) 6 6区の畦畔状遺構(北より)
7 7区の畦畔状遺構(北より)
- 図版 34 1 8区の畦畔状遺構(北より) 2 9区の畦畔状遺構(北より) 3 10区の畦畔状遺構(北より)
4 11区の畦畔状遺構(西より) 5 12区の畦畔状遺構(西より) 6 13区の畦畔状遺構(西より)
7 14区の畦畔状遺構(西より)
- 図版 35 1 2区の沈砂溝状遺構(北より) 2 3区の沈砂溝状遺構(南より)
3 4区の沈砂溝状遺構(南西より)
- 図版 36 1 5区出土木製品(1)
図版 37 1 5区出土木製品(2)
図版 38 1 5区出土木製品(3)
図版 39 1 5区出土木製品(4)
図版 40 1 5区出土木製品(5)
- 図版 41 1 杭列群出土土器 2 SX06 出土土器 3 SX05 出土遺物
図版 42 1 SX04 出土遺物 2 SX03 出土遺物
図版 43 1 SX02 出土遺物 2 一括出土遺物
図版 44 1 調査Ⅱ区全景(Ⅲb層上面検出時)
2 調査Ⅱ区土層堆積状況(Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅲc①・②層、Ⅲd層、Ⅲe層)
3 調査Ⅱ区(AD-27グリッド)南壁土層堆積状況(Ⅲb、Ⅲc①・②、Ⅲd、Ⅲe、Ⅳ1、Ⅳ2、Ⅳ3、Ⅳ4、Ⅳ5)
- 図版 45 1 調査Ⅱ区土層堆積状況(Ⅳ2-1層下部黒色粘土) 2 Ⅳ層下部土層堆積状況(トレンチ)
3 Ⅳ層下部黒色粘土検出状況 4 調査Ⅱ区土層堆積状況(センターサークルトレンチ)
- 図版 46 1 杭列検出状況(南から) 2 A-1杭 3 A-2杭 4 A-3杭 5 A-4杭 6 A-5杭
7 A-6杭 8 A-7杭 9 B-2杭 10 B-3杭
- 図版 47 1 C-1杭 2 C-2杭 3 D-1・D-2杭 4 D-3杭 5 D-5(0207)杭 6 D-4a杭
7 D-4b杭 8 D-4c杭 9 A-7a・b杭
- 図版 48 1 調査区全景(Ⅲc層上面) 2 畦畔状遺構(SX02・SX03・SX06) 3 畦畔状遺構(SX02)
図版 49 1 畦畔状遺構(SX02) 2 畦畔状遺構(SX02) 3 畦畔状遺構(SX06)
図版 50 1 畦畔状遺構(SX03) 2 畦畔状遺構(SX01) 3 畦畔状遺構(SX05・SX01)
図版 51 1 畦畔状遺構(SX12・09) 2 畦畔状遺構(SX12) 3 畦畔状遺構(SX12) 4 畦畔状遺構(SX04)
図版 52 1 畦畔状遺構(SX03・08) 2 畦畔状遺構(SX03) 3 畦畔状遺構(SX02) 4 畦畔状遺構(SX09)
図版 53 1 畦畔状遺構(SX12)断面 2 畦畔状遺構(SX12)断面 3 畦畔状遺構(SX12)断面
4 畦畔状遺構(SX11)断面 5 畦畔状遺構(SX01)断面
- 図版 54 1 畦畔状遺構(SX03・08・10)・溝状遺構 2 溝状遺構(古) 3 溝状遺構(新) 4 溝状遺構(新)
- 図版 55 1 Ⅲb層遺物出土状況 2 AF-28グリッドⅢc層遺物出土状況
3 AF-26グリッドⅢc層遺物出土状況 4 AD-26グリッドⅢc層遺物出土状況
5 AD-27グリッドⅢd層遺物出土状況 6 Ⅲd層遺物出土状況
- 図版 56 1 Ⅲd層遺物出土状況 2 Ⅳ層遺物出土状況 3 調査Ⅱ区全景(Ⅳ層上面)
図版 57 1 調査Ⅱ区包含層出土遺物(縄文・弥生時代) 2 調査Ⅱ区包含層出土遺物(古墳時代)
3 調査Ⅱ区包含層出土遺物(古墳時代)
図版 58 1 調査Ⅱ区包含層出土遺物(古墳時代) 2 調査Ⅱ区包含層出土遺物(古代・中世)

- 図版 59 1 調査Ⅱ区包含層出土遺物(中世) 2 調査Ⅱ区包含層出土遺物(中世・近世) 3 調査Ⅱ区出土杭
- 図版 60 1 調査Ⅲ区全景(東から) 2 調査Ⅲ区土層堆積状況 3 杭(S-12) 4 杭(S-13)
5 畝状遺構(S-1) 6 畝状遺構(S-2)
- 図版 61 1 足跡 2 畦畔状遺構(S-7・S-8) 3 溝状遺構(S-3) 4 Z-19グリッド 溝状遺構(S-3)
5 土坑(S-11)・ピット(S-15・S-17) 6 土坑(S-11) 上部遺物出土状況
7 土坑(S-11) 土層堆積状況
- 図版 62 1 AA-20グリッド遺構検出状況 2 AA-20グリッド遺構検出状況
3 土坑(S-11)・ピット(S-15・S-16・S-17) 検出状況 4 AA-20グリッド遺物出土状況(東から)
- 図版 63 1 AA-20グリッドSW(15T 西側)Ⅲ-1層遺物出土状況
2 AA-20グリッドSW(15T 西側)Ⅲ-1層遺物出土状況 3 AA-20グリッドSE有孔円板出土状況
4 AA-20グリッドSE遺物出土状況 5 AA-20グリッド ウシ歯出土状況
6 AA-19グリッド自然遺物出土状況 7 Ⅲ-1層土師器坏出土状況 8 調査Ⅲ区遺物出土状況
- 図版 64 1 祭祀遺構(S-14・S-18)と樹木根(S-19)
- 図版 65 1 祭祀遺構S-14(北から) 2 祭祀遺構S-14・S-18(南から) 3 祭祀遺構S-14・S-19(西から)
- 図版 66 1 祭祀遺構S-14遺物出土状況(東から) 2 S-14 石製品出土状況(東から)
3 S-14遺物出土状況(南から)
- 図版 67 1 S-14 南側遺物出土状況(南から) 2 S-14 北側遺物出土状況(南から)
- 図版 68 1 S-14 北側 須恵器出土状況(南から) 2 S-14 石製品出土状況(東から)
3 S-14 剣形出土状況(東から)
- 図版 69 1 S-14(北から) 2 土製模造鏡出土状況 3 石製品出土状況 4 有孔円板出土状況
- 図版 70 1 S-14 下部 手捏土器出土状況 2 S-14 土師器を支える手捏土器出土状況
3 S-14 土師器・手捏土器出土状況 4 S-14 白玉出土状況 5 S-14 白玉・手捏土器出土状況
- 図版 71 1 S-14 検出状況 2 S-14 検出土層観察用ベルト 3 S-14 検出状況
4 S-14 完堀・S-18 遺物出土状況
- 図版 72 1 S-18 上部遺物出土状況(南から) 2 S-18 上部遺物出土状況(西から)
- 図版 73 1 S-18 遺物出土状況(西から) 2 S-18 遺物出土状況(東から) 3 S-18 遺物出土状況(南から)
4 S-18 下位遺物出土状況(南から) 5 S-18 下位遺物出土状況
- 図版 74 1 S-19 樹木根・遺物出土状況(東から) 2 S-19 樹木根・遺物出土状況(南から)
3 S-19 樹木根下部土層堆積状況(南から) 4 S-19 樹木根出土状況・周辺土層堆積状況
- 図版 75 1 S-21 遺物出土状況(北西から) 2 S-21 遺物出土状況(南西から)
- 図版 76 1 畦畔状遺構S-20(東から) 2 畦畔状遺構S-20 東半部杭列検出状況(西から)
3 畦畔状遺構S-20 土層堆積状況 4 S-20 土層堆積状況・周辺遺物出土状況
- 図版 77 1 確認調査15 トレンチ西壁土層堆積状況
2 確認調査15 トレンチ西壁土層堆積状況・土壌分析試料採取位置
3 確認調査15 トレンチ西壁土層堆積状況・祭祀遺構 4 確認調査15 トレンチ西壁土層堆積状況
- 図版 78 1 AA-20グリッド S-14 検出ベルト(南) 土層堆積状況
2 AA-20グリッド S-14 検出ベルト(西) 土層堆積状況
3 確認調査22 トレンチ延長部東壁土層堆積状況
4 確認調査22 トレンチ延長部Ⅳ層弥生土器出土状況
5 確認調査22 トレンチ延長部Ⅳ層弥生土器出土状況
- 図版 79 1 S-14 出土土器集合
- 図版 80 1 S-14 出土土器(甕・壺) 2 S-14(北側) 出土土器
- 図版 81 1 S-14 出土手捏土器 2 S-14 出土壺内部手捏土器検出状況 3 S-14 出土須恵器
4 S-14 出土土製模造鏡・15 トレンチ出土土製模造鏡
- 図版 82 1 S-14 出土石製品 2 S-14 出土剣形
- 図版 83 1 S-14 出土剣形 2 S-14 出土剣形 裏面(出土時接地面)
- 図版 84 1 S-14 出土有孔円板 2 S-14 出土有孔円板 裏面(出土時接地面)
- 図版 85 1 S-14 出土玉類 2 S-18 出土土器
- 図版 86 1 S-18 出土玉類・有孔円板 2 AA-20グリッド・15 トレンチ出土有孔円板 3 S-01 出土土器
4 S-19 周辺出土土器
- 図版 87 1 確認調査時出土樹木根 2 確認調査時出土樹木根 3 S-19 周辺出土樹木根

- 4 S-19 周辺出土樹木根
- 図版 88 1 S-21 出土土器 2 S-21 出土土製勾玉 3 S-14・S-18 出土有孔円板集合 4 S-20 出土杭
- 図版 89 1 調査Ⅲ区包含層出土遺物(弥生時代) 2 調査Ⅲ区包含層出土遺物(弥生時代)
3 調査Ⅲ区包含層出土遺物(古墳時代) 4 調査Ⅲ区包含層出土遺物(古墳時代)
- 図版 90 1 調査Ⅲ区包含層出土遺物(古代・中世) 2 調査Ⅲ区包含層出土遺物(中世)
3 調査Ⅲ区包含層出土管状土錘 4 調査Ⅲ区包含層出土遺物石器・石製品
5 調査Ⅲ区包含層出土古銭
- 図版 91 1 調査Ⅲ区・Ⅳ区と柳町遺跡(玉名バイパス)
- 図版 92 1 調査Ⅳ区調査前状況(東から) 2 調査Ⅳ区調査前状況(西から)
- 図版 93 1 水田面(Ⅲ-2層) 2 杭No.1 3 杭No.3 4 杭No.4 5 杭No.5 6 杭No.6
7 杭No.7 8 AD-16G.Ⅲ-1a層遺物出土状況 9 AD-16G.Ⅲ-2層遺物出土状況
10 AH-14G.Ⅲ-2層遺物出土状況
- 図版 94 1 調査Ⅳ区空中写真(古墳時代～古代) 2 調査Ⅳ区東側空中写真(古墳時代～古代)
- 図版 95 1 溝状遺構S001(北から) 2 S001断面 3 S001(南から) 4 溝状遺構S002(北から)
5 S002断面 6 S002(南から)
- 図版 96 1 AF-15Gr.Ⅲ-3a層木製鋏出土・S002検出状況 2 木製鋏出土状況 3 溝状遺構S029(南から)
4 溝状遺構S033・34検出状況
- 図版 97 1 溝状遺構S033・S034(北から) 2 S033・34遺物出土状況 3 S033・34遺物出土状況
4 S033・S034断面
- 図版 98 1 S033・34(東から) 2 S033・34完掘状況(南から)
- 図版 99 1 調査区東側の遺構(西から) 2 東側遺物集中出土状況(北から)
- 図版 100 1 東側遺物集中出土状況(北から) 2 東側遺物集中出土状況(西から)
- 図版 101 1 東側遺物集中(北から) 2 S006・S007検出状況 3 S006・S007遺物出土状況
- 図版 102 1 S007遺物出土状況 2 S006
- 図版 103 1 S006・S007遺物出土状況 2 S006・S007遺物出土状況 3 S006・S007遺物出土状況
4 S006・S007遺物出土状況 5 S006・S007遺物出土状況 6 S006・S007遺物出土状況
7 S006・S007遺物出土状況 8 S006・S007遺物出土状況
- 図版 104 1 S006・S007土層堆積状況 2 S006・S007土層堆積状況
- 図版 105 1 S007遺物出土状況 2 S007遺物出土状況 3 S006 4 S006・S007完掘状況
5 S008検出状況
- 図版 106 1 S008完掘状況 2 S008土層堆積状況 3 S008土層堆積状況 4 S008土層堆積状況
5 S008遺物出土状況
- 図版 107 1 S008炭化物出土状況 2 S008紡錘車出土状況 3 S008土器出土状況
4 S008台石出土状況 5 土坑S003 6 S003断面 7 S004 8 S004遺物出土状況
- 図版 108 1 土坑S015 2 S015遺物出土状況 3 土坑S009 4 S009・S016検出状況
5 土坑S010 6 S010遺物出土状況 7 土坑S011 8 S011遺物出土状況
- 図版 109 1 土坑S012 2 S012断面 3 土坑S013 4 S013断面 5 土坑S014
6 S014断面 7 土坑S016 8 S016断面
- 図版 110 1 土坑S018 2 S018断面 3 土坑S021 4 S021断面 5 土坑S022
6 S022断面 7 土坑S023 8 S023
- 図版 111 1 土坑S030 2 S030断面 3 土坑S025 4 S031・S025検出状況 5 土坑S031
6 S031断面 7 S031遺物出土状況 8 土坑S017
- 図版 112 1 ピットS019 2 ピットS020・S026 3 ピットS024 4 ピットS027
5 ピットS028 6 ピットS032 7 ピットS035 8 ピットS036
- 図版 113 1 S002出土木製二又鋏 2 S029出土遺物 3 S033・S034出土遺物
4 S034出土碧玉製管玉 5 S006出土遺物
- 図版 114 1 S006出土遺物 2 S006出土遺物
- 図版 115 1 S006出土遺物 2 S006出土遺物 3 S007出土遺物 4 S007出土遺物
- 図版 116 1 東側遺物集中部出土土器 2 東側遺物集中部出土高杯・脚付鉢
- 図版 117 1 S008出土遺物 2 S008出土紡錘車 3 S015出土土器
- 図版 118 1 S010・S025出土土器 2 調査Ⅳ区包含層出土遺物 3 調査Ⅳ区出土ガラス玉

	4 調査IV区包含層出土銅製品	5 調査IV区包含層出土古銭
図版 119	1 関連資料 伝左山古墳出土円筒埴輪 (玉名市立歴史博物館こころピア所蔵資料)	
	2 関連資料 稲荷山古墳出土円筒埴輪・形象埴輪 (平成14年出土)	
図版 120	1 両迫間日渡遺跡の種実	
図版 121	1 両迫間日渡遺跡の動物遺存体	
図版 122	1 薄片 (試料 No. 8) の偏光顕微鏡写真	
図版 123	1 石製品と元素マッピング図	
図版 124	1 石製品と元素マッピング図	
図版 125	1 石製品と元素マッピング図	
図版 126	1 X線回折スペクトル図および解析結果	
図版 127	1 X線回折スペクトル図および解析結果	

挿 図 目 次

第1図	地形区分図	25
第2図	両迫間日渡遺跡の位置	27
第3図	周辺主要遺跡分布図	29
第4図	玉名平野周辺古墳分布図	32
第5図	5世紀～6世紀前半の古墳(1)	35
第6図	5世紀～6世紀前半の古墳(2)	36
第7図	両迫間日渡遺跡と玉名平野の遺跡	40
第8図	確認調査トレンチ配置図	43
第9図	確認調査トレンチ土層断面図(1)	46
第10図	確認調査トレンチ土層断面図(2)	48
第11図	確認調査トレンチ土層断面図(3)	49
第12図	確認調査トレンチ土層断面図(4)	50
第13図	確認調査トレンチ土層断面図(5)	51
第14図	確認調査トレンチ土層断面図(6)	53
第15図	確認調査トレンチ土層断面図(7)	54
第16図	確認調査トレンチ土層断面図(8)	56
第17図	確認調査トレンチ土層断面図(9)	57
第18図	確認調査トレンチ土層断面図(10)	58
第19図	確認調査トレンチ土層断面図(11)	60
第20図	確認調査トレンチ土層断面図(12)	61
第21図	確認調査トレンチ土層断面図(13)	63
第22図	確認調査トレンチ土層断面図(14)	64
第23図	確認調査トレンチ土層断面図(15)	65
第24図	確認調査トレンチ土層断面図(16)	67
第25図	確認調査トレンチ土層断面図(17)	69
第26図	確認調査トレンチ土層断面図(18)	71
第27図	15トレンチ・19トレンチ遺物出土集中部	76
第28図	15トレンチ・19トレンチ遺物集中部出土土器	77
第29図	確認調査出土遺物(7T～26T)	79
第30図	確認調査出土遺物(26T～47T)	80
第31図	玉名平野の水利状況図	83
第32図	玉名平野周辺の字図	85
第33図	調査区配置図	88
第34図	調査I区内 1区～3区土層断面実測図	104
第35図	調査I区内 4区～6区土層断面実測図	105
第36図	調査I区内 7区～9区土層断面実測図	106
第37図	調査I区内 10区～12区土層断面実測図	107

第 38 図	調査 I 区内 13 区～14 区土層断面実測図	108
第 39 図	SX01 遺構配置図	121
第 40 図	1・2・3・4 区 SX01 実測図	122
第 41 図	5・6・7・8 区 SX01 実測図	123
第 42 図	9・10 区 SX01 実測図	124
第 43 図	11・12・13・14 区 SX01 実測図	125
第 44 図	SX02 遺構配置図	128
第 45 図	1・2・3・4 区 SX02 実測図	129
第 46 図	5・6・7・8 区 SX02 実測図	130
第 47 図	9・10 区 SX02 実測図	131
第 48 図	11・12・13・14 区 SX02 実測図	132
第 49 図	SX03 遺構配置図	135
第 50 図	1・2・3・4 区 SX03 実測図	136
第 51 図	5・6・7・8 区 SX03 実測図	137
第 52 図	9・10 区 SX03 実測図	138
第 53 図	11・12・13・14 区 SX03 実測図	139
第 54 図	SX04 遺構配置図	141
第 55 図	7・8・9・10 区 SX04 実測図	142
第 56 図	SX05 遺構配置図	144
第 57 図	7・8・9・10 区 SX05 実測図	145
第 58 図	11・12・13・14 区 SX05 実測図	146
第 59 図	SX06 遺構配置図	147
第 60 図	9 区 SX06 畦畔状遺構と杭実測図	148
第 61 図	5 区杭列状遺構実測図	150
第 62 図	5 区各杭列名称図	151
第 63 図	5 区杭列第 1 群実測図	153
第 64 図	5 区杭列第 2～4 群実測図	154
第 65 図	SD01 遺構配置図	157
第 66 図	1・2・3・4 区 SD01 遺構配置図	158
第 67 図	5・6・7 区 SD01 遺構配置図	159
第 68 図	1・2・3 区 SD01 実測図	160
第 69 図	3・4・5・6 区 SD01 実測図	161
第 70 図	杭列群出土杭実測図 (1)	164
第 71 図	杭列群出土杭実測図 (2)	165
第 72 図	杭列群出土杭実測図 (3)	167
第 73 図	杭列群出土杭実測図 (4)	168
第 74 図	杭列群出土杭実測図 (5)	170
第 75 図	杭列群出土土器実測図	171
第 76 図	SX06 出土土器実測図	171
第 77 図	SX06 出土杭実測図	172
第 78 図	SX05 出土土器実測図	174
第 79 図	SX04 出土土器実測図	174
第 80 図	SX03 出土土器実測図	176
第 81 図	SX02 出土土器実測図	176
第 82 図	出土土器実測図	177
第 83 図	調査 II 区グリッド配置図	186
第 84 図	基本土層柱状図及び観察表・土層断面図配置図	187
第 85 図	調査 II 区土層堆積状況 (1)	188
第 86 図	調査 II 区土層堆積状況 (2)	189
第 87 図	調査 II 区土層堆積状況 (3)	190
第 88 図	杭列配置図	192

第 89 図	杭列 (A 列) 実測図	193
第 90 図	杭列 (B 列・C 列・D 列) 実測図	194
第 91 図	杭列 (D 群) 実測図	195
第 92 図	畦畔状遺構配置図	197
第 93 図	畦畔状遺構エレベーション (1)	198
第 94 図	畦畔状遺構エレベーション (2)	199
第 95 図	畦畔状遺構・砂だまり遺構実測図	200
第 96 図	畦畔状遺構エレベーション (3)・土層断面図	201
第 97 図	遺物出土状況 (Ⅲ a・Ⅲ b 層)	204
第 98 図	遺物出土状況 (Ⅲ c・Ⅲ d 層)	205
第 99 図	遺物出土状況 (Ⅲ e・Ⅳ 層)	206
第 100 図	調査Ⅱ区包含層出土遺物 (1)	208
第 101 図	調査Ⅱ区包含層出土遺物 (2)	209
第 102 図	調査Ⅱ区包含層出土遺物 (3)	211
第 103 図	基本土層柱状図および観察表	218
第 104 図	調査Ⅲ区グリッド・土層断面図配置図	219
第 105 図	調査Ⅲ区土層堆積状況 (1)	220
第 106 図	調査Ⅲ区土層堆積状況 (2)	221
第 107 図	調査Ⅲ区遺構配置図 (中世～近世)	223
第 108 図	杭列配置図・杭実測図	224
第 109 図	畝状遺構 (S-1) 実測図	225
第 110 図	畝状遺構 (S-2) 実測図	226
第 111 図	溝状遺構 (S-3) 実測図	228
第 112 図	溝状遺構 (S-4・S-5・S-6) 実測図	230
第 113 図	畦畔状遺構 (S-7・S-8・S-10)	231
第 114 図	AA-20 グリッド遺構配置・土坑・ピット実測図	233
第 115 図	AA-20 グリッド遺物出土状況	235
第 116 図	調査Ⅲ区遺構配置図 (弥生～古墳時代)	236
第 117 図	調査Ⅲ区祭祀遺構配置図	237
第 118 図	祭祀遺構周辺土層堆積状況	238
第 119 図	祭祀遺構周辺土壌採取位置 (1)	242
第 120 図	祭祀遺構周辺土壌採取位置 (2)	243
第 121 図	祭祀遺構 (S-14) 実測図	246
第 122 図	祭祀遺構 (S-14) 遺物出土状況図	247
第 123 図	祭祀遺構周辺石製品等出土状況図 (1) S-14	249
第 124 図	祭祀遺構周辺石製品等出土状況図 (2)	250
第 125 図	祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (1)	253
第 126 図	祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (2)	254
第 127 図	祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (3)・土製品	255
第 128 図	祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品 (1)	257
第 129 図	祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品 (2)	258
第 130 図	祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品 (3)	259
第 131 図	祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (1)	260
第 132 図	祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (2)	261
第 133 図	祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (3)	263
第 134 図	祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (1)	264
第 135 図	祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (2)	265
第 136 図	祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (3)	266
第 137 図	祭祀遺構 (S-18) 実測図	268
第 138 図	祭祀遺構 (S-18) 遺物出土状況	269
第 139 図	祭祀遺構 (S-18) 出土土器 (1)	272

第 140 図	祭祀遺構 (S-18) 出土土器 (2)	273
第 141 図	祭祀遺構 (S-18) 出土土器 (3)・土製品	274
第 142 図	祭祀遺構 (S-18) 出土石製品	275
第 143 図	祭祀遺構 (S-01) 実測図	277
第 144 図	祭祀遺構 (S-01) 遺物出土状況	278
第 145 図	祭祀遺構 (S-01) 出土遺物	279
第 146 図	樹木根 (S-19) 実測図	281
第 147 図	樹木根 (S-19) 周辺遺物出土状況	282
第 148 図	樹木根 (S-19) 周辺出土遺物	283
第 149 図	祭祀遺構 (S-21) 実測図	285
第 150 図	祭祀遺構 (S-21) 遺物出土状況	287
第 151 図	祭祀遺構 (S-21) 出土遺物 (1)	288
第 152 図	祭祀遺構 (S-21) 出土遺物 (2)	289
第 153 図	祭祀遺構 (S-21) 出土遺物 (3)	290
第 154 図	畦畔状遺構 (S-20) 実測図	292
第 155 図	畦畔状遺構 (S-20) 断面図	293
第 156 図	畦畔状遺構 (S-20) 出土遺物	294
第 157 図	調査Ⅲ区遺物出土位置	296
第 158 図	調査Ⅲ区包含層出土遺物 (1)	298
第 159 図	調査Ⅲ区包含層出土遺物 (2)	299
第 160 図	調査Ⅲ区包含層出土遺物 (3)	300
第 161 図	基本土層柱状図・観察表	318
第 162 図	調査Ⅳ区調査前測量図・グリッド配置図	319
第 163 図	土層断面図配置図・Ⅲ-3b 層上面エレベーション	320
第 164 図	調査Ⅳ区土層堆積状況 (1)	321
第 165 図	調査Ⅳ区土層堆積状況 (2)	322
第 166 図	調査Ⅳ区遺構配置図	324
第 167 図	調査区東側遺構配置図	325
第 168 図	杭列配置図	327
第 169 図	杭列実測図	328
第 170 図	溝状遺構 (S001)	329
第 171 図	溝状遺構 (S002)	330
第 172 図	溝状遺構 (S029)	332
第 173 図	溝状遺構 (S033・34)	333
第 174 図	溝状遺構 (S033・34) 遺物出土状況	334
第 175 図	溝状遺構 (S002・S029・S033・34) 出土遺物	335
第 176 図	土坑・ピット配置図 (1)	338
第 177 図	土坑・ピット配置図 (2)	339
第 178 図	土坑 (S006・S007)	340
第 179 図	土坑 (S006・S007) 遺物出土状況	342
第 180 図	東側遺物集中出土状況	343
第 181 図	土坑 (S006・S007)・東側遺物集中遺物出土状況	344
第 182 図	土坑 (S006) 出土遺物 (1)	345
第 183 図	土坑 (S006) 出土遺物 (2)	346
第 184 図	土坑 (S006) 出土遺物 (3)	347
第 185 図	土坑 (S007) 出土遺物 (1)	348
第 186 図	土坑 (S007) 出土遺物 (2)	349
第 187 図	東側遺物集中部出土遺物 (1)	350
第 188 図	東側遺物集中部出土遺物 (2)	351
第 189 図	東側遺物集中部出土遺物 (3)	352
第 190 図	土坑 (S008)	354

第 191 図	土坑 (S008) 出土遺物	355
第 192 図	土坑実測図 (1)	357
第 193 図	土坑実測図 (2)	359
第 194 図	土坑実測図 (3)	360
第 195 図	土坑実測図 (4)	361
第 196 図	土坑 (S005・S010・S025・S031) 出土遺物	362
第 197 図	ピット実測図	365
第 198 図	遺物出土状況 (Ⅲ-1a・Ⅲ-1b 層)	367
第 199 図	遺物出土状況 (Ⅲ-2・Ⅲ-3a 層)	368
第 200 図	遺物出土状況 (Ⅲ-3b・全層)	369
第 201 図	調査Ⅳ区包含層出土遺物	371
第 202 図	主要花粉化石群集の層位分布	391
第 203 図	植物珪酸体含量の層位的変化	392
第 204 図	花粉化石	393
第 205 図	植物珪酸体	394
第 206 図	両迫間日渡遺跡Ⅰ区における試料採取箇所	401
第 207 図	両迫間日渡遺跡Ⅰ区における植物珪酸体分析結果	402
第 208 図	両迫間日渡遺跡Ⅱ区①地点における植物珪酸体分析結果	403
第 209 図	両迫間日渡遺跡Ⅱ区②地点における植物珪酸体分析結果	404
第 210 図	両迫間日渡遺跡 (調査Ⅰ区・Ⅱ区) の植物珪酸体 (プラント・オパール)	405
第 211 図	両迫間日渡遺跡Ⅱ区①地点における花粉ダイアグラム	410
第 212 図	両迫間日渡遺跡Ⅱ区②地点における花粉ダイアグラム	411
第 213 図	両迫間日渡遺跡 (調査Ⅱ区) の花粉・孢子・寄生虫卵	412
第 214 図	両迫間日渡遺跡Ⅲ区①地点における植物珪酸体分析結果	419
第 215 図	両迫間日渡遺跡Ⅲ区②地点における植物珪酸体分析結果	420
第 216 図	両迫間日渡遺跡Ⅲ区③地点における植物珪酸体分析結果	421
第 217 図	両迫間日渡遺跡Ⅳ区①地点における植物珪酸体分析結果	422
第 218 図	両迫間日渡遺跡Ⅳ区②地点における植物珪酸体分析結果	423
第 219 図	両迫間日渡遺跡Ⅳ区③地点における植物珪酸体分析結果	424
第 220 図	両迫間日渡遺跡 (調査Ⅲ区・Ⅳ区) の植物珪酸体 (プラント・オパール)	425
第 221 図	両迫間日渡遺跡Ⅲ区①地点における花粉ダイアグラム	430
第 222 図	両迫間日渡遺跡Ⅳ区②地点における花粉ダイアグラム	431
第 223 図	両迫間日渡遺跡Ⅳ区③地点における花粉ダイアグラム	432
第 224 図	両迫間日渡遺跡 (調査Ⅲ区・Ⅳ区) の花粉・孢子	433
第 225 図	木材 (1)	439
第 226 図	木材 (2)	440
第 227 図	木材 (3)	441
第 228 図	暦年較正結果 1	445
第 229 図	暦年較正結果 2	446
第 230 図	両迫間日渡遺跡の種実	451
第 231 図	両迫間日渡遺跡の木材	454
第 232 図	両迫間日渡遺跡Ⅲ区 (車道) における植物珪酸体分析結果	459
第 233 図	両迫間日渡遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)	460
第 234 図	両迫間日渡遺跡Ⅲ区 (車道) における花粉ダイアグラム	465
第 235 図	両迫間日渡遺跡の花粉・孢子	466
第 236 図	両迫間日渡遺跡の動物遺存体	468
第 237 図	薄片 (試料No.8) の偏光顕微鏡写真	472
第 238 図	石製品と元素マッピング図	480
第 239 図	石製品と元素マッピング図	481
第 240 図	石製品と元素マッピング図	482
第 241 図	X線回折スペクトル図および解析結果	483

第 242 図	X 線回折スペクトル図および解析結果	484
第 243 図	木製品顕微鏡写真 (No. 1 ~ 3)	489
第 244 図	木製品顕微鏡写真 (No. 4 ~ 6)	490
第 245 図	木製品顕微鏡写真 (No. 7 ~ 9)	491
第 246 図	木製品顕微鏡写真 (No. 10 ~ 12)	492
第 247 図	木製品顕微鏡写真 (No. 13 ~ 15)	493
第 248 図	木製品顕微鏡写真 (No. 16 ~ 18)	494
第 249 図	木製品顕微鏡写真 (No. 19 ~ 21)	495
第 250 図	木製品顕微鏡写真 (No. 22 ~ 24)	496
第 251 図	木製品顕微鏡写真 (No. 25 ~ 27)	497
第 252 図	木製品顕微鏡写真 (No. 28 ~ 30)	498
第 253 図	木製品顕微鏡写真 (No. 31 ~ 33)	499
第 254 図	木製品顕微鏡写真 (No. 1 ~ 3)	509
第 255 図	木製品顕微鏡写真 (No. 4 ~ 6)	510
第 256 図	調査 II ~ IV 区層序の対応関係	517

表 目 次

第 1 表	保存処理木製品一覧表	22
第 2 表	玉名平野周辺の古墳	33
第 3 表	確認調査トレンチ一覧表	42
第 4 表	確認調査出土土器観察表	93
第 5 表	確認調査出土石器・土製品観察表	94
第 6 表	杭列内出土杭樹種一覧表	178
第 7 表	調査 I 区出土木製品観察表	179
第 8 表	調査 I 区出土土器観察表	180
第 9 表	調査 II 区出土土器観察表	212
第 10 表	調査 II 区出土土製品・石製品観察表	214
第 11 表	祭祀遺構周辺土壌水洗選別検出資料集計表	244
第 12 表	調査 III 区祭祀遺構 (S-14・S-18) 出土土器観察表	301
第 13 表	調査 III 区祭祀遺構 (S-01) 出土土器観察表	307
第 14 表	調査 III 区祭祀遺構 (S-19・S-21) 出土土器観察表	309
第 15 表	調査 III 区祭祀遺構出土土製品観察表	309
第 16 表	調査 III 区遺構出土剣形石製模造品観察表	310
第 17 表	調査 III 区遺構出土有孔円板観察表	310
第 18 表	調査 III 区遺構出土勾玉観察表	310
第 19 表	調査 III 区遺構出土管玉・棗玉観察表	311
第 20 表	調査 III 区遺構出土白玉観察表	312
第 21 表	調査 III 区出土白玉集計表	313
第 22 表	調査 III 区出土木製品観察表	314
第 23 表	調査 III 区包含層出土土器観察表	314
第 24 表	調査 III 区包含層出土土製品・石器観察表	314
第 25 表	調査 III 区包含層出土古銭観察表	314
第 26 表	調査 IV 区溝状遺構出土遺物観察表	372
第 27 表	調査 IV 区土坑出土遺物観察表 (1)	372
第 28 表	調査 IV 区土坑出土遺物観察表 (2)	375
第 29 表	調査 IV 区包含層出土遺物観察表	376
第 30 表	調査 IV 区出土石製品・木製品・ガラス製品・金属製品観察表	376
第 31 表	分析試料及び分析項目一覧	387
第 32 表	花粉分析結果	388
第 33 表	植物珪酸体含量	390

第 34 表	玉名市、両迫間日渡遺跡（調査Ⅰ区・Ⅱ区）における植物珪酸体分析結果	399
第 35 表	両迫間日渡遺跡（調査Ⅱ区）における花粉分析結果	409
第 36 表	玉名市、両迫間日渡遺跡（調査Ⅲ区・Ⅳ区）における植物珪酸体分析結果	417
第 37 表	両迫間日渡遺跡（調査Ⅲ区・Ⅳ区）における花粉分析結果	429
第 38 表	樹種同定結果	437
第 39 表	杭列・形状別の種類構成	438
第 40 表	放射性炭素年代測定結果	444
第 41 表	両迫間日渡遺跡における種実同定結果	450
第 42 表	両迫間日渡遺跡における樹種同定結果	453
第 43 表	両迫間日渡遺跡Ⅲ区における植物珪酸体分析結果	458
第 44 表	両迫間日渡遺跡における花粉分析結果	464
第 45 表	両迫間日渡遺跡出土試料の石材鑑定結果（ボクセル①～④）	470
第 46 表	両迫間日渡遺跡出土試料の石材鑑定結果（ボクセル⑤～⑧）	471
第 47 表	両迫間日渡遺跡出土石製品リスト	477
第 48 表	両迫間日渡遺跡出土石製品の蛍光 X 線分析による点分析結果（単位：％）	478
第 49 表	両迫間日渡遺跡出土石製品の蛍光 X 線分析および X 線回折結果	479
第 50 表	玉名市両迫間日渡遺跡（調査Ⅰ区）出土木製品同定表	488
第 51 表	測定資料及び処理	500
第 52 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	503
第 53 表	玉名市両迫間日渡遺跡（調査Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区）出土木製品同定表	508
第 54 表	測定資料及び処理	511
第 55 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正結果	512
第 56 表	祭祀遺構出土遺物構成表	520

第 1 章 調査の経過

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

第 I 章 調 査 の 経 過

第 1 節 調査に至る経緯

1. 事業照会

玉名市では、平成 23 年春に全線開業が予定されている九州新幹線建設に伴う新玉名駅の開業に併せ、駐車場や駅前広場、アクセス道路などの整備を計画した。しかし事業予定地は全域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「玉名平野条里跡」及び「両迫間日渡遺跡」の範囲内であり、事業予定地東側隣接地では県道玉名山鹿線の拡幅工事に伴い、熊本県教育庁文化課により発掘調査が進行中であった。この県文化課の調査では県内最古の水田となる弥生時代後期の大畦畔等、重要な発見があった。このため玉名市建設部新幹線推進課と玉名市教育委員会文化課は埋蔵文化財の保存について協議し、玉名市長から平成 17 年 11 月 11 日付けで確認調査依頼が提出された。これを受けて玉名市教育委員会は平成 17 年 11 月 21 日から事業予定地内の埋蔵文化財の状況を把握すべく確認調査に着手した。

2. 確認調査結果に基づく協議

確認調査は平成 17 年 11 月 21 日から平成 18 年 12 月 6 日までの期間で実施し、用地買収が終了した土地から順次調査し、最終的には新玉名駅周辺整備予定地約 30,000 m²に 56 本のトレンチを設定した。その結果、主な遺構としては杭列が調査区全体で検出され、一部は北西から東南にかけて少なくとも長さ 105m 以上の杭列であると考えられた。また古墳時代のミニチュア土器片が集中して出土し祭祀遺構と考えられる箇所も検出された。遺物についても縄文時代から近世の土器片、陶磁器等が出土し、埋蔵文化財の存在が確認された。なお、確認調査結果の詳細については第三章第 1 節に記した。

新玉名駅建設予定地を含む菊池川右岸の玉名平野はその大部分が古代の生産遺跡である玉名平野条里跡の範囲内となっており、そのなかに弥生時代～古墳時代の遺物散布地とされる両迫間日渡遺跡が重複して存在している。新幹線新駅周辺整備事業地はこの両者の境界上にまたがる形となり、中央水路より西側は両迫間日渡遺跡の範囲に含まれていなかったため、確認調査の結果確認できた弥生時代及び古墳時代の遺構・包含層の拡がりをもとに熊本県教育庁文化課と遺跡地図の変更の協議を行ない、西側水路までその範囲を拡大した（平成 18 年 6 月 28 日付教文第 879 号で熊本県教育長から通知）。

確認調査結果と工事の設計内容を踏まえ、発掘調査の対象となる範囲及び面積について関係各者間で協議を重ねた。その結果、工事による掘削深度が深く埋蔵文化財への影響が避けられない水路付け替え部分（調査Ⅰ区）と、調整池部分（調査Ⅱ区）、永久閉塞区間となる道路部分（調査Ⅲ区・Ⅳ区）の計約 4,800 m²については発掘調査を実施し記録保存の措置をとることとなった。

3. 発掘調査への協議

調査地一帯は水田地帯にある低湿地であり、確認調査の結果、冬期においても多量の浸透水が発生することが明確になった。そのため調査効率が低下し、場合によっては調査困難になる状況が予想されたため、発掘調査前にその対処法について検討、協議した。

第1節 調査に至る経緯

発掘調査地は水田地帯の低湿地であったため、アクセス道がなく、さらに大雨時には一帯が水没する危険性が予想された。また矢板工事を行うための仮設道の設置のほか、調査事務所・機材倉庫用地の確保、調査員・作業員駐車場用地、排土場の確保、水路の付け替えが必要であり、こうした部分には盛土を行うなどの環境整備を調査前に実施が不可欠のため、期間、工程、内容について調整しつつ準備した。

西側水路の調査にあたっては、現役の用水路であり上流のみならず西側の水田地帯からの流入が予想されたため、止水矢板工事を行い、工事の完了を待って調査に着手することとなった。当初18年度からの調査予定であったが、この矢板工事の遅れにより本格的な調査開始は平成19年度にずれこむこととなった。

九州新幹線開業の予定が平成23年春に決定しており、その工事を間に合わせる対応をとるため、各調査区の優先順位として、水路、調整池、車道の順に調査を終わらせる必要があることを確認した。また発掘調査に関しては、期間がないことから民間発掘調査機関の活用を計ることを確認した。車道部分の調査については全て民間発掘調査機関に委託する方針も示されたが、その後、すべて玉名市教育委員会直営で行うとされ、結果として期間と調査員の条件等から半分を民間発掘調査機関に委託することとされ、平成19年度中の調査終了を目指すこととなった。

4. 民間委託の活用

玉名市教育委員会では平成19年度の時点において、文化課文化財係に大学で考古学等を専攻した学芸員資格取得者かつ埋蔵文化財発掘の能力・経験を有する職員を8名（そのうち2名は非常勤職員）擁していた。しかし、平成17年の1市3町の合併に伴い進めている100件を超える旧市町指定文化財の見直し作業のほか、公共・民間開発事業への対応、国道建設に伴う文化財発掘調査受託事業、国・県指定史跡の整備事業等の多様かつ多量な業務に対処するため、新幹線新玉名駅周辺整備に伴う発掘調査に従事できる調査員は3名しか確保することができなかった。

そのため、限られた調査期間の中で調査の質を確保することを目的として玉名市教育委員会が調査の主体となり監理するという前提のもと、民間調査機関を調査体制の中に組み込み、積極的に活用することとなった。

第2節 発掘作業の経過

1. 全体計画

発掘調査の着手は、水路部分を平成19年3月下旬に重機による表土剥ぎを行い、実質的には平成19年4月から12月までの予定で発掘調査に着手した。また調整池部分及び道路部分は確認調査の結果によると遺物・遺構量がさほど多くないと見込まれることから梅雨明けを待って平成19年8月から開始し、12月までの5ヶ月間を予定した。ただし、各調査区における遺物の出土状況、時期的に台風等気象条件による作業の停滞、進捗状況によっては年度末まで延長する可能性があることを示し、調査の進捗状況にあわせその都度協議を行った。

2. 調査体制

発掘調査は、下記の体制により実施した。なお、職員の所属等は当時のものである。調査 I 区（西側水路）・II 区（調整池）については調査における客観性と質の確保、作業員数に対応できるよう調査員 2 人体制とするため、民間調査機関と現場監理業務委託を結び玉名市職員の調査員、民間調査機関の調査員とで共同し発掘調査を行った。調査 IV 区については、民間調査機関と発掘調査業務委託を結び、隣接する調査 III 区の調査員が監督員としてその監理・指導のもと、民間調査機関が調査を実施した。なお、調査 III 区については平成 20 年 2 月、調査員 1 名では調査期限内の調査完了が不可能であり、検出された遺構に対応しきれないことが明白となったため、調査 II 区の調査員の応援、さらに他の文化課職員をも動員して調査にあたった。そのため 2 月以降に検出した祭祀遺構周辺および畦畔状遺構、IV 層下部の土層堆積状況等は各調査員が現場で討議しつつ個々に対応し、調査見解の最終責任は各調査員にある。

調査組織	平成 17 年度・平成 18 年度・平成 19 年度
事業主体	玉名市建設部新幹線推進課
調査主体	玉名市教育委員会文化課
調査責任	教 育 長 菊川茂男
調査総括	文化課長 西田道世
庶務担当	文化財係長 竹田宏司（平成 17・18 年度） 文化財係長 安田信孝（平成 19 年度） 主 任 清田静香
調査担当	
〔確認調査〕	技術主任 中村安宏 技術主任 末永 崇 技 師 蠶父雅史
〔調査 I 区〕	主 任 兵谷有利 技 師 稲富陽子（株式会社 九州文化財研究所）
〔調査 II 区〕	技術主任 荒木隆宏 調 査 員 上高原聡（株式会社 埋蔵文化財サポートシステム熊本支店）
〔調査 III 区〕	技術主任 蠶父雅史（平成 19 年 8 月～平成 20 年 2 月） 技術主任 荒木隆宏（平成 20 年 2 月末・3 月） 技術主任 田中康雄（平成 20 年 3 月） 技術主任 中村安宏（平成 20 年 3 月） 技術主任 末永 崇（平成 20 年 3 月） 調 査 員 古閑敬士（平成 20 年 3 月） 調 査 員 大倉千寿（平成 20 年 3 月）
〔調査 IV 区〕	技術主任 蠶父雅史（監督員） 株式会社 九州文化財研究所（発掘調査業務委託） 調査係長 永井孝宏 技 師 宮崎 拓

発掘調査現場作業員（50音順）

〔確認調査〕

荒木富士子、宇野信子、北嶋百合子、古賀武子、権藤 功、坂崎和仁、佐藤建郎、竹内伴英、田上俊子、平野輝代、福島年春、堀田祐子、吉田ムツ子

〔調査Ⅰ区〕

伊形孝子、生森銀子、植田美知男、上野幸枝、大森ツヤ子、尾崎延枝、片山昭義、木本勝雄、清田栄子、古賀武子、坂本逸美、高西正也、竹内伴英、竹内ムツ子、田島大助、田添スミエ、田原 裕、塚本 隆、平川英二、平野輝代、廣瀬悦子、福田 力、藤本マス子、馬田洋治、森 辰興、山戸ハルキ、立野美代子、和田道代、亀井佳代子、井上 厚、甲斐 清、辻 弘道、永田光昭、濱口 望

〔調査Ⅱ区〕

荒木大器、池田耕廣、岩井 由、岩村光義、大久保正春、大久保靖子、大仁田美津子、尾崎孝徳、木下希三子、木下 了、木本行正、倉田文夫、古閑寅夫、古城明憲、境エミ子、坂田利雄、笹木秀利、佐藤建郎、山戸ハルキ、高村一信、竹志田美奈子、鑪 龍介、田中和也、田上直子、津崎 公、坪井義武、寺本涼子、徳田晴華、中川静夫、中島徹郎、中本フタミ、西 敏宏、西田光明、西山久代、野田 昇、林田喜久子、平山節子、福田 力、藤本マス子、堀内一正、馬田克彦、松村健治、松本肇代、森 英俊、立野和彦、立野美代子、吉川本一、吉田一美、吉田成文

〔調査Ⅲ区〕

生森 隆、井上征一、大石賢司、大石イツ子、上田サワ子、大仁田清、狩塚久代、川本章子、菊川又男、木山鎮良、倉田小春、倉田富士代、佐藤敏行、鹿井正剛、嶋村ひとみ、杉本博典、田上幸史、土山知代恵、津村憲子、西村真由美、早川智美、東 正和、広瀬正義、福島年春、福嶋義明、吉川和子、吉田淳一、吉村精人、雪野昭子

〔調査Ⅳ区〕

荒木武俊、荒木富士子、上野廣喜、大森健吾、大森 久、大山 保、緒方 勝、川上 博、河原達也、北岡輝雄、木村昇竜、坂口國廣、嶋田三郎、嶋田澄子、清水正房、田尻良雄、田中幸久、谷口洋介、寺田信吾、豊崎晃史、中島明子、中間啓二、野口栄一、福本フミ子、藤岡吉博、本田研二、増田政隆、松尾賢治、松下善伸、松高慶光、松村利男、南本勝則、宮本善治、村本生六、村本多茂美、森川眞男、吉永珠雄

作業分担

発掘調査での写真撮影、実測図作成は玉名市教育委員会で下記の担当者が行い、その他は民間調査機関に委託した。

【写真撮影】

〔確認調査〕 中村安宏、末永 崇、蜷父雅史、〔調査Ⅰ区〕 兵谷有利、〔調査Ⅱ区〕 荒木隆宏、上高原聡、〔調査Ⅲ区〕 蜷父雅史、荒木隆宏（祭祀遺構周辺）、上高原聡（祭祀遺構周辺）、田中康雄、末永 崇、〔調査Ⅳ区〕 株式会社 九州文化財研究所：宮崎 拓、野村俊之、永井孝宏

【実測図作成】

〔確認調査〕中村安宏、末永 崇、齋父雅史、古賀武子、北嶋百合子、権藤 功、田上俊子、平野輝代、堀田祐子、〔調査Ⅰ区〕兵谷有利、稲富陽子、古賀武子、平野輝代、福田まき、亀井佳代子、尾崎延枝、〔調査Ⅱ区〕荒木隆宏、上高原聡、西 敏宏、荒木大器、田中和也、徳田晴華、嶋村ひとみ、〔調査Ⅲ区〕齋父雅史、嶋村ひとみ、徳田晴華、荒木大器、西 敏宏、荒木隆宏、上高原聡、田中康雄、末永 崇、古閑敬士、大倉千寿、株式会社 埋蔵文化財サポートシステム熊本支店〔調査Ⅳ区〕株式会社 九州文化財研究所：宮本敬子、宮崎 拓、野村俊之、石橋和久、永井孝宏

3. 業務委託

発掘調査にあたり、以下の作業については民間調査機関に委託し、作業の効率化と期間の短縮を図った。その監理・検査は各調査区の調査員が行った。

【発掘調査業務】

〔調査Ⅳ区発掘業務〕株式会社 九州文化財研究所

【調査補助業務】

〔調査Ⅰ区現場監理業務委託〕株式会社 九州文化財研究所

〔調査Ⅱ区現場監理業務委託〕株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店

〔調査Ⅱ・Ⅲ区メッシュ基準杭設定業務〕株式会社 有明測量開発社

〔調査Ⅲ区遺構実測・デジタルトレース業務〕株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店

〔調査Ⅰ区航空写真撮影業務〕株式会社 九州航空

〔調査Ⅱ区・Ⅲ区航空写真撮影業務〕株式会社 熊本航空

【自然科学的分析】

〔土壌分析（植物珪酸体分析・花粉分析）〕株式会社 古環境研究所

〔土壌分析（植物珪酸体分析・花粉分析）〕パリーノ・サーヴェイ株式会社

4. 作業の経過

調査Ⅰ区は平成19年3月28日より重機による表土剥ぎを行い、平成19年4月に追加で表土剥ぎを行った後、作業員を投入して調査に着手した。調査期間は平成19年4月から2月16日までの10ヶ月であった。6月には調査区東側に新たに矢板列を施工した。平成19年12月までの調査終了予定であったが、掘削土量の増加等により平成20年1月まで期間を延長した。その後、1月17日、5区において杭列を検出したため、可能な限り調査期間を延長しこれに対処することとし、調査機材・出土品の撤収、調査事務所の解体と並行して2月16日まで調査を行い、すべての作業を終了した。

調査Ⅱ区は平成19年8月1日～6日まで重機による表土剥ぎ、平成19年8月10日から平成20年3月4日まで発掘作業を行い、その後現場事務所で出土遺物・機材整理をした上で平成20年3月21日撤収、合計8ヶ月間調査を実施した。10月以降、畦畔状遺構の検出が難航したこと、また掘削が下部に及ぶにつれて増加する地下からの出水に悩まされ包含層掘削等、調

第2節 発掘作業の経過

査工程に遅れが生じた。また深掘りしたトレンチにより当初調査予定していた掘削深度よりも下部に縄文土器、弥生土器の包含層が存在する可能性が判明し、隣接する調査Ⅰ区では弥生時代の畦畔とみられる杭列が検出されたことから調査対象とする深度をさらに下げ、調整池の擁壁工事により掘削が深く及ぶ箇所にトレンチを設定し調査する必要性が生じた。そのため、平成20年2月末日に調査終了時期を変更した上で、調査開始から数人ずつの増減を経て平均27名であった作業員を、平成20年1月より11名増員、計47名とする体制を整え掘削土量の増加に対応した。

調査Ⅲ区は調査Ⅱ区と同じく平成19年8月1日より重機による表土剥ぎを開始し、平成19年8月10日から平成20年3月14日未明まで発掘調査を行い、その後現場事務所で出土遺物・機材整理をした上で平成20年3月21日撤収、合計8ヶ月間調査を実施した。

表土剥ぎの深度をやや浅く設定したことから近世の層の掘削にやや時間をかけることとなり、平成19年12月までに調査を終了させる当初の予定を2ヶ月延長した。調査区内の完掘を目指してグリッドの土層観察用ベルトを掘削する作業にかかっていた平成20年2月14日、確認調査時に確認されていた祭祀遺構の南直近で完形の土師器・須恵器のほか祭祀具である石製模造品がまとまって検出されだした。これらの遺物が県内では例をみない希少遺物であること、また出土状況から重要遺構であることを重視し、調査期間の延長と調査体制について検討した。平成20年2月16日、熊本大学で開催されたマロ塚古墳共同研究成果報告会の会場にて県内外の多くの研究者に意見を頂き、重要な発見であることを認識し、急遽熊本大学文学部杉井健准教授に調査指導を依頼した。また県内の古墳時代研究者に現地での調査指導・助言を依頼し、多忙な折多くの方々に来跡頂き、多くの助言を得ることができた。

3月1日の現地説明会後、実測作業と並行して遺物の取り上げを開始したが、検出された複数の祭祀遺構の関係性がいまだ不明確であったこと、本調査区には弥生時代の包含層は存在しないという調査担当者の認識に反して祭祀遺構の下層に弥生時代の遺物が集中して存在することが確認でき、また西側水路部分で検出されていた畦畔状遺構の続きとみられる杭列が調査区内で検出される事態となり、限られた期間で十分な調査を行うことが望めなくなった。そのため他業務に係る文化課職員も業務の合間に、さらには休日を返上し、昼夜を問わず作業に邁進した。年度末ということもあり予算消化後作業員の任期が切れた後も作業を行えたことは文化課職員有志の熱意と義務感によるものである。なお、こうした事情の中発掘調査を遂行するため、本来の調査区担当者は調査区内の統括管理を行うこととし、祭祀遺構周辺についてはすでに調査が終了していた調査Ⅱ区調査担当者が調査を進め、また祭祀遺構周辺の土層堆積状況の整理、畦畔状遺構の調査については田中康雄主任が担当した。これらのことから各遺構の検出時と調査時の調査担当者が異なり、また情報の共有が最後まで円滑にいかなかったことは調査の上で問題があった。調査期間終了日までで、畦畔状遺構、および祭祀遺構の下部は掘削することができず、弥生時代包含層もトレンチ調査のみにとどまった。これらの遺構を含め調査Ⅲ区は平成20年3月14日午前9時、山砂により埋め戻され永久閉塞区間ではあるものの、車道であるため破壊は免れている。

調査Ⅳ区は平成19年11月15日、予備調査として調査前写真撮影・地形測量を行った後、11月26日より表土除去作業を開始、29日に完了した。平成19年12月4日に着工式を実施し、発掘調査作業に着手した。調査区の東側に遺構が集中し、さらに遺構検出面に多量の土器の集

中出土があったため、その記録と遺構検出、切り合い関係の確認作業には慎重を期した。

平成20年3月16日掘削作業終了、17日には記録作業を終了し、3月18日に完了検査を受け、機材撤収し現場作業を終了した。調査期間は約4ヶ月間である。

5. 調査日誌抄録

各調査区毎に各調査担当者の調査日誌抄録を記す。記述は各調査区担当者による。

〔調査I区〕

平成19年

- 3月7日 水路西側矢板施工開始
- 3月12日 駐車場、事務所設置予定地の整地完了
- 3月28日 重機により表土除去
- 4月17日 2回目の重機による表土除去
- 5月2日 調査区の基準杭を設置、区を設定する。
- 連休 大雨で現場水没
- 5月11日 SX01完掘
- 5月21日 九州文化財研究所の稲富陽子調査員着任
- 6月15日 新幹線推進課と協議を行い内側矢板の施工
- 6月19日 麦畑のダンガン跡確認される
- 6月29日 SX02完掘
- 7月17日 内側矢板施工開始
- 7月26日 SX03の掘削中に青磁や播り鉢が出土
- 8月8日 内側矢板施工により再度基準杭を設定
- 8月27日 先行して土層観察用にベルト横にトレンチを入れる
- 9月19日 SX04完掘
- 10月3日 作業員を5名追加
- 10月10日 雨で土層観察用ベルトが崩落。
- 10月23日 県立北稜高等学校現場視察
- 11月8日 県立玉名工業高等学校現場視察
- SX05完掘
- 12月11日 沈砂溝確認

平成20年

- 1月17日 5区に杭列を確認
 - 1月28日 沈砂溝完掘
 - 1月29日 SX06完掘
 - 1月31日 航空写真を撮影
 - 2月5日 仮設事務所解体
- 熊本県教育庁文化課山下義満氏来跡。杭列について御教示頂く。

第2節 発掘作業の経過

- 2月7日 杭列を記者発表
バリノ・サーヴェイ株式会社により土壌分析試料サンプリング
- 2月16日 5区杭列を完掘

〔調査Ⅱ区〕

平成19年

- 8月1日 B-2池調査区重機により表土除去開始。荒木、壘父協議の上掘削深度決定。
- 8月6日 表土除去終了。現場事務所および作業員休憩所設置。
- 8月7日 釜場設置。文化財整理室にて調査機材準備。
- 8月9日 発掘作業員初日。事務連絡、研修後作業に入る。
- 8月10日 確認調査トレンチの復旧、排水溝の掘削。
- 8月13日 株式会社埋蔵文化財サポートシステム上高原調査員着任。
- 8月17日 上高原、荒木両調査員で調査区内土層堆積状況確認。共通認識を得る。
- 8月20日 有明測量開発社によりメッシュ基準杭設置。
- 8月21日 基準杭に沿って10mごとに排水および土層観察用のトレンチ掘削開始。
- 8月27日 III a層掘削開始。AD-27グリッドから順次掘り下げる。暗渠検出。
- 8月28日 B-2池調査区面積が計画の820㎡ではなく1,200㎡程と判明。工程確認。
- 8月29日 45トレンチにて調査員間で土壌層位再検討。細分とその特徴確認。
- 9月3日 45トレンチ壁面掘削中AE27グリッドで木杭出土。III a層より上のレベル。調査面積増に伴い調査費用、期間について改めて積算する。
- 9月4日 AF-26NEグリッド、III a層から青磁碗、陶器底部片出土。出土状況撮影。
- 9月5日 AE-26グリッド、III b層から木片、ヤマモモ種子等自然遺物出土し始める。
- 9月6日 AE-26グリッド、III b層はIII a層に比べて明らかに遺物出土量が多い。自然遺物を含めて遺物取上方法、保管方法の検討。自然遺物は点上げとする。
- 9月7日 基準杭のレベルについて検証。BMH17-8を基に杭14を基準レベルとする。
- 9月10日 確認調査時に47・48トレンチで確認されていた溝状遺構の土層確認。AE-29グリッドで杭4本検出。
- 9月11日 調査区外に測量用基準杭(13, 16)設置。以後16杭を機械点とする。
- 9月19日 III層下部およびIV層の遺物包含状況把握のためにAH-27グリッド、AG-26グリッドSWを先行して掘り下げ開始。IV層を目指す。
- 9月25日 調査区内のIII a層完掘。III c層以下の確認の為サブトレンチを掘り下げる。
- 9月26日 III a層完掘、III b層上面検出状況の写真撮影。AH-27グリッドIII d層で弥生土器(小型壺)出土。
- 10月2日 III b層掘り下げ開始。
- 10月3日 AF-28グリッドで白磁・土師器底部出土。III b層上下の詳細な土層観察分層を行う。
- 10月4日 AF-28グリッドでIII b層中に粗砂が斑点状に広がる部分があると認識。調査員で性格について検討。今後グリッドを4分割し掘り下げの平面単位を5×5mグリッドとする。
- 10月9日 降雨のため現場作業中止。10月10日朝まで降り続き調査面まで冠水。
- 10月12日 熊本県教育庁文化課亀田主任学芸員来跡、助言を受ける。
- 10月16日 AG-27グリッド、III c層上面検出。出土遺物全くなし。III b層下位は上位に比べて遺物が極端に少なくなる状況。III c層とする灰白色の層は平面的分布範囲が限られる。

- 10月19日 畦畔状遺構 (SX01) 検出、調査員 3 名にて検討。
- 10月23日 畦畔状遺構 (SX03) 検出。
- 10月24日 東西方向の畦畔状遺構 (SX05) 検出。
- 10月25日 西田課長、安田係長来跡。進捗状況および調査内容説明。
- 10月26日 AE-29 グリッド、47 トレンチ周辺の砂を含む溝状遺構の平面検出作業。
- 10月31日 熊本県教育庁文化課長谷部参事、木村学芸員来跡。調査助言を頂く。
- 11月5日 降雨、湛水のため現場休み (7日まで)。室内で調査記録の整理を行う。
- 11月8日 畦畔状遺構検出 (45T 以南)、杭 (45T 北壁) 半裁、写真撮影。
- 11月9日 玉名工業高校生徒、見学。甲佐町教育委員会西口氏来跡。AF-26 グリッド排水溝掘削中、IV層の標高 4.1m 程のレベルで縄文晩期前半の土器片出土。
- 11月12日 IV層中の遺物包含密度を把握するため AG-26SW グリッドのIV層を掘削。弥生土器片出土 (H=4.25m)。
- 11月13日 AH-27 グリッドIV層から弥生土器出土 (H=4.29m)。熊本県教育庁文化課江本課長補佐来跡。
- 11月15日 畦畔状遺構 (SX03、SX07) の延長部分検出。45T 掘り下げ。
- 11月20日 III c 層上面、コンターライン測量 (4.80m、4.85m、4.90m)。
- 11月21日 天草市教育委員会松本博幸氏来跡。
- 11月26日 III b 層完掘、III c 層上面検出、畦畔状遺構の調査区全景写真撮影。ローリングタワーを調査区東側、南側に設置。
- 11月27日 畦畔状遺構個別写真撮影。サブトレンチ掘削。
- 11月28日 サブトレンチを掘削し、III c 層の遺物出土なし、III d・III e 層で出土することを確認。III c 層掘削方法の検討。AG-26 グリッドのピット状の染みは遺構ではないと確認した。
- 12月3日 AD-27 グリッドからIII c 層掘り下げ開始。出土遺物なし。青木勝士氏来跡。
- 12月4日 III c 層掘り下げ、1 グリッドあたり土器片 1 点出土する程度。AD-27NW で 0.8m 四方の範囲に弥生土器片が比較的集中して出土。III d 層下部に帰属する。III d 層と III e 層の漸移層における遺物出土状況に注意する必要がある。
- 12月5日 AD-28 グリッドIII d 層から弥生土器出土。AD-28 グリッドIII d 層上面に暗渠とは方向を異にする鉄分の集積を確認。遺構か否かの検討を行う。
- 12月6日 AD-28 グリッドIII d 層上面の帯状鉄分集積は、土層断面観察により溝状の立ち上がりを確認。鉄分、マンガンの状況はIII d と異なると認識。
- 12月7日 AE-28 グリッドIII d 層から須恵器模倣土師器出土。古代の須恵器鉢出土。
- 12月11日 AF-27 ~ AF-29 グリッドにかけIII d 層と異なる砂質土が帯状に南北に堆積していることを確認。
- 12月14日 AE-28 グリッド杭半裁、実測作業。杭には長さにより 2 類あることを確認。
- 12月17日 AF-26 グリッドで南北方向に帯状に延びる砂質土を確認。その上部に遺物が集中して出土。
- 12月18日 AE-29、AF-29 グリッドにてIII c 層掘削中に多数の細い杭 (1 ~ 3cm) を検出。
- 12月26日 AD-28 グリッドから東に向かって延びる帯状の鉄分集積を「SD01」と命名し、検出、線引きを行う。また AF グリッドに南北に延びる帯状の砂質土は「SD02」とする。いずれも自然流路の痕跡か。
- 1月7日 平成 20 年の作業開始。作業員 11 名新規任用。調査区内の III c 層は完掘。一部 III d 層の掘り下げに入る。
- 1月8日 調査区 III c 層完掘状況写真撮影作業。AG-27 グリッドの杭と認識していた木は杭ではなく木片と確認、杭番号抹消。調査区内の外周擁壁部分を測量、位置だし。AE-26 グリッド南半に土師器が集中して出土。
- 1月9日 SD01、SD02 の検討。III e 層が盛り上がっており溝状遺構ではなく凸状の畦畔状遺構である可能性がある。

第2節 発掘作業の経過

さらに検討を要する。

- 1月16日 SD01の検討を両調査員で行い、その範囲とした部分は鉄分、マンガンの集積が明瞭ではあるが、その土壌は基本土層と土色、質ともに異なる床尾路が見だし難く、遺構としての分層識別は困難と認識。
- 1月25日 AF-28グリッド、III d層掘り下げ。比較的遺物出土量多く、東西方向に帯状に連なる。鉄分集積との関係に注意する必要がある。
- 2月14日 自然科学分析。株式会社古環境研究所により土壌分析試料サンプリング。
- 2月18日 熊本県教育庁文化課、木村学芸員、壇学芸員来跡。出土した須恵器、土師器について御教示頂く。
- 2月19日 熊本県教育庁文化課、亀田主任学芸員来跡。AD-26・AE-26グリッド、IV 2層中から多数の小円礫出土。
- 2月20日 IV 1層完掘状況写真撮影。熊本県教育庁文化課坂田参事、壇学芸員来跡。調査区内外周擁壁部分にトレンチを設定し、掘削開始。AD-27・AF-28グリッドでIV層下部に黒色粘土のレンズ状堆積の平面ラインを確認。
- 2月21日 AE-26グリッド南東隅IV 2層中から縄文土器出土 (H=3.6m)。
- 2月22日 熊本大学文学部杉井健准教授調査指導。
- 2月25日 調査区中央の円形擁壁部分にトレンチ掘削。
- 2月28日 熊本大学大学院芝康次郎、三好栄太郎氏来跡。
- 2月29日 報道発表。
- 3月1日 現地説明会開催。約180名の見学者来訪。
- 3月3日 中央擁壁部トレンチの黒色粘土掘り上げ、中央トレンチの東西に10m長のトレンチを設定し黒色粘土の広がりを探る。
- 3月4日 調査区内掘削終了。清掃作業および記録作成作業。調査機材整理開始。
- 3月17日 調査機材、出土遺物等整理、撤収作業開始。
- 3月21日 現場事務所、機材倉庫撤去。調査機材、出土遺物を玉名市文化財整理室へ搬入、整理する。以上を持って現場作業終了。

[調査Ⅲ区]

平成19年

- 8月1日 重機による表土除去開始(廣田組)
- 8月6日 表土除去終了。現場事務所、作業員休憩所設置。
- 8月7日 釜場設置。他、調査機材準備。
- 8月9日 発掘作業員入る。現場の説明中心。ブルーシート3張り、土嚢造り等。
- 8月10日 釜場に向けて、調査区全体に排水溝の掘削。
- 8月11日 ①調査区東端壁で土層確認。写真撮影、実測。
②Y-20グリッド、暗渠掘り下げ。
③Y-19、Y-20、Z-18グリッド、II層掘り下げ。
④夜間、事務所の水道工事(県道)
- 8月13日 雨の為、現場中止。
- 8月14日 調査区全体に排水溝の掘削。確認調査時のトレンチ掘削開始。
- 8月16日 トレンチ掘削。土層確認。かなり暑く、スコップ使用の為、休憩をこまめにとる。
- 8月17日 西田課長、安田係長来跡。状況説明。

- 8 月 20 日 有明測量開発社によりメッシュ基準杭設置。
15、19 トレンチの埋土内より、土器片（ミニチュア土器含む）取上採集。
- 8 月 21 日 グリッド番号の設定、基準杭に沿って、ベルトを設定し、II 層の掘り下げ。
- 8 月 28 日 調査区全体の平面図作成 (S=1/200)
- 8 月 30 日 AA-18 グリッドにて、畝状遺構を確認。周辺を清掃し、全体を検出する。
- 9 月 4 日 西田課長、安田係長来跡。
- 9 月 7 日 II 層掘り下げ、II 層より近世染付出土。
- 9 月 10 日 Y-18 グリッドでも、畝状遺構検出。約 3 本を 1 つの単位として、南北方向にのびる。足跡痕も確認。
II 層も 1～4 層に細分する (II -1～II -4 層)
- 9 月 12 日 II -2、3 層掘り下げ。畝状遺構は II -2 層上面から検出。
- 9 月 14 日 II -3 層掘り下げ (Z-18、19、Y-20G)、II -3 層からキセル、釣り針出土。午後から台風対策。
- 9 月 18 日 AA-18、19 グリッドの畝状遺構掘り下げ。Y-20 より石鏃検出。
- 9 月 19 日 畝状遺構は II -3 層と II -4 層の上面でそれぞれ検出。時期差があることが判明。
- 10 月 1 日 Z-19 グリッドのサブトレンチにおいて、粒子の粗い砂を含む。溝状遺構があることを確認。
- 10 月 5 日 AB-17、18 グリッドにおいても南北方向の溝状遺構を確認。水田に伴うものは検討。午後から台風対策。
- 10 月 9 日 現場雨のため中止。
- 10 月 10 日 水抜き作業。AA-18、19 グリッドの II -4 層上面の畝状遺構 (S-2) の検出、掘り下げに入る。
- 10 月 12 日 AC-17 グリッドの III -1 層上面において、刀子状の鉄器出土。AA-18、19 グリッドの平面図作成。
- 10 月 16 日 AC-17 グリッドにおいて、溝状遺構確認。AB-17、18 グリッドの溝 2 本と等間隔にあり。水田区画などの関連性があるものか。
- 10 月 18 日 全体的に III -1 層が検出される。一部 (AA-18) において、III -1 層掘り下げ。
- 10 月 19 日 AA-17 グリッドにおいて、溝状遺構を確認。周辺を清掃したところ、Z-19、Y-20 にまでつながる同一の溝と判明する (S-3)
- 10 月 23 日 S-3 の検出状況、撮影後、掘り下げる。ほぼ完掘する。光波による実測行う。
- 10 月 25 日 Z-18、Y-20 グリッド、IV -1 層掘り下げ、S-4、5 遺構面検出。西田課長、安田係長来跡。
- 10 月 29 日 S-4、5、6 (溝) の検出状況撮影。掘り下げ、レベリング、1 区との境にベルコン設置 (1 区と共用)
- 10 月 31 日 S-3 完掘。全体の写真撮影。
- 11 月 1 日 S-3 実測。レベリング。
- 11 月 5、6 日 午後から雨のため中止 (11/6 も中止)
- 11 月 7 日 駐車場確保の為、水路沿いの除草作業。S-3 の土層堆積状況実測。写真。
- 11 月 9 日 作業員出勤途中に交通事故。Z-19 グリッド、III -1 層掘り下げ、滑石製の紡錘車、土錘など出土する。
玉名工業高校生見学。
- 11 月 12 日 事故処理の為、現場休みとする。
- 11 月 14 日 15T 北側、埋土の掘削、午後から岱明支所にて協議 (発掘業務委託の件)
- 11 月 15 日 19T と 15T の交差点付近 (19T 北側) で、土器片の集中部を確認する。
(のちに S-18 となる)
- 11 月 16 日 AC-17 グリッドから III -2 層の掘り下げに入る。酸化鉄の集積を確認。
- 11 月 19 日 AC-17 グリッドの III -2 層を掘り下げ中に白色を呈した斑点状の部分があることを確認。
AA-20 グリッドの III -1 層内より磨製石鏃出土。

第2節 発掘作業の経過

*以降日誌記録不明 以下荒木記す。

平成 20 年

- 2月12日 AA-20 グリッドにて須恵器・土師器のほか多量の手捏土器、石製模造品出土。
- 2月14日 古環境研究所杉山氏来跡。土壌分析試料採取。
- 2月15日 祭祀遺構周辺の状況はS-18が上部の遺物検出が終わっている。土製勾玉や高坏形ミニチュア土器ほか幾つかの遺物は作業中に動いている可能性有り。S-18西側は確認調査時のサブトレンチ跡が掘り下げられ、その部分には遺物無し。その西側も掘り下げられ遺物が出土している状況。S-19はベルトを残し樹木表面検出。S-14は遺物検出途中。AA-20グリッドSWに十字のベルトを残して鉄分沈着範囲を掘り下げられている。
- 2月16日 熊本大学でマロ塚古墳共同研究成果報告会開催、会場にて多くの研究者に写真を見てもらい教示を得る。県内の関係者に現地での指導・助言を依頼する。
- 2月18日 熊本県教育委員会文化課木村龍生主任学芸員、壇佳克学芸員来跡。祭祀遺構周辺の掘り込みの有無等について意見を伺い、須恵器、土師器の時期について教示を得る。
- 2月19日 熊本県教育委員会亀田学主任学芸員来跡。県内の類例について教示いただく。
- 2月20日 祭祀遺構S-14遺物検出。AA-20グリッドSWベルト沿いにサブトレンチ掘削。あらためて掘り込みの有無確認。
- 2月21日 祭祀遺構S-14、サブトレンチにより遺物検出。
- 2月22日 熊本大学文学部杉井健准教授、現地調査指導を受ける。S-14の周辺には掘り込みなしと判断し、AA-20グリッドSW全体を遺物検出レベルまで掘り下げ開始。
- 2月25日 埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に祭祀遺構S-14の実測作業を委託し、椎葉博昭氏により実測作業開始、並行して遺物検出作業。県文化課廣田静学参事より玉名市上小田宮の前遺跡の石製模造品出土状況等について教示を得る。熊本県立装飾古墳館池田朋生主任学芸員来跡、遺構検出状況について、IV層下部の土壌及び出土遺物について意見を頂く。AA-20グリッド以外の調査区内包含層掘り下げ。
- 2月26日 雨天により作業中止。
- 2月27日 S-14をまたぐ十字の土層観察用ベルト(AA-20グリッドSWベルト)除去作業開始。以降祭祀遺構周辺の排土はすべて土嚢袋にて採取する。S-18実測作業開始。S-19ベルト除去、実測作業開始。S-14遺物検出状況を写真撮影。祭祀遺構下位の弥生土器は中期に属することを確認。
- 2月28日 S-14実測作業。遺物検出。熊本大学大学院芝康次郎、三好栄太郎氏来跡。
- 2月29日 AA-20グリッドSWベルト完堀。S-14の遺物検出、清掃作業。報道発表。報道機関来跡。
- 3月1日 調査Ⅲ区祭祀遺構S-14・S-18を対象として現地説明会を開催。県内外から180名以上の見学者を得た。また見学者のうち多数の考古学関係者から有益な助言を頂いた。畦畔状遺構S-20を確認、検出作業。
- 3月2日 金栗杯玉名ハーフマラソン大会開催。
- 3月3日 玉名女子高校山下教諭来跡。樹木根を見て頂く。確認調査15トレンチ西側ベルト上部掘削。Z-20グリッド掘り下げ、須恵器等古墳時代の遺物出土。
- 3月4日 祭祀遺構S-14・S-18、S-19の写真撮影。
- 3月5日 祭祀遺構周辺の写真撮影。4×5、ブローニー判、デジタルカメラを用いる。
- 3月6日 祭祀遺構S-14実測しながら遺物取上げ開始(取上番号1～22)。
- 3月7日 祭祀遺構S-18、実測しながら上部の遺物取上げ作業開始。S-14遺物取上げ(取上番号23～94)。
- 3月8日 祭祀遺構S-14遺物取上げ(取上番号95～134)、ポイントの軸に沿ってベルトを残し掘り下げ。祭祀

遺構 S-18 掘り下げ。矢板際から白玉 1 点検出。EP2-WP2 より南側を半分ほど掘り下げ、完形の小型丸底壺がまとまって出土。畦畔状遺構 S-20 の杭列を検出し、それを追って掘り下げ。植木町教育委員会中原幹彦主任学芸員来跡。石製模造品および須恵器について教示を得た。

- 3月9日 S-14 遺物取上(取上番号 135～161)、実測作業完了。山鹿市教育委員中村幸史郎審議員来跡。出土遺物について教示を得る。正午前より降雨、作業中止。
- 3月10日 祭祀遺構 S-18 実測、遺物取上げ。祭祀遺構 S-14 完掘。写真撮影。午後より S-21 の検出作業、AA-20 グリッド SW を f 層上面弥生土器集中部まで掘り下げ開始。S-14 十字ベルト、AA-20 グリッド SW ベルトを残して S-21 検出。S-21 実測。S-18 掘り下げ、石製勾玉出土。確認調査 22 トレンチを延長し、IV 層下部まで掘り下げ。
- 黒褐色粘性土から板付式土器出土。装飾古墳館池田主任学芸員来跡。
- 3月11日 確認調査 15 トレンチ土層堆積状況写真撮影。S-21 実測。花園大学高橋克壽准教授、熊本大学杉井健准教授、熊本大学大学院修士課程三好栄太郎氏、熊本県立装飾古墳館前田真由子氏来跡。祭祀遺構出土品について教示を得る。祭祀遺構 S-18、遺物取上げ、土層観察用ベルトを残してほぼ完掘。
- 3月12日 S-18 土層観察用ベルト掘り下げ、f 層上面検出。S-21 遺物出土状況写真撮影。S-21 遺物取上げ。S-14 十字ベルト・AA-20 グリッド SW ベルト除去開始、f 層上面検出作業。畦畔状遺構 S-20 検出。各グリッド沿いにサブトレンチを設定し、調査区内の土層堆積状況再確認。
- 3月13日 S-21 検出用土層観察ベルト掘削。S-21 実測、遺物取上げ。f 層上面検出。確認調査 15 トレンチ西側ベルト、19 トレンチ南側ベルトを掘削。畦畔状遺構 S-20 検出、実測作業。S-19 実測作業終了、取上げ。
- 3月14日 樹木根 S-19 取上げ、畦畔状遺構 S-20 トレンチ断面より杭 2 本を採取。確認調査 22 トレンチ延長部より IV 層下部および畦畔状遺構 S-20 周辺の土壌採取。午前 9 時より調査 III 区埋め戻し。現場事務所で調査機材の整理、出土遺物の整理を行う。最終的に S-20 は平面での検出に留まり S-21 は f 層中に弥生土器が包含されていることを確認したところで調査終了した。

〔調査IV区〕

平成 19 年

- 11月15日 調査前地形撮影および調査前地形測量
- 11月20日 現場事務所および作業員休憩所設置。
- 11月26日 表土除去開始。壘父氏、末永氏の指導の下、掘削深度決定。
- 11月29日 表土除去終了。
- 12月4日 発掘作業員初日。着工式、安全教育後作業に入る。排水溝掘削。
- 12月5日 確認調査トレンチの復旧。
- 12月7日 排水溝掘削および確認調査トレンチ復旧完了。
- 12月10日 調査区 AG14・AG15 グリッド以西の II -4・II -5 層掘削を開始する。作業員 1 名現場作業中転倒事故により骨折。
- 12月11日 AF-15 グリッド II -5 層において景德鎮白磁碗出土。
- 12月14日 II -4・II -5 層完掘。完掘状況の撮影を行う。
- 12月17日 III -1a 層掘削開始。白磁が出土する。
- 12月20日 壘父氏の指導により基本層序の名称を確定。
- 12月21日 排水溝および確認調査トレンチの観察により、地形については調査区東側が最も高く、西側の AE・AF

第2節 発掘作業の経過

グリッドが最も低い。また、西端部において若干高くなる傾向を確認した。

- 12月26日 III -1a層完掘。完掘状況の撮影および地形測量を行う。
- 12月27日 III -1b層掘削開始。現場養生を行い、年内の作業を終了する。
- 平成20年
- 1月5日 掘削作業に先立ち、調査区内の排水作業を行う。
- 1月7日 平成20年の掘削作業開始。昨年に引き続きIII -1b層掘削を行う。
- 1月8日 AJ-12・AJ-13グリッドから鉄分・マンガン沈着の度合いの異なる部分を確認。畦畔として精査する。後日、擬畦畔と判明。
- 1月10日 III -1b層完掘。完掘状況の撮影および地形測量を行う。III -2層掘削開始。III -2層中位～下位にかけて鉄分が著しく沈着することが判明したため、鉄分沈着部直上までの掘削とする。
- 1月11日 雨により駐車場の盛り土が崩落。
- 1月15日 畦畔確認のため、AJ-12グリッドにてトレンチ掘削。畦畔ではないことが判明した。また、トレンチから古墳時代の遺構の輪郭を確認する。
- 1月17日 杭3本（杭No.1～3）を検出。掘削、写真撮影および実測を行う。III -2層の遺物取り上げを行う。中世の遺物に古墳時代の土器が多量混在する。
- 1月18日 杭3本（杭No.4～6）を検出。AK-13グリッドにて銅製品出土。調査区東側において遺物が多量出土する。
- 1月22日 西田氏、山氏、安田氏、兵谷氏、荒木氏、蟻父氏と調査会議を行う。土層・遺構面の整合および今後の工程の確認をした。
- 1月25日 III -2層鉄分沈着部上面まで掘削。地点によって鉄分沈着の程度に差が見られる。撮影および地形測量を行う。
- 1月29日 III -2層下位掘削開始。
- 1月30日 AF-15グリッドにて木製二又鍬出土。
- 2月1日 AJ-11・AJ-12グリッド表土除去。
- 2月4日 AJ-11・AJ-12グリッドII -4'・II -5'層掘削開始。
- 2月5日 III -2層完掘。完掘状況の撮影および地形測量を行う。III -3a層掘削開始。AJ-11・AJ-12グリッドII -4'・II -5'層完掘。完掘状況の撮影および地形測量を行う。
- 2月7日 調査区西側にてIII -3a層上面より、溝2本を検出。「S001」・「S002」とする。杭No.4～6を完掘。撮影を行う。また、AJ-12グリッドにて杭No.7を検出。
- 2月11日 木製二股鍬の取り上げを行う。
- 2月12日 III -2層完掘。完掘状況の撮影を行う。調査区東側にて遺構検出のためグリッドベルトを実測・撮影後掘削。
- 2月13日 S001掘削開始。AJ-11・AJ-12グリッドIII -1c層完掘。完掘状況の撮影および地形測量を行う。
- 2月14日 自然科学分析。株式会社古環境研究所により土壌分析試料サンプリング。
- 2月15日 AJ-11・AJ-12グリッドIII -2層完掘。調査区東側の遺構検出を開始する。
- 2月16日 調査区東側遺物出土状況の撮影を行う。古墳時代の遺物が密集する。また、III -3a層上面にて土坑を数基検出するが全体の確認には至らない。
- 2月20日 竪穴遺構（S006・S007）および大型土坑（S008）を検出。全体の遺構平面プランを確定する。
- 2月21日 S006・S007の平面プランおよび重複関係確認のため、遺構掘削に先立って上面の遺物取り上げを行う。S005から土師器および黒色土器の碗が出土する。

- 2月22日 熊本大学文学部杉井健准教授調査指導。
- 2月27日 S001・S002 完掘。完掘状況の撮影および実測を行う。Ⅲ-3a層掘削を開始する。
- 2月29日 S006・S007の重複関係を確定。S006が新しく、S007が古いことを確認した。
- 3月5日 S006遺物出土状況の撮影および実測を行う。
- 3月7日 S008遺物出土状況の撮影および実測を行う。
- 3月11日 S007遺物出土状況の撮影および実測を行う。また、S007・S008と重複する溝（S033・S034）を検出。グリッドベルト土層断面実測および写真撮影を開始する。
- 3月12日 空中写真撮影。その後遺構個別の撮影を行う。
- 3月15日 グリッドベルト土層断面実測および写真撮影終了。グリッドベルト掘削。
- 3月16日 S033・S034 完掘。遺構掘削終了。
- 3月17日 記録作業終了。
- 3月18日 完了検査。機材撤収。現場作業終了。
- 3月20日 プレハブ撤収。
- 3月28日 成果品納入。

6. 調査成果の公開と報告

平成19年度の発掘調査期間中及び平成20年度の整理・報告書作業中において、調査成果の広報と資料活用、また情報交換のため、発掘現場公開、出土資料の展示と貸出、報道機関への記者発表、出版社等の関係誌への情報提供、市広報誌への掲載、関係研究会での報告等を行った。また調査中、多くの研究者・埋蔵文化財行政担当者に写真や実測図などの資料を見ていただき多くのご指導を頂いたほか、見学および指導について呼びかけを行った。

【発掘現場の公開】

『両迫間日渡遺跡現地公開』

開催日時：平成20年2月9日

開催場所：両迫間日渡遺跡調査Ⅰ区

参加者数：不明

主な内容：検出された水田跡（杭列）の現地公開

『両迫間日渡遺跡現地説明会』

開催日時：平成20年3月1日 午前10時～午後4時

開催場所：両迫間日渡遺跡調査Ⅲ区

参加者数：約180名

主な内容：出土遺物の展示と概要説明、検出された祭祀遺構の見学と調査担当者による解説

【出土品の展示・公開】

『高瀬花みち通り感謝祭「まがたま作り体験」』

日時：平成20年5月25日

場所：玉名市高瀬 花みち通り

第2節 発掘作業の経過

主催：高瀬花みち通り感謝祭実行委員会

内容：出土遺物、写真パネル、解説パネル及び担当職員による解説

『「色と音の考古学」展』

日時：平成20年7月4日～9月7日（宮崎）

平成20年9月14日～11月16日（熊本）

場所：宮崎県立西都原考古博物館

熊本県立装飾古墳館

主催：宮崎県立西都原考古博物館

熊本県立装飾古墳館

内容：調査Ⅲ区祭祀遺構出土の小型丸底壺1、剣形石製模造品1、有孔円板1、現場写真展示

『玉名市立玉名中学校文化祭』

日時：平成20年10月24日

場所：玉名市立玉名中学校多目的ホール

主催：玉名市立玉名中学校

内容：出土遺物、写真パネル、解説パネル展示、説明資料配付及び担当職員による解説

『たまな発掘速報展』

日時：平成20年11月15日～12月23日

場所：玉名市立歴史博物館こころピア

主催：玉名市立歴史博物館こころピア

内容：出土遺物、写真パネル、解説パネル展示、説明資料配付

【報道発表】

調査により得られた成果の一般への周知、また現地説明会の広報のため玉名市教育委員会が主体となって報道機関への発表を行った。報道機関向けに現地での説明と資料配付を実施し、各報道機関により取材内容が報道された。

2008年2月7日「県内最古級の水田跡発見」

2008年2月29日「両迫間日渡遺跡（調査Ⅲ区）現地説明会」

〔2月7日〕

TKU ニュース「玉名市 県内最古の弥生時代前期の水田遺跡発掘」

RKK ニュース「玉名市で県内最古の水田発見」

NHK ニュース

〔2月8日付け朝刊〕

西日本新聞「県内最古の水田跡発見 玉名・両迫間日渡遺跡 弥生前期、くいの列」

読売新聞「玉名・両迫間日渡遺跡に県内最古級の水田」

朝日新聞「県内最古級の水田跡を発見 玉名」

熊本日日新聞

[3月1日付け朝刊]

熊本日日新聞

西日本新聞「玉名・両迫間日渡遺跡 時期違う2祭祀跡発見 市教委 古墳時代の前・中期」

朝日新聞「古墳時代中期の祭祀遺構発見」

[3月2日付け朝刊]

読売新聞「玉名・両迫間日渡遺跡で古墳時代の祭祀遺構確認」

読売新聞「剣、青銅器の石製模造品出土・・・玉名・両迫間日渡遺跡」

RKK ニュース「玉名市で古墳時代の祭祀遺構が出土」

【報告発表】

「玉名市両迫間日渡遺跡の調査概要」『熊本古墳研究会 第148回』概要報告 2008.07.05

「玉名市両迫間日渡遺跡の古墳時代祭祀と遺物」『肥後考古学会第242回例会』概要報告
2009.03.22

【出版物】

「古墳時代の祭祀（さいし）の跡発見～玉名・両迫間日渡遺跡」『広報たまな』4月1日号 玉名市 2008.4

「玉名市両迫間日渡遺跡の祭祀遺構」『九前研通信』第22号 九州前方後円墳研究会 2008.10

「玉名市両迫間日渡遺跡の祭祀遺構（概報）」『文化財発掘出土情報』2009年2月号 ジャパン通信情報センター 2009

7. 謝辞

発掘調査中、あるいは整理作業中に多くの方々から御指導、助言を頂きました。記して謝意を表します。

〔調査指導・協力者〕（順不同・敬称略）

江本 直、坂田和弘、亀田 学、木村龍生、長谷部善一、坂本亜矢子、吉井英志、園田恭子、壇 佳克、山下義満、吉田徹也、橋口剛士、帆足俊文、廣田静学、福田匡朗、坂口圭太郎、高木正文、宮崎敬士、前田真由子（熊本県教育庁文化課）、古城史雄（玉名教育事務所）、甲元眞之、杉井健、芝康次郎、三好栄太郎（熊本大学）、池田朋生、前田真由子（熊本県立装飾古墳館）、青木勝士（玉名地域振興局）、西口貴志（甲佐町教育委員会）、松本博幸（天草市教育委員会）、山下圭造（玉名女子高校）、林田和人、師富国博、山下宗親、稲津暢洋、原田範昭、牧野幸子（熊本市教育委員会）、高木恭二（宇土市教育委員会）、今田治代（氷川町教育委員会）、益永浩仁（和水町教育委員会）、河野一隆（九州国立博物館）、林潤也（大野城市教育員会）、山崎純男（福岡市教育委員会）、村中智絵（宇城市教育委員会）、中原幹彦、西嶋剛広（植木町教育委員会）、西山由美子（八代市立博物館）、宮本利邦（阿蘇市教育委員会）、橋本達也（鹿児島大学総合博物館）、鈴木一有（浜松市教育委員会）、金丸武司、竹中克繁（宮崎市教育委員会）、中村幸史郎、前田軍治（山鹿市教育委員会）、椎葉博昭（埋蔵文化財サポートシステム熊本支店）

第3節 整理作業の経過

1. 全体計画

現場での発掘調査に要した期間は調査Ⅰ区が9ヶ月間、調査Ⅱ区と調査Ⅲ区が8ヶ月間、調査Ⅳ区が4ヶ月間であり、いずれも1年未満であることから、当初平成20年度中の報告書刊行を予定した。4月～6月に出土遺物の洗浄、注記、接合等の1次整理と併行して調査記録類の整理を行い、7～8月に遺物実測図の作成、遺構実測図のトレース、9月～12月には順次各種図面のトレース、レイアウト作業を進めながら各調査区の調査担当者がそれぞれ原稿を執筆、編集し、12月下旬に印刷仕様の決定の上、平成21年1月入稿、3月末に刊行する計画を立てた。

しかし上記の全体計画作成、予算要求後、発掘調査期間終了間際になって多くの重要遺構および遺物が出土し、調査終了時には計画策定時の想定遺物量の3倍以上の点数を報告する必要が生じた。諸般の事情により整理・報告書作成期間の延長は望めないことから、あくまで平成20年度中の報告書刊行を目指し、作業の効率化、期間短縮を図るための策を講じた。報告書作成に必要な諸作業のうち、費用積算し設計金額が算出可能な業務については委託することとし、その他の作業については各調査区の調査担当者が個々の調査担当分の成果について責任を以て行い、玉名市教育委員会直営で行うこととした。しかし実際は様々な要因から大幅な体制変更を余儀なくされた。

2. 調査体制

整理・報告書作成は、最終的に下記の体制により実施した。

整理・報告書作成 平成20年度

事業主体	玉名市建設部新幹線推進課
調査主体	玉名市教育委員会文化課
調査責任	教育長 菊川茂男
調査総括	文化課長 中山富雄
庶務担当	文化財係長 安田信孝 主 事 永野摩美子
調査担当	技術主任 荒木隆宏（統括編集・作業管理・業務委託監理・図面作成・執筆） 主 任 兵谷有利（一部編集・調査Ⅰ区作業管理・図面作成・執筆） 技術主任 末永 崇（一部編集・図面作成・執筆） 調 査 員 古閑敬士（一部編集・遺物解説文章執筆） 技術主任 齋父雅史（一部執筆）

発掘調査整理作業員（50音順）

尾崎延枝、古賀武子、五野富美子、権藤 功、坂崎郷子、嶋村ひとみ、徳田晴華、早川イツエ、平野輝代、福田まき

作業分担

本書に掲載した図および写真図版作成は玉名市教育委員会で下記の担当者が行い、一部は委託した。

【遺物実測図作成】〔調査 I 区〕兵谷有利、福田まき、〔確認調査・調査 II・III・IV 区〕荒木隆宏、古閑敬士、嶋村ひとみ、徳田晴華、権藤 功

【遺物実測図トレース】〔調査 I 区〕平野輝代、権藤 功、〔確認調査・調査 II・III・IV 区〕荒木隆宏、早川イツエ、徳田晴華

【遺構実測図トレース】〔調査 I 区〕兵谷有利、平野輝代〔確認調査・調査 II・III・IV 区〕末永 崇、荒木隆宏、徳田晴華

【遺物写真撮影】〔調査 I 区〕兵谷有利、〔確認調査・調査 II・III・IV 区〕末永 崇、荒木隆宏

3. 業務委託

整理・報告書作成作業を行う実質的な作業期間が約 6 ヶ月間と極めて短いため、以下の作業について民間調査期間に業務委託を行い作業の効率化と期間の短縮を図った。なお実測・トレース業務委託の対象は一般的な土器類のみとし、一部の土師器、須恵器のほか石製品、金属製品、ガラス製品等については玉名市教育委員会職員で行った。また出土資料の自然科学的分析についても専門業者へ委託した。なお出土遺物実測・トレース業務委託監理は荒木・古閑が、遺構実測図デジタルトレース業務委託監理は荒木が、自然科学分析内容及び資料の選定については、調査 I 区関係を兵谷が、調査 II～IV 区関係を荒木が担当した。

【1 次整理作業】

〔調査 IV 区出土遺物 1 次整理作業業務〕 株式会社九州文化財研究所

【2 次整理作業】

〔調査 II 区・III 区・確認調査出土遺物実測・トレース業務〕 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店

〔調査 III 区遺構出土遺物実測・トレース業務〕 国際航業株式会社 熊本営業所

〔調査 IV 区出土遺物実測・トレース業務〕 株式会社 九州文化財研究所

〔調査 IV 区遺構実測図デジタルトレース業務〕 株式会社 九州文化財研究所

〔調査 III 区・IV 区出土木製品実測業務〕 株式会社 吉田生物研究所

〔調査 I 区出土木製品の分析・保存処理業務〕 株式会社 吉田生物研究所

〔調査 II 区・III 区・IV 区出土木製品の分析・保存処理業務〕 株式会社 吉田生物研究所

【自然科学分析】

〔調査 I 区出土木製品の樹種同定〕 パリノ・サーヴェイ株式会社

〔調査 II 区・III 区・IV 区出土資料自然科学分析業務委託〕 株式会社 古環境研究所

4. 作業の経過

平成 20 年度当初、道路特定財源暫定税率失効の影響により、予定していた 4 月からの作業着手が不可能となり、その後の作業工程の大幅な見直しが迫られた。実際には 5 月中旬から整理作業員による調査 I～III 区出土遺物の洗浄、注記、接合等の 1 次整理を開始し、8 月中旬に

第3節 整理作業の経過

大凡の完了をみた。また調査Ⅳ区出土遺物については熊本県文化課の積算基準に準拠しつつ玉名市教育委員会において一次整理業務委託に係る積算基準を策定し、8月20日から9月24日までの日程で株式会社九州文化財研究所に委託した。1次整理作業に併行して調査記録類の整理し、順次実測作業の必要な遺物の選別を行い、対象遺物のリストと出土遺物実測・トレース業務に係る積算基準を策定、設計の上9月16日から12月19日までの期間で確認調査・調査Ⅱ区・Ⅲ区出土遺物について業務委託を行った。調査Ⅳ区出土遺物については1次整理作業終了後、10月8日から業務委託した。

また出土木製品の保存処理については、年度内に完了する必要があることから高級アルコール法を用いることとし、9月16日より委託し平成21年1月完了した。

出土遺物の1次整理終了後、8月から実測委託し得なかった石製品等の遺物について調査員・整理作業員により実測・トレース作業を進め、遺構実測図についても各調査担当者指示のもと順次トレース作業を行った。調査Ⅳ区については、発掘調査時に監督していた調査員が整理作業を行う計画であったが、諸般の事情により自身の担当調査区の調査成果の整理も為し得ない状態であったので、調査終了時九州文化財研究所より提出された業務委託報告書をもとに調査Ⅱ区担当者が構成・レイアウト作業を行い、遺構実測図トレース業務を委託した。

その他、調査Ⅰ区では出土木製品の樹種同定について、調査Ⅱ～Ⅳ区では年代測定、樹種同定、石材鑑定等について9月25日から業務委託を行った。

全体として整理・報告書作成に係る諸作業は開始時期のずれと事務的な手続きにより当初計画と大きく齟齬を来すこととなり、また各担当者の意思疎通、人材配置、工程管理に問題を残しつつ、編集作業を行い報告書が刊行されることとなった。

なお結果として作業の進行・指示、編集作業は調査Ⅰ区分は兵谷、調査Ⅱ～Ⅳ区分は荒木が、確認調査分は末永が行い、調査Ⅲ・Ⅳ区に関しては発掘調査における調査担当者・監督者が一部文章執筆しか作業に関与できなかったため作業効率の低下を招き、ひいては調査における知見を十分に報告へ反映できなかった。また遺物の解説文章執筆は上記の通り各調査担当者では十分な時間をとることができなかったため、古閑が行い、記述内容及び表現を統一した。

5. 保存処理の概要

本遺跡は低湿地に立地しており、土壌下部は粘土層であるため多数の自然遺物、木製品が出土した。出土した木製品は、資料として重要度のランク付けを行い、一部の資料については業者委託により保存処理をおこなった。事業の工程及び予算上の制約により平成20年度内に処理が完了する必要があることから、高級アルコール法を用いることとし、株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。その他の資料はバキュームシーラーパック機により空気遮断パックを行った他、コンテナケース、水槽により水漬けで保管する仮措置を行っている。

保存処理を実施した資料は以下の通りである。

第1表 保存処理木製品一覧表

番号	内容	調査区	遺構名	番号	内容	調査区	遺構名
1	丸杭	I	5区杭列	7	杭	II	杭列B-3
2	角杭	I	5区杭列	8	杭	II	杭列D-4
3	半裁丸杭	I	5区杭列	9	杭	II	杭列D-5
4	鋤	I	5区杭列	10	杭	III	S-20
5	鋤カ	I	5区杭列	11	杭	III	S-29
6	鋤カ	I	5区杭列	12	二又鋏	IV	S002

第 Ⅱ 章 遺跡の位置と環境

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 玉名の位置と環境

1. 地理的環境

玉名市は熊本県の北西部に位置し、南東部を熊本市と接する面積約152平方キロメートル、人口約7万2千人の地方都市である。市域を地形的にみると菊池川の流域に広がる玉名平野を中心に、南は有明海に面し北は花崗岩山塊からなる小代山地と丘陵および台地、東を国見山地（木葉山）及び金峰山の北麓に続く八嘉・伊倉の台地に囲まれる。菊池川が市の北東から南西方向へと市域のほぼ中央を分断する形で流れ、玉名平野は菊池川とその支流である繁根木川によりもたらされた沖積世の堆積物で構成された典型的な三角洲を形成し、その前縁は江戸時代以降現代まで逐次進められてきた干拓地が有明海に向かって広がる。また三角洲の北東部には菊池川の本支流によって埋積された谷底平野が連なり、梅林牟田、玉名牟田と呼ばれている。

玉名地域では有明海沿岸の標高6m付近に海進時に形成された浜堤とみられる沖積面があり、縄文海進時には三角洲の大部分を占める標高5m以下の区域が海面下にあり、平野の縁に当たる台地・丘陵の末端近くまで海岸線が入り込んだ所謂「玉杵名湾」を形成していたとみられる。このことは標高6～10m前後に立地する多くの縄文・弥生時代貝塚遺跡の分布からもうかがわれる。その後海面が低下するに従って沖積作用が進み、小田牟田、大野牟田などの三角洲平野が形成された。三角洲の前縁には北流する海流によって砂丘が形成され、ラグーン的景観が広がっていたとみられる。9～11世紀頃、奈良時代から平安時代にかけては海面の上昇期があり三角洲の堆積作用も沈滞したが、11世紀頃から再び下降期に入ったとみられている。この海退現象は遠浅の海である有明海沿岸の自然陸化を促進し、この頃には干潟の開発が進んだとみられる。

加藤清正は1588年肥後入国後、菊池川下流の流路を変更する治水事業を行ったと伝わる。それは流路を固定し氾濫を少なくすることを目的に、外平山と久島山の間を通り海へ出ていた流路（現唐人川）を塞ぎ、大浜と小浜の間を流れるように変えるものであった。このため中世には丹倍津と呼ばれた国際港湾都市伊倉は港町としての機能を失い、そのかわり小田牟田を耕地として利用することが可能となった。大野牟田および小田牟田は、中世に自然陸化し、近世初頭の加藤清正の水利事業によって耕地化が進んだ区域である。



高橋俊正 1993「地形分類図」『玉名市史 資料篇3 自然・民俗』を基に作成

山地	丘陵	台地	低地
平野	干拓地	自然堤防	砂丘

第1図 地形区分図

2. 玉名平野

調査地である両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡がある菊池川右岸は通称「玉名牟田」と呼ばれる菊池川の本支流によって運ばれた河川堆積物によって埋積された谷底平野である。現況での標高は4.8～6mほどで、大部分が水田を主とする耕地として利用されており、菊池川沿いに広がる標高6～7mほどの自然堤防上、また北側の臼間台地縁辺と玉名平野の境の標高9～14mほどに集落が営まれている。菊池川の流路は、有史時代においても数度の移動を経ていると考えられるが、耕地整理および圃場整備の結果現在ではその痕跡は認めがたい。なお、菊池川の感潮区間は、玉名平野北端の上小田周辺まで及んでおり、満潮時には下流から上流へと流れる川の様子をみることができる。高地下水位地帯であって地下地質の構成は、最下部に玉名花崗岩、その上位が阿蘇火砕流堆積物、さらに上位に菊池川の氾濫堆積物であり、これは砂礫層・砂層・シルト層からなる。平野の北端は小代山と同様に花崗岩からなる臼間台地があるが、標高が低く、丘陵地に近い地形を呈している。なお菊池川と繁根木川に接する箇所に部分的に阿蘇火砕流堆積物が分布し、古墳時代の横穴墓が築かれている。玉名地方でも菊池川の本・支流などの谷沿いにAS0-4火砕流堆積物が分布する。菊池川兩岸地域、繁根木川上流域の石貫～三ツ川地域には鉛直に近い崖面がみられ、和水町では現在でも石材が採掘され加工に用いられている。また平野の西側は繁根木川をはさんで玉名台地に接している。

現在繁根木川は玉名台地の縁辺を通り繁根木と高瀬の間を通り菊池川に注いでいるが、以前は高瀬の手前で大きく東へ蛇行し、河崎で菊池川に注いだとも想定されている。玉名平野は菊池川と繁根木川に挟まれ、頻繁に堤防の決壊、氾濫等の水害常襲地帯であった。なお、水利状況については第Ⅲ章第2節で詳説されている。

第2節 歴史的環境

1. 玉名の歴史的環境

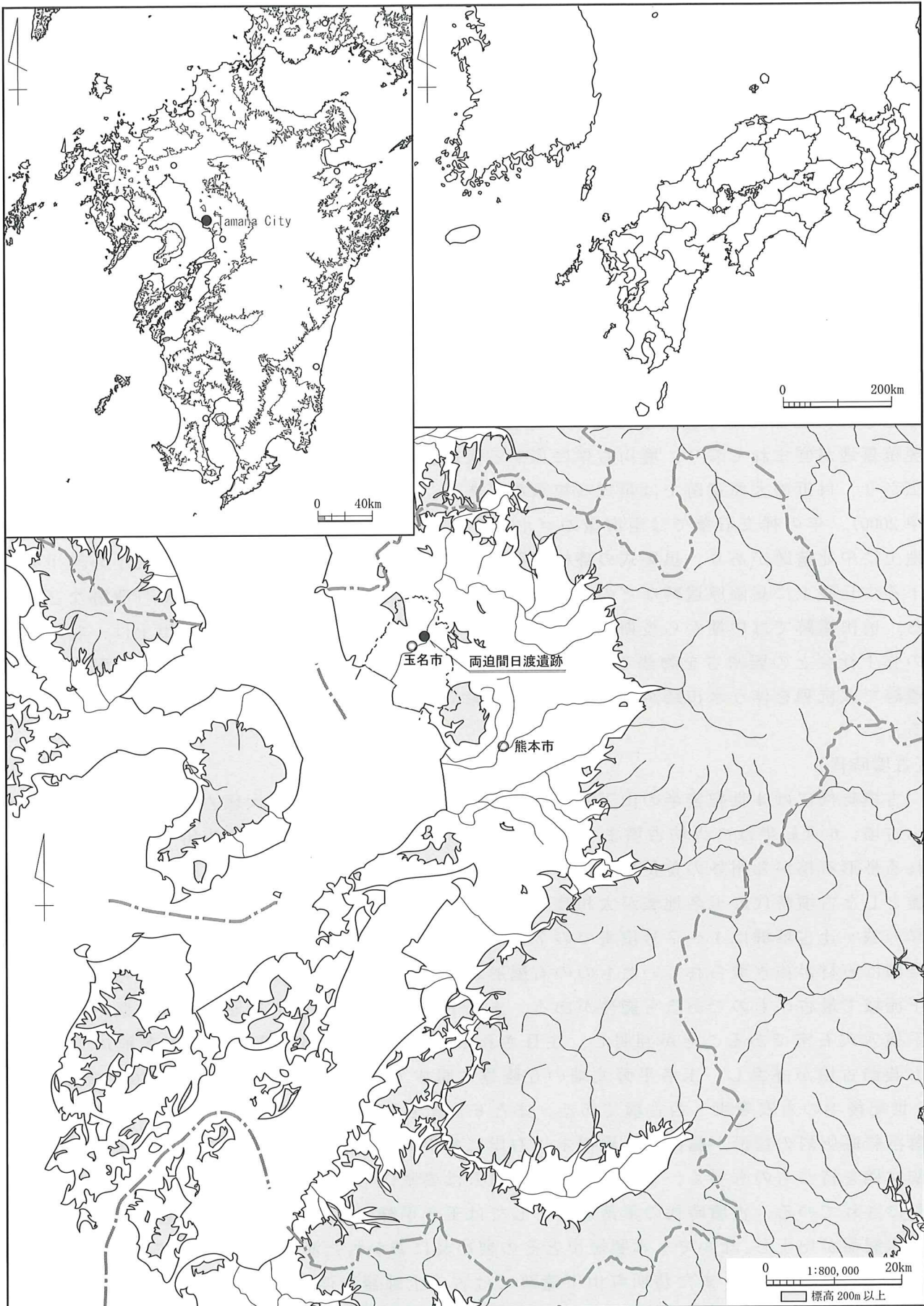
玉名市はその中央を貫くようにして流れる菊池川下流域にあたり、菊池川をはじめ大小の河川兩岸の低地や自然堤防上、小代山から続く低台地上および金峰山系の台地上に多くの遺跡が存在し県内でも有数の遺跡密集地帯である。

〔旧石器時代〕

旧石器時代の遺跡については発掘調査による出土がないため詳らかでないが、今泉遺跡や年の神遺跡、備中遺跡でナイフ形石器等が表採され、小代山南麓の山田や築地、岱明町宇西照寺で、また玉名平野北部の箱谷で旧石器が表採されており、糠峯遺跡からは三稜尖頭器が出土している（河北 1985、末永 2004）。また寺田の吉丸前遺跡でも三稜尖頭器が出土しており、周辺の伊倉丘陵性台地上にも旧石器時代の遺跡が眠っているとみられる（荒木 2007）。

〔縄文時代〕

縄文時代には当時の海岸線及び河川沿いに縄文前期から後期の貝塚遺跡が多く分布する。金峰山南裾部の内湾に尾田貝塚、竹崎貝塚、久島貝塚などが、また小代山から南に伸びる低丘陵裾に古閑原貝塚、庄司貝塚、尾崎貝塚が、さらに菊池川旧河口付近にはマガキを主体とする繁根木貝塚、保田木貝塚、桃田貝塚が所在する。いずれも前期から後期前半を主体とする貝塚であり、時期を下るにしたがって分布は内陸にあり縄文海進の一側面を示す。繁根木貝塚など



第2図 両迫間日渡遺跡の位置

の10km上流の菊水町若園貝塚は中期末～後期初頭を中心とする貝塚遺跡であるが、出土した結合式釣針は西北九州型結合式釣針と呼ばれるものであり、他の石器組成も朝鮮半島南部を含んだネットワークを構成する地域の中に入っていたことを物語っている。後期後半から晩期の遺跡についても、近年の調査により伊倉や山田の低丘陵上で確認、調査されている。吉丸前遺跡では住居址のほか土坑などが検出された。また上小田宮の前遺跡では自然流路から晩期に属する多量の堅果類に加えて、炭化した堅果類が付着した深鉢、弓の一部が出土しており、当該期の植物利用および生業形態を考える上で興味深い。柳町遺跡、玉名平野条里跡など河川沿いの低湿地遺跡では晩期の刻目突帯文土器が出土しており、今後の調査の進展が待たれる（後藤2005ほか）。

〔弥生時代〕

弥生時代に入っても金峰山南部裾から岱明町までの旧海岸線に近い低丘陵裾には城ヶ崎貝塚、片諏訪貝塚などの貝塚が営まれ、なかでも斉藤山貝塚では板付式と袋状鑄造鉄斧が伴出したとされ、北部九州を經由した交流の様相が窺われる（乙益1961）。また中期になると各所に甕棺墓地が営まれており、境川右岸に広がる東南大門遺跡では方形周溝墓の他数十の甕棺墓が広がり、付近の大原遺跡では箱式石棺墓群があり、付近に大規模な集落の存在が窺われる（田中2000）。年の神支石墓では南海産のゴホウラ製貝輪が出土している。左岸では伊倉丘陵性台地上に中北遺跡があり、黒髪式の甕棺墓群が調査されている。中後期以降には大小の河川を見下ろす丘陵上に高岡原遺跡などの集落遺跡があり、菊池川沿いに前田遺跡や柳町遺跡などがある。前田遺跡では中期から後期の集落址であり、丹塗りの特殊器台や銅鏃の出土は、北部九州の弥生社会との緊密さを物語るものである（岡本2005）。また玉名平野に位置する両迫間日渡遺跡では杭列を伴う水田跡が発見され、熊本県における水田稲作の受容を考える上で重要である。

〔古墳時代〕

古墳時代には4世紀後半の山下古墳を嚆矢として5世紀代の天水大塚古墳、院塚古墳、稲荷山古墳、6世紀半ばの大坊古墳まで前方後円墳が築かれている。また菊池川下流域産と推定される舟形石棺が九州外の首長墓に用いられていることが確認されており、菊池川と有明海を基盤とした古墳時代の玉名地域が大和政権にとっても重要な地であったと考えられる。菊池川左岸の城ヶ辻古墳群は1～7号墳までの7基の円墳からなる古墳群であるが、発掘調査された6号墳は石材が抜き取られていたものの石屋形および石障を有する横穴式石室とみられ、菊池川下流域で最古のものである可能性がある。また7号墳は北部九州の影響を受けた県内初の縦穴系横穴式石室であることが判明し、注目される（亀田2007）。6世紀になると菊池川下流域でも装飾古墳が登場し、玉名平野北端の丘陵裾に集中する。6世紀前半の大坊古墳、馬出古墳、6世紀後半の永安寺東・西古墳である。また6世紀末からは横穴墓群も数多く営まれ、特に阿蘇溶結凝灰岩の崖面が露出する繁根木川右岸に集中する。石貫ナギノ横穴群は飾縁に彩色の装飾文様を持つものも多く、また石貫穴観音横穴は奥壁にその名の由来となった観音像が浮き彫りにされている。古墳時代の集落遺跡としては玉名平野の菊池川縁辺に柳町遺跡があり、豊富な木製品が出土し、なかでも木製短甲とその留め具に書かれた漢字は注目される資料である（高谷2003、坂田2005）。また岱明町山下遺跡では古式土師器を伴う住居址、蓮華遺跡ではカマドを受容する前後の5世紀末から6世紀代の住居址16棟が調査されている（末永1999）。

〔古代〕

律令制下の玉名は玉名郡に属し、菊池川兩岸の玉名平野を中心として複数の地区に条里遺跡が広がっている。小代山南麓の立願寺周辺には白鳳期から奈良時代の瓦を出土する立願寺廃寺のほか、玉名郡倉推定地、玉名郡家跡が存在したことが発掘によって確認されており、玉名郡の中心地として郡衙を構成していたとみられる。

玉名郡の郡司は菊水町瀬川鶯原出土の銅板墓誌にも名前の見える日置氏であり、延喜式神名帳に阿蘇の3社とともに記載されている疋野神社は日置氏の氏神と考えられている。玉名郡の中央にそびえる小代山麓一帯には製鉄跡・須恵器窯跡が群落しており、穀倉地帯である玉名平野の稲作に加え、鉄生産を経済的な基盤としていたのだろう。また菊池川口の高瀬に湊を置き海上交通の拠点として、海外の文物が流入していた。その日置氏も11世紀後半律令体制の崩壊により衰退の度合いをはやめ、菊池氏の進出にともなって所領を手放さざるを得なくなる。

〔中世〕

11世紀頃玉名荘に勢力を伸ばし始めた菊池氏は、南北朝期には大野別府の地頭大野氏と協力関係を保ちつつ、高瀬港を軍事、貿易の根拠地とした。菊池武光の弟である筑前守武尚は大野国隆の法名清源にちなむ清源寺に敷地を寄進し、その子肥後守護代武国は高瀬氏を名乗った。高瀬武楯は高瀬に保田木城を築いたと伝えられている。高瀬本町通り遺跡では、昭和30年代の下水道敷設工事の際、地下3mから貝類、磁器片、獣骨類、木片、鉄釘や宋銭、漆器などが出土した。高瀬の川底から元から明初頭の青磁、青花の陶片が大量に採集され、その貿易港についての地位を偲ぶことができる。

戦国時代に入り菊池氏が没落すると大友、島津、龍造寺氏の進入を受け高瀬の町も寺社などが焼けるなど荒廃した。一時は菊池川を境として北を龍造寺氏、南を島津氏が支配することとなり、大友氏の支配下にあつてはイエズス会宣教師が訪れ伊倉にはキシリタン墓も残る。

〔近世・近代〕

豊臣秀吉の天下統一後、佐々成政が入国するが失政により改易、加藤清正が入国した。清正は入国の翌年から高瀬に港とあわせ米俵の集積庫としての高瀬御蔵を設置、御茶屋と御蔵の建設を行ったほか、菊池川の掘り換えを行うなど、多くの事業を行っている。細川氏は清正時代の大倉庫4棟の他に付属建物を増設して事業を広げ、常時藩内最高の25万俵を扱ったという。江戸時代に成って商業が盛んに成ると商業の町、川港の町として繁盛に赴いた。商人の中には多くの利益を得、事業の拡大をすすめる大商人が現れ、川に面した目抜き通りには大きな店舗を構え、裏手に石垣を築き、大倉庫をならべ裏川への通路を設けた。そして永徳寺の川港を本拠に、大坂、堺、関門方面の商人と商品の取引を密接にし、裏川を利用して商品を自家へ上げおろしそれに用いる自家用船舶を持つ商家も少なくなかった。高瀬は五カ町の一つとして町奉行所がおかれ、玉名郡代からは分離して高瀬町奉行の管理下におかれた。

明治維新後も川港を要する商人の町として順調に発展を続けたが、明治10年西南戦争の戦火で高瀬御蔵は焼失し、米倉、港の経営も断絶した。熊本城を包囲した薩摩軍は政府軍の南下を阻止するべく北上して高瀬へと兵を進めた。3日間続いた高瀬付近の戦闘では多くの戦死者を出し、その後薩摩軍は田原坂に陣を張り激戦を繰り広げた。この西南戦争の災禍で高瀬の半分は火災により焼失し、高瀬御蔵、御茶屋、宝成就寺などを含めた主要な施設が失われ、高瀬の機能は大幅に減ずることになった。

2. 玉名平野周辺の弥生時代・古墳時代遺跡

(1) 弥生時代遺跡

玉名平野では近年国道・県道及び新幹線建設工事に係る埋蔵文化財調査が継続して行われており今後報告書刊行が待たれる。柳町遺跡では弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物・遺構が多数出土しており、平野部の自然堤防、微高地上に立地する。また玉名平野北端にある低丘陵裾部では永安寺遺跡で弥生時代中期の甕棺墓（田中 2006）が、岡では箱式石棺墓が複数検出されており（田辺 1963）、当該期の集落は現在と同様の立地であったようだ。

(2) 古墳時代遺跡

玉名市内では約 70 基の古墳が確認されているが、そのうち約 30 基が菊池川の両岸、玉名平野縁辺に広がる丘陵、台地上に存在し、本遺跡周辺は古墳の集中域にあたる。また平野北東に位置する和水町清原台地上には銀象嵌銘太刀で著名な江田船山古墳を含む古墳群が存在する。玉名平野条里跡の範囲でも数カ所で古墳時代の遺物出土が確認されている（田中 2008）。本項ではそれらの中で本遺跡と時期的、地理的に近い位置にある主要古墳を概観する。

【玉名平野北端低丘陵裾の古墳】

〔大坊古墳〕

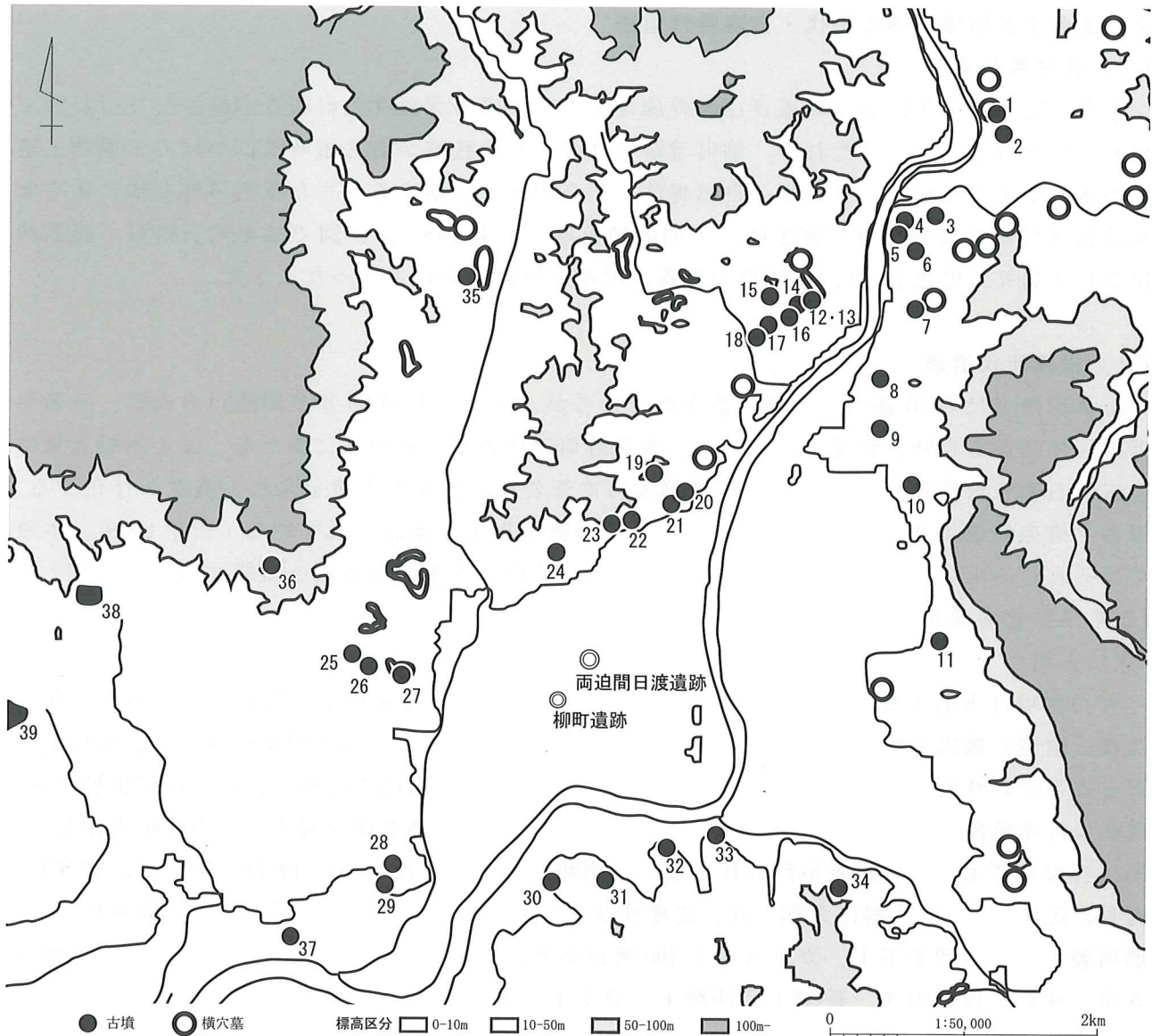
大坊古墳は玉名平野北限、低丘陵南裾に位置する全長約 54 m の前方後円墳である。主体部は複室構造の横穴式石室で、安山岩の割石小口積みで築かれる。玄室奥壁に接して、凝灰岩切石を組み合わせた石屋形が存在する。羨門・玄門の閉塞石、玄門の両袖石、および石屋形内面・前面には赤色顔料、青色（灰色）顔料による三角文・円文の装飾文様を有する。1963 年田添夏喜・田辺哲夫らにより発掘調査が行われ、多数の副葬品が出土した（田添 1967）。出土品は装身具、馬具、武具、工具、土器に大別され、装身具は水晶製勾玉 1、碧玉製管玉 12、水晶製算盤玉 2、瑪瑙製棗玉 1、切子玉 1、ガラス小玉 100 等があり、耳飾には垂飾付耳飾 2、金環 5、金銅環 5 が、武具には直刀 1、鉄剣 1、鉄鉾 1、刀子 1、鉄鏃 22 がある。馬具は TK43 型式期に位置づけられる杏葉 1、輪鐙 1、止金具 2 があり、その他鉄斧 1、TK10 型式の須恵器提瓶 2、高坏 2、坏身 2、土師器の脚台付壺 1 がある。垂飾付耳飾りは 2 種有り金製が百済系、銀製は大加耶系と指摘されている（高田 2003）。古墳は国指定史跡、出土遺物は玉名市指定文化財として玉名市立歴史博物館に収蔵されている。

〔永安寺東古墳〕

永安寺東古墳は低丘陵末端に位置し、中世に改変を受け直径 13 m を計る円墳である。装飾古墳として有名であるが古くから開口し出土遺物は知られていない。主体部は複室構造の横穴式石室で、装飾は線刻の上に朱彩され石屋形蓋石全面と玄門左右袖石に連続三角文、前室の左右壁に円文、三角文、舟、馬が描かれている。国指定史跡。

〔永安寺西古墳〕

永安寺西古墳は永安寺東古墳の西 20 m に位置し、現況で直径 16m を計る円墳である。東古墳と同じく古くから開口し装飾古墳として知られていたが、近年の整備事業に伴う発掘調査により複室構造の横穴式石室であることが判明し、前室及び羨道部から心葉形十字文透鏡板付轡等の馬具、刀装具、鉄鏃、金環等が出土した（田中 2006）。玄室奥壁に石屋形の痕跡がある。装飾は玄室奥壁及び左右壁に 3 段ずつの円文が線刻され一部朱が残る。国指定史跡。



第4図 玉名平野周辺古墳分布図

〔馬出古墳〕

馬出古墳は低丘陵南東裾に位置する、直径約20m、高さ5mの後期の円墳である。1964年、土木工事にかかり他1基の古墳及び3基の舟形・箱式石棺と共に発見されたが、工事中豪雨に見舞われ保存の手立てなく、翌年発掘調査が行われた(田添1966)。主体部は横穴式石室で、安山岩の低い腰石の上に厚手の割石を小口積みする。天井部は全面失われ、玄室より前方は破壊されていたがもとは複室構造であったとみられる。玄室奥壁に接して、凝灰岩切石を組み合わせた石屋形が存在する。石屋形奥壁・側壁前面および袖石前面には赤色顔料による三角文・円文の装飾文様を有する。出土遺物は装身具、武具、馬具に大別され、装身具は勾玉3(メノウ2、水晶1)、ガラス小玉103、算盤玉13、棗玉1、切子玉3、金環1、銀環2、金銅環2がある。武具は鉄鏃6、刀子5、馬具は轡1、飾金具1組がある。副葬品は通路左奥付近に集中し、石屋形内及び両屍床上は後年荒らされた形跡が濃厚で少数が点在する程度であったというが、羨道左隅に轡1組が完全に遺存していた。また石屋形外から馬頭骨が出土している。出土遺物は玉名市指定重要有形文化財に指定され、玉名市立歴史博物館に収蔵されている。

第2表 玉名平野周辺の古墳

番号	古墳名	墳丘	主体部	備考
1	若宮古墳	前方後円墳	家形石棺	須恵器破片、円筒埴輪、朝顔形埴輪
2	江田穴観音古墳	円墳	横穴式石室	須恵器、金環、ガラス勾玉、馬具
3	江田船山古墳	前方後円墳	横口式家形石棺	銅鏡、装身具、武具、武器、馬具、須恵器、埴輪
4	京塚古墳	円墳	舟形石棺	円筒埴輪、須恵器、土師器
5	虚空蔵塚古墳	前方後円墳		埴輪
6	塚坊主古墳	前方後円墳	横穴式石室	装飾古墳。家形石棺。
7	松坂古墳	円墳	舟形石棺1・箱式石棺1	土師器、管玉、小玉
8	椿山古墳	円墳		
9	部田古墳	円墳?	舟形石棺	
10	徳丸古墳群	前方後円墳	舟形石棺	前方後円墳3基?、舟形石棺1
11	山下古墳・山下古墳碑	前方後円墳	舟形石棺2、壺棺2	鉄器
12	真福寺古墳	円墳	舟形石棺	滑石小玉、鉄剣、鉄斧出土
13	真福寺東古墳		舟形石棺	舟形石棺蓋発見
14	前田古墳		舟形石棺	土師器片
15	宮の後古墳		舟形石棺	滑石小玉、鉄剣、刀子
16	赤禿古墳		箱式石棺	人骨・鉄剣出土
17	田代阿弥陀塚古墳	円墳	舟形石棺	舟形系の蓋石
18	田代中の塚古墳	円墳	箱式石棺	土師器片
19	絵下経塚古墳	円墳		墳丘・周溝あり
20	小路古墳	円墳	横穴式石室・舟形石棺	石室内に舟形石棺。須恵器、土師器、馬具、装身具。
21	馬出古墳・1～2号石棺	円墳	横穴式石室	装飾古墳。石室から馬具、装身具。舟形石棺1、箱式石棺1
22	永安寺東古墳	円墳	横穴式石室	装飾古墳。円・三角・舟・馬を描く
23	永安寺西古墳	円墳	横穴式石室	装飾古墳。円文線刻
24	大坊古墳	前方後円墳	横穴式石室	装飾古墳。石屋形に円文・連続三角文。
25	大塚古墳	円墳		大円墳、保存良好
26	小塚古墳	円墳		大円墳、保存良好
27	冷水塚古墳	前方後円墳	舟形石棺	現在消滅
28	伝左山古墳	円墳	横穴式石室・舟形石棺	円筒埴輪、武具、武器、装身具
29	稲荷山古墳(他4石碑)	前方後円墳		朝顔形、円筒埴輪
30	松林寺山古墳	円墳	舟形石棺	舟形石棺露出、棺蓋不明
31	飯塚古墳	円墳		
32	城が辻古墳群(1～7号墳)	円墳	箱式石棺・横穴式石室	1号箱式石棺・2号円墳、6号墳横穴式石室
33	寺田古墳群(1～4号墳)	円墳	箱式石棺・舟形石棺	1号台地北端、2号舟形、3号箱式石棺、4号処女墳
34	上津留古墳	円墳		円墳径25m
35	後田舟形石棺		舟形石棺	
36	蛇ヶ谷舟形石棺		舟形石棺	
37	台の島古墳		箱式石棺	現在消滅。1964年玉名高校考古学部調査。
38	保多地古墳群(1～5号墳)	円墳	横穴式石室	2号墳 複室構造横穴式石室 須恵器、装身具出土。
39	西の山古墳群			1号縦穴石室か、2号横穴巨石墳木棺埋葬

〔小路古墳〕

小路古墳は、低丘陵東南裾に位置する、直径約11m、高さ1.5m程の墳丘をもつ後期の円墳である。もとは標高27mの山頂に存在したが土木工事にかかり解体され、数百メートル離れた現在地に移転復元されている。主体部は南に開口する単室の横穴式石室で、安山岩板石の小口積みで築かれる。天井部及び玄室壁体の上半部を失っていたが、壁体下半部及び床面ならびに羨門石組みが原形を留め遺存していた。玄室奥側に舟形石棺を置き、その手前、左右両側に屍床を配置するいわゆるコの字形屍床の形態をとる。なお、石棺周辺には拳大の円礫が、床面には玉砂利が敷かれていた。1966年の発掘調査の際に出土した遺物の多くは玄室内中央の通路部、両屍床の北半部と石棺周辺から発見され、装身具、武具、馬具、土器に大別される(田添1966)。装身具は勾玉6(翡翠)、丸玉、ガラス小玉80、メノウ小玉4、管玉1、金銅環3があり、武具には鉄鏃6、刀子2、馬具に鞍橋磯飾金具8、鉸具3、雲珠1、辻金具2、轡15、四鋌菱形止金具2がある。その他須恵器提瓶1、台付壺口縁部2、台付壺脚台2、坏蓋1、土師器坏身1がある。古墳および出土品は「小路古墳附出土品一括」として玉名市指定重要有形文化財に指定され、玉名市立歴史博物館こころピアに収蔵されている。

【菊池川左岸の古墳】

菊池川左岸には全長 59m の前方後円墳で 4 世紀後半に位置づけられる山下古墳があり、前方部及び後円部上に舟形石棺 1 基ずつ後円部に壺棺 2 の複数主体部を有する。その 1 km 北に位置する徳丸古墳（滅失）がこれに後続し舟形石棺を主体部とする前方後円墳とされる。玉名平野南方の伊倉丘陵性台地から菊池川へ向けて延びる尾根末端上には寺田古墳群、城ヶ辻古墳群、上津留古墳、飯塚古墳がある。

〔城ヶ辻古墳群 7 号墳〕

城ヶ辻古墳群は菊池川、玉名平野を見渡せる丘陵端部上に立地しており、前期から後期にかけての 7 基の古墳が確認されている。7 号墳は主体部を竪穴系横穴式石室とする直径 9m の円墳である。石室内から長頸鏃、馬具が、墳丘上からは TK47 型式の須恵器、土師器が出土している。

【繁根木川右岸 玉名台地上の古墳】

玉名平野南西に位置する玉名台地東端は南は有明海から宇土半島、東は玉名平野や菊池川を見渡せる眺望地で、方格規矩鏡が出土した箱式石棺の他 5 世紀後半の 2 基の古墳が知られる。

〔伝左山古墳（繁根木古墳）〕

伝左山古墳は、稲荷山古墳の北 70m に位置する直径 35m、高さ 5m の円墳である。明治年間の発見後 2 形式の埋葬施設を有する珍しい古墳として注目され、かつては繁根木古墳と称されていたが現在は伝左山古墳と呼称されている。墳丘南側では円筒埴輪が出土している。主体部は板石小口積みの石障系横穴式石室で、墳頂には別に舟形石棺が直葬されている。横穴式石室の玄室はやや縦長の方形を呈し、各壁前面に石障がある。本古墳に特徴的な施設として玄室の奥壁及び左右壁の 3ヶ所に突起を有し、発見当初は石柵があったと伝わるが現存しない。

舟形石棺は阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜式で棺身両小口部に円柱状縄掛突起を有する。

副葬品は出土の時期が 4 期に亘り、1869 年の第 1 期、1885 年の第 2 期の出土品は熊本市立熊本博物館に収蔵され、1965 年玉名高校による実測調査に際する第 3 期出土品は東京国立博物館に収蔵されている（田添 1966）。また平成初年の玉名市史編纂事業による調査出土品は玉名市立博物館に収蔵されている。横穴式石室内からは小札鋌留眉庇付冑、小札鋌留衝角付冑、横矧板鋌留短甲、環頭大刀、長頸鏃、臑当、馬具、金製垂飾付耳飾、金環、勾玉、管玉、ガラス小玉が出土している。舟形石棺からは大刀、貝釧、鉄器、金銅片等が出土し、他棺外には槍があったとされる。埴輪はタテハケ調整で円形スカシ孔を有する円筒埴輪が玉名市立歴史博物館に収蔵されている。なお埴輪には家形埴輪の存在が指摘されている⁽¹⁾。玉名市指定史跡。

〔稲荷山古墳〕

稲荷山古墳は台地上の標高 15m ほどの小丘陵頂部に位置する推定全長 110m の前方後円墳である。県内でも有数の大型前方後円墳であるが奈良時代には墳丘上を削平されており主体部は不明である。1959 年都市開発を受け発掘調査が行われ、段築の拡がり部に径 30cm 前後の葺石が並び、2 重の埴輪列の存在することが確認された（田辺 1980）。埴輪は 1959 年出土分は玉名市立歴史博物館に、2002 年採集品（末永 2004）は玉名市文化財資料室に収蔵されており、朝顔形、円筒埴輪のほか家形、人物埴輪の可能性のある破片が含まれている⁽¹⁾。円筒埴輪はタテハケ調整が中心で、突帯や器壁等の特徴から伝左山古墳より新しく位置づけられる。

【菊池川下流域の舟形石棺】

菊池川流域では 4 世紀後半から 5 世紀代にかけて舟形石棺が多くの古墳の埋葬主体採用され

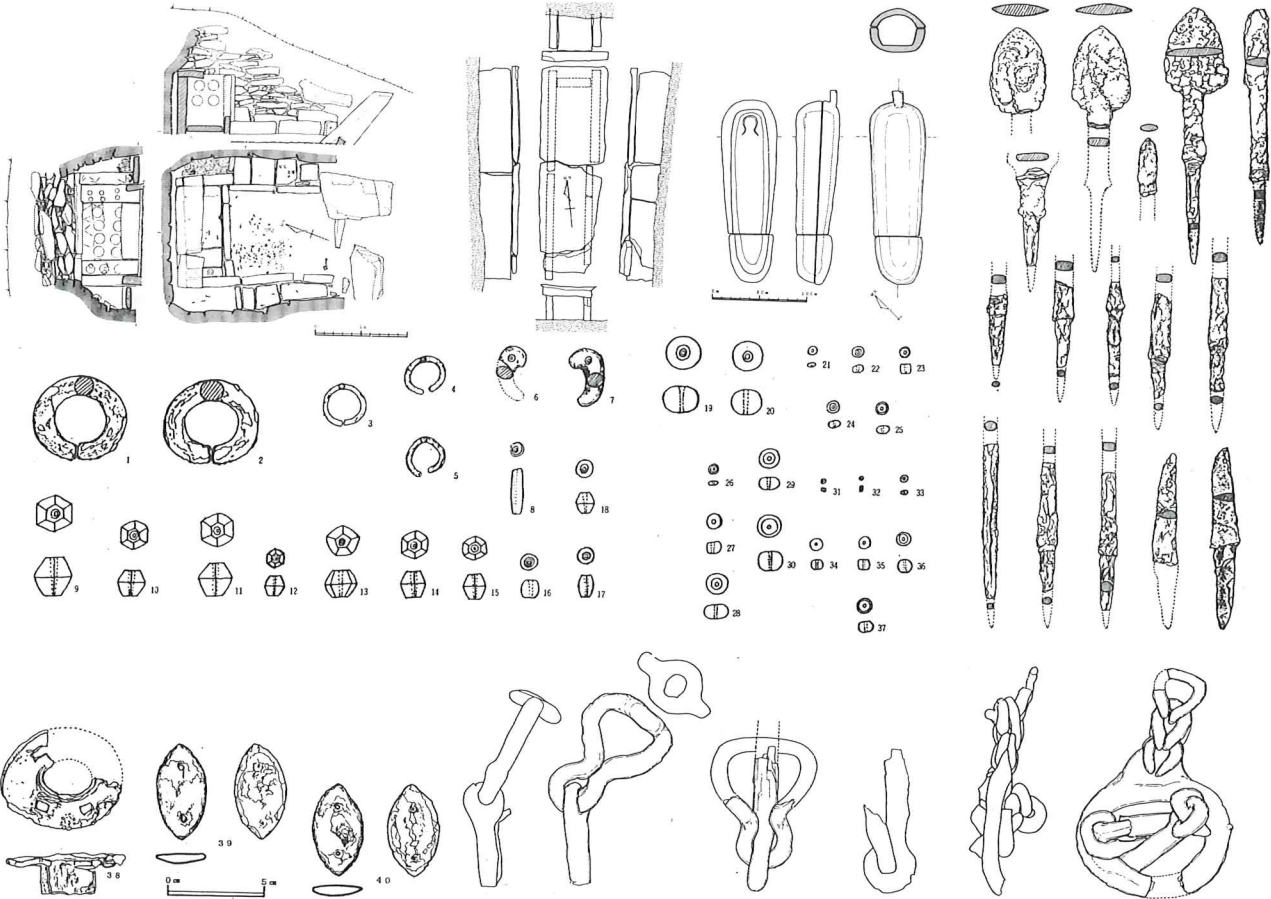
ている。本遺跡の北3kmの菊池川右岸の青木・溝の上付近には阿蘇溶結凝灰岩の崖面があり宮ノ後古墳や真福寺古墳など7基の古墳・石棺が集中し、下流域を中心に分布する北肥後I型舟形石棺の製作地と想定されている(高木1987)。また菊池川下流域で製作された石棺は福岡県南部や佐賀県の一部、さらに5世紀中頃から末頃にかけては四国北部地域や瀬戸内沿岸、近畿地方まで長距離輸送されたことが明らかにされている(高木1983)。

註

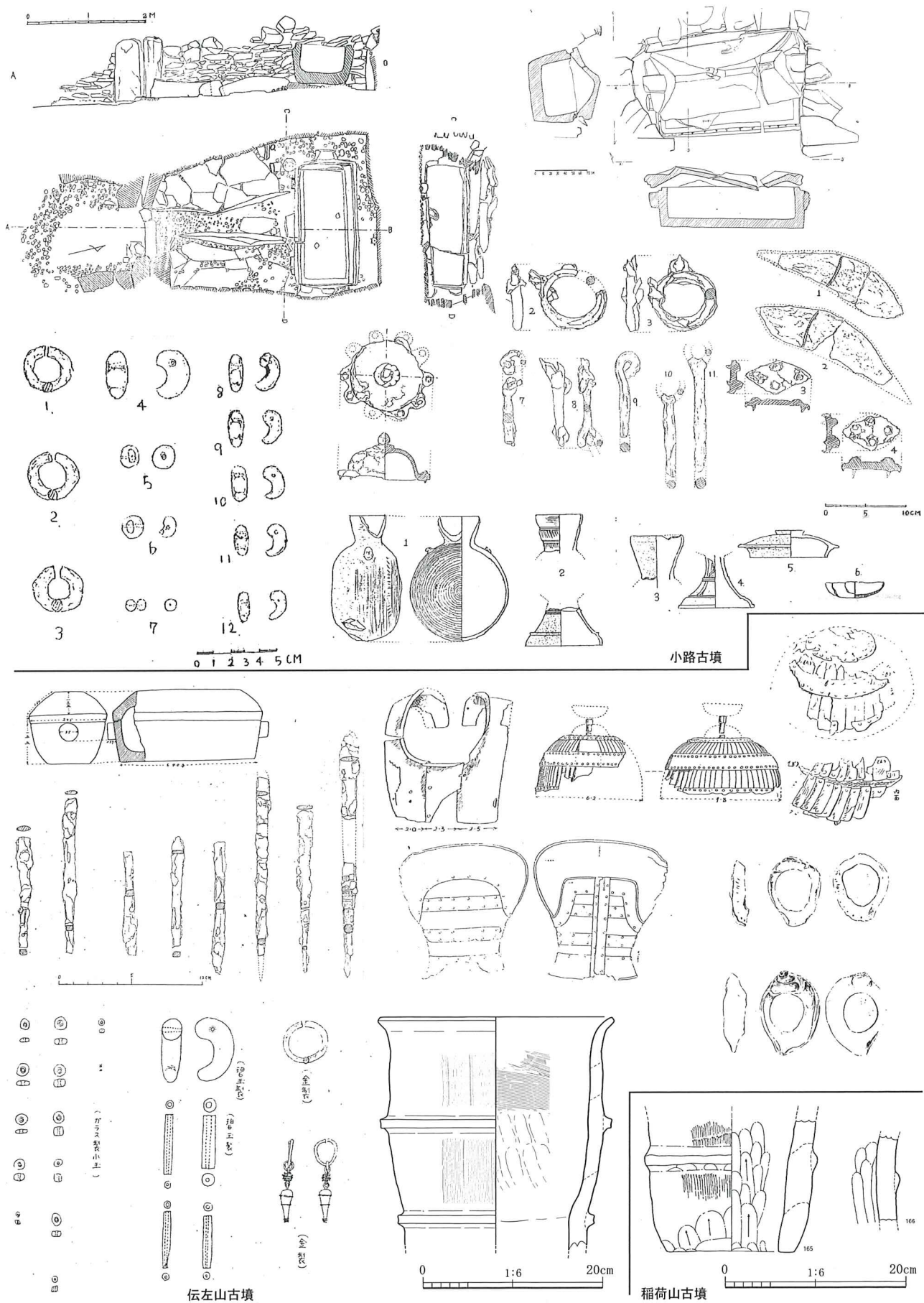
(1) 花園大学高橋克壽氏、熊本県教育委員会前田真由子氏の御教示による。

参考文献・挿図出典

- 荒木隆宏 2007 『吉丸前遺跡』玉名市文化財調査報告第16集 玉名市教育委員会
 梅原末治ほか 1925 「玉名郡繁根木の古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊 熊本県教育委員会
 岡本真也 2005 『前田遺跡』熊本県文化財調査報告第225集 熊本県教育委員会
 乙益重隆 1961 「熊本県斉藤山遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂
 亀田学編 2007 『城ヶ辻古墳群』熊本県文化財調査報告第240集 熊本県教育委員会
 河北毅 1985 「今泉遺跡」『肥後考古』第5号 肥後考古学会
 後藤貴美子 2005 『玉名平野条里跡』熊本県文化財調査報告第226集 熊本県教育委員会
 末永崇編 2002 『今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡』玉名市文化財調査報告第10集 玉名市教育委員会
 末永崇編 2004 『玉名市内遺跡調査報告書II』玉名市文化財調査報告第13集 玉名市教育委員会
 高木恭二 1987 「石棺を運ぶ」『東アジアの古代文化』第50号 大和書房
 高木恭二 1983 「石棺輸送論」『九州考古学』第58号 九州考古学会
 高田貫太 2003 「垂飾付耳飾りをめぐる地域間交渉」『熊本古墳研究』創刊号 熊本古墳研究会
 田添夏喜 1966 『小路古墳調査報告』玉名市教育委員会
 田添夏喜 1966 「伝左山古墳概要」『玉名高校考古学部報』第17号 熊本県立玉名高校考古学部
 田添夏喜 1967 「熊本県玉名郡大坊古墳調査報告」『熊本史学』32号 熊本史学会 1967
 田添夏喜 1992 「熊本県玉名市玉名馬出古墳調査報告」『歴史玉名』第9号 玉名歴史研究会
 田中康雄 2000 『東南大門遺跡』玉名市文化財調査報告第8集 玉名市教育委員会
 田中康雄 2006 『史跡 永安寺東古墳・永安寺西古墳保存整備事業報告書』玉名市教育委員会
 田中康雄 2008 『玉名市内遺跡IV』玉名市文化財調査報告第17集 玉名市教育委員会
 田辺哲夫 1963 「玉名市岡の箱式石棺」『玉名高校考古学部報』第2号 玉名高校考古学部
 田辺哲夫 1980 「稲荷山古墳」『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社



第5図 馬出古墳



第6図 小路古墳・伝左山古墳・稻荷山古墳

第 III 章 調査の方法

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

第 Ⅲ 章 調 査 の 方 法

第 1 節 遺跡の概要

1. 両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡の概要

両迫間日渡遺跡は菊池川右岸、玉名平野中央部に位置する。その範囲は玉名市両迫間字日渡のほか、玉名字御琴、龍王田、上徳、阿弥陀田にまたがる東西 330m、南北 600m の約 20 万 m² が推定されている。熊本県遺跡地図には弥生時代および古墳時代の包蔵地として登載され、全域が古代の生産遺跡である玉名平野条里跡と重複している。玉名平野条里跡は N25° E の土地割を持つ条里地割が想定され（熊本県教育委員会編 1977）、これまで市道建設に伴い玉名市教育委員会が 10 地点で確認調査を実施しているほか（竹田編 2002、兵谷編 2006、田中編 2008）、熊本県教育委員会が国道建設および県道建設に先立ち発掘調査を実施している。

両迫間日渡遺跡のほぼ中央を南北に縦走する県道玉名山鹿線では整備事業に伴う熊本県教育委員会文化課による発掘調査が順次行われており、平成 17 年度には県内最古となる弥生時代後期の水田跡が発見されたほか、平成 18 年度では玉名平野条里跡で古墳時代中期の木樋（導水管）が発見されている（熊本県教育委員会文化課編 2006）。また平成 19 年度には九州新幹線建設に伴う玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査で弥生時代後期～古墳時代の住居址、1 頭分の馬骨や天草式製塩土器が検出された（熊本県教育委員会文化課編 2008）。

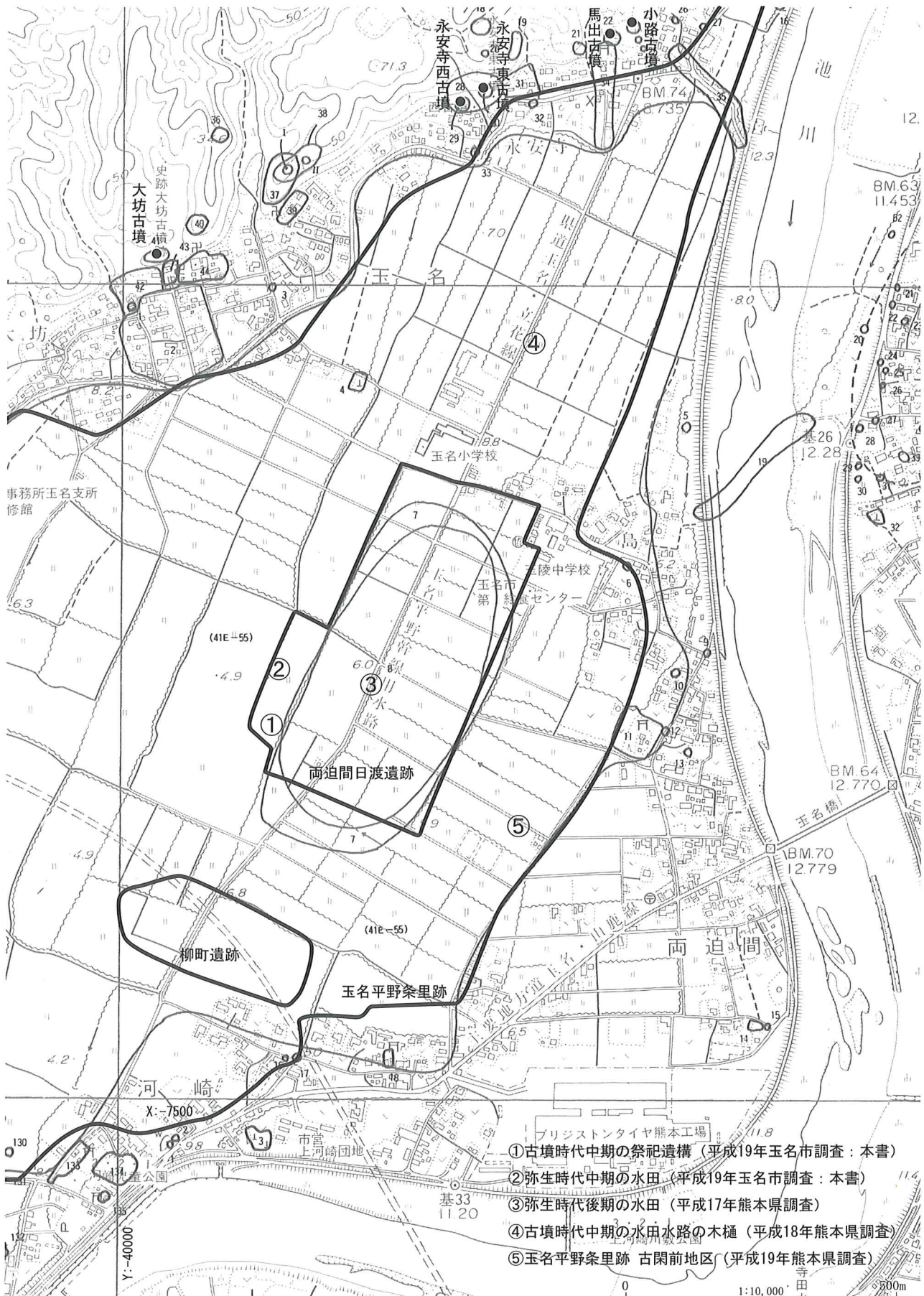
両迫間日渡遺跡の南 500m には柳町遺跡があり、国道 208 号玉名バイパス建設に先立ち平成 6 年から平成 11 年にかけて熊本県教育委員会および玉名市教育委員会により発掘調査が実施され、日本最古級の文字を記した木製短甲や農具等、多量の木製品をはじめとする多量の弥生時代～古墳時代および古代の遺物・遺構が検出され注目された（高谷 2001、坂田 2004）。

以上のように、本遺跡及び周辺遺跡における既往の調査では重要な発見が相次いでおり、両迫間日渡遺跡・玉名平野条里跡は現在の水田景観と同じく、古くは弥生時代から連綿と水田が営まれ、自然流路が無数に走る中の微高地上に集落が存在していたことが判明している。

第 2 節 確認調査の成果

1. 調査の経緯及び方法

調査対象は、新玉名駅建設予定地周辺の 30,699 m² である。現地での調査は、平成 17 年 11 月 21 日から平成 18 年 12 月 6 日までの期間で実施した。敷地内に 58 ヶ所トレンチを設定し、重機及び人力で掘削して埋蔵文化財の状況を確認した（第 3 表）。対象範囲の北西のトレンチを 1 トレンチとし、掘削順に番号を付して順次南東側にかけて調査を進めていった。今回の調査で検出を想定している主な遺構は、条里に伴う畦畔及び杭列などであったため、可能な限り長く掘削するようにし、現在の道路や水路も連続して掘削した。トレンチが長大になりすぎると、観察する間に他の部分の壁面が崩壊するため、土質や湧水などの状況により適宜部分的に埋め戻しながら調査を行った。調査区の最も北側の市道大坊迫間線では、平成 11 年度にも確認調査を行っているが、今回はその状況をみながら 52～56 トレンチを掘削した。



第7図 両迫間日渡遺跡と玉名平野の遺跡

今回の調査区に所在する、両迫間渡遺跡と玉名平野条里跡については、遺跡の範囲が重複しているが、中央水路の西側は両迫間日渡遺跡の範囲に含まれていなかったため、確認調査と平行して遺跡の範囲変更の協議を行い、西側水路まで範囲を拡大した。(平成18年6月28日付教文第879号で熊本県教育長から通知) これらに伴い、平成17年度は、遺物取り上げラベルの記載は玉名平野条里跡 (THJ)、変更後は両迫間日渡遺跡 (RHW) にしている。

調査期間の経緯及び確認した層位は以下のとおりである。

平成17年11月～12月	1T～25T (13-1T, 13-2T 除く), 26T の中央水路以西
平成18年1月19日～2月9日	1T-①, 13-1T, 13-2T, 26T の1中央水路以東～32T
平成18年3月17日～3月27日	31T (17T 以東), 33T～40T
平成18年4月28日	19T 西側, 41T
平成18年5月30日～31日	34T (17T 以東), 35T 西側, 42T, 43T,
平成18年10月24日～27日	44T～51T
平成18年11月14日	52T～56T
平成18年12月6日	57T, 58T

- I 層 現代の耕作土など表土
- II 層 灰オリーブ、暗オリーブ色を主体とした粘性土及び砂質土。酸化鉄、二酸化マンガンを含む。おおむね調査区の北西側 (1T～6T、11T) では砂質土を主体とし、南側では粘性が強くなる傾向がみられる。トレンチによっては、粘性土と砂質土が互層状に堆積する。遺物は染付片を2T及び7Tで検出しており、近世以降の堆積で水田耕作土と思われる。
- III 層 灰色を呈する粘性土。粘性土を主体とするが、シルト質の部分もある。酸化鉄、二酸化マンガンを含み、トレンチによってブロック状に多量に含む層や、管状に含む層など混入の状況が異なる。遺物は調査範囲全体的に古代から中世の土器片を少量含む。II層とは比較的明瞭に区分される。
- IV 層 暗灰色～暗緑色を呈する粘性土で、しまりがなく強い粘性を有す。シルト質の部分もある。III層とは還元の状態に漸移的に変化する部分があれば、III層が砂質土で比較的明瞭に区分されるところもある。トレンチによっては酸化鉄、二酸化マンガンがIII層から貫入し、部分的に植物遺体を含む。III層とIV層の間には灰色砂層が入る部分もある。遺物は部分的に弥生時代の土器片を少量含む。

2. 調査の成果

調査地は、九州新幹線新玉名駅周辺の南北約260m、東西約170mの範囲である。北側が市道大坊迫間線を含み、東側が県道玉名立花線に接する。西側と中央に素掘りの水路が南北方向に流れており、西側水路は南で東側に方向を変えて中央水路と合流する。西側水路の北から160mほどの地点にコンクリート堰が設置されている。

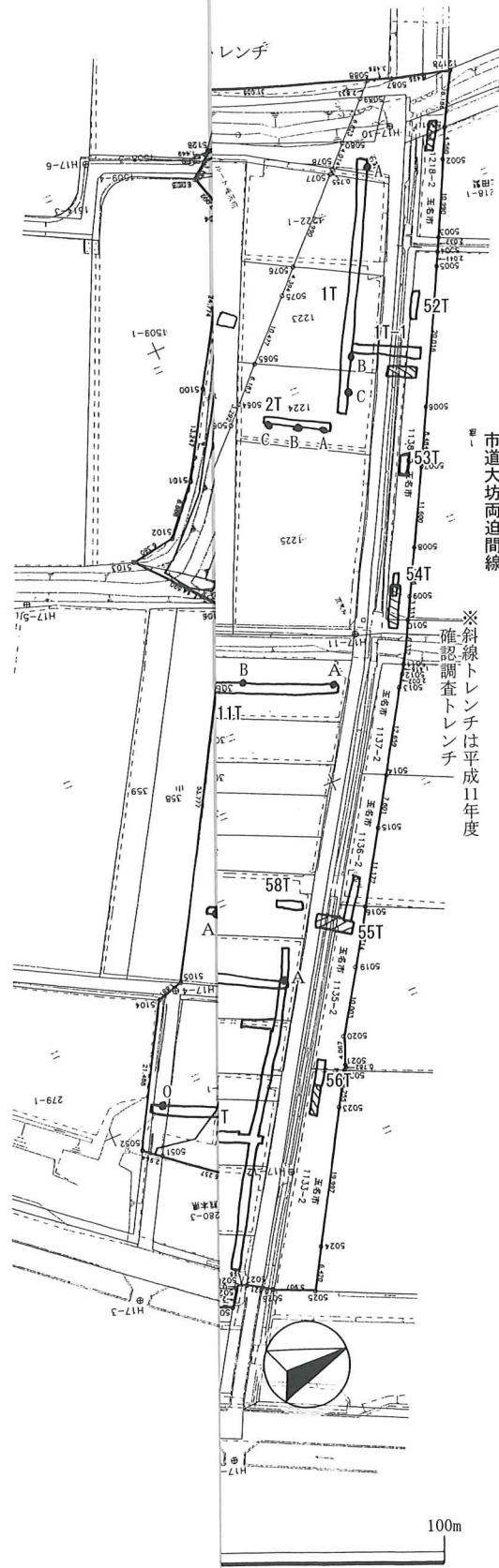
調査区内はすべて水田である。中央水路の西側は、主に東西に長い短冊形の地割で17筆分ある。東側は、主に南北に長い地割で道路と水路が交互に配置されている。東側の区画が細か

第2節 確認調査の成果

第3表 確認調査トレンチ一覧表

トレンチ No.	トレンチ面積 (㎡)	所在地(地番)	遺構	遺物	遺物量
1	69.3	1222-1 1223 1224	-	土師器	極少
2	9.8	1224	-	須恵器(古代)	極少
3	43.2	1229-1	-	須恵器	極少
4	56	1229-1	-	須恵器 瓦質土器	極少
5	120	1232	-	須恵器 青磁 近世陶磁器	極少
6	14.4	1229-1	-	土師器	極少
7	53.5	319 293-2	-	染付 土師器(中世) 須恵器 弥生土器	極少
8	6	319	-	-	-
9	26.4	317	-	土師器 瓦質土器 陶磁器	極少
10	54	315 298	-	弥生土器 土師器(古墳時代)	少
11	31.92	306	-	青磁	極少
12	55.44	339 340 342 344 3454-1 345-2	-	須恵器 土師器	極少
13	45.2	325 340	杭	土師器	極少
14	60.64	302 299 298 297 296 295	-	土師器(中世)	少
15	95.1	1232-8 1232-9 1232-10	土器集中部	土師器(古墳時代)	多
16	36	321	-	土師器	極少
17	51.9	322 345-1 349-1 282-1 281-1 280-1	-	須恵器 土師器 瓦器	やや多
18	73.68	232-6	杭	青磁 弥生土器	極少
19	57.96	1232-9	土器等集中部	土師器(古墳時代) 須恵器(古代)	多
20	99.9	328 335	杭	土師器	極少
21	8.52	327	-	須恵器 土師器	極少
22	47.12	1232-9 1232-10	-	青磁 土師器	極少
23	31.4	1232-9 1232-10	-	土師器	少
24	20.16	334	杭	土師器	極少
25	7.44	1232-9	-	染付 土師器(古代)	極少
26	234.86	357 1232-10 356 281-1	-	弥生土器 土師器(古墳時代・古代・中世)	やや多
27	54	283	杭	-	-
28	37.76	356 281-1	-	磨製石斧 弥生土器 土師器(中世) 染付	やや多
29	82.74	283	杭	土師器	極少
30	46.5	350-2 350-3 349-2 349-3	杭	弥生土器	極少
31	42	342 344 345-1 345-2 346	杭	染付 土師器	極少
32	36	1232-8	-	青磁 土師器	少
33	21	347-1	-	土師器	少
34	31.5	349-2 349-3 349-1	杭	土師器	極少
35	39	351	-	瓦器 土師器	やや多
36	57.3	328 327 326 325 324 323	杭	土師器	少
37	13.92	317 318 319	-	縄文土器	極少
38	68.8	327 326 325	-	-	-
39	17.52	325 324	杭	染付、土師器	極少
40	18.3	1229-1	-	土師器	極少
41	35.2	1232-9	-	土師器	極少
42	12	357	-	-	-
43	24	350-1 283	-	土師器	極少
44	22.8	1232-7	杭	土師器(中世)	極少
45	58.8	1232-4	-	土師器(古代)	極少
46	15.12	1232-4	-	瓦器	極少
47	36	1232-1	溝状遺構	土師器(中世)	少
48	17.52	1232-1, 1232-3	溝状遺構	土師器(中世)	極少
49	30.6	1232-5, 1232-6	杭	瓦質土器	極少
50	12	1232-5, 1232-6	-	陶磁器	極少
51	12	1232-4, 1232-5	-	-	-
52	4	1138-2	-	-	-
53	3	1138-2	-	-	-
54	3	1138-2	-	-	-
55	6	1136-2, 1135-2	-	弥生土器	極少
56	4	1135-2, 1133-2	-	-	-
57	60	298, 294, 295, 296, 297, 293-2	-	土師器	極少
58	4	299	-	-	-
	2336.22	(トレンチ面積合計)			

* 遺物量 極少(土器細片数点)~多(コンテナ1箱)



いのは、苗床として利用されていたということである。以下、トレンチごとに状況を記す。

(1) 各トレンチの概要

第1トレンチ (第9図、図版12)

調査区の北西側、新幹線路線より北側の1222-1、1223、1224番地に設定したトレンチで、東西約36mを掘削した。全体的にIV2層まで掘削し、2ヶ所で部分的にIV3層下位まで掘削して状況を確認した。II層は1から4層まで区分され、褐色の砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。III層は、1から4層まで区分され、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。トレンチ西側の土手部分の下位に特に集中する。IV層は、1から3層まで区分され、下位ほど粘性が強くなる。遺物は土師器細片1点と、木片1点が出土した。

また、1トレンチから北側にかけて、市道を横断するよう南北方向に掘削したトレンチをIT-1とした。市道の下位からは特に遺構は検出されず、層位は1トレンチと概ね同様であり、遺物は検出されなかった。

第2トレンチ (第9図、図版12)

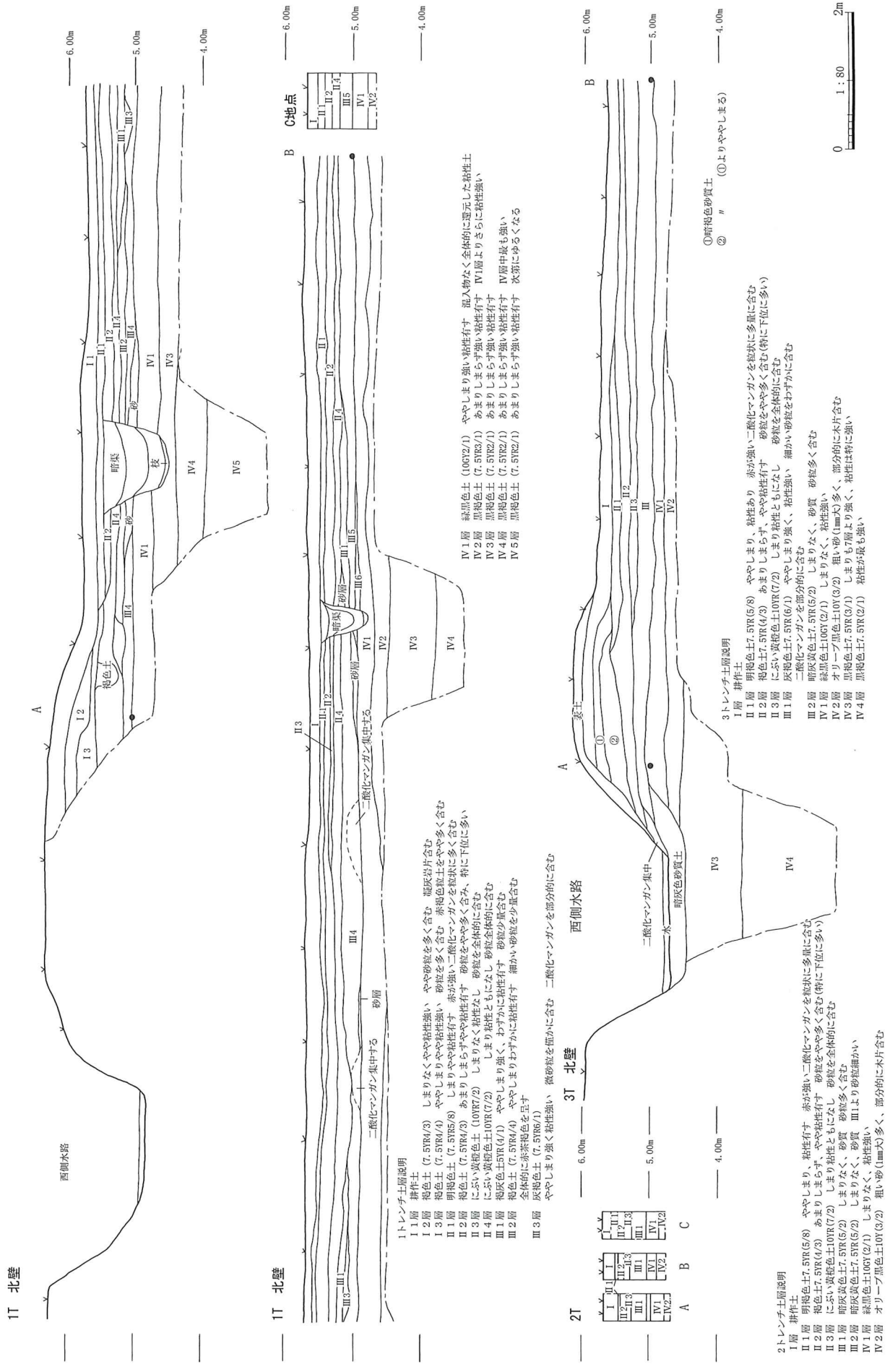
調査区の北西側、新幹線路線より北側の1224番地に設定したトレンチで、南北約10mを掘削した。全体的にIV2層まで掘削し、南北と中央の部分を柱状図として層位を記録した。II層は1から4層まで区分され、褐色の砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。III層は1から2層まで区分され、下位に酸化鉄、二酸化マンガンを帯状に含む。II、III層共に粗い砂を主体とする砂質土である。IV1層は還元した強粘性土である。遺構は特に検出されず、遺物は暗渠内から古代の須恵器坏蓋片が1点出土した。

第3トレンチ (第9・10図、図版12)

調査区の北西側、新幹線路線より南側の1229-1番地に設定したトレンチで、最も東側の水路から東西方向に約29mを掘削した。全体的にIV2層まで掘削し、水路部分と東側のみ部分的に深掘りしてIV4層下位まで確認した。II層は1から3層まで区分され、褐色の砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。III層は酸化鉄と二酸化マンガンを全体的に均等に含む砂混じりの粘性土で、トレンチの東側にかけての二酸化マンガンをやや多く含む層をIII2としている。IV1層は還元した強粘性土である。水路の下位を含め、遺構は特に検出されなかった。遺物はIII1層上位から須恵器片1点が出土した。

第4トレンチ (第10図)

調査区の北西側、新幹線路線より南側の1229-1、1232番地に設定したトレンチで、南北約29mを掘削した。全体的にIV1層までを確認した。II層は1から3層まで区分され、褐色の砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。部分的に酸化鉄の集中する部分がみられる。III層は1から3層まで区分され、III1層は砂質土であるが、III2・III3層は砂をあまり含まず粘性土主体である。IV1層は還元した強粘性土である。III1層上位で、酸化した褐色の粗い砂がポケット状に堆積している部分がある。遺構は特に検出されず、遺物は、II・III層から土師器と瓦質土器の細片数点が出土した。



第9図 確認調査トレンチ土層断面図(1)

第5トレンチ（第10・11図、図版12）

調査区の北西側、新幹線路線南側の1232、331番地に設定したトレンチで、東西約80mを掘削した。東側と西側で水路を横断している。Ⅱ層は1から7層に区分した。全体的に褐色を呈し砂質土である。Ⅲ層は1から3層に区分した。全体的に灰色粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ層は緑黒色を呈する強粘性土である。トレンチ東端から約22mの地点で、Ⅳ層が盛り上がるように畦状を呈する部分がみられた。遺物は須恵器片が1点出土した。

第6トレンチ（第12図、図版12・13）

調査区の北西側、新幹線路線南側の1229-1番地に東西約10mを掘削した。トレンチの中央ほどに5トレンチで検出した畦状部分と同様の部分を検出した。若干様相が異なるが、5トレンチと6トレンチの畦状部分は南北に延びると思われる。その他特に遺構は検出されず、遺物は須恵器片が1点出土した。

第7トレンチ（第13図、図版13）

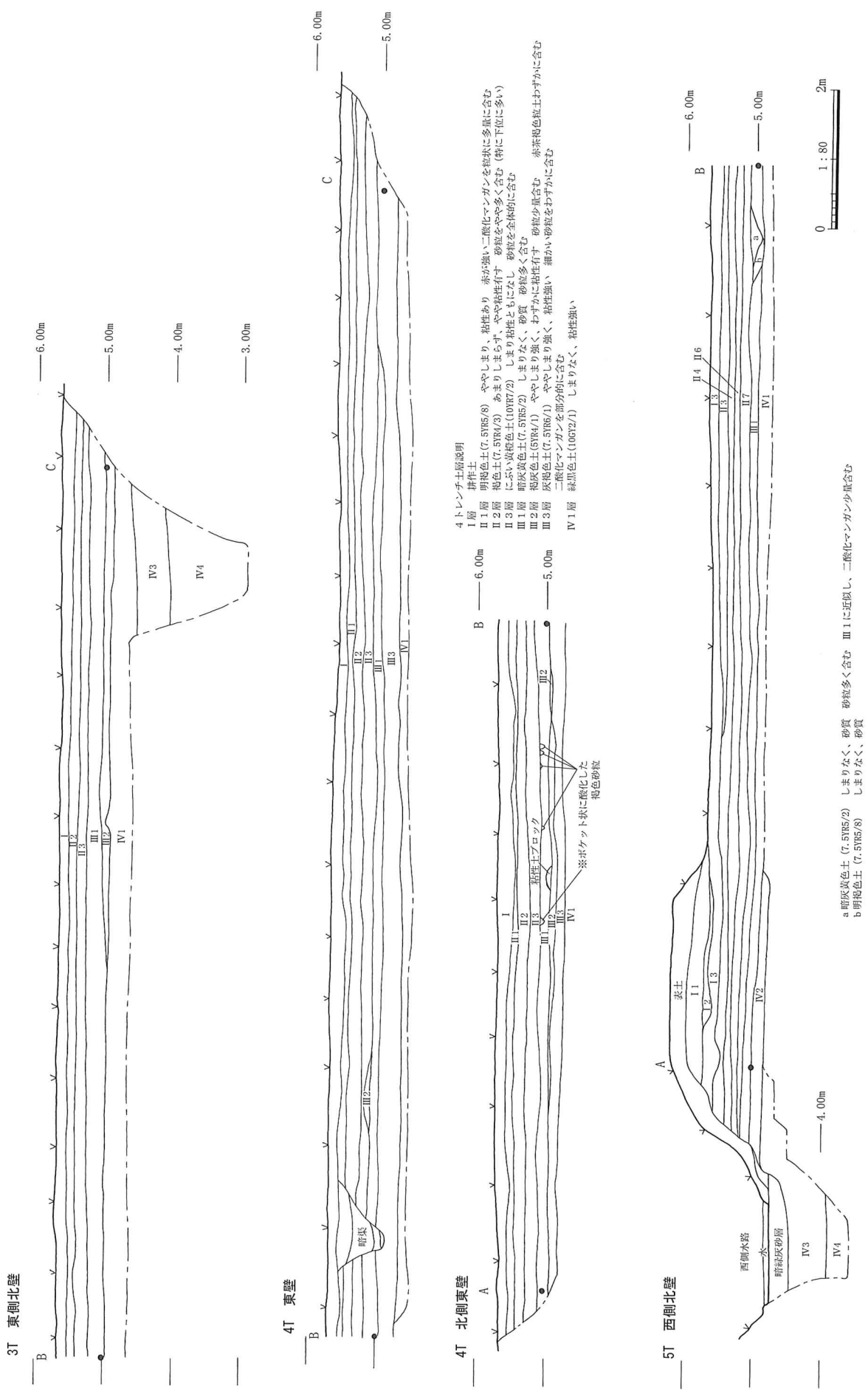
調査区の北東側、新幹線路線より北側の293-1、293-2、319番地に設定したトレンチで、南北約50mを掘削した。全体的にⅣ2層まで掘削して状況を確認した。Ⅱ層は1から3層まで区分され、砂質土を主体とした灰オリーブ色を呈する層である。Ⅲ層は1層から5層まで区分され、灰色を呈する粘性土を主体とする。Ⅲ1層のみ灰色粘性土で酸化鉄をあまり含まず明瞭に区分されるが、Ⅲ2層以下は全体的に酸化鉄、二酸化マンガンを多く含み、漸移的に変化する。Ⅲ4、Ⅲ5層は砂質土を主体とし、Ⅲ5層は砂の粒子が細かくシルト質である。Ⅳ1とⅣ2層は還元したオリーブ黒を呈する強粘性土である。Ⅳ1層には酸化鉄を少量含む。遺構は特に検出されず、遺物はⅡ層から染付片1点、Ⅱ、Ⅲ層にかけて土師器、瓦器細片数点、Ⅳ1層から弥生時代とみられる土器1点出土した。

第8トレンチ

調査区の北東側、新幹線路線より北側の319番地に設定したトレンチで、新幹線路線と並行に東西約6mを掘削した。全体的にⅣ層まで掘削しているが、土層観察中に西側の壁面が崩落したため、東側の一部を柱状図として層位を記録した。Ⅱ層は1から4層まで区分され、砂質土を主体とした灰オリーブ色を呈する層である。Ⅲ層は1層から3層まで区分され、灰色を呈する粘性土及び砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ1層は還元したオリーブ黒を呈する強粘性土である。全体的な層位は7トレンチと同様である。遺構、遺物共に検出されなかった。

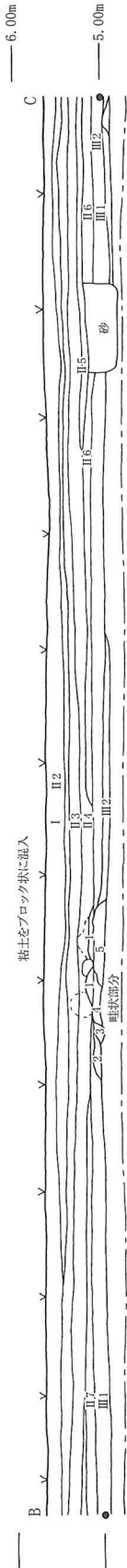
第9トレンチ（第14図、図版13）

調査区の北東側、新幹線路線より北側の317番地に設定したトレンチで、南北約50mを掘削した。Ⅱ層は1から3層まで区分され、砂質土を主体とした灰オリーブ色を呈する層である。Ⅱ3層のみ砂粒が粗い。Ⅲ層は1層から4層まで区分され、灰色を呈する粘性土及び砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ1層は還元した暗灰色を呈する強粘性土である。遺物は播鉢、土師器片などが出土した。



第10図 確認調査トレンチ土層断面図(2)

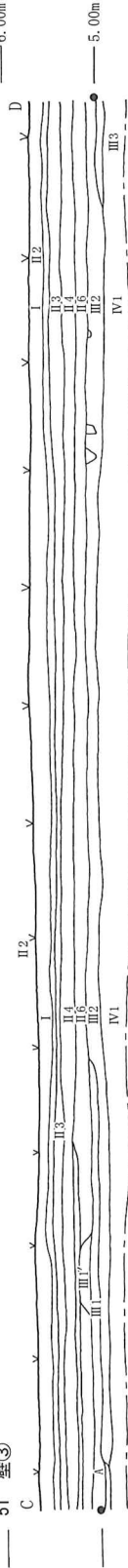
5T 北壁②



※非状部分

- 1 にぶい灰(2.5V6/4) ややしまり、粘性なし 粗い砂質土 二酸化マンガンを粒状に多く含む
- 2 灰(10V6/1) あまりしまらず、やや粘性有す
- 3 灰(8V5/2) あまりしまらず、やや粘性有す 二酸化マンガンを全体的にシミ状に含む
- 4 粘灰(7.50V5/1) しまり強く、粘性強い やや粗い砂粒わずかに含む 二酸化マンガンをシミ状に含む
- 5 暗青灰(108V4/1) ややしまり強く、粘性有す こまかい砂粒わずかに含む 二酸化マンガンをシミ状に含む

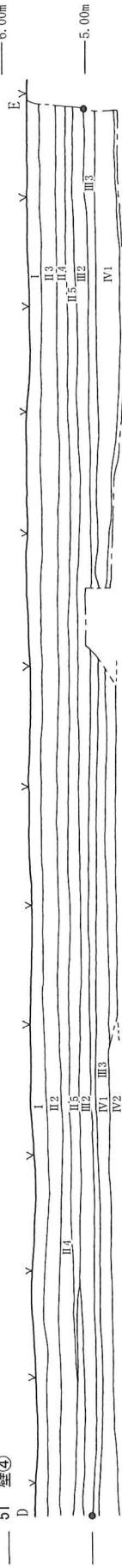
5T 壁③



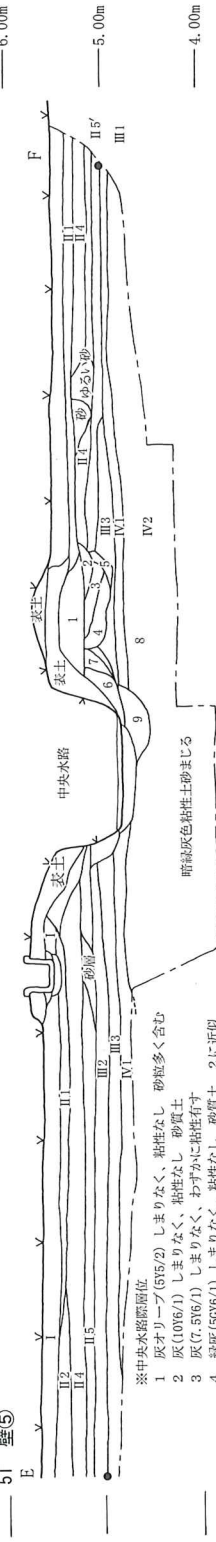
5トレンチ土層説明

- 1 1層 褐色土(7.5VR4/3) しまりなくやや粘性強い やや砂粒を多く含む
- 2 2層 褐色土(7.5VR4/4) ややしまりやや粘性強い 砂粒を多く含む 赤褐色粒土をやや多く含む
- 3 3層 耕作土
- 4 4層 明褐色土(7.5VR5/8) ややしまり、粘性あり 赤が強い二酸化マンガンを粒状に多量に含む
- 5 5層 褐色土(7.5VR4/3) あまりしまらず、やや粘性有す 砂粒をやや多く含む(例に下位に多い)
- 6 6層 褐色土(7.5VR4/3) あまりしまらず、やや粘性有す
- 7 7層 褐色土(7.5VR4/3) あまりしまらず、やや粘性有す 砂粒を全体的に含む
- 8 8層 オリーブ色土(5V4/2) しまりなく、わずかに粘性有す 砂粒を多く含む
- 9 9層 褐色土(7.5VR4/3) あまりしまらず、やや粘性有す 砂粒をやや多く含む
- 10 10層 褐色土(10V7/2) しまりなく、粘性強い
- 11 11層 ぶい灰褐色土(10V7/2) しまりなく、粘性強い

5T 壁④



5T 壁⑤

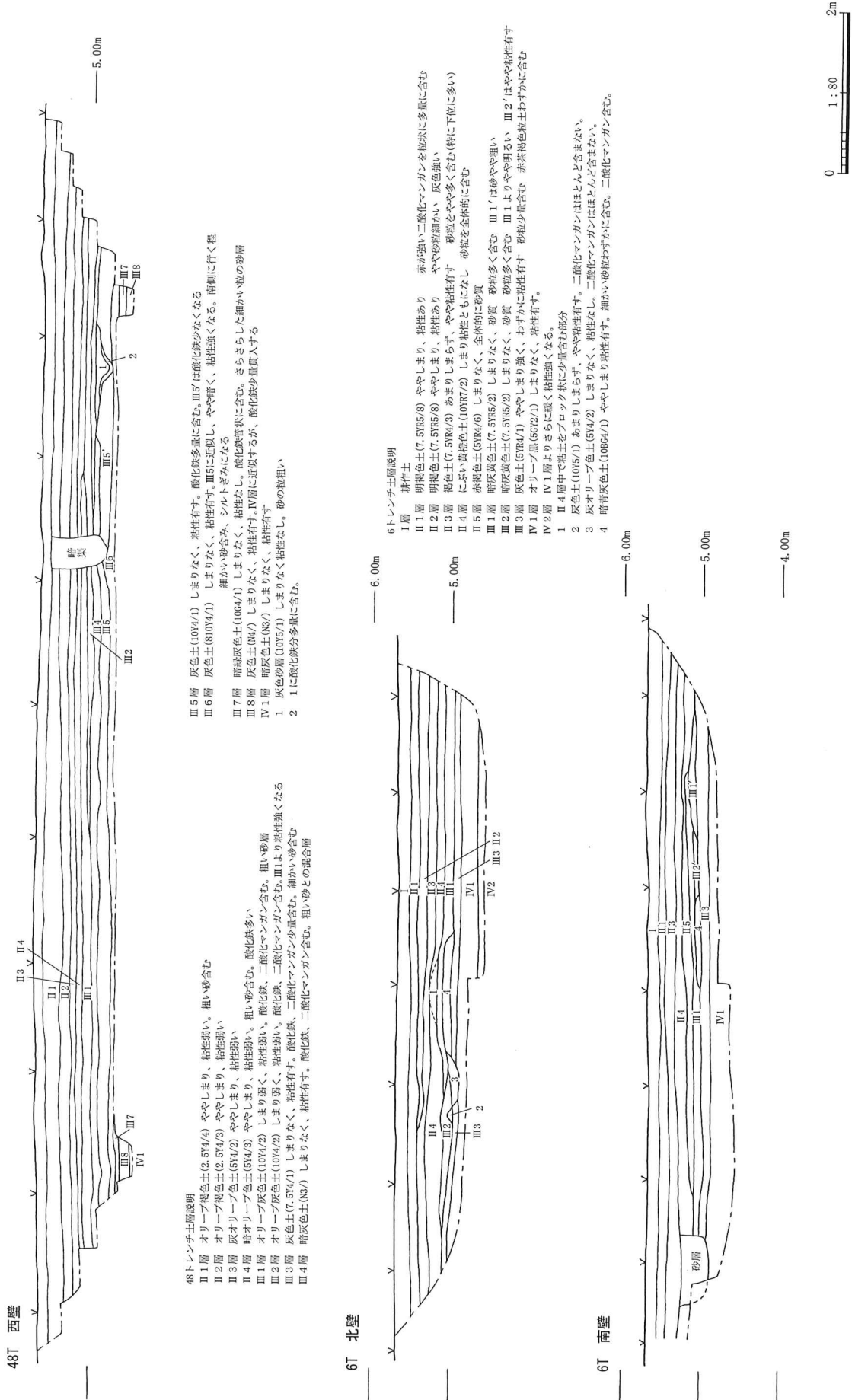


※中央水路階層位

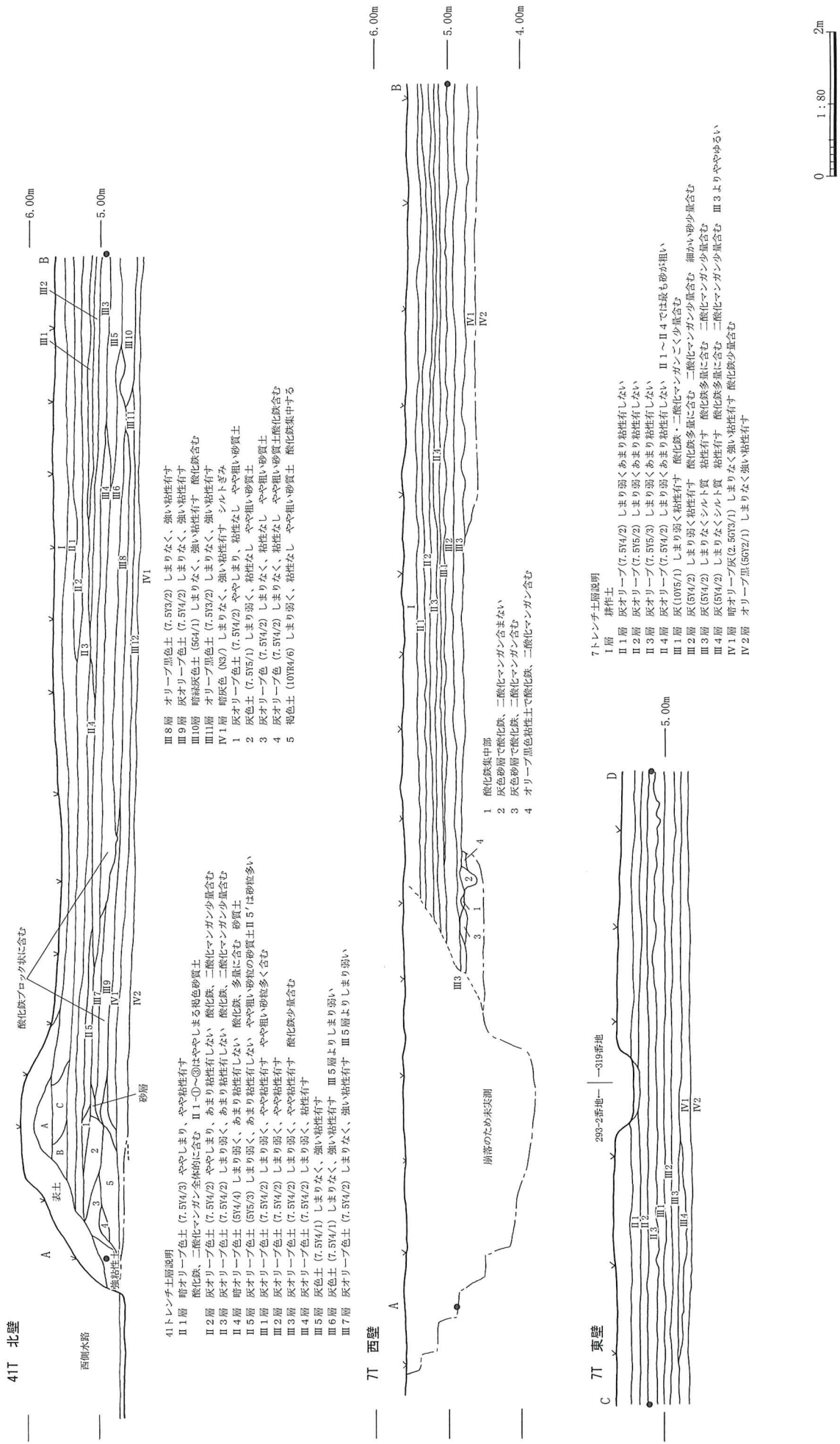
- 1 灰オリーブ(5V5/2) しまりなく、粘性なし 砂粒多く含む
- 2 灰(10V6/1) しまりなく、粘性なし 砂質土
- 3 灰(7.5V6/1) しまりなく、わずかに粘性有す
- 4 粘灰(5V6/1) しまりなく、粘性なし 砂質土 2に近似
- 5 灰(7.5V6/1) しまりなく、粘性なし 3に近似
- 6 灰(7.5V6/1) わずかにしまり、粘性強い 二酸化マンガン含む
- 7 オリーブ灰(2.50V5/1) ややしまり、粘性有す 砂粒わずかに含む
- 8 灰オリーブ(5V5/2) ややしまり、粘性有す
- 9 オリーブ灰(10V4/2) やや青みがかる粘性土 砂含む

第11図 確認調査トレンチ土層断面図(3)





第12図 確認調査トレンチ土層断面図(4)



第13図 確認調査トレンチ土層断面図(5)

第10 トレンチ（第14図、図版13）

調査区の北東側、新幹線路線より北側の298、315番地に設定したトレンチで、南北約36mを掘削した。途中で小規模な水路を横断し、第14トレンチと交差する。Ⅱ層は1から3層まで区分され、砂質土を主体とした灰オリーブ色を呈する層である。Ⅲ層は1から5層まで区分され、灰色又はオリーブ黒色を呈する粘性土及び砂質土を主体とし、Ⅲ3層以下に酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅲ1、Ⅲ2層は灰色を呈するが、Ⅲ1層は砂質土、Ⅲ2層は粘性土で明瞭に区分される。Ⅳ1、Ⅳ2層はオリーブ黒色を呈する強粘性土であり、Ⅳ2層がさらに締まりなくゆるい。ⅡとⅢ層の間に灰色の粗い砂を含む部分がある。Ⅳ層から弥生土器片と、杭状の木片が出土した。

第11 トレンチ（第14図、図版13）

調査区の北側、新幹線路線より北側の306番地に設定したトレンチで、中央を南北に流れる水路と平行して南北約27mを掘削した。全体的にⅣ3層上面まで掘削し、北側6mほどはⅣ4層上面まで掘削している。Ⅱ層は1から3層まで区分され、オリーブ色がかかる褐色の砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。Ⅱ3層のみ明るい灰色を呈す粗砂層で、Ⅱ層の中では明瞭に区分され、下位に酸化鉄を帯状に含む。Ⅲ層は1、2層に区分される。Ⅲ1は灰色を呈す粘性土で、Ⅲ2は酸化鉄、二酸化マンガンの帯状に集中する部分である。トレンチの南側から3mほどは酸化鉄と二酸化マンガンの集中はみられず、Ⅲ2として掘削している。Ⅳ層は1から4層まで区分され、還元したやや緑がかる黒色強粘性土を主体とする。トレンチの北側から6mほどの地点で、Ⅳ層が畦状に膨れ上がっているような部分がみられる。遺構は特に検出されず、遺物は瓦質土器、土師器、須恵器の破片をそれぞれ1点ずつ検出した。

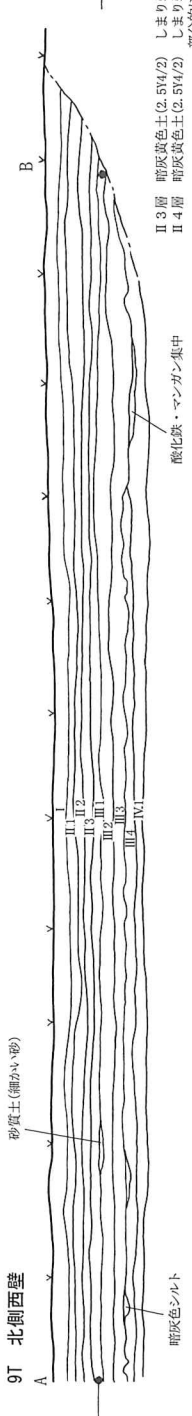
第12 トレンチ（第15図、図版13・14）

調査区中央のやや東側、339、340、342、344、345-1、345-2番地に設定したトレンチで、東西約20mを掘削した。17トレンチの北側と交差し、13-1トレンチ、13-2トレンチと接する。Ⅱ層は1から3層まで区分され、砂混じり粘性土を主体としたオリーブ褐色を呈する層である。Ⅲ層は1から6層まで区分され、粘性土を主体とした灰色を呈する層である。Ⅲ層の下位（Ⅲ5、6）は還元ぎみの灰色を呈する粗い砂質土であり、Ⅳ層とは明瞭に区分される。砂層と粘性土層が互層状に堆積している状況である。Ⅳ層は、1から2層に区分され、還元した暗灰色強粘性土である。Ⅳ2層がさらに締まりなくゆるい。トレンチ全体で杭を3本検出した。Ⅳ層まで掘り下げた段階で検出したが、1本はちょうどトレンチの壁際であったため、壁面を観察してⅡ層上面から打ち込まれているのを確認した。他の2本はどの層位からかは不明。遺物は須恵器、土師器片がごく少量出土した。

第13-1 トレンチ、13-2 トレンチ

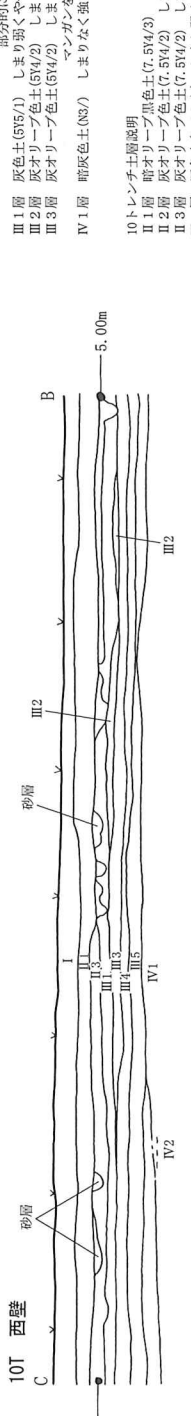
調査区中央のやや東側、12トレンチで検出した杭の状況を確認するため掘削したトレンチで、12トレンチと接して北側に掘削したトレンチを13-1T、南側に掘削したトレンチを13-2Tとした。層位はおおむね12トレンチと同様で、13-1Tでは杭は検出されず、13-2Tで北東から南西方向に並ぶとみられる杭を検出した。後述する20Tと24Tで検出した杭と併せ直線的に並

9T 北側西壁



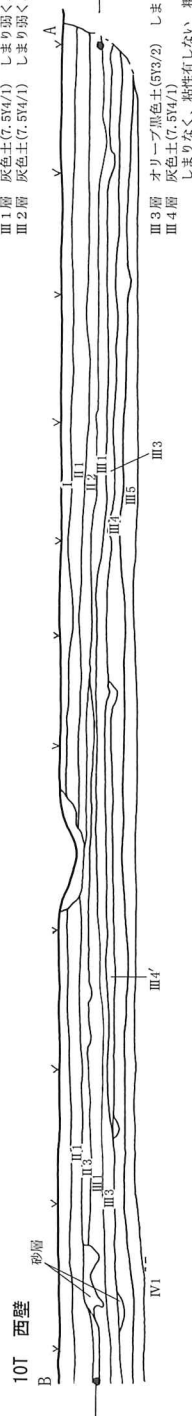
- 9トレンチ土層説明
 I層 耕作土
 II層 暗灰黄色土(2.5V4/2) しまり弱く、あまり粘性有しない
 III層 酸化鉄、二酸化マンガ含有
 IV層 黒褐色土(2.5V4/2) しまり弱く、粘性なし、粗い砂含む

10T 西壁



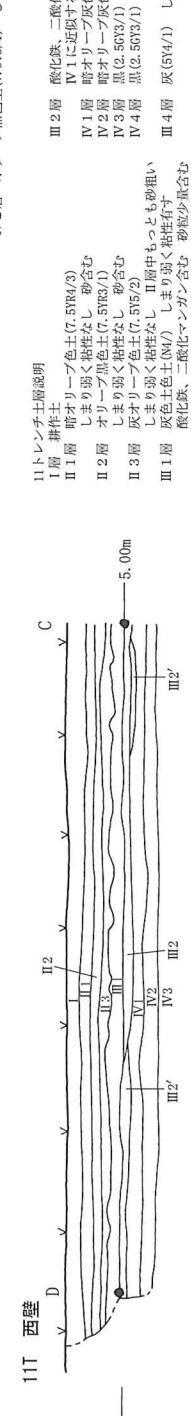
- 10トレンチ土層説明
 II 5層 暗灰黄色土(2.5V4/2) しまり弱く、粘性なし、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 II 4層 暗灰黄色土(2.5V4/2) しまり弱く、粘性なし、II層中最も砂粒が粗い
 III 1層 灰色土(5V5/1) しまり弱く、粘性有しない、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 III 2層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、粘性有しない、細かい砂、酸化鉄を管状に含む
 III 3層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、粘性有しない、細かい砂含む、酸化鉄を管状に含む
 III 4層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、粘性有しない、細かい砂含む、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 III 5層 暗灰色土(N3/) しまり弱く、粘性有しない、酸化鉄少量含む

10T 西壁



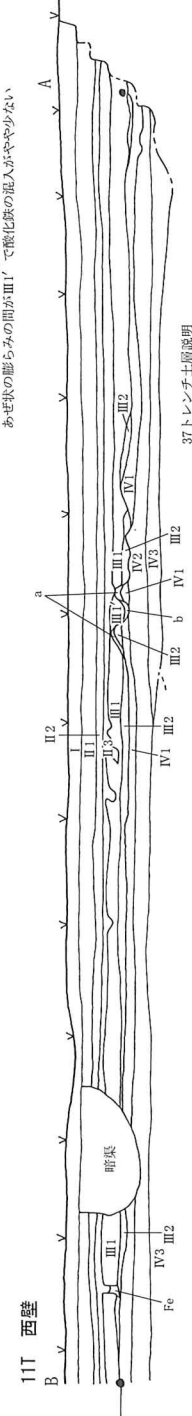
- III 3層 オリーブ黒色土(5V3/2) しまり弱く、粘性有す 酸化鉄、多量に含む
 III 4層 灰色土(7.5V4/1) しまり弱く、粘性有しない、粗い砂、酸化鉄、二酸化マンガ含有、III 4は粘性土
 III 5層 灰色土(5V4/1) しまり弱く、あまり粘性有しない、シルト質、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 IV 1層 灰色土(5V4/1) しまり弱く、強い粘性有す、酸化鉄を含む
 IV 2層 オリーブ黒色土(7.5V3/1) しまり弱く、強い粘性有す、木片含む、やや粘性ゆるくなる

11T 西壁



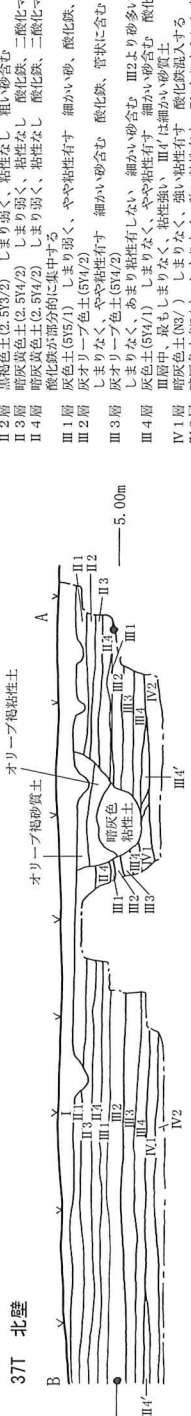
- 11トレンチ土層説明
 II 1層 暗オリーブ色土(7.5V4/3) しまり弱く、粘性有しない、砂含む
 II 2層 暗オリーブ色土(7.5V3/1) しまり弱く、粘性有しない、砂含む
 II 3層 灰オリーブ色土(7.5V3/1) しまり弱く、粘性有しない、砂含む
 II 4層 暗オリーブ色土(7.5V2/2) しまり弱く、粘性有しない、砂含む
 III 1層 灰色土(N4/) しまり弱く、粘性有す、II層中もとも砂粗い
 酸化鉄、二酸化マンガ含有、砂粒少量含む
 あせ状の膨らみのみがIII 1'で酸化鉄の混入がやや少ない

11T 西壁



- III 2層 酸化鉄、二酸化マンガ含有、III 2'は酸化鉄、二酸化マンガ含有、III 2'は粘性土
 IV 1層 暗オリーブ灰色土(2.5V3/1) しまり弱く、粘性有す 酸化鉄少量含む
 IV 2層 暗オリーブ灰色土(2.5V3/1) しまり弱く、粘性有す 酸化鉄少量含む
 IV 3層 黒(2.5V3/1) しまり弱く、粘性有す 酸化鉄少量含む
 IV 4層 黒(2.5V3/1) しまり弱く、粘性有す 酸化鉄少量含む
 III 4層 灰(5V4/1) しまり弱く、粘性有す 細かい砂、酸化鉄、二酸化マンガ含有

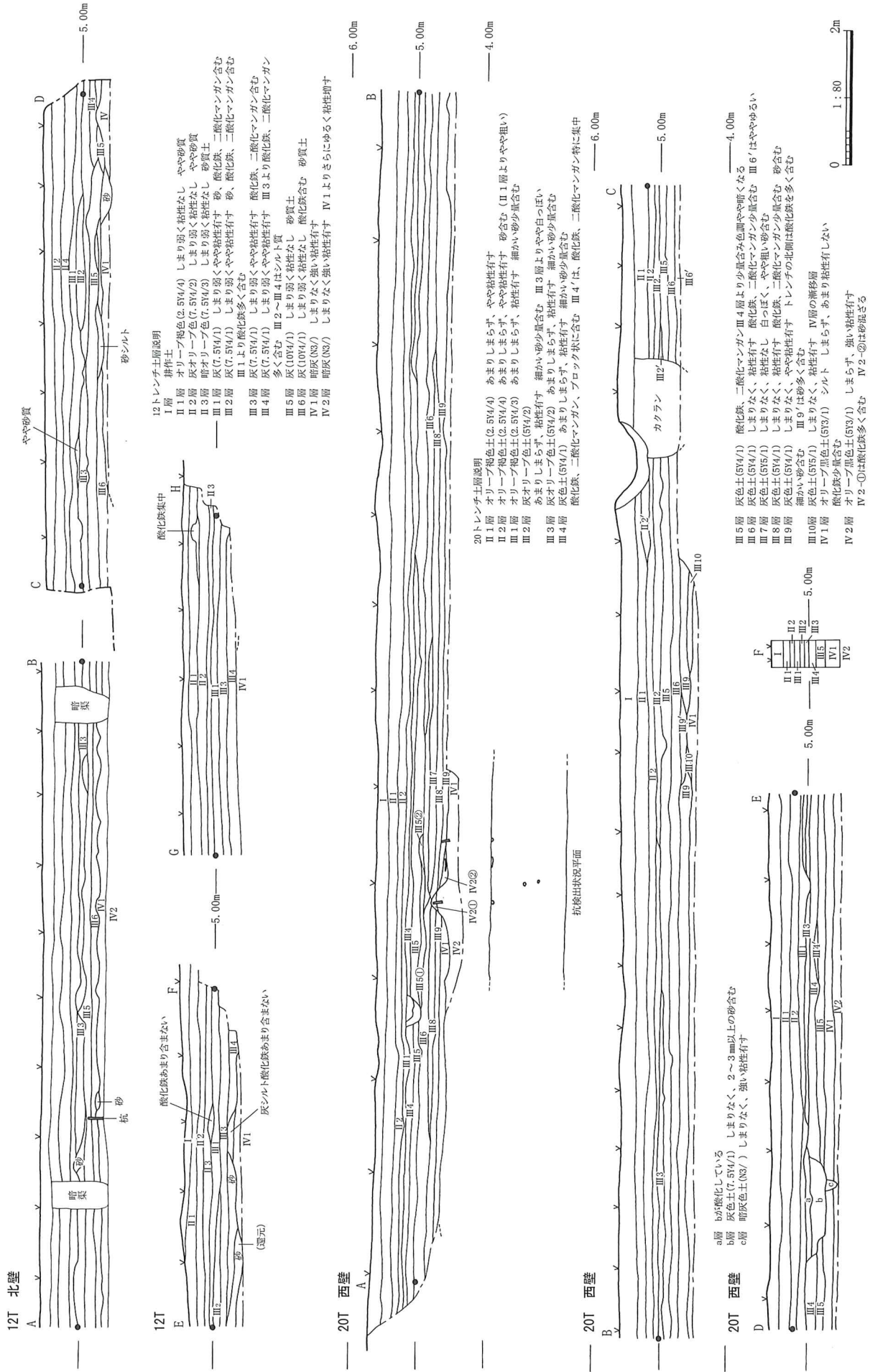
37T 北壁



- 37トレンチ土層説明
 I層 耕作土
 II 1層 暗灰黄色土(2.5V4/2) しまり弱く、粘性あまりない、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 II 2層 黒褐色土(2.5V3/2) しまり弱く、粘性なし、粗い砂含む
 II 3層 暗灰黄色土(2.5V4/2) しまり弱く、粘性なし、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 II 4層 暗灰黄色土(2.5V4/2) しまり弱く、粘性なし、酸化鉄、二酸化マンガ含有、砂粒が最も粗い
 III 1層 灰色土(5V5/1) しまり弱く、粘性有す、細かい砂、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 III 2層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、やや粘性有す、細かい砂含む
 III 3層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、あまり粘性有す、細かい砂含む、III 2より砂多
 III 4層 灰色土(5V4/1) しまり弱く、粘性有す、細かい砂含む、酸化鉄、管状に含む
 III 5層 黒(2.5V3/1) しまり弱く、粘性有す、細かい砂含む、酸化鉄、二酸化マンガ含有
 III 6層 暗灰色土(N3/) しまり弱く、粘性有す、細かい砂含む、酸化鉄、管状に含む
 IV 1層 暗灰色土(N3/) しまり弱く、粘性有す、酸化鉄混入する
 IV 2層 暗灰色土(N3/) しまり弱く、粘性有す、IVよりさらにしまらず粘性強い

第14図 確認調査トレンチ土層断面図(6)





第15図 確認調査トレンチ土層断面図(7)

ぶ杭列の可能性が高い。遺物は土師器片がごく少量出土した。

第 14 トレンチ

調査区北東側、新幹線路線の北側に設定したトレンチで、295～299、302番地で東西約44mを掘削した。中央で10トレンチと交差し、東側半分の土層図を作成した。Ⅱ層は1から6層に区分され、砂質ぎみの褐灰色を呈する層である。下位のⅢ層と接する部分が砂粒粗く、酸化鉄が集中する。Ⅲ層は1から6層まで区分され、Ⅲ1が灰色を呈する粘性土であり、Ⅲ2層以下は灰オリーブを呈する砂質土及び粘性土が互層状に堆積する。酸化鉄、二酸化マンガンもⅢ2層以下に多く含む。Ⅳ1はオリーブ黒を呈する強粘性土である。遺構は特に検出されず、遺物は土師器片が少量出土した。

第 15 トレンチ (第 16 図、図版 14)

調査区の南西側、1232-8、1232-9、1232-10番地に設定したトレンチで、南北約64mを掘削した。中央で19トレンチと、南側で26トレンチと交差する。Ⅱ層は1から3層に区分した。全体的に褐色を呈し砂粒を含む層で、粘性は弱い。Ⅲ層は1から3層に区分した。全体的に灰色粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ層は緑黒色を呈する強粘性土である。トレンチの中間ほどの地点で、Ⅲ3及びⅢ4層中から古墳時代の土器片が集中して検出された。トレンチの断面の観察では明瞭な掘り込みは検出されなかったが、遺構の可能性が高い。この部分を中心に東西方向にトレンチを掘削し、19トレンチとした。遺物の集中域は南北3m、東西2mほどの範囲である。全体の完掘はしていない。遺物の内容は高坏、小型丸底壺、ミニチュア土器などである。

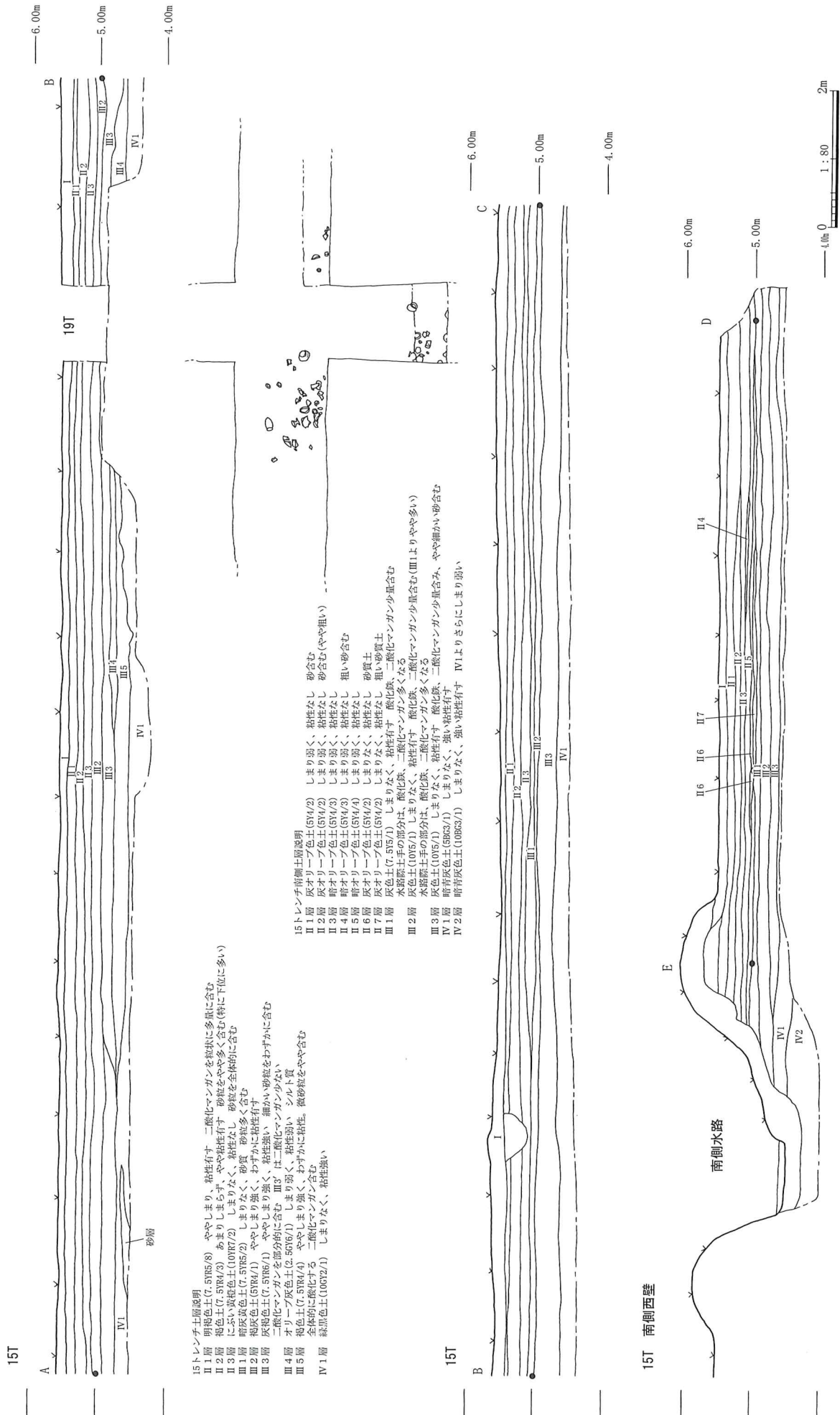
第 16 トレンチ

調査区の東側、県道立花線と平行して設定したトレンチで、321番地に南北約24mを掘削した。本来は調査区南端まで掘削する予定であったが、途中で暗渠があり、湧水が激しく壁面が崩壊して掘削が困難であったため、西側に3mほど移動して掘削し、17トレンチとした。Ⅱ層は1から3層に区分され、オリーブ褐色を呈し砂粒を含む粘性土を主体とする。Ⅲ層は1から4層に区分され、灰色を呈する粘性土を主体とする。上位の層(Ⅲ1、Ⅲ2)には酸化鉄が管状に貫入する。下位の層(Ⅲ3、Ⅲ4)は酸化鉄、二酸化マンガンが多く集中し、層全体が酸化しているような状態である。Ⅳ層は1から2層まで区分され、暗緑灰色を呈する強粘性土である。Ⅳ1までⅢ層からの酸化鉄を僅かに含む。遺構は特に検出されず、遺物は土師器片がごく少量した。

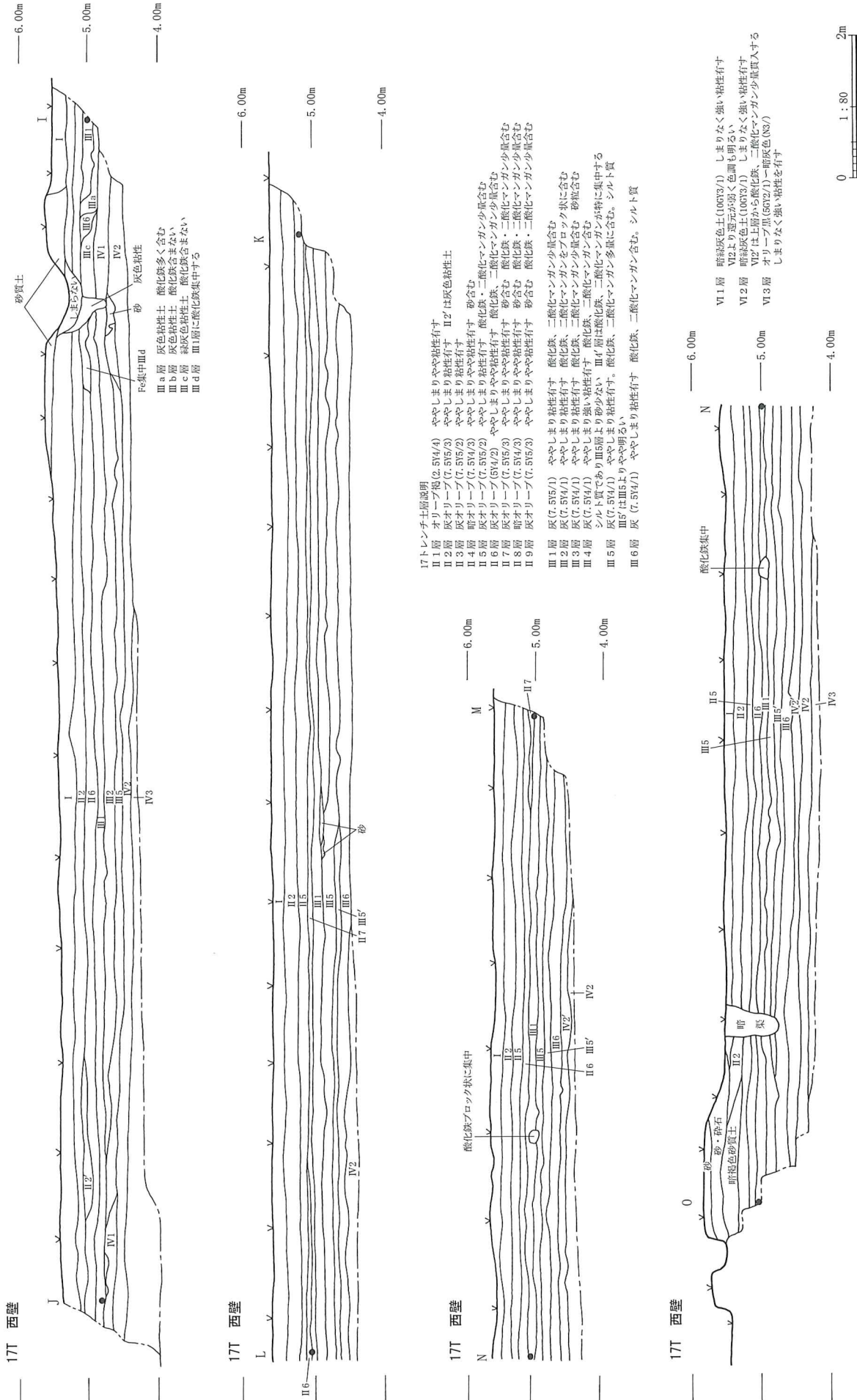
第 17 トレンチ (第 17・18 図、図版 14)

調査区の東側、県道立花線と平行して設定したトレンチで、北側から322、345-1、349-1、282-1、281-1、280-1番地の範囲で南北約140mを掘削した。

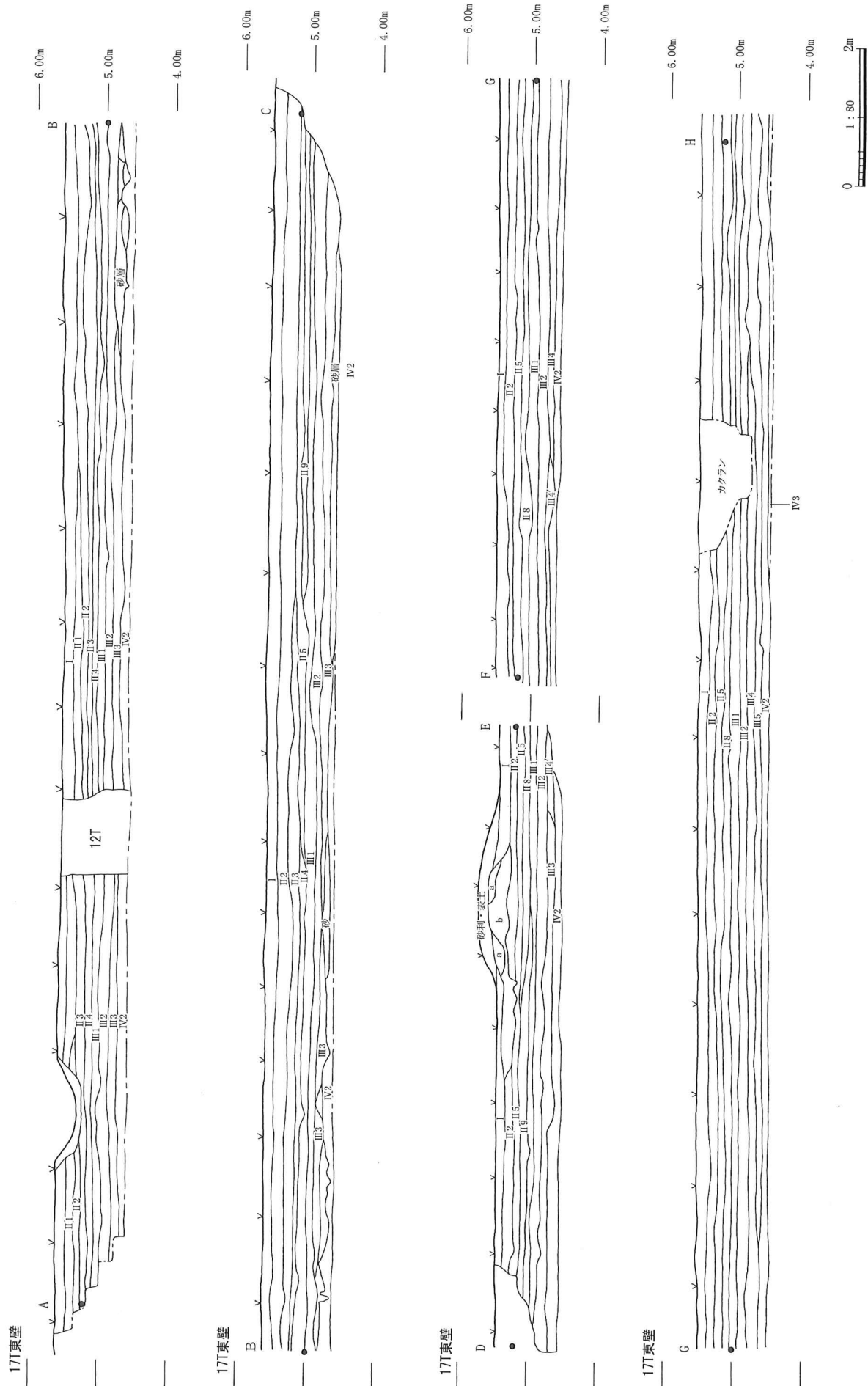
層位は全体的にⅣ層まで掘削して状況を確認した。Ⅱ層は1から9層まで区分し、今回の調査範囲では最も砂の混入が少なく粘性を有す。Ⅲ層との境も他のトレンチと比較してあまり明瞭ではない。Ⅲ層は1層から6層まで区分した。2層以下に酸化鉄と二酸化マンガンを多量



第16図 確認調査トレンチ土層断面図(8)



第17図 確認調査トレンチ土層断面図(9)



第18図 確認調査トレンチ土層断面図 (10)

に含んでおり、トレンチの349-1番地以南がより顕著である。また、281-1番地以南は酸化鉄、二酸化マンガン集中層が分離して2層みられる。部分的にそれらの混入が少ない範囲があるが、水田区画の境の可能性も考えられる。345-1番地では、Ⅲ層に灰色を呈する花崗岩が風化した粗砂層を含んでいる。トレンチ全体で現在の水路を2ヶ所、里道を2ヶ所横断して掘削しているが、水路、里道の下位からは特に遺構等は確認されなかった。遺物はトレンチ全体でビニール1袋程度の土器片が出土した。282-1番地以南の26トレンチに近い付近が遺物の出土は多い傾向がある。重機で掘削した土の中からの採集が主であったが、大部分はⅢ層からの出土とみられる。瓦質土器、土師坏、青磁、須恵器、石包丁の小片などが出土した。

第18トレンチ（第19図、図版14）

調査区の南西側に設定したトレンチで、1232-8番地に東西約61mを掘削した。西側で水路部分の下位まで掘削した。Ⅱ層は1から5層に区分される。全体的に褐色を呈し砂粒を含む層で、粘性は弱い。Ⅲ層は1から3層に区分した。全体的に灰色粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ層は緑黒色を呈する強粘性土である。トレンチの東側約20m付近で杭を検出した。刺さった状態の杭と、主に南北方向に寝た状態の杭が検出され、32トレンチで検出された杭と並ぶ可能性が高い。西側土手部分の下位では、掘り込み状の部分と、酸化鉄、二酸化マンガンの集中部分がみられた。遺物は青磁、弥生土器片が1点ずつ出土した。

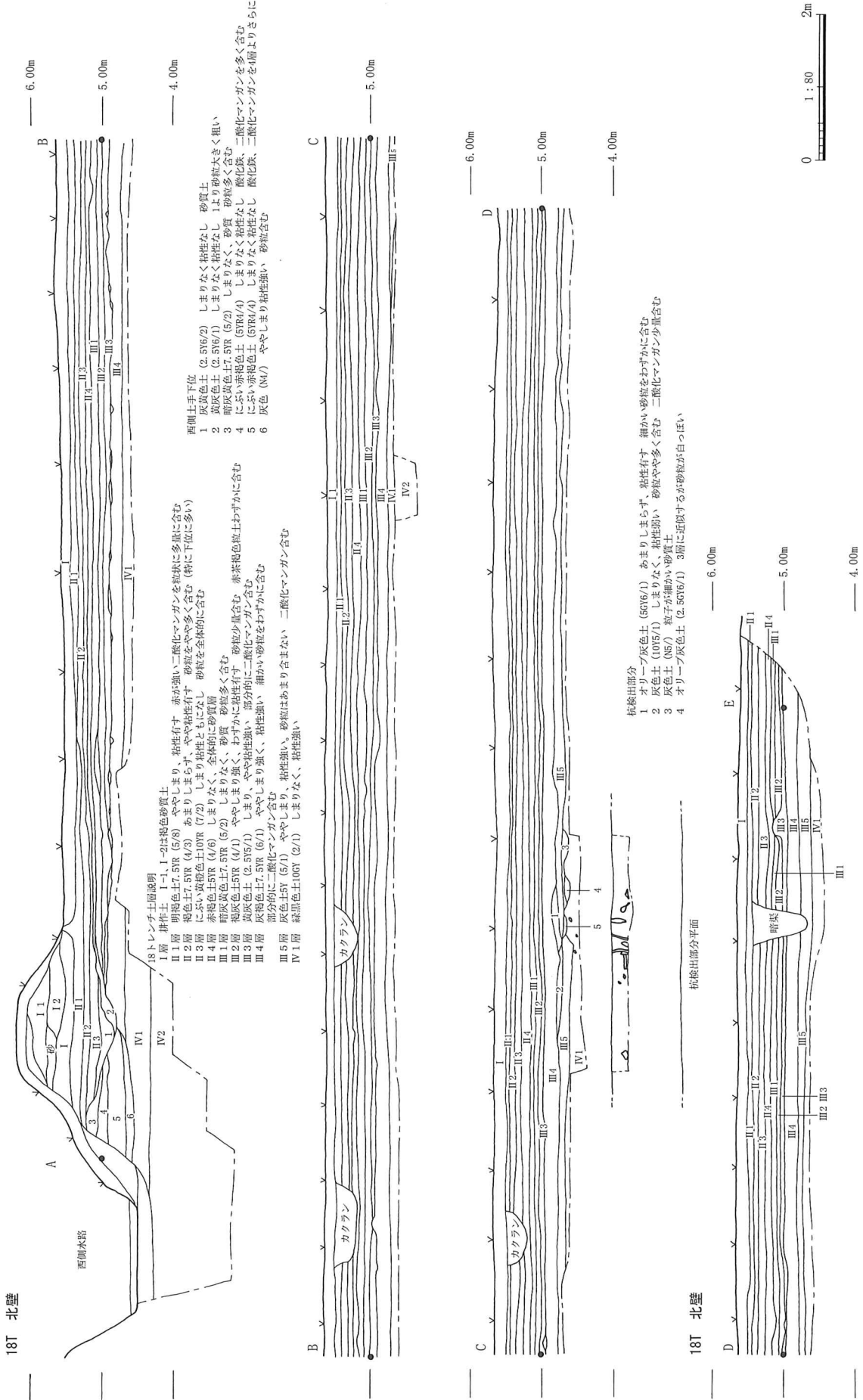
第19トレンチ（第20図）

調査区の南西側に設定したトレンチで、1232-9番地に東西約55mを掘削した。15トレンチの調査中に古墳時代の遺物集中部分を検出したため、そこから東西に交差するようトレンチを掘削した。15トレンチとの交差部分から東側で23トレンチ、西側で22トレンチと交差する。層位の状況及びトレンチ中央で検出した遺物集中部分の状況は15トレンチと概ね同様である。水路側の層位の状況は若干異なるため、別に記録した。西側の土手の下位は、酸化鉄が集中する部分（Ⅲ3-②）があり、畦状を呈す。遺物は15トレンチと同様、古墳時代の高坏、小型丸底壺、ミニチュア土器などが出土した。

第20・21トレンチ（第15図、図版14・15）

調査区のほぼ中央に設定したトレンチで、238、329、335番地の範囲で南北約65mを掘削した。Ⅱ層は1から3層に区分され、オリーブ褐色を呈し粗い砂を含む層である。Ⅲ層は1から10層に区分され、灰色を呈す粘性土を主体とし、部分的に灰色の粗砂層が帯状に堆積する。また、Ⅲ5層とⅢ9層にはそれぞれ酸化鉄を多量に含んでおり、明瞭に区分される。Ⅲ9層はトレンチの南端から16mほどの部分には酸化鉄を含んでいない。Ⅳ層は1から2層に区分され、オリーブ黒を呈する強粘性土である。Ⅳ1層は僅かに酸化鉄を含み、Ⅳ2層にかけて粘性が強まる。

トレンチ南端から6mほどの地点で杭が4本検出された。トレンチの壁際にある2本で層位の状況を観察したところ、Ⅳ層以下に刺さっているようである。壁際の2本のうち、南側の1本の周辺の土層は杭の部分のみ還元し、Ⅳ層から盛り上がっている様な状況である。検出された杭の周辺には、細かな木片が散乱している。杭は後述する24トレンチで検出した杭と列状



第19図 確認調査トレンチ土層断面図(11)

第2節 確認調査の成果

に並ぶと見られる。また、トレンチ北端から24 mほどの地点にⅢ1層の下位で、幅約1.5 m、深さ30 cmほどの掘り込み状の部分を検出した。埋土は灰色の砂質土である。その部分の拡がりを確認するため、20 トレンチから東へ約10 mの327番地にトレンチを設定し21 トレンチとした。20 トレンチと平行に南北約6 mを掘削した。掘り込み状の部分は、幅約1 m、深さ約20 cmに小規模になっていた。遺物はそれぞれのトレンチから土師器片がごく少量出土した。

第22 トレンチ (第21 図)

調査区の南西側の1232-9、1232-10番地に設定したトレンチで、南北約33mを掘削した。中央で19 トレンチと交差し、南側で26 トレンチと交差する。層位は概ね19、26 トレンチと同様である。遺構は特に検出されず、遺物はⅢ2層から青磁片と、Ⅳ層から弥生土器とみられる小片が出土した。

第23 トレンチ (第21 図、図版15)

調査区の南西側の1232-9、1232-10番地に設定したトレンチで、南北約33mを掘削した。北側で19 トレンチと交差する。層位は概ね19 トレンチと同様である。トレンチ南側から10mほどの地点で、Ⅱ層からの掘り込み状の部分がみられた。遺構は特に検出されず、遺物はⅢ3層から土師器片などが少量出土した。

第24 トレンチ (図版15)

調査区の中央付近の334番地に設定したトレンチで、南北約14mを掘削した。20 トレンチで検出した杭の状況を確認するため東側を掘削し、南側から約8mの地点で杭を検出した。北東から南西に2列並ぶとみられ、列の間隔は70 cmほどである。20 トレンチの杭と、13-2Tの杭と直線上に並ぶと見られる。層位の状況は概ね20 トレンチと同様で、杭以外の遺構は特に検出されず、遺物は土師器片がごく少量出土した。

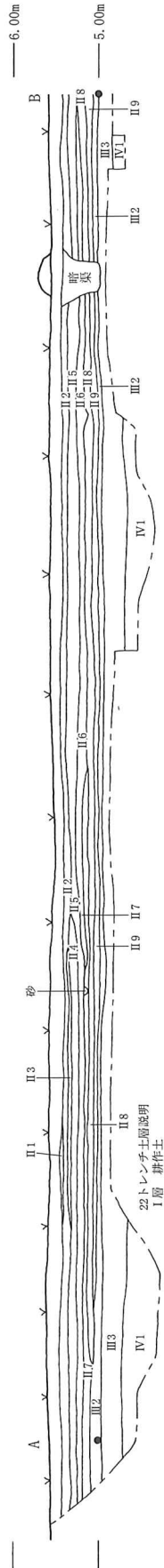
第25 トレンチ

調査区の南東側の1232-9番地に設定したトレンチで、東西約6mを掘削した。18 トレンチで検出した杭の状況を確認するため南側を掘削したが杭は検出されず、後述する32 トレンチの西側で検出された。層位は概ね18 トレンチと同様であり、遺構は特に検出されず、遺物はⅡ層から染付の小片などが出土した。

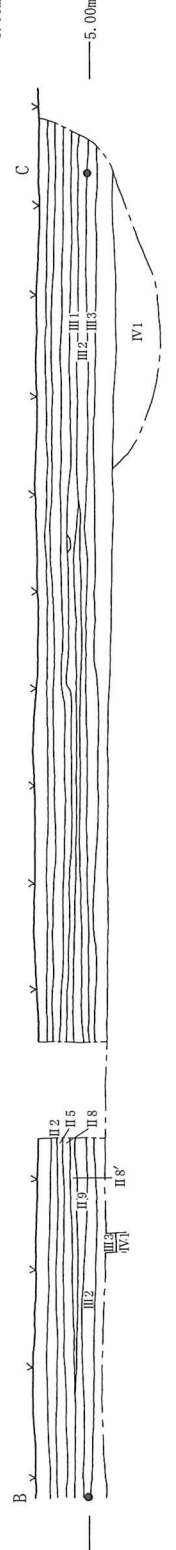
第26 トレンチ (第22・23 図、図版15)

調査区の南側、調査範囲を横断するように設定したトレンチで、1232-10、357、281番地に東西約147mを掘削した。西側と中央の2ヶ所で水路を横断している。トレンチの西側で22、15 トレンチと交差し、東側で35、42、17 トレンチと交差する。Ⅱ層は1から7層に区分した。主に暗オリーブ色を呈する砂質土ぎみの層で、トレンチ東側の17 トレンチ付近で粘性が強い傾向がある。Ⅲ層は1から16層に区分した。主に灰色から灰オリーブ色を呈する粘性土で、Ⅳ層に近い下位には酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ層は暗緑灰色を呈する強粘性土である。17 トレンチ以東では、Ⅲ層とⅣ層の間に粗い砂層が入る。西側と中央の水路部分では、土手の下位でⅢ層部分に酸化鉄を多く含む部分があり、畦状を呈する。遺構は特に検出されず、遺物は弥生時代～中世の土器片が出土した。東側の17 トレン

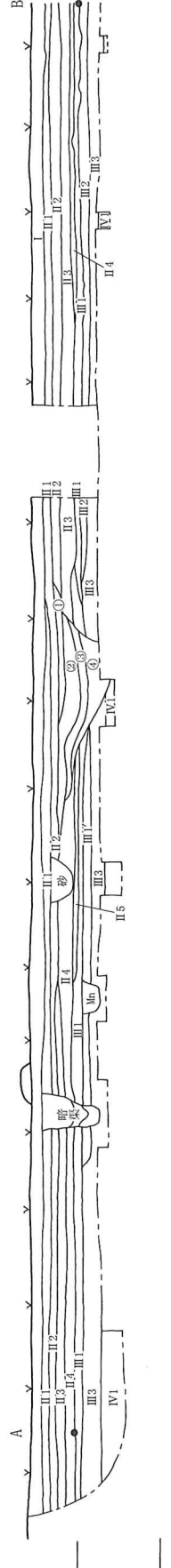
22T 西壁



- 22トレンチ土層説明
- I層 耕作土
 - II.1層 暗褐色土7.5VR(5/6) あまりしまらず、粘性なし、砂質土
 - II.2層 明褐色土7.5VR(5/6) ややしまり、粘性有、赤がよい二酸化マンガンを粒状に多量に含む
 - II.3層 明褐色土7.5VR(5/6) ややしまり、粘性有
 - II.4層 オオノリ土(7.5V(4/2) ややしまり、粘性有
 - II.5層 暗褐色土7.5VR(4/3) あまりしまらず、やや粘性有
 - II.6層 暗褐色土7.5VR(4/3) あまりしまらず、やや粘性有
 - II.7層 灰オオノリ土(7.5V(4/2) ややしまり、粘性有
 - II.8層 灰オオノリ土(7.5V(7/1) ややしまり、やや粘性有
 - II.8層 灰オオノリ土(7.5V(4/2) しまりなく、わずかに粘性有
 - II.9層 赤褐色土5VR(4/6) しまりなく、全体的に砂質

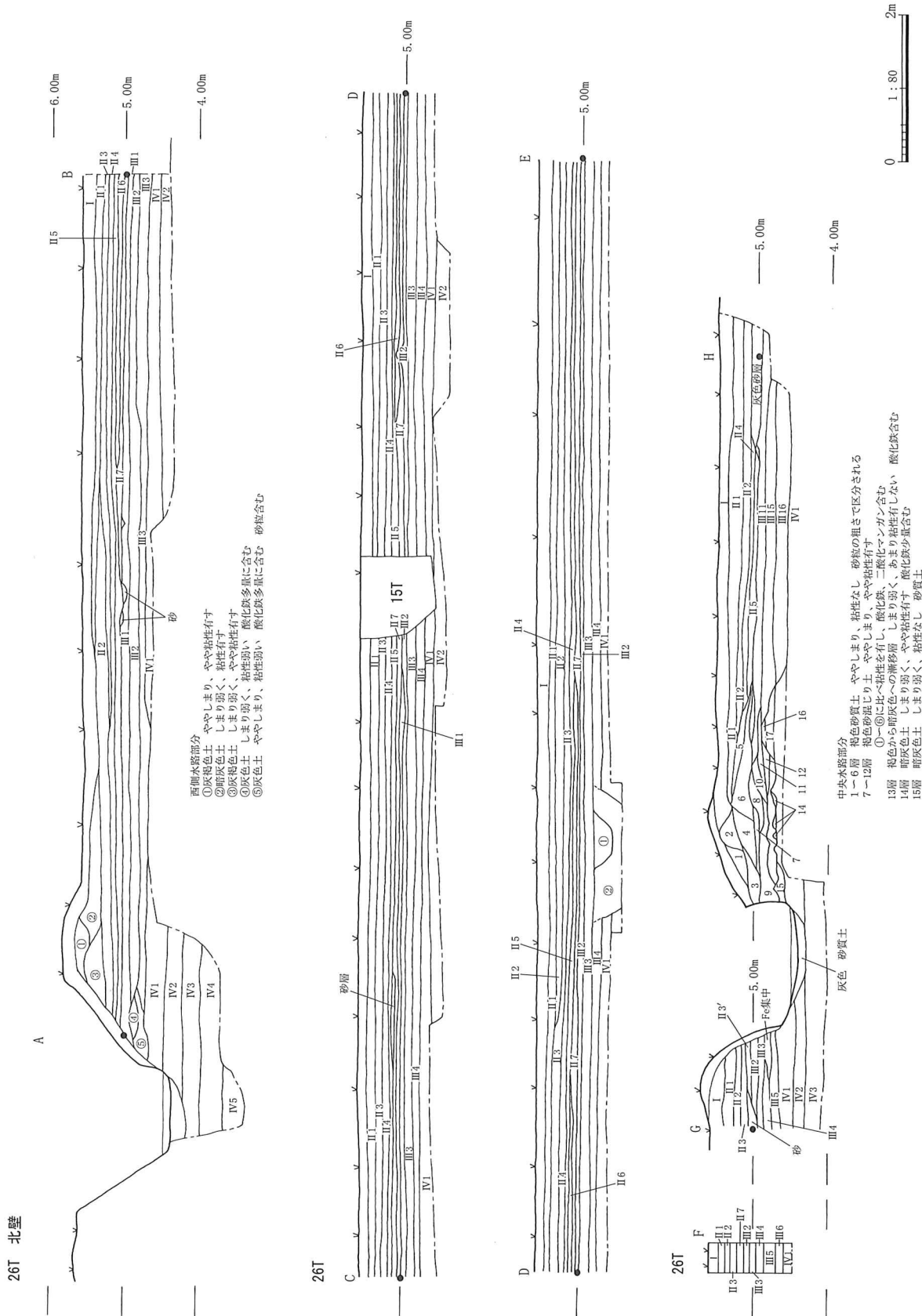


23T 西壁

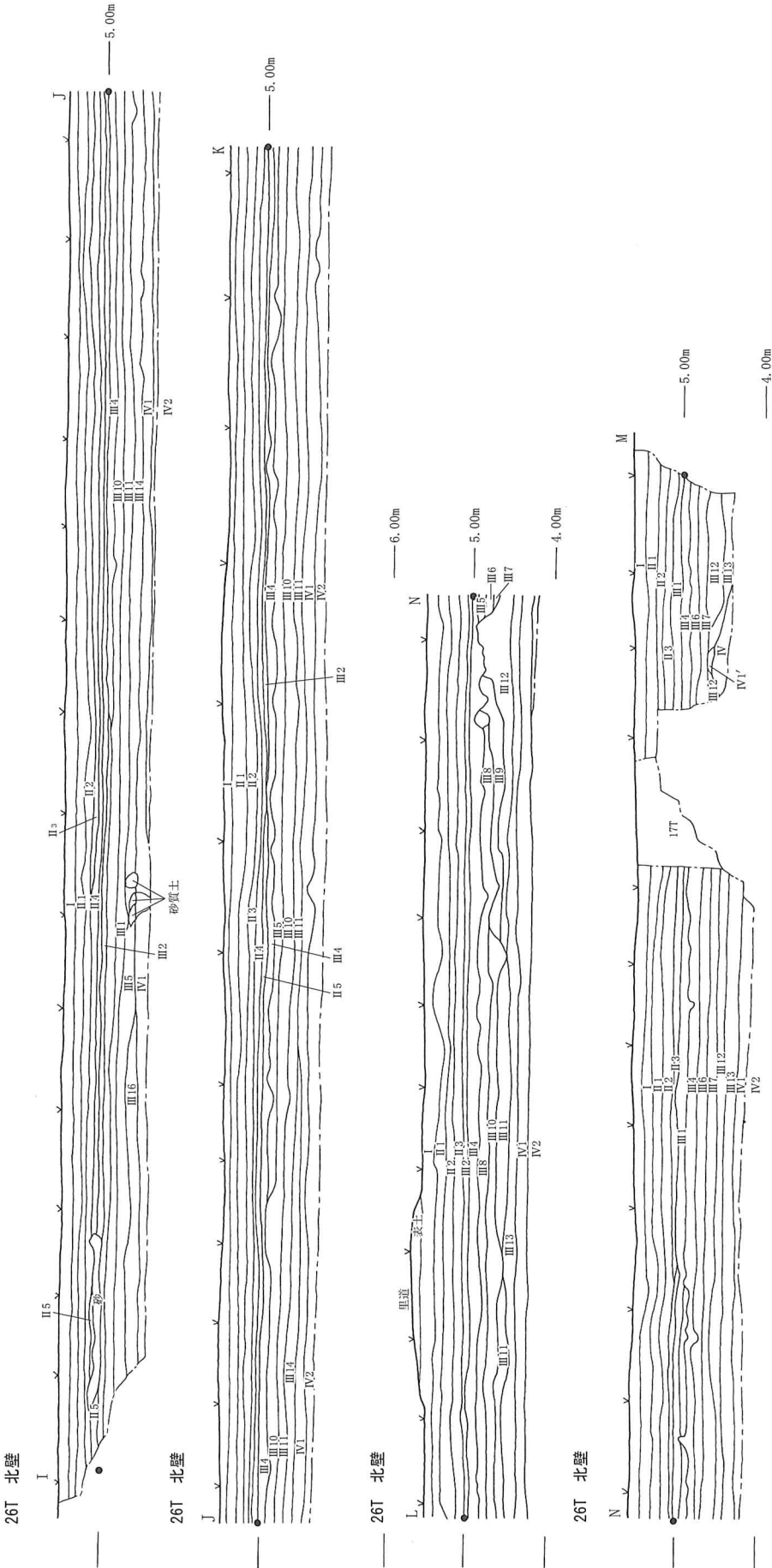


- 23トレンチ土層説明
- I層 耕作土
 - II.1層 暗褐色土7.5VR(5/8) ややしまり、粘性あり
 - II.2層 暗褐色土7.5VR(4/3) あまりしまらず、やや粘性
 - II.3層 灰オオノリ土5V(4/2) しまりなく、わずかに粘性有
 - II.4層 赤褐色土10VR(7/2) しまりなく、全体的に砂質
 - II.5層 赤褐色土5VR(4/6) しまりなく、全体的に砂質
 - III.1層 暗褐色土7.5VR(5/2) しまりなく、粘性有
 - III.2層 暗褐色土7.5VR(4/1) ややしまり強く、わずかに粘性有
 - III.3層 暗褐色土7.5VR(6/1) ややしまり強く、粘性も強い
 - IV.1層 緑褐色土10SV(2/1) しまりなく、粘性強い
 - ① 灰褐色土(2.5V7/2) しまりなく、粘性なし
 - ② 暗褐色土(2.5V6/1) しまりなく、わずかに粘性有
 - ③ 暗褐色土(2.5V5/2) ややしまり、②より粘性強い
 - ④ 灰灰(2.5V4/1) あまりしまらず、粘性強い

第21図 確認調査トレンチ土層断面図(13)



第22図 確認調査トレンチ土層断面図(14)



26トレンチ土層説明
I層 表土 オリープ灰色土(7.5V3/1)
II層 灰土 オリープ灰色土(7.5V4/2) あまりしまらず、粘性なし 砂質土
II-2層 暗オリープ灰色土(7.5V4/3) あまりしまらず、やや粘性有す
II-3層 オリープ灰色土(10V4/2) しまり強くと、粘性有す
II-4層 オリープ褐色土10R(7/2) しまり強くと、全体的に砂質
II-5層 赤褐色土5R(4/6) しまりなく、全体的に粘質
II-6層 灰オリープ灰色土5V(4/2) しまりなく、おずかに粘性 砂質含む
II-7層 赤褐色土5R(4/6) しまりなく、全体的に砂質
II-8層 灰色土(7.5V1/1) あまりしまらず、粘性有す 細かい砂混ざる 酸化鉄、二酸化マンガン少量含む
II-9層 灰色土5V(5/1) ややしまり、粘性強有す。砂質はあまり含まない。二酸化マンガン含む
II-10層 灰色土(7.5V1/1) あまりしまらず粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン少量含む
III層 灰土 オリープ灰色土(7.5V4/2) しまり強くと、粘性有す 上部のIII4より酸化鉄、二酸化マンガン多く混入
III-2層 暗オリープ灰色土(2.5V4/6) しまり強く、やや粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン多量に含む
III-3層 二酸化マンガン多量に含む 本来は灰色粘質土であり、酸化鉄の混入が多く、全体的に褐色を呈す
III-4層 灰オリープ灰色土(5V4/2) しまり強く、やや粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン含む
III-5層 オリープ褐色土(6V5/4) しまり強く、やや粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン含む
III-6層 オリープ褐色土(2.5V4/6) しまり強く、やや粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン多量に含む
III-7層 暗オリープ灰色土(10V5/2) しまり強く、粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン含む
III-8層 暗オリープ褐色土(10V4/1) しまりなく、粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン少量含む
III-9層 オリープ褐色土(2.5V4/6) しまり強く、やや粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン多量に含む
III-10層 III-6に近似し、酸化鉄、二酸化マンガン集中する

III13層 暗緑灰色土(7.5V4/1) グライ化があまり進まず、酸化鉄多量に含む
III14層 オリープ灰色土(10V4/1) しまりなく、粘性有す
III15層 灰色土(10V4/1) しまりなく、粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン含む
III16層 灰色土(10V4/1) しまりなく、粘性有す 酸化鉄、二酸化マンガン少量含む
IV層 暗緑灰色土(7.5V4/1) しまりなく、強い粘性有す
IV-2層 暗緑灰色土(7.5V3/1) しまりなく、強い粘性有す

第23図 確認調査トレンチ土層断面図(15)

第2節 確認調査の成果

チ付近で出土量が多い傾向がある。

第27 トレンチ (図版 15)

調査区の南側の283番地に設定したトレンチで、長さ約4.5m、幅約3.2mの範囲を掘削した。IV層の下位まで掘削するため、全体を1mほど掘削し、重機ごと降ろしてそれからさらに2mほど掘削した。トレンチの東側から約4mの地点で杭列を検出した。列の間隔が70cmほどで、平行に2列並び、それがもう一組並んでいる。29トレンチの杭列に繋がるとみられる。層位は29トレンチと概ね同一であり、深さ3mほどまで暗灰色を呈する強粘性土であった。その他遺構、遺物は検出されなかった。

第28 トレンチ

調査区の南側に設定したトレンチで、281-1、356番地の範囲で東西約12mを掘削した。中央で小規模なあぜ道を切っている。層位は後述する27トレンチと概ね同一であり、27、29トレンチで検出された杭列は確認されなかった。遺物は磨製石斧、弥生土器、中世土師器などが出土した。

第29 トレンチ (第24図、図版 15)

調査区の南側に設定したトレンチで、283番地に東西約47mを掘削した。西側で35トレンチ、中央付近で43トレンチと接する。II層は1から7層まで区分され、灰オリーブを呈し全体的に粘性が弱く砂を含む。II層下位であるII6、II7層の砂粒が粗い。III層は1から5層まで区分され、灰色から灰オリーブを呈する粘性土を主体とする。III2とIII5が酸化鉄を多く含み、III層を挟んで酸化鉄の分布が上位と下位に分離する傾向がみられる。IV1層は暗緑灰色を呈する強粘性土である。トレンチの西側で杭を18本検出した。すべて刺さった状態で検出され、2列2組で北西から南東方向へ並ぶとみられる。壁際の1本で層位を観察したところ、III3層まで確認した。杭は3本掘削して取り上げた。一番長い杭で検出した部分から30cmほど刺さっており、先端は鋭く加工されている。その他は特に遺構は検出されておらず、遺物は土師器片がごく少量出土した。

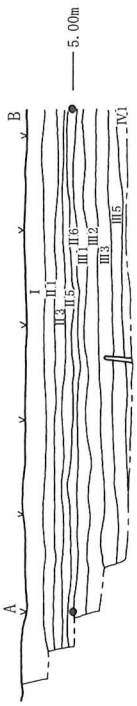
第30 トレンチ

調査区の中央よりやや南側に設定したトレンチで、349-2、349-3、350-2、350-3番地の範囲で東西約31mを掘削した。層位は概ね34トレンチと同様である。当初、27トレンチで検出された杭の続きを確認するため西側半分程を掘削したが検出されず、東側半分を掘削したところ、トレンチ東端から約10mの地点で杭が検出された。杭は刺さった状態で東側4本、西側3本の2列が検出され、軸が南北方向よりやや東に振れる方向へ並ぶ可能性がある。その他遺構は特に検出されず、遺物は土師器片が少量出土した。

第31 トレンチ (第24図)

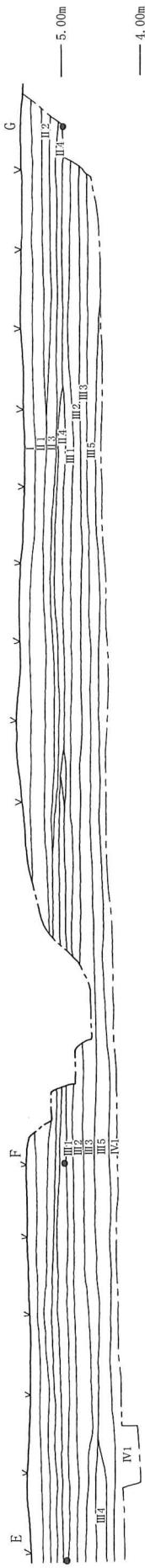
調査区の中央やや東側に設定したトレンチで、342、344、345-1、345-2、346番地で東西約30mを掘削した。中央で17トレンチと交差し、東側の6mほどの範囲の土層図を作成した。層

29T 南壁



抗出土部分平面図

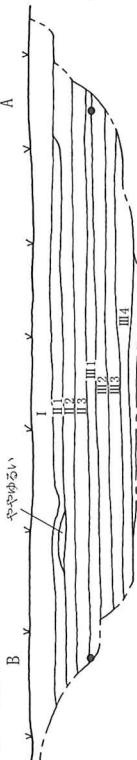
29T 南壁



29トレンチ土層説明

- II 1層 灰オリーブ色土(5V4/3) しまり弱く、粘性弱い
- II 2層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、粘性弱い
- II 3層 灰オリーブ色土(5V4/1) しまり弱く、粘性弱い
- II 4層 灰オリーブ色土(5V6/2) しまり弱く、粘性弱い
- II 5層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、粘性弱い
- II 6層 灰オリーブ色土(5V4/2) しまり弱く、粘性なし
- II 7層 灰色土(5V5/1) しまり弱く、粘性なし

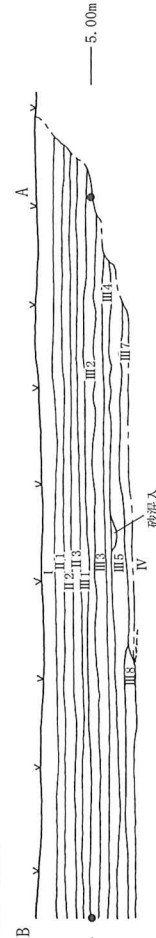
31T 北壁



31トレンチ土層説明

- II 2層 灰オリーブ色土(7.5V5/3) しまり弱く、あまり粘性有しない、やや砂質
- II 3層 灰オリーブ色土(7.5V5/2) しまり弱く、粘性有す
- II 1層 灰色土(7.5V4/1) しまり弱く、粘性有す
- II 2層 灰色土(7.5V4/1) しまり弱く、粘性有す
- II 3層 灰色土(7.5V4/1) しまり弱く、粘性有す
- II 4層 灰色土(7.5V4/1) しまり弱く、粘性有す
- II 1層 暗灰色土(N3/7) しまり弱く、強い粘性有す
- II 2~3層 暗灰色土、少量混入 二酸化マンガン、酸化鉄プロック状に含む

33T 南壁



33トレンチ土層説明

- II 1層 灰オリーブ色土(7.5V4/2) オリーブが強く、しまりが少ない
- II 2層 灰オリーブ色土(7.5V4/2) オリーブが強く、しまりが少ない
- II 3層 灰オリーブ色土(7.5V4/2) オリーブが強く、しまりが少ない
- II 1層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) しまり、粘性が強い
- II 2層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) しまり、粘性が強い
- II 3層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) しまり、粘性が強い
- II 4層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) しまり、粘性が強い
- II 5層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) しまり、粘性が強い
- II 6層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) 酸化鉄、二酸化マンガン多量に混入
- II 7層 オリーブ黒色土(7.5V3/2) 酸化鉄、二酸化マンガン多量に混入

第24図 確認調査トレンチ土層断面図(16)

第2節 確認調査の成果

位は17トレンチと概ね同様である。トレンチの西側から約4mの地点で杭を検出した。位置関係から、36トレンチで検出した杭と列状に並ぶ可能性がある。遺物は染付片、土師器片がごく少量出土した。

第32トレンチ

調査区の南東側に設定したトレンチで、1232-8番地に東西約20mを掘削した。18トレンチで検出した杭の続きを確認するため掘削したところ、西側で杭を検出した。18トレンチの杭との位置関係から、北東から南西方向へ並ぶとみられる。遺物は青磁、土師器片が少量出土した。

第33トレンチ（第13・24図）

調査区の南東側に設定したトレンチで、347-1番地の17トレンチの東側に東西約10mを掘削した。層位は概ね17トレンチと同様である。遺構は特に検出されず、遺物は土師器片が少量出土した。

第34トレンチ（第25図、図版15）

調査区のやや南側、中央を南北に流れる水路の東側に設定したトレンチで、347-1、349-1、349-2、349-3、350-1、350-2、350-3、351番地の範囲で、東西約83mを掘削した。トレンチの西側で35トレンチと接し、東側で17トレンチと交差する。東端1ヶ所と中ほど2ヶ所で土層柱状図を作成した。Ⅱ層は1から4層に区分した。全体的にオリーブ暗色を呈する層で、細かい砂粒を含む。Ⅲ層は1から4層に区分した。締まりがなく粘性弱い灰色土を主体とし、ややシルト質である。Ⅳ層は、オリーブ黒色を呈する強粘性土である。トレンチで6本の杭を検出した。遺物は土師器片1点が出土した。

第35トレンチ（第25図、図版16）

調査区南側、中央を南北に流れる水路の東側に設定したトレンチで、351、283、356、357番地の範囲で南北約77mを掘削した。トレンチの北側で34トレンチと接し、南側で29、26トレンチと接する。全体的にⅣ1層まで掘削し、北側の一部のみⅣ4層まで掘削して確認した。Ⅱ層は暗オリーブ色を呈する層であり、弱い粘性を有し砂粒を少量含む。Ⅱ4とⅡ5層が最も砂粒が粗い。Ⅲ層は8層に区分した。全体的に灰色粘性土を主体とし、酸化鉄を多く含み、細かい砂を少量含む。Ⅳ層は1から4層に区分される。還元した暗灰色強粘性土であり、Ⅲ層から鉄分が少量貫入する。Ⅲ層とⅣ層とは漸移的に変化し明瞭ではない。トレンチの中央付近で小規模な水路を横断しているが、水路付近の下層では酸化鉄と還元した粘性土が明瞭に分離している部分があり、Ⅳ層とした暗灰色粘土が盛り上がっているような状況である。遺物は染付、青磁、瓦器、土師器の小片が少量出土した。

第36トレンチ（第25図）

調査区のやや北側、新幹線路線の南側に設定したトレンチで、323～328番地の範囲で東西約44mを掘削した。西側で20トレンチと接する。東側の一部の土層図を作成し、中央1ヶ所

第2節 確認調査の成果

で土層柱状図を作成した。Ⅱ層は灰黄褐色を呈す層で、1から3層まで区分した。ほぼ砂質土である。Ⅲ層は1から4層に区分した。概ね砂を含む粘性土であり、酸化鉄と二酸化マンガンを含む。Ⅳ層はオリーブ黒色を呈す還元した強粘性土である。トレンチのほぼ中央の地点で、刺さった状態の杭を2本検出した。位置関係から、39トレンチで検出した杭と列状に並ぶ可能性がある。遺物は土師器の小片が少量出土した。

第37トレンチ（第14図）

調査区の北側、新幹線路線の北側に設定したトレンチで、317～319番地の範囲で東西約12mを掘削した。西側で9トレンチと接する。Ⅱ層は1から4層まで区分され、砂質土を主体とした暗灰黄色を呈する層である。Ⅱ4層が最も砂粒が粗い。Ⅲ層は1層から4層まで区分され、灰色又は灰オリーブ色を呈する粘性土及び砂質土を主体とし、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ1層は還元した暗灰色を呈する強粘性土である。トレンチの東側で、暗渠と思われるⅡ1層上面からの掘込みを検出したほか、特に遺構は検出されていない。遺物はⅣ層から縄文時代晩期の鉢の小片が出土した。

第38・39トレンチ

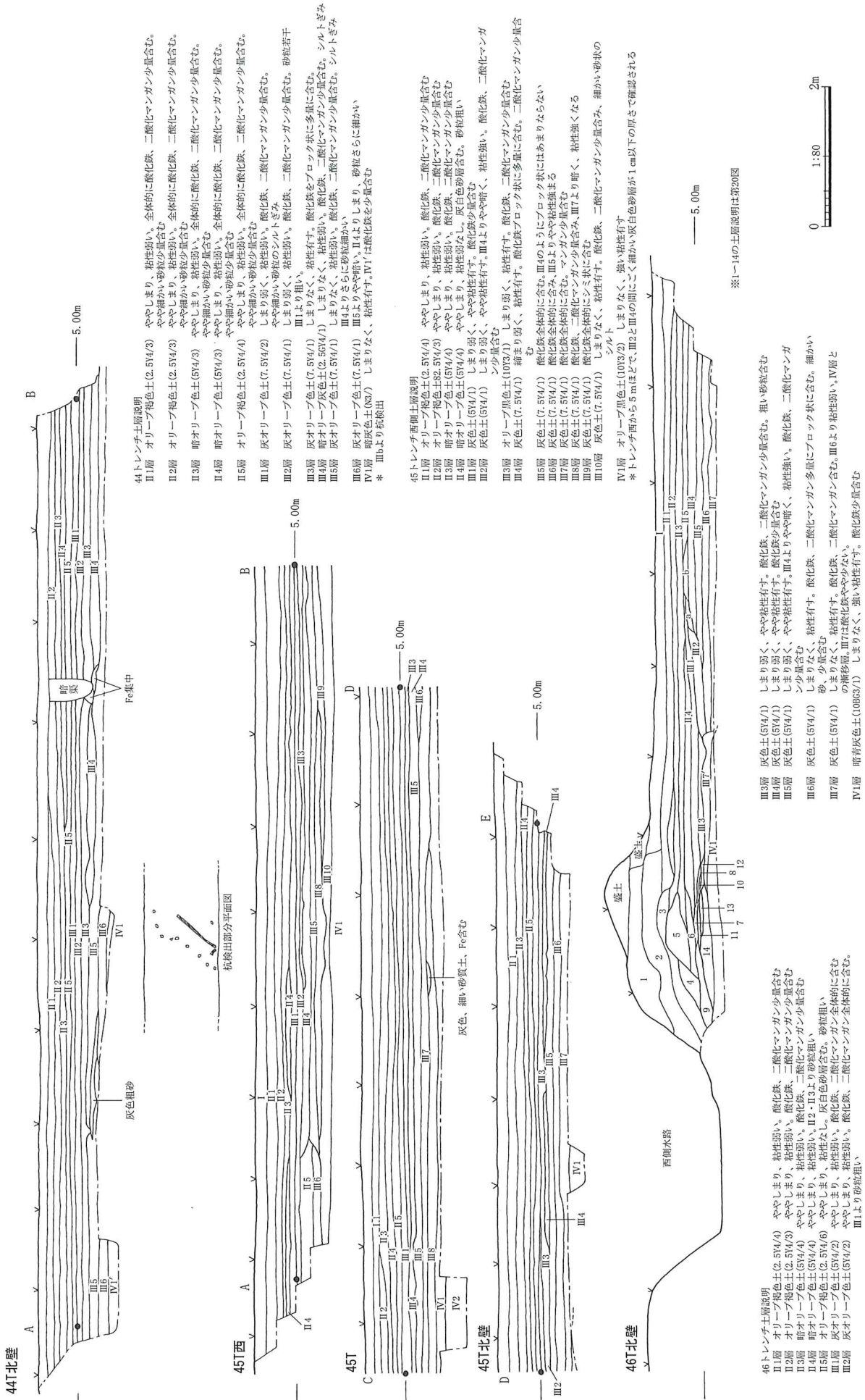
調査区の北側、新幹線路線の南側に設定したトレンチで、325～327番地に東西約9mを掘削した。途中で暗渠を掘削し、大量の水が噴き出したため、掘削を中断して北側へ2mほど移動して324、325番地に39トレンチとして東西約14mを掘り直した。暗渠が数ヶ所あり、湧水で観察が困難であったが、層位は概ね36トレンチと同様である。39トレンチ西側から約6mの地点で刺さった状態の杭を検出した。位置関係から、36トレンチで検出した杭と列状に並ぶ可能性がある。遺物は39トレンチで染付片1点と土師器片1点が出土した。

第40トレンチ（図版16）

調査区北側で新幹線路線の南側、中央を南北に流れる水路西側の1229-1番地に設定したトレンチで、地表面から深さ3mほど掘削して層位を確認した。Ⅳ層の下位まで確認するため、全体を1mほど掘削し、重機ごと降ろしてそれからさらに2mほど掘削した。Ⅳ層はやや緑がかる還元した強粘性土であり、下位にかけて次第にしまりが弱く粘性が強くなってゆく傾向がみられた。遺構は特に検出されず、遺物は土師器片1点が出土した。

第41トレンチ（第13図）

調査区の南西側、西側水路と土手を横断するように設定したトレンチで、1232-9番地に東西約22mを掘削した。Ⅱ層は1から5層まで区分した。概ね灰オリーブ色を呈する層で、全体的に砂を含み弱い粘性を有す。Ⅱ4とⅡ5は砂質土である。Ⅲ層は1から11層に区分した。概ね灰色から灰オリーブ色を呈する粘性土であり、部分的に酸化鉄、二酸化マンガンを含む。西側の水路から約10mの地点より東のⅢ10層が酸化鉄と二酸化マンガンを多く含む。Ⅳ層は暗灰色を呈する強粘性土である。Ⅲ層からⅣ層にかけては明瞭に区分されず、還元の具合で漸移的に変化する。西側の土手部分の下位は、砂質土で酸化鉄を多く含む部分がみられた。（①～⑤層）さらに下位のⅣ層へ管状に酸化鉄が貫入する。遺構は特に検出されず、遺物は土師器片



第26図 確認調査トレンチ土層断面図(18)

が少量出土した。

第42 トレンチ（第25図）

調査区の南側、26 トレンチから南側に設定したトレンチで、357 番地に南北約 31m を掘削した。南側の1ヶ所で土層柱状図を作成した。Ⅰ～Ⅲ層までは概ね26 トレンチと同様であり、Ⅳ層は暗緑灰色の粘性土と砂質土が互層状に堆積していた。遺構、遺物は特に検出されなかった。

第43 トレンチ

調査区南側の350-1、283 番地に設定したトレンチで、小規模な水路を横断するように南北約 23m を掘削した。層位は概ね35、29 トレンチと同様であり、水路下位の部分は、Ⅳ層が盛り上がるように畦状を呈し、酸化鉄の集中がみられた。遺構は特に検出されず、遺物は土師器片1点が出土した。

第44 トレンチ（第26図、図版16）

調査区中央やや西側の、1232-7 番地に設定したトレンチで東西約 19m を掘削した。Ⅱ層は1から5層に区分した。全体的に褐色からオリーブ褐色を呈する砂粒を含む層で、粘性は弱い。Ⅲ層は1から6層に区分した。全体的に灰色粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを多く含む。特にⅢ3層に二酸化マンガンをブロック状に多量に含む。Ⅳ層は暗灰色を呈する強粘性土である。トレンチ東から約6m 地点で杭列を検出した。Ⅲ6層以下で確認され、北東から南西の方向に並ぶように1列9本を検出した。また、横に寝た状態の木片を2本検出した。杭の東側ではⅢ5とⅢ6層の間に灰色粗砂層が入る。杭列は18 トレンチと20、24 トレンチで検出した杭列と同じ方向に並ぶと思われる。遺物はⅢ層中から中世土師坏片1点が出土した。

第45 トレンチ（第26図）

調査区中央の西側1232-4 番地に設定したトレンチで、東西約 49m を掘削した。トレンチ中央は崩落したため、土層図はトレンチ両側のみ作成した。両側でⅢ層以下の層位が若干異なるため、別に注記した。Ⅱ層は1から4層に区分した。全体的に褐色からオリーブ褐色を呈する砂粒を含む層で、粘性は弱い。Ⅲ層は、1から10層に区分した。灰色を呈する粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを多量に含む。トレンチ西側から5m ほどの範囲で、Ⅲ2層とⅢ4層の間にごく細かい灰白色砂層が1cm以下の厚さで確認される。また、トレンチ西側から3m ほどの地点ではⅢ5層とⅢ6層では酸化鉄の混入が少なくなる部分（Ⅲ5、6層）がある。遺構は特に検出されず、遺物はⅢ4層から古代の土師坏片が出土した。

第46 トレンチ（第26図）

調査区西側の1232-4 番地に設定したトレンチで、45 トレンチの西側延長上に東西約 13m を掘削した。西側は水路の横と土手部分の下位まで掘削した。Ⅱ層は主にオリーブ褐色を呈する砂粒を含む層で、粘性は弱い。Ⅲ層は1から7層まで区分した。灰色を呈する粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。Ⅳ層は暗青灰色を呈する強粘性土である。トレンチ中央の

a、b層を境に層位の変化がみられる。土手部分下位の層位は、主にオリーブ褐色を呈する砂質土を主体とし、IV層直上の⑧から⑬層で酸化鉄が特に集中する。遺構、遺物は特に検出されなかった。

第47 トレンチ (図版16)

調査区中央西側の、1232-1番地に設定したトレンチで、東西方向に約30mを掘削した。西側から掘削中にトレンチと平行して暗渠があったため、途中から少し南側にずらして掘削している。II層は主に灰オリーブ色を呈する砂質土で、粘性は弱い。III層は主に灰色を呈する粘性土で、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。II層とIII層の間で粗砂層(①・②層)が堆積しており、トレンチとほぼ平行して東西に延びる溝状の遺構と思われる。粗砂層の底面は、酸化鉄が多く集中し、その下位は暗青灰色に還元している。遺物は中世の土師皿片が出土した。

第48 トレンチ (第12図)

調査区中央やや西側の、1232-1、1232-3番地に設定したトレンチで、南北方向に約14.5mを掘削した。II層は1から4層に区分した。オリーブ褐色を主体とする砂質土で、粘性は弱い。III層は主に灰色から暗灰色を呈する粘性土であり、酸化鉄、二酸化マンガンを含む。III7層のみ細かい砂の砂質土であり、明瞭に区分される。III層の下位(III7、III8)は還元しIV層に近いが、酸化鉄を管状に含む。トレンチの北側から約3mの地点で灰色砂質層(①・②)を検出した。27トレンチから続く溝状遺構と思われる。埋土から中世の土師皿細片が出土した。

第49-1、49-2 トレンチ (第26図)

調査区中央やや西側の、1232-5、1232-6番地に設定したトレンチで、北西から南東方向に約27mを掘削した。南側から掘削中に境界杭があったため、そこだけ掘削せず南側を49-1トレンチ、北側を49-2トレンチとした。層位は概ね44トレンチ、45トレンチと同様である。トレンチ南側から約2mの地点で杭が検出された。44トレンチから24トレンチ方向へ続く杭列と思われる。

第50 トレンチ (第26図)

調査区西側水路際の1232-5、1232-6番地に設定したトレンチで、南北約10mを掘削した。全体でIV層上面付近まで掘削し、一部南側でIV層下位まで掘削してその部分の土層柱状図を作成した。II層は1から4層まで区分した。II4層で粗い砂を含む。III層は1から5層まで区分した。III3層に特に酸化鉄が集中し、III4層以下は細かい砂を含むシルト層である。IV1層はオリーブ黒色を呈し、細かい砂粒を含む層、IV2層は強い粘性を有する還元層である。遺構、遺物は特に検出されなかった。

第51 トレンチ

調査区西側水路際の1232-5番地に設定したトレンチで、東西約10mを掘削した。45トレンチと46トレンチを連続して掘削する予定であったが、重機の通路を確保するためにトレンチの一部を南側にずらして51トレンチとした。層位は概ね45、46トレンチと同様である。遺構、

第2節 確認調査の成果

遺物は特に検出されなかった。

第52 トレンチ

調査区の最も北側の1138-2番地に設定したトレンチで、平成11年度の市道改良工事に伴う確認調査の1トレンチと3トレンチの間を掘削した。層位はI層の下位から褐色の粗砂層が検出され、II層とIII層は確認されなかった。その下位からはIV層の還元層であった。粗砂層は、トレンチの北側は1mほどでIV層に達するが、南側は厚く堆積しており、2mほど掘削したがIV層までは掘削できなかった。遺物は特に検出されなかった。

第53 トレンチ

調査区の最も北側の1138-2番地に設定したトレンチで、平成11年度の市道改良工事に伴う確認調査の2トレンチと3トレンチの間を掘削した。層位の状況は52トレンチと近似し、地表面から1m程は粗砂層であり、その下位は暗緑灰色の還元層である。粗砂層の上位は酸化して褐色を呈すが、下位は還元して暗灰色を呈す。遺構、遺物は特に検出されなかった。

第54 トレンチ（図版16）

調査区の最も北側の1138-2番地に設定したトレンチで、平成11年度の市道改良工事に伴う確認調査の2トレンチの西側を掘削した。層位の状況は、52、53トレンチと近似し、地表面から1.5mほどは粗い砂層である。砂層の中位には暗青灰色粘性土が斜めに堆積しており、下位からは湧水が激しい。遺構、遺物は特に検出されなかった。

第55 トレンチ

調査区の最も北側の1135-2、1136-2番地に設定したトレンチで、平成11年度の市道改良工事に伴う確認調査の4トレンチ北側から西にかけて掘削した。地表面から深さ1.5mほど掘削して層位はII～IV層が確認された。II層はオリーブ褐色を主体とする粘性土で、III層は酸化鉄を含む灰色粘性土及び砂質土である。上位は砂混じりの粘性土で下位は粗い灰色砂層である。IV層は青灰色強粘性土で、弥生時代とみられる土器片を3点検出した。

第56 トレンチ

調査区の最も北側の1133-2、1135-2番地に設定したトレンチで、平成11年度の市道改良工事に伴う確認調査の5トレンチ西側を掘削した。層位は55トレンチと概ね同様であるが、III層下位の砂層が40～50cmほど堆積している。遺構、遺物は特に検出されなかった。

第57 トレンチ（図版16）

調査区北側の293-2、294～298番地に設定したトレンチで、東西約45mを掘削した。また、さらに層位を確認するため、南北方向のトレンチを掘削し、西側を57-①、東側を57-②トレンチとした。層位は、II層とIII層の間、III層とIV層の間にそれぞれ粗い砂層が堆積しており、北側へ向けて斜めに堆積しているような状況が観察された。遺物は時期不明の土師器1点が出土した。

第 58 トレンチ (図版 16)

調査区北側の 299 番地に設定したトレンチで、南北約 4m を掘削した。層位は北側の I 層の直下から粗い砂層が検出されたが、南側は灰色粘性土であり、互層状に堆積しているような傾向が観察された。遺物は特に検出されなかった。

(2) 15 トレンチ・19 トレンチ検出の遺物集中について (第 27・28 図、図版 14～17)

重機により北から南側に向けて 15 トレンチを掘削していたが、この地点は旧水田面から約 70～80 cm 掘削した程度で土器片が出土したため、一時中断して清掃を行った。古墳時代初頭であろうと思われる土器は、ある程度集中しているものと判断され、土器も小型でミニチュア土器らしきものが含まれていたため、そのレベルで重機掘削を止めて、土層の再確認などを行った。これらの土器が出土しているレベルは旧水田面からも浅く、層位的に近世の水田と考えられる層 (II-4 層) の直下に近い。さらに約 5 cm の灰黒褐色粘土層 (III-1 層) の下位から出土しており、この遺構の下位付近のみに鉄分の沈着が著しいことがわかった。

また、その鉄分沈着部分の範囲が微高地状に高くなる傾向にあることが考えられた。ここに遺構らしきものがあると想定して、その広がりや、遺構の落ち込みなどを土層断面で確認したが、明確な遺構の落ち込みは確認できなかった。

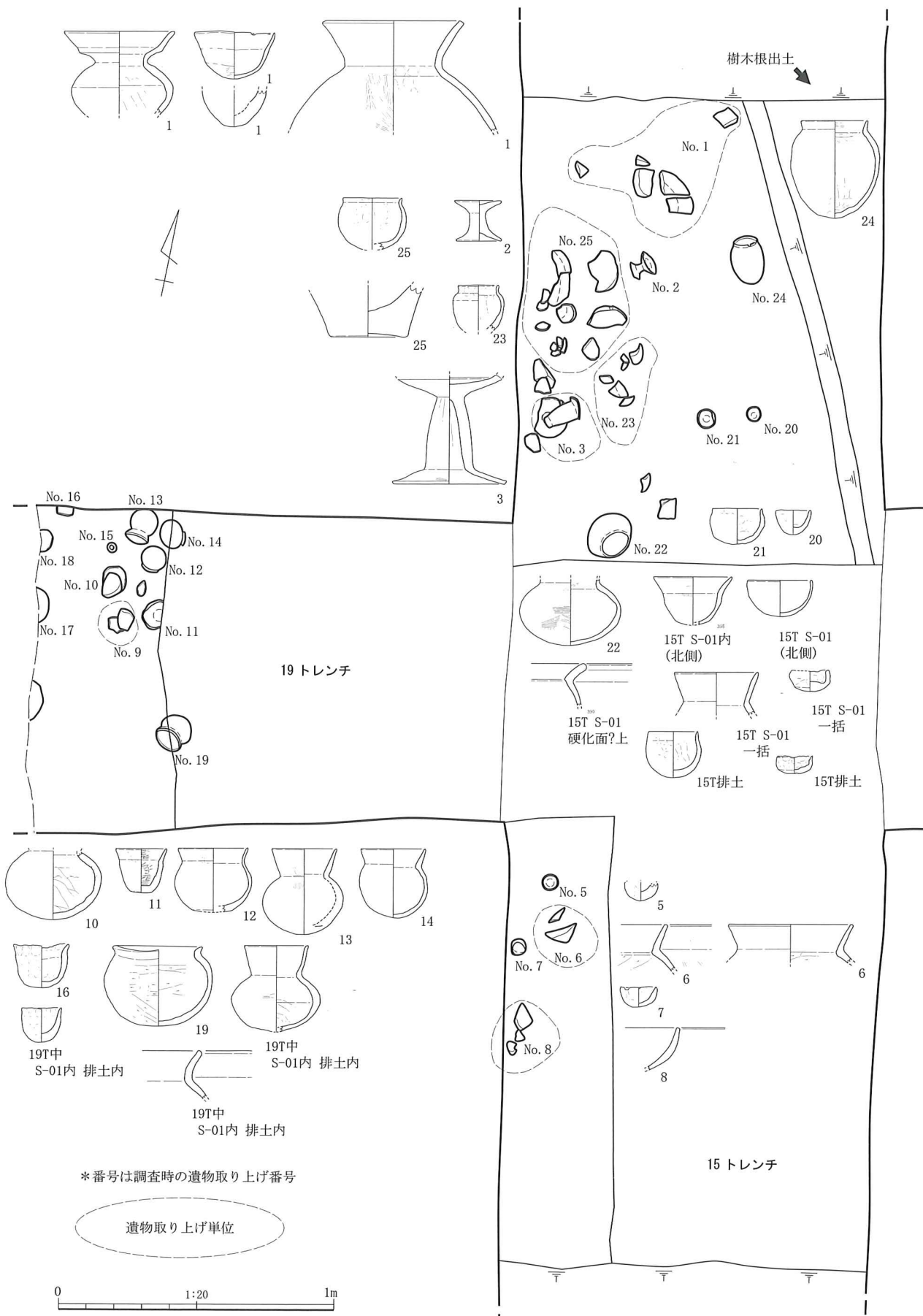
この遺構のすぐ北側では、自然木の幹か根と考えられる部分が出土していたが、重機掘削により切断された状態であり、加工痕などもなかったため当初は、河川氾濫などによる流木のようなものと考えていた。しかし、これがのちに調査 III 区 S-19 として調査した自然木の一部であった。

さらにトレンチを引き続き南側に延ばして慎重に掘削し確認したが、土器片は極端に少なく、南側になるほど断面でもほとんど含まれなかった。また微高地状にやや変化した土層も、南側はこれまでと同じような堆積層となっていた。その後、さらに遺構の東西方向への広がりを確認するため、19 トレンチを設定した。これは、15 トレンチと直交するように、土器出土地点より各東西へ延ばしたものであるが、東側にかけては、遺構の広がり確認できなかった。西側では、同じように土器が数点出土しており、約 2 m の範囲までは遺構が広がるものと想定された。

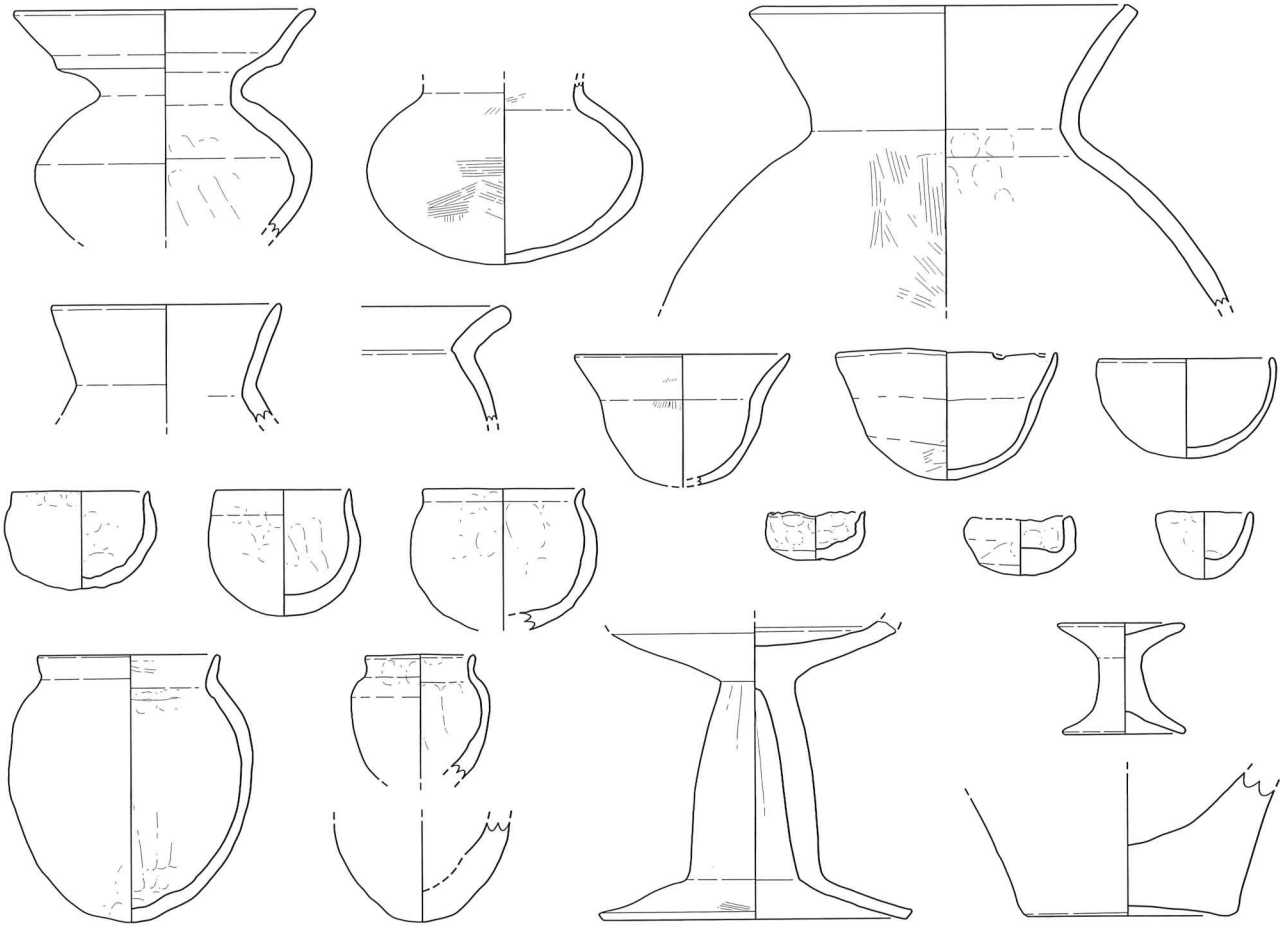
調査員で検討を行った結果この部分については本調査となる可能性があったため、完掘せず遺構検出を行い、規模や性格を把握するため一部サブトレンチ状に掘り下げを行った。なお、15 トレンチと 19 トレンチの交差点付近の重機掘削による排土内を作業員により再度確認したところ、数点のミニチュア土器が採集された。これらにより出土した遺物は遺構 S-01 からとして取り上げ、注記を行っている。

第 28 図は 15・19 トレンチの遺物集中部から出土した土器である。上段は 15 トレンチの遺物集中として取上げを行ったもの、中段は 15 トレンチと 19 トレンチとの交差部分より南側のサブトレンチで出土したもの、下段は 19 トレンチのサブトレンチよりの出土である。この第 28 図掲載の土器は後述する遺構と関連するため、第 VI 章第 2 節の各遺構の項で詳説する。

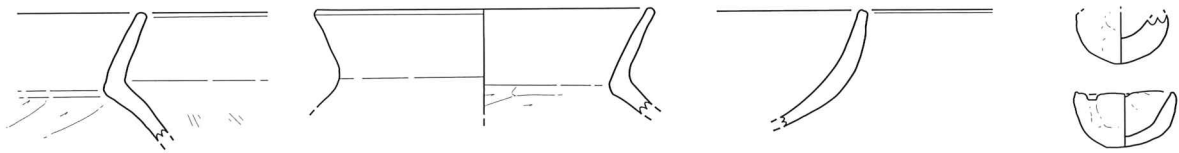
第2節 確認調査の成果



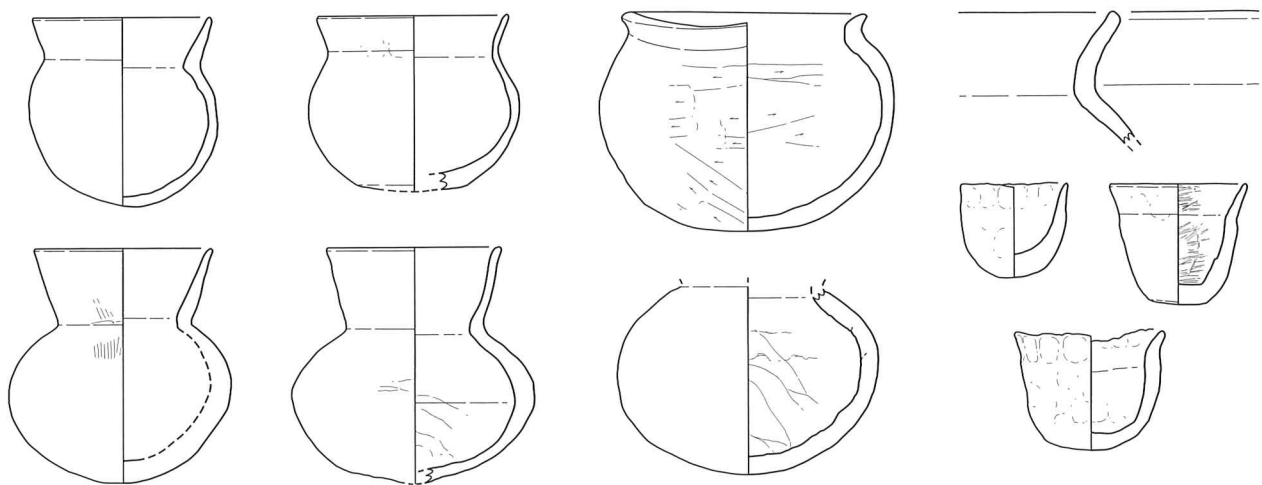
第27図 15トレンチ・19トレンチ遺物出土集中部



15 トレンチ北側



15 トレンチ南側



19 トレンチ西側

第28図 15トレンチ・19トレンチ遺物集中部出土土器

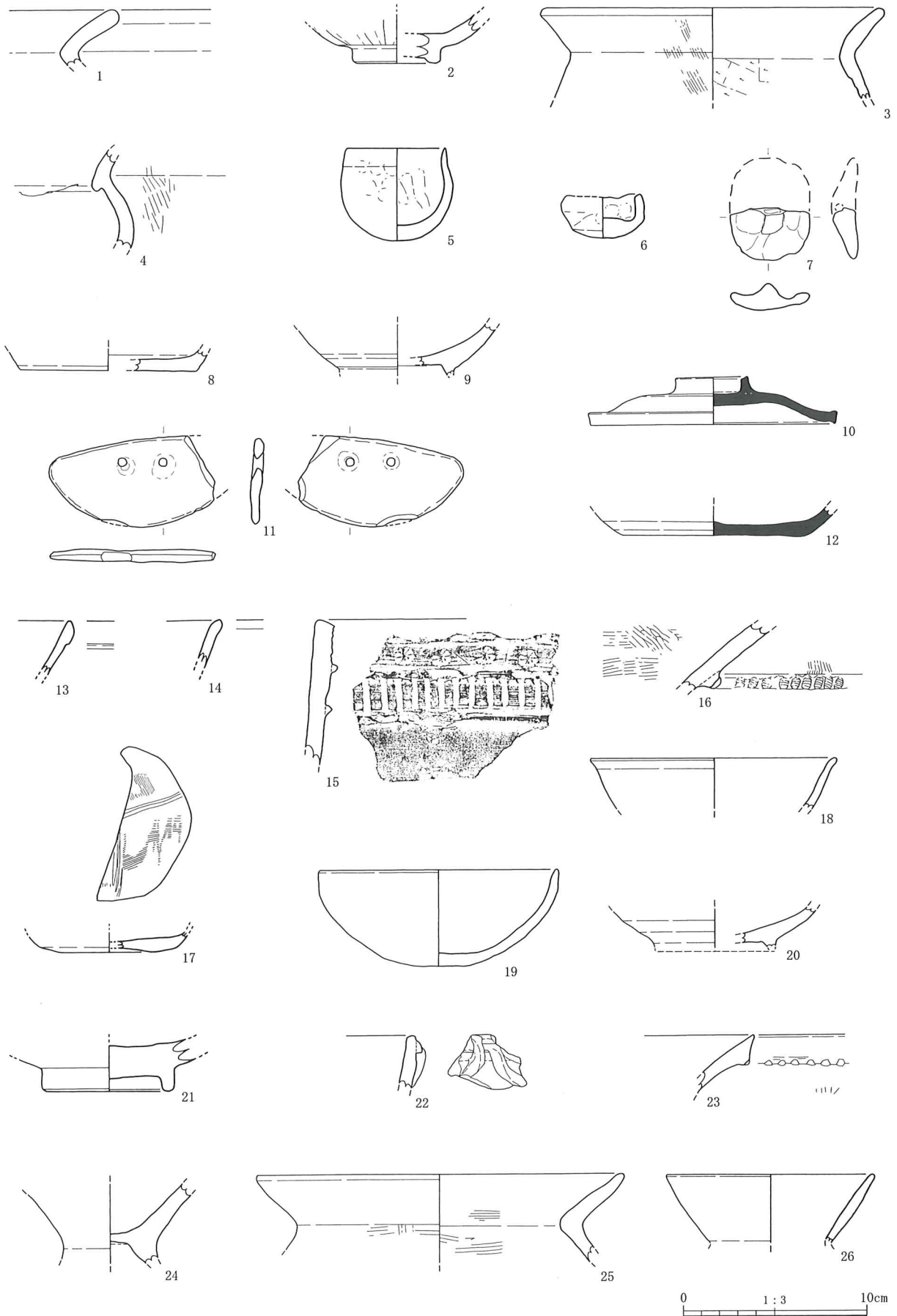
(3) 遺物 (第29～30図、図版21)

第29・30図は確認調査で出土した遺物の実測図である。1は7トレンチ、2は11トレンチ、3～10は15トレンチ、11～15は17トレンチ、16・17は18トレンチ、18～20は19トレンチ、21は22トレンチ、22～30は26トレンチ、31は28トレンチ、32は35トレンチ、33は37トレンチ、34は44トレンチ、35は45トレンチ、36は46トレンチ、37は47トレンチから出土した。

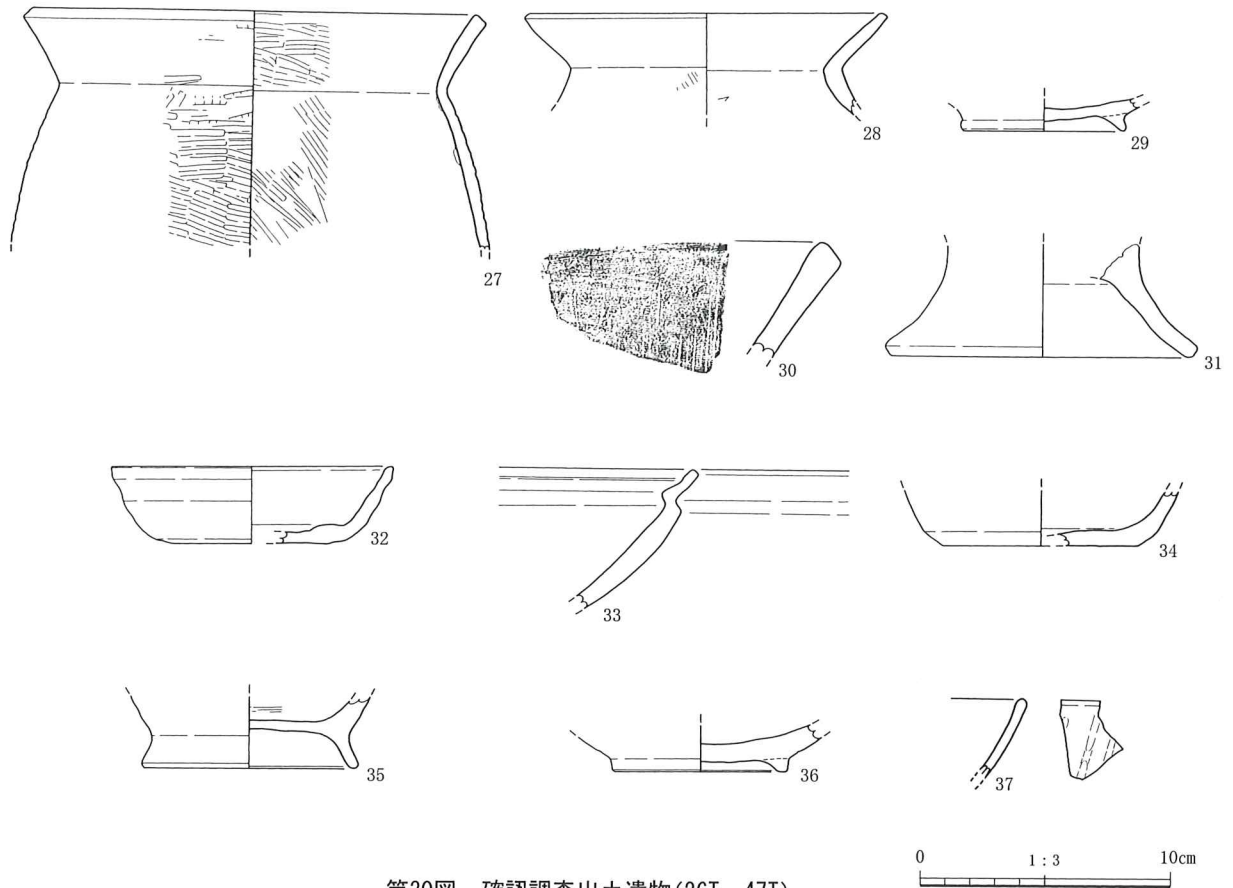
1は弥生時代後期の甕で、頸部で強く屈曲する。2は青磁蓮弁文碗である。外器面に蓮弁の一部がある。3は壺口縁部で、頸部以下の内器面に幅の広いヘラケズリを施す。4は壺頸部で、接合部が明瞭に残る。5は手捏土器の坏形で、頸部でわずかに屈曲する。6も手捏土器の坏形で、5と比べるとかなり浅い。7は土製模造鏡で、鏡面が大きく反る。8は底面糸切りの土師器皿で、径が大きい。9は瓦質土器の壺で、高台内を削って成形している。10は輪状つまみの付いた須恵器蓋で、天井部の中位まで回転ヘラケズリを施している。11は石庖丁で、孔は両面からの穿孔である。表面の摩耗が著しい。12は須恵器坏で、荒尾産と見られる。13は玉縁の白磁碗で、大きな玉縁の口縁である。14は口唇部でわずかに肥厚・外反する青磁無文碗である。15は瓦質土器の鉢である。口縁部の3条の突帯で上下に区画し、二種類のスタンプ文を入れる。16は弥生土器の壺で、幅の広い突帯を持つ。突帯内にも幅広の刻みを施す。17は同安窯系の青磁皿である。18は土師器の坏で焼成が悪く、表面の剥落が著しい。19は鉢で、外器面の底部付近には工具ナデを行っている。20は土師器高台付坏で、推定高台径6.6cmを測る。21は青磁碗の底部で、高台内と見込みでは釉薬を掻き取っている。22は縄文土器の鉢で、貼付文が残っている。23は刻目突帯を持つ壺口縁部である。24は弥生時代後期の脚付甕の底部である。底部は薄い。25は土師器甕で内器面頸部以下はハケメの後にヘラケズリを施している。26は広口の壺口縁部である。口縁まで直線的に伸びる。27は弥生時代後期の甕で、外器面体部はタタキ調整、内器面はハケメ、口縁部に赤彩の痕跡が残る。28は弥生時代後期の甕で、口縁部は薄い。29は瓦器碗の底部である。全体的に薄い。30は瓦質の播鉢で、7本ほどの播目が密に入る。31は弥生時代後期甕の脚部で、しっかりとした作りである。32は表面の剥落が激しいが、黒色土器と見られる。33は縄文晩期の浅鉢口縁部で、口縁下で強く屈曲している。34は土師器の坏で、摩耗のため底部の調整が確認できない。35は土師器高台付坏で、高台が約1.4cmと高い。36は見込み部が広い器形と見られる。37は細蓮弁文碗の口縁部である。あまり発色が良くない。

(4) まとめ

今回の調査で検出された主な遺構は、Ⅲ層下位またはⅣ層上位から検出した杭列がある。調査区全体的に検出したが、13-1・20・24・49-1・44・18・32トレンチで検出した杭列は、直線的に並ぶとみられ、北西から東南にかけて少なくとも長さ105m以上の杭列であると考えられる。また、27・29・30・31・34・36・39トレンチで検出した杭は、位置関係から直線的には並ばないが、カーブしながら並ぶ可能性もある。杭列には、杭が密な部分と少ない部分があり、トレンチによっては杭が少ない部分を掘削していることも考えられ、杭列はさらに延びる可能性がある。



第29図 確認調査出土遺物(7T~26T)



第30図 確認調査出土遺物(26T～47T)

15 トレンチと19 トレンチの交差部分では、古墳時代のミニチュア土器片が集中して検出された。明瞭な掘り込みは検出されず、Ⅲ層に相当する部分からの出土であったが、遺構の可能性が強いと思われる。

全体的な層位の内容に関しては前述したとおりであるが、特にⅡ層とⅢ層が明瞭に区分されることから、堆積の状況に変化があったことが認められる。時期の特定は現状では困難であるが、Ⅲ層以下では今のところ染付などの近世の遺物は検出されていない。また、調査区北側では、堆積の様相が異なる部分があるようで、52～58 トレンチでは粗い砂層が検出された。53 トレンチでは、表土の直下から粗い砂層が堆積しており、Ⅱ、Ⅲ層は確認されずⅣ層に至る。調査区北側の市道大坊迫間線より北側にかけて堆積の状況が南側と異なるようである。

3. 玉名平野の水利を中心とした現況について

(1) 近代以降の水田の変遷

菊池川下流域の主な水田地帯である低湿地は、地形的に大きく4つに区分される。菊池川右岸では、大字玉名、両迫間、河崎の平野部の玉名牟田、旧岱明町を中心とした大野牟田である。菊池川左岸では、木葉川以北の梅林から小田にかけての梅林牟田と、伊倉の丘陵から南に広がる平野部の小田牟田である。今回調査を行った玉名牟田は、菊池川と繁根木川に挟まれた南北約2.7km、東西約2kmの菱形を呈する平野であり、全体で400～500haほどの耕地面積がある。以下、近代以降を中心に水田と灌漑の状況を時期ごとにまとめる。

近世～明治初頭まで

加藤清正は肥後入国後、各地で治水工事を行い、玉名地方では菊池川の流路変更などが有名であるが、『玉名郡誌』によると、玉名牟田に関しては両迫間から河崎にかけての堤防を整備したとされる。また、繁根木川は南関往還（関町道）沿いに流れ、高瀬の大覚寺裏に打ち出していたのを現在の流路に変更したとされる。繁根木川の流路については、田辺哲夫氏は字河崎の範囲を繁根木川の旧河道として推定しており、現在の流路から東に流れて河崎の集落付近で菊池川に合流していたとされる。

文化年間（1804～1817）には、滑石村庄屋大野十左衛門が河崎から取水し、「十左衛門堀」（大野牟田溝）と呼ばれる水路を開削した。さらに天保年間（1830～1844）には三村章太郎が迫間川に堰を設け、取水量を増加させるなど、大野牟田の灌漑については順次改良されてゆく。玉名牟田の灌漑については、平野部北西側の繁根木川に船島堰を設けてそこから取水していたとみられる。「玉名郡村誌」と「玉名郡村図」によって当時の状況をみると、玉名村、両迫間村、河崎村各村の項に用水路として3本の溝の記載がある。「船島溝」は、船島堰から平野部北側の丘陵にそって流れ、現在の字彼岸田の南から東側の字水町、字島屋敷にかけて流れており、13町3反分の用水に供しているとある。「柳町溝」は欽屋堤の東側から字石町と字龍王田の間、字柳町と字フケの間を通り玉名平野のほぼ中央付近を南北に流れていた。43町分の用水に供するとある。「前田溝」は、現在の両迫間八幡宮から南西側の字古閑前にかけて流れており、11町分の用水に供するとある。これらの溝が玉名平野の主要な灌漑用水路として合計67町3反分の水田に利用されていたとみられる。

明治中期～太平洋戦争まで

明治20年代ごろから、農業技術の進展とともに田区改正と呼ばれる農地整備事業が行われた。耕地の整形・交換と暗渠により排水改良を行うものである。静岡県で明治5年と明治8年、遠海報徳社の名倉太郎馬らが畦畔や道路を直線化したのが近代的な田区改正の発端である。さらに明治20年、鈴木浦八が同県富岡村で43haの整理を行った。この方式「静岡式」は、一辺約60間（約108m）の道路・水路で区画された正方形の大区画の中に、6間×12間～15間（2.3畝～3畝）の区画が50枚程度あるというものである。一方、西欧の土地整理を模範とし、政府の奨励により進められたのが「石川式」田区改正である。これは区画が6～8畝と広く、道路・水路がすべての区画に面しているため、用排水管理にも適している。石川式は、石川県の高田久兵衛らが自らの耕地をモデルケースとしたのを端緒としている。

田区改良の流れを受けて明治32年に耕地整理法が制定され、同42年には灌漑排水が事業の主な目的にされるなど法的にも整備されていった。この時期に実施されたのは、埼玉県鴻巣町・常光村で明治35年に着工された方式をモデルとする「鴻巣式」である。区画は30間×10間（約54m×18m）の1反（10a）で、すべての区画が用排水路と道路に接していた。その他の法令については明治23年に水利組合条令、同41年に水利組合法が制定され、水利組織の整備もされていった。

このような中で、玉名市域では明治34年に岱明町の鍋、高道で180.8haの耕地整理が実施されている。続いて大正4年には梅林牟田の旧小田村字大町、水町付近で耕地整理が実施されており、大正12年6月の村議会で耕地整理施行後の大字名・字名の変更を承認している。大正時代後半ごろには旧玉名村、両迫間村で耕地整理が実施されたようである。史料等では確認し

ていないため範囲や内容の詳細は不明であるが、両迫間村の日渡、用田、馬草田、古閑前、前田では字境が変更されたようである。昭和29年発行の1万分の1の地図では、字境が変更された部分、特に日渡及び用田付近では、前述した鴻巣式とほぼ同様の区画がみられ、現在も概ねそのままの区画である。用水路は、繁根木川の船島堰からの取水による、船島溝、柳町溝、前田溝の灌漑系統から、平野部北東側からの現在の2号幹線水路とほぼ同じ位置に整備された水路による灌漑系統に切り替わったと考えられる。それまでの用水路は主に排水路になったようである。後述する水利統合前の段階では、玉名第一土地改良区が玉名牟田168haを灌漑していた。また、菊池川左岸の梅林牟田では、小田小学校から南にかけての平野部にも鴻巣式の区画がみられ、この時期に玉名牟田同様、耕地整理が実施されたとみられる。

水利組織の動向については、明治31年に元坂下郷養水組合町村会が、菊池川の両迫間地点に土俵堰を設け、それまで河崎地点で取水していた用水と併せて取水量の増加を図った。さらに迫間用水路普通水利組合となって、玉名牟田より下流の範囲の水利を管轄していた。大正時代になると、高瀬発電所の建設に伴いそれまでの自然取水から電気揚水となり近代化されていった。

太平洋戦争後～現在

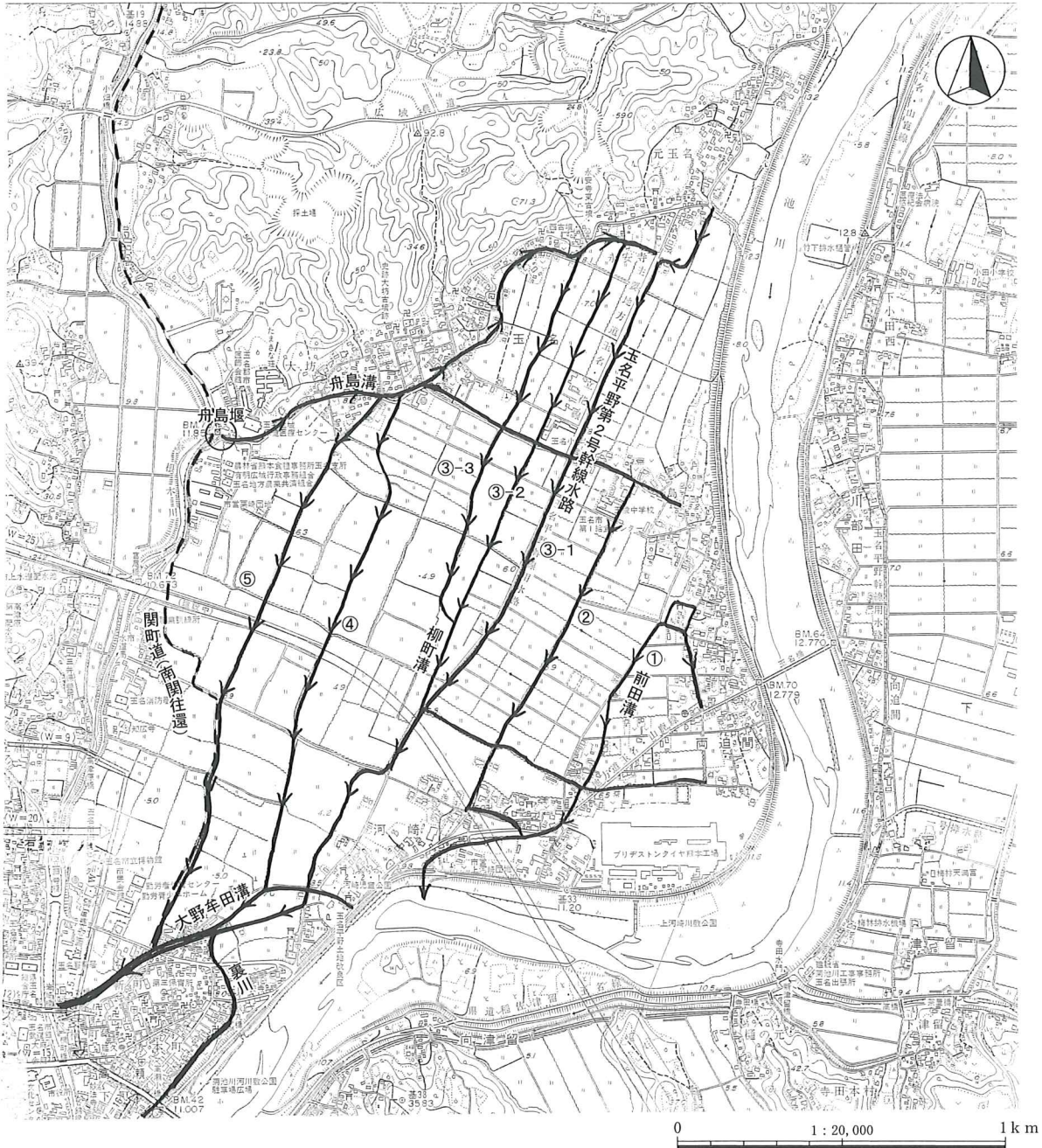
昭和24年に土地改良法が制定され、昭和38年には圃場整備事業が制度化された。トラクターなどの機械力の発展に対応した新しい耕地の整備であり、水田の一区画が30a(100m×30m)ほどに整備され、水路、道路も併せて整備された。

この時期の玉名市では、昭和36年にそれまでの土地改良区が合併し、玉名平野土地改良区が設置された。そして昭和39年、菊池川に白石堰が完成し、そこからの取水で昭和45年菊池川左岸に玉名平野第1号幹線水路、右岸に玉名平野第2号幹線水路が設置され、ほぼ現在の水路網が形成された。2号幹線水路は、平野部南側の地点で大野牟田溝と接し、概ね同じルートを通して大野牟田へと流れている。菊池川左岸は、白石堰から下流の玉名市岱明町まで水系が一つに統合されたのであった。

(2) 現在の灌漑状況について(第31図)

灌漑の状況については、用水は白石堰からの2号幹線水路の系統が中心である。そこからの枝線により、水路沿いを中心とした平野部東側に用水を供給している。排水は、平野部全体で次の①～⑤の5系統に大きく分かれる。①は両迫間八幡宮から西南側に流れる水路(前田溝)で、八幡宮の南側の字前田、宮前、馬草田、古閑前、西津留付近の水田の排水を行う。②は玉陵中学校から南に延びる水路で、字島屋敷から南の字横枕まで直線的に整備されている。③-1は2号幹線水路東側に隣接して設置してある水路で、水路以東の③-2(柳町溝)と③-3と合流して平野中央部の水田の排水を行う。④は字中無田と勘取の間を流れる水路で、南に流れて大野牟田溝と合流する。⑤は勘取の西側を流れる水路で、③と概ね並行して南に流れ、さらに関町道沿いを流れる。①～⑤の各水路には、堰が設けられている部分があり、水量の調節によって用水路の機能を持つ部分もある。

これらの水路のうち、①(前田溝)と③-2(柳町溝)については、少なくとも明治時代から用水路として使用され、大正時代に耕地整理が行なわれた後は主に排水路になったとみられ、位置は現在も概ね変わらない。②と③-1は2号幹線水路が完成する以前の耕地整理の時点で



※玉名平野部の大字境

第31図 玉名平野の水利状況図

第2節 確認調査の成果

整備された用排水路系統であり、③-2と③-3と併せて現在も灌漑の中心として機能している。④は、『玉名郡村図』の絵図には字油出以北が記されていないため、南側を含め近代以降に整備されたのかもしれない。⑤も同様、絵図には記載がみられない。④・⑤は、2号幹線水路の系統以外の平野部西側の排水路となっており、①～③と比べて小規模である。①と②は合流して秋丸排水樋門から直接菊池川に流れ込む。③と④は平野部南側の太野牟田溝と合流し、秋丸の地点で裏川へ分離し、高瀬方面へと流れている。⑤は太野牟田溝と裏川への分離地点より下流で太野牟田溝と合流する。

(3) 地形及び地割について (第32図)

現在の玉名平野は、全域がほぼ水田または畑であり、菊池川の自然堤防上に河崎、両迫間の集落が形成されている。河崎と両迫間の間の字西津留は、昭和30年ごろまでは桑畑であり、菊池川に沿った一連の自然堤防であったようである。また、現在の玉陵中学校の周辺は「島」、そこから西側の字下深田方面は「岡」という行政区であり、その付近も自然堤防をイメージさせる地名である。また、字土井内から田楽にかけて、現在は痕跡が確認できないが「鉄屋堤」があったようである。

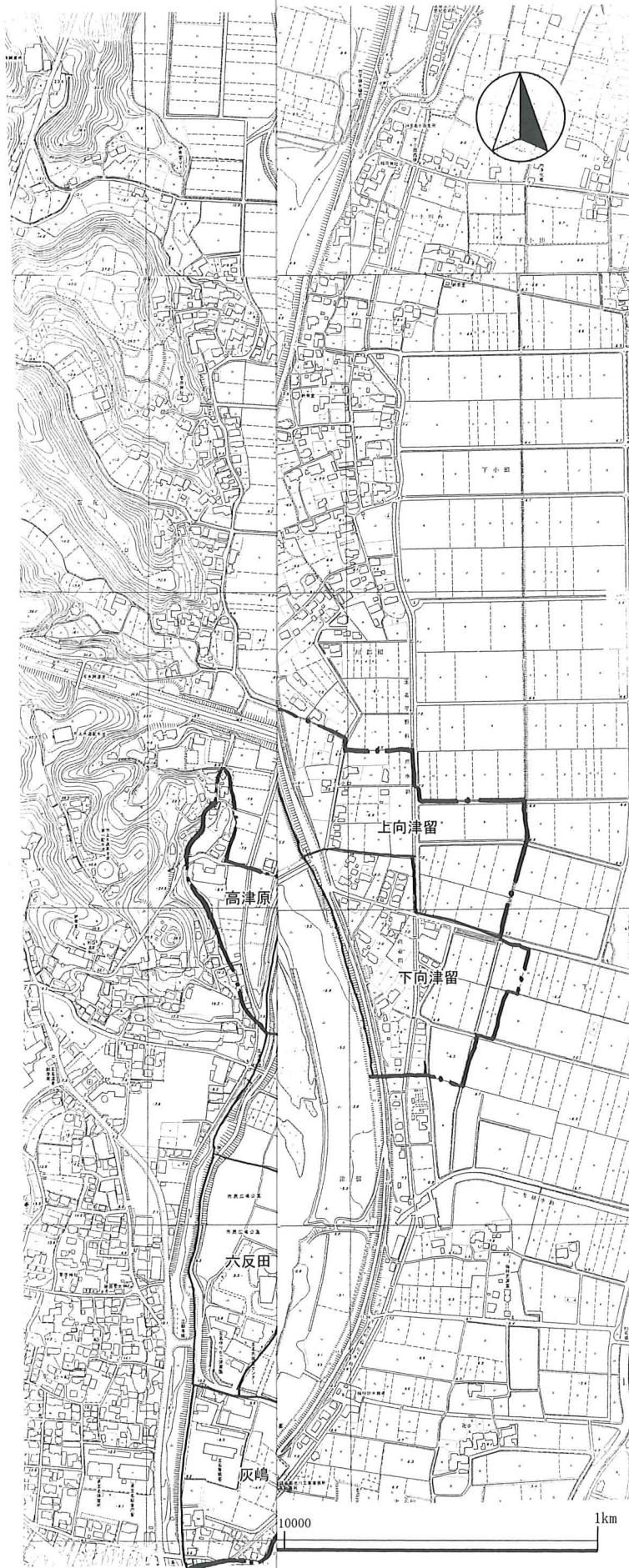
平野部南側の秋丸にも字「嶋」があり、近世の墓地が島状に点在し標高も若干高い。その北側の字上鶴町の地割も整った区画ではなく、その付近も流路の存在が想定される。

現在の字境は、前述した大正時代の耕地整理で若干の変更があるが、全体で概ね近代初頭における旧村の字境とほぼ同様である。このことから、玉名平野の区画で、耕地整理されていない部分については、地割の起源が近世または中世まで遡り、区画をそのまま継承していると思われる。特に平野北西側の字勘取付近は、一辺約100mの方形の区画が連続しており、古代の条里的な区画が顕著にみられる。

今回の確認調査では、全体で粘性土の堆積であったが、調査区北側には粗い砂層が検出された。東側に隣接する、県道拡張に伴う発掘調査でも同様の砂層が検出されており、玉名平野の北西側、字土井内東側の市道改良工事に伴う確認調査でも、主に砂層の堆積であった。状況から、繁根本木川方面から字土井内、田楽、道の下にかけての流路の存在が想定されるため、今後の調査で注意が必要と思われる。

参考文献

- 熊本県教育委員会編 1977 『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告第25集 熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会文化課編 2006 『くまもと文化財通信』第23号 熊本県教育委員会
- 熊本県教育会玉名郡支会編 1972 『玉名郡誌』名著出版(再刊)
- 熊本県土地改良史編集委員会編 1990 『熊本県土地改良史』熊本県
- 坂田和弘編 2004 『柳町遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第218集 熊本県教育委員会
- 高谷和生編 2001 『柳町遺跡』熊本県文化財調査報告第200集 熊本県教育委員会
- 竹田宏司編 2002 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ』玉名市文化財調査報告第11集 玉名市教育委員会
- 田中康雄編 2008 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅳ』玉名市文化財調査報告第17集 玉名市教育委員会
- 玉名市史編集委員会編 1992 『玉名市史 資料篇2地誌』玉名市
- 玉名市史編集委員会編 1992 『玉名市史 資料篇1絵図・地図』玉名市
- 玉名市立歴史博物館ころろピア編 1998 「玉名市の歴史Ⅰ～玉名の繁栄のはじまり～」
- 玉名市立歴史博物館ころろピア編 2005 『玉名市史 通史篇上・下巻』玉名市教育委員会
- 中川 斎 1927 『加藤清正公と高瀬川の文化』樂只亭文庫
- 農業土木歴史研究会編著 1996 『大地への刻印 ～この島国は如何にして我々の生存基盤となったか～』全国土地改良事業団体連合会
- 兵谷有利編 2006 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅲ』玉名市文化財調査報告第15集 玉名市教育委員会



第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

九州新幹線新玉名駅周辺整備に係る両迫間日渡遺跡の発掘調査は計4区の調査区に分け実施した。平成20年3月に調査開始した西側～南西側水路部分を調査Ⅰ区、8月調査開始の調整池（B-2池）部分及び車道（西半）部分をそれぞれ調査Ⅱ区、調査Ⅲ区、12月調査開始の車道（東半）をⅣ区とし、以後この呼称を用いる。両迫間日渡遺跡の略号は「RHW」であり、遺物への注記等で調査区の略称を用いる際にはRHWⅡ区等と略した。

調査区内は日本測地系に基づき10m×10mを基本としたグリッドを設定した。2002年4月1日の改正測量法の施行に伴い、以後世界測地系へ移行することとされているが、九州新幹線建設工事および新玉名駅周辺整備事業はすべて日本測地系によっており、熊本県文化課による新幹線関連の発掘調査も同様のため、今回の発掘調査では日本測地系を用いた。

グリッド名称はX方向に数字、Y軸方向に英字を付し両者の組み合わせで呼称する。なおその起点は今後新玉名駅周辺整備事業の進行に伴い隣接地を含め周辺での発掘調査が予想されることから、両迫間日渡遺跡の範囲を全て覆うようX：-7,000、Y：-40,000（日本測地系）に設定している。グリッドの呼称は、「AD-28グリッド」と表記し、10m×10mのグリッドをさらに4分割した場合にはその方角を表すアルファベットを用い「AD-28NE」と表記する。

なお、調査Ⅰ区は幅が狭小であることから上記のようなグリッド調査を実施できないため独自に調査Ⅰ区内をさらに1～14区に分けた。また調査Ⅳ区においては調査区幅が1グリッドを10m単位とするには狭小であるため、5m×5mのグリッドを測量基準及び遺物取上げの基本単位とした。

2. 調査の方法

(1) 調査Ⅰ区

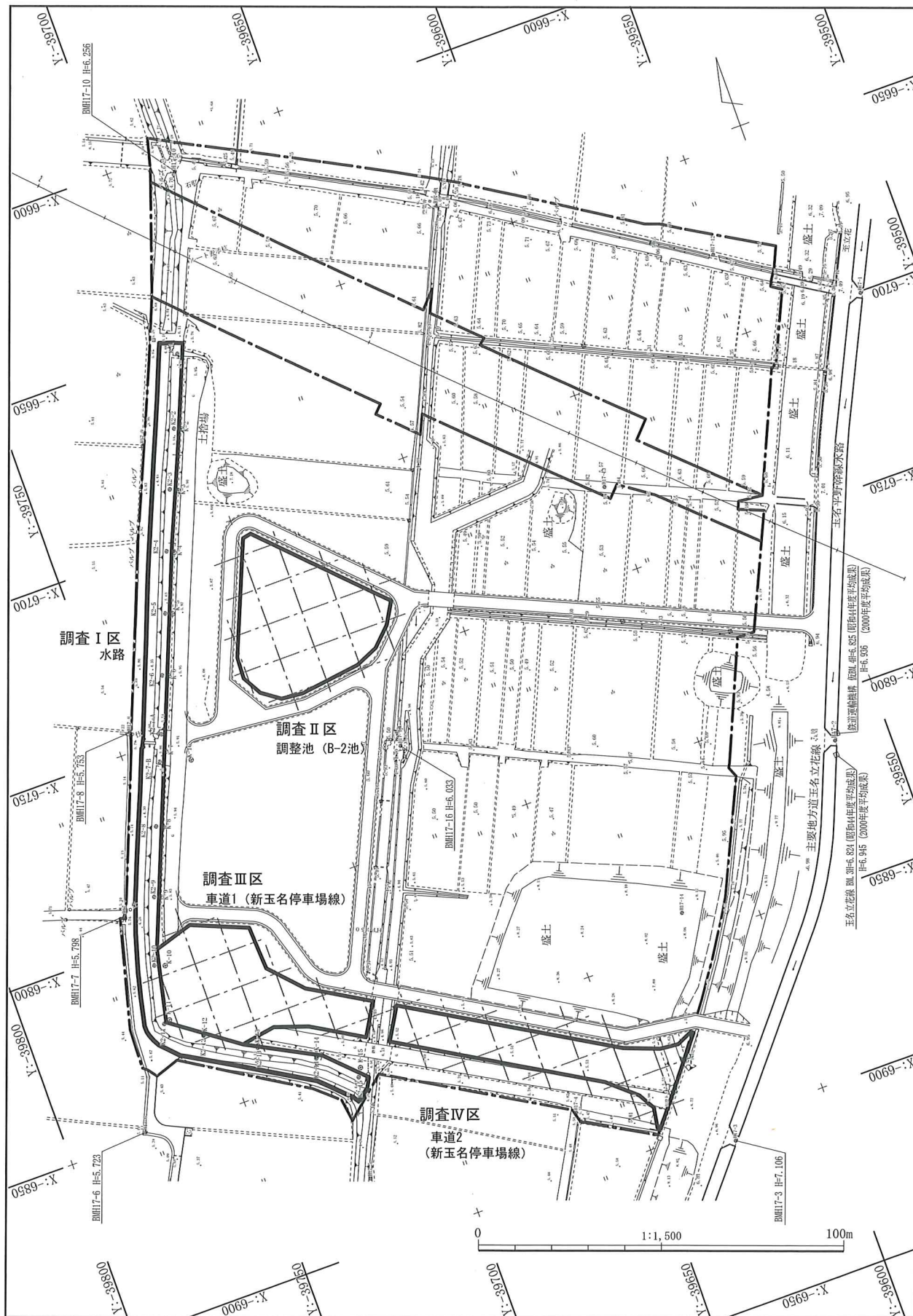
[調査区]

調査対象は水路部分で面積は1,565㎡である。現状が水路であるため調査区の水止めが必要であったため調査区外周の西側に矢板による水止めを行い、水路上流の北側と水路下流の東側には農業用防水シートと大型土嚢袋による水止めを行った。しかし、5月の田植え時期には地下から湧き上がる水量が予想以上であったため、6月に調査区外周の東側と水路上流側、水路下流側にも矢板を施工し、調査区全体を矢板で囲んだ。そのため、調査区西側は明かり掘りの予定であったが矢板を施工したことにより調査区が約1～1.5m狭くなった。

長さ240m、幅約6.5mの調査区を土層観察用ベルト幅2mで仕切り、長さ約16mの14区に設定し、調査区北側から1区とした。土層観察ベルトは水路内の湧水による崩落の可能性があるため広めに設定しており、基部に測量用杭を各1箇所設置しK-○と番号を付し、ベルト下流側がK-○の○区と調査区の名を決めた。調査区の6区と7区の間には昭和に建設された水門があり、水門の上下約5mはすでに攪乱されているため、今回の調査区からは除外し、水門撤去時に立会を行ったが遺構、遺物共に確認されなかった。

[掘削方法]

現在の水田面と水路内の湧のみをバックホーを用いて掘削を行った。近・現代頃のものと思



第33図 調査区配置図

われる水田面から基本的には移植ゴテを用いて掘削を行った。遺構、遺物の検出状況を適宜留意して、鍬及びスコップで掘削した部分もある。遺構掘削は移植ゴテおよび草削り鎌を用い、水分を多く含む水路内の土（潟）はバケツや柄杓で掘削を行った。廃土は一輪車が使用できない区では、ベルトコンベアーを使用した。

〔記録方法〕

調査区を土層観察用ベルトとベルト下流側を同一番号として14区を設定し、図面は各調査区の水田状遺構を $S = 1 / 50$ で測量した。検出された遺構は $S = 1 / 10$ または、 $S = 1 / 20$ で調査員および作業員が実測した。調査区の土層断面図は $S = 1 / 20$ で実測した。

記録写真は基本的に35mmのカラーリバーサルフィルム、カラーネガフィルムで撮影した。適宜中判（6×7）カメラでもカラーリバーサルフィルムで撮影し、一部補助的にデジタルカメラでの撮影を行った。

〔遺物採取〕

出土した遺物の量は少ないが、時期判定に可能な遺物については、基本的に各区の平面図に位置とレベルを記入し、通し番号を付し取り上げている。遺物ラベルには層位および日時、取上げ者をカードに記入している。

〔遺構検出〕

水田面を面で検出することが困難なため、各調査区に設定した土層観察用ベルト下を先行して掘削を行い、遺構を検出した。その後同層まで平面を掘削し、畦畔状遺構を検出した。検出した遺構面はSXのアルファベットと2桁の通し番号を付した。

〔その他〕

調査区内は現在の水路内であり水路の両端に、調査用の排水路を確保することが出来なかった。よって、水路の最深部に調査用排水路を設け、調査面が深くなるにつれ、再度調査用排水路を設けた。雨が降った際は、溜池状になるため北から南に流れるように調査用排水路を設け、14区東端の釜場から排水を行った。

(2) 調査Ⅱ区

〔調査区〕

調査対象は駅前広場の調整池（B-2池）で、調査対象面積は約1,250㎡である。

〔掘削法〕

事前確認調査成果から基本土層のⅢ層を調査対象とし、それより上位は調査員立会いのもと表土剥ぎとしてバックホーを用い掘削した。遺物包含層掘削については、基本的に移植ゴテおよび草削り鎌を用いる。遺構掘削も移植ゴテおよび草削り鎌を用い、特に畦畔状遺構の検出にあたってはその微かな隆起を削平しすぎぬよう、竹ベラを用いた部分もある。

〔記録方法〕

発掘調査前の地形測量を行う計画であったが調査日程および周辺造成工事等の工程による制約により実施できず、新玉名駅周辺整備事業の実施設計の際に測量された造成前の図面（ $S=1/500$ ）を入手しこれに代えた。検出および発掘した遺構は遺構の内容に即し $S=1/20$ あるいは $S=1/10$ で調査員および作業員が実測した。水田址に伴う杭列および畦畔については、遺構の規模が大きく相互の方向、関係性が重要となるため、如何なるスケールでも作図できるよう

に検出した段階で光波測距儀を用いたアウトラインの測量を行い、座標値を記録、配置図を作成した。これは残存状態が悪い畦畔を完全に露出した後、降雨湛水等および作業時の踏み締めにより遺構が損壊し図化の機会を失うことを防ぐためでもある。測量データはデジタルデータを台帳に整理・管理し、適宜出力を行い平面図および紙台帳としても保管している。

記録写真は、消滅する遺跡の最も克明な記録であるというその性質上、将来にわたり文化的資産として活用できる明瞭・精緻さを有する必要があることを念頭に、主に中判サイズのカラーリバーサルフィルム、モノクロフィルムで撮影し、報告書掲載など後の活用が確実なカットは大判(4×5)カメラでも撮影した。またメモ写真またはプレゼンテーションに用いる画像に限定しカラーネガフィルム(35mm)およびデジタルカメラ(2592×1944画素以上)でも撮影している。

記録図面、記録写真とも散逸を防ぐためそれぞれ通し番号を付し台帳に記載、管理して散逸を防いだ。特に記録写真は撮影機材、撮影条件によってその質に差が著しいことからシャッタースピード、絞り値、太陽光などの撮影条件をカットごとに記録し、撮影技術の向上に努めた。

〔遺物採取〕

出土遺物は、グリッドごとに層位および出土日時を記録し一括して取り上げ、各グリッド内において出土状況に粗密が認められるときは1グリッドをさらに4分割した単位をもって取り上げた。また全体的に遺物出土量が多くはないことから、時期判定が可能な遺物、報告書に実測図を掲載することが必要と認められる遺物もしくは自然遺物について、出土層位を判定した上で光波測距儀を用い、平面位置および高さを記録し測量成果台帳に記載、管理している。なお、この作業はⅢc層以下は原則としてすべての出土遺物を対象とした。さらに遺構内出土の遺物は出土状況に記録する必要があると認められる際には出土状況を図化した後取り上げている。

調査区内において出土あるいは採取した遺物はすべてラベルごとに取り上げ番号を付し、出土遺物台帳にラベルの内容と併せ記載し散逸を防いだ。

〔遺構検出〕

調査に際して検出した遺構については、検出・確認した段階で遺構を表す「S」に種別をあらわすアルファベットと2桁の通し番号を付し呼称する。ただし、検出した段階では遺構と認識していたものが近現代の攪乱であったり自然の落ち込みなどであったりした場合には欠番となる。なお発掘調査進行に並行して随時出土遺物の洗浄、接合、注記等の出土遺物整理作業を行っているが、遺構出土の遺物については保留し、調査終了後、遺構名の調整後注記することとした。

〔その他〕

調査区内は表土剥ぎ後、周辺より1.0m以上標高が低く、湧水および降雨時の湛水により調査不可能になる事態が予想された。そのため調査区周囲の矢板に沿って幅0.4mの排水溝を掘削し、釜場へと流しポンプで排出し、さらに各グリッドの東辺および南辺に幅0.3mのサブトレンチをL字状に掘削、調査面の湛水を避けた。このサブトレンチは調査区内の微細な地形の変化、堆積土壌の平面分布および傾斜等を観察し、併せて検出が困難とされる畦畔等水田遺構の存在を平面に先立ち掴むための役割を担う。

(3) 調査Ⅲ区

〔調査区〕

調査対象は駅前広場のアクセス道（新玉名停車場線）で、調査対象面積は1,116 m²である。

〔掘削法〕

事前確認調査及び隣接する調査Ⅰ区の調査成果から基本土層のⅡ層下位からを調査対象とし、それより上位は調査員立会いのもと表土剥ぎとしてバックホーを用い掘削した。遺物包含層掘削については、基本的に移植ゴテおよび草削り鎌を用い、上部の包含層は鍬を用いた。特に祭祀遺構の遺物検出にあたっては、破損を防ぐため竹ベラ等を用いた部分もある。

〔記録方法〕

検出および発掘した遺構は遺構の内容に即しS=1/20あるいはS= 1/10で調査員および作業員が実測した。また畦畔状遺構については光波測距儀を用いたアウトラインの測量を行い、座標値を記録、配置図を作成した。祭祀遺構S-14に関しては作図に相当の時間を要することから外部委託した。

記録写真は基本的に35 mmのカラーリバーサルフィルム、カラーネガフィルムで撮影した。一部補助的にカラーネガフィルム、コンパクトデジタルカメラでの撮影を行っている。なお祭祀遺構周辺については調査Ⅱ区調査担当者が中判サイズのカラーリバーサルフィルム、モノクロフィルム、大判（4×5）カメラで撮影している。

記録図面、記録写真とも散逸を防ぐためそれぞれ通し番号を付し台帳に記載、管理して散逸を防いだ。

〔遺物採取〕

出土遺物は、グリッドごとに層位および出土日時を記録し一括して取り上げた。また、弥生時代～古墳時代の包含層では一部、出土層位を判定した上で光波測距儀を用い、平面位置および高さを記録し測量成果台帳に記載、管理している。祭祀遺構出土の遺物はすべて実測図上でナンバリングを行い、1点ずつ平面・垂直位置を記録し取り上げている。また、玉類等の微細遺物を採取するため祭祀遺構周辺を掘削した排土はすべて土嚢袋に採集し、水洗選別を期した。

調査区内において出土あるいは採取した遺物はすべてラベルごとに取り上げ番号を付し、出土遺物台帳にラベルの内容と併せ記載し散逸を防いだ。弥生時代及び古墳時代の遺構出土遺物については、各遺構ごとに通し番号を付して出土遺物台帳に記載し管理している。平成20年度の整理作業時に実施した水洗選別により検出された玉類は別に水洗選別遺物台帳を作成している。

〔遺構検出〕

調査に際して検出した遺構については、検出・確認した段階で遺構を表す「S」に通し番号を付し呼称した。

〔その他〕

調査区内は表土剥ぎ後、周辺より1.0m以上標高が低く、湧水および降雨時の湛水により調査不可能になる事態が予想された。そのため調査区周囲の矢板に沿って幅0.4mの排水溝を掘削し、釜場へと流しポンプで排出した。また確認調査時のトレンチが調査区内を縦横に走っているため、埋土を掘り上げ土層観察および釜場への排水溝として活用した。

(4) 調査Ⅳ区

〔調査区〕

調査対象は駅前広場のアクセス道（新玉名停車場線）で、調査対象面積は約 870 m²である。

〔掘削法〕

事前確認調査成果から調査区西側（AG-14 グリッド以西）は基本土層のⅡ層下部、東側は基本土層のⅢ層を調査対象とし、それより上位は調査員立会いのもと表土剥ぎとしてバックホーを用い掘削した。

遺物包含層掘削については、基本的に移植ゴテおよび草削り鎌を用いた。遺構掘削も移植ゴテおよび草削り鎌を用い、遺物が集中する地点においては破損を防ぐため、竹ベラを用いた部分もある。

〔記録方法〕

発掘調査前に調査区および周辺部の地形測量を行い、デジタルデータ化した。遺構実測は検出および発掘した遺構の内容に即し $S = 1/20$ あるいは $S = 1/10 \cdot 1/5$ で発掘調査員および発掘調査技師が実施した。記録図面はすべてデジタルトレースを行い、整理・管理している。

記録写真は、消滅する遺跡の最も克明な記録であるというその性質上、将来にわたり文化的資産として活用できる明瞭・精緻さを有する必要があることを念頭に、主に中判サイズおよび 35mm サイズのカラーリバーサルフィルム、モノクロフィルムで撮影した。また、メモ写真および業務管理写真はカラーネガフィルム（35mm）およびデジタルカメラで撮影をした。

記録図面、記録写真とも散逸を防ぐためそれぞれ通し番号を付し台帳に記載・管理している。

〔遺物採取〕

出土遺物はⅡ層については1グリッドを4分割した単位ごとに層位および出土日時を記録し一括して取り上げた。Ⅲ層出土の遺物は出土層位を判定した上で光波測距儀を用い、平面位置および高さを記録し、図化している。また原位置から外れた遺物および細片の一部は1グリッドを4分割した単位ごとに取り上げた。遺構内出土の遺物は、出土状況に記録する必要があると認められる際には出土状況を図化した後取り上げている。

調査区内において採取した遺物は散逸防止のため、すべてラベルごとに取り上げ番号を付し、出土遺物台帳にラベルの内容と併せ記載した。

〔遺構検出〕

調査に際して検出した遺構については、検出・確認した段階で遺構を表す「S」と3桁の通し番号を付し呼称する。ただし、検出した段階では遺構と認識していたものが近現代の攪乱であったり、自然の落ち込みであったりした場合には欠番となる。遺物の洗浄、接合、注記などの遺物整理作業は調査終了後行った。

〔その他〕

調査区内は表土剥ぎ後、周辺より 1.0m 以上標高が低く、湧水および降雨時の湛水により調査困難になる事態が予想された。そのため調査区周囲の矢板に沿って幅 0.3m の排水路を掘削し、釜場へと流しポンプで排出することにより調査区の湛水を避けた。また排水溝および試掘トレンチの土層確認により、微細な地形の変化、堆積土壌の平面分布および傾斜等を観察し、遺構の存在を平面に先立ち把握することに努めた。

第4表 確認調査出土土器観察表

棟号	種別	器種	トレンチ	層位	法量 (cm)			色調		器面調整			胎土	備考
					器高	口径	頸径	底径	外面	内面	外面	内面		
29	弥生土器	甕	7	暗灰色土	(3.0)			灰白色、に ぶい黄褐色	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm大の石英、長石を多く含む。		
29	青磁	碗	11	II 1 ~ II 2	(2.6)	(4.7)		灰オリーブ 色	灰オリーブ 色	回転ナデ、施軸	回転ナデ、施軸	磁胎		
29	土師器	壺	15	排土	(5.0)	(18.2)		にぶい黄橙 色	浅黄褐色	ハケメ後ヨコ ナデ、ハケメ後ナ デ	ヨコナデ、ヘラ ケズリ	1mm大の石英を多く含む。		
29	土師器	壺	15	排土	(5.3)			灰白色	浅黄色	ハケメ	調整不明	1mm大の石英を多く、1mm以下の雲母、赤色鉱物を少量含む。		
29	手捏土器	鉢	15	排土	5.0	5.3		明黄褐色、 黄灰色	にぶい黄橙 色	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	1mm大の石英、長石を多く含む。		
29	手捏土器	鉢	15	S-01	2.3	4.0		浅黄色	浅黄色、に ぶい黄色	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	1mm以下の輝石をまばらに、1mm大の石英をわずかに含む。		
29	土師器	皿	15	排土	(1.2)	(9.6)		橙色	褐色	ヨコナデ、回転 糸切り	不明瞭	1mm以下の長石、赤色粒子をわずかに含む。		
29	瓦質土器	壺	15	排土	(2.8)			にぶい橙色、 褐灰色	褐灰色	回転ナデ、回転 ヘラケズリ	回転ナデ	1mm以下の輝石をまばらに含む。		
29	須恵器	蓋	19	III 1	2.6	(13.2)		灰白色	紫灰色	回転ナデ	回転ナデ、不定 方向ナデ	1mm以下の長石、黒色鉱物をわずかに含む。		
29	須恵器	坏	17	排土	(1.6)	(9.8)		灰色	にぶい橙色	回転ナデ、回転 ヘラケズリ	回転ナデ、回転 ナデ後ナデ	1mm大の長石、黒色鉱物をわずかに含む。		
29	白磁	碗	17	排土	(3.0)			灰白色	灰白色	回転ナデ、施軸	回転ナデ、施軸	磁胎		
29	青磁	碗	17	排土	(3.2)			にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	回転ナデ、施軸	回転ナデ、施軸	磁胎		
29	瓦質土器	鉢	17	III 1 ~ III 2	(7.7)			灰色	灰色	スタンプ、ヨコ ナデ	ナデ	1mm以下の輝石をまばらに、1mm大の石英、褐色粒子を少量を含む。		
29	弥生土器	壺	18	IV 1 下 位	(3.5)			灰白色、に ぶい橙色	明褐灰色	ハケメ、ヨコ ナデ	ハケメ後ミガキ、 ハケメ	1mm大の石英をまばらに、1mm大の雲母、黒色鉱物をやや多く含む。		
29	青磁	皿	18	不明	(1.1)	(5.0)		灰白色	灰白色	回転ナデ、施軸	回転ナデ、施軸	磁胎		
29	土師器	坏	19	S-01	(2.7)	(13.2)		にぶい橙色	にぶい橙色	調整不明	調整不明	1mm大の赤色粒子を少量含む。		
29	土師器	鉢	19	IV 1 上 位	5.2	(12.8)		浅黄色	にぶい黄色	ナデ、工具ナデ、 黒斑	ナデ	1mm大の石英、長石を少量含む。		
29	土師器	高台付 坏	25	排土	(2.1)	(6.6)		にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナデ	ナデ	1mm以下の長石、雲母、輝石、赤色粒子をまばらに含む。		
29	青磁	碗	22	III 2	(2.7)	(7.1)		オリーブ灰 色	オリーブ灰 色	回転ナデ、施軸	回転ナデ、施軸	磁胎		
29	縄文土器	鉢	26	排土	(2.9)			浅黄褐色	灰色	ナデ、貼付文	ナデ	1mm大の石英、長石、褐色鉱物を多く含む。		

29	23	弥生土器	壺	26	排土	(2.1)				にぶい黄橙色、黄灰色	浅黄橙色	ハケメ後ヨコナデ、刻み目、刻目突帯	不明	1mm以下の長石、角閃石、雲母を多量に含む。
29	24	弥生土器	甕	26	排土	(4.3)				灰白色	浅黄色、灰白色	工具ナデ	1mm以下の雲母、輝石をわずかに、2mm大の石英、長石を多く含む。	
29	25	土師器	甕	26	排土	(4.7)	(19.9)			にぶい黄橙色	浅黄橙色	ハケメ後ヨコナデ、ハケメ後ラケズリ	1mm大の石英、長石、角閃石を少量含む。	
29	26	土師器	壺	26	排土	(3.7)	(11.2)			浅黄色	灰黄色	ヨコナデ	1mm以下の石英、角閃石、赤色粒子を少量含む。	
30	27	弥生土器	甕	26	排土	(9.2)	(17.6)			灰黄色	にぶい黄橙色、褐灰色	ハケメ	1mm以下の角閃石、雲母、赤色粒子を少量含む。	
30	28	弥生土器	甕	26	排土	(4.0)	(14.0)			灰白色	灰白色	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	1mm大の石英をまばらに含む。	
30	29	瓦器	碗	26	排土	(1.3)		6.3		灰色、暗灰色	暗灰色、灰色	ナデ	1mm以下の輝石をわずかに含む。	
30	30	瓦質土器	搦鉢	26	排土	(4.5)				灰色	灰色	ミガキ後楯目	1mm以下の輝石をわずかに、1mm大の褐色粒子をまばらに含む。	
30	31	弥生土器	甕	28	排土	(4.4)	(11.7)			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナデ	1mm以下の雲母、赤色粒子をまばらに、1mm大の石英をわずかに含む。	
30	32	土師器	坏	35	排土	3.0	(11.2)			にぶい褐色	にぶい黄橙色	表面剥落	1mm以下の石英、角閃石、雲母を少量含む。	
30	33	縄文土器	浅鉢	37	IV	(5.5)				青灰色、灰黄色	黄灰色、灰黄色	ナデ	1mm以下の石英、角閃石を少量、1mm大の黒色粒子、褐色粒子をまばらに含む。	
30	34	土師器	坏	44	III	(2.2)	(7.8)			橙色	にぶい黄橙色	ナデ	1mm以下の輝石をわずかに含む。	
30	35	土師器	高台付坏	45	III 5	(2.8)	(8.4)			橙色	橙色	回転ナデ	1mm以下の石英、長石、輝石をわずかに含む。	
30	36	土師器	碗	46	III 6	(1.8)	(6.8)			にぶい橙色	灰黄色	ナデ	1mm以下の長石を多く含む。	
30	37	青磁	碗	47	II 6	(3.2)				にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ、施釉	磁胎	

第5表 確認調査出土石器・土製品観察表

挿図	番号	種別	器種	トレンチ	層位	法量 (cm)		色調		器面調整		胎土/石材	備考
						長さ	幅	厚さ	鏡面	裏面	指オサエ、ナデ		
29	7	土製品	模造鏡	15	II 1 ~ II 2	(2.7)	(4.4)		灰黄色	鏡裏面	指オサエ、ナデ	細かい白色砂粒をまばらに含む。	
29	11	石器	石庖丁	17	排土	(5.1)	(9.0)	(0.7)				粘板岩か	

第Ⅳ章 調査Ⅰ区の調査成果

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

第IV章 調査I区の調査成果

第1節 層序

調査区の土層図を対比して、今回の標準的な層位を考えてみる。調査前の土地利用状況は主に水路部分が主で、一部が水田として利用されている。現状での水路の最深部は標高約4mで水田の標高は約5.5mであった。また、水路と水田の境には畦が施されており、水田面より約60cm高くなっている。水田以前の土地利用は、桑や麦などの畑作に利用されていた。古くは周辺遺跡の名称のとおり、玉名平野条里跡と同時期の水田も想定される。その土地利用の違いが土層にも反映してくると考えられる。

各土層断面に注記を行ったため、全区を通じて土層注記の統一ができていない。層の統一ができていないため、基本層序を設定することは困難であるが、水田状遺構が同レベルで確認されていることから、遺構面としての関係から層位を整理してみる。

14の調査区から15本の土層断面を記録している。調査区の各土層ベルトを南側か東側を計測し、次の6面の畦畔状遺構が確認されている。①遺構面(SX01)は標高約5.5m、②遺構面(SX02)は標高約5.2m、③遺構面(SX03)は標高約5.0m、④遺構面(SX04)は標高約4.9m、⑤遺構面(SX05)は標高約4.8mである。⑥遺構面(SX06)は標高約4.6mである。なお、⑥の遺構面は9区のみで確認されている。また、5区で杭列が確認されており5区に⑦として説明を付す。

9区の土層断面には①～⑥の各遺構面が確認されており、この層位を基準とする。

①は1層～6層までで、1層の褐色土(7.5YR4/4)は現代の畦で非常にしまっている。2層の黄褐色土(10YR5/6)は現代の畦で非常にしまっており、一部暗褐色粒を少量含む。3層の暗灰黄色土(2.5Y5/2)は現代の畦で非常にしまっており、2～3mmの黄褐色粒を少量含む。

4層の黄灰色土(2.5Y4/1)は非常にしまっており、1mm以下の砂を微量含む。

5層の黄褐色土(2.5Y5/4)は現代の水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量含む。

6層の暗灰黄色土(2.5Y5/2) 2～4mmの砂を少量含む。

近現代の畦と水田面としての利用が考えられる。

②は7層～13層までで、7-a層の黄褐色土(2.5Y5/6)は旧水田床面でしまっている。

7-b層のにぶい黄色土(2.5Y6/4)は旧水田床面でしまっている。8層のオリーブ灰色土(10Y4/2)はきめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。9層のオリーブ灰色土(10Y4/2)は弱粘質のきめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。10層のオリーブ灰色土(10Y6/2)は砂質土で2cm程の黄茶暗褐色粒を含む。11層の黄褐色土(2.5Y5/6)は粘質土で3～5mmの暗褐色粒を微量含む。12層の暗灰黄色土(2.5Y5/2)は強粘質土で微量の砂を含み、1cm程の暗褐色粒を含む。

畝状の落ち込みが平面でも確認されており、近世・近代の旧畑地としての土地利用が考えられる。

③は主に15層で、15層の褐色(7.5YR4/6)は粘質土で黄茶褐色の硬いマンガン粒を多量に含む。

旧水田の床土である。出土遺物は中世の遺物ばかりであり、中世以降の水田と考えられる。

第1節 層序

④は16層の橙色土(7.5YR6/8)はしまりが弱く、層の上部に鉄分粒が集中する。19層の暗オリーブ灰色土(2.5Y3/3)は粘土層で鉄分の塊(明褐7.5YR5/8. 中3cm弱)を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。18層の黄灰色土(2.5Y4/1)は粘土層で19層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。

遺構面③の床面が18層で16層と17層の土で、畦が形成されたと考えられる。③層よりは若干古い時期の中世以降の水田面と考えられる。

⑤は18層の黄灰色土(2.5Y4/1)は粘土層で17層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。

水田面を考えられるが、明瞭な畦は確認出来ていない。遺物は須恵器、土器が出土しており、中世以前の水田面と推測される。また、9区では18層直下の暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)は粘質土できめの細かい細かい砂を多量に含み、粘性が比較的弱い19層には杭列を基礎とする弥生時代後期の畦が確認された。

5区のみ、23層の灰色土(N4/)粘土で上層の22層に大量に含まれていた白色礫は混じらない。K-7の31層にもよく似る層で杭列が確認されている。刻目突帯文が出土しており、弥生時代前期の杭列と考えられる。

各区の相対する層位は、次の通りである。

1区(第34図、図版23)

①は2層～4層

2層 にぶい黄橙色土(10YR7/4)造成の山砂である。

3層 灰白色土(5Y8/1)砂質で白色砂粒が混ざっている。

4層 褐灰色土(5YR5/1)粘質土でしまっており0.5cm程のマンガン粒を少々含む。

②は12層～14層

12層 灰黄褐色土(10YR6/2)砂層で弱いしまりあり。0.1mm以下の白色砂粒を少量含む。

13層 にぶい黄橙色土(10YR6/3)砂質でしまっている。

14層 灰オリーブ色土(5Y5/2)旧水田床面、砂質で黄褐色少々混ざり、弱いしまりあり。

③は17層～18層

17層 明赤褐色土(5YR5/8)弱粘質土でしまっており、黄褐色土の粒を多く含む。

18層 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3～5cmの黄茶色土粒(硬質)を少量含む。

④と⑤は確認できなかった。

2区(第34図、図版23)

①1層～2層

1層 明黄褐色土(2.5Y7/6)現代の畦。砂質で山層を多く含む。

2層 オリーブ灰色土(10Y5/2)弱しまり。黄茶褐色の1cm程の粒を少量含む。

3層 浅黄色土(5Y7/3)旧水田の畦。2～6mm程の砂の層で山砂混じり。

②9層

9層 黄褐色土(2.5Y5/4)現代水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量含む。

③12層～13層

12層 灰色土 (10Y5/1) 砂質土で明黄褐色の塊を含む。

13層 明黄褐色土 (10YR6/8) と明赤褐色 (5YR3/6) の混ざる砂質土。少ししまっており、砂っぽい。

④と⑤は確認できなかった。

3区 (第34図、図版23)

① 5層～6層

5層 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 旧畑土で強くしまっている。2～3mmの黄褐色粒を少量含む。

6層 明褐色 (7.5YR5/8) と灰色 (5Y5/1) の混ざる砂質土で畦状に隆起している。0.1～0.4cmの白色砂粒を含む。しまっていない。

② 13層

13層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5mmの硬質の黄茶土粒を少量含む。

③ 16層～17層

16層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で、硬質の3～5cmの黄茶色土粒を少量含む。

17層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土。鉄分の塊 (明褐色 7.5YR5/8、中3cm弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

④と⑤は確認できなかった。

4区 (第35図、図版23)

① 2層

2層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

② 9層

9層 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 強粘質土で微量の砂を含み、1cm程の暗褐色粒を少量含む。

③ 13層

13層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5cmの硬質黄茶色土粒を少量含む。

④と⑤は確認できなかった。

5区 (第35図、図版23)

① 3層

3層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 砂質土で0.1～0.6cmの白色砂粒を少々含む。

② 11層

11層 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4) 砂層でしまっていない。

③ 15層

15層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5cmの硬質の黄茶色土粒を少量含む。

④と⑤は確認できなかった

⑦ 22層

22層 暗オリーブ灰色土 (2.5GY3/1) 粘土質。不定形の0.2～3cm程の白色礫を多く含む。

23層 灰色土 (N4/) 粘土。上層に大量に含まれた白色礫は混じらない。K-7の31層にもよく似る。

第1節 層序

6区 (第35図、図版23)

① 2層

2層 黄褐色土 (10YR5/6) 現代の畦で非常にしまっている。一部暗褐色である。

② 5層

5層 黄褐色土 (2.5Y5/4) 現代の水田床面でしまっている。1 mm以下の砂を微量含む。

③ 14層

14層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘質で3～5 mmの硬質の黄茶色土粒を少量含む。

④と⑤は確認できなかった。

7区 (第36図、図版23)

① 4層～5層

4層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

5層 黄褐色土 (10YR5/6) 非常にしまっており、一部に暗褐色土が混ざる。

② 8層

8層 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田面で東部ほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。

③ 10層・11層・18層

10層 灰オリーブ色土 (5Y6/2) 粘質土で暗褐色粒 (0.5～1.0 cm) を少量含む。

11層 灰褐色土 (5YR4/2) 砂質でしまっており、3 mm大の白石を含む。

18層 灰黄褐色土 (10YR5/2) 砂質で一部粘りがある。

④ 21層

21層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5 cmの硬い黄茶色土粒を少量含む。

⑤ 22層・23層

22層 暗オリーブ灰色土 (2.5GY3/3) 鉄分の塊 (明褐 7.5YR5/8. 中 3 cm弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

23層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土質。K-13の12層より少なく筋状に鉄分の沈着が認められる。

8区 (第36図、図版23)

① 3層

3層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

② 7層

7層 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田床面で東部ほど黄が強くなり、きめ細かい砂を含む。

③ 11層・12層・14層

11層 灰白色土 (5Y7/2) 砂層で弱粘質である。

12層 明赤褐色土 (5YR5/6) 鉄分の多い砂層で1 mm以下の砂を含む。

14層 黄灰色土 (2.5Y6/1) 弱粘質土できめ細かい砂を多く含む。

④ 13層～15層

13層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5 mmの黄茶色土粒 (硬質) を少量含む。

15層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5 mmの黄茶色土粒 (硬質) を含む。

⑤ 16層～17層

16層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/4) 粘土。鉄分の塊 (明褐 7.5YR5/8. 中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

17層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土質で16層よりは少なく、筋状に鉄分の沈着が認められる。

9区 (第36図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

② 7層

7-a層 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田床面でしまっている。

7-b層 にぶい黄色土 (2.5Y6/4) 旧水田床面でしまっている。

③ 13層

13層 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 強粘質土で微量の砂を含み、1 cm 程の暗褐色粒を含む。

④ 14層

14層 黄灰色 (2.5Y6/1) 弱粘質土できめ細かい砂を多く含む。旧水田と思われる。

⑤ 16層～18層

16層 橙色土 (7.5YR6/8) しまりは弱く、層の上部に鉄分が集中する。

17層 暗オリーブ灰色土 (2.5Y3/3) 粘土層で鉄分の塊 (明褐 7.5YR5/8. 中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

18層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土層で19層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。

10区 (第37図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

② 5層

5層 にぶい黄色土 (2.5Y6/4) 旧水田床面でしまっている。

③ 9層

9層 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 強質土で微量の砂を含み、1 cm 程度の暗褐色粒を含む。

⑤ 12層～13層

12層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土層で鉄分の塊 (明褐 7.5YR5/8. 中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

13層 灰黄色土 (2.5Y4/1) 粘土層で12層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。

④は確認できなかった。

11区 (第37図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

② 6層

6層 黄褐色土 (2.5Y5/1) 旧水田面で東側ほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。

③ 8層

第1節 層序

8層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。

⑤ 9層～10層

9層 暗オリーブ灰色土 (2.5Y3/3) 粘土層で鉄分の塊 (明褐 7.5YR. 中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

10層 灰黄色土 (2.5Y4/1) 粘土層で9層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。

④は確認できなかった。

12区 (第37図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている

② 6層

6層 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田面で東側ほど黄色が強く、きめの細かい砂を含む。

③ 11層

11層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5mmの黄茶色土粒 (硬質) を少量含む。

⑤ 12層

12層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 祖粘土。鉄分の塊 (明褐 7.5YR5/8. 中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着がみられる

④は確認できなかった。

13区 (第38図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦非常にしまっている。

② 7層

7a層 オリーブ灰色土 (10Y4/2) 旧水田面。きめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を含む。

7b層 オリーブ灰色土 (10Y4/2) 旧水田床面。きめ細かい砂質の弱粘質土で5mm程の暗褐色粒を含む。

③ 10層

10層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 弱粘質土で3～5mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。

⑤ 12層

12層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土層で、鉄分の塊 (7.5YR5/8・中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

④は確認できなかった。

14区 (第38図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦と水田床面で非常にしまっている。

② 5層

5層 オリーブ灰色土 (10Y4/2) 旧水田床面。きめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。

③ 12層

12層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5mmの硬い黄茶色土粒を多量に含む。

⑤ 14層・15層

14層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5cmの硬い黄茶色土粒を少量含む。

15層 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土層で上層の11層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。
暗青灰色土 (5B4/1) 粘土層で上層よりも粘性が強く、白色の礫 (不定形、生痕化石?)
を含む。

④は確認できなかった。

15 杭下 (第38図、図版23)

① 1層

1層 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。

② 3層

3層 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田面で北側にいくほど黄が強くなり、きめ細かい砂を含む。

③ 5層

5層 オリーブ灰色土 (10Y6/2) 砂質土で黄茶、2cm程の暗褐色粒を含む。

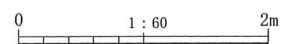
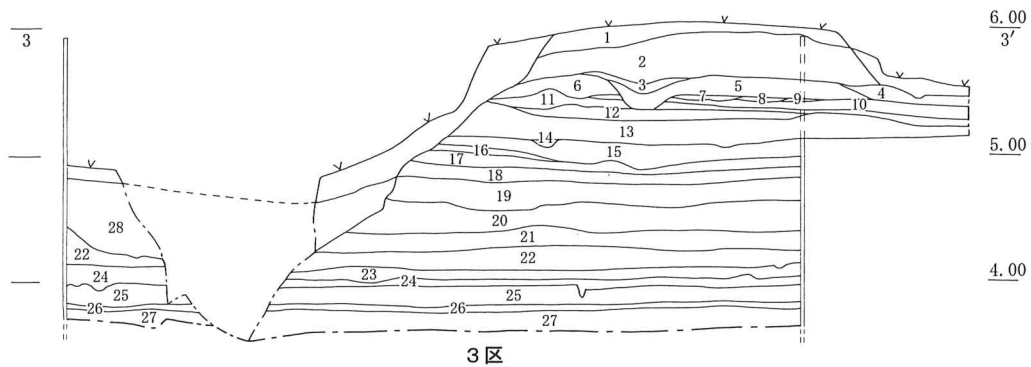
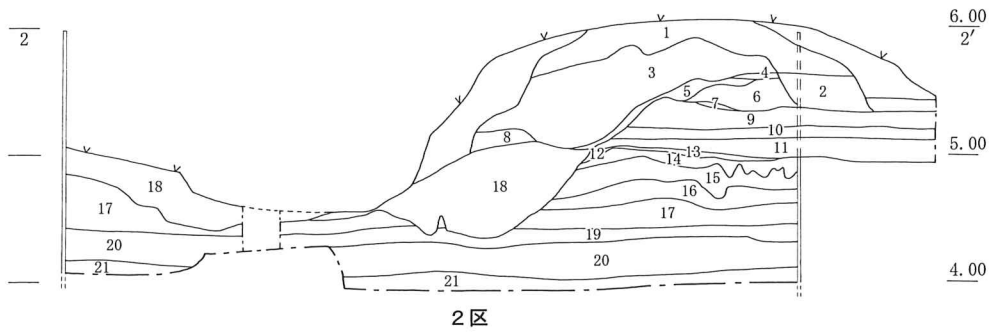
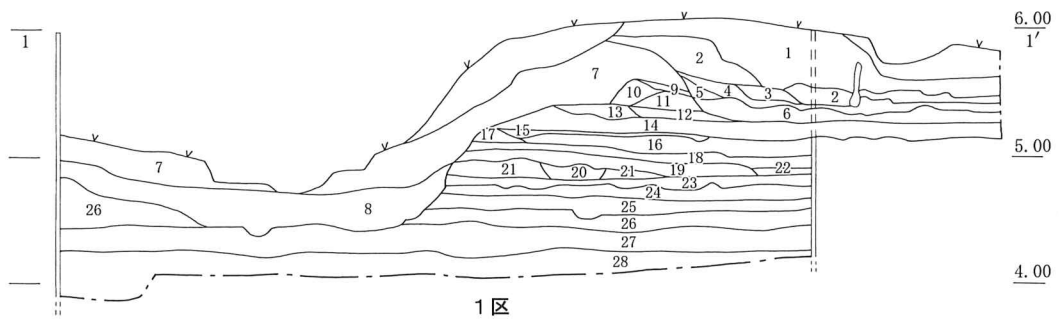
⑤ 11層・9層

11層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 砂質土できめの細かい砂を多く含むため粘性弱い。層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。

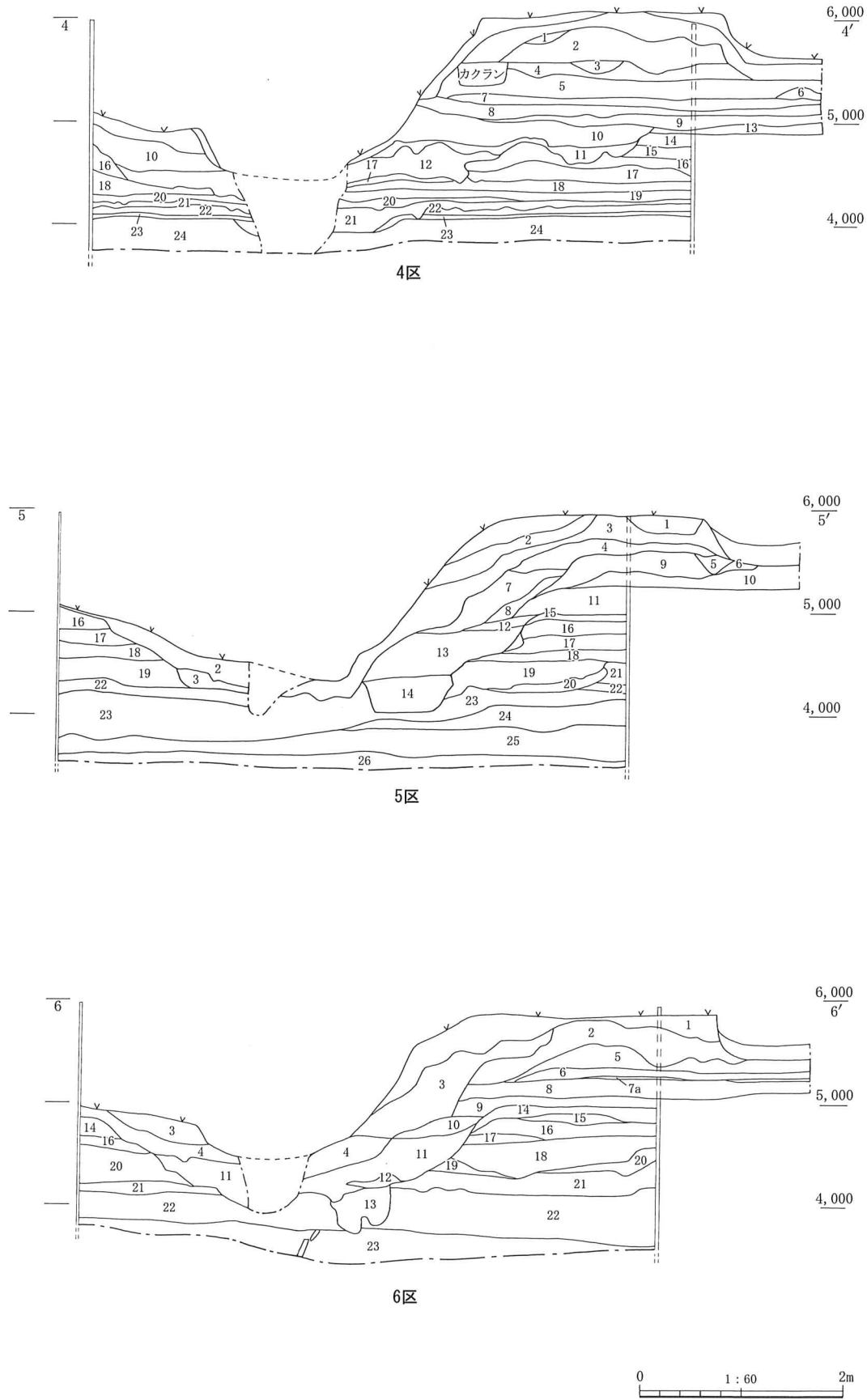
9層 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。

④は確認できなかった。

第1節 層序

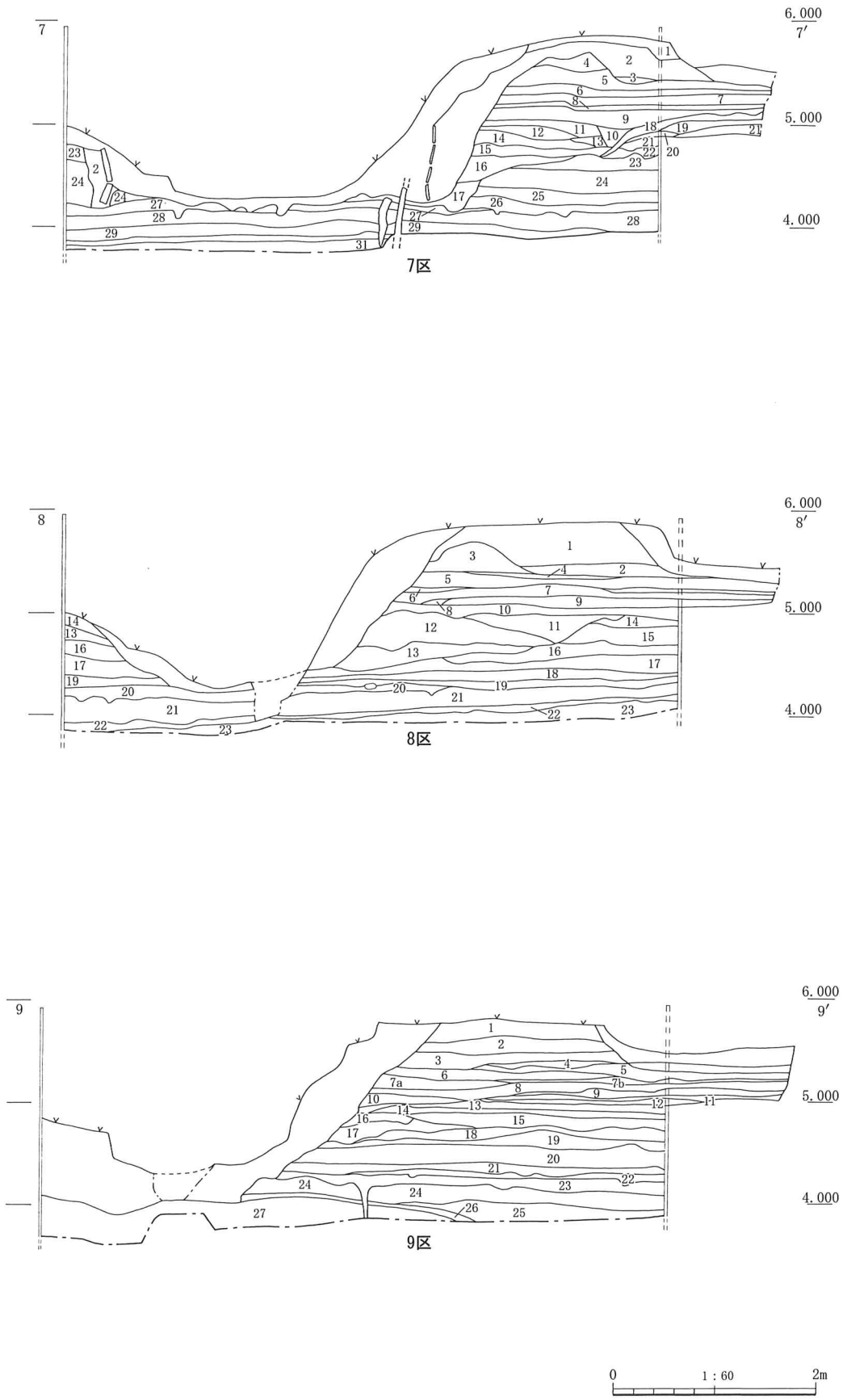


第34図 調査I区内1区~3区土層断面実測図

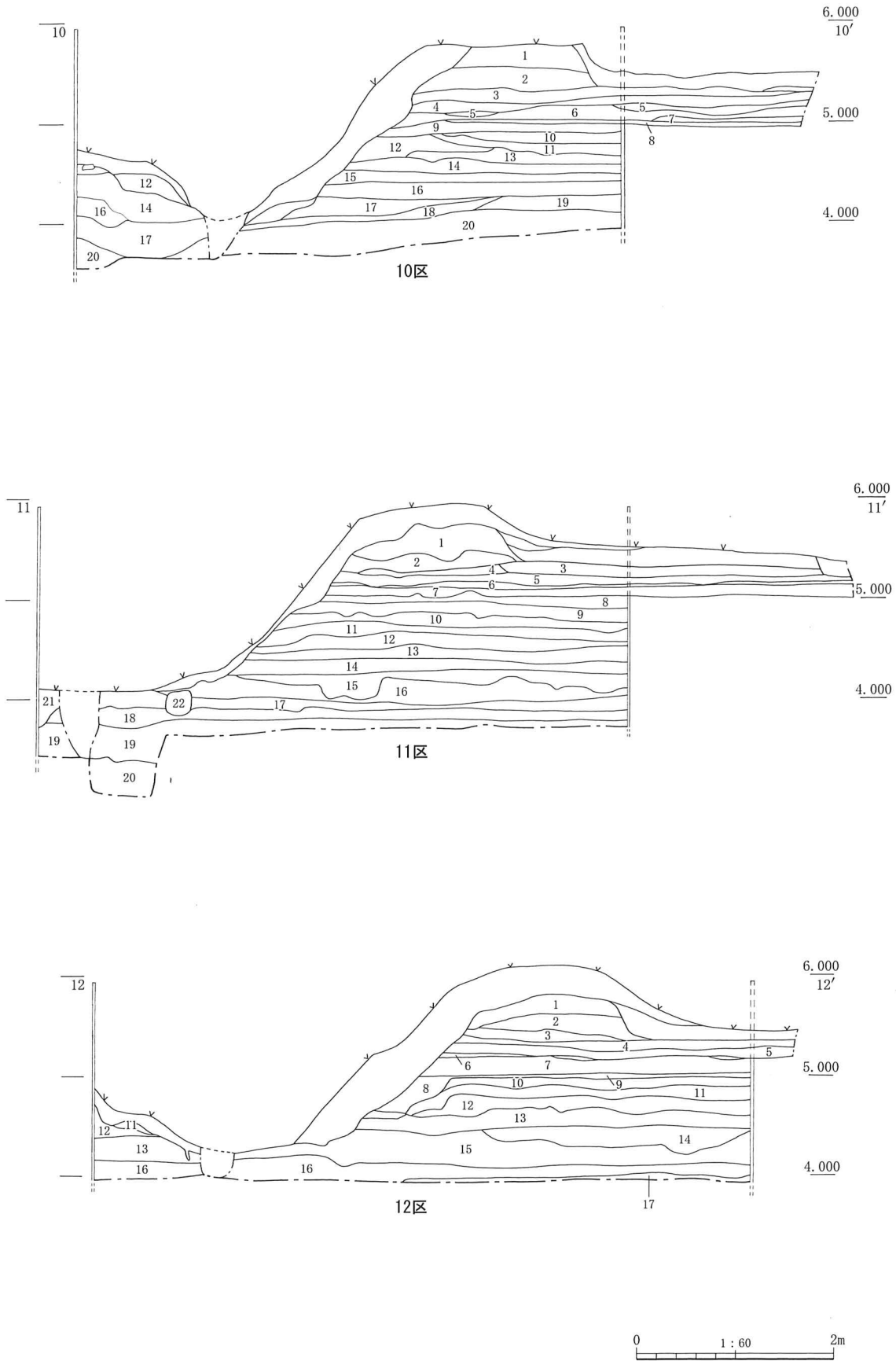


第35図 調査I区内4区～6区土層断面実測図

第1節 層序

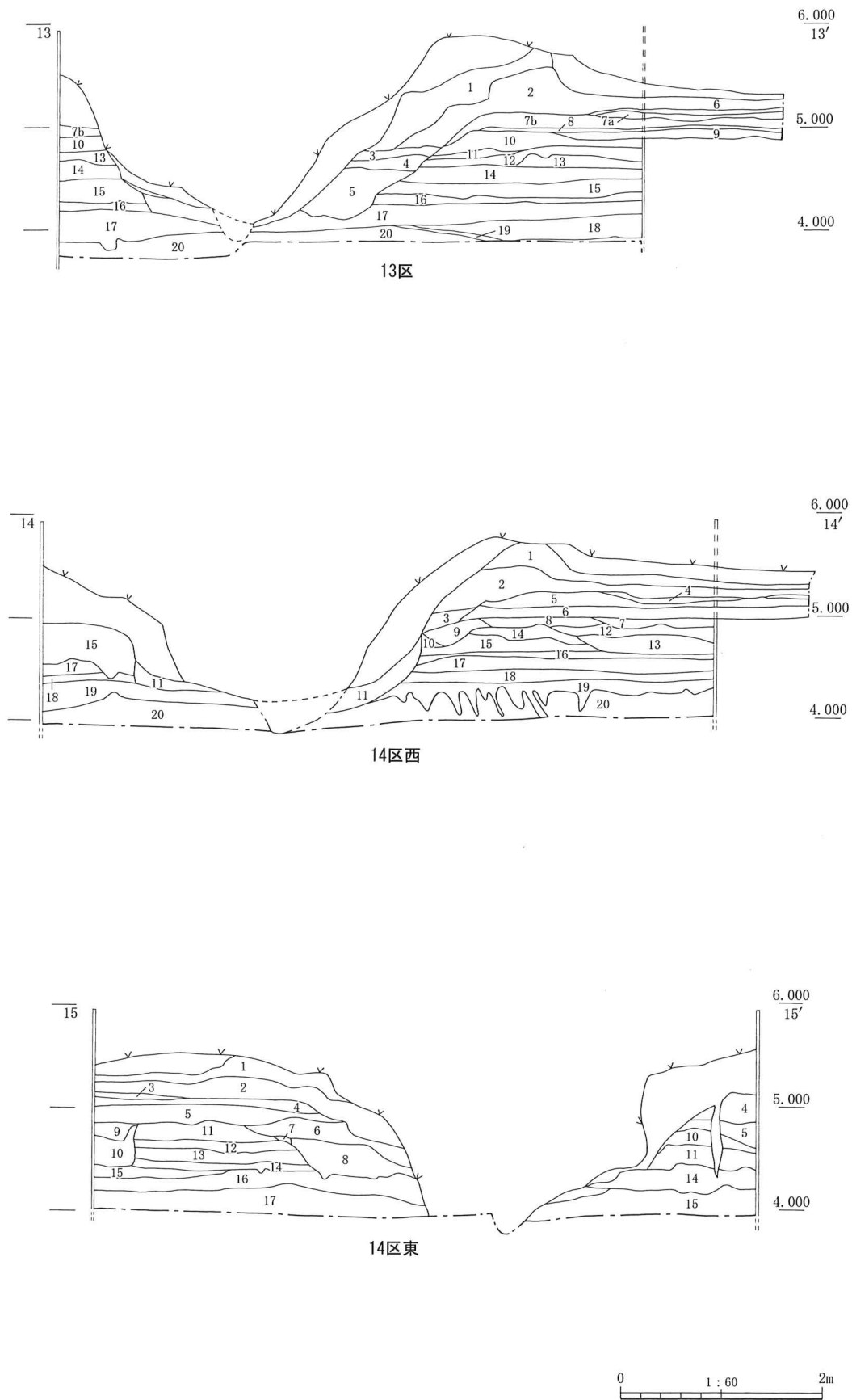


第36図 調査I区内7区~9区土層断面実測図



第37図 調査I区内10区~12区土層断面実測図

第1節 層序



第38図 調査I区内13区～15区土層断面実測図

K-1ベルト (第40図)

1 褐灰色土 (7.5YR5/1) 現代の畦、砂層で 0.2 mm ~ 0.3 mm の砂粒を多く含む。2 にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 造成の山砂である。3 灰白色土 (5Y8/1) 砂質で白色砂粒が混ざっている。4 褐灰色土 (5YR5/1) 粘質土でしまっており 0.5 cm 程のマンガン粒を少々含む。5 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 砂質土でしまりは弱く、小さなマンガン粒を少々含む。6 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 旧水田面、砂質土でしまりは弱く、マンガン小粒を少々含む。7 浅黄色土 (2.5Y7/4) 旧水田畦、山砂である。8 暗青灰色 (5BG4/1) 弱粘質の砂質土で、溝さらい時のガタと砂。粗砂は層状に入る。9 オリーブ灰色土 (2.5GY6/1) と砂と黄褐色 (10YR5/6) の混ざる層で旧溝さらい時の土。10 褐灰色土 (10YR5/1) 砂層でしまりない。11 白配色土 (10YR8/1) の山砂でしまっていない。12 灰黄褐色土 (10YR6/2) 砂層で弱いしまりあり。0.1 mm 以下の白色砂粒を少量含む。13 にぶい黄橙色土 (10YR6/3) 砂質でしまっている。14 灰オリーブ色土 (5Y5/2) 旧水田床面、砂質で黄褐色少々混ざり、弱いしまりあり。15 灰白色土 (7.5Y8/2) 砂層でしまりなし。16 明褐灰色土 (7.5YR7/1) 弱粘質砂層で、黄褐色の粒を多く含む。17 明赤褐色土 (5YR5/8) 弱粘質土でしまっており、黄褐色の粒を多く含む。18 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で 3 ~ 5 cm の黄茶色土粒 (硬質) を少量含む。19 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土で鉄分の塊 (明褐色 7.5YR5/8 ・ 中 3 cm 弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。20 灰色土 (7.5Y5/1) 弱粘質土に明褐色 (7.5YR5/6) 砂層が混じる。21 黄灰色土 (2.5Y4/1) 上層 19 層に浅黄色 (2.5Y7/4) 粗砂のみが入る。下層 23 との層境には、鉄分が沈着し明黄褐色 (10YR6/8) を呈する。22 淡黄色土 (5Y1/3) 川砂のような砂層。23 暗灰色土 (N3/) 弱粘質のきめ細かい砂層。24 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘質土。きめ細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的小さい。25 オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘土層。26 オリーブ灰色土 (2.5GY5/1) 層全体に細かい砂を大量に含み、25 層と同様に粘質土の様相を呈する。27 オリーブ灰色土 (2.5GY5/1) 26 層より稀に礫 (中 0.2 cm 程度) 含む。28 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 27 層よりも黒味が強い。

K-2ベルト (第40図)

1 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 現代の畦。砂質で山層を多く含む。2 オリーブ灰色土 (10Y5/2) 弱しまり。黄茶褐色の 1 cm 程の粒を少量含む。3 浅黄色土 (5Y7/3) 旧水田の畦。2 ~ 6 mm 程の砂の層で山砂混じり。4 灰オリーブ色土 (5Y6/2) 砂質 1 cm 程の茶褐色粒を多く含み、若干暗い。5 灰オリーブ色土 (5Y6/2) 砂質 1 cm 程の茶褐色粒を多く含む。6 黄褐色土 (10YR5/8) よくしまっており 2 mm ~ 5 mm の砂粒を少量含む。7 灰褐色土 (7.5YR5/2) 粘質でしまっており 5 mm 程のマンガン粒を含む。8 灰色土 (5Y6/1) と明褐色土 (7.5YR5/6) の混ざり。砂質土で少ししまっている。9 黄褐色土 (2.5Y5/4) 現代水田床面でしまっている。1 mm 以下の砂を微量含む。10 灰黄褐色土 (10YR5/2) 砂質でよくしまっており 5 mm 程のマンガン粒を含む。11 灰オリーブ色土 (5Y5/3) 黄褐色 1 cm 程の粒を少々含む。しまっている。12 灰色土 (10Y5/1) 砂質土で明黄褐色の塊を含む。13 明黄褐色土 (10YR6/8) と明赤褐色 (5YR3/6) の混ざる砂質土。少ししまっており、砂っぽい。14 灰色土 (5Y5/1) と明赤褐色土 (5YR3/6) が少々混ざる砂質土。15 灰黄色土 (2.5Y4/1) 粘土。K-13 の 12 層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。16 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘質土。きめ細かい

第1節 層序

砂を多量に含むため、粘性は比較的小さい。17 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土。18 暗青灰色（5BG4/1）砂質土で弱粘質である。溝さらい時の土。19 暗青灰色土（5B4/1）ただし、K-13の16層ほど青味は少ない。K-3の18層と同じ。オリーブ灰色土（2.5GY5/1）上層と同じくK-13の16層に相当すると推測される。層全体に、小さめの白色礫（中0.2～0.5cm）含む。21 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土。上層の20層よりは黒味が強い。

K-3ベルト（第40図）

1 褐色土（7.5YR4/4）現在の畦で非常にしまっている。2 黄褐色土（10YR5/6）現在の畦内土で非常にしまっている。一部褐色土が混ざる。3 黄灰色土（2.5Y5/1）と赤褐色土（5YR4/6）の混ざりでしまった砂質土。0.2～0.4cmの白色砂粒を含む。4 黄褐色土（2.5Y5/4）現代の水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量に含む。5 暗灰黄色土（2.5Y5/2）旧畑土。非常にしまっている。2～3mmの黄褐色粒を少量含む。6 明褐色（7.5YR5/8）と灰色（5Y5/1）の混ざる砂質土で畦状に隆起している。0.1～0.4cmの白色砂粒を含む。しまっていない。7 黄褐色土（2.5Y5/6）旧水田面で東部ほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。8 黄褐色土（2.5Y5/6）で細かい砂を含む。9 黄褐色土（2.5Y5/6）で細かい砂を少量含む。10 オリーブ灰色土（10Y4/2）きめ細かい砂質土で15mm程の暗褐色粒を少量含む。11 暗灰黄色土（2.5Y5/2）強粘質土で微量の砂を含む。1cm程の暗褐色粒を含む。12 黄褐色土（2.5Y5/6）砂質土で3～5mmの暗褐色粒を微量含む。13 黄灰色土（2.5Y4/1）強粘質土で3～5mmの硬質の黄茶土粒を少量含む。14 灰オリーブ色土（5Y5/2）と黄褐色土（10YR5/8）しまっており、1cm程のマンガン粒を少し含む。15 灰黄褐色土（10YR5/2）と褐色土（7.5Y4/4）の混ざる砂質である。一部に粘性土が混じる。16 黄灰色土（2.5Y4/1）強粘質土で、硬質の3～5cmの黄茶色土粒を少量含む。17 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）粘土。鉄分の塊（明褐色7.5YR5/8、中3cm弱）を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。18 黄灰色土（2.5Y4/1）粘土。上層の11層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。19 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土。きめの細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的小さい。20 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土層。21 暗青灰色土（5B4/1）周辺の土層も全体的に青みが強いいため、K-13の16層ほどは青みが目立たない。22 オリーブ灰色土（2.5GY5/1）粘土層。上層と同じくK-13の16層に相当すると推測される。ただし、上層の21層よりも若干であるが黒味が強く感じられる。23 黄灰色土（2.5Y4/1）黄灰色粘土は円形で斑に点々とする程度である。層全体が、黄色く変色して灰オリーブ色土（7.5Y5/3）を呈する。24 オリーブ灰色土（2.5GY5/1）下層よりも黒味が強い。層境の上面が最も黒味が強く、下へ行くにつれて徐々に青味が強くなるものであり、黒さがブロック状に入る物ではない。25 暗緑灰色土（7.5GY4/1）ただし、K-13の18層よりも青味が強く粘性大きい。26 灰褐色土（5YR5/2）粘土。4cm程度の帯状。矢板に向かって落ち込んでいる。若干ピンク色をした層である。27 緑灰色土（7.5GY5/1）ただし、K-13の16層よりも青味が強く粘性大きい。足元がぬかるむ程の粘性であるので、更に下層にはしまりの大きいK-6の18層のような土層が存在している可能性がある。28 暗青灰色土（5B4/1）砂質土で弱粘質土で、旧ガタ土である。

K—4 ベルト (第40図)

1 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4) 砂質土で酸化鉄を多量に含む。しまっており、0.3～0.4 cmまでの砂粒を含む。2 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。3 黄灰色土 (2.5Y5/1) と赤褐色 (5YR4/6) の混ざる、しまった砂質土で0.2～0.4 cmの白色砂粒を含む。4 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 非常にしまっており、2～3 mmの黄褐色粒を少量含む。5 黄褐色土 (2.5Y5/4) 現代の水田床面でしまっており、1 mm以下の砂を微量含む。6 黄褐色土 (10YR5/6) 強しまりの砂質土で0.2～0.3 cmの砂を微量含む。7 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田床面で東部に行くほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む旧水田面と思われる。8 オリーブ灰色 (10Y4/2) きめ細かい砂層で15 mm程の暗褐色粒を少量含む。9 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) 強粘質土で微量の砂を含み、1 cm程の暗褐色粒を少量含む。10 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4) と灰オリーブ色土 (5Y6/2) 若干粘質、灰白色土 (N8/) 砂質、暗赤褐色土 (5YR3/6) 砂質の順で混ざる砂層である。11 褐灰色土 (10YR5/1) 粘質土で若干砂質に感じられる。12 褐灰色土 (10YR5/1) 粘質土で砂っぽさあり。13 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5 cmの硬質黄茶色土粒を少量含む。14 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土。鉄分の塊 (明褐色 7.5YR5/8、中 3 cm弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。15 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土で上層の10層よりは筋状に鉄分の沈着が少ない。16 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘質土。きめ細かい砂を多量に含むため粘性は比較的小さい。17 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘土層。18 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘土層で17層よりも青味が強い。19 暗青灰色 (5B4/1) 粘土層で白色の礫等 (不定形、生痕化石か?) を含む。17層よりも粘性が強い。20 灰オリーブ色土 (7.5Y4/2) 上層の19層がさらに黄色く変色しており。粗砂を稀に含む。21 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土層でK—13の17層よりも黒味が薄い。22 暗緑灰色土 (7.5GY4/1) 粘土層で青味が強く粘性が強い。23 灰褐色土 (5YR5/2) 粘土層。4 cm程度の帯状。矢板に向かって落ち込んでいる。ピンク色の層。24 緑灰色土 (7.5GY5/1) 青味が強く粘性が強い。所々に灰オリーブ色 (7.5Y4/2) を呈する。

K—5 ベルト (第41図)

1 灰黄褐色土 (10YR5/2) 0.2～0.4 cmの砂混じりで農業用ビニール等を含む。2 褐色土 (10YR4/4) 若干しまっている。3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 砂質土で0.1～0.6 cmの白色砂粒を少々含む。4 灰色土 (5Y4/1) きめの細かい砂質土で1～2 cmの黄橙褐色 (酸化鉄少々含む) 0.1～0.3 cmの白色砂粒を含む。5 オリーブ灰色土 (10Y6/2) 砂質土で若干しまっており、0.2～0.3 cm白色砂粒と黄茶褐色の粒が混じる。6 灰オリーブ色土 (7.5Y4/2) 土で0.2～0.4 cmの砂を少量含む。7 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) 砂質土で0.1～0.5 cmの砂と黄褐色の粒を少々含む。8 灰色土 (10Y5/1) と暗赤褐色土 (5YR3/6) の混じりで、一部に砂質を含む。9 灰オリーブ色土 (7.5Y5/2) 酸化鉄粒を多量に含む。10 黄褐色土 (2.5Y5/3) 砂質土でしまりあり。11 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4) 砂層でしまっていない。12 緑灰色土 (5G5/1) と赤褐色 (5YR4/8) の混じりの砂質土で若干粘質である。13 ガタと砂の混じる層 14 オリーブ灰色土 (2.5GY6/1) 粗砂。粗砂のみを大量に含む。「沈砂溝」埋土。しまり小。15 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5 cmの硬質の黄茶色土粒を少量含む。16 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土層で鉄分の塊 (明褐色土 7.5YR5/8 中 3 cm弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄

第1節 層序

分の沈着が認められる。17 黄灰色土（2.5Y4/1）粘土。上層の11層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。18 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土。きめの細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的弱い。19 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土。21層よりも粘性が強い。20 暗オリーブ灰色土（2.5GY3/1）粗砂の層で砂粒の大きさは2mm以下である。21 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土。22 暗青灰色土（5B4/1）粘土。砂（川砂）を多く含む。23 暗オリーブ灰色土（2.5GY3/1）粘土。白色礫を満遍なく含んでいる。24 暗オリーブ灰色土（2.5GY3/1）粘土で不定形の0.2～3cmの白色礫を含む。25 緑灰色土（7.5GY5/1）粘質土でしまりが大きく、足元がぬかるまない。中2mm程度の砂を含む。26 緑灰色土（7.5GY5/1）粘質土でしまりが強い、水没していても足元がぬかるまない。 ※6区以北でK-13の19層と同一層のしまりを持つのは、この26層だけである。

K-6ベルト（第41図）

1 褐色土（7.5YR4/4）現代の畦で非常にしまっている。2 黄褐色土（10YR5/6）現代の畦で非常にしまっている。一部暗褐色である。3 褐灰色土（7.5YR4/1）砂質でしまっており、白色砂粒と黄橙色粒を含む。4 暗青灰色土（5B4/1）とにぶい黄褐色土（10YR5/3）が混ざる強粘質土で一部砂混じり。5 黄褐色土（2.5Y5/4）現代の水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量含む。6 暗灰黄色土（2.5Y5/2）砂質土で2～4mmの砂を少量含む。7a 黄褐色土（2.5Y5/6）旧水田床面で東部ほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。8 オリーブ灰色土（10Y4/2）きめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。9 オリーブ灰色土（10Y4/2）きめ細かい弱粘質の砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。10 暗灰黄色土（2.5Y5/2）粘質で非常にしまっている。黄橙色の幅5mmの砂層帯を含む。11 暗青灰色土（5BG4/1）砂質で弱粘質で、旧ガタ土である。12 暗緑灰色土（5G4/1）粘土質で粘性は強く、青味が強い。13 オリーブ灰色（2.5GY6/1）粗砂。粗砂のみを大量に含む。「沈砂溝」の埋土でしまり小。14 黄灰色土（2.5Y4/1）粘質で3～5mmの硬質の黄茶色土粒を少量含む。15 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）粘土質で鉄分の塊（明褐7.5YR5/8. 中3cm弱）を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。16 黄灰色土（2.5Y4/1）粘土質で10層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。17 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土。きめの細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的弱い。 ※土色は同じでもK-13の14層と同一層ではない。18 暗緑灰色土（5G4/1）粘土質で。上下の層よりも粘性大きく、青味が強い。19 暗緑灰5G4/1）粘土質に粗砂がマーブル状に入り、若干しまっている。20 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）砂質土と呼べるほど細かい砂を多く含み、若干しまっている。21 暗青灰色土（5B4/1）粘土質で白色の礫（不定形、生痕化石か？）を含む。K-13の15層よりも、粘性は強い。22 暗オリーブ灰色土（2.5GY3/1）粘土質。不定形の0.2～3cm程の白色礫を多く含む。この層を掘削中に木杭検出。23 灰色土（N4/）粘土。上層に大量に含まれた白色礫は混じらない。K-7の31層にもよく似る。

* K-6ベルト北面 畦部分

22 暗オリーブ灰色土（2.5GY3/1）粘土質。不定形の0.2～3cm程の白色礫を多く含む。この層を掘削中に木杭検出。23 灰色土（N4/）粘土。上層に大量に含まれた白色礫は混じらない。K-7の31層にもよく似る。24 オリーブ灰色土（2.5GY5/1）粘土質で上層より白味

が強く、杭列間でしか確認されない。25 オリーブ灰色土（2.5GY5/1）粘土質で直径2 cm以下の地山粘土ブロックを希に含む。26 オリーブ灰色土（2.5GY5/1）粘土質で幅10 cmほどの木材を含む。27 幅1 cmほどの植物が束になった粗朶が横向きに敷かれている。28 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土。検出後はエメラルドグリーンに変色。

K-7 ベルト（第41図）

1 明黄褐色土（2.5Y7/6）現代造成時の山砂を多く含む。2 黄灰色土（2.5Y4/1）現代造成時の山砂を多く含む。3 暗灰色土（2.5Y3/1）現代造成時の山砂を多く含む。4 褐色土（7.5YR4/4）現代の畦で非常にしまっている。5 黄褐色土（10YR5/6）非常にしまっており、一部に暗褐色土が混ざる。6 黄褐色土（2.5Y5/4）現代の水田床面でしまっており、1 mm以下の砂を微量含む。暗灰黄色土（2.5Y5/2）2～4 mmの砂を少量含む。9 オリーブ灰色土（10Y4/2）弱粘質のきめ細かい砂質土で5 mm程の暗褐色粒を少量含む。10 灰オリーブ色土（5Y6/2）粘質土で暗褐色粒（0.5～1.0 cm）を少量含む。11 灰褐色土（5YR4/2）砂質でしまっており、3 mm大の白石を含む。12 暗赤褐色土（5YR3/3）で黒褐色土粒（5YR2/1）と赤褐色土粒（5YR4/8）が混ざる。13 暗灰黄色土（2.5Y5/2）粘質土で2 mm程の茶褐色土粒を含む。14 暗赤褐色土（5YR3/6）弱粘質土で暗赤褐色土（5YR3/6）と褐灰色土（7.5YR5/1）が混ざる。15 褐灰色土（10YR5/1）弱粘質土に褐色（7.5YR4/6）の幅1 cm縦長の筋状の鉄分の沈着が少量認められる。16 褐灰色土（10YR5/1）弱粘質土で砂混じり。17 暗オリーブ灰（2.5GY4/1）粘質土で粗砂を多く含む。粗砂は所々密集して混ざる。18 灰黄褐色土（10YR5/2）砂質で一部粘りがある。19 暗灰黄色土（2.5Y5/2）強粘質土で微量の砂を含む。1 cm程の暗褐色粒を含む。20 オリーブ灰色土（2.5GY6/1）砂層でしまりが無い。21 黄灰色土（2.5Y4/1）強粘質土で3～5 cmの硬い黄茶色土粒を少量含む。22 暗オリーブ灰色土（2.5GY3/3）鉄分の塊（明褐7.5YR5/8、中3 cm弱）を少量含む、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。23 黄灰色土（2.5Y4/1）粘土質。K-13の12層より少なく筋状に鉄分の沈着が認められる。24 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土。きめ細かい砂を多量に含む、粘性は比較的弱い。25 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土質。26 暗青灰色土（5B4/1）粘土質で25層よりも粘性が強い。27 黄灰土色（2.5Y4/1）粘土質で黄灰色粘土が少量混じる。K-13の17層に比べると、黒味が薄い。28 暗緑灰色土（7.5GY4/1）27層と同質の黄灰色粘土がマーブル状に混じる。29層より黄色味が強い。29 暗緑灰色土（7.5GY4/1）上層28層と同じ質であるが、28層より黄色味が弱い。30 灰褐色土（5YR5/2）弱粘質土4 cm程度の帯状で東側に向かって落ち込んでいる。ピンク色の強い層。31 緑灰色土（7.5GY5/1）ただしK-13の20層よりも青味が強く粘性大きい。32 灰白色土（2.5GY8/1）粗砂。元々木杭が位置していた。木杭の周りに粗砂が集まったものである。

K-8 ベルト（第41図）

1 明黄褐色土（2.5Y7/6）現在の造成時の山砂を多く含む、水門建造時の盛土である。2 黄灰色土（2.5Y4/1）現在の造成時の山砂を多く含む、水門建造時の盛土である。3 褐色土（7.5YR4/4）現代の畦で非常にしまっている。4 黄褐色土（2.5Y5/6）東側ほど黄色味が強くなり、きめ細かい砂を含む。5 黄褐色土（2.5Y5/4）現代の水田床面でしまっている。1

第1節 層序

mm以下の砂を微量含む。6 黄褐色土(2.5Y5/6)旧水田床面で東部ほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。7 黄褐色土(2.5Y5/6)旧水田床面で東部にいくほど黄が強くなり、きめ細かい砂を含む。8 灰色土(7.5Y6/1)砂層でまったくしまっていない。砂は0.3cmの程の粒である。9 オリーブ灰色土(10Y4/2)弱粘質のきめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。10 灰オリーブ色土(5Y6/2)粘質で0.5～1.0cmの暗褐色粒を少量含む。11 灰白色土(5Y7/2)砂層で弱粘質である。12 明赤褐色土(5YR5/6)鉄分の多い砂層で1mm以下の砂を含む。13 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3～5mmの黄茶色土粒(硬質)を少量含む。14 黄灰色土(2.5Y6/1)弱粘質土できめ細かい砂を多く含む。15 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3～5mmの黄茶色土粒(硬質)を少量含む。16 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/4)粘土。鉄分の塊(明褐7.5YR5/8.中3cm弱)を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。17 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土質で16層よりは少ないが、筋状に鉄分の沈着が認められる。18 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘質土できめの細かい砂を多量に含む。19 暗青灰色土(5B4/1)粘土質。白色の礫(不定形、生痕化石か)を含む。K-13の15層よりも粘性が強い。20 黄灰色土(2.5Y4/1)層境は下層の方向に樹痕のように所々落ち込む。21 灰オリーブ色土(7.5Y4/2)粘土と混在する。ブロック状に混じるのではなく、縦方向のマーブル文様で層全体、黄味が強い色調である。22 灰褐色土(5YR5/2)粘土質で4cm程度の帯状で東側矢板に向かって落ちこんでいる。23 緑灰(7.5GY5/1)粘質土でK-13の20層よりも粘性が強く、青味が強い。K-13の20層は踏み込めない程しっかり硬い粘土層であるが、このK-8の23層ではぬかるむ。

K-9 ベルト (第42図)

1 褐色土(7.5YR4/4)現代の畦で非常にしまっている。2 黄褐色土(10YR5/6)現代の畦で非常にしまっており、一部暗褐色粒を少量含む。3 暗灰黄色土(2.5Y5/2)現代の畦で非常にしまっており、2～3mmの黄褐色粒を少量含む。4 黄灰色土(2.5Y4/1)水田床面で非常にしまっており、1mm以下の砂を微量含む。5 黄褐色土(2.5Y5/4)現代の水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量含む。6 暗灰黄色土(2.5Y5/2)2～4mmの砂を少量含む。7-a 黄褐色土(2.5Y5/6)旧水田床面でしまっている。7-b にぶい黄色土(2.5Y6/4)旧水田床面でしまっている。8 オリーブ灰色土(10Y4/2)きめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。9 オリーブ灰色土(10Y4/2)弱粘質のきめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を少量含む。10 オリーブ灰色土(10Y6/2)砂質土で2cm程の黄茶暗褐色粒を含む。11 黄褐色土(2.5Y5/6)粘質土で3～5mmの暗褐色粒を微量含む。12 黄褐色土(2.5Y5/6)弱粘質土で3mm程の砂粒を少量含む。13 暗灰黄色土(2.5Y5/2)強粘質土で微量の砂を含み、1cm程の暗褐色粒を含む。14 黄灰色(2.5Y6/1)弱粘質土できめ細かい砂を多く含む。旧水田と思われる。15 褐色(7.5YR4/6)粘質土で黄茶褐色の硬いマンガン粒を多量に含む。16 橙色土(7.5YR6/8)しまりは弱く、層の上部に鉄分が集中する。17 暗オリーブ灰色土(2.5Y3/3)粘土層で鉄分の塊(明褐7.5YR5/8.中3cm弱)を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。18 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土層で17層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。19 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘質土できめの細かい砂を多量に含み、粘性は比較的弱い。20 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘土層。21 暗青灰色土(5B4/1)粘土層で白色の礫(不定

形、生痕化石か)含む。K-13の15層よりも粘性が強い。22 暗青灰色土(5B4/1)に黄灰色(2.5Y4/1)粘土が混じる。23 黄灰色土(2.5Y4/1)粘質土で黒味が強い黄灰粘土がマーブル状に入る。24 暗緑灰色土(7.5GY4/1)粘質土でK-13の18層よりも粘性が強い。25 暗緑灰色土(5G4/1)粘土層で中5mm弱の礫をわずかに含み、24層よりも青味が強い。26 灰褐色土(5YR5/2)粘土層で4cm程度の帯状で東側矢板に向かって落ち込んでいる。27 緑灰色土(7.5GY5/1)粘土層でしまりが大きく、足元がぬかるまない。中2mm程度の砂を含む。A 緑灰色土(7.5GY5/1)粘土層で粗砂、細砂を大量に含む。緑灰粘土と砂とは箇所によっては、ブロック状に混在している。「現表土」と註記されている。溝の前に存在した溝の溝埋土である。

K-10 ベルト (第42図)

1 褐色土(7.5YR4/4)現代の畦で非常にしまっている。2 暗灰黄色土(2.5Y5/2)現代の畦で非常にしまっている。2~3mmの黄褐色粒を少量含む。3 黄褐色土(2.5Y5/4)現代の水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量含む。4 暗灰黄色土(2.5Y5/2)旧水田面で2~4mmの砂を多量に含む。5 にぶい黄色土(2.5Y6/4)旧水田床面でしまっている。6 オリーブ灰色土(10Y4/2)きめ細かい砂質土で15mm程の暗褐色粒を少量含む。7 オリーブ灰色土(2.5G5/1)強粘質土で黄茶褐色のマンガンを含む。8 黄灰色土(2.5Y6/1)3~5mmの砂混じり層でしまっていない。9 暗灰黄色土(2.5Y5/2)強質土で微量の砂を含み、1cm程度の暗褐色粒を含む。10 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3~5mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。11 黄灰色土(2.5Y4/1)K-13の10層と同じで黒褐色粒を多く含む。12 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)粘土層で鉄分の塊(明褐7.5YR5/8.中3cm弱)を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。13 灰黄色土(2.5Y4/1)粘土層で12層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。14 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘質土できめの細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的弱い。15 暗オリーブ灰(2.5GY4/1)粘土層。16 暗青灰色土(5B4/1)粘質土で白色の礫(不定形、生痕化石か)を含む。K-13の15層よりも、粘性が強い。17 オリーブ灰色土(2.5Y6/1)粘土層で礫を少々含む。18 灰褐色土(5YR5/2)粘土質でピンク色の筋が入るが、白味が強く、ピンク粘土が点々とまばらに入る。19 黄灰色土(2.5Y4/1)上層16層との層境に鉄分の沈着が認められる。20 緑灰色土(7.5GY5/1)粘質土で礫(中5mm弱)を含む。排水溝に近い側では黒味、粘性が強い。

K-11 ベルト (第43図)

1 褐色土(7.5YR4/4)現代の畦で非常にしまっている。2 暗灰黄色土(2.5Y5/2)現代の畦で非常にしまっており、2~3mmの黄褐色粒を少量含む。3 黄褐色土(2.5Y5/4)現代の水田床面でしまっており、1mm以下の砂を微量含む。4 暗灰褐色土(2.5Y5/2)2~4mmの砂粒を少量含む。5 灰黄褐色土(10YR6/2)粘質土で砂を微量含み、3~5mmの褐色土粒を少量含む。6 黄褐色土(2.5Y5/1)旧水田面で東側にいくほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。7 オリーブ灰色土(10Y4/2)弱粘質土できめ細かい砂質土であり、5mm程の暗褐色粒を少量含む。8 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3~5mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。9 暗オリーブ灰色土(2.5Y3/3)粘土層で鉄分の塊(明褐7.5YR.中3cm弱)を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。10 灰黄色土(2.5Y4/1)粘土層で9層よりは少ないが

第1節 層序

筋状に鉄分の沈着が認められる。11 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土できめの細かい砂を多量に含み、粘性は弱い。12 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土層。黄灰色土（2.5Y4/1）粘土層で水分を多く含んでいるためか、変色して黄色味が強い。放置すると、黒、黄色のマーブルの粘土層に変色する。13 黄灰色土（2.5Y4/1）粘質土で水分を多く含み、黄味が強い。暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）弱粘質土できめ細かい砂を多量に含む。15 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土層で元々は16層と同一層である可能性が高いが色が異なる。16 暗青灰色土（5B4/1）粘土層で白色の礫（不定形、生痕化石か）を含み、K-13の15層よりも粘性が大きい。17 暗緑灰色土（7.5GY4/1）粘土層で全体が黄色に変色し灰オリーブ（7.5Y4/2）を呈する。18 灰色土（7.5Y4/1）粘土層 19 暗灰色土（N3/）粘土層で粘性が強く、18層よりも黒味が強い。20 灰色土（N4/）粘土層で19層との層境はマーブル模様になっている。21 水路対岸（南側）表土。22 暗青灰色土（5B4/1）しまりが特に弱い粘質土で木杭の痕跡であると推測される。

K-12 ベルト（第43図）

1 褐色土（7.5YR4/4）現代の畦で非常にしまっている。2 暗灰黄色土（2.5Y5/2）現代の畦で非常にしまっている。3 黄灰色土（2.5Y4/1）弱粘質土で砂を少量含む。4 黄褐色土（2.5Y5/4）現代の水田床面でしまっている。1mm以下の砂を微量含む。5 灰黄褐色土（10YR6/2）旧水田面。粘質土で砂を微量含み、3～5mmの褐色粒を少量含む。6 黄褐色土（2.5Y5/6）旧水田面で東側ほど黄色が強くなり、きめの細かい砂を含む。7 オリーブ灰色土（10Y4/2）旧水田床面。きめ細かい砂質土で15mm程の暗褐色粒を少量含む。8 灰オリーブ色土（5Y6/2）に暗褐色（7.5YR3/3）の1cm程の粒が混じる弱粘質土。9 灰色土（5Y6/1）砂質で2mm大の石を多く含む。10 灰色土（10Y5/1）粘質土できめ細かい砂を多量に含む。黒色の3mm大の粒を含む。11 黄灰色土（2.5Y4/1）強粘質土で3～5mmの黄茶色土粒（硬質）を少量含む。12 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）祖粘土。鉄分の塊（明褐7.5YR5/8.中3cm弱）を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着でみられる。13 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土できめ細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的弱い。14 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘質土で元々は上図15層と同一層である可能性は高いが、色が異なる。15 暗青灰色土（5B4/1）粘土層で粘性が強い。16 灰色土（7.5Y4/1）粘土質で層全体が黄変して灰オリーブ色（7.5Y4/2）を呈する。全体的に砂を含む。K-13の15層よりも粘性が強い。17 緑灰色土（7.5GY5/1）粘土層でしまりが強く、足元がぬかるまない。中2mm程度の砂を含む。

K-13 ベルト（第43図）

1 褐色土（7.5YR4/4）現代の畦非常にしまっている。2 暗灰黄色土（2.5Y5/2）現代の畦と水田床面を形成しており、非常にしまっており、2～3mmの黄褐色粒を少量含む。3 灰褐色土（7.5YR4/2）粘土層で、鉄分の沈着が多量である。4 灰褐色土（7.5YR4/2）粘土層で、上層の17層より鉄分の沈着少ない。5 暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）粘土層。6 黄褐色土（2.5Y5/6）東側にいくほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。7a オリーブ灰色土（10Y4/2）旧水田面。きめ細かい砂質土で5mm程の暗褐色粒を含む。7b オリーブ灰色土（10Y4/2）旧水田床面。きめ細かい砂質の弱粘質土で5mm程の暗褐色粒を含む。8 黄灰色

(2.5Y6/1) 3～5 mmの砂混じり層でしまっていない。9 暗灰色土(2.5Y4/1)弱粘質土で微量の砂を含み、1 cm程の暗褐色粒を含む。10 黄灰色土(2.5Y4/1)弱粘質土で3～5 mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。11 暗灰黄色土(2.5Y4/2)粘土層で鉄分の塊(7.5YR3/4・中2 cm弱)を少量含むが、上層よりは少ない。12 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)粘土層で、鉄分の塊(7.5YR5/8・中3 cm弱)を少量含む、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。13 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土層で、上層の12層よりは少ないが、筋状に鉄分の沈着が認められる。14 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘質土で、きめ細かい砂を多量に含むため、粘性は比較的弱い。15 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘土層。16 暗青灰色土(5B4/1)白色の礫(不定形。生痕化石か)を含む。17 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土層で水分を多く含んでいるためか、変色して黄味が強い。放置すると黒、黄色マーブルの粘土層に変色する。18 暗緑灰色土(7.5GY4/1)粘土層で、層全体が黄変して灰オリーブ色(7.5Y4/2)を呈する。19 灰褐色土(5YR5/2)粘土層で、4 cm程度の帯状である。北側に向かって落ち込んでいるピンク色の層である。20 緑灰色土(7.5GY5/1)しまりが小さく、足元がぬかるまない。中2 mm程度の砂を含む。

K-14 ベルト (第43図)

1 褐色土(7.5YR4/4)現代の畦と水田床面で非常にしまっている。2 黄褐色土(10YR5/6)現代の畦で非常にしまっている。一部暗褐色土が混ざる。3 褐色土(7.5YR4/6)粘質土で硬い黄茶褐色を多量に含む。4 黄褐色土(2.5Y5/6)旧水田面で北側に行くほど黄色が強くなり、きめ細かい砂を含む。5 オリーブ灰色土(10Y4/2)旧水田床面。きめ細かい砂質土で5 mm程の暗褐色粒を少量含む。6 オリーブ灰色土(10Y6/2)砂質土で2 cm程の黄茶褐色粒を含む。7 黄褐色土(2.5Y5/6)砂質土で3～5 mmの暗褐色粒を微量含む。8 暗灰黄色土(2.5Y5/2)強粘質土で微量の砂を含み、1 cm程の暗褐色粒を含む。9 にぶい赤褐色土(5YR4/3)と黒褐色土(7.5YR3/2)の混ざった弱粘質土で、3 mm程の鉄分粒を含む。10 褐色土(7.5YR4/4)と灰オリーブ色土(5Y6/2)が混ざる粘質土で少々の鉄分粒を含む。11 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘土層で溝斜面の土。12 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3～5 mmの硬い黄茶色土粒を多量に含む。13 黄灰色土(2.5Y6/1)粘質土できめ細かい砂を多量に含む、黒褐色(7.5YR3/1)の5～7 mmのマンガン粒を含む。幅3 mm程の鉄分の沈着がうすい茶色の筋状に入る。14 黄灰色土(2.5Y4/1)強粘質土で3～5 cmの硬い黄茶色土粒を少量含む。15 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土層で上層の9層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。16 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘質土。きめ細かい砂を多く含む、粘性は弱い。17 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1)粘土層。18 暗青灰色土(5B4/1)粘土層で上層よりも粘性が強く、白色の礫(不定形、生痕化石?)を含む。19 緑灰色土(7.5GY4/1)粘土層で10 cm程度の太さで先細りになる樹痕が認められる。20 緑灰色土(7.5GY5/1)粘土層で層境には土層の土がマーブル模様に入る。21 灰色土(N4/)粘土層で白色粗砂を層状に、または、渦巻いて大量に含む。粗砂層の最下部には赤褐色の鉄分の沈着が顕著に認められる。堆積の様相は溝埋土の状況と似ており、しまりは弱い。

K-15 ベルト (第43図)

1 褐色土 (7.5YR4/4) 現代の畦で非常にしまっている。2 黄褐色土 (10YR5/6) 現代の畦で非常にしまっており、一部暗褐色である。3 黄褐色土 (2.5Y5/6) 旧水田面で北側にいくほど黄が強くなり、きめ細かい砂を含む。4 オリーブ灰色土 (10Y4/2) 旧水田床面。きめ細かい砂質土で5 mm程の暗褐色粒を少量含む。5 オリーブ灰色土 (10Y6/2) 砂質土で黄茶、2 cm程の暗褐色粒を含む。6 黄褐色土 (2.5Y5/6) 砂質土で3～5 cmの暗褐色土粒を微量に含む。7 黄褐色土 (2.5Y5/6) 砂質土で3～5 cmの暗褐色土粒を含み、砂を多く含む。8 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土層であるが、砂を多く含む。9 黄灰色土 (2.5Y4/1) 強粘質土で3～5 mmの硬い黄茶色土粒を少量含む。10 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘質土で上層の9層よりも黒味が強い。径10 cm程の大粒の鉄分の沈着が確認できる。11 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 砂質土できめの細かい砂を多く含むため粘性弱い。層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。12 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘土層で鉄分の塊 (明褐7.5YR5/8. 中3 cm弱) を少量含み、層全体に筋状の鉄分の沈着が認められる。13 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土層で上層の15層よりは少ないが筋状に鉄分の沈着が認められる。14 暗青灰色土 (5B4/1) 層の上、下とも青味が強い。15 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土層で水分を多く含んでいるためか、変色して黄味が強い。放置すると黒、黄色マーブルの粘土層に変色する。16 暗オリーブ灰色土 (2.5GY4/1) 粘土層。17 緑灰色土 (7.5GY5/1) 粘土層でしまりが大きく、足元がぬかるまない。中2 mm程度の砂を含む。

第2節 遺構

1. 畦畔状遺構

各区で確認された畦畔状遺構は、6面が確認された。各遺構の検出面は、SX01は標高約5.5m、SX02は標高約5.2m、SX03は標高約5.0m、SX04は標高約4.9m、SX05は標高約4.7m、SX06は標高4.5mで検出された。多いところでは、ひとつの区に5面が確認されている。

畦畔状遺構はSX01からSX03は全ての区で確認された。SX04は7区～9区のみで確認され、SX05は7区から14区で確認された。SX06は9区でのみ確認されており、東側に隣接する調査区にまで延びている。各遺構は水田跡と考えられるが、SX02は畝状のものが現水路に直角に敷かれており、畑の跡と考えられる。

(1) SX01 (第40～43図)

遺構は標高約5.453m前後で検出された水田面である。

現在の水路に伴う大畦が北側1区から南側14区にかけて検出された。1区から9区までの大畦は幅約2mで9区中頃からは幅約1mと大畦が細くなっている。西側の矢板際には水田遺構1と同時期面は確認できなく、矢板外側の調査範囲外となっている。13区、14区では水田遺構1と同時期面の一部が確認された。

1区では、標高5.496mで検出された。大畦の幅が約3～2mと幅広く、畦と水田面の高低差は4cm、畦と水路の高低差は1.1mである。水田側（東側）は砂質でゆっくりと南側に傾斜している。

2区では、標高5.469mで検出された。大畦の幅が北側は細く約1.3mで南側ほど若干は広く約2.3m、畦と水田面の高低差は7cm、畦と水路の高低差は1.1mである。

3区では、標高5.481mで検出された。大畦の幅が約2.6mで全体的に均等な幅で、畦と水田面の高低差は15cm、畦と水路の高低差は1.15mである。

4区では、標高5.559mで検出された。大畦の幅が約2mで水路側（西側）は若干波を打っており、畦と水田面の高低差は16cm、畦と水路の高低差は1.25mである。

5区では、標高5.529mで検出された。大畦の幅が約1.6mで全体的に他のものより細身であり、畦と水田面の高低差は20cm、畦と水路の高低差は1.22mである。

6区では、標高5.529mで検出された。大畦の幅が約2mで全体的に5区のもの同様に若干細身で、畦と水田面の高低差は15cm、畦と水路の高低差は1.2mである。

7区では、標高5.534mで検出された。大畦の幅が約2mで、畦と水田面の高低差は16cm、畦と水路の高低差は1.27mである。

8区では、標高5.502mで検出された。大畦の幅が約2mで、畦と水田面の高低差22cm、畦と水路の高低差は1.2mである。

9区では、標高5.541mで検出された。大畦の幅が約2mで区の中央部で若干細くなり、畦と水田面の高低差16cm、畦と水路の高低差は1.2mである。

10区では、標高5.328mで検出された。大畦の幅が北側で2m、南側では1mと次第に細くなり、畦と水田面の高低差20cm、畦と水路の高低差は1.25mである。

11区では、標高5.293mで検出された。大畦の幅が約70cmと細くなり、畦と水田面の高低

第2節 遺構

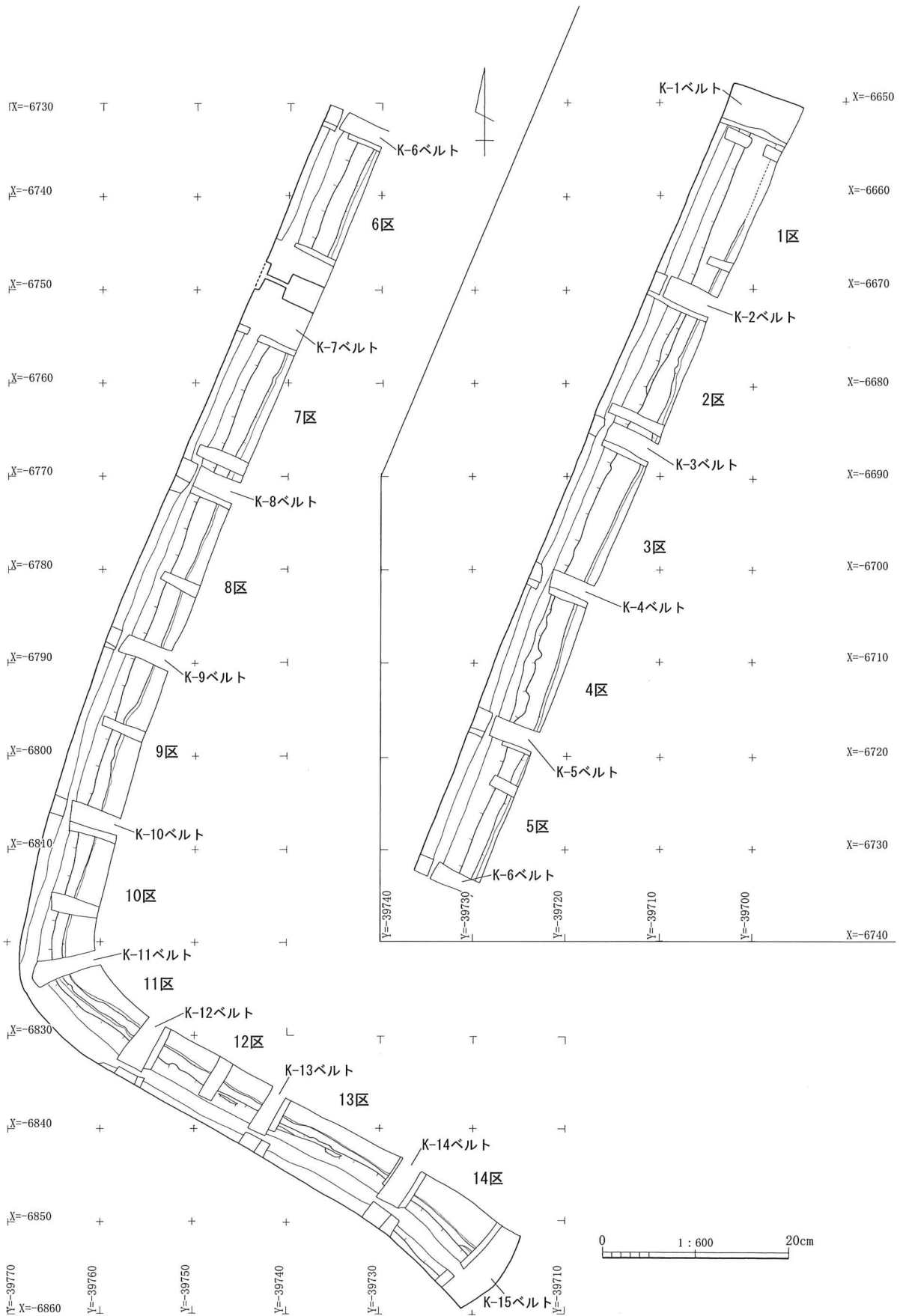
差 28 cm、畦と水路の高低差は 1.28m である。

12 区では、標高 5.387 m で検出された。大畦の幅が約 1 ～ 0.7 m と細くなり、畦と水田面の高低差 25 cm、畦と水路の高低差は 1.3 m である。

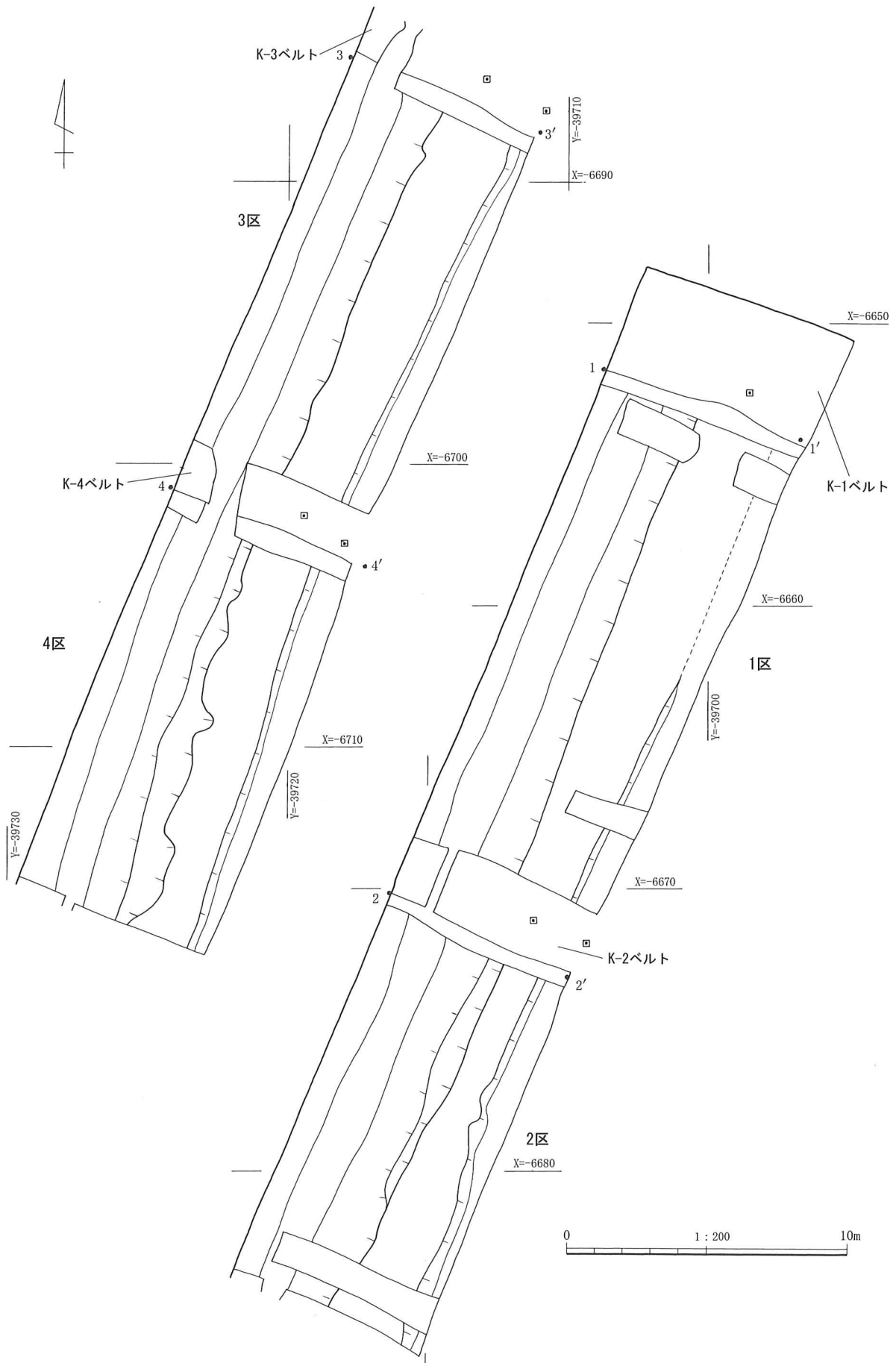
13 区では、標高 5.391 m で検出された。大畦の幅が約 50 ～ 70 cm と細くなり、畦と水田面の高低差 10 cm、畦と水路の高低差は 1.2 m である。西側矢板際には同時期の面が幅約 10 cm ほど確認され、上面と水路底面の高低差は 80 cm であった。

14 区では、標高 5.363 m で検出された。大畦の幅がさらに細くなり約 50 cm となり、畦と水田面の高低差 10 cm、畦と水路の高低差は 1.2 m である。西側矢板際には同時期の面が幅の広いところで 50 cm が確認され、上面と水路底面の高低差は 95 cm であった。

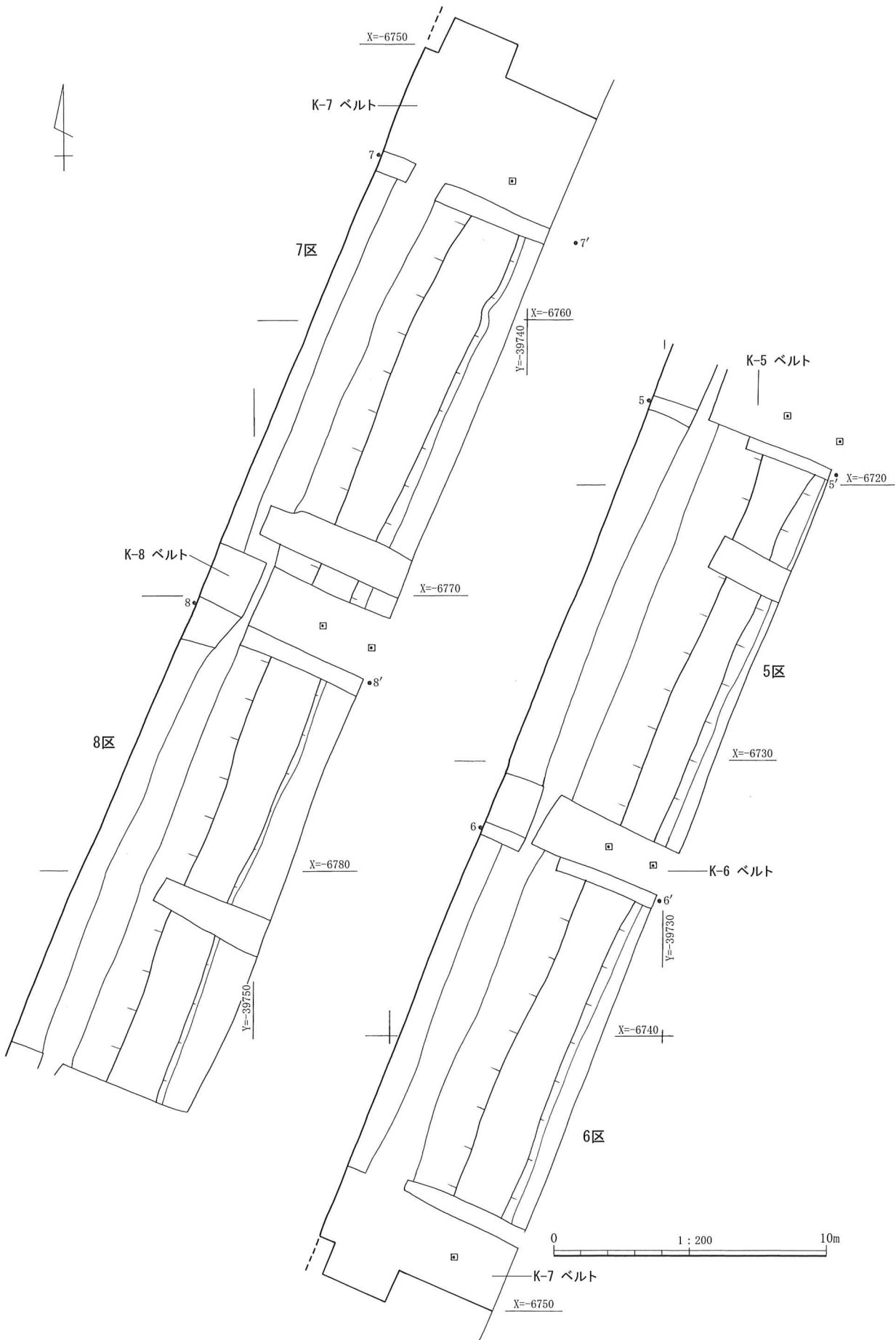
出土遺物は現代陶磁器、ビー玉、プラスチック製櫛などの戦中、戦後のものばかりで、近代から現代の水田面である。



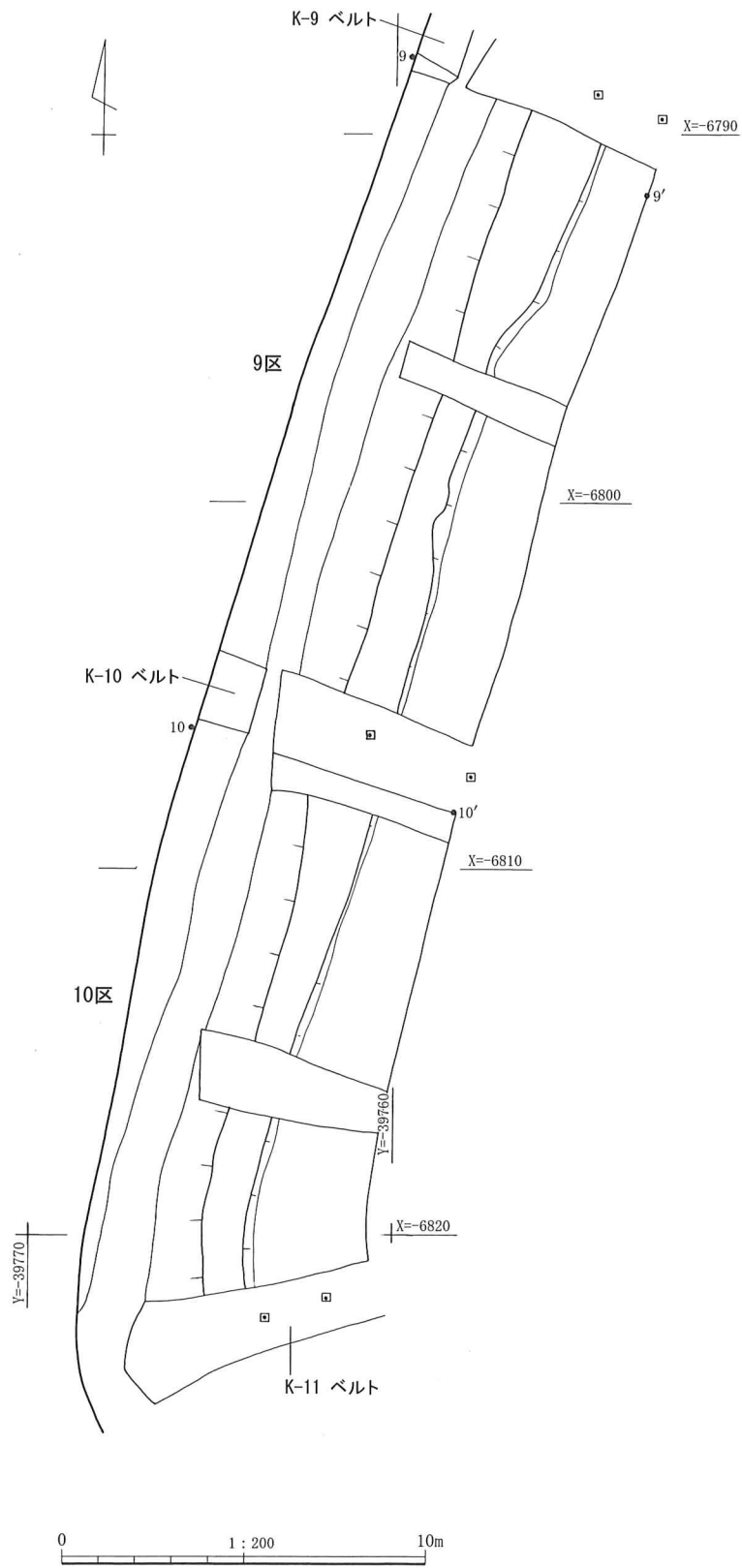
第39図 SX01遺構配置図



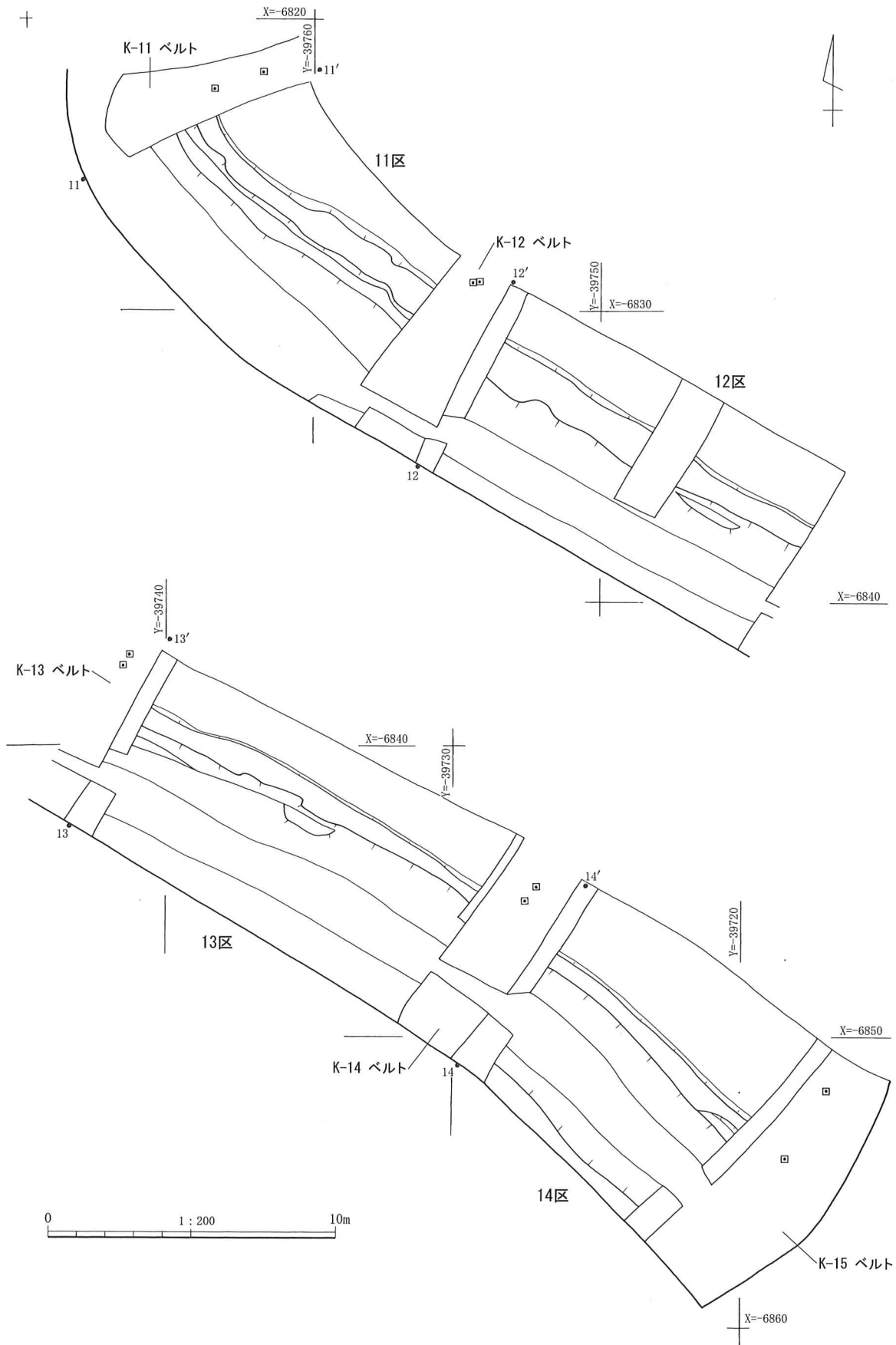
第40図 1・2・3・4区SX01実測図



第41図 5・6・7・8区SX-01実測図



第42図 9・10区SX-01実測図



第43図 11・12・13・14区SX-01実測図

(2) SX02 (第45～48図)

遺構は、畝状のものが標高5.194 m前後で検出された。畝状の遺構が水路と平行に残っており、この検出面は層位などから近世・近代の畑であった可能性が高い。水田遺構1で確認した水路に伴う畦は確認できなかったが、畝状遺構が1区から14区にかけて確認された。1区～11区にかけては南北方向の水路と平行に畝跡が存在し、12区～14区は水路が曲がっており東西方向に流れ、畝状遺構もまた水路と平行に東西方向に確認された。なお、1区～6区までは、畝状遺構の深さが浅い。7区～14区にかけては畝状遺構が並んでおり、深さもはっきりしている。畝状遺構は長いもので約4 m、短いもので約10 cm、幅約50 cm、深さ約10 cmである。水路東側の矢板際では、水田遺構2と同時期の面は13区、14区に一部が確認されたが幅が非常に狭く特徴等は確認できなかった。

1区では、標高5.190 mで検出された。水路東側には明瞭な畝状遺構ではないが長さ約2 m、幅約30 cm、深さ約4.5 cmの浅い遺構が2箇所残っており、残りは悪い。方向は北北東から南南西に向いている。上面と水路の底面の高低差は約46 cmである。

2区では、標高5.205 mで検出された。長さ5～7 m、幅約50 cm、深さ約5.5 cmで3本が確認された。方向は、全てが北北東から南南西に向いている。上面と水路の底面の高低差は約60 cmである。

3区では、標高5.260 mで検出された。長さ6.5 m、幅約40 cm、深さ約6 cm、長さ2.5 m、幅約30 cm、深さ約8 cm、長さ3 m、幅約40 cm、深さ約7 cmの3本が水路と平行に並んで確認された。方向は北北東から南南西に向いている。上面と水路の底面の高低差は約69 cmである。

4区では、標高5.219 mで検出された。長さ6 m、幅約20 cm、深さ約6 cmと長さ5 m、幅約30 cm、深さ約7 cmの2本確認された。方向は北から南に向いており、1～3区の畝と「く」の字状に若干屈折したように感じられる。4区中央部分では、上面には幅約70 cm程の棚状の段が出来ており、7区中央部分まで続いている。上面と水路の底面の高低差は約70 cmである。

5区では、標高5.257 mで検出された。長さ11.5 m、幅約30 cm、深さ約5 cmが1本確認された。方向は北から南に向いているが、6区までは延びていない。上面と水路の底面の高低差は約65 cmである。

6区では、標高5.208 mで検出された。長さ1.5 m、幅約30～40 cm、深さ約3 cmの2本が確認された。遺構の始まりが6区南端であり方向を確認する長さには不十分であるが、北から南に向いていると考えられる。上面と水路の底面の高低差は約81 cmである。

7区では、標高5.211 mで検出された。水路際に畦状の低い隆起が確認され、9区北端部まで延びている。中央部より北側には棚状の段がついている。上面は、長さ8.5 m、5 m、2.2 mと変化しており、幅約50～30 cm、深さ約3 cmの1本が確認された。幅約5 mの畝は9区北端部まで続いている。畝の方向は南から北に延びている。上面と水路の底面の高低差は約78 cmである。

8区では、標高5.246 mで検出された。水路際に畦状の低い隆起が確認され、9区北端部まで延びている。また、中央より南側の一部には幅の狭い段が残っている。上面には長さ約4 m、幅約30～40 cm、深さ約3 cmの畝状遺構が8区の南部に重なり合って確認された。方向は北から南に向いている。上面と水路の底面の高低差は約78 cmである。

9区では、標高5.166 mで検出された。長さ約2～6 m、幅約20～40 cm、深さ約4 cmの10

数本が確認され、北部は8区と同一の列で、南部は10区と同一の列と考えられる。区の中央部は畝が浅かった為か残存していない。方向は北から南に向いているが中央部では方向は変わらないが若干屈折しているようである。上面と水路の底面の高低差は約80cmである。

10区では、標高5.208mで検出された。長さ約2～9m、幅約40cm、深さ約2cmの5条が確認された。方向は北から南に向いている。上面と水路の底面の高低差は約83cmである。

11区では、標高5.110mで検出された。調査区が南北方向から東西方向に折れ曲がる地点で、畝状遺構は水路に対して直角に残っていた。遺構は長さが短く、深さも浅い事から上面が掘削されたと考えられる。区の東側で上面と水路下端の間に柵が出来始め、14区まで続く。長さ約1m、幅約30cm、深さ約3cmの遺構が確認された。方向は北から南に向いているが、一部西から東方向のものが確認された。上面と水路の底面の高低差は約94cmである。

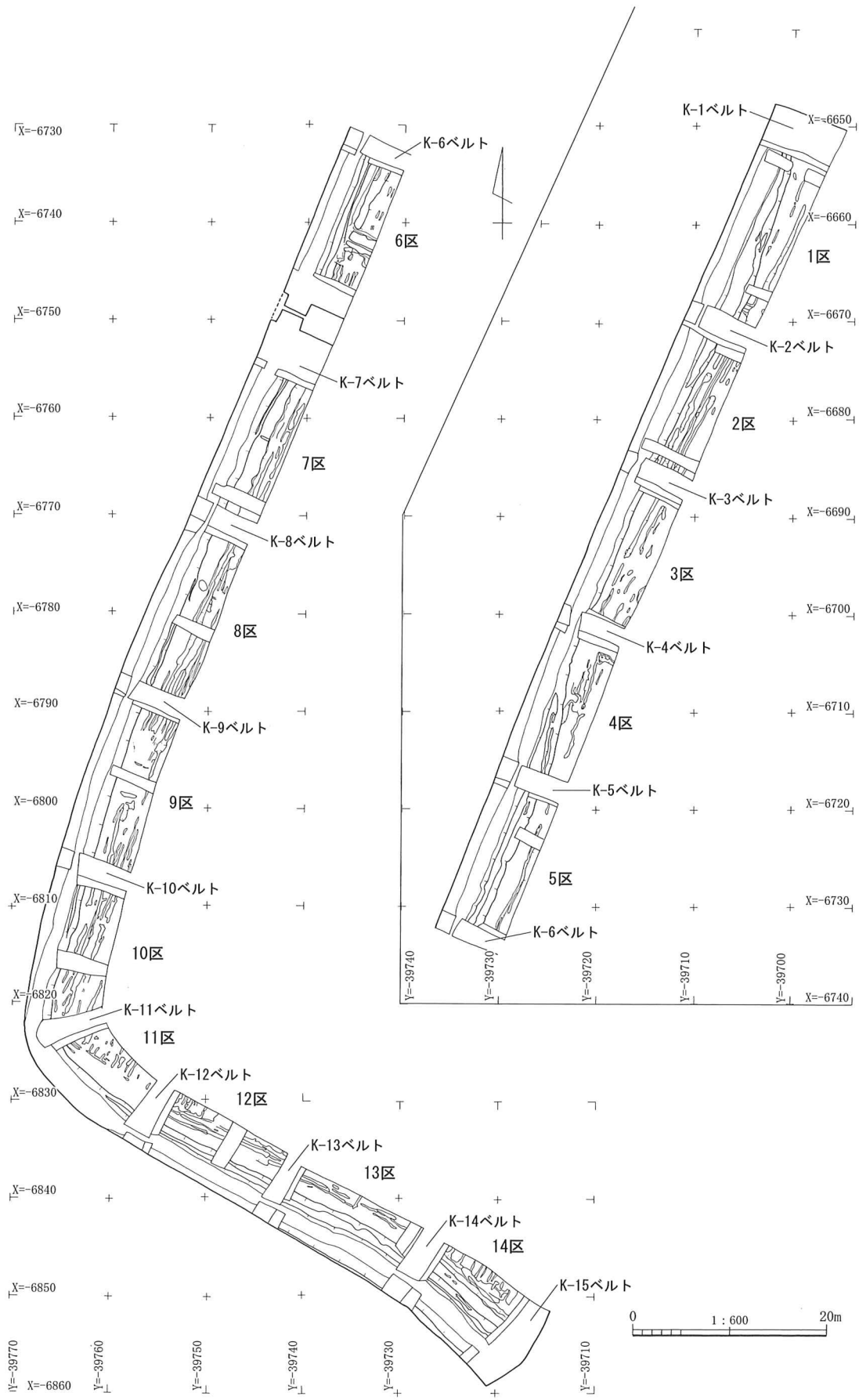
12区では、標高5.170mで検出された。長さ6～11m、幅約20～30cm、深さ約3cmの3条が確認された。水路側に残る段は幅約50cmと11区より幅が広がっている。方向は西から東に向いており、11区の畝状遺構の方向に直角となり、水路と平行するようになる。上面と水路の底面の高低差は約88cmである。

13区では、標高5.158mで検出された。長さ11m、幅約20～30cm、深さ約5cmの2条が確認された。水路側に残る段は約1mと一段と広がっている。方向は西から東に向いている。上面と水路の底面の高低差は約174cmである。

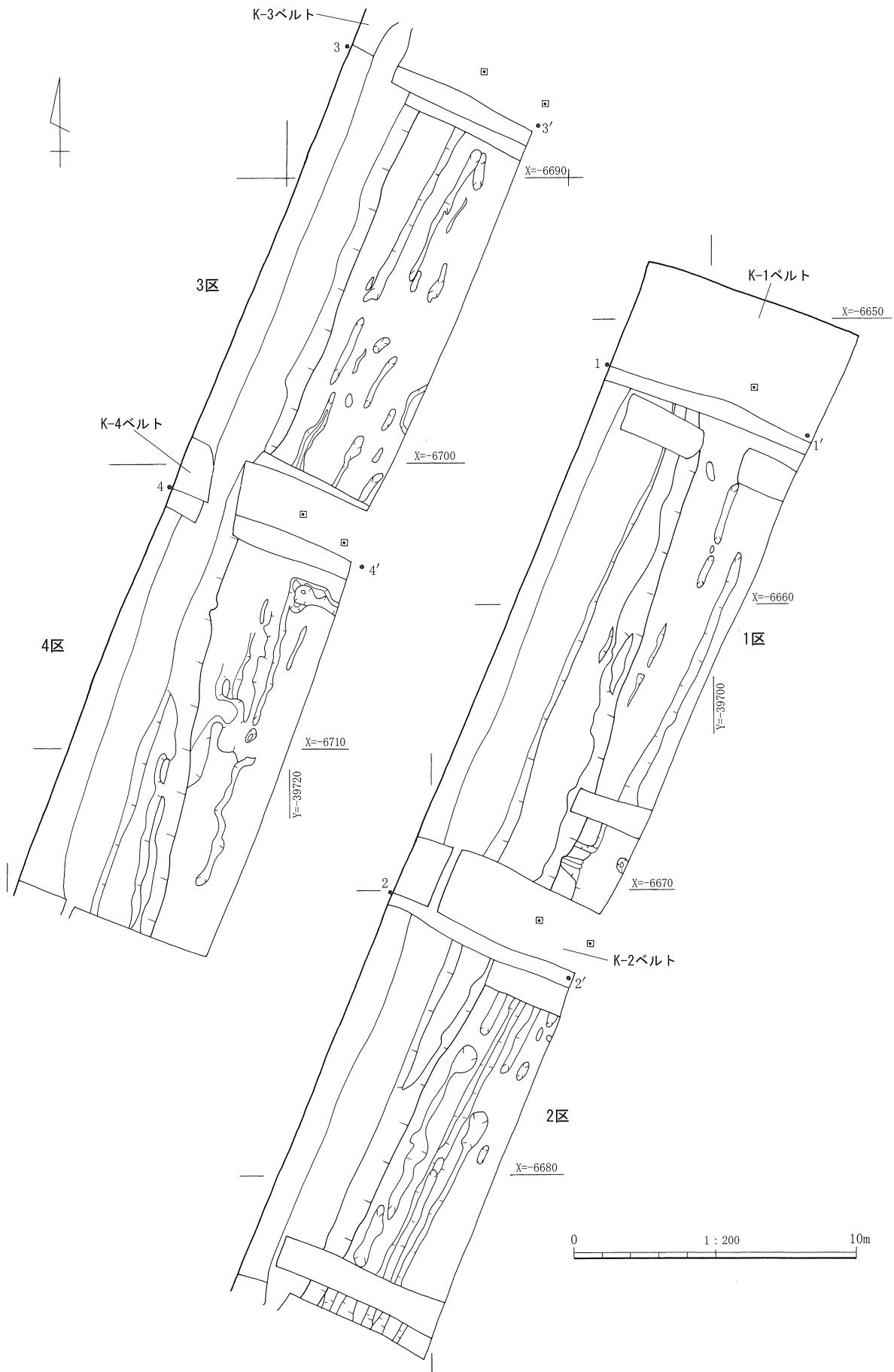
14区では、標高5.108mで検出された。水路に直角に長さ1.2m以上、幅約80～100cm、深さ約3.5cmの幅の広い8条が確認された。水路側の段は約40cmと細くなった。方向は北から南に向いている。上面と水路の底面の高低差は約94cmである。

出土遺物は、近世の遺物を中心に出土しており中世～近世の水田遺構と考えられる。

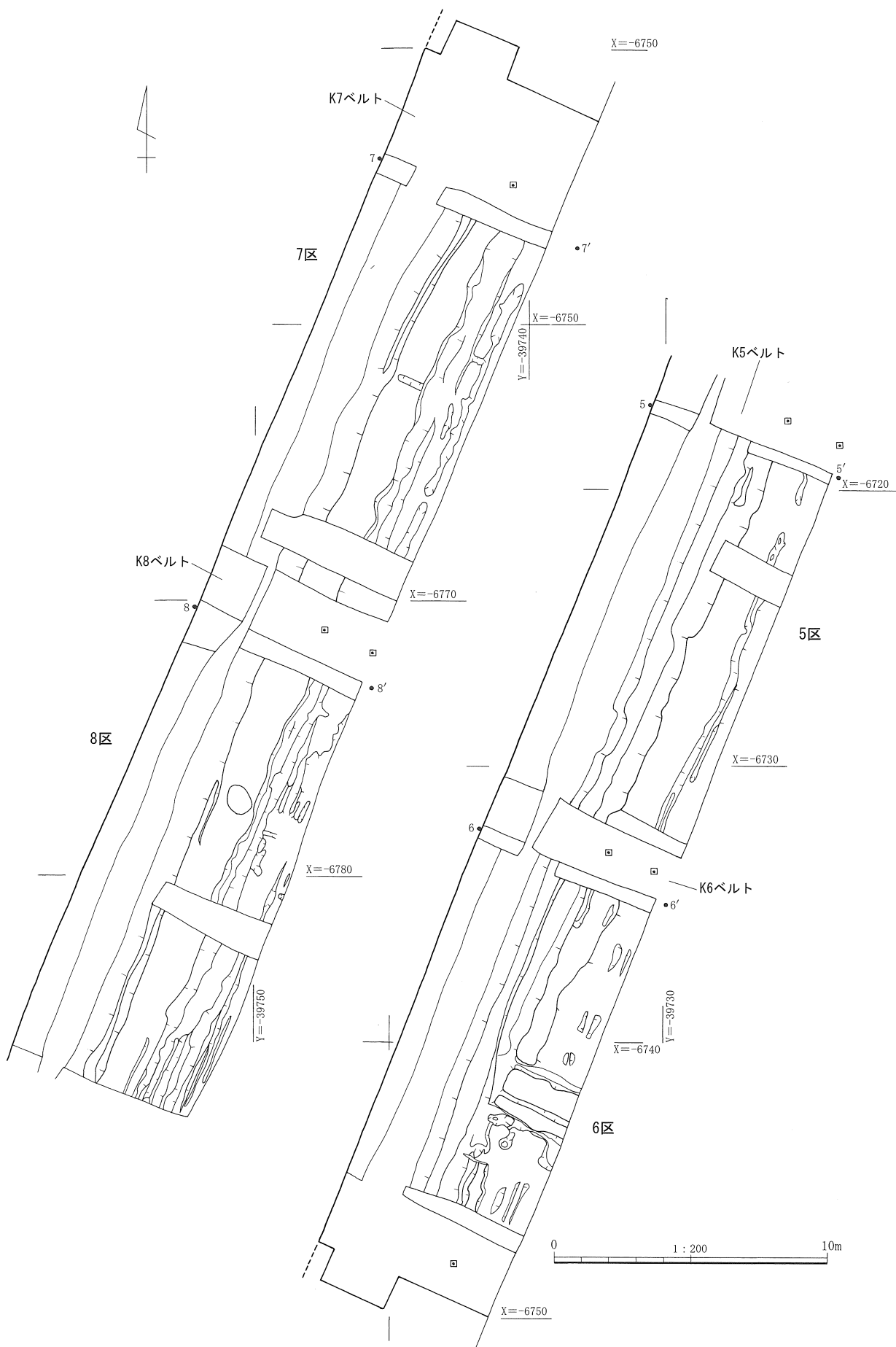
第2節 遺構



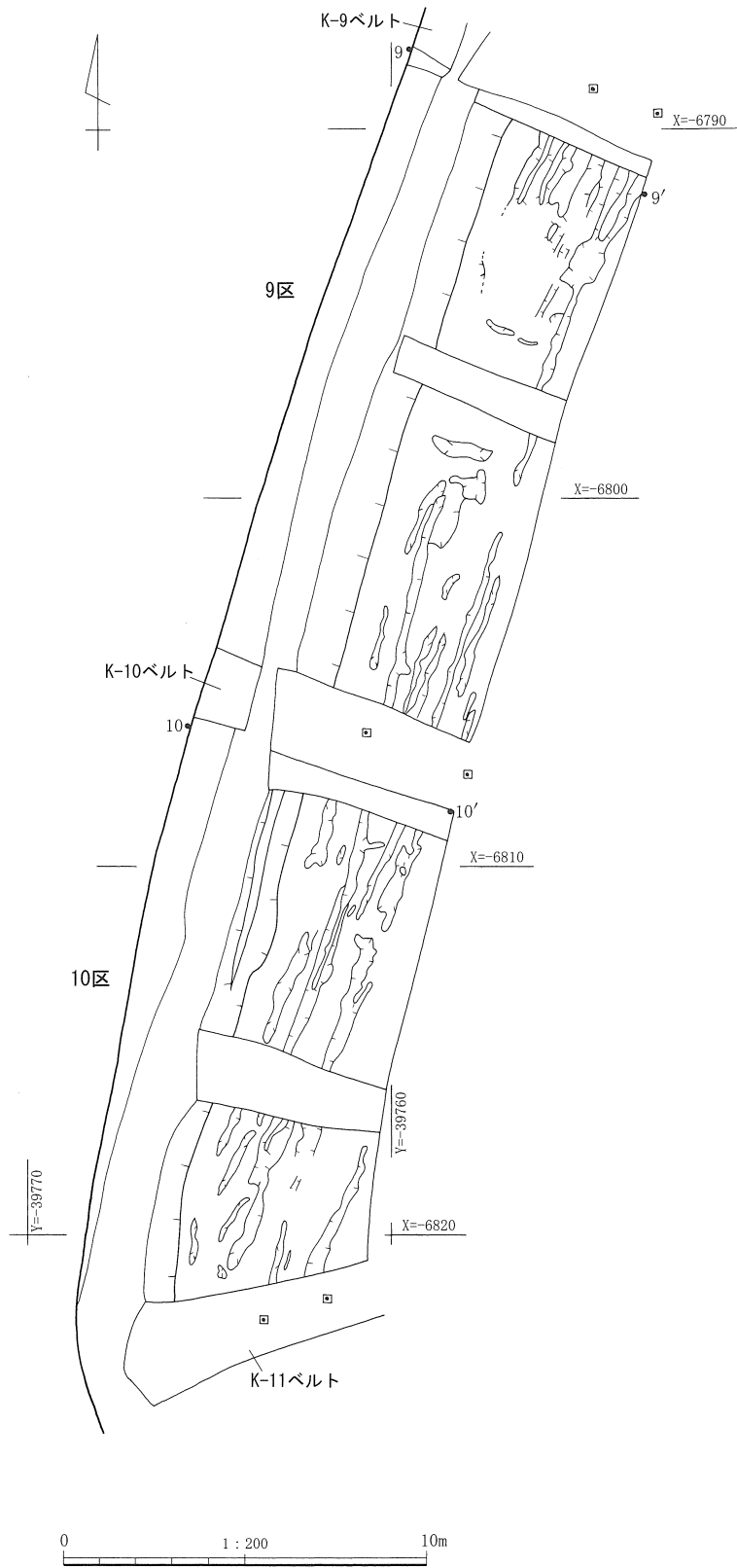
第44図 SX-02遺構配置図



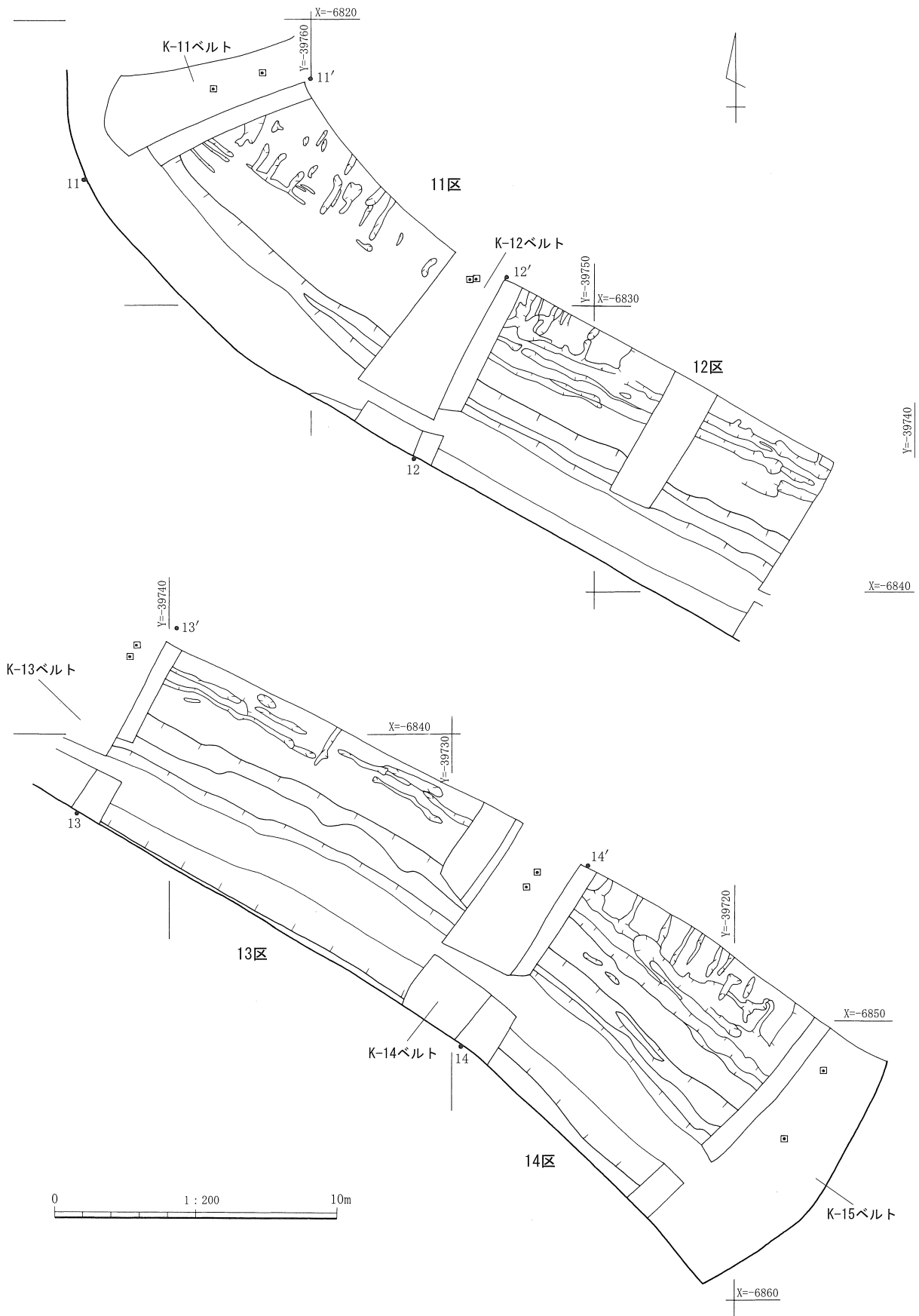
第45図 1・2・3・4区SX02実測図



第46図 5・6・7・8区SX-02実測図



第47図 9・10区SX02実測図



第48図 11・12・13・14区SX-02実測図

(3) SX03 (第50～53図)

遺構は標高約4.937m前後で検出された水田状遺構である。現在の水路により攪乱されているが、1～4区、7～9区、14区に畦が確認された。土層断面で確認したところ、水田遺構の畦上面から水田床面にかけては、酸化鉄を多量に含み硬化面となっていた。床土はマンガンが沈着しており、厚さはおよそ20cm程であった。

水路西側に同時期の面が2区、4～7区、12～14区で確認された。13区のみ幅は広いが、上面の幅は10～50cmと細く、畦の上面か水田面かは判断が出来なかった。

1区では、標高5.005mで検出された。水路東側の畦は幅約90～100cm、長さ約17.5mが矢板際に確認された。畦と水田面の高低差は11cm、畦と水路底面の高低差は約40cmである。水路西側では、区北側から幅約10cm、長さ約3.5mの水田際の線が確認されたが、検出面が狭小であるため詳細は不明である。

2区では、標高4.968mで検出された。水路東側の畦は幅約80～100cmで1区に続き区の北側から長さ約7mにわたり確認された。畦と水田面の高低差は9cm、畦と水路底面の高低差は54cmである。畦と水田面の高低差は6～9cmである。水路西側では、区北側から幅約10cm、長さ約3mの水田際の線が確認された。検出面が狭小のであるため詳細は不明である。

3区では、標高4.965mで検出された。水路東側の畦は幅約40cm、長さ約15mが確認された。畦と水田面の高低差は1cm、畦と水路底面の高低差は44cmである。区の北側中央部に始まり、区の中頃で水田面と同じ高さとなる。現水路に切られたため、幅の広いところで40cm、水田際と水路底面の高低差は55cmであった。

4区では、標高5.090mで検出された。水路東側の畦は幅約81cmで明瞭な線ではないが長さ約11.5mが確認された。畦と水田面の高低差は4cm、畦と水路底面の高低差は81cmである。水路西側には北側から始まり、南側の中央部まで続き次第に細くなる幅約10～30cm、長さ約14mの水田際が確認された。

5区では、標高4.967mで検出された。水路東側に畦は確認できなかった。水田面と水路底面の高低差は73cmである。水路西側には、北側から南側に広がる幅約10～50cmの水田際が確認できた。水田際と水路底面の高低差は59cmであった。

6区では、標高4.905mで検出された。水路東側に畦は確認できなかった。水田面と水路底面の高低差は60cmである。水路西側には、北側から幅約30cm、長さ約10.5mにわたり水田際が確認された。水田際と水路底面の高低差は55cmであった。

7区では、標高4.949mで検出された。水路東側の畦は幅約180cmで畦と水田面の高低差は15cm、畦と水路底面の高低差は50cmである。畦東脇の溝状落ち込みは幅40～100cmで深さ20cm、畦、溝ともに長さ約15mが確認された。水路西側には、北側から幅約10～30cm、長さ約13mの水田際が確認された。この水田際の線は区の南側で矢板に切られる。水田面と水路底面の高低差は60cmであった。水路内の一部には、漉上げに使用した際のバックフォアの爪痕が残っており、近、現代の攪乱と考えられる

8区では、標高4.889mで検出された。水路東側の畦は幅約40～100cmで畦と水田面の高低差は5cm、畦と水路底面の高低差は75cmである。区の北側は7区同様に畦がしっかりしているが南側に行くほど細くなる。畦東脇の溝状落ち込みは幅40～70cmで深さ62cm、畦、溝ともに長さ約16.3mが確認された。水路西側では畦は確認できなかった。

9区では、標高4.930 mで検出された。水路東側の畦は幅約20～30 cmで畦と水田面の高低差は55 cm、畦と水路底面の高低差は6 cmである。8区から畦が次第に細くなり、区の中央部で畦が消滅する。畦東脇の溝状落ち込みは畦がなくなる場所で大きく方向を東方向えと変える。長さ約6 mが確認された。水路西側では畦は確認できなかった。

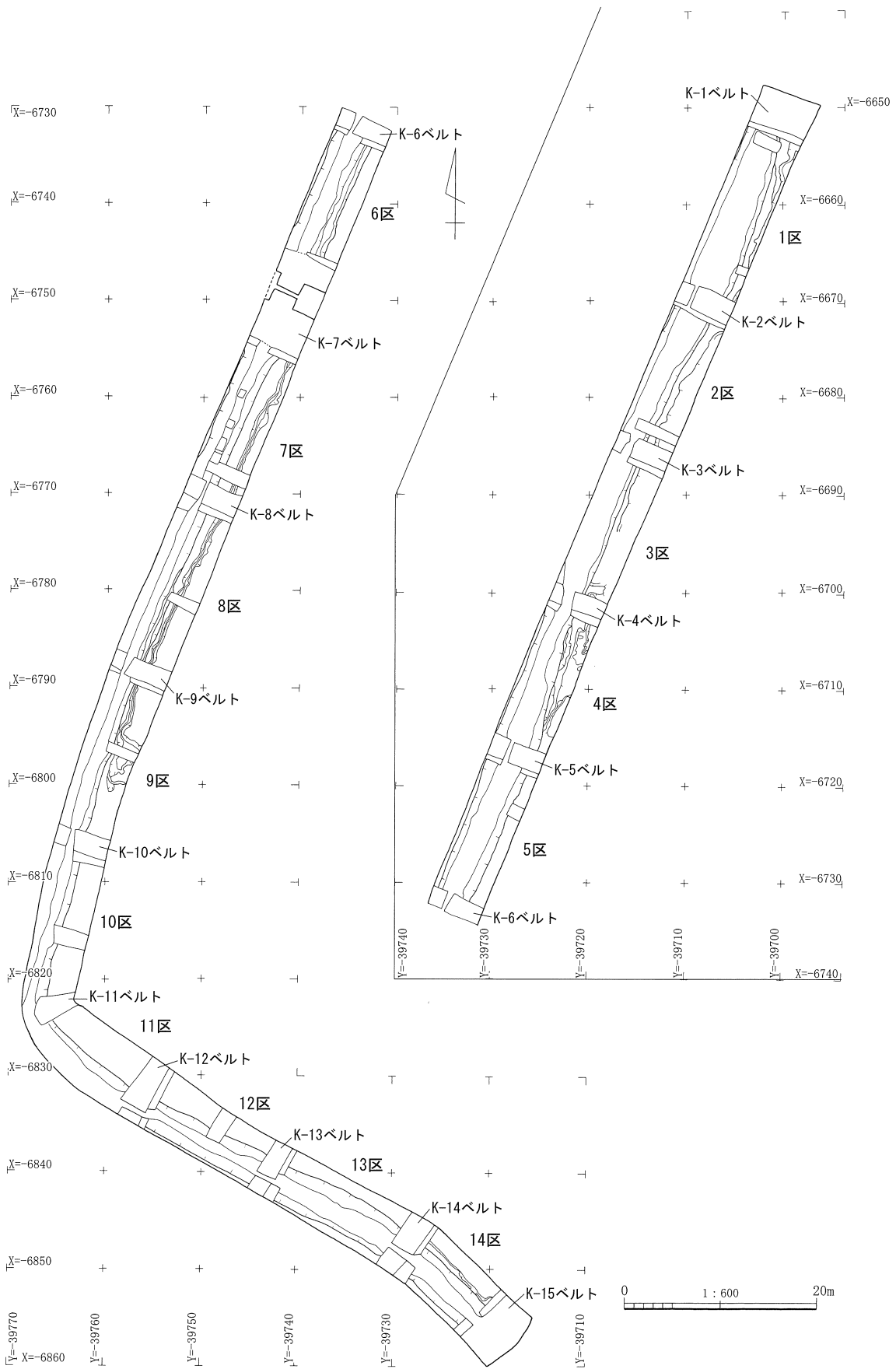
10区は、標高4.870 mで検出された。水路東側の水田面と水路底面の高低差は78 cmである。水路東側、西側ともに畦は確認できなかった。

11区は、標高4.891 mで検出された。水路北側の水田面と水路底面の高低差は69 cmである。水路南側、北側ともに畦は確認できなかった。

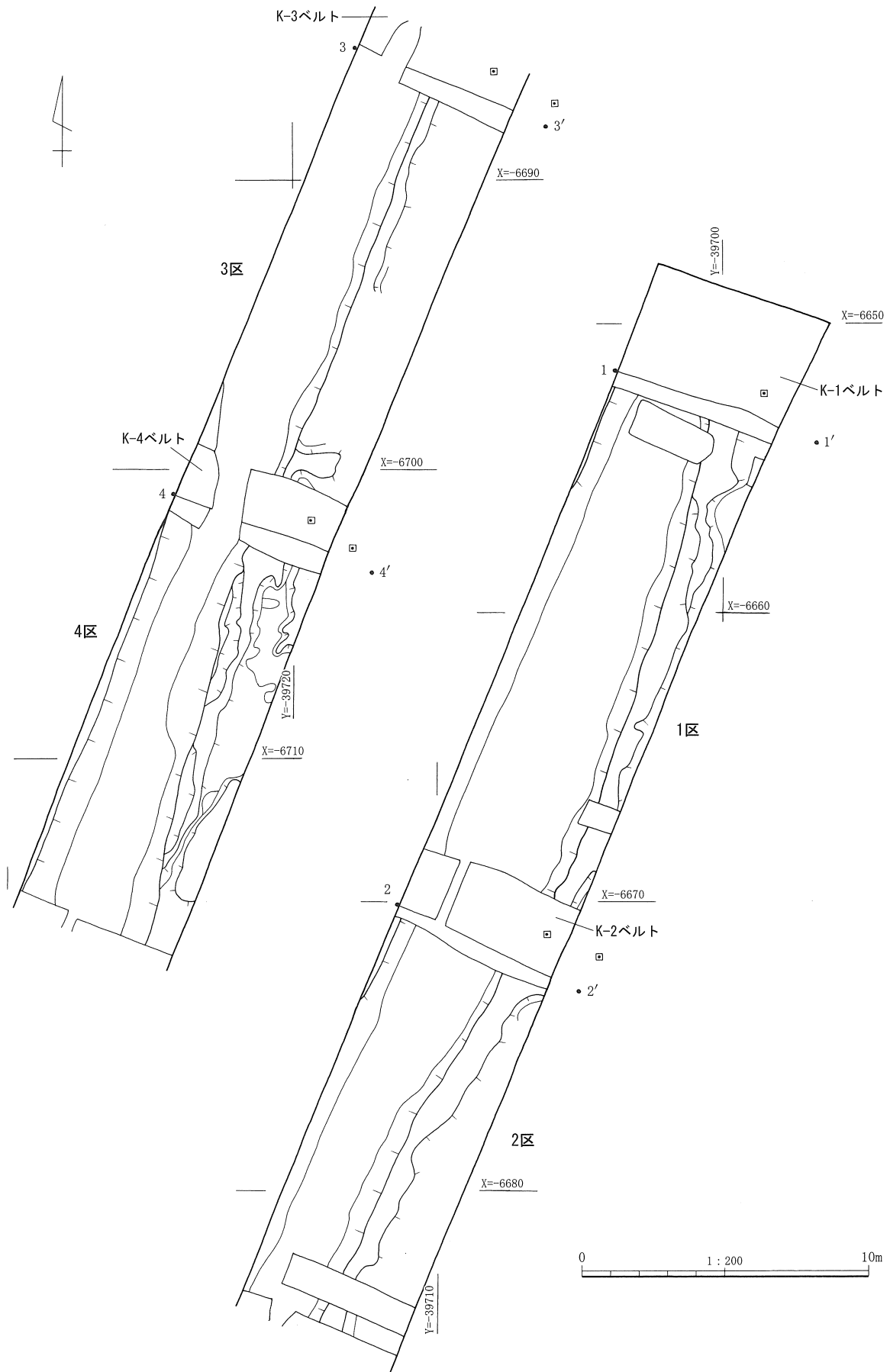
12区では、標高4.897 mで検出された。水路北側の水田面と水路底面の高低差は83 cmで、畦は確認できなかった。水路南側には、区全体で水田際が確認された、幅は西側で約20 cm、東側で40 cmと広がっている。水田際と水路底面の高低差は64 cmであった。

13区では、標高4.899 mで検出された。水路北側の水田面と水路底面の高低差は83 cmで、畦は確認できなかった。水路南側には水田際が12区に引き続き確認され、幅は西側では20 cm程度の細さだが東側にいくにつれ太くなり、広いところで約90 cmであった。水田際と水路底面の高低差は64 cmであった。畦は確認されていない。

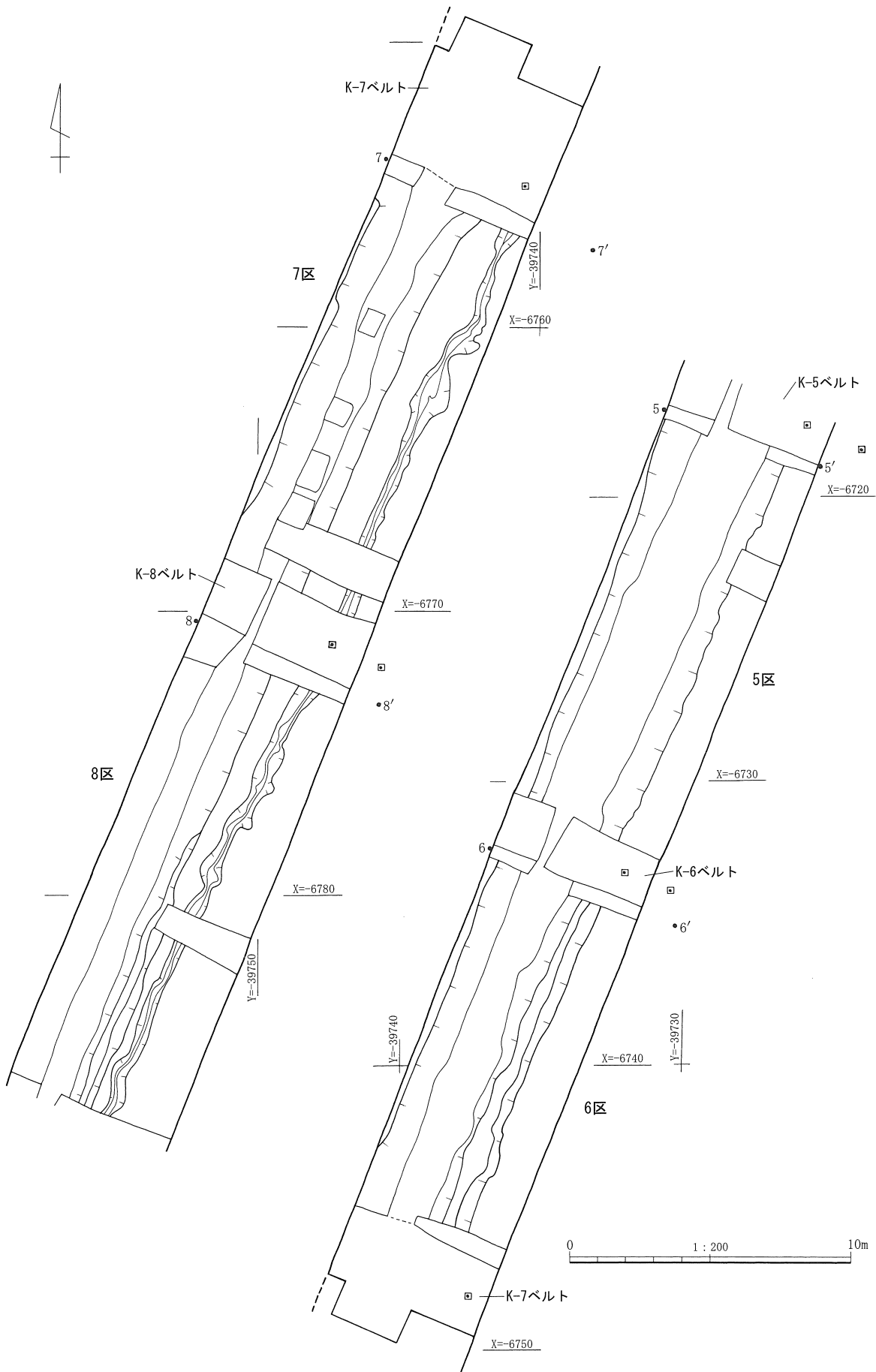
14区では、標高4.887 mで検出された。水路北側の畦は幅約60 cm、長さ約9 mが確認された。畦と水田面の高低差は2 cm、畦と水路底面の高低差は65 cmである。西から延びてきた畦が調査区東端付近で急に北側へ曲がる。水路南側には13区に引き続き畦が確認され、西側から長さ約7 m延びており、幅の広いところで50 cmであった。水田際と水路底面の高低差は71 cmであった。中世の遺物を中心に出土しており、中世以降の水田遺構と考えられる。



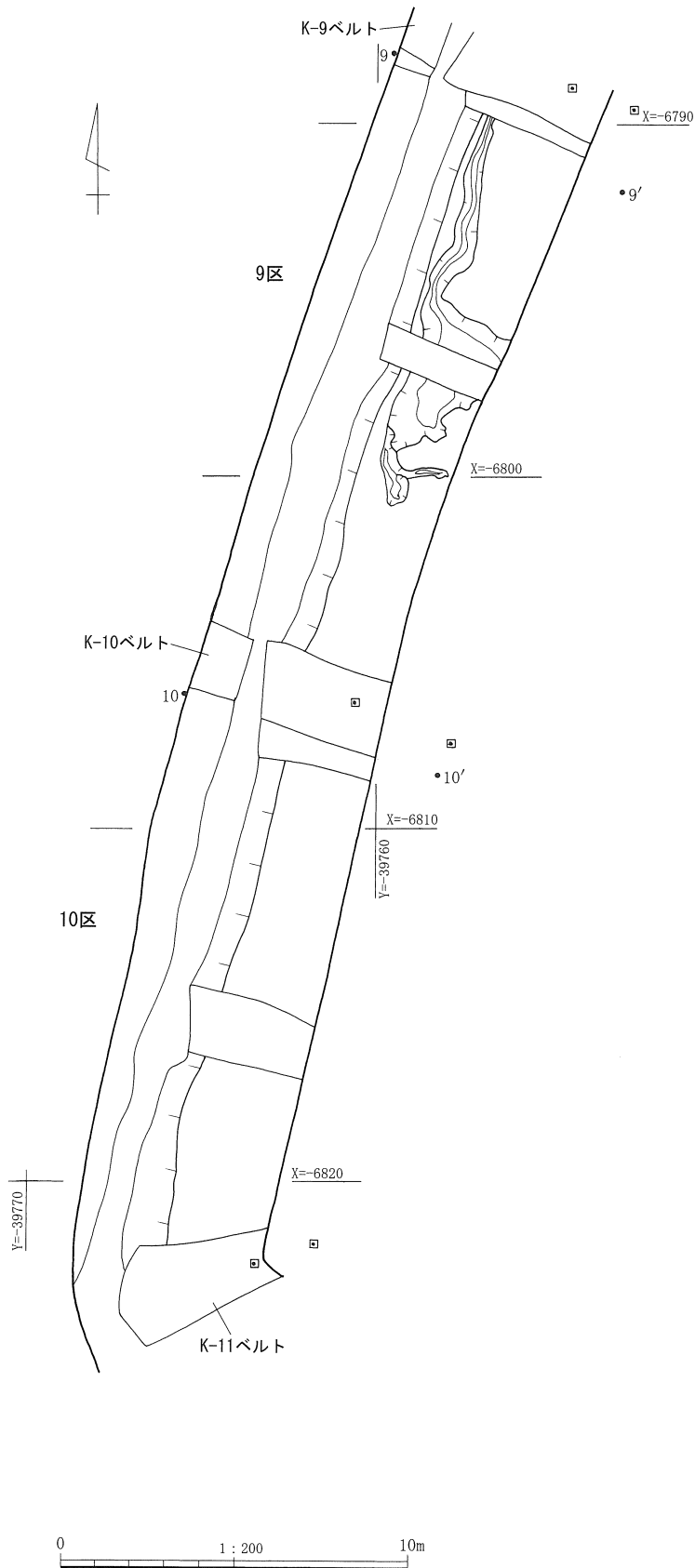
第49図 SX-03遺構配置図



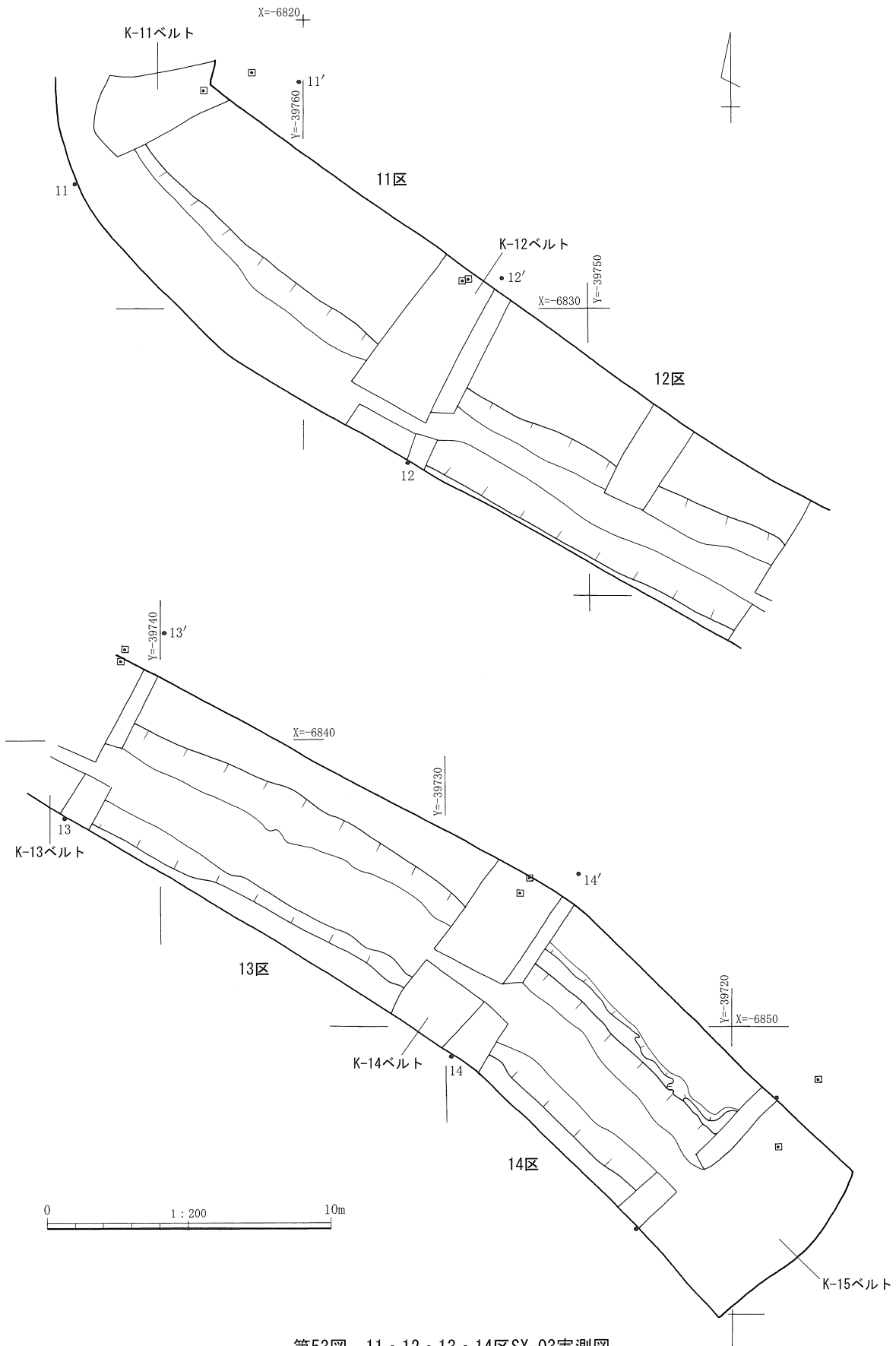
第50図 1・2・3・4区SX03実測図



第51図 5・6・7・8区SX-03実測図



第52図 9-10区SX03実測図



第53図 11・12・13・14区SX-03実測図

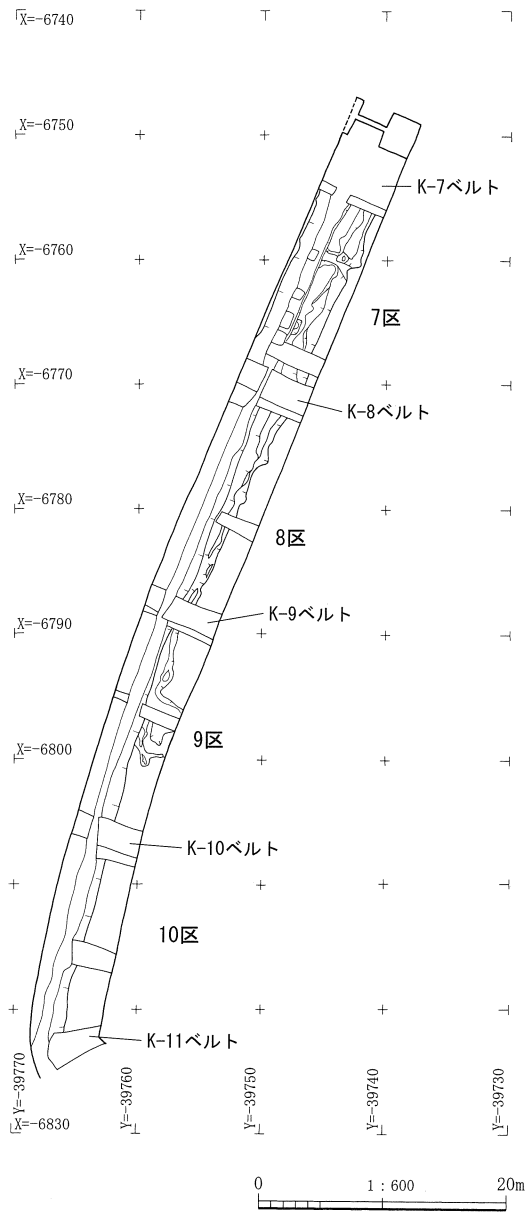
(4) SX04 (第55図)

遺構は標高約4.890 m前後で検出された水田状遺構で、7, 8, 9区の畦状遺構部分のみを掘削して検出した面をSX04とした。このとき、SX03の畦状遺構は水路東側の水路際に沿ってあり、幅約180 cmで水田面との高低差は15 cmである。他区の畦と異なり、水田遺構4面に土を盛り上げ造成されている。畦状遺構の東側に接して溝状遺構があり、遺構の幅は約40～100 cmで、深さ約20～62 cmである。畦状遺構と溝状遺構はともに7～8区まで南北方向に延び、総延長約37 mである。9区の中頃で東西方向に曲がり、隣接する調査区(新幹線新駅周辺整備事業の停車場線)に延びている。始まりは7区の最北部であるが、6区では確認されていない。6～7区の間にはコンクリート製の水門があり、水門の上流側3 m、下流側5 mは既に攪乱されているため、調査対象外としている。この8 mの間に畦状遺構と溝状遺構が始まっていたと考えられる。

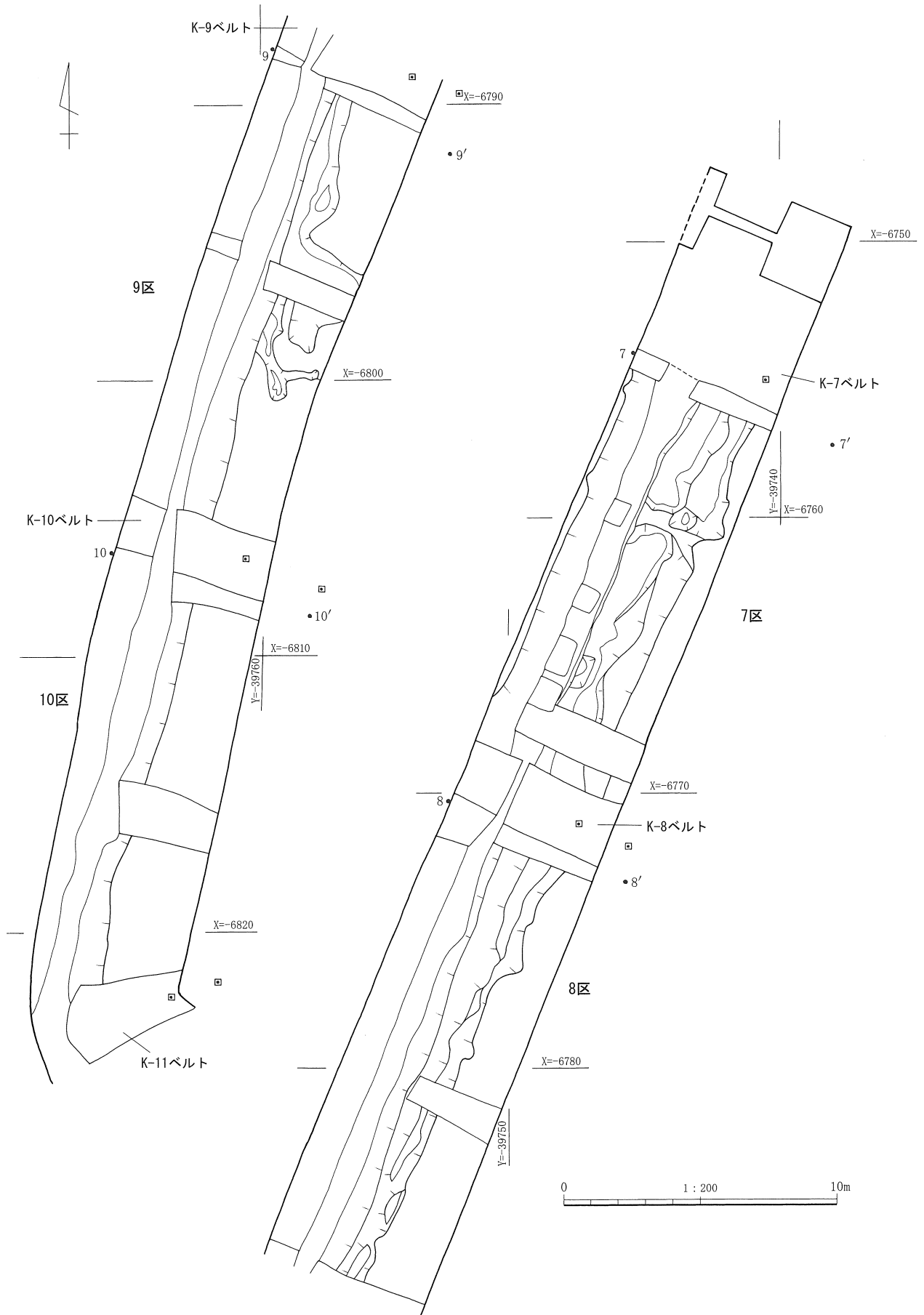
7区では、標高4.870 mで検出された。水路東側で確認された水田面は幅約120 cmで水路底部との高低差は約75 cmである。水路底部には沈砂溝が2箇所確認されており、長さ約4 m、深さ17 cmである。水路内が重機により一部攪乱されている。水路西側は、区北側より幅約20 cm、長さ13 mにわたり水田際の一部が確認できた。幅が狭小であるため詳細は不明である。

8区では、標高4.885 mで検出された。水路東側で確認された水田面は幅約200 cmで水路底部との高低差は約96 cmである。水路底部に沈砂溝は確認されなかった。水路西側には水田面は確認できなかった。

9区では、標高4.915 mで検出された。水路東側で確認された水田面は幅約2.8 mで水路底部との高低差は約80 cmである。水路底部に沈砂溝は確認されなかった。水路西側には水田面は確認できなかった。



第54図 SX04遺構配置図



第55図 7・8・9・10図SX-04実測図

(5) SX05 (第 57・58 図)

遺構は標高約 4.734 m 前後で検出された水田状遺構で、7 区～14 区までに確認された。水路側に畦等の検出が見込まれたが、近世・近代の水路改修などで攪乱を受けており確認できなかった。1 区～6 区までは 7～14 区までと同様に掘削を行ったが明瞭な水田面は検出されなかった。

7 区では、標高 4.784 m で検出された。中央部がバックホー、水路東側が沈砂溝により攪乱されており畦は確認できなかった。水田面と水路の高低差は 75 cm である。水路西側は、区北側より幅約 25 cm、長さ 13 m にわたり水田際の一部が確認できた。幅が狭小であるため詳細は不明である。

8 区では、標高 4.768 m で検出された。水田面は北側幅約 1.5 m、南側幅約 2.5 m で南側に向かって広がっている。水田面と水路の高低差は 93 cm である。水路西側は、7 区に続き北側より幅約 15 cm、長さ 5 m にわたり水田際の一部が確認できた。幅が狭小であるため詳細は不明である。

9 区では、標高 4.728 m で検出された。水路東側は、北から中央部にかけて長さ約 5.5 m、幅約 80 cm で畦が確認できた。畦と水田面の高低差は 7 cm、畦と水路の高低差は約 73 cm である。区の南側には南北 5 m、東西 2 m で深さ 2 cm の浅い自然落ち込みが確認された。水路西側は、区中央部に幅約 20 cm、長さ 2.5 m にわたり水田際の一部が確認できた。幅が狭小であるため詳細は不明である。

10 区では、標高 4.680 m で検出された。区の東側半分に幅約 3.3 m で南北に水田面が検出された。水田面と水路底面の高低差は約 45 cm であった。畦は確認できなかった。

11 区では、標高 4.691 m で検出された。この区からは調査区が東西に曲がり、水路の北側には水田面が幅約 4 m で区の西から東まで検出された。水田面と水路底面の高低差は約 47 cm であった。畦は確認できなかった。

12 区では標高 4.697 m で検出された。畦は確認できなかった。

13 区では標高 4.779 m で検出された。水田面は水路東側に検出され、幅約 1 m で区の西から東に延びている。畦は、幅 70 cm で区の西から東に延びている。

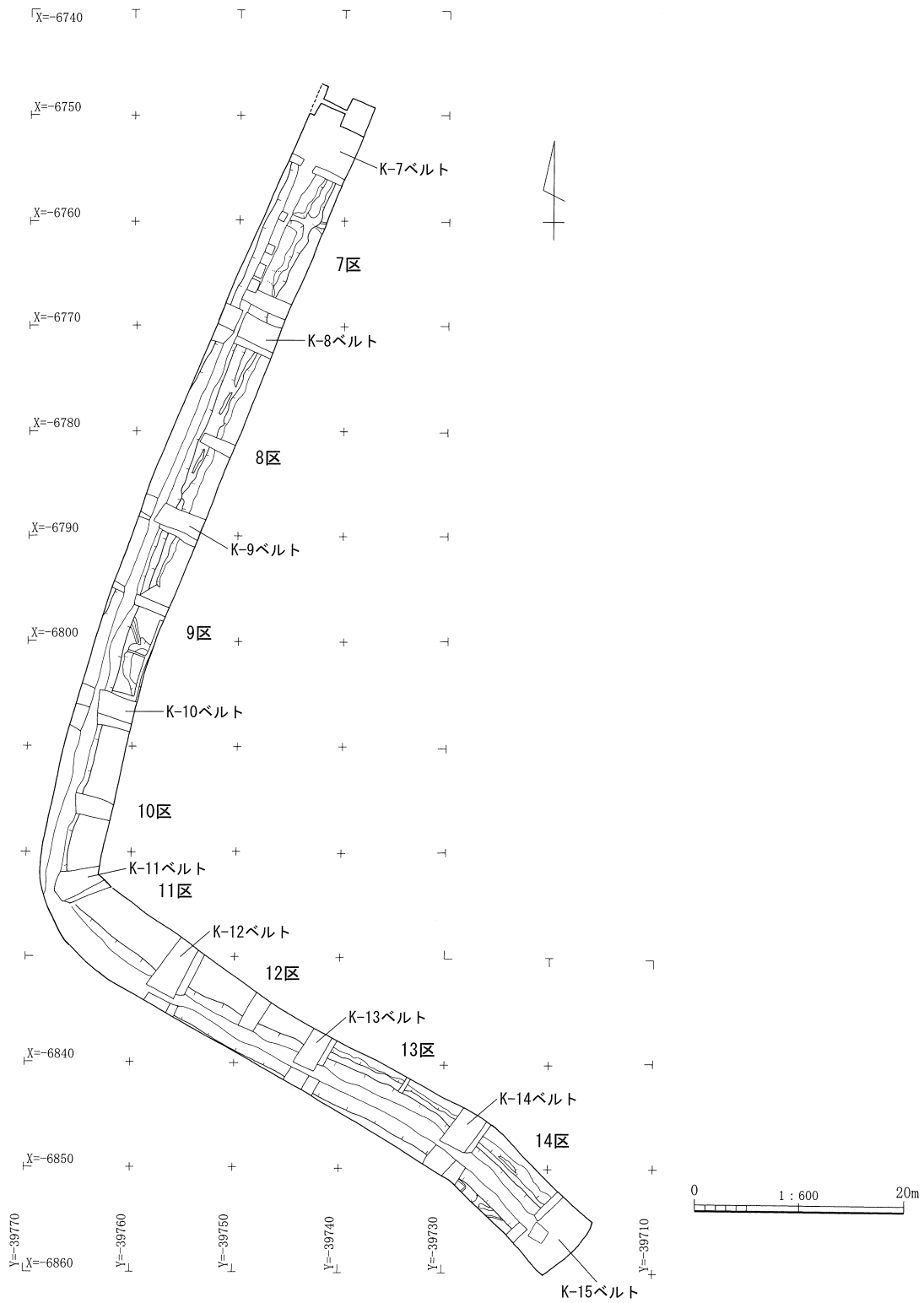
14 区では標高 4.665 m で検出された。水田面は水路北側に検出され、幅約 50 cm で区の西側から東に延びている。

(6) SX06 (第 60 図)

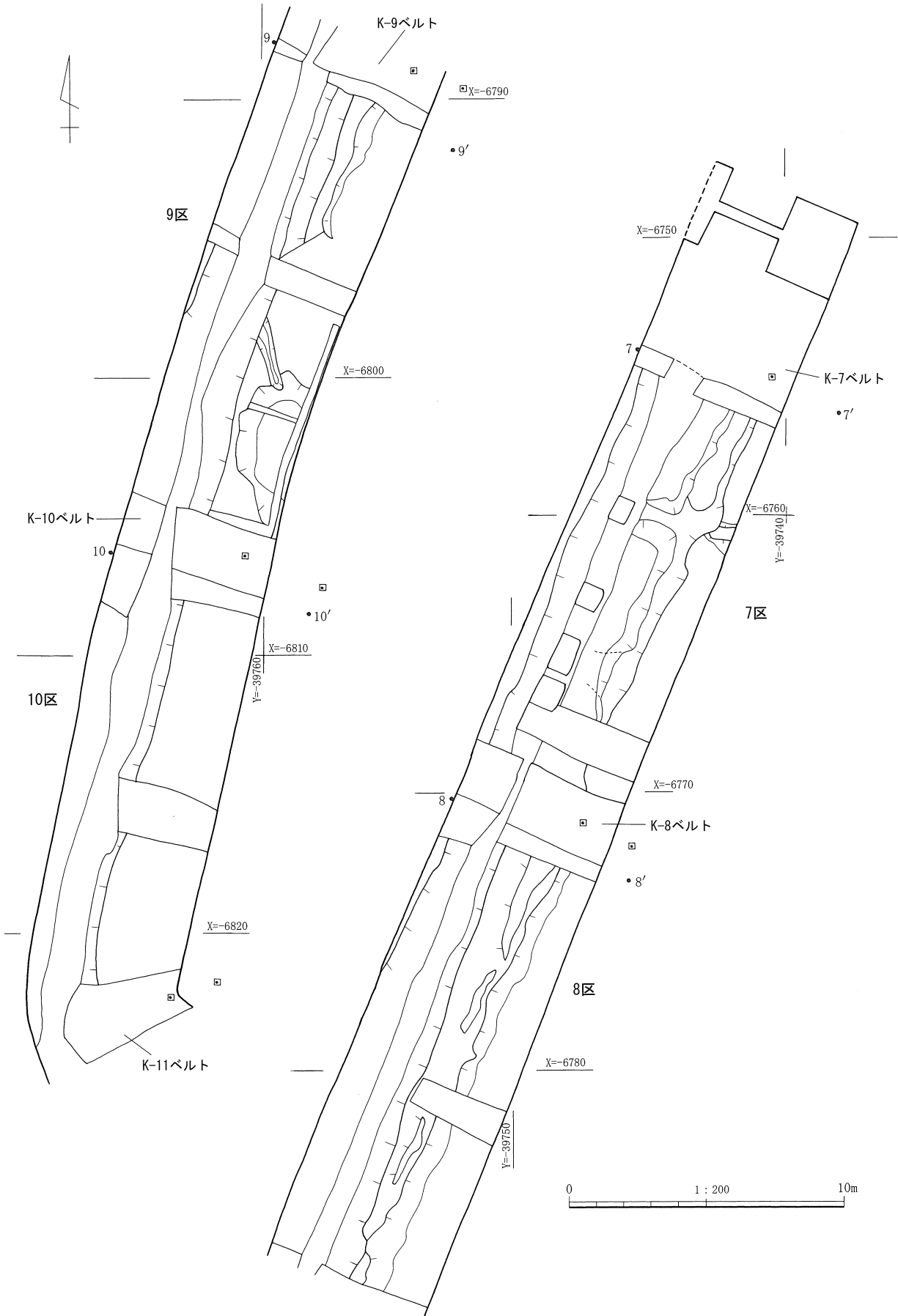
遺構は、9 区のみで確認された。標高 4.518 m 前後で畦を伴う畦畔状遺構である。

9 区の南部には東側矢板から水路に向かい直角小畦が東西方向に延びている。隣接する調査 II 区で大部分が確認されており、北東方向に沿っていることが分かっている。畦の杭列が水路の対岸には確認されていない。後世の水路の改修等により攪乱を受けている可能性もあるが、対岸の水路内の斜面には痕跡がないため、水路周辺で畦が切れていた可能性が高い。検出された畦は基礎に杭が打ち込まれており、杭列の幅 55 cm、杭列での杭の間隔はおおよそ等間隔にあり、約 30 cm であった。確認された総延長は長さ約 3 m である。杭は長さ約 20 cm、幅約 7 cm の割杭で状態は悪い。遺物は土器小片が数点出土しているが、時代が特定できるような遺物ではない。

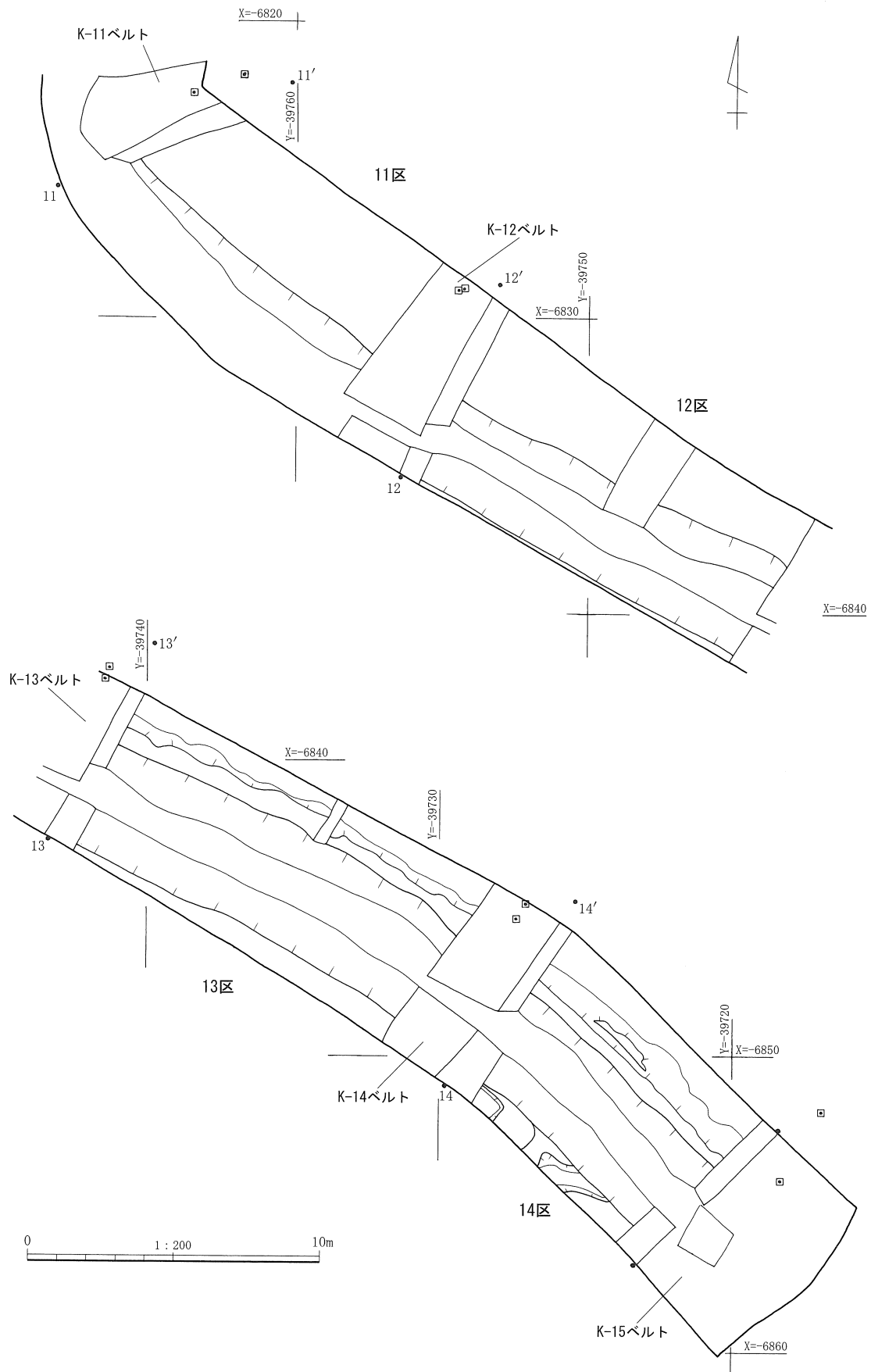
第2節 遺構



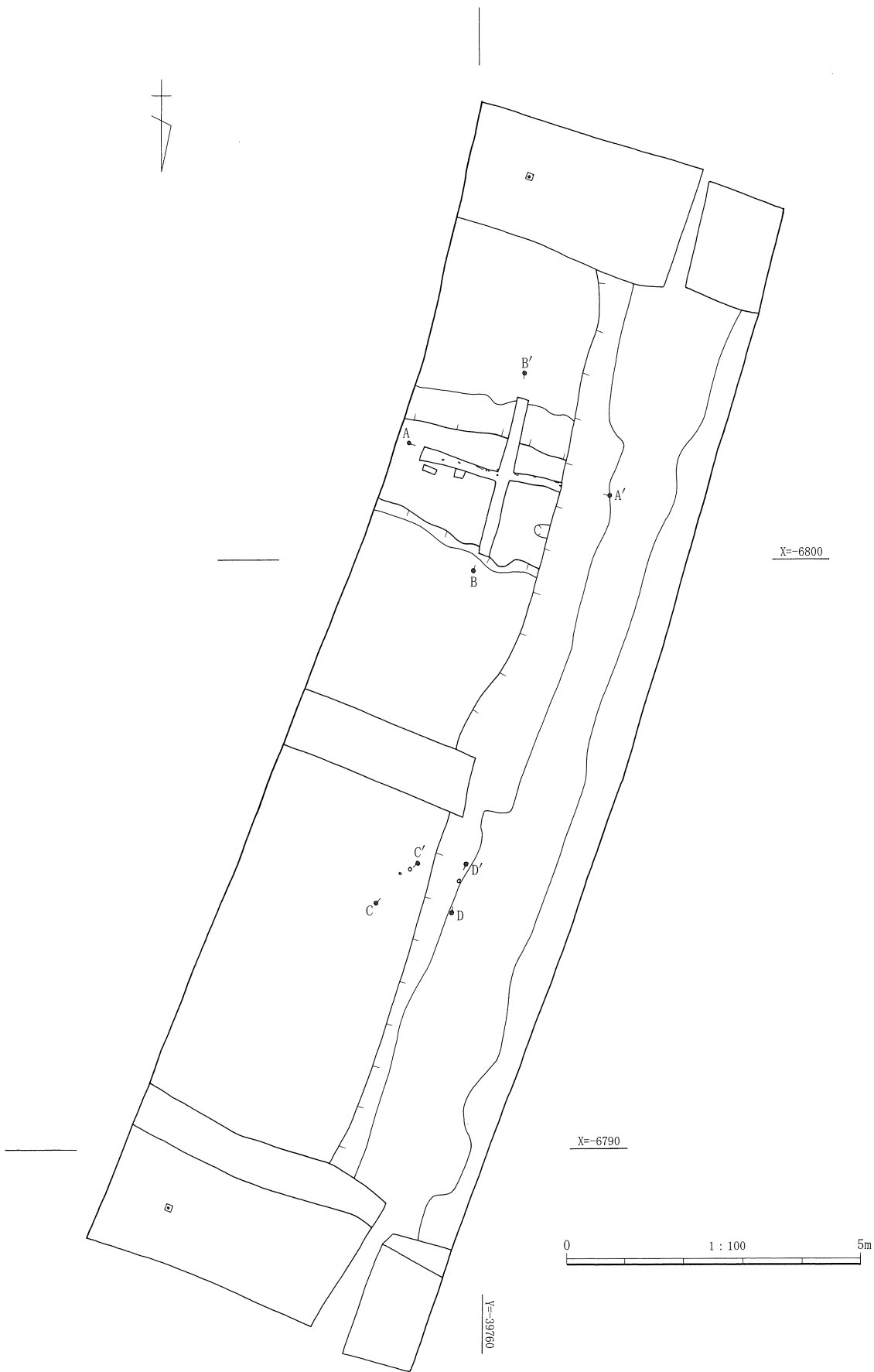
第56図 SX-05遺構配置図



第57図 7・8・9・10区SX-05実測図

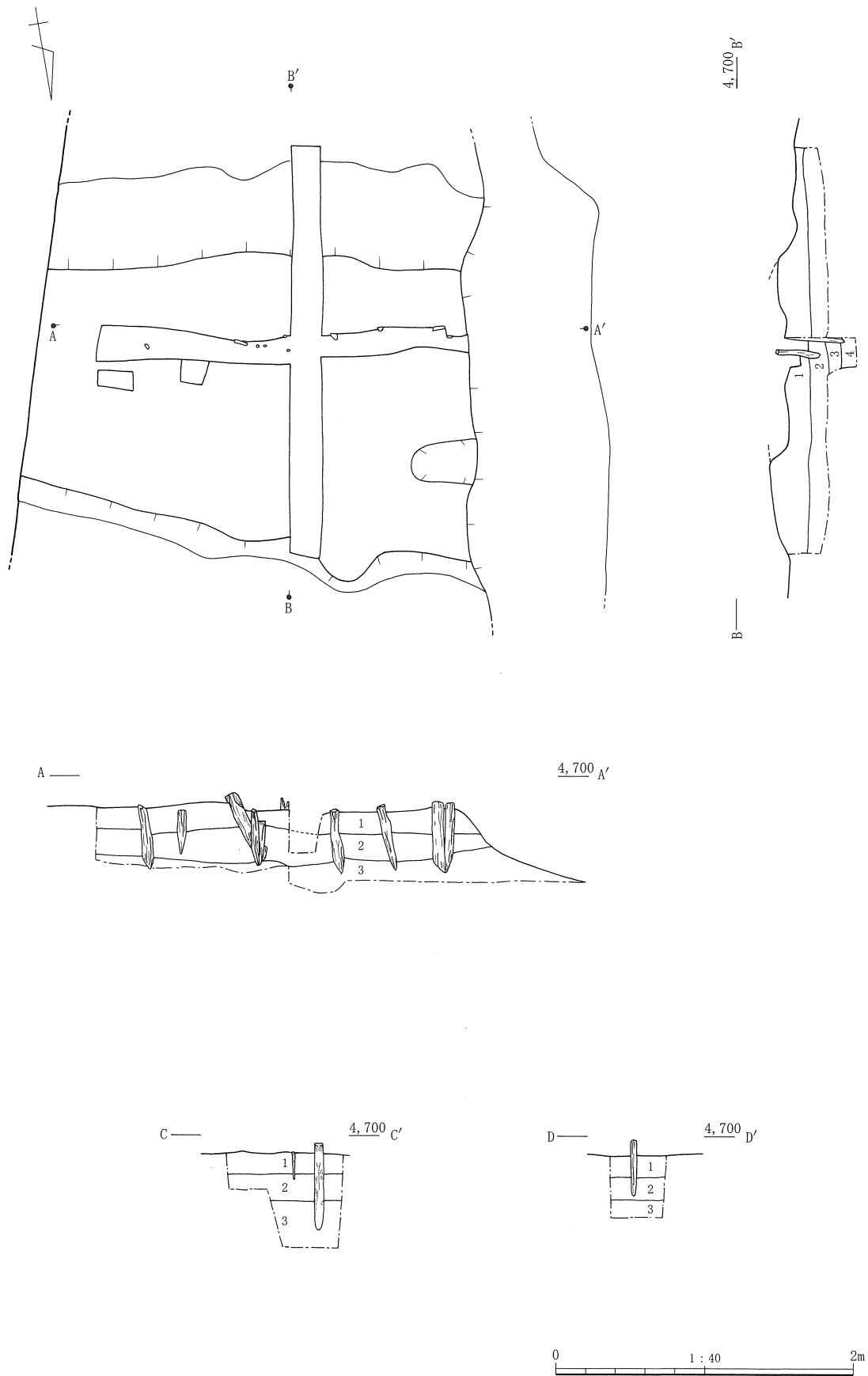


第58図 11・12・13・14区SX-05実測図



第59図 SX-06遺構配置図

第2節 遺構



第60図 9区SX-06畦畔状遺構と杭実測図

2. 杭列（第61～64図、図版24～26）

確認調査の段階では、畦畔状遺構2面が今回の本調査の調査対象であったが、下層からさらに畦畔状遺構が確認された。多い区では畦畔状遺構6面まで確認された。調査終了後、各土層断面観察用ベルト下の深掘りを行った。

その結果、K-3土層観察用ベルト下、標高約3.75mの第22層暗オリーブ灰色土(2.5GY3/1)粘土質で不定形の0.2～3cmの白色礫(生痕化石)を含む層の掘削時に杭が検出された。この杭はSX05より約95cm下がった第23層灰色土(N4/)粘土層で上層に大量に含まれていた白色礫を含まない層に打ち込まれていた。このK-6土層観察用ベルトの北側にあたる5区に、この杭が列として存在することが推定された。

K-6土層観察用ベルトを観察した結果、標高約3.75mに杭が打ち込まれた層が確認された。5区はすでに矢板より1.5m下がっており、杭までの層が約95cmと厚いことから、調査期間の都合上、矢板上段から重機にて掘削を行った。

その後、杭列が確認できると思われる部分については、杭の確認されたK-6ベルト側から杭が検出されなくなる範囲までを人力で掘削を行った。人力で7～10cm掘削し北方向に延びる杭列を検出した(杭列第2群)。途中で杭列は途切れるが、再度、延長線上に新たな杭列が確認された(杭列第1群)。4区まで杭列が延びるかと思われたが、5区中央部付近で杭列は途切れていた。この範囲内を5区調査の追加分として調査を行った。

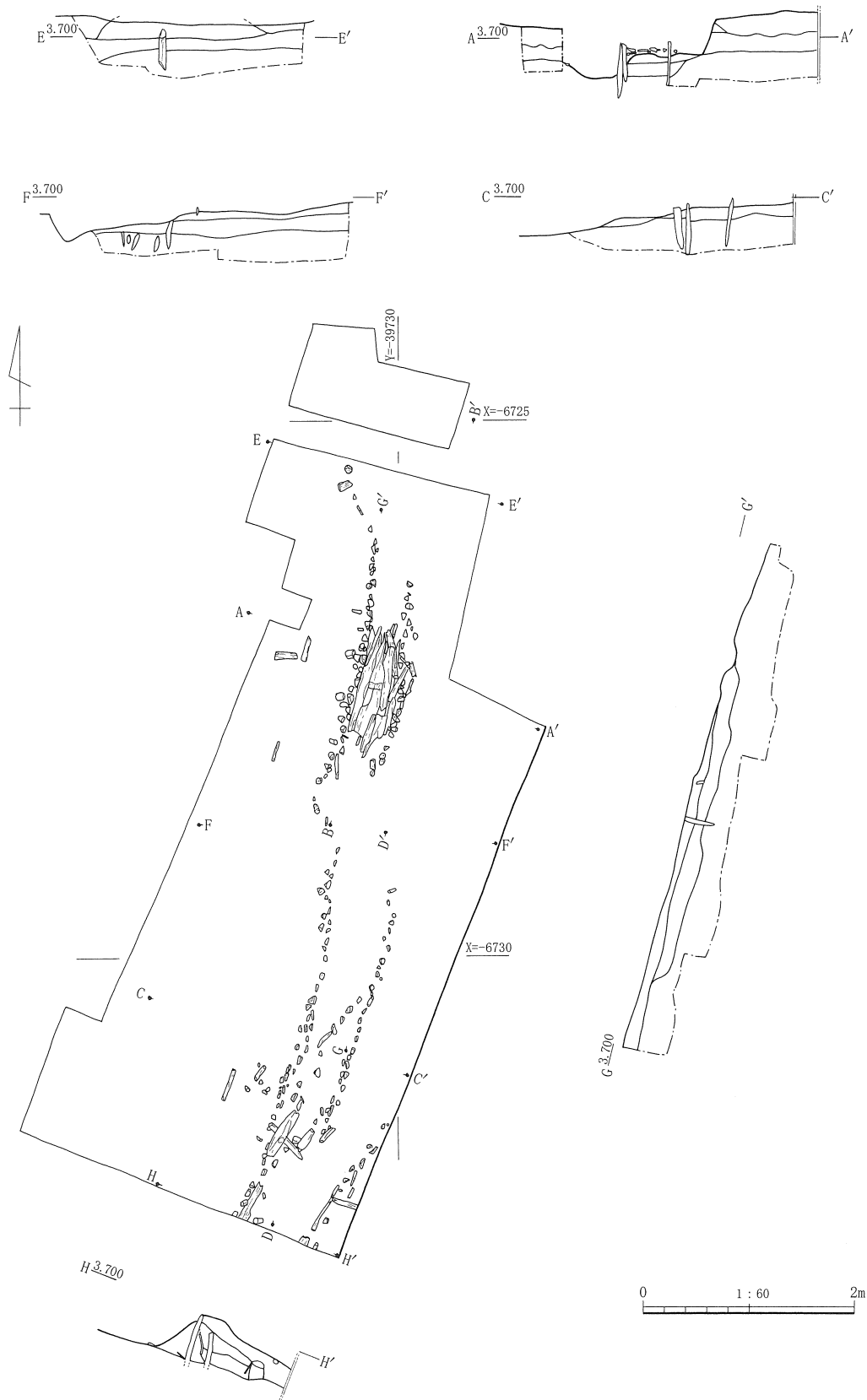
調査時に2列の杭列と判断した為に第3群と第4群の詳細な調査が不足してしまった。よって、図面、写真などの不足分があり調査担当の反省点である。

杭列間土層断面からこの杭列と杭列の間には、土の流失を防ぐ目的で粗朶が敷かれており、その間には盛り土がされていた。杭列は畦の基礎であると考えられ、杭の上面で掘削を止め、畦の検出を行った。

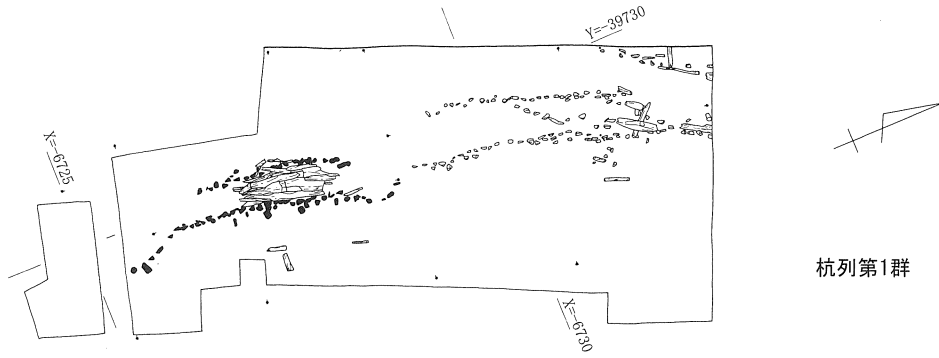
5区内の中央部で南北に延びる杭列1対を第1群、南側で南北に延びる杭列1対を第2群、K-6土層観察用ベルト下から北東方向に延びる杭列1対を第3群とし、北東方向に延びる杭列で第2群の杭列の間にしか存在しない1列を第4群とした。出土した杭は171本余りで、樹種は11種類に分けることができた。各杭列群の詳細については、次のとおりである。

(1) 杭列第1群(1対)

杭列1対は標高約3.65～3.7mで検出された。調査5区中央部に幅50cmで南北方向に延びており、東側に緩やかに膨らんでいる。検出時に杭の頭を探し掘削したために、畔の上部を掘削してしまった。杭列北側の土層断面E-E'では、23層に打ち込まれた杭の上部に黄灰色(2.5y4/1)粘質土で22層より白色粒が黄色っぽい、しまり具合は同じである層が盛り上げられている。粗朶は検出されていない。下層の緑灰色(7.5GY5/1)堅質な粘土層は西側に下がっている。杭列中央部ほどの断面A-A'では、下層の緑灰色(7.5GY5/1)が西側に下がっており、暗緑灰色(10G3/1)弱粘質土が杭列第1群中央部から杭列第2群北側に堆積している。この上に23層が西側に薄くなりながら下がる。杭と23層の間には土の流失を防ぐ目的で粗朶が敷かれており、上面には木製品などの木が敷かれている。杭の状況や敷かれた木などから、なんらかの足場として補強がなされていたと考えられる。23層上面には黄灰色(2.5y4/1)粘質土で22層より白色粒で黄色っぽい土が盛られている。杭列は畦の基礎であると考えられる。



第61图 5区杭列状遺構実測图



杭列第1群



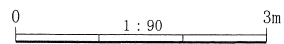
杭列第2群



杭列第3群



杭列第4群



第62図 5区各杭列名称図

第2節 遺構

東側列は長さ3.25 mで杭53本、西側列は長さ1.8 mで杭21本が確認された。西側の杭数が若干多くなっており、中央部の杭は密集気味である。

1対の杭列で東側は半裁丸杭10本、割杭8本、丸杭3本の計21本。西側は半裁丸杭10本、割杭21本、丸杭14本、板状杭6本、角杭2本の計53本の畦基礎となる杭合計74本が検出された。樹種はブナ科シイ属ツブラジイ、ブナ科コナラ属アカガシ亜属、アワブキ属、ブナ科クリ属クリ、ブナ科シイ属スダジイ、ツバキ科モッコク属モッコク、エノキ属、カバノキ科ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の全9種類であった。足場として補強されたと思われる部分には、欠損部の多い鋤3点分検出され、二次的に利用されたと考えられる。杭列の内側からは弥生時代前期の土器が検出された。

(2) 杭列第2群(1対)

杭列1対は標高約3.65 mで検出された。調査5区南側に幅45 cmで南北方向に延びている。東側列は長さ2.4 mで杭37本、西側列は長さ3 mで杭47本が確認された。両杭列の長さは、ほぼ同寸で西側杭は南部と中央部の一部に杭の密集が見られる。土層断面F-F'は杭列1群と2群の間に設定しており、杭の抜き取り痕が確認された。杭は23層に打ち込まれているが、1群のように粗朶は敷かれていなかった。また、上部の盛り土も確認できなかった。土層断面C-C'は23層に杭が打ち込まれているが、上層の盛り土は確認されていない。

1対の杭列で東側は半裁丸杭6本、割杭17本、丸杭3本、板状杭9本、角杭2本の計37本。西側は半裁丸杭10本、割杭23本、丸杭4本、板状杭9本、角杭1本の計47本の畦基礎となる杭合計84本が検出された。樹種はブナ科シイ属スダジイ、ブナ科シイ属ツブラジイ、アワブキ属、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の全4種類であった。

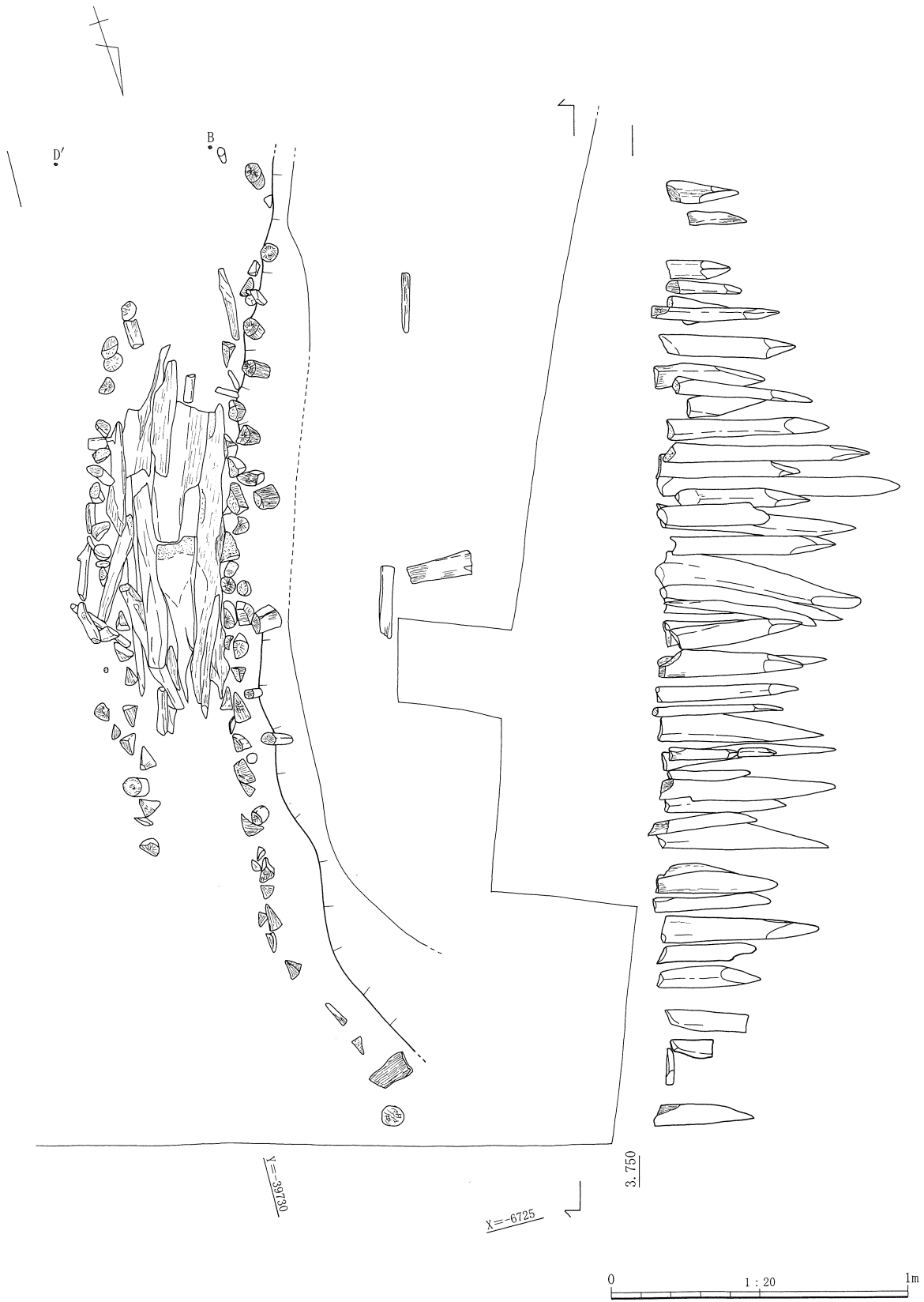
1対の杭列の間から、遺物は検出できなかったが、西側杭列の外側から弥生時代前期の土器が3点検出された。

(3) 杭列第3群(1対)

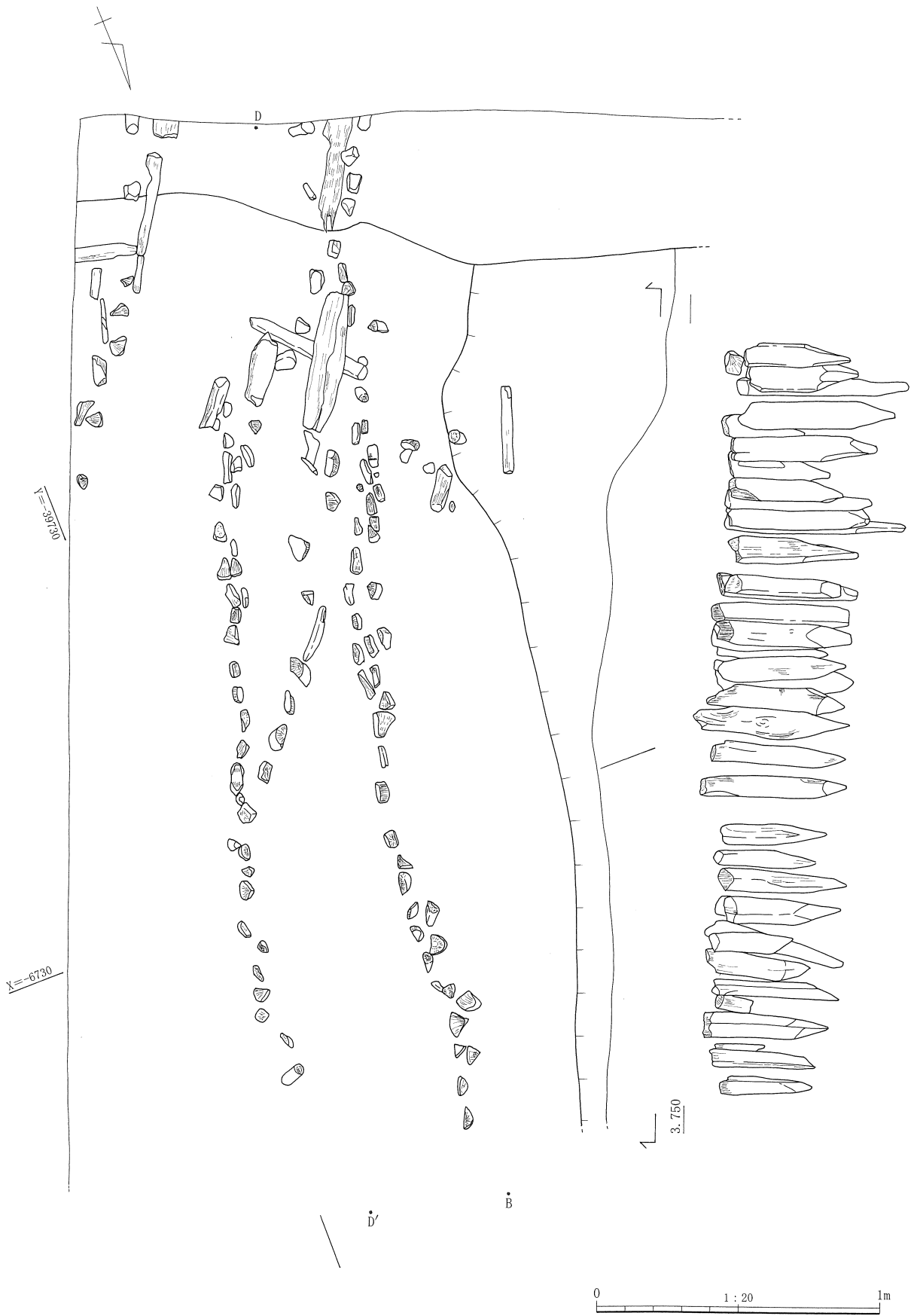
杭列1対は標高約3.26～3.3 mで検出された。K-6土層観察用ベルト直下の調査5区最南部で確認された。幅55～60 cmで1、2群より若干ではあるが幅が広く、杭の間隔は他の群より詰まっていない。北西側杭列と南東側杭列の間には粗朶が敷かれており、北東方向に延びている。南東側列は長さ1.1 mで杭8本、北西側列は長さ1.4 mで杭10本が確認された。北西側杭の北西端は2群の東側杭列で切れている。ともに、ベルトや矢板で切られているため、全長などについては不明な部分が多い。

K-6ベルト北側の土層断面H-H'では、23層の下層緑灰色(7.5GY5/1)堅質な粘土層に杭が打ち込まれている。この杭列と杭列の間には、土の流失を防ぐ目的で粗朶が敷かれており、その後、オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土で地山ブロックを希に含む層とオリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土で白味の若干強い土が盛り土されている。また杭列の外側(西側)にも23層が存在し、杭が外側に倒れないよう盛った土ではないかと考えられる。杭の上面に23層が覆っていることなどから、他の杭列群より時期が古いと考えられる。杭列は畦の基礎であったと考えられる。

1対の杭列で南東側は割杭3本、北西側は割杭7本、板状杭1本、角杭2本の計10本の畦基礎となる杭合計13本が検出された。南東側杭列では他に杭が5本出土していたが腐食が激



第63図 5区杭列第1群実測図



第64图 5区杭列第2~4群实测图

しく計寸等ができなかった。樹種はブナ科シイ属ツブラジイ、ブナ科クリ属クリ、クワ科クワ属ヤマグワの計3種類であった。

(4) 杭列第4群

杭列は、対になっておらず、標高約3.3 mで検出された。長さ1.2 mで第2群東側と西側の杭列内部にしか存在しない。方向は第3群の方向と同じであり、北東方向に延びている。粗朶の一部が杭列の南東側に少量確認できた。ベルトや矢板で切られているため、全長などについては不明な部分が多い。1群と2群より3群の時期に近いのではないかと考えられる。

1列で半裁丸杭1本、割杭4本、板状杭1本の計6本の杭が確認された。樹種はブナ科シイ属スダジイ、ブナ科シイ属ツブラジイ、ブナ科クリ属クリ、クワ科クワ属ヤマグワの全4種類であった。

各杭列群は2つのグループに分けられる。グループ1は杭列の方向が南北方向に延びる第1群と第2群である。グループ2は杭列の方向が北東方向に延びる杭列第3群と杭列第4群である。グループごとに時代差はあると思われるが、グループ内では時代差がないと思われる。

杭列群の新旧については、C14年代測定の結果からグループ2が古いと考えられ、杭列の築造順は3群西列→3群東列→4群→2群東列→2群西列→1群東→1群西の順で、弥生時代前期から中期までの期間であった。

杭列4群は、杭列2群の両列間内に収まり、杭列2群の時期以前に使用されていた杭列と考えられ、杭列2を基礎とした畦を作成する際に不要分は抜かれ、基礎の部分のみ残されたと推測できる。杭列3群の北西側杭列も杭列4群同様に北東部が杭列2群、杭列3群と4群はともに杭列は北東を向いている。杭列3群の北西側杭列も杭列4群同様に北東部が杭列2群の東列で切られている。しかし、杭列3群の南東側杭列は抜かれずに放置され、畦の基礎として再利用されたことが考えられる。上記4群の杭列からは縄文晩期の土器片2点と刻目突帯文を持つ弥生前期の土器片9点が確認された。これら杭列の時期は、弥生時代前期から弥生時代中期のものであると考えられる。

3. 溝状遺構

沈砂溝状遺構

(1) SD01 (第66～69図、図版35)

遺構はSX03の面から落込み、最深部は水路内の標高約2.7mで検出された。調査1区から7区の南北方向に蛇行しながら延びている。1区～4区まではほぼ連続して沈砂溝が並び、4区では調査区の西側に大きく膨らむ。5区～6区にかけては不連続な沈砂溝で深さが浅い。7区には他のものより幅が広い沈砂溝が存在するが、西側半分が攪乱されているため正確な幅は不明である。遺構内には白色砂のみが堆積しており、礫や流木などはまったく含まれていなかった。土層断面より水田3面の中世以降の層から沈砂溝は落ち込んでおり、遺物は確認されていないが中世以降の遺構であると考えられる。

1区では、遺構が区の北側中央部から始まり、区の南側で若干西よりに延びている。水路底の標高約2.57mで検出された。区の北側より長さ約3.3m、幅約50cm、深さ約30cmの「U」字型で底部は緩やかなカーブを描く。長さ約12.4m、幅約30cm、深さ約20cm、長さ約1.5m、幅約70cm、深さ約40cm、K-2ベルトに切られるように、幅約60cm、深さ約40cmで長さは不明である。以上の4箇所が確認されている。

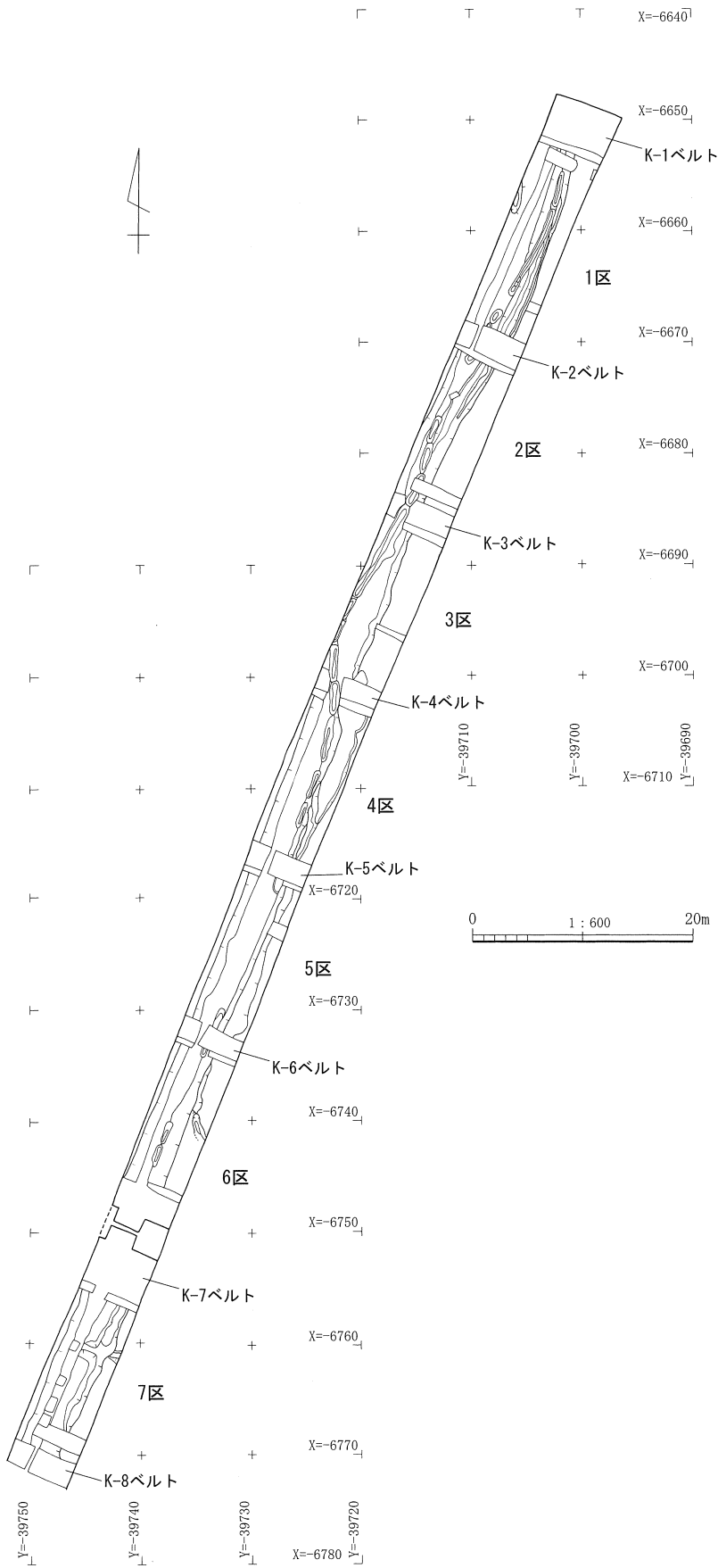
2区では、沈砂溝遺構が区の西側に片寄っている。水路底の標高約2.74mで検出された。区の北側よりK-2ベルトに切られており長さは不明であるが、幅約70cm、深さ約50cmで始まり。長さ約2.5m、幅約60cm、深さ約70cm、長さ約3m、幅約70cm、深さ約40cm、長さ約3.3m、幅約90cm、深さ約50cmが接して3箇所確認された。溝は「U」字型で底部は緩やかなカーブを描く。南側の一部はK-3ベルトを掘削して確認を行った。

3区では、沈砂溝状遺構が区の北側西から始まり、区の中央部では西側矢板際に膨らみ南側では南東に方向を変える。水路底の標高約2.84mで検出された。4区の沈砂溝は全て接しており、2区中央部から5区北側までは沈砂溝が接している。北側より長さ約9.5m、幅約1m、深さ約70cmで底は他のものより若干尖っている。長さ約2.3m、幅約50cm、深さ約30cm、長さ約2.2m、幅約30cm、深さ約40cmでこの2本については西側が矢板に一部切られているため、幅は現状で計測できる長さである。長さ約3.5m、幅約70cm、深さ約70cmで溝は「V」字型で底部は尖っている。

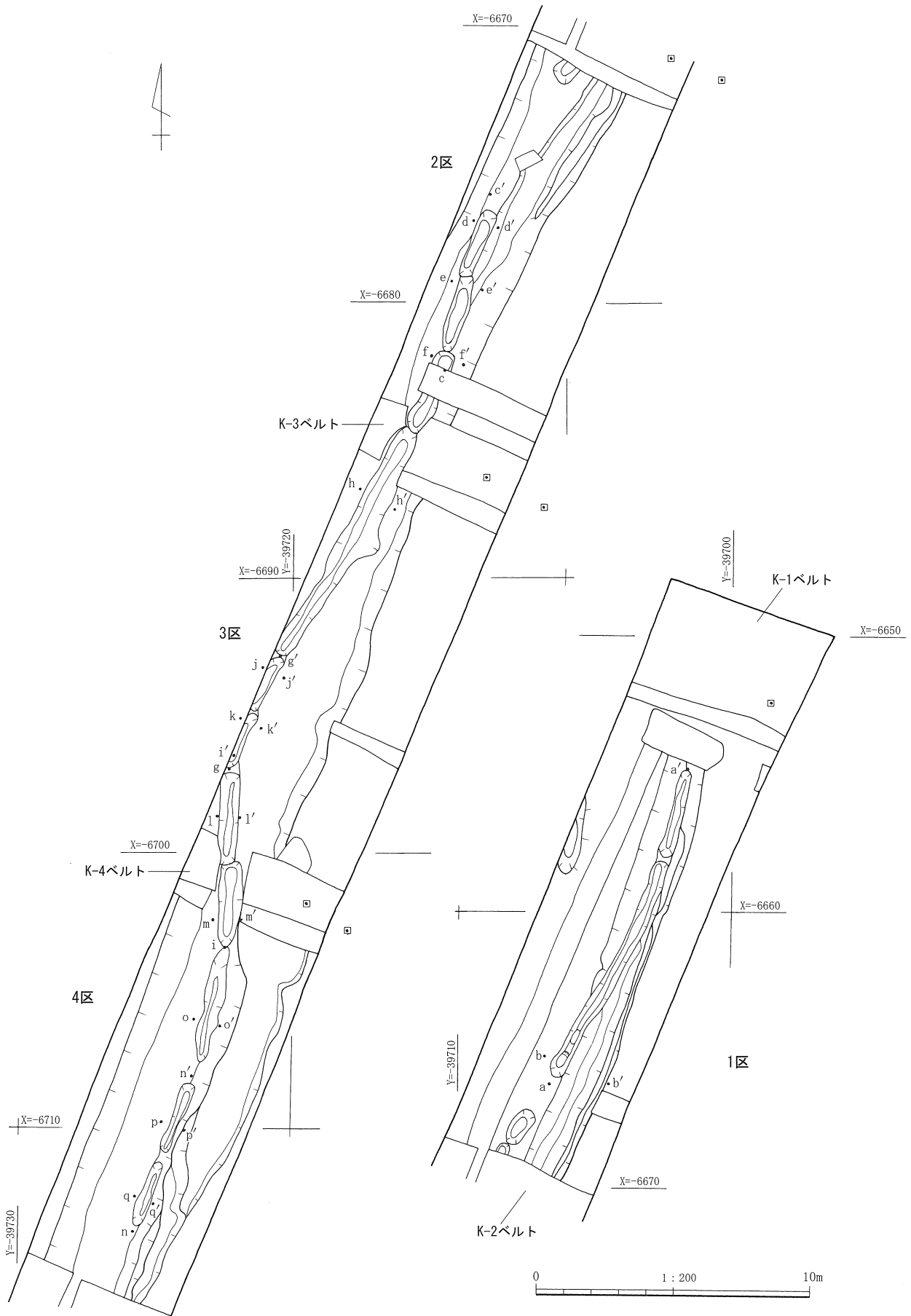
4区では、沈砂溝状遺構が区の北側中央部のK-4ベルト下から始まり、区の南側は東よりになる。水路底の標高約3.01mで検出された。長さ約3.1m、幅約80cm、深さ約70cm、長さ約4.6m、幅約70cm、深さ約0.2m、長さ約2.7m、幅約60cm、長さ約2.4m、幅約50cm、深さ約0.2mで溝は「U」字型で底部は緩やかなカーブを描く。

5区では、沈砂溝状遺構がK-5ベルト下で区の北側中央部とK-6ベルト下で区の南側中央部の2箇所が確認できた。区の北側の沈砂溝状遺構は長さ約1.5m、幅約80cm、深さ約20cmで、標高約2.79mで確認された。南側の沈砂溝状遺構は2m、幅約50cm、深さ約20cmで、標高約2.99mで確認された。区の中央部分には沈砂溝は確認できなかったが、北と南の沈砂溝状遺構の深さはともに20cmと浅く、水路の造成等による攪乱により消滅したことが考えられる。

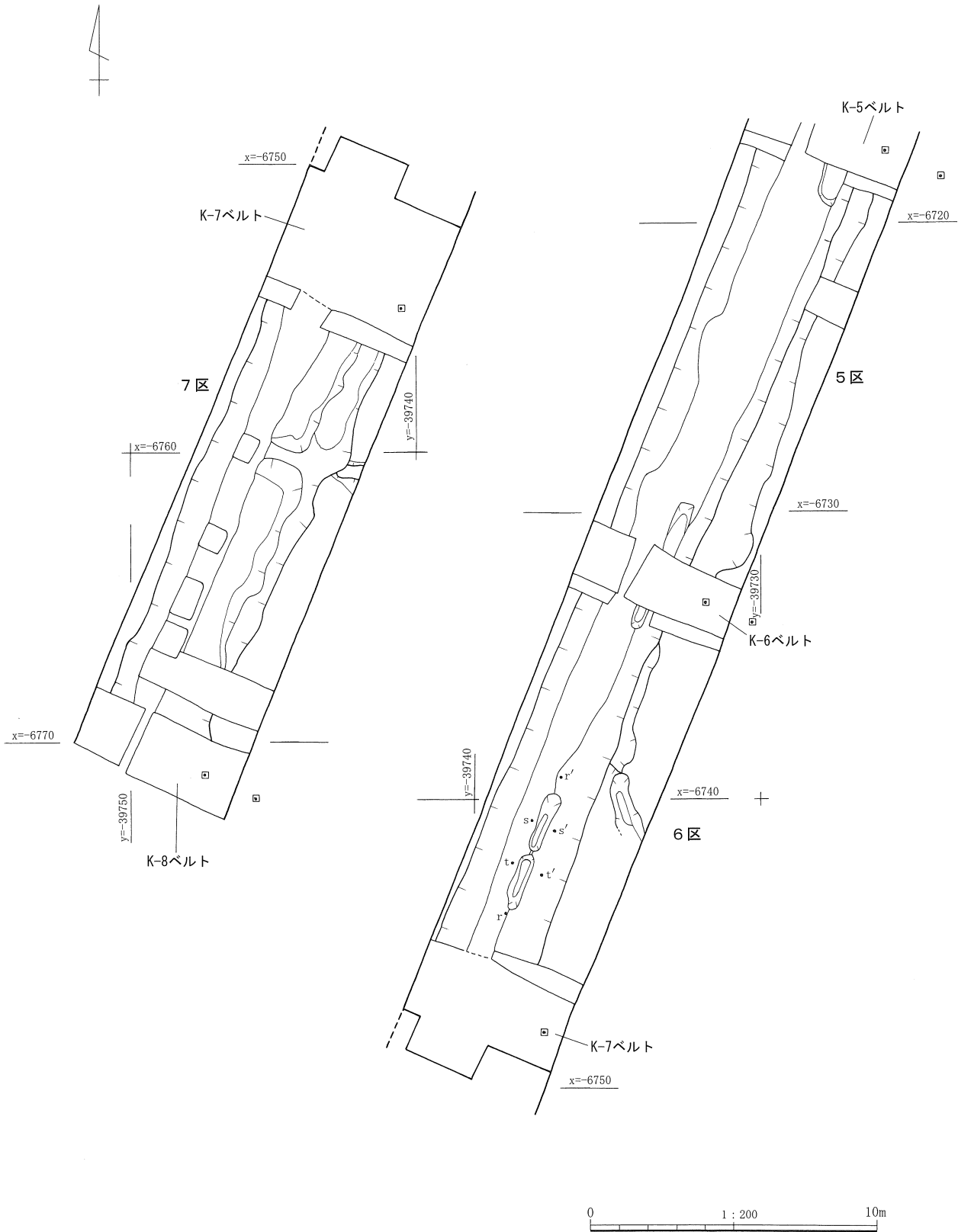
6区では、沈砂溝状遺構は区の北側K-6ベルト下に長さ約80cm、幅約70cm、深さ約30cmが標高約2.99mで1箇所確認された。6.5m間隔を空けて区の中央部の南側に接するように長さ



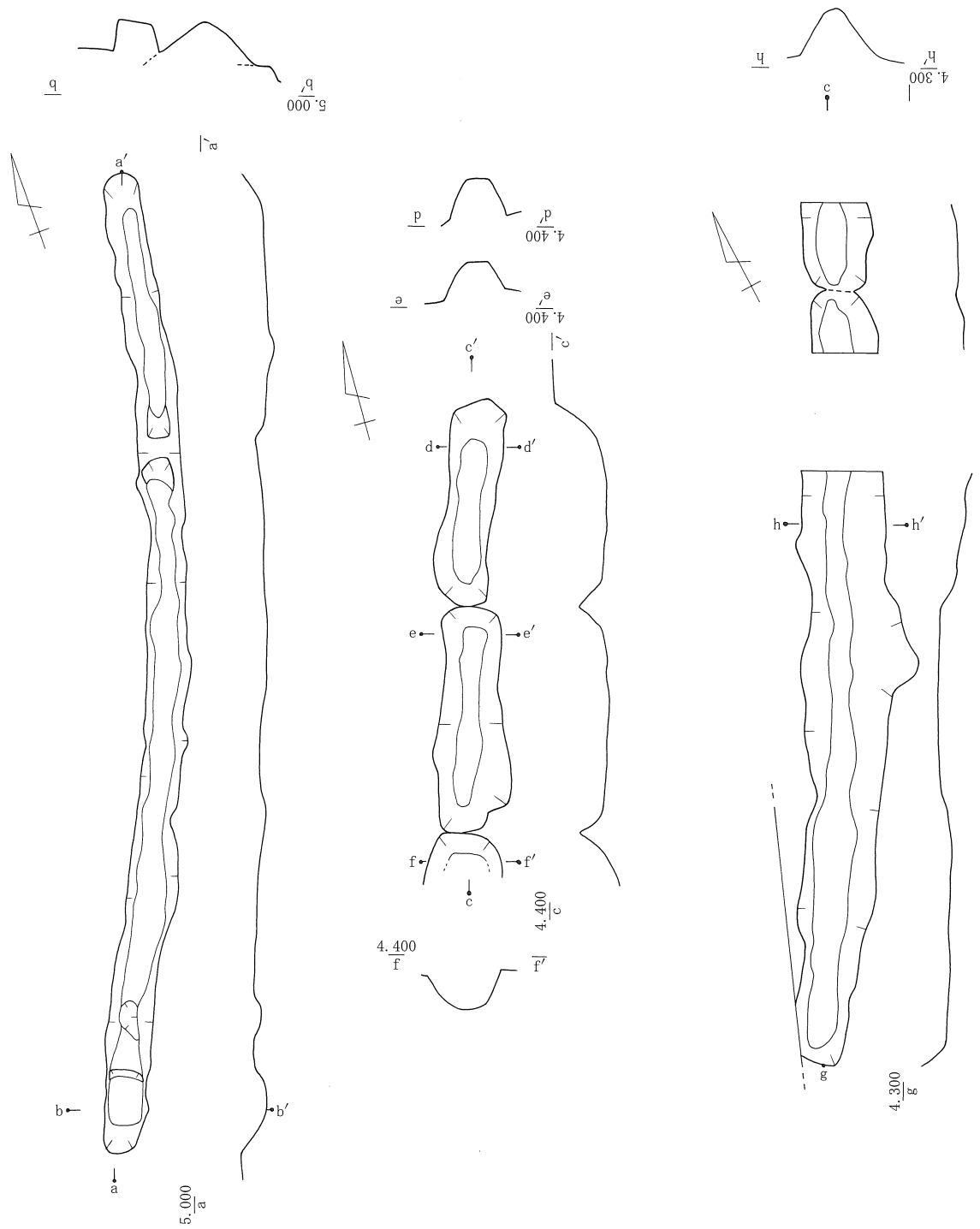
第65図 SD-01遺構配置図



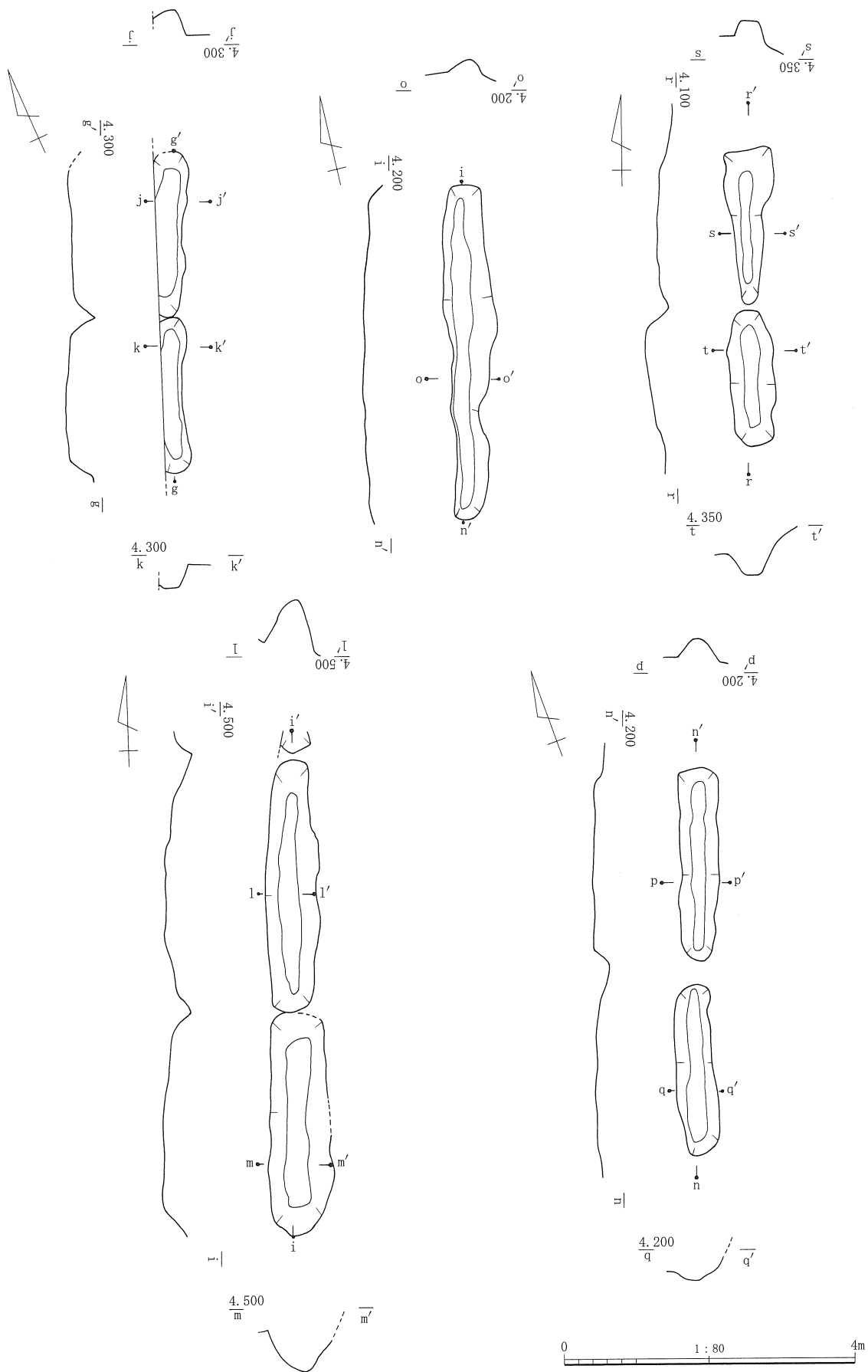
第66図 1・2・3・4区SD-01遺構配置図



第67図 5・6・7区SD-01遺構配置図



第68图 1・2・3区SD-01実測図



第69図 3・4・5・6区SD-01実測図

第2節 遺構

約 2.2 m、幅約 40 cm、深さ約 30 cmが標高約 2.95 mで確認され、長さ約 1.9 m、幅約 60 cm、深さ約 30 cmで標高約 3.01 mの2箇所が確認された。

7区では、沈砂溝状遺構は区の西側半分が攪乱されているため、幅は残存する数値である。区の北側に切られてはいるが、長さ 4.5 m、幅約 1.3 m、深さ約 0.38 mが標高約 2.44 mで確認され、長さ約 5 m、幅約 1.9 m、深さ約 40 cmが標高約 2.55 mで確認された。両遺構とも底部は「U」字型で緩やかなカーブを描く。攪乱部分がなければ1から6区までに確認された沈砂溝の中でも大型である。

遺物は、出土していない。

第3節 遺物

1. 遺物（第70～75図、図版36～40）

杭列第1群 遺物

杭は5区と9区で検出され、各杭列から列の両端と中央部から3点の年代測定と樹種同定を行った。

調査担当者が5区から検出された杭171本全てを樹木の繊維や樹皮の特徴から14種類に分類した。この中には、特徴は同じであっても、若干の違いがあった場合は別種として分けた。この14種類の樹種同定を行った結果、10種類の樹種が確認された。分類された各種には、この結果の樹種名を付した。

遺物1 標高3.640 mで検出された長さ24.2 cm、幅7 cm、厚さ6.45 cmの丸杭である。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

芯を持つ杭は外周のおよそ半分、樹皮が残っており加工は施されていない。先端部は一部が欠損しているが、上から先端部に向けて4面に分けて削られている。

遺物2 標高3.685 mで検出された長さ40.0 cm、幅10.3 cm、厚さ4.15 cmの薄くみかん割りされた割杭で、杭先端部まで残っている。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

割られた際の部分が多く、樹皮側と芯側の2面が削られている。先端部の加工を行う際にできたと考えられる長さ4 cm、深さ1 cm程の深い刃先痕が残っている。

遺物3 標高3.680 mで検出された長さ40.2 cm、幅7.4 cm、厚さ3.15 cmの半裁丸杭で、杭先端部まで残っている。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

先端部には通常とは逆の先～上に向けて刃先痕が残っている。

遺物4 標高3.670 mで検出された長さ36.0 cm、幅6.0 cm、厚さ5.9 cmの芯持の丸杭で、先端部は残っている。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

杭は先端から15 cm付近にも先端部のように尖らすための加工が施され、杭先が2箇所作られている。通常はこの箇所で杭を二つに折り、2本の杭として使用したものと考えられるが、何らかの理由で折られなかったようである。有頭式杭と表現されたものもあり、木製品を作成する途中に、杭として再利用された可能性も考えられる。

遺物5 標高3.695 mで検出された長さ46.5 cm、幅5.8 cm、厚さ6.5 cmの芯持の丸杭である。先端部が残っている。樹種はエノキ属である。

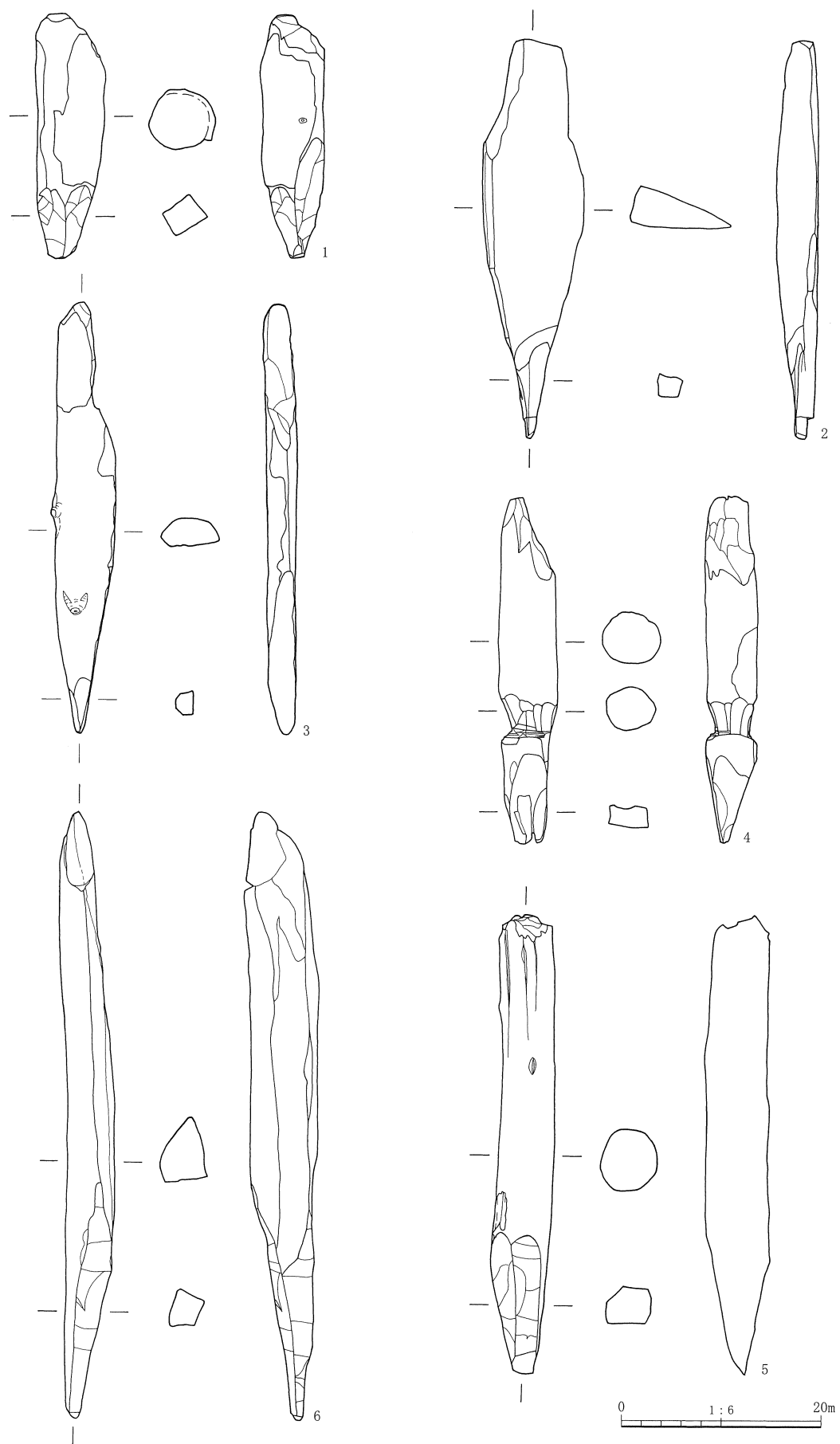
加工を施した部分には、一部が炭化し黒色に変色した部分があり、杭が再利用されたことが分かる。

遺物6 標高3.660 mで検出された長さ59.8 cm、幅5 cm、厚さ6.8 cmのみかん割りされた割杭で、杭先端部まで残っている。コナラ属アカガシ亜属である。

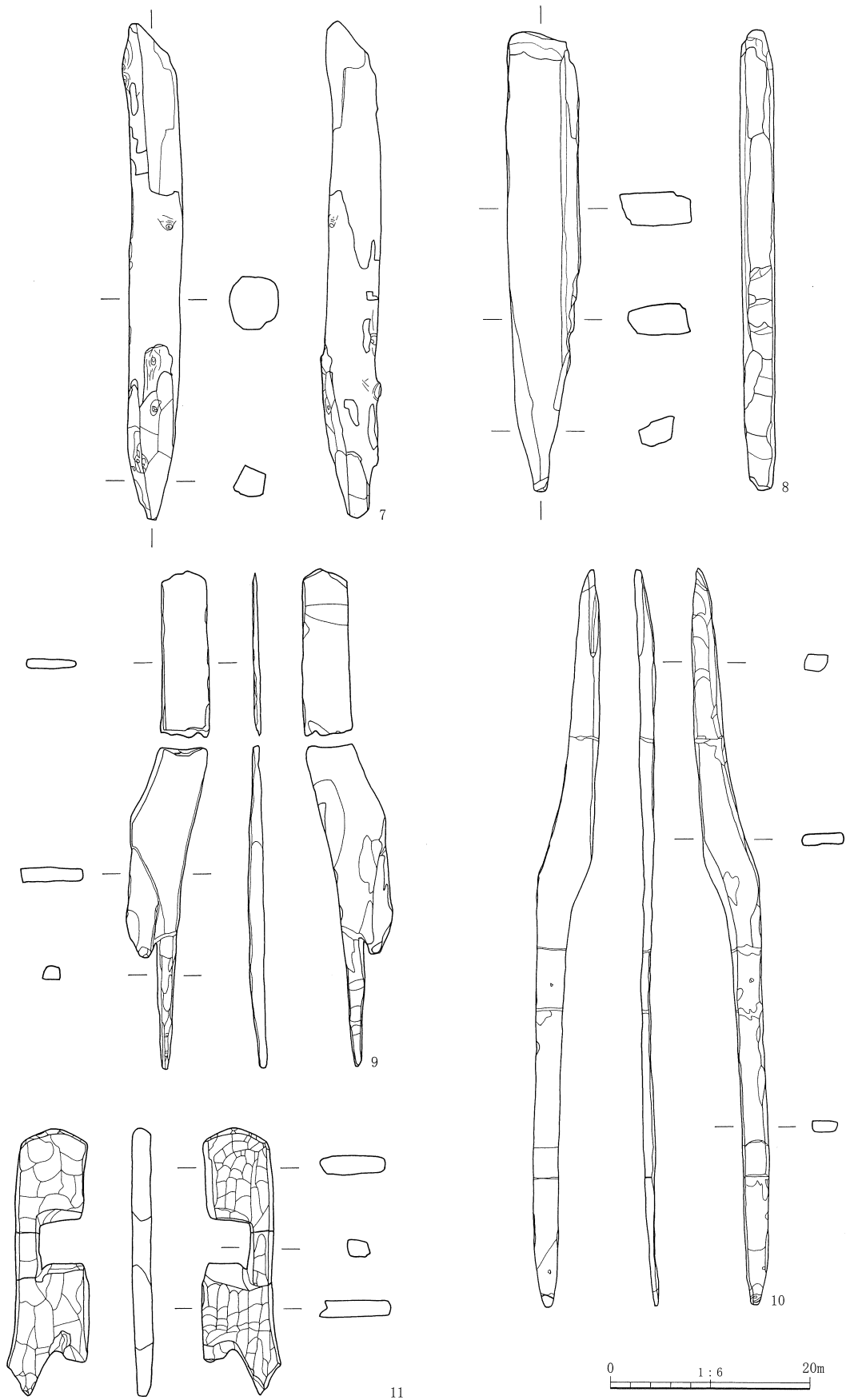
先端部の加工痕は一部が炭化し黒色に変色しており、再利用された杭であることが分かる。

遺物7 標高3.670 mで検出された長さ50.0 cm、幅5.6 cm、厚さ5.85 cmの芯持の丸杭である。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

杭先端部は一部が欠損しており、上から先端に向けて4面が加工されている。枝分かれ部分も加工が施されている。



第70図 杭列群出土杭実測図(1)



第71図 杭列群出土杭実測図(2)

第3節 遺物

遺物 8 標高 3.680 m で検出された長さ 46.0 cm、幅 7.4 cm、厚さ 3.55 cm の板状杭である。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

出土した板状杭の中では、側面に加工痕があるものが少ないが、側面の片側だけが段々に粗く加工されており、6 個の段状に加工痕が残っている。

遺物 9 標高 3.600 m で杭列と杭列の間で検出された長さ 34 cm、幅 6 cm の鋤

遺物 10 標高 3.600 m で杭列と杭列の間で検出された長さ 74 cm、幅 4.4 cm の二股鋤

遺物 11 標高 3.563 m で杭列と杭列の間で検出された長さ 27 cm、幅 7.6 cm の鋤

杭列第 2 群 遺物

遺物 12 標高 3.680 m で検出された長さ 36.1 cm、幅 5.8 cm、厚さ 3.7 cm の半裁丸杭である。

樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

丸杭を半裁した面は無加工であるが、先端部から約 9.5 cm の部分にはがホゾ状に 7 ~ 8 mm 程切り込まれており、なんらかの部材を杭として再利用した可能性が考えられる。

遺物 13 標高 3.635 m で検出した長さ 37.5 cm、幅 8.2 cm、厚さ 4 cm の半裁丸杭である。樹種はブナ科シイ属スダジイである。

先端部は一部欠損しており、上から先端方向に削られている。芯に近い部分は L 字状に縦に窪んでおり、樹皮近くは黒色化している。

遺物 14 標高 3.730 m で検出された長さ 55.3 cm、幅 11 cm の角杭である。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

出土した杭の多くは、刃先痕は上部から先端部へ向けて残っているが、この杭は先端部から上部に向けての刃先痕が残っている。杭先を加工するための刃先痕ではなく、樹木（杭材）を割る際の刃痕が深かったために杭完成段階まで残ったと考えられる。

遺物 15 標高 3.660 m で検出された長さ 31.0 cm、幅 5.7 cm、4.3 cm のみかん割りされた割杭である。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

丸杭をきれいに 4 等分したような杭で、先端部は尖っておらず、平坦である。

遺物 16 標高 3.650 m で検出された長さ 37.5 cm、幅 5.6 cm、厚さ 2.2 cm の半裁丸杭である。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

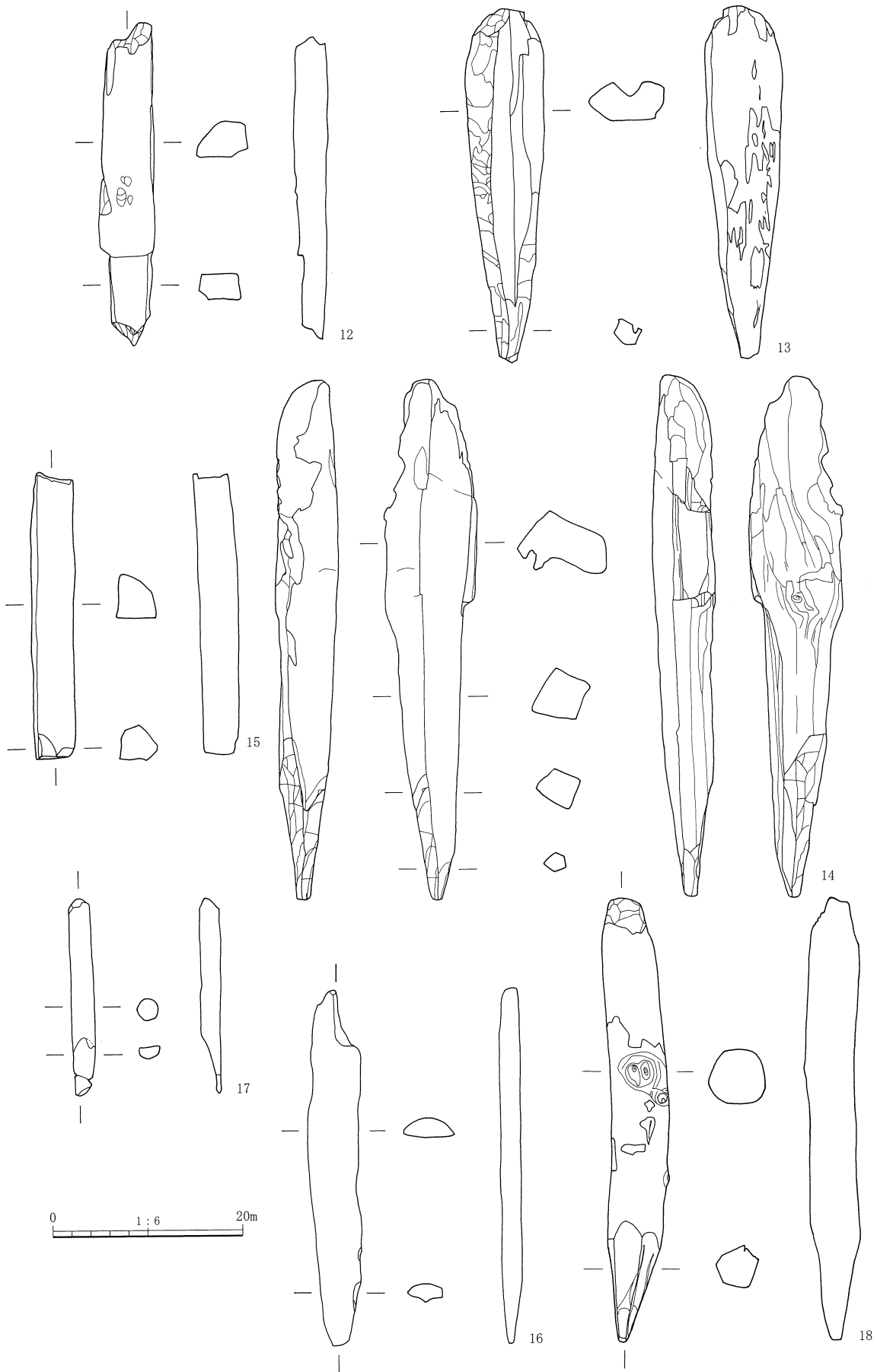
割った面は先端部のみが加工されており、加工痕には幅 3 mm で長さ 2.5 cm の刃先痕が残っている。

遺物 17 標高 3.496 m で検出された長さ 20.5 cm、直径 2.5 cm の丸杭である。樹種はアワブキ属である。

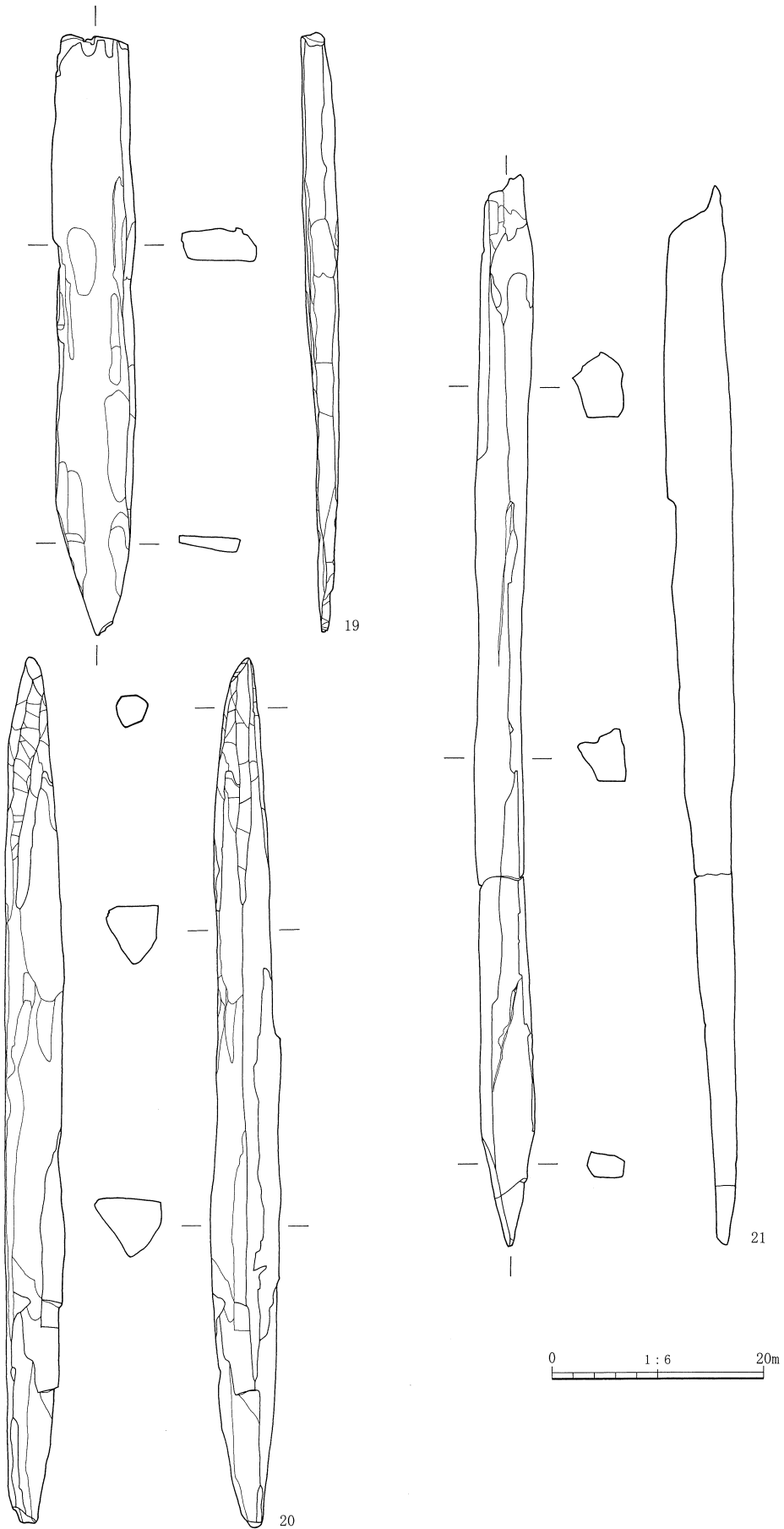
先端部の加工は一度に切り落としたような切り口である。

遺物 18 杭列 2 西の西側、標高 3.413 m で検出された長さ 46.5 cm、幅 6.2 cm、厚さ 5.3 cm の半裁丸杭である。樹種はブナ科シイ属スダジイである。

上部は焼きが入れられ黒色になっている。



第72図 杭列群出土杭実測図(3)



第73圖 杭列群出土杭突測圖(4)

杭列第3群 遺物

遺物 19 標高 3.273 m で検出された長さ 57.3 cm、幅 8 cm、厚さ 3.2 cm の板状杭で黒色である。樹種はブナ科クリ属クリである。

先端部は一部が欠損している。両側面を削り先端部を尖らせている。この黒色は焼きを入れたためにできたもので、一部炭化している。

遺物 20 標高 3.265 m で検出された長さ 82.5 cm、幅 6.6 cm、厚さ 5.8 cm のみかん割りされた割杭である。樹種はブナ科クリ属クリである。

表面は焼きが入れられており黒色化している。長さ 13.2 cm、幅 3 mm の刃先痕が残っている。

遺物 21 標高 3.300 m で検出された長さ 101 cm、幅 5.25 cm、厚さ 6.5 cm のみかん割りされた割杭である。樹種はブナ科クリ属クリである。

先端部は上から先端に向けて 4 面が加工されている。1 つの面だけが焼けており、他の焼きが入った杭より、炭化が激しい。焼けていた木材を杭に転用したことが考えられる。

杭列第4群 遺物

遺物 22 標高 3.255 m で検出された長さ 55.5 cm、幅 5.0 cm、厚さ 2.2 cm の板状杭である。樹種はブナ科シイ属ツブラジイである。

先端部は一部欠損している。表面は腐食防止のためか、焼きが入れられている。

遺物 23 標高 3.254 m で検出された長さ 64.3 cm、幅 11.0 cm、厚さ 5.1 cm の半裁丸杭である。樹種はクワ科クワ属ヤマグワである。

先端部は上から下に向けて削られている。上部から 11 cm には加工痕は無いが他の部分の大部分が加工されている。上部の 14 cm は黒色の変色が激しい。

上記 4 群の杭列からは弥生土器が 10 点確認され、中には刻目突帯文土器を含む。

遺物 24 縄文土器は深鉢の口縁部で、施文が残る。

遺物 25 縄文土器は深鉢の底部で、内外底付近は二次的な焼きによる器面荒れである。

遺物 26 弥生土器はカメの胴部で、1 条の刻目突帯文が残る。

遺物 27 弥生土器はカメの底部で、外面はナデ調整である。

遺物 28 弥生土器のツボ底部で、内面は器面荒れしている。

遺物 29 弥生土器はカメの胴部で、1 条の刻目突帯文が残る。

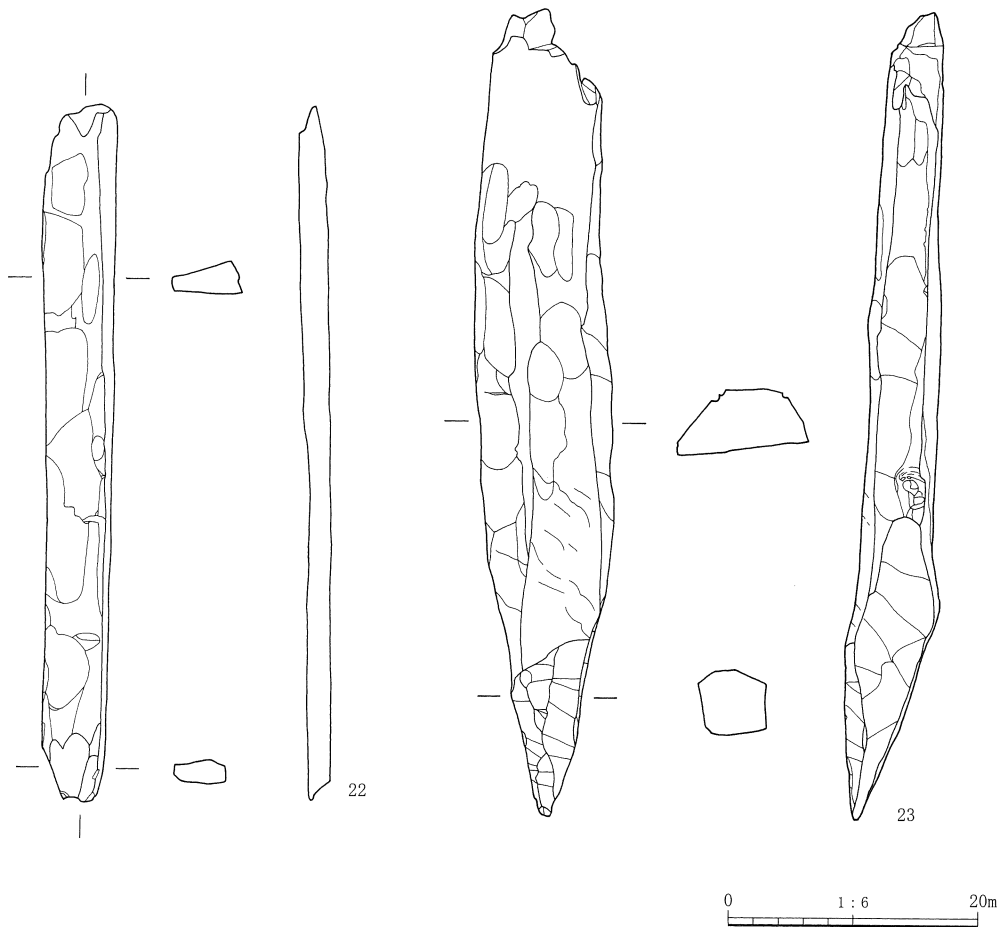
遺物 30 弥生土器はカメの胴部で、1 条の突帯文が残る。

遺物 31 弥生土器はカメの口縁部から胴部までである。口唇部は外側に若干折れており 1 条の刻目突帯文が施されている。胴部にも刻目突帯文が 1 条施されている。

遺物 32 弥生土器はカメの底部で、内外面ともナデによる調整である。

遺物 34 弥生土器はカメの底部で、内面は剥離しており器面荒れしている。

遺物 33 弥生土器は底部のみ残る。



第74図 杭列群出土杭実測図(5)

SX06 遺物 (第76・77図、図版41)

遺物は土器小片が数点出土しているが、時代が特定できるような遺物ではない。遺構に伴わないが溝斜面からは陶質播鉢1点と青磁1点が出土している。

杭列から列の両端と中央部から3点の年代測定と樹種同定を行った。調査担当者が検出された杭を樹木の繊維や樹皮の特徴から2種類に分類した。この中には、特徴は同じであっても、若干の違いがあった場合は別種として分けた。この4種類の樹種同定を行った結果、2種類の樹種が確認された。分類された各種には、この結果の樹種名を付した。

杭は割杭6本、板状杭4本、丸杭1本、角杭2本の合計13本検出された。そのうち、残りのよい3本について実測を行った。

遺物71 陶質播鉢の口縁部で、反時計回りに水引きナデ調整が施されている。

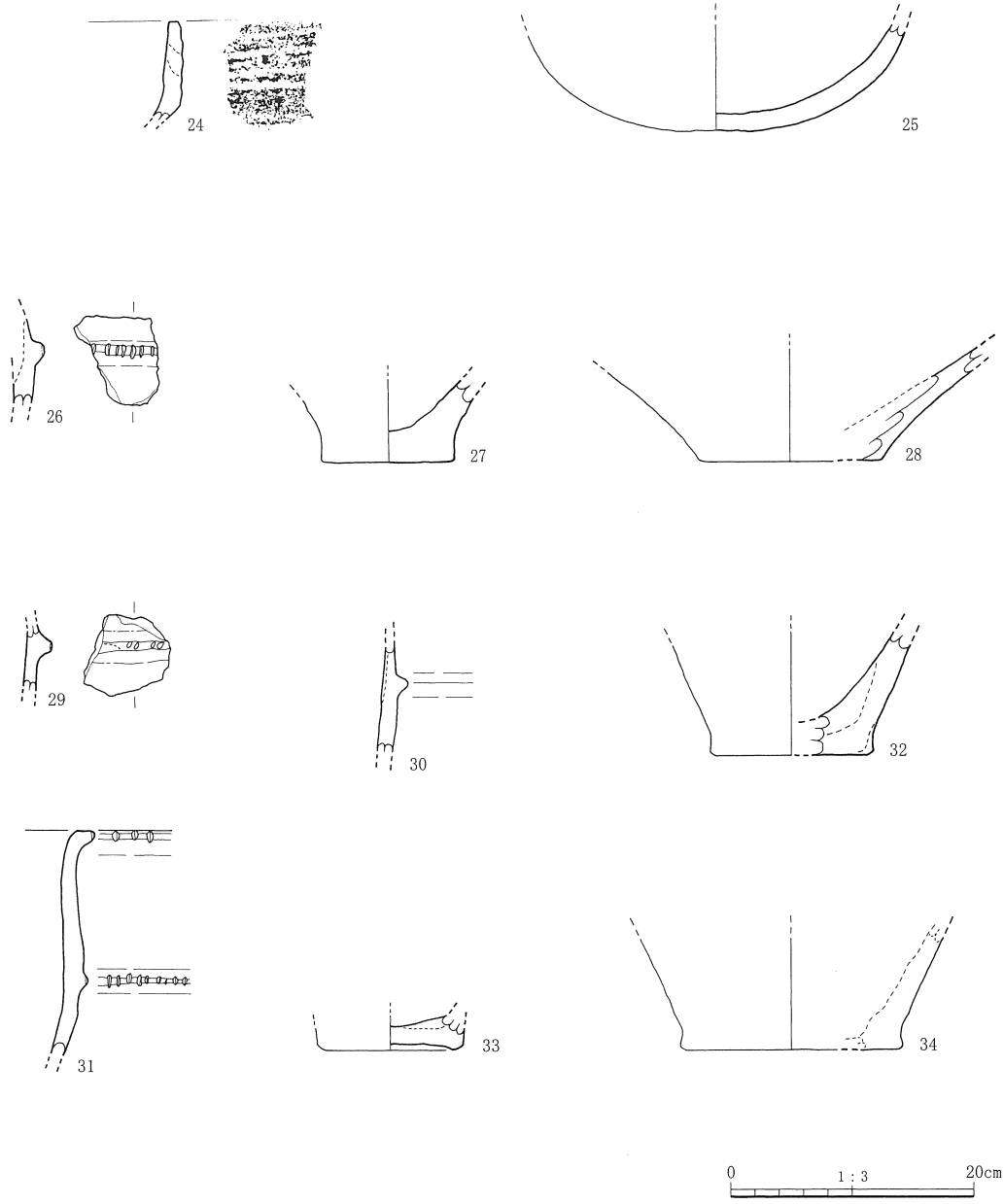
遺物70 青磁は碗の口縁部で、釉厚は厚く、目立った貫入は入っていない。

杭

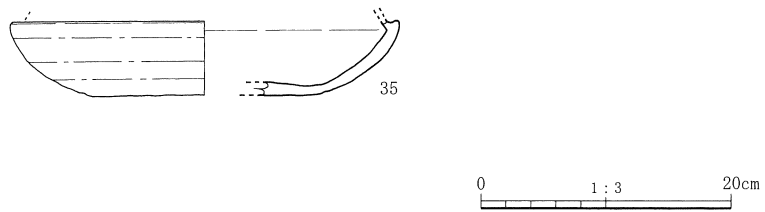
遺物36 標高4.530mで検出された長さ41.0cm、幅4.6cm、厚さ4.8cmのみかん割りされた割杭である。樹種はブナ科クリ属クリである。

杭の表面は荒れている。上から2.5cmと25cm部分に直径2.5cmほどの穿孔が施されている。

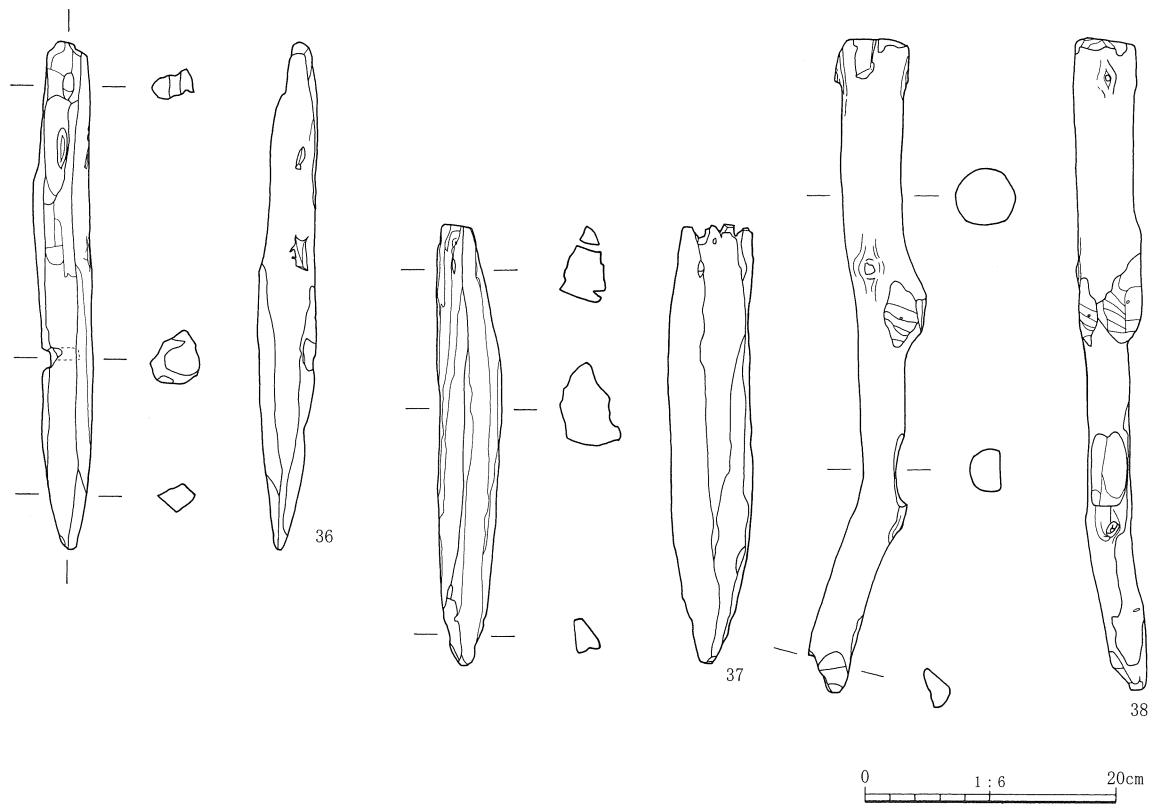
遺物37 標高4.500mで検出された長さ35.5cm、幅7.0cm、厚さ6.6cmのみかん割りされた割



第75図 杭列群出土土器実測図



第76図 SX-06出土土器実測図



第77図 SX-06出土杭実測図

杭である。樹種はブナ科クリ属クリである。表面は荒れており、上より約3 cmの部分に直径7 mmの穿孔が2箇所空けられている。

- 遺物 38 標高4.590 mで検出された長さ52.6 cm、幅4.8 cm、厚さ5.3 cmの芯持の丸杭である。樹種はブナ科クリ属クリである。
枝部分に加工がされており、杭先端部分が樹木の上である。

SX05 遺物 (第78図、図版41)

2区から土師器1点と陶磁器2点が出土した。

遺物 41 土師器は皿の底部で、焼成が悪いため調整等は明瞭ではない。

遺物 39 陶磁器は皿の口縁部から底部までで、内外面に釉が施されており、約4 mmの貫入が入る。見込み部と畳付部に3箇所の掻き取った痕が残る。

遺物 40 陶磁器は皿の口縁部で、内外面に釉が施されている。

3区からは弥生土器1点が出土した。

遺物 42 弥生土器はカメの脚部で、内外面ともナデ調整である。

5区からは須恵質播鉢1点が出土した。

遺物 43 須恵質播鉢は胴部で7条1単位の播目が反時計回りに施されている。

13区からは弥生土器1点が出土した。

遺物 44 弥生土器は頸部で小片ではあるが、頸部の径が小さいことが推測され、ミニチュア土器の可能性が高い。

14区からは弥生土器1点が検出された。

遺物 45 弥生土器はカメの脚部で焼成は良である。

SX04 遺物 (第79図、図版42)

7区からは弥生土器1点が出土した。

遺物 46 弥生土器はカメの底部で焼成が悪く、調整跡は明瞭に残っていない。

9区からは瓦質土器1点と須恵器1点と土器1点が出土した。

遺物 47 瓦質土器は捏ね鉢の口縁部で、内外面とも水引きナデ調整が施されており焼成は良である。

遺物 48 須恵器は坏の底部で内外面とも水引き回転ナデ調整が施されている。

遺物 49 用途不明土器の底部で、底径が33.4cmと大きく、底部中央には9.5cmの孔が開いている。床面から高さ約3cmに幅約2cm、深さ約5mmの溝が施されている。

SX03 遺物 (第80図、図版42)

1区では須恵器1点、土師器1点が出土した。

遺物 51 須恵器は器種、部位が不明であるが参考のため添付した。

遺物 50 土師器は高台付坏の底部で、焼成が悪いため調整等は確認できない。

2区では青磁1点が出土した。

遺物 52 青磁は碗の底部で、釉厚は内面より外面が厚く、内面には約3mmの貫入が全体的に入る。高台内は回転ヘラ削りで調整されている。

3区では青磁1点が出土した。

遺物 53 青磁は碗の口縁部で、釉厚は薄く、2mm大の貫入が入る。

4区では須恵器1点が出土した。

遺物 54 須恵器はツボの底部で、内外面とも水引き回転ナデ調整である。

6区では陶磁器1点が出土した。

遺物 55 陶磁器はツボの底部で、外面には釉が施されており、内面は無釉である。

7区では青磁1点が出土した。

遺物 56 青磁は碗の口縁部で、内外面とも釉が施されており、外面には蓮弁文が施されている。

9区では青磁が1点出土した。

遺物 57 青磁は坏の口縁部で、釉が施されているが発色は悪い。

12区では瓦質土器1点、瓦質播鉢1点、須恵器1点が出土した。

遺物 58 瓦質土器は碗の底部で焼成は良である。

遺物 59 陶磁器は皿の口縁部から底部で、内面には釉が施されており、口唇部外面の一部には内面からの釉垂れがある。

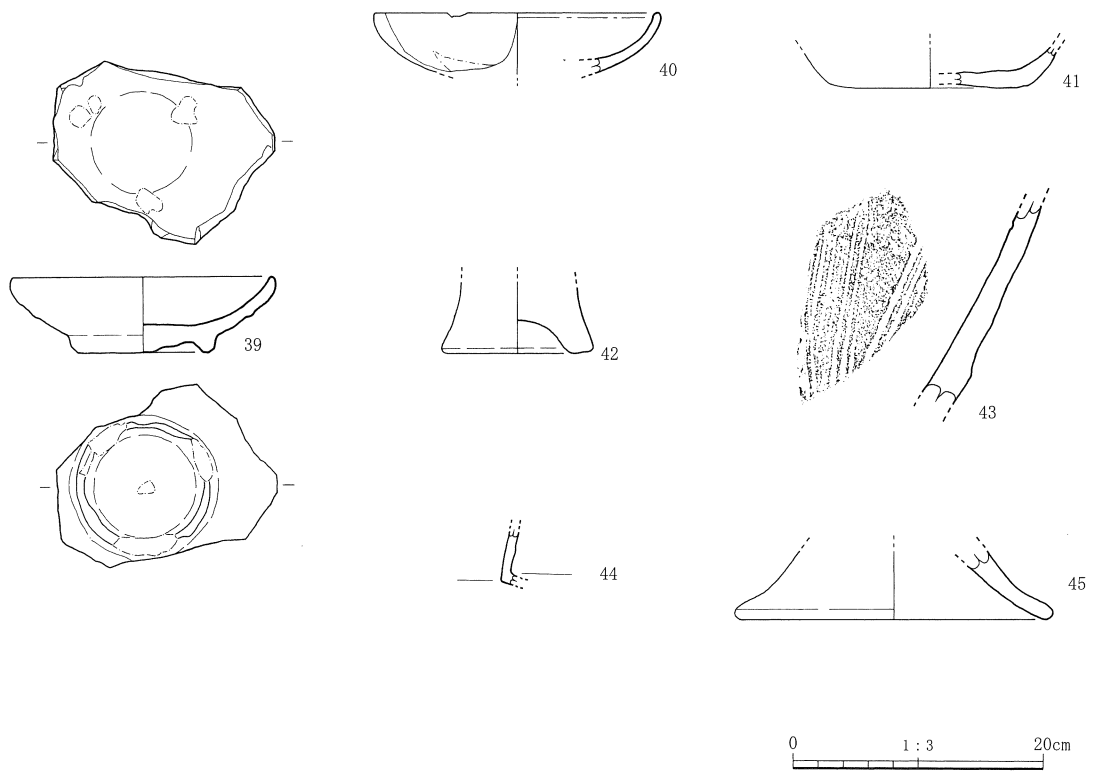
遺物 60 瓦質土器は播鉢の口縁部で6条1単位の播り目が施されている。

13区では瓦質土器が1点出土した。

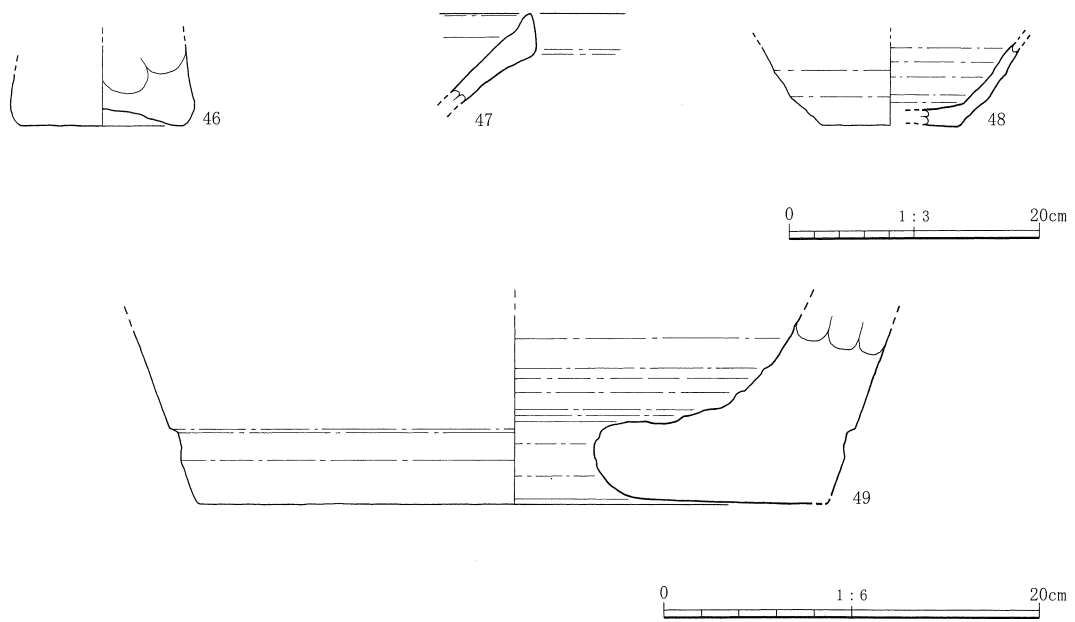
遺物 61 瓦質土器は播り鉢の口縁部で、若干器面荒れしている。

14区では古銭1枚が出土した。

遺物 62 古銭は表「寛永通寶」、裏無銘であつた。



第78図 SX-05出土土器実測図



第79図 SX-04出土土器実測図

中世の遺物を中心に出土しており、中世以降の水田遺構と考えられる。

SX02 遺物（第81・82図、図版43）

4区からは陶磁器1点、古銭1枚が出土した。

遺物63 陶磁器は鉢の口縁部で、内面下部と外面は施釉であり、焼成は良である。

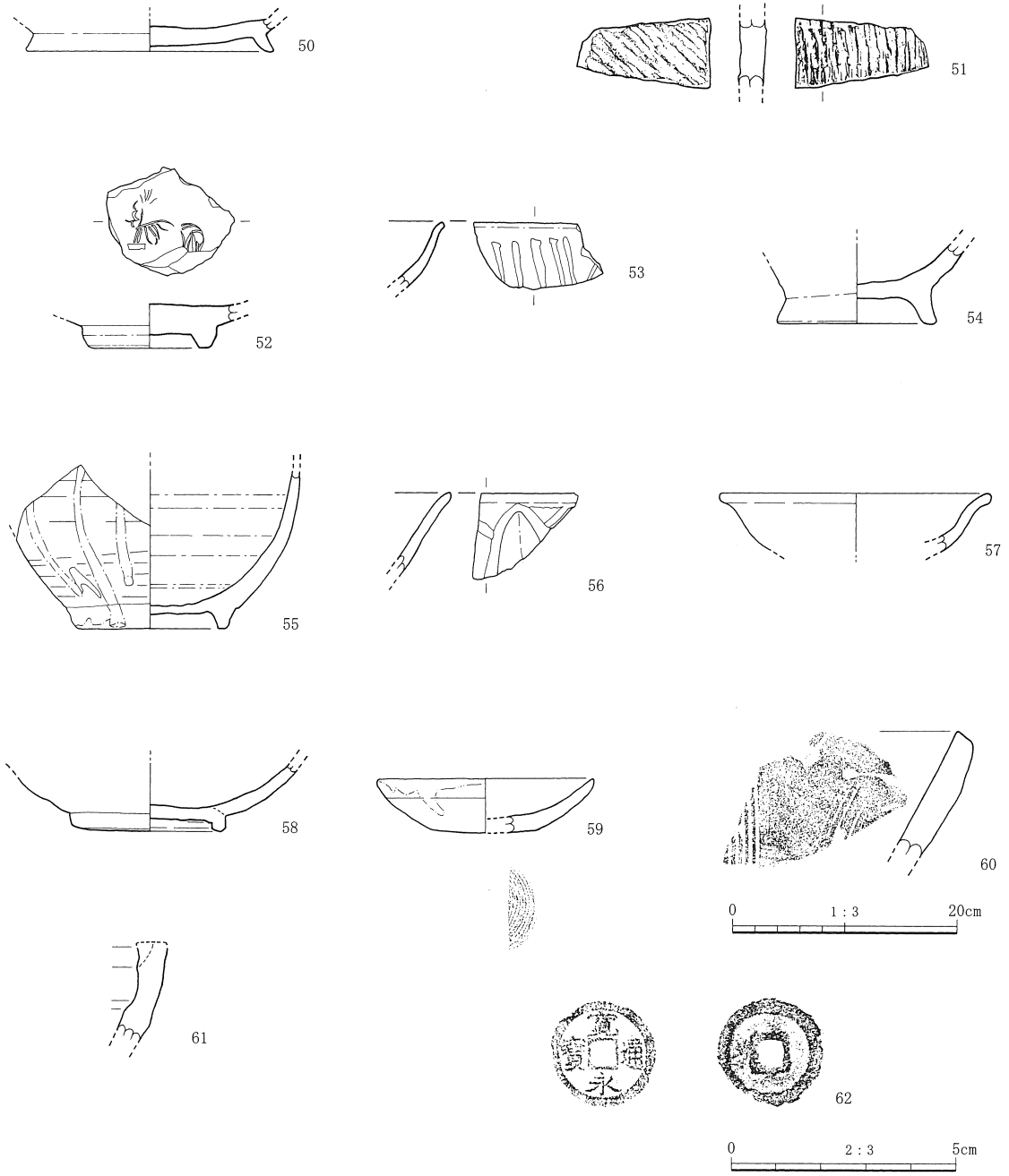
遺物64 古銭は表裏面ともに表面が荒れており、銘は不明である。孔は丸である。

6区からは古銭1枚が出土した。

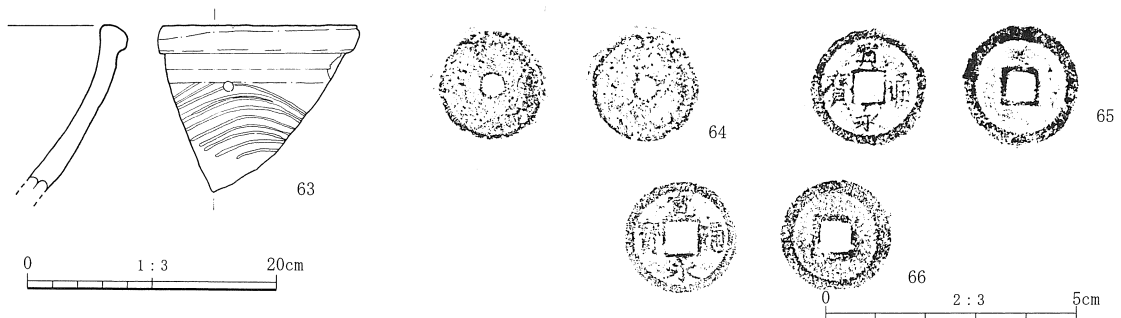
遺物65 古銭は表「寛永通寶」とあり、裏面は無銘である。

出土遺物は、近世の遺物を中心に出土しており中世～近世の水田遺構と考えられる。

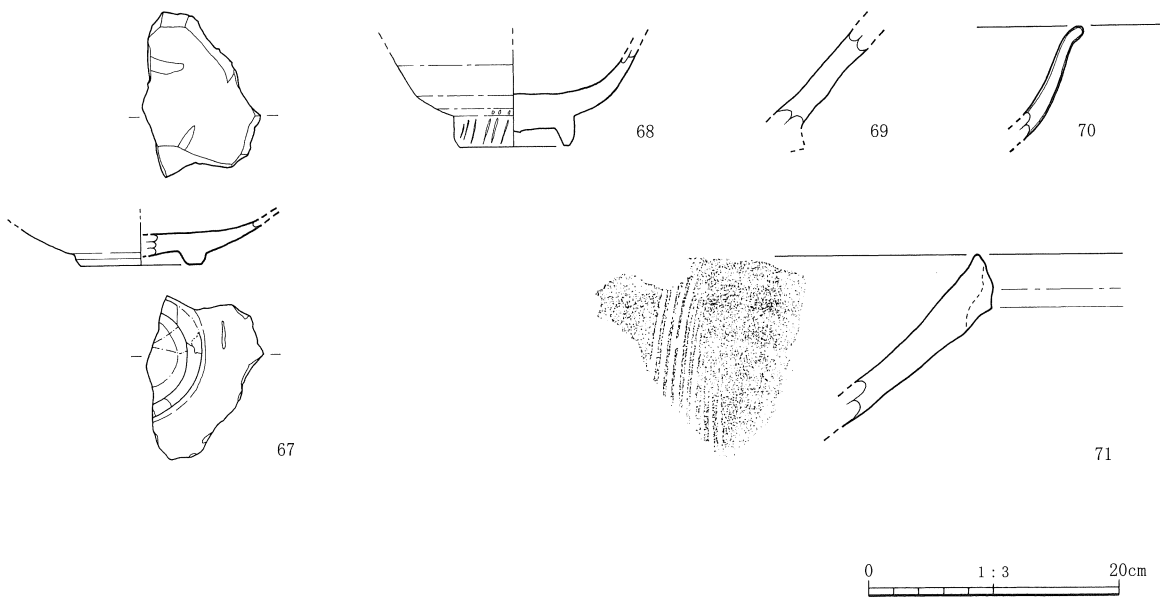
第3節 遺物



第80图 SX03出土土器实测图



第81图 SX-02出土土器实测图



第82図 出土土器実測図

第6表 杭列内出土杭樹種一覧表

杭列		杭種類	本数	列計	列群計	樹種	総本数
第1群	東	半裁丸杭	10	21	74	① ブナ科シイ属ツブラジイ ② コナラ属アカガシ亜属 ③ アワブキ属 ④ ブナ科クリ属クリ ⑤	⑥ カバノキ科ハンノキ属 ⑦ コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		割杭	8				
		丸杭	3				
		板状杭	0				
		角杭	0				
	西	半裁丸杭	10	53			
		割杭	21				
		丸杭	14				
		板状杭	6				
		角杭	2				
第2群	東	半裁丸杭	6	37	84	① ブナ科シイ属ツブラジイ ② ブナ科シイ属スダジイ ③ ④ ⑤	
		割杭	17				
		丸杭	3				
		板状杭	9				
		角杭	2				
	西	半裁丸杭	10	47			
		割杭	23				
		丸杭	4				
		板状杭	9				
		角杭	1				
第3群	東	半裁丸杭	0	3	13	① ブナ科シイ属ツブラジイ ② ③ ④ ⑤	
		割杭	3				
		丸杭	0				
		板状杭	0				
		角杭	0				
	西	半裁丸杭	0	10			
		割杭	7				
		丸杭	0				
		板状杭	1				
		角杭	2				
第4群	単線	半裁丸杭	1	6	6	① ブナ科クリ属クリ ② ブナ科シイ属スダジイ ③ ブナ科シイ属ツブラジイ ④ クワ科クワ属ヤマグワ ⑤	
		割杭	4				
		丸杭	0				
		板状杭	1				
		角杭	0				

171

第7表 調査I区出土木製品観察表

挿図	番号	器種	種別	遺構	層位	長さ (cm)	直径 (cm)	幅 (cm)	樹種	備考
70	1	丸杭	芯持丸	杭列第1群		24.2	7.0		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	皮有り
70	2	割杭	みかん割	杭列第1群		40.0		10.3	ブナ科シイ属ツブララジイ	深い刃先痕
70	3	半裁丸杭		杭列第1群		40.2	7.4		ブナ科シイ属ツブララジイ	刃先痕逆・皮あり幅3mm、切り込み2cm
70	4	丸杭	芯持丸	杭列第1群		36.0	6.0		ブナ科シイ属ツブララジイ	2段杭
70	5	丸杭	芯持丸	杭列第1群		46.5	6.5		エノキ属	再利用・先に一部変色あり
70	6	割杭	みかん割	杭列第1群		59.8		6.8	コナラ属アカガシ亜属	黒・再利用
71	7	丸杭	芯持丸	杭列第1群		50.0	5.6		ブナ科シイ属ツブララジイ	皮・節目加工痕
71	8	板状杭		杭列第1群		46.0		7.4	ブナ科シイ属ツブララジイ	段有り
71	9	鋤		杭列第1群		34.0		6.0	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
71	10	二股鋤		杭列第1群		74.0		4.4	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
71	11	鋤		杭列第1群		27.0		7.6	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
72	12	半裁丸杭		杭列第2群		36.1	5.8		ブナ科シイ属ツブララジイ	先端異
72	13	半裁丸杭		杭列第2群		37.5	8.2		ブナ科シイ属ツブララジイ	黒色有り内側がL字にカット
72	14	角杭		杭列第2群		55.3		11.0	ブナ科シイ属ツブララジイ	杭先から切り込み・上から下
72	15	割杭	みかん割	杭列第2群		31.0	5.7		ブナ科シイ属ツブララジイ	先端欠如型
72	16	半裁丸杭		杭列第2群		37.5	5.6		ブナ科シイ属ツブララジイ	先端部に長さ2.5cmに幅3mmの切り込み
72	17	丸杭	芯持丸	杭列第2群		20.5	2.5		アワブキ属	
72	18	丸杭	芯持丸	杭列第2群		46.5	6.2		ブナ科シイ属スダジイ	皮有り・上下に切り込み有り
73	19	板状杭		杭列第3群		57.3		8.0	ブナ科シイ属	焼き黒・側面まで加工
73	20	割杭	みかん割	杭列第3群		82.5		6.6	ブナ科シイ属	皮有・焼き黒・切深長さ13.2cm、幅3mm
73	21	割杭	みかん割	杭列第3群		101.0		6.5	ブナ科シイ属	焼いた黒(炭化激)
74	22	板状杭		杭列第4群		55.5		5.0	ブナ科シイ属ツブララジイ	黒色で加工してある
74	23	半裁丸杭		杭列第4群		64.3	11.0		クワ科クワ属ヤマグワ	上部・焼けた黒・先端部加工痕多い
77	36	割杭	みかん割	SX06		41.0		4.6	ブナ科クリ属クリ	穿孔有り
77	37	割杭	みかん割	SX06		35.5		7.0	ブナ科クリ属クリ	孔直径7mm
77	38	丸杭	芯持丸	SX06		52.6	4.8		クスノキ科	皮有り・先は欠損・枝部分に加工有り

第8表 調査I区出土土器観察表

挿図	番号	器種	種別	遺構	層位	法量 (cm)				色調			器面調整		胎土	備考
						器高	胴径	口径	頸径	底径	外面	内面	外面	内面		
75	24	深鉢	縄文土器	(杭列)							黄灰色	黄灰色	ナデ後施文	ナデ	石英、雲母、長石を多く含む。暗灰色2.5Y5/2	
75	25	深鉢	縄文土器	杭列第1群					(15.4)		明黄褐色 灰黄色、黒色	浅黄色	ナデ	ナデ	白色砂粒を少量含む。灰色5Y5/1	
75	26	突帯文甕	弥生土器	(杭列)	22				(5.4)		にぶい黄色 にぶい黄褐色	灰白色	ナデ	器面荒れ	石英を含む。にぶい黄褐色10YR6/3	
75	27	甕	弥生土器	(杭列)	22				(3.3)		浅黄色	灰白色	ナデ	ナデ	石英、雲母を含む。灰色5Y5/1	
75	28	壺	弥生土器	(杭列)					(4.6)		灰色	灰色	ナデ	器面荒れ	1mm以下の石英、雲母を含む。灰黄色2.5YR7/2	
75	29	突帯文甕	弥生土器	杭列第1群					(3.3)		突帯はツマミナデ にぶい黄褐色	灰白色	突帯はツマミナデ	突帯はツマミナデ	雲母、石英、長石を含む。灰色5Y6/1	
75	30	甕	弥生土器	杭列第1群					(4.5)		突帯はツマミナデ 灰オリーブ	灰白色	突帯はツマミナデ	突帯はツマミナデ	雲母、石英を多く含む。灰白色5Y7/2	
75	31	甕	弥生土器	(杭列)					(9.1)		灰黄褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	石英、雲母を多く含む。灰白色5Y7/2	
75	32	刻目突帯甕	弥生土器	(杭列)					(5.0)		にぶい黄色 にぶい黄褐色	にぶい黄色	ナデ	ナデ	石英、雲母を多く含む。灰黄色2.5Y7/2	
75	33	甕	弥生土器	(杭列)					(6)		灰黄色	にぶい黄褐色	ナデ	荒れ	石英1mm~2mm大を含む。黒色N2/	
75	34	甕	弥生土器	杭列第2群					(4.5)		にぶい黄色 暗灰藍色 鈍い赤褐色	浅黄色、黒色	ナデ	器面荒れ	石英、雲母、長石を含み、1~2mmの砂礫を多く含む。にぶい黄褐色10YR6/3	
76	35	坏	土師器	SX06			(15.4)		(9.0)		灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	キメ細く砂っぽさあり。灰黄色2.5Y7/2	
78	39	皿	磁器	SX05			(10.6)		5.8		淡黄色	灰オリーブ	施釉	施釉	細緻 灰白色2.5Y8/1	
78	40	皿	磁器	SX05			(11.4)		(2.4)		灰オリーブ 色、灰黄褐色	浅黄色	回転ナデ後施釉	ナデ 軸	細緻 黄灰色2.5Y6/1	
78	41	皿	土師器	SX05					(1.6)		浅黄色	灰色	ナデか	ナデか	細緻で雲母も含む。浅黄褐色10YR8/3	
78	42	甕	弥生土器	SX05					(2.8)		灰色	灰色	ナデ	ナデ	0.2mm以下の石英、雲母を含む。灰白色2.5Y7/1	
78	43	搦鉢	須恵質土器	SX05					(7.6)		灰色	淡黄色	ナデ	ナデ	0.6~0.8mm程の褐色粒を含む。灰色7.5Y6/1	
78	44	壺	弥生土器	SX05					(1.6)		浅黄色	にぶい黄色	器面荒れ、ナデ?	ナデ	1~1.5mm程の白色砂粒を少量含む。浅黄色2.5Y8/3	
78	45	甕	弥生土器	SX05					(2.7)		橙色	—	ナデ	ナデ	石英、雲母、長石を含む。浅黄褐色7.5YR8/3	
79	46	甕	弥生土器	SX04					(3.2)		浅黄色	灰白色	器面荒れ	—	1mm程の雲母、石英、長石を多く含む。灰白色5Y7/1	
79	47	こね鉢	瓦質土器	SX04			(28.0)		(3.5)		灰色、灰白	灰色	水びきナデ	水びきナデ	白色砂粒を微量含む。灰白色5Y7/1	
79	48	坏	須恵器	SX04					(3.3)		灰白色	橙色	水びき回転ナデ	水びき回転ナデ	若干荒き小さな気泡がある。	
79	49	甕か	土器	SX04					(10.0)		黄褐色	灰白色	ミガキ	ナデ	石英、雲母、長石の粒を多く含み、1~2cmの土の塊を含む。灰黄色2.5Y7/2	

挿図番号	器種	種別	遺構	層位	法量 (cm)				色調			器面調整		胎土	備考
					器高	口径	頸径	底径	外面	内面	外面	内面			
80	高台付坏	土師器	SX03				(11.0)	灰白色	灰白色	灰色	不明	不明	白色砂を微量に含む。灰白色2.5Y8/2		
80	甕	須恵器	SX03				(6.0)	緑灰色	オリーブ灰色	オリーブ灰色	タタキ(幅広い)施釉	タタキ(幅広い)施釉、花文	密 灰白色10YR8/1 精緻でキメ細かい砂を含む。灰白色7.5Y7/1		
80	碗	青磁	SX03		(17.2)			オリーブ灰色	オリーブ灰色	浅黄色	櫛描	ヘラ削り後施釉	軸厚うすく、2mm~大の貫入、灰オリーブ色5Y6/2		
80	碗	青磁	SX03				7.0	淡黄色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	水びきナデ	白色砂を少量含む。淡黄色2.5Y8/3		
80	壺	須恵器	SX03				6.8	灰白色	オリーブ灰色	オリーブ灰色	回転ナデ施釉	水びきナデ	精緻 黒褐色5Y3/1		
80	壺	陶磁器	SX03					灰色	灰白色	灰白色	運弁文施釉	ヘラミミガキ施釉	精緻 灰色7.5Y6/1		
80	碗	青磁	SX03		(15.0)			灰白色	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	若干荒れ、灰白色2.5Y8/1		
80	碗	青磁	SX03		(12.1)			灰白色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	水びきナデ	工具によるミガキ	微量の白色砂粒を含む。灰白色N7/		
80	碗	瓦器	SX03		7.0			暗灰色	灰白色	灰白色	水びきナデ	水びき回転ナデ	精緻 黄灰色2.5Y4/1		
80	皿	陶磁器	SX03		(9.5)			赤灰色	暗灰色	暗灰色	ナデ	ミガキ後6条1単位のスリ目	灰白色7.5Y8/1		
80	播鉢	瓦質土器	SX03		2.4			灰色	暗灰色	暗灰色	ナデ	ナデ	1mm以下の白色砂粒を含む。	初辨 1636年	
80	寛永通宝	古銭	SX03		(5.5)			暗灰色	暗赤褐色	浅黄色	施釉	施釉	精緻 黒褐色7.5YR3/2		
81	鉢	陶磁器	SX02		(6.5)			暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	施釉	施釉		初辨 1636年	
81	鉢	古銭?	SX02		(28.1)			直径2.4							初辨 1636年
81	銭貨	古銭	SX02		直径2.2										初辨 1636年
81	寛永通宝	古銭	SX02		直径2.4										初辨 1636年
81	寛永通宝	古銭	SX02		直径2.3										初辨 1636年
82	碗	青磁	SX02	溝埋土	(1.7)		(5.2)	灰白色	灰オリーブ色	灰オリーブ色	水びき回転ナデ	ナデ	細緻 灰白色10Y7/2		
82	碗	青磁	SX02	溝埋土	(3.8)		(2.8)	灰白色	灰オリーブ色	灰色	回転ナデ後施釉	ナデ後施釉	細緻、軸厚とてもうすい。灰黄色2.5Y7/2		
82	こね鉢	須恵質土器	SX02	黒褐色粘質土	(3.8)			灰色	青緑色	青緑色	水びきナデ	ナデ	0.1mm以下の白色砂粒を含む。灰色10Y5/1		
82	碗	青磁	SX02	溝斜面	(4.4)		(14.4)	青緑色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	施釉	施釉	精緻 灰白色5Y7/1		
82	碗	陶質土器	SX02	溝斜面	(6.7)		(28.0)	褐色	褐色	褐色	水びき回転ナデ	水びき回転ナデ	0.1~0.5mmの白色、黒色砂粒を含む。にぶい、黄褐色10YR6/4		

第 V 章 調査 II 区の調査成果

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

第 V 章 調 査 Ⅱ 区 の 調 査 成 果

第 1 節 層 序

調査Ⅱ区周辺の土壌層位は、確認調査により把握された周辺約200m四方の様相の中では標準的な堆積状況といえる。調査では現耕作土から青灰色粘土層を観察対象としてⅠ層からⅣ層まで分層し、Ⅱ～Ⅳ層についてはさらに細分を行った。

Ⅰ層は現耕作土、Ⅱ層は近世～近現代の旧耕作土である。いずれも近世の遺物を主として摩滅した土器小片、陶磁器片等を少量含む。Ⅲ層が中世以前の遺物包含層であり、Ⅱ層下部までを表土剥ぎの対象として重機で掘り下げた。

Ⅲ層はⅢa～Ⅲe層の5層に細分した（第84図、図版44）。なおこの細分は確認調査におけるⅢ1～Ⅲ5層にほぼ対応する。

Ⅲa層は近世・中世の遺物を含む砂混じりの土壌である。出土遺物は摩滅が著しい。Ⅲb層は酸化鉄分、マンガンを含み暗い色調の粘質土で、中世の遺物を主として含み、わずかに古代の遺物が混じる。また調査区の南へ向けて粘性が増し、木片や種子等の植物遺体が遺存している。Ⅲc層は灰色無遺物層であるが、その上部は結核した鉄分、マンガン層の集積が認められる。Ⅲd層は粘質土、Ⅲe層は粒子の細かなシルト質の砂層で、Ⅲd層は古墳時代の、Ⅲe層は弥生時代の遺物を含む。

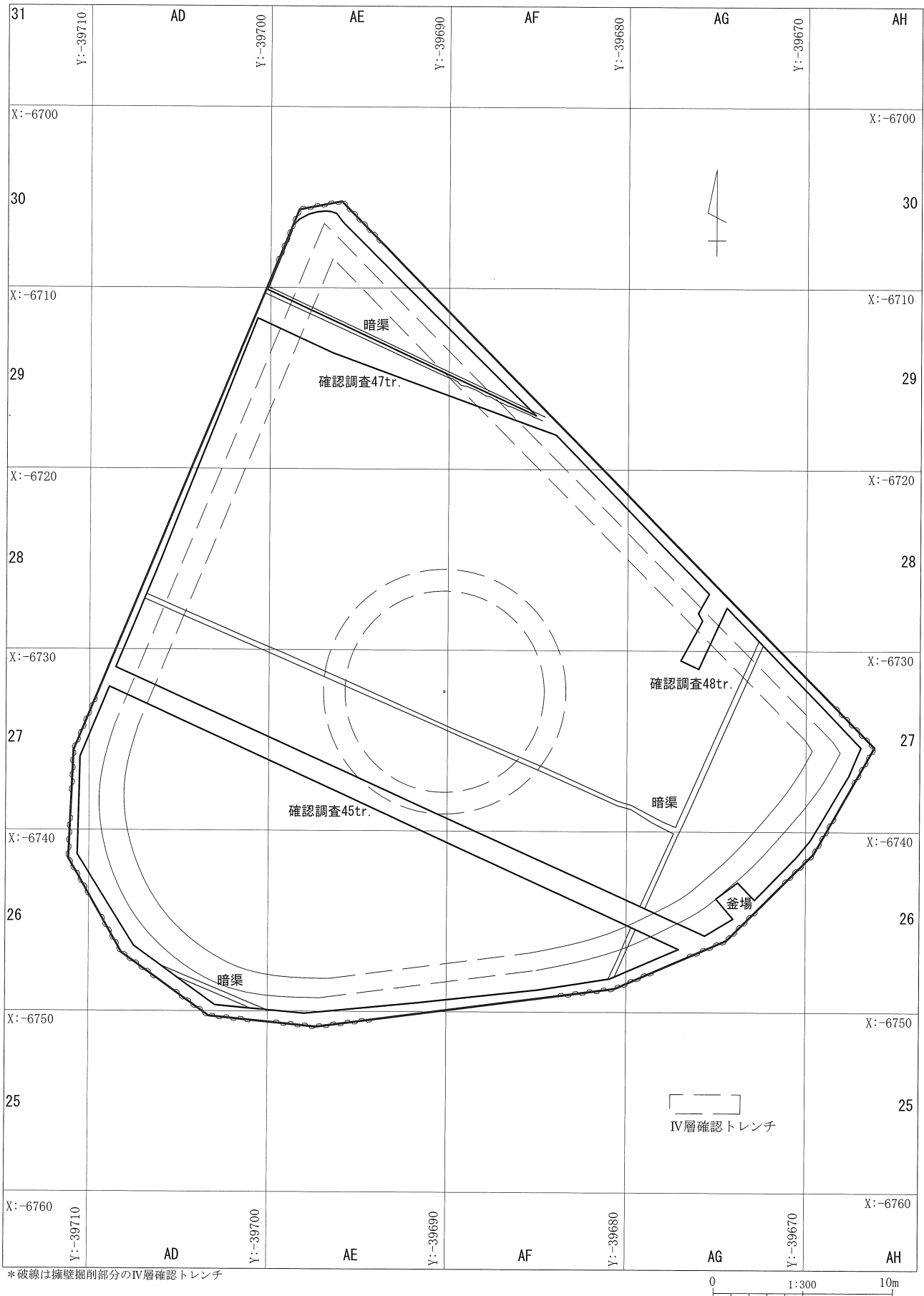
Ⅳ層は強い粘性を示し青灰色に還元された粘土層であり、粘性と色調により細分できる。上位に弥生時代の土器、縄文時代の土器、黒曜石剥片をごく僅かに含む。なお、Ⅳ層は遺物包含層としては極めて散漫な出土状況を示すこと、また調査後の調整池施工時も大部分の面積が掘削の影響を受けないことから調査対象としていなかった。しかし、隣接する調査Ⅰ区のかかなり深いレベルから弥生時代の杭列が検出され、本調査区においても類似の遺構が同レベルに存在する可能性があること、また外周の擁壁工事ではそのレベルまで掘削が及ぶことからⅣ層の状況を確認するため調査区外周およびセンターサークル部分でトレンチ調査を実施した。

AE-27グリッド隅では標高2.9m付近まで深掘りし、Ⅳ1層～Ⅳ5層までを確認した。なおⅣ2層中には断面において緩やかな溝状の落ち込みを示す黒色粘性土を検出した。これは周辺のⅣ層よりも明瞭に暗い色調の有機質の粘土で、下部に木葉や葦等の沼沢植物が含まれている。平面的に確認したところ、不定形で様々な方向に拡がり、沼沢的な様相を示すものと考えられる。なおⅣ2・Ⅳ3層と黒色粘性土からは縄文時代晩期前半の土器が出土した。

基本的にⅢa層～Ⅲd層、Ⅳ層は下位になるに従って順次粘性が強くなり、夾雑物も少なくなる。なおⅢb層は部分的にほとんど粘性を認められない範囲があり、またⅢc層は調査区西側において堆積が認められずその平面的分布範囲は一様ではない。なお各層は全体的に調査区北部（AF-29グリッド）付近を頂点として南西側へと緩やかに傾斜している。

水田面を想定する上での手がかりとなるとされる酸化鉄とマンガンの集積については、特にⅢb層とⅢc層の層界について顕著に認められ、Ⅲc上位に酸化鉄分、Ⅲc層中位にマンガンの集積が顕著に認められる。また地下水位の上下変動を示すとされる暈管状斑紋はⅢd層を中心にその上下層に目立つ。調査時点における地下水位はⅢe層付近にあり、絶えず湧水があるため常時排水のためのサブトレンチを掘削しながら調査を進めた。

第1節 層序

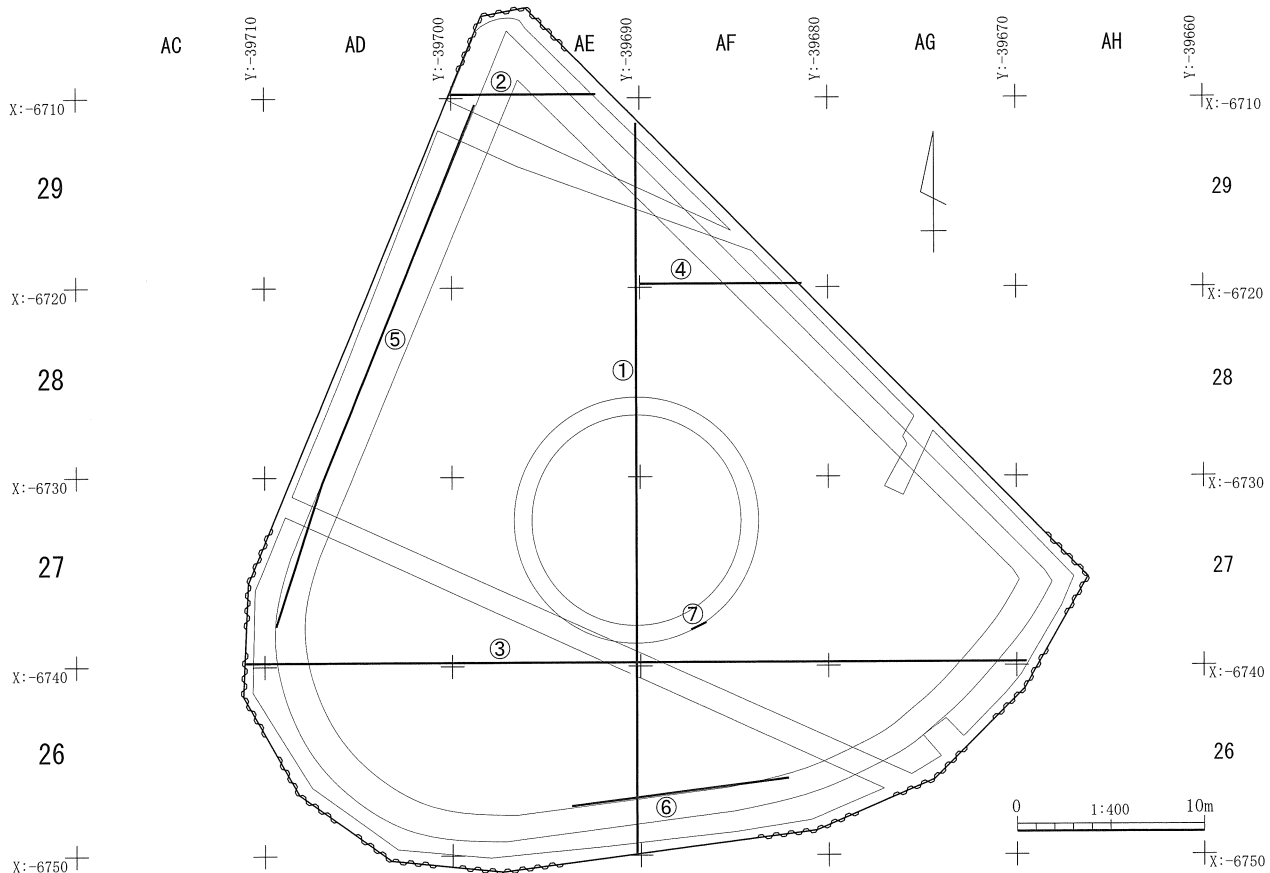


*破線は擁壁掘削部分のIV層確認トレンチ

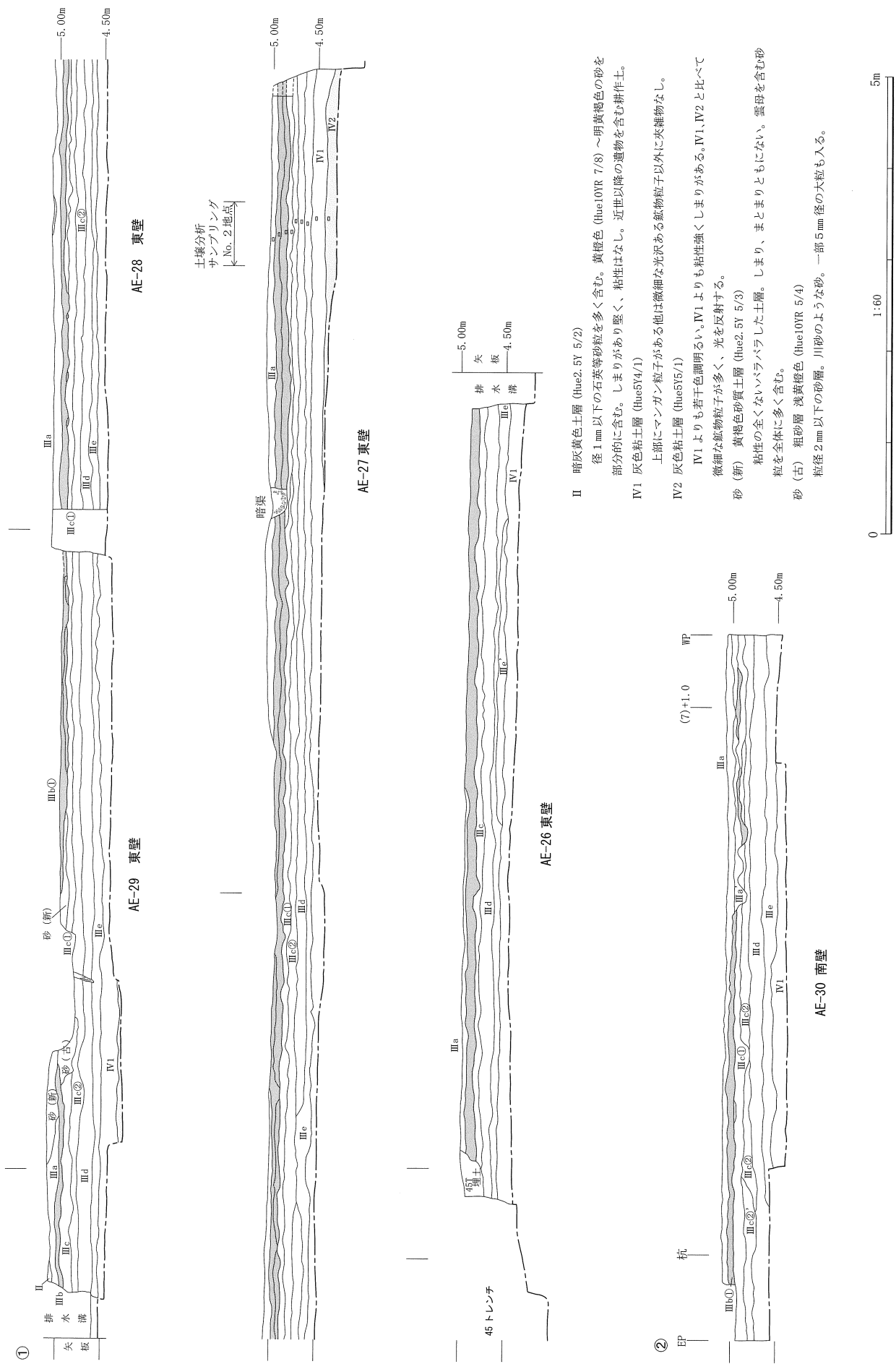
第83図 調査Ⅱ区グリッド配置図

層位名	色調*	特徴	
I		現代の耕作土	
II		近世・近代の耕作土	
IIIa	暗灰黄色土層 (Hue2.5Y 5/2)	かたくしまりがあり粘性はない。1mm以下の砂粒を含む。斑状の鉄分を全体に含み、3mm以下のマンガン粒を含む。全体に夾雑物が多く粗い。近世以降の耕作土層。	
IIIb①	褐灰色粘質土層 (Hue10YR 4/1)	しまりがあり粘性を有する。径1mm以下の砂粒を含む。鉄分は斑状に全体に含み、一部短い管状、また径1cm以下の塊状。マンガン粒はまばらに認められる程度。中世の遺物を含む。	
IIIb②	黒褐色粘質土層 (Hue10YR 3/1)	3b①より色調暗く、粘性強い。中世の遺物を含む。鉄分は下部に集中し、3c層との層界には径1~2cm大の集核した鉄分がある。マンガン粒が目立ち短管状や粒状で存在する。	
IIIc①	黄灰色土層 (Hue2.5Y 6/1)	やや粘質を帯び、部分的にシルト質の土層で、一部に砂層に近い部分もある。夾雑物は白色砂粒が極僅か含まれる程度。全体に鉄分を多く含み、上部(IIIbとの層界)に径1~2cm程度の塊が集中する。2~3mmのマンガンの粒も全体に認められる。	
IIIc②	黄灰色土層 (Hue2.5Y 5/1)	しまりがあり粘性を帯びる。3c①より色調が暗く粘質で、IIIdより粘性弱い。鉄分は管状を呈し、層上部の方に密集する。マンガンはわずか。古代の遺物を含む。IIIc②'はしまり、粘性ともになし。	
IIIe	IIId	黄灰色粘質土層 (Hue2.5Y 5/1)	しまりがあり粘質。鉄分は管状、あるいは部分的に斑紋で含まれ、マンガンは僅か。古墳時代の包含層。IIId'は層上部に3~4cm径の鉄分の塊、斑紋状に含む。
IV1	IIIe	灰色砂層 (Hue10Y 5/1)	しまりのない、やわらかなシルト質の土層。部分的にやや粘質を有する。白い鉱物に崩壊したようなカタマリが混じるのが特徴的。鉄分、マンガンともにはあまり目立たない。弥生土器片をわずかに含む。IIIe'は鉄分がより多量に含まれる。
IV2	IV1	灰色粘土層 (Hue5Y 5/1)	水分を含み粘性が強い。IIIcより若干暗めの色調。上部のIIIe層との境界部分には上位層と同様の管状鉄分が並ぶが、下部では認められない。

* 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』 日本色研事業株式会社 1986



第84図 基本土層柱状図及び観察表・土層断面図配置図



第85図 調査Ⅱ区土層堆積状況(1)

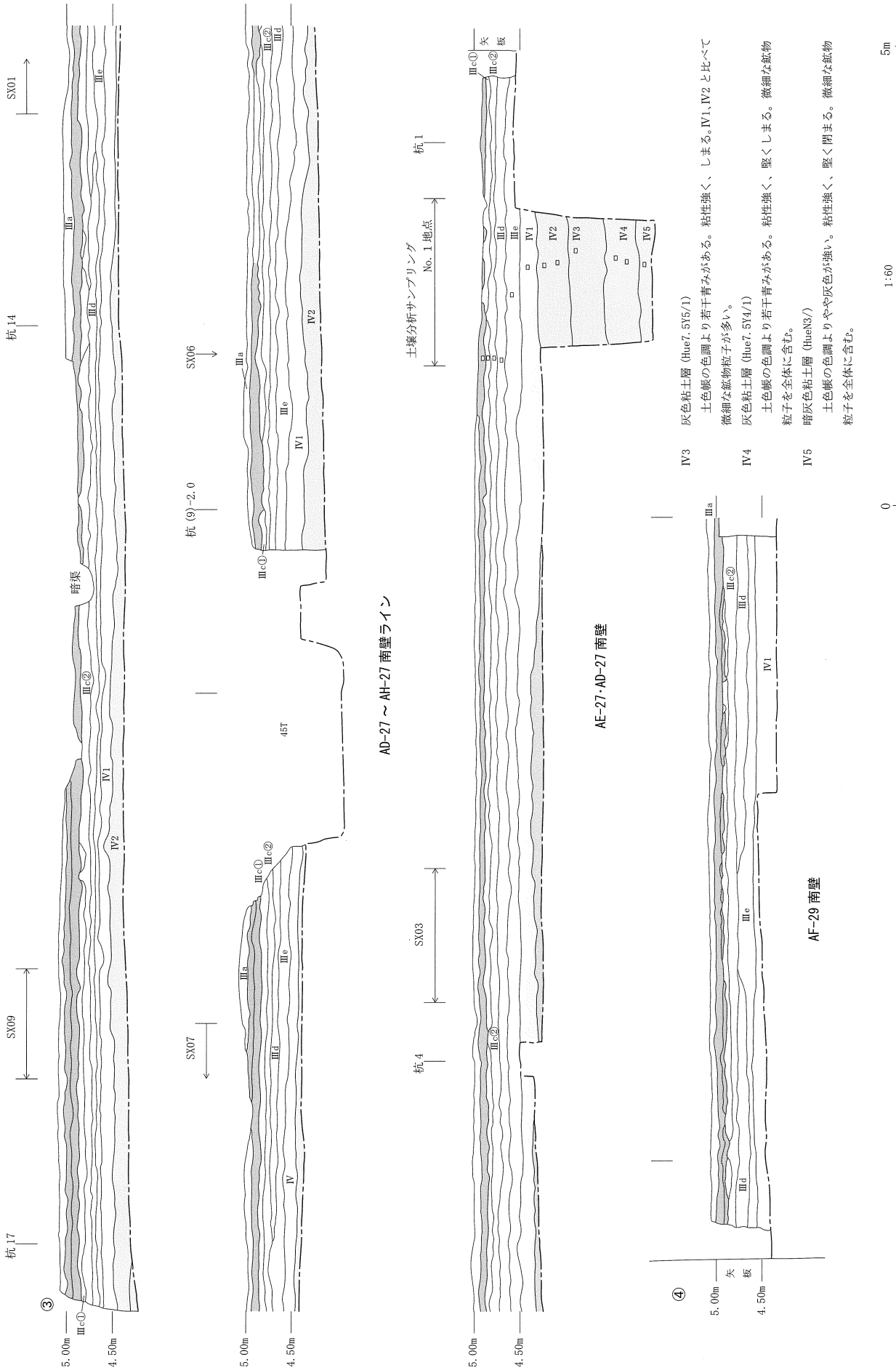
II 暗灰黄色土層 (Hue2.5Y 5/2)
 径 1mm 以下の石英等砂粒を多く含む。黄橙色 (Hue10YR 7/8) ~ 明黄褐色の砂を部分的に含む。しまりがあり堅く、粘性はなし。近世以降の遺物を含む耕作土。

IV1 灰色粘土層 (Hue5Y4/1)
 上部にマンガン粒子がある他は微細な光沢ある鉱物粒子以外に夾雑物なし。

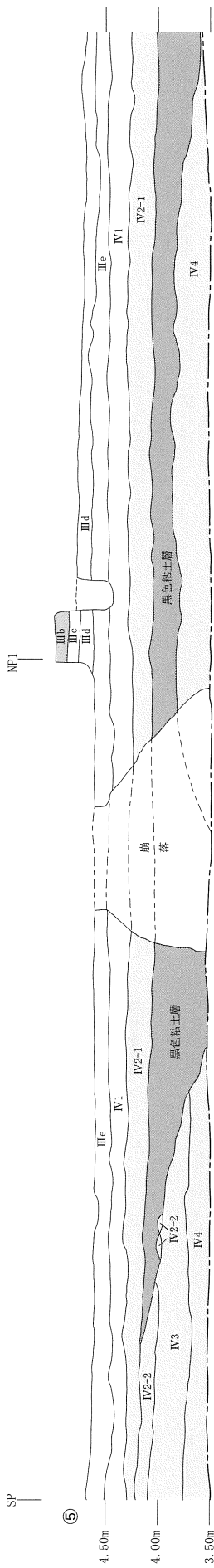
IV2 灰色粘土層 (Hue5Y5/1)
 IV1 よりも若干色調明るい。IV1 よりも粘性強くしまりがあがる。IV1、IV2 と比べて微細な鉱物粒子が多く、光を反射する。

砂 (新) 黄褐色砂質土層 (Hue2.5Y 5/3)
 粘性の全くないパツパツした土層。しまり、まとまりともにならない。雲母を含む砂粒を全体に多く含む。

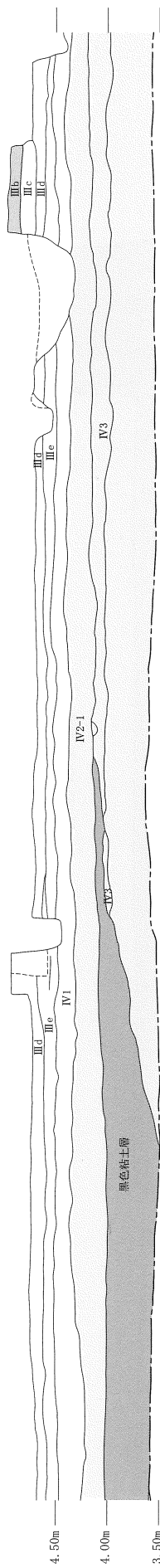
砂 (古) 粗砂層 浅黄褐色 (Hue10YR 5/4)
 粒径 2mm 以下の砂層。川砂のような砂。一部 5mm 径の大粒も入る。



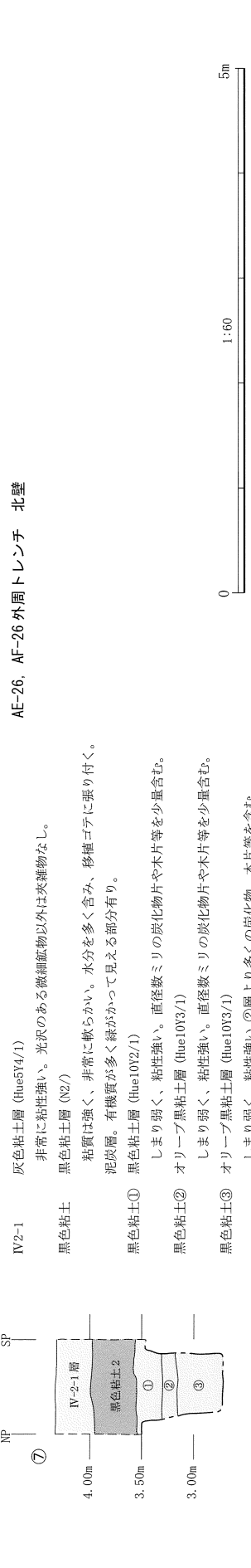
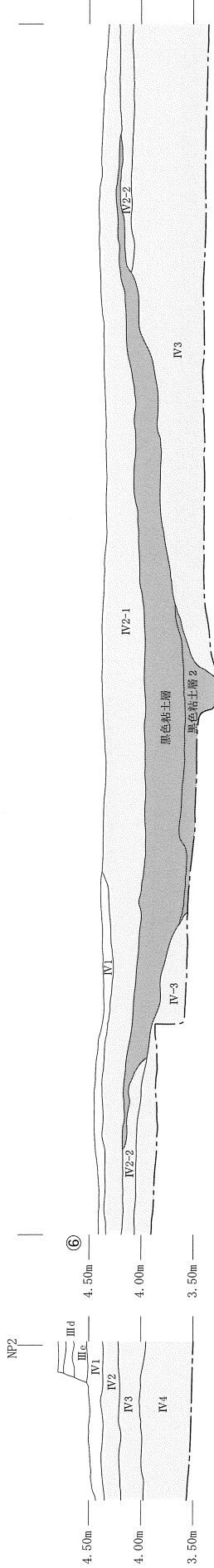
第86 図 調査Ⅱ区土層堆積状況(2)



AD-27, 28 外周トレンチ 西壁



AD-27, 28 外周トレンチ 西壁



AE-26, AF-26 外周トレンチ 北壁

AF-27 センターサークルトレンチ

- IV2-1 灰色粘土層 (Hue5Y4/1) 非常に粘性強い。光沢のある微細鉱物以外は夾雑物なし。
- 黒色粘土 黒色粘土層 (N2/7) 粘質は強く、非常に軟らかい。水分を多く含み、移植ゴテに張り付く。泥炭層。有機質が多く緑がかかって見える部分有り。
- 黒色粘土① 黒色粘土層 (Hue10Y2/1) しまり弱く、粘性強い。直径数ミリの炭化物片や木片等を少量含む。
- 黒色粘土② オリブ黒粘土層 (Hue10Y3/1) しまり弱く、粘性強い。直径数ミリの炭化物片や木片等を少量含む。
- 黒色粘土③ オリーブ黒粘土層 (Hue10Y3/1) しまり弱く、粘性強い。②層より多くの炭化物、木片等を含む。



第87図 調査Ⅱ区土層堆積状況(3)

第2節 遺構

本調査区において検出した遺構は杭列、畦畔状遺構、自然流路状遺構である。いずれも中世後期～近世初頭にかけての時期に属する水田耕作に関係するものと考えられる。以下、種別ごとに述べる。

1. 杭列（第88～91図、図版46～47、59）

杭は総数38本出土した。出土位置および深度からA～Dの3列・1群に分けられる。

（1）A列

A列はⅢa層掘削途中に検出し、調査区西側にN20Eの角度で約5m間隔で並ぶ。

A-1杭からA-7列杭までのうち、A-1、A-3、A-5、A-7杭は2本ずつセットとなり、またA-7杭はさらに細い竹製の杭が側にあるため計12本となる。長いもので20cm強、短いもので5cmほどしか残存しておらず、検出面より上層から打ち込まれたものと考えられるものの、杭上部の大半は腐蝕及び後世の耕作等攪乱により失われたとみられる。加工は先端に認められるのみでいずれも鉄製利器を用いたとみられるシャープなものである。残存部位の状態からⅢa層上面より上層から打ち込まれたと考えられるため、近世以降に帰属するものと考えられる。

（2）B列

B列はⅢa層あるいはⅢb層掘削途中に検出し、A列にほぼ平行して並ぶ。

B-3杭は比較的残存状態がよく長さ60cmを測り、形状から頭部付近まで残っていると考えられる。このことからⅢb層上面かⅢa層掘削途中に打ち込まれたと考えられ、打ち込まれた包含層の遺物から中世後期～近世に帰属するものと考えられる。

（3）C列

C列はⅢa層掘削中に検出し、A列、B列の軸に対してほぼ直角の方向を軸として並ぶ。

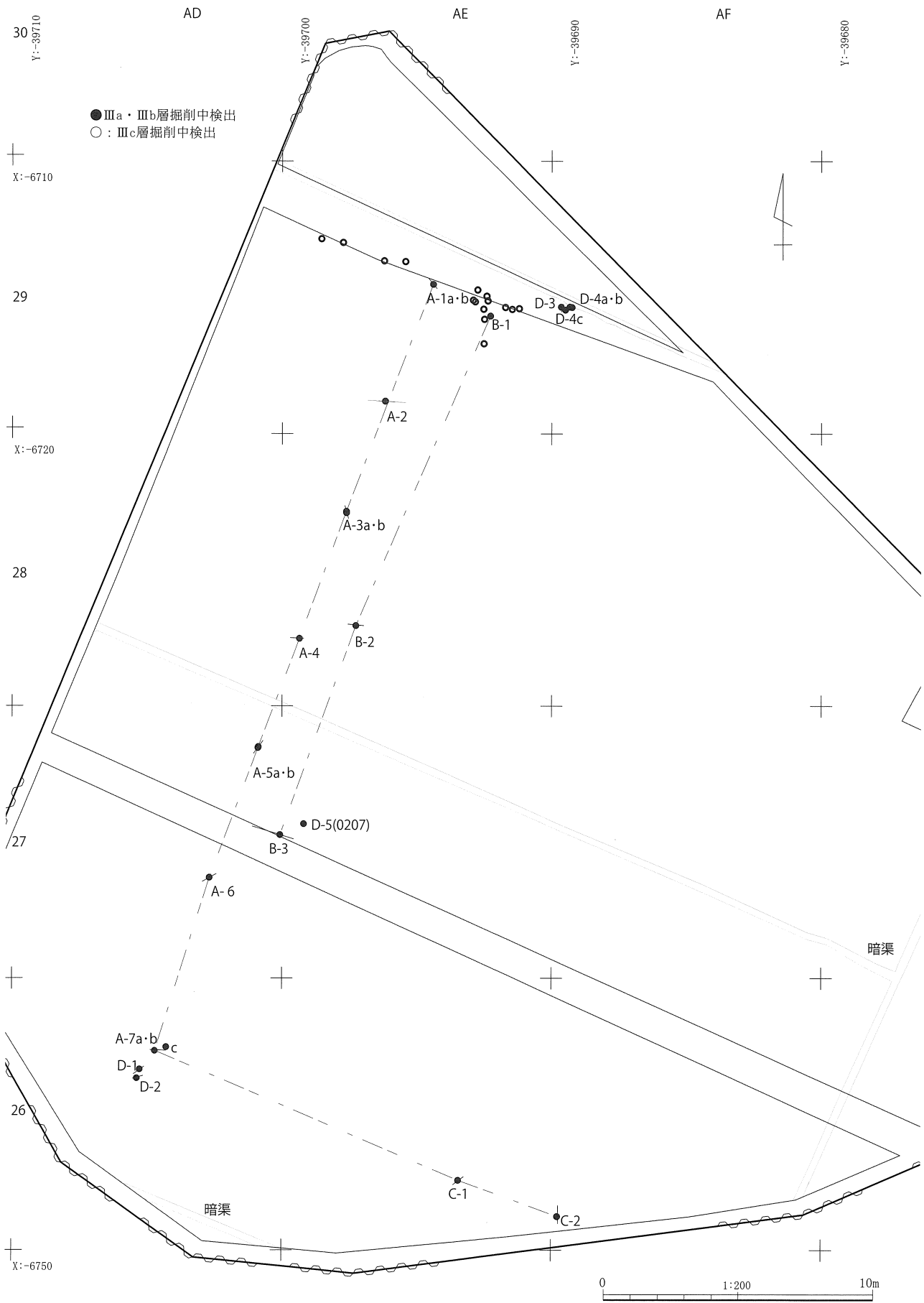
検出した2本ともに残存15cm前後と短く、また検出面および杭の材質、加工の特徴の共通性からAグループと同時期のものと考えられる。

（4）D群

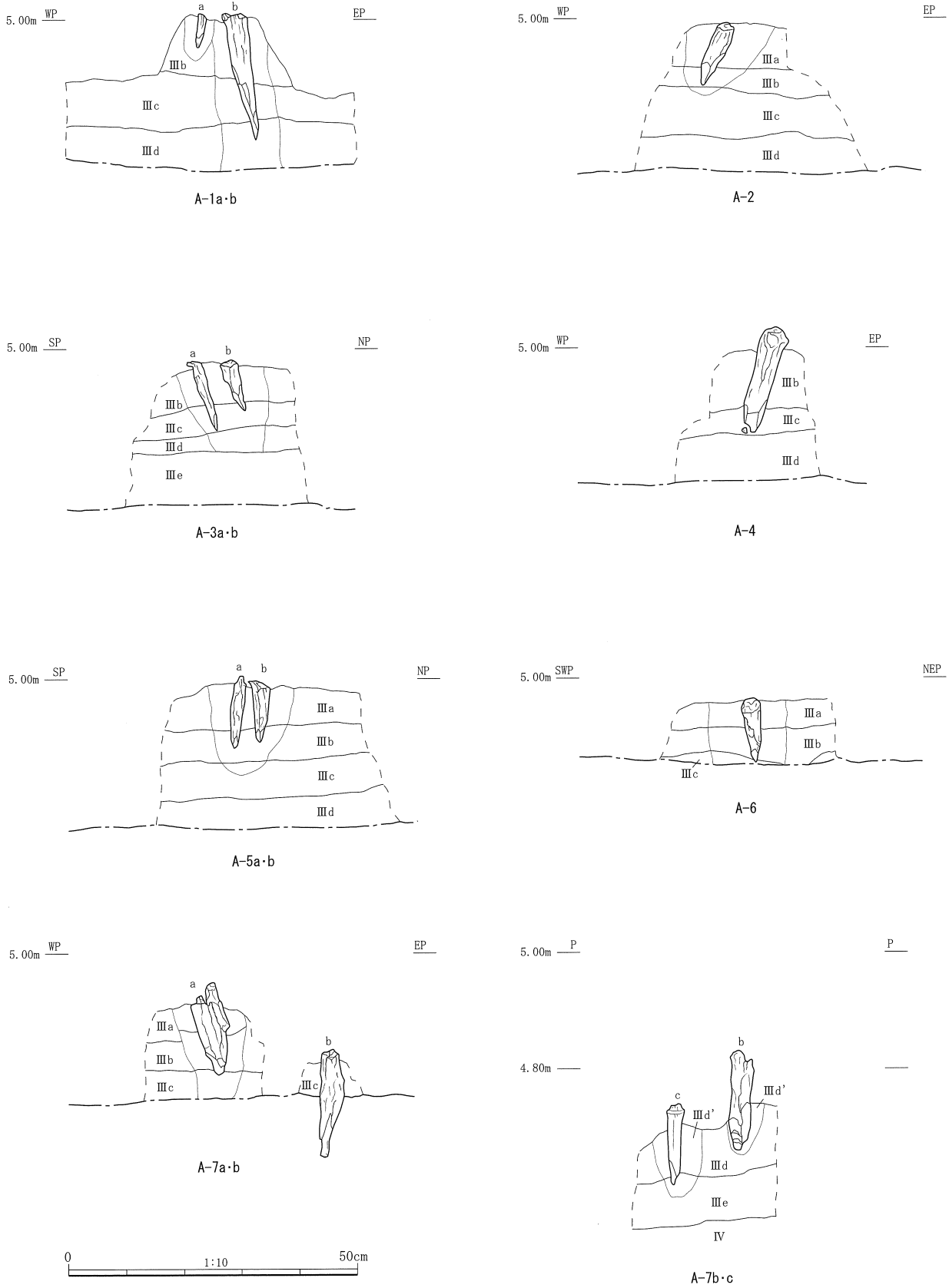
D群は上記A～C列のように特定の軸をもって並ぶとは確認できなかった杭を総称する。

D-1、D-2、D-3杭はⅢa層掘削中あるいはⅢb層上面、D-4a、D-4b、D-4cはⅢc層上面、D-5(S0207)杭はⅢd層上面で検出した。D-1、D-2杭は10cm程度の先端部部分しか残存しておらず、A・Bグループと同時期と考えられ、また出土位置からAあるいはBグループ列に属する可能性もある。D-3杭、D-4杭は検出面が前述の杭に比べてやや低い、これは出土位置が確認調査47トレンチにあたり上部が掘削を受けているためである。またD-3杭は残存長50cm弱、直径7～8cmと他に比べて大きめで打ち込み面はⅢa層よりも上層である可能性がある。D-3、D-4杭は調査区の縁辺に近いこともあって調査区外に関連する杭が存在するとも考えられる。D-5(S0207)杭の検出面であり他に比べて非常に深い位置にある。また残存長55cmを測りⅢd層上面で打ち切られたような状態で出土し、先端はⅣ2層にまで達している。

第2節 遺構

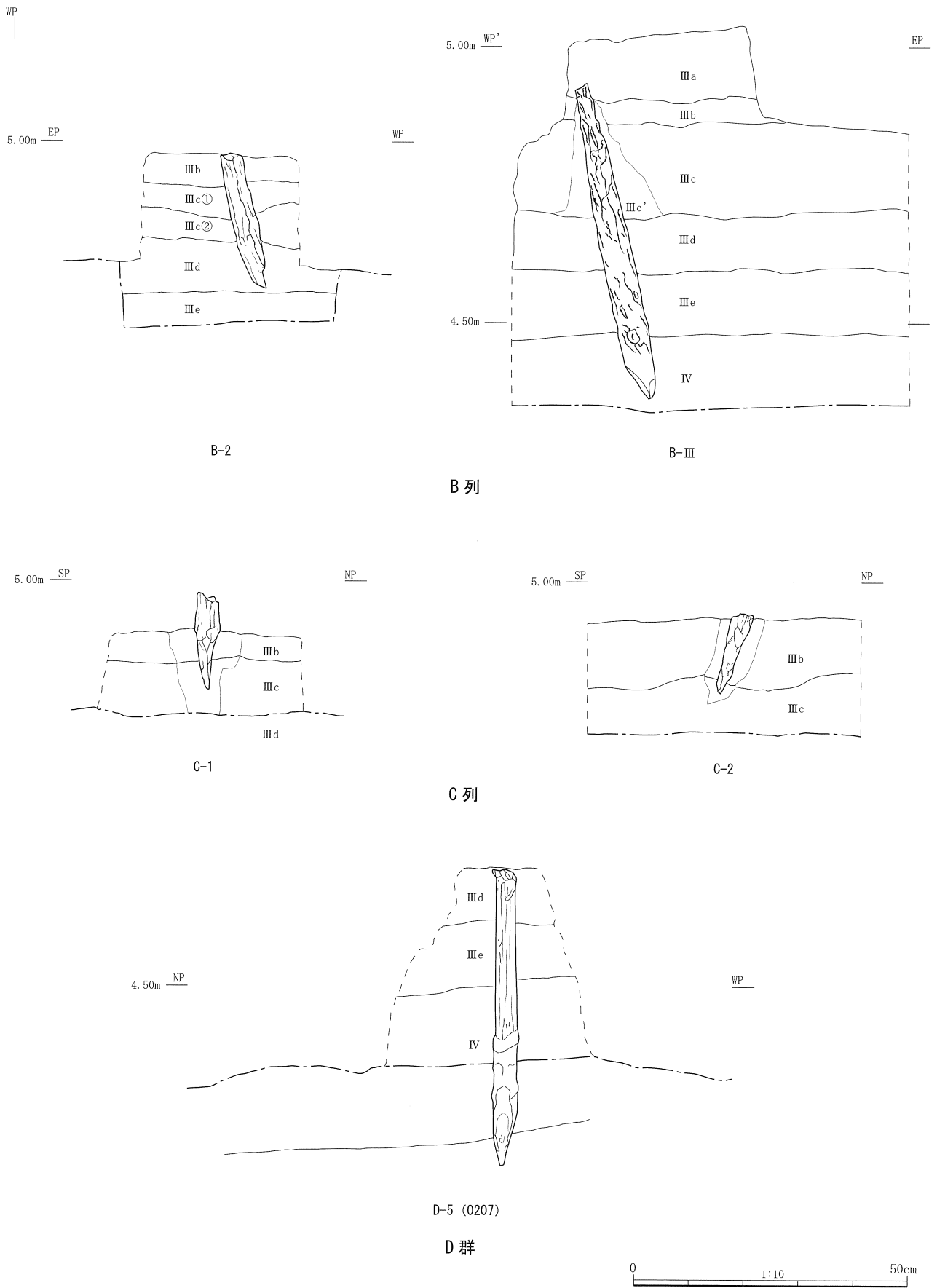


第88図 杭列配置図



第89図 杭列 (A列) 実測図

第2節 遺構



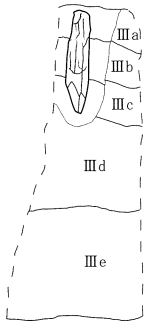
第90圖 杭列 (B列・C列・D群) 実測図

5.00m NP

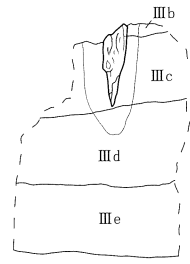
WP

5.00m NP

WP



D-1



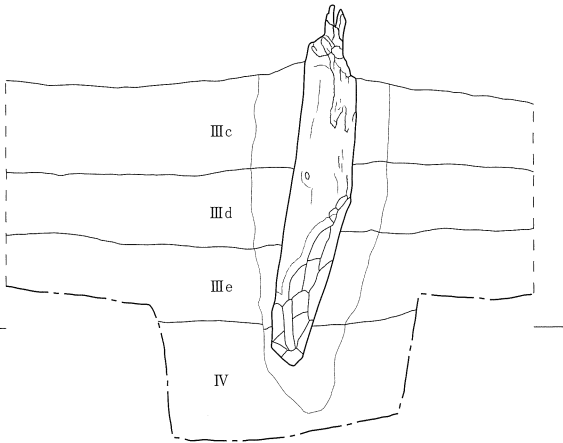
D-2

5.00m SP

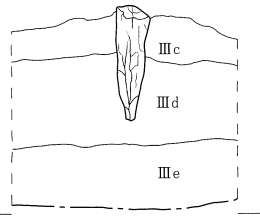
NP

5.00m SP

NP



D-3



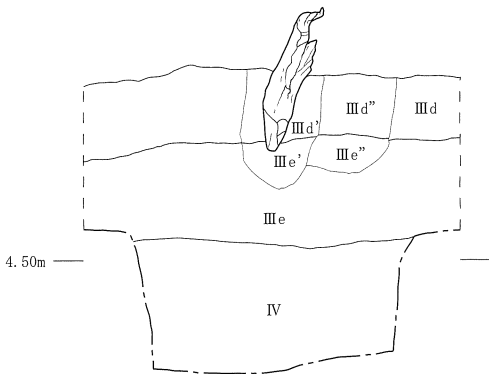
D-4a

5.00m SP

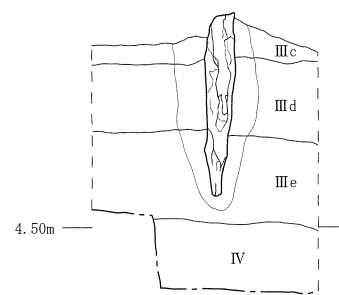
WP

5.00m SP

NP



D-4b



D-4c

0 1:10 50cm

第91図 杭列 (D群) 実測図

第2節 遺構

この杭はⅢc層の堆積前後に削平されたものと考えられ、他の杭よりも古い時期に属するものと考えられる。

その他に、AE-27グリッドではⅢc層掘削中に直径1～3cmほどの小杭を15本検出した。いずれも残存状態が悪く加工の痕跡等は観察できなかった。その性格等は不明である。

杭が打ち込まれた部分の土壌は杭の存在による浸透水の影響か、杭に沿って青みが強い色調に変化しているのがみられた。ただし、色調以外は本来の基本土層の特徴と同一である。

杭に用いられた木材の樹種については第Ⅷ章第8節で報告されている。そこではB-3杭およびD-3杭がマツ、D-5杭がヤマモモと同定され、他の杭に関しても肉眼観察による比較検討ではほとんどがマツであろうとみられる。

なお各杭の放射性炭素年代測定ではB-3杭が15世紀前半頃、D-3杭が16世紀代、D-5(S0207)杭が14世紀末～15世紀前半頃という、上述の考古学的所見と矛盾しない年代が得られている(第Ⅷ章第9節)。

本調査区で検出したいずれの杭も打ち込まれた包含層の時期と残存長の長さから、少なくとも中世末～近世以降の所産であると考えられる。A～C杭列の並ぶ方向軸は暗渠や現代の耕作地の地割りと全く軸を同じくしており、これらの杭が耕作地の区画等に関連するものとするれば、現在の地割りの軸は少なくとも近世にまで遡らせることができるといえよう。

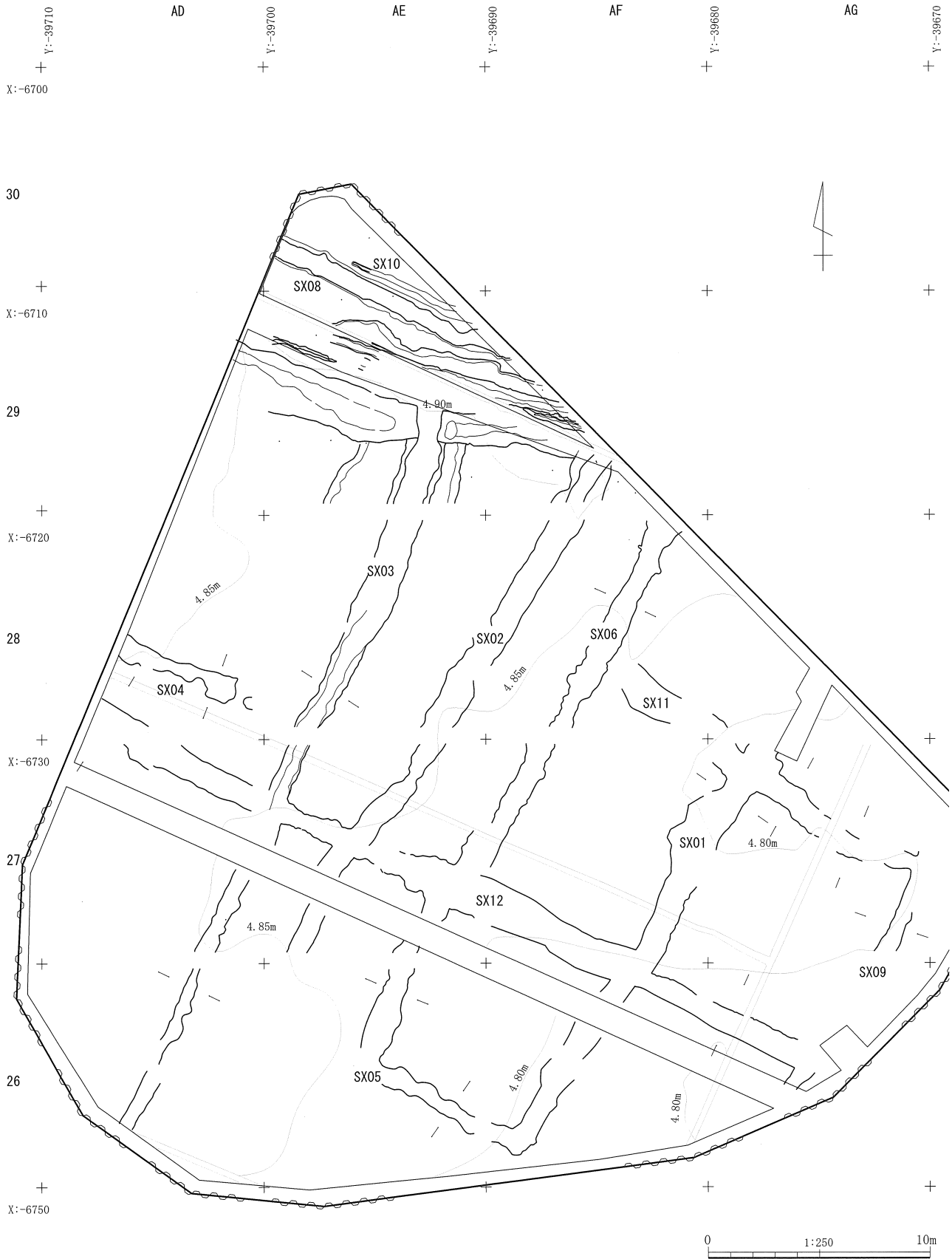
2. 畦畔状遺構 (第92～96図、図版48～53)

本調査区では褐灰色～黒褐色を呈する粘質土層であるⅢb層を掘削、除去する過程において黄灰色のⅢc層が帯状に高くなっている部分があることが確認できた。土層観察用のベルトを改めて観察したところ、周辺より3～5cmほど高い部分があることが判明し、またその部分にはⅢc層とは異なる非常にきめ細かな白色砂・シルトの堆積が認められる部分もあることがわかった。さらにⅢc層上面に顕著に認められる酸化鉄の集積が希薄で、その周囲とは酸化鉄・マンガン集積の密度においても峻別される。

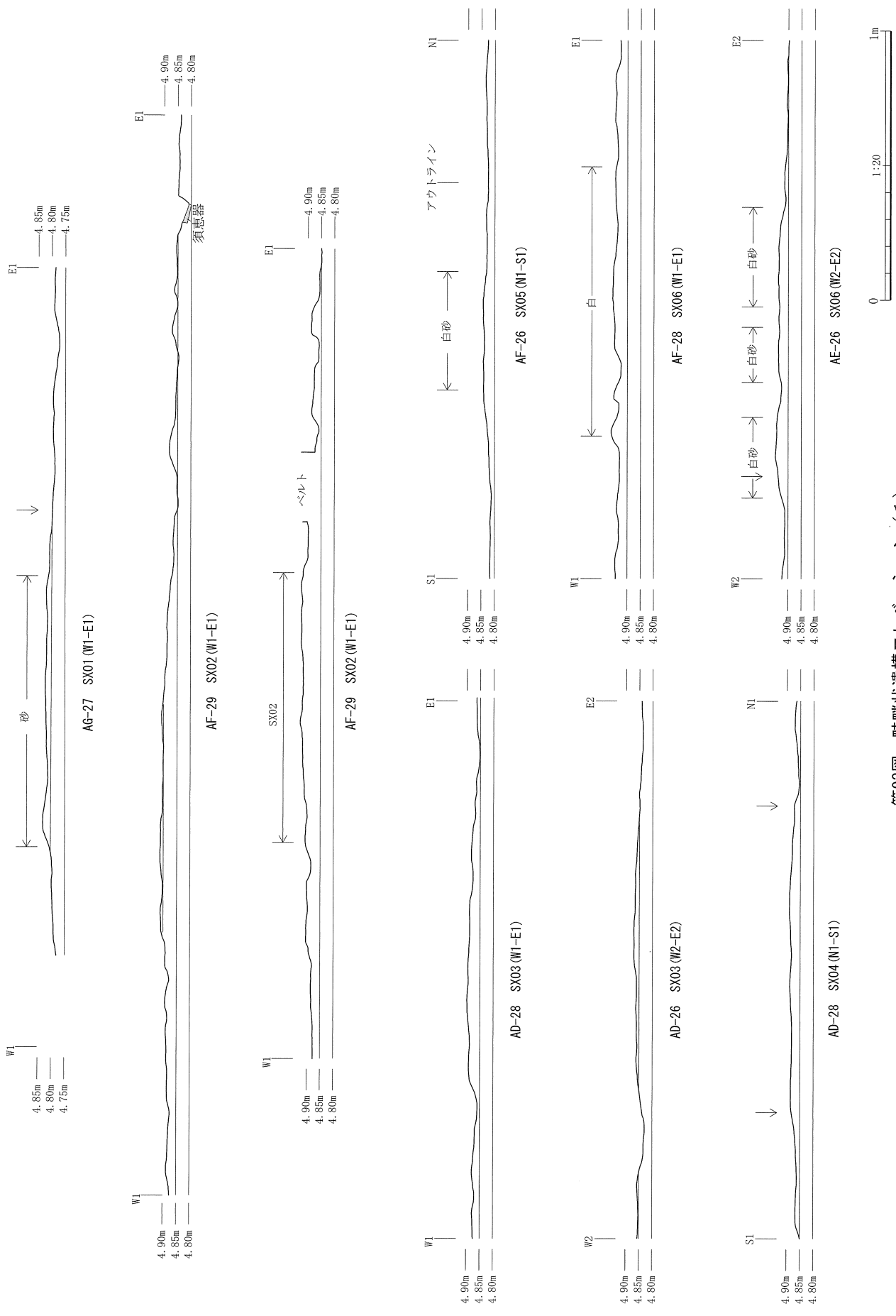
これらの帯状の高まりは1.0～1.5m前後の幅でそれぞれ並行するように調査区内外に延びている。南北方向に延びるものは概ねN30Eの方位を示し、7m程の間隔を保って併走する。これらの高まりは水田畦畔としては非常に低く、平面、断面形状ともに明瞭さに欠ける。これはこの遺構を構築しているⅢc層の土壌がシルト質で非常に柔らかく、また矢板等の構築物もなく叩きしめる等の工作を行っていないため、廃絶後崩れたものと思われる。

なお、水口や用排水路など水田の付随施設は確認できず農具の出土もないため積極的に畦畔と認定する根拠は少ないが、周辺環境等から否定する要素もないため畦畔状遺構と想定した。なお自然科学分析の結果(第Ⅷ章第2節)では稲作の存在が想定される量のイネ花粉及びプラントオパールが検出されている。

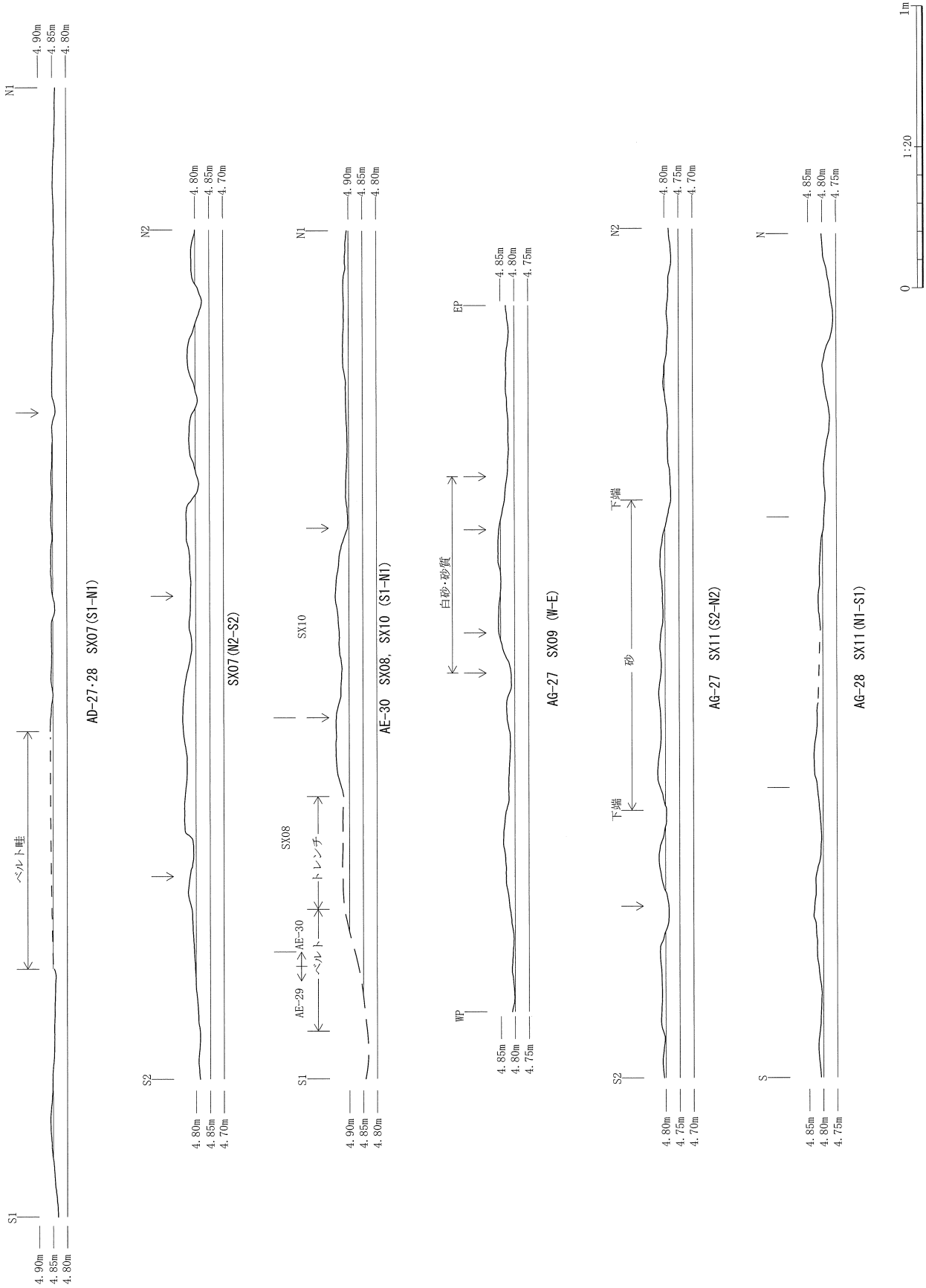
畦畔状遺構は当初、性格不明の遺構としてSXと呼称し帯状の高まりごとにSX01～SX12までの番号を付した。このうちSX02以外は概ねN30Eの方位を示し、上層で検出した杭列や現在の耕作地の地割りの軸よりもやや東に振れる。各畦畔とも高さは乏しいが、覆土となるⅢb層が暗い色調の土壌であるのに対してⅢc層が明るめの色調であること、また畦畔部分は鉄分の集積が希薄であったことも検出を可能にした。ただし、部分的に明瞭な部分もあるものの全体的



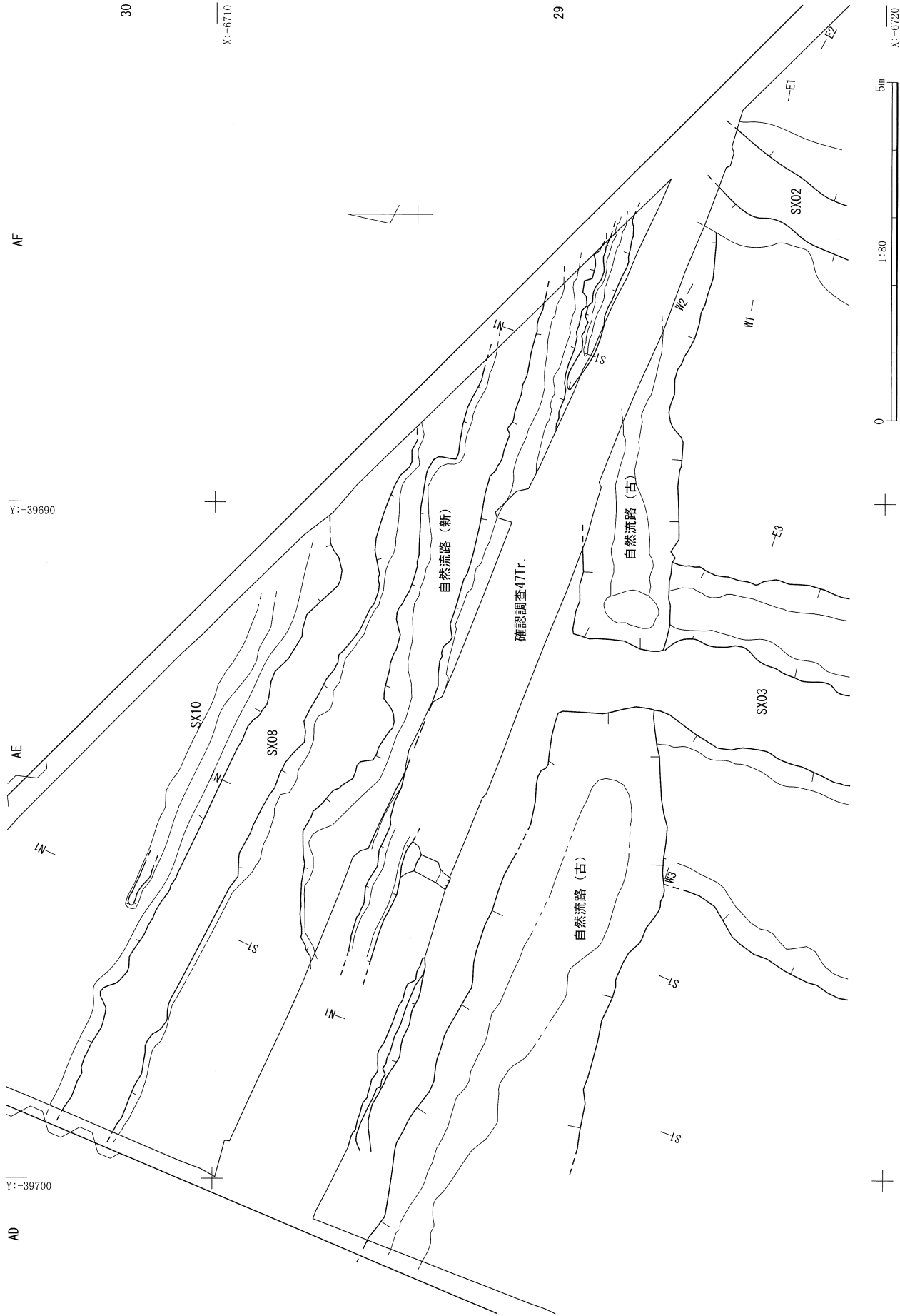
第92図 畦畔状遺構



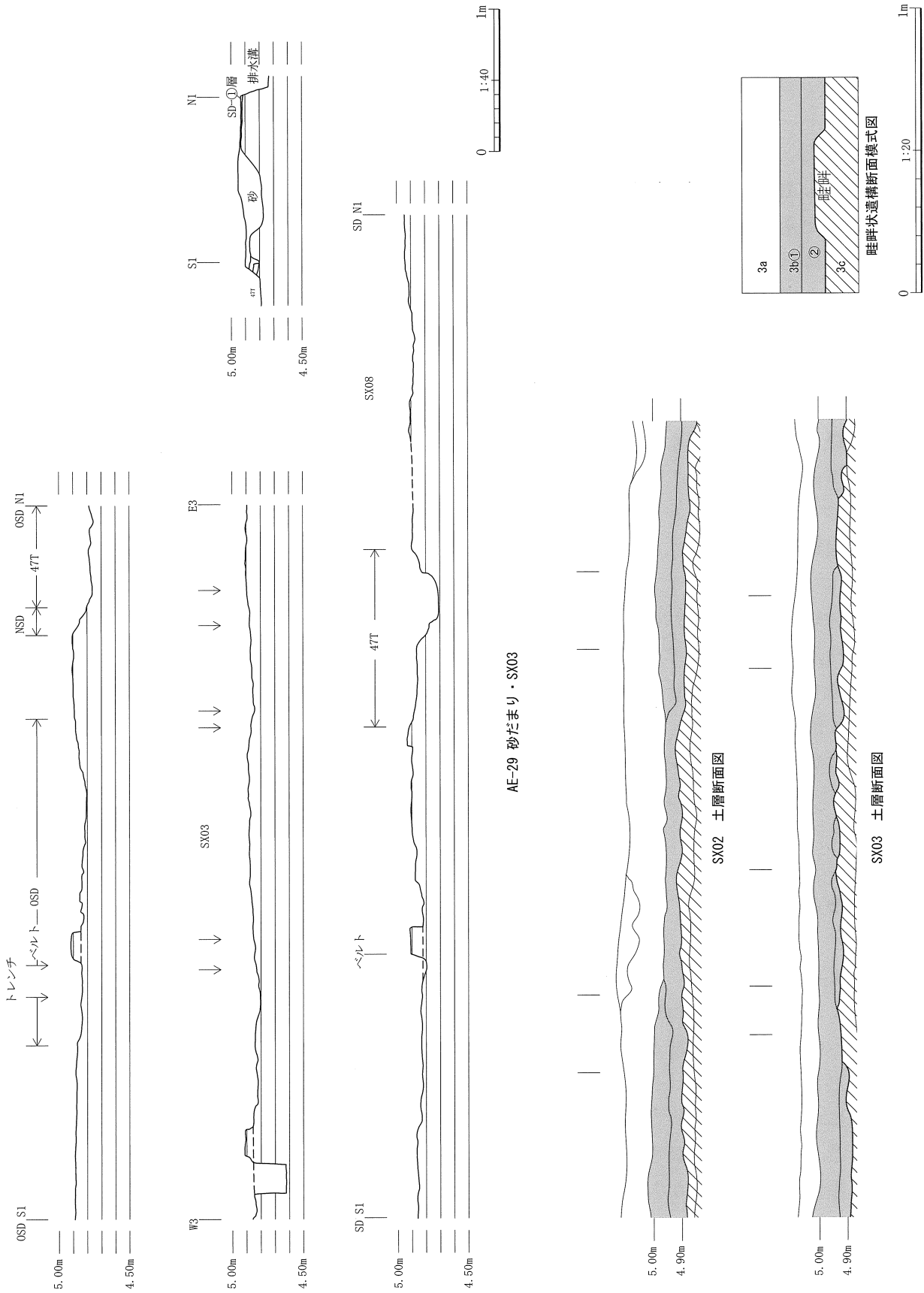
第93図 畦畔状遺構工レベーション(1)



第94図 畦畔状遺構工レベルション (2)



第95図 畦畔状遺構・自然流路実測図



第96図 畦畔状遺構エレベーション(3)・土層断面図

第3節 遺物とその分布

には非常に検出困難であり、多くは部分的な検出にとどまった。

SX02はN35Eの方位を示し、他の畦畔よりも東に振れており、畦畔部分の土壌の色調がより白っぽく、さらに鉄分の集積がより希薄であるという特徴をもつ。SX02のようにやや軸を異にするもの、またSX04のように他の畦畔と近接するものもあり、これらは時期差を示す可能性がある。

遺構の性格上、その帰属時期を明確にすることは難しいが、Ⅲb層及びⅢc層の出土遺物から、中世後期を遡らない時期のものと考えられる。

上述したⅢc層上面で検出した畦畔とは別に、Ⅲd層中においてもAF-28グリッドを交点として十字方向に延びる帯状に鉄分の集積が希薄になる部分が認められた。これはⅢd層の出土遺物の分布にも顕れている（第98図）。しかし、土層断面では部分的にⅢe層の高まりを確認できたものの、平面的に捉えることはできず遺構との確証はえられなかった。なお軸はSX01～SX12とはことなりほぼ東西南北の方位に沿っている。

3. 自然流路（第95～96図、図版54）

調査区北側のAE-29グリッド、確認調査47トレンチの周辺に、東西方向に延びる粗い砂の堆積が認められた。これはⅢa層除去後検出したものであるが、確認調査の時点ですでに粗い砂を含む溝状遺構として把握されていたものである。砂層が広がる範囲中央の大部分が確認調査47トレンチにあたっており、底面の形状を確認できた部分は狭小だが、平面および断面形状は不定形で遺物も数点の須恵器、土師器片が出土したに過ぎない。人為的な遺構である可能性は低く、自然流路的なものであると考えられる。新旧2時期の流路が重なっており、古い砂層はⅢc層上部を切って堆積し、Ⅲb層によって覆われており、新しい砂層はⅢa層堆積後に流入している（第86図）。

また中央付近を近代の暗渠によって切られている。これらの新旧砂層の年代は、畦畔状遺構SX03を一部切っている部分があることから畦畔状遺構が構築された後、中世末～近世初頭頃と推定される。

第3節 遺物とその分布

1. 遺物出土状況

調査Ⅱ区における出土遺物総量（石製品、金属製品等を除く）は約3,630点（重量29kg）である。土器1点あたりの平均重量9gとなり、おしなべて摩滅した小破片であって接合率は非常に低い。なお土器1点あたりの重量は各層とも8～9gであって破片の大きさには大差ない。

調査区内には住居址や土坑などの生活遺構が存在しないことから周辺の微高地からの流れ込みと見られる。出土量の半数を占める中世～近世の遺物は羽釜や播鉢、石鍋といった調理具の他、青磁碗や貯蔵用具の甕などの器種がそろっており中世以降には本調査区近隣に生活領域が存在したと思われる。

接合作業の結果、同じ一括取上単位同士以外で接合できたものが78例あり、その内同一グリッド以外で接合したものは10例のみで、最大でも20mほどしか出土位置は離れていない。また同一グリッド内の上下の層位間で接合した例が25例あり、特にⅢd層を中心としてⅢc

層～Ⅲ e層に集中し、本来下位の包含層に属する遺物が上昇するような何らかの作用があったことを示している。

Ⅲ a層（第97図）

Ⅲ a層からは染付や寛永通宝など近世の遺物、青白磁、瓦質土器などを主体とした中世の遺物が出土した。Ⅲ a層出土の遺物はグリッド毎の一括取上であり、一部の時期が判定できる遺物のみ出土位置の記録をおこなった。そのため出土状況図では散漫な状況を呈しているが、遺物出土量は約800点・重量約6.3kg(7.9g/1点)をはかりを層位毎の出土量をみると全体の2割を占める。ただしローリングを受けた小破片が多く、異なる取上単位間で接合した例は3例と接合率が極端に低い。

調査区全域にわたって特に集中箇所はなくまんべんなく出土している。Ⅲ a層自体が乾燥した保水性の低い土壌であるためか自然遺物の出土はなかった。

Ⅲ b層（第97図）

Ⅲ b層からは瓦質土器や石鍋、青磁など中世を主体とした遺物が出土した。調査区の北西側に遺物出土が集中し、南西側は極端に少なく特にAD-26～AG-26グリッドにかけてはヤマモモ等の種実や樹木片等の自然遺物のみである。出土遺物量は約950点・重量約6.3kg(7.8g/1点)をはかり、包含層中ではもっとも遺物出土量が多い。ただしローリングを受けた小破片が多く、接合率はⅢ a層と同様0.4%と極めて低い。Ⅲ b層は粘質土で水分を多くんでおり、全体的に自然遺物の出土が目立った。

自然遺物が南側に集中することはⅢ b層のうちでも南側に向けて粘性が強い土壌であることによる見せかけの偏在である可能性もあるが、人工遺物が殆どないことは明確な傾向として挙げられる。

Ⅲ c層（第98図）

Ⅲ c層からは須恵器や土師器などの7世紀～9世紀代の古代に属する遺物が出土した。出土量は調査区の南側では少なく、北東側に多い傾向がある。特にAF-28グリッドからAG-28グリッドにかけて集中して出土しており、この2グリッドで340点を数えⅢ c層全体での出土量約610点・重量約5.5kg(8.5g/1点)の半数を超える。またAF-26グリッドにも遺物集中箇所がみとめられる。

AF-29グリッド南側にもやや密な部分があることを併せると、AF-28グリッドを中心として南北方向および東西方向へ向けて遺物が集中する十字型のラインが存在することになるが、溝、畦畔等の遺構は検出されておらずその成因は不明である。なお接合率はⅢ a層、Ⅲ b層よりも高く1.6%ほどである。

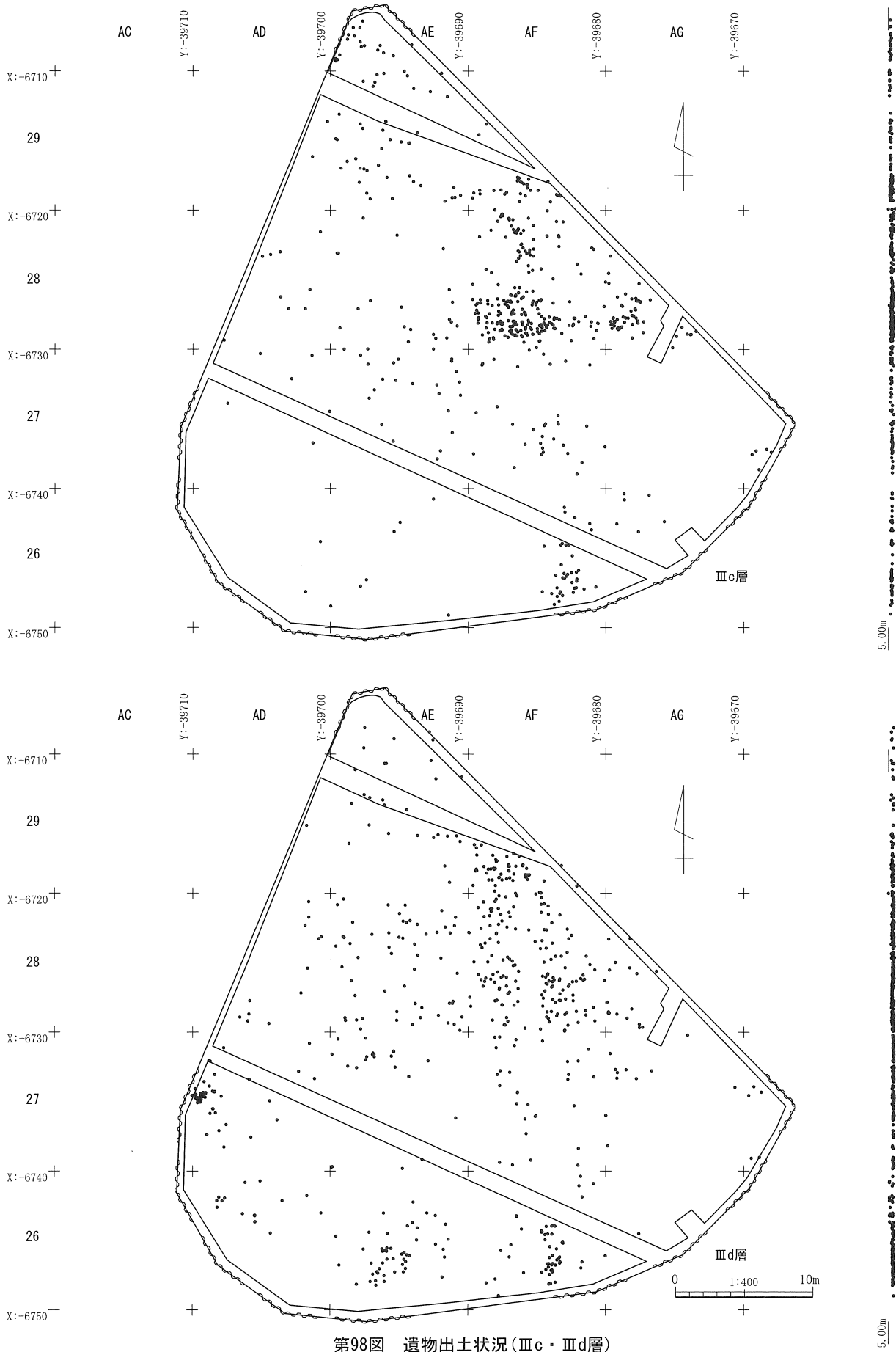
Ⅲ d層（第98図）

Ⅲ d層からは5～6世紀代を中心とした古墳時代の遺物が出土した。Ⅲ c層と同様AF-28グリッドを中心として南北方向に遺物集中のラインがあり、またAD-28グリッドにも密集して出土した箇所がある。出土遺物量は約570点・約4.6kg(8.1g/1点)であり、南北方向の遺物集中

第3節 遺物とその分布

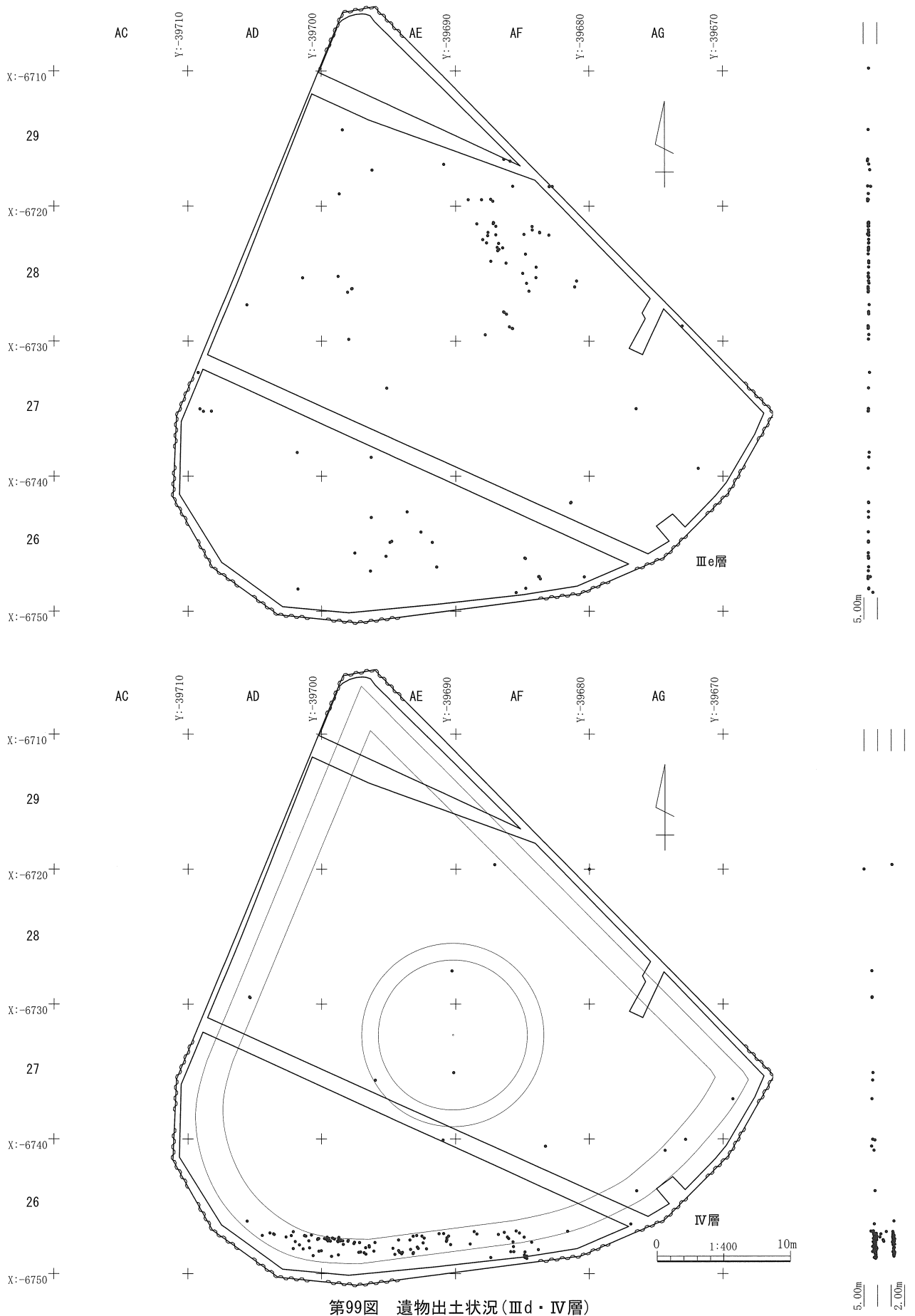


第97図 遺物出土状況(Ⅲa・Ⅲb層)



第98図 遺物出土状況(Ⅲc・Ⅲd層)

第3節 遺物とその分布



第99図 遺物出土状況(Ⅲd・Ⅳ層)

のラインはⅢc層における遺物集中のラインとほぼ重複している。この南北のラインは中心に空白がありその両脇に遺物が出土しているような状態を呈している。

この空白部分にはⅢd層堆積当時、畦畔のような周辺より盛り上がった遺構等が存在していたことが要因とも考えられ、一部土層堆積状況や酸化鉄、マンガンの沈積状況から畦畔状遺構が存在していた可能性をうかがわせる部分もあったが、遺構として平面的に捉えることができなかった。その成因は今後の調査も含め今後の課題としたい。なお接合率は他の層に比べればもっとも高かったが、2.4%ほどである。

Ⅲe層（第99図）

Ⅲe層からは弥生時代～古墳時代の遺物が出土したが、全体的に散漫な出土であり、Ⅲe層全体で出土量は約90点・約0.8kg(8.7g/1点)であり、調査区全体での3%を占めるに過ぎない。Ⅲc層、Ⅲd層同様にAF-28グリッドにおいて若干の遺物集中が認められる。

Ⅳ層（第99図）

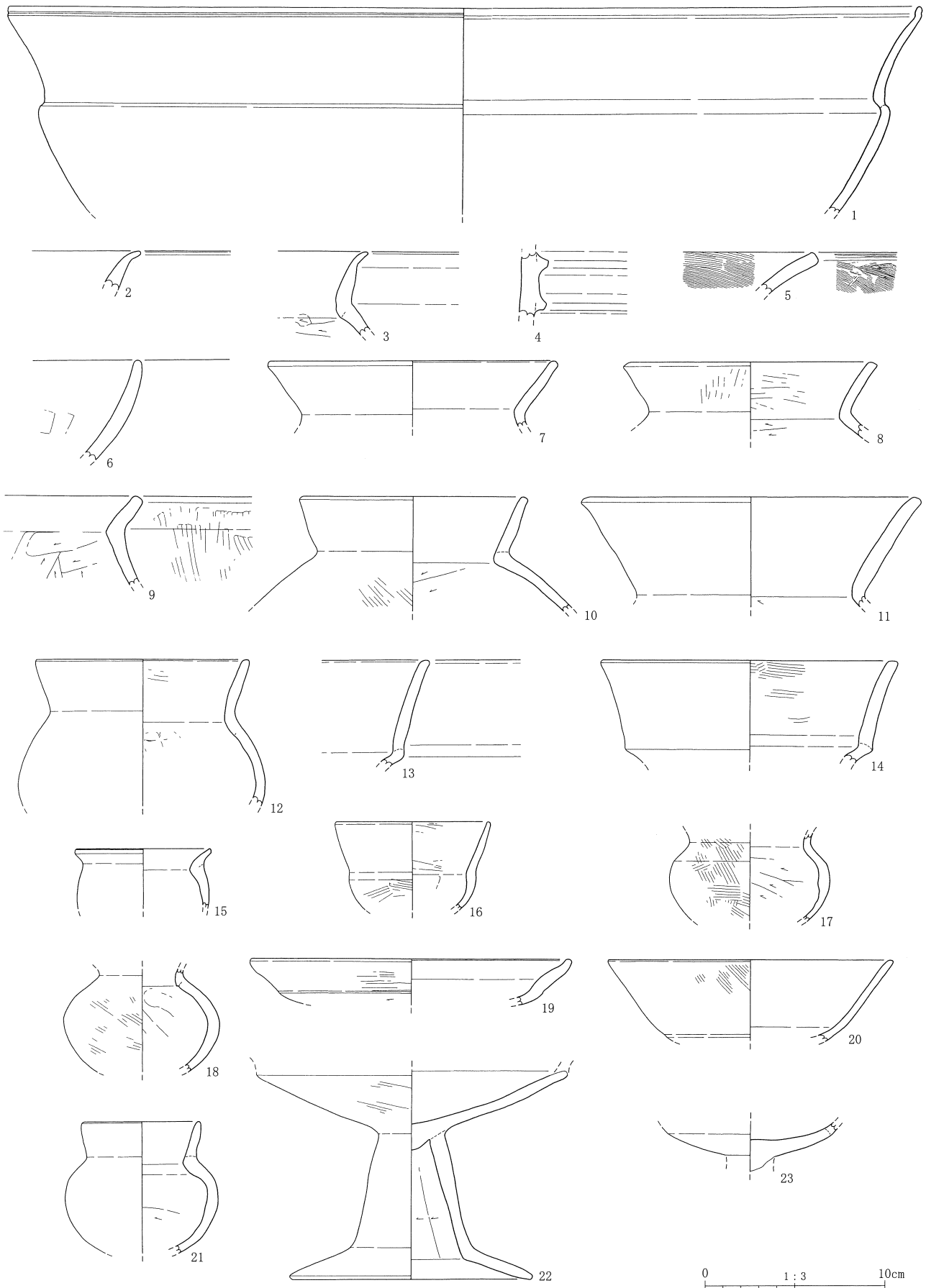
Ⅳ層からは縄文晩期～弥生時代の遺物が出土したが、平面的にはⅣ層上面までしか掘削しておらず、工事により擁壁が設置される部分のⅣ層確認トレンチしか深く掘り下げていないことから出土量は92点・1.08kg(11.8g/1点)と少ない。調査区南側に集中し、レベル的には標高4.3m前後と標高2.9m前後に分けられる。前者は弥生時代の遺物であり、後者は縄文時代の土器、石器である。トレンチの幅が限られていることもあり周辺への分布の広がりやその要因は不明である。

2. 包含層出土の遺物（第100～103図、図版57～59）

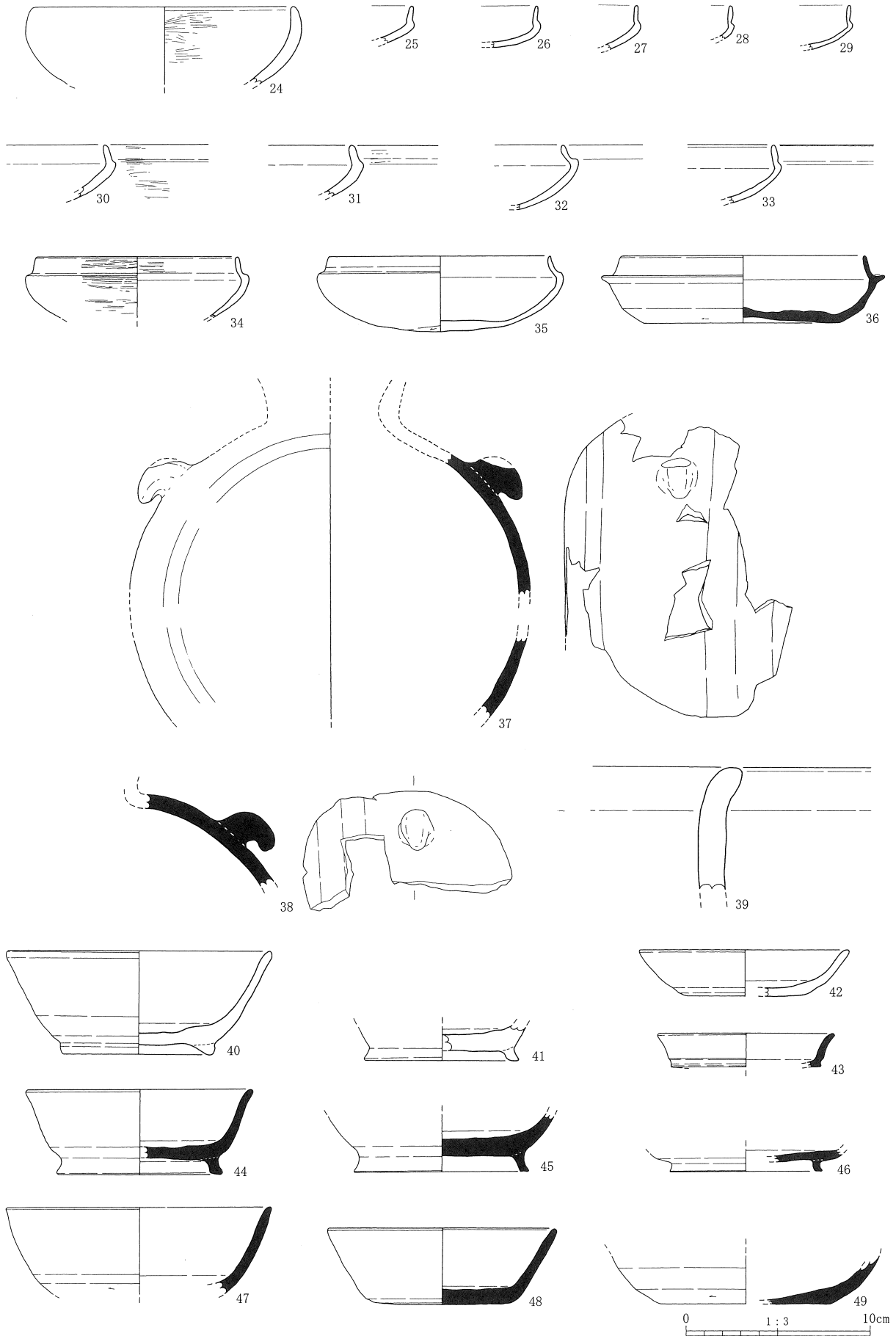
1は縄文時代の土器、2～6は弥生時代、7～23は古墳時代初頭の土器、24～38は古墳時代後期、39～49は古代の土師器・須恵器、50～82は中世（及び時代不明）の出土遺物である。

第100図1は縄文時代晩期の鉢形土器で、口唇外面には1条の沈線が施され、頸部で屈曲する。復元口径は50.4cmと大きい。縄文時代の遺物としては他にⅣ層から黒曜石製のチップ・剥片が数点、また製品としては図示していないものの黒曜石製のスクレイパーが出土している。これは縦長剥片を素材としており、左側縁に刃部を形成する。右側縁には刃こぼれ状の使用痕が観察できる。

2は弥生土器の甕口縁部で、わずかに外反する。3は弥生土器の壺で内器面の頸部以下にはヘラケズリを施す。4は弥生土器の壺で、断面台形の突帯を2条貼り付けている。5・6はⅣ層出土の弥生土器である。5は甕の口縁部で内外面ともにハケメ調整がよく残る。6は鉢で、厚さが口縁まで殆ど変わらない。7は甕口縁部で、外器面には煤が付着している。8は甕の口縁部で、内外器面にハケメを施す。9は甕口縁部で、口唇部から頸部までがやや短い。10は壺で、口縁が弱く内湾し、膨らんでいるように見える。11は頸部から長く直線的に立ち上がる壺である。12は体部に丸みを持った小型の壺で、表面が摩耗し、調整は不明。13・14はともに二重口縁の痕跡が残る壺口縁部で、同一個体と見られる。しっかりとした屈曲部を持つ。15は小型の甕で口縁が短く立ち上がる。16は小型丸底壺で、口縁部が長い。17・18・21は胴



第100図 調査Ⅱ区包含層出土遺物(1)



第101図 調査Ⅱ区包含層出土遺物 (2)

部が球形に近い器形となる小型の壺である。内器面ではヘラケズリ、外器面はハケメ後ナデ調整を行う。18は頸部の接合痕が確認できる。19は壺口縁部で外器面に赤彩が見られる。20は高坏で、坏部が深く、体部の屈曲部分まで残存している。22は高坏で、脚部の屈曲は比較的緩やかである。23は高坏の坏部で、脚部との接合は坏底部の突起を嵌め込むようにしたと見られる。第101図24は土師器の坏で、口縁は内湾している。25～35は須恵器蓋坏の形を模した、模倣坏と呼ばれる坏である。蓋に対する受部を持ち、内外器面を丁寧なヘラミガキで調整する。数点は黒色処理技法を確認できる。計11点を図示しているが、個体数としてはもっと少ない。35は復元口径12cm、全形がわかり、外底面に静止ヘラケズリを施すなど、須恵器坏と変わらない技法で作られる。36は須恵器坏で、蓋受けは長くほぼ直立する。37・38は須恵器の提瓶で、同一個体と見られる。小さな牛角状の把手を持つ。口縁部の形状は破損により不明である。39は甕で、口縁部で外反する。40・41は土師器の高台付坏である。器形は須恵器と変わらない。41は残存している全面に赤彩を確認できる。42は坏で、口縁が開き、器高は低い。43～49は須恵器である。43は二重口縁壺で、幅のある沈線で突帯を作りだし、屈曲部をより強調している。44～46は高台付坏である。44・45は高台との接合部が底径とほとんど変わらないのに対し、46は高台との接合部は底径よりかなり小さい。47～49は高台の付かない坏である。47は坏部が深く、高坏の可能性がある。48の底部はヘラ切り後ナデ、49は若干上げ底になる。

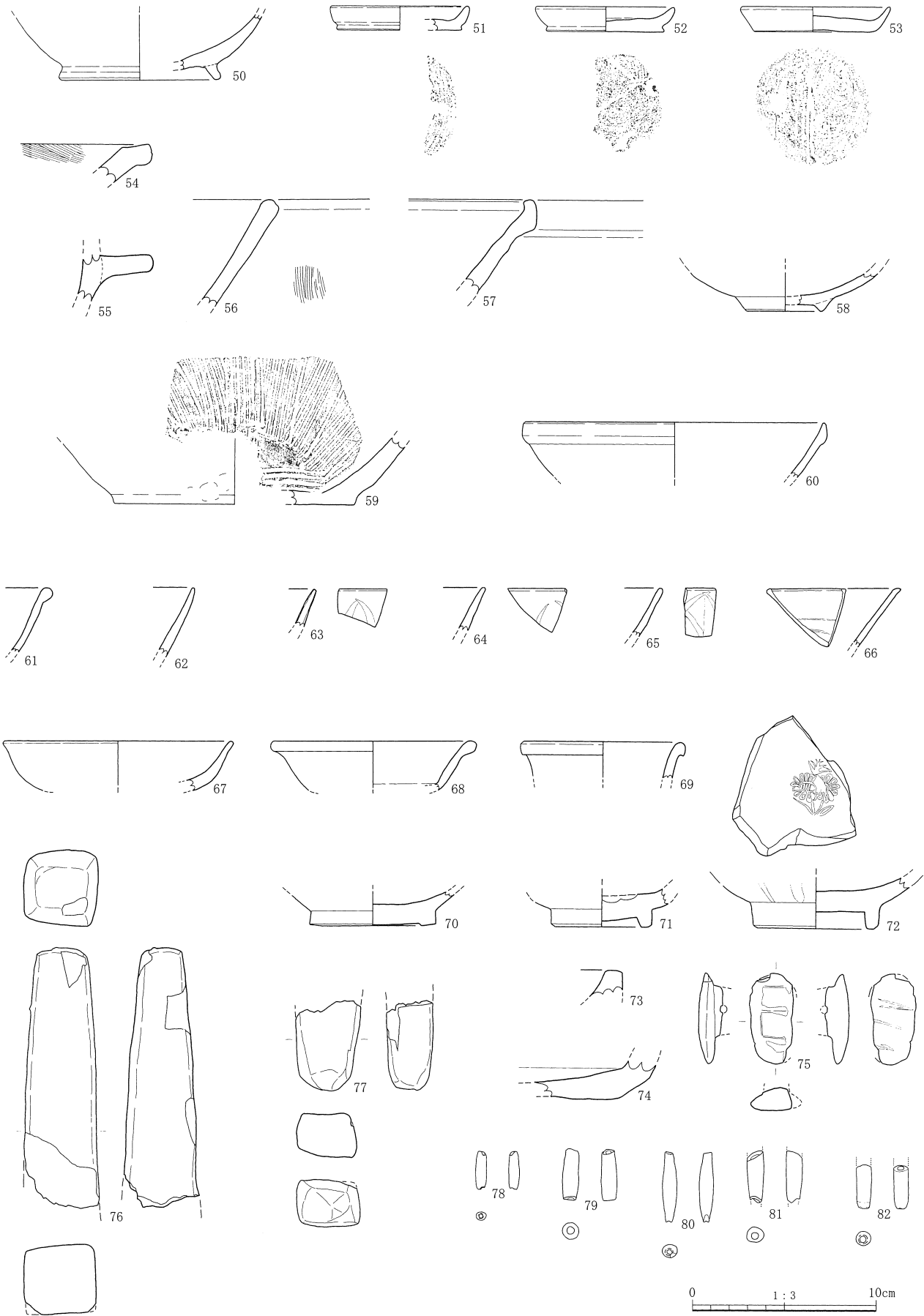
第102図50は瓦器碗の底部で、高台が大きい。胎土・器表面がともに黒い。51～53は口径7.5cm前後、器高1.3cmほどの土師器皿で、51は底部糸切り離しのみ、52・53は底部糸切り後、板状圧痕が残る。54は瓦質土器の鉢で、内器面をハケメ、外器面をナデ調整で、丁寧に仕上げている。55は瓦質土器羽釜で、鏝の下面には煤が付着している。56は播鉢で、ハケメ調整の後播目を入れている。57は須恵質土器で、内器面を細かくナデることから、捏ね鉢か。58は瓦器碗で断面三角形の高台を貼り付けている。59は播鉢底部で、内器面の底面にはまばらに、体部には密に播目が入る。

60は白磁玉縁碗で、玉縁は大きめである。61～68・70～72は青磁碗である。61は玉縁の口縁部で、内外器面ともに貫入が入る。62にも密に貫入が見られる。63～65は蓮弁文を施す口縁部で、63・64は鏝の有無は不明である。65は鏝のある蓮弁を持つ。66は内器面に毛彫りで数本の文様がある。67・68は小型の碗で、どちらも無文である。69はほぼ直立する壺口縁と見られる。70は高台内の削りがわずかで、底部は厚くどっしりした印象を受ける。72は見込みにスタンプで花文を施した碗で、外器面には蓮弁の一部がある。

73・74は滑石製石鍋の口縁部と底部で、どちらも外器面には煤が付着し使用の痕跡を残している。75はバレン状の滑石製品である。石鍋の縦長瘤状把手を残し、長楕円形に加工している。煤の付着も見られる。石鍋の補修具か。

76・77は丁寧なナデで表面を調整後焼成した土製品で、機能・用途や時代等、不明である。どちらも芯まで須恵器に似た灰色の色調で、同一個体か。76は残存長さ14.2cmで断面はほぼ方形、77はやや扁平の断面である。

78～82は管状土錘である。直径が変わらないもの、中央を膨らますものなどがある。いずれも焼成温度は低く、橙色・赤褐色系の発色で表面の摩滅や剥落が著しい。



第102図 調査Ⅱ区包含層出土遺物(3)

第9表 調査Ⅱ区出土土器観察表

挿図番号	種別	器種	グリッド	層位	法量 (cm)			色調			器面調整			胎土	備考
					器高	胴径	口径	口径	底径	外面	内面	外面	内面		
100 1	縄文土器	鉢	AF-26	IV	(11.4)				黄灰、浅黄	黒	ナデ	ナデ	1mm大の石英、角閃石を多く含む。		
100 2	弥生土器	甗	AF-28	III c	(2.1)			灰白	灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm大の石英、長石、雲母をまばらに含む。			
100 3	弥生土器	壺	AG-28	III e	(4.6)			にぶい黄橙	灰白	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm以下の輝石、1mm大の石英、雲母、赤色粒を少量含む。			
100 4	弥生土器	壺	AG-27	III a	(3.6)			浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm以下の長石、角閃石、雲母をまばらに含む。			
100 5	弥生土器	甗	AE-27	IV	(2.3)			にぶい橙	にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	1mm大の石英、輝石、雲母を多く含む。			
100 6	弥生土器	鉢	AF-29	IV	(5.4)			灰黄	灰黄	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、工具ナデ	1mm大の石英、雲母を多く含む。			
100 7	土師器	甗	AE-26	III d	(3.6)			橙	オリブ黒	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm大の石英を多く含む。			
100 8	土師器	甗	AF-28	III c・e	(4.2)			黄灰	黄灰	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の雲母、輝石、1mm大の石英、長石を少量含む。			
100 9	土師器	甗	AG-27	III d	(4.9)			浅黄	浅黄	ハケメ後ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm大以下の石英、輝石をまばらに含む。			
100 10	土師器	壺	AE-29	III d・e	(6.2)			橙	橙、にぶい橙	ハケメ、ナデ	ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の石英、雲母、赤色粒をまばらに含む。			
100 11	土師器	壺	AD-27	III d	(6.1)			にぶい橙、にぶい黄橙	灰	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm大の赤色粒を僅かに、1~3mm石英をやや多く含む。			
100 12	土師器	壺	AF-28	III c・d	(8.0)			にぶい橙、橙	にぶい橙	不明	不明	1mm大の石英、長石、赤色粒を少量含む。			
100 13	土師器	壺	AF-26	III d	(5.7)			浅黄	浅黄	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm以下の石英、赤色粒をまばらに含む。			
100 14	土師器	壺	AF-26	III d	(5.6)			にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ	1mm以下の石英、赤色粒をまばらに含む。			
100 15	土師器	甗	AF-28	III c	(3.3)			にぶい黄橙	橙	不明	不明	1mm大の石英、雲母、赤色粒を少量含む。			
100 16	土師器	壺	AH-27	III d	(4.9)			にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、ハケメ後ナデ	ナデ、ハケメ後ナデ	1mm大の石英、長石、雲母をやや多く含む。			
100 17	土師器	壺	AE-28	III d	(4.9)			灰黄	灰黄	ハケメ、ナデ	ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の長石、輝石、雲母をまばらに含む。			
100 18	土師器	壺	AE-27	III d	5.7			にぶい橙、橙	にぶい橙	ハケメ後ナデ	ヨコナデ、指オサエ、ナデ	1mm以下の長石、赤色粒、2mmの石英を疎らに含む。			
100 19	土師器	壺	AF-29	III d	(2.5)			灰黄、赤褐	灰黄、黄灰	ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヘラミガキ	1mm以下の石英、長石、輝石を少量含む。	赤彩		
100 20	土師器	高坏	AD-28	III d	(4.4)			橙	橙	ハケメ	不明	1mm以下の長石、赤色粒をわずかに含む。			
100 21	土師器	壺	AF-27	III d	(7.2)			灰黄	灰黄	不明	不明	1mm以下の石英をまばらに含む。			
100 22	土師器	高坏	AF-29	III e	(11.4)		(13.1)	にぶい黄橙	浅黄	ハケメ後ヨコナデ	ナデ、ヘラケズリ	1mm大の石英、長石、雲母を少量含む。			
100 23	土師器	高坏	AD-28	III d	(2.7)			橙	にぶい橙	不明	不明	1mm大黒色鉱物を僅かに、1mm大赤色粒を少量含む。			
101 24	土師器	坏	AG-28	III c	(4.1)			橙	橙	不明	ヘラミガキ	1mm大の長石僅かに、1mm大の赤色粒を多く含む。			
101 25	土師器	模倣坏	AF-28	III c	(2.0)			灰黄	灰黄褐	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。			
101 26	土師器	模倣坏	AG-28	III d	(2.2)			黒	黒	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	細かい白色、黒色砂粒をまばらに含む。			
101 27	土師器	模倣坏	AE-28	トレンチ	(2.4)			にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	細かい白色、暗褐色砂粒をわずかに含む。			

101	28	土師器	模倣坏	AG-28	III c	(1.8)				浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	細かい白色、黒色砂粒をまばらに含む。	
101	29	土師器	模倣坏	AG-28	III d	(2.4)			黒	黒	ナデ、回転ナデ	ナデ	細かい白色砂粒をまばらに含む。		
101	30	土師器	模倣坏	AE-28	III d	(2.9)			黄灰、浅黄	浅黄	ヘラミガキ	ヘラミガキ	1mm大の石英、角閃石、褐色粒子を少量含む。		
101	31	土師器	模倣坏	AF-28	III c	(2.7)			浅黄	灰黄	ヘラミガキ	ヨコナデ	1mm以下の石英、輝石をまばらに含む。		
101	32	土師器	模倣坏	AG-28	III c	(3.4)			浅黄橙	にぶい橙	不明	ヘラミガキ	1mm大の石英、褐色粒子をわずかに含む。		
101	33	土師器	模倣坏	AG-28	III c	(3.1)			灰黄	浅黄	不明	不明	1mm以下の長石、輝石、褐色粒子をまばらに含む。	表面 磨耗	
101	34	土師器	模倣坏	AG-28	III d	(3.3)	(10.8)		にぶい橙	浅黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	1mm大の石英、褐色粒子をわずかに含む。		
101	35	土師器	模倣坏	AG-28	III d	4.1	(12.0)		浅黄橙、灰白	にぶい橙	ヨコナデ、ヘラケズ リ、ヘラミガキ	ヨコナデ	1mm以下の石英をわずかに含む。		
101	36	須恵器	坏	AE-28	III d	3.7	13.2	10.6	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	1mm大の石英、黒色鉱物をやや多く含む。		
101	37	須恵器	埴瓶	AE-28	III d	(16.1)			灰	青灰	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	1mm大の石英を多く含む。		
101	38	須恵器	埴瓶	AF-26	III d	(6.2)			灰	青灰	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	1mm大の石英を少量含む。		
101	39	土師器	甕	AD-27	III b	(6.5)			にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	1mm以下の長石、角閃石、雲母、4mm大の石英、黒色鉱物を含む。		
101	40	土師器	高台付坏	AE-29	III c	5.6	(14.2)		にぶい橙	にぶい橙、橙	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm大の石英、長石をまばらに含む。		
101	41	土師器	高台付坏	AE-29	III a	(1.9)		(8.0)	にぶい橙	にぶい橙、橙	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の石英、赤色粒子を少量含む。	赤彩	
101	42	土師器	坏	AE-28	III b	2.5	(11.3)		橙	にぶい橙	不明	不明	1mm以下の長石、3mm大の石英をわずかに含む。		
101	43	須恵器	壺	AE-30	III c	(1.8)	(9.4)		灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の長石をわずかに含む。		
101	44	須恵器	高台付坏	AE-29	III b	4.7	(12.1)		灰	浅黄橙	回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	1mm以下の長石、黒色鉱物を含む。		
101	45	須恵器	高台付坏	AF-28	III a	(3.1)	(9.4)		明褐灰	黒褐	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	1mm以下の輝石、黒色鉱物、1mm大の長石をまばらに含む。		
101	46	須恵器	高台付坏	AE-29	III c	(1.2)		(8.2)	明オリープ灰	灰白	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の黒色鉱物をまばらに含む。		
101	47	須恵器	坏	AF-29	III d	(4.7)			明青灰、青灰	明青灰	回転ナデ、回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	1mm大の褐色粒子をわずかに含む。		
101	48	須恵器	坏	AE-29	III c	4.2	2.2	7.4	灰	灰	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、不定方向ナ デ	1mm以下の長石をわずかに含む。		
101	49	須恵器	坏	AE-30	III c	(2.6)		(9.2)	灰、灰赤	赤灰、灰赤	回転ナデ、回転ヘラケ ズリ、ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナ デ	1mm以下の黒色鉱物をわずかに含む。		
102	50	瓦器	碗	AE-28	III b	(3.5)		(8.4)	暗灰	暗灰	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	1mm以下の長石、角閃石をわずかに含む。		
102	51	土師器	皿	AE-28	III b	1.3	(7.3)	(6.7)	にぶい黄橙	浅黄	回転ナデ	回転ナデ	0.2mm大の石英、角閃石、赤色粒子をまばらに含む。		
102	52	土師器	皿	AE-27	III b	1.4	(7.5)	(6.2)	にぶい橙、橙	にぶい橙、橙	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の石英、赤色粒子をまばらに含む。	板状 圧痕	
102	53	土師器	皿	AD-28	III b	1.4	8.0	6.4	明赤褐、灰	明赤褐、灰	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ、ナデ	1mm以下の長石、黒色鉱物を少量含む。	板状 圧痕	
102	54	瓦質土器	鉢	AD-27	III b	(2.1)			灰白	灰白	ヨコナデ、工具ナデ	ハケメ	1mmまでの石英、長石を多く含む。	圧痕	

第3節 遺物とその分布

102	55	瓦質土器	羽釜	AE-27	トレンチ	(2.5)				灰黄褐	灰	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	スス 附着
102	56	瓦質土器	播鉢	AE-30		(5.8)				灰	灰	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ	ハケメ、播目	1mm以下の長石、雲母、褐色粒子をまばらに含む。 1mm以下の角閃石、1mm大の長石をわずかに含む。	
102	57	須恵質土器	鉢	AE-28 III b		(5.1)				灰	灰	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	ヘラミガキ	1mm以下の長石、黒色鉱物をやや多く含む。	
102	58	瓦器	碗	AF-27 III a		(2.1)				黒褐	灰	ナデ	ナデ	ナデ	3mm大の白色砂粒、細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	59	瓦器	播鉢	AD-27 III a		(3.7)				灰	灰	ナデ、指オナエ	ナデ	ナデ	1mm以下の長石、黒色粒子をわずかに含む。	
102	60	白磁	碗	AD-28 III d		(3.0)	(16.8)			灰白	灰白	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい黒色砂粒をわずかに含む。	
102	61	青磁	碗	AF-26 III a		(3.6)				オリープ灰	オリープ灰	オリープ黄	オリープ黄	オリープ黄	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	62	青磁	碗	AF-26 III a		(3.9)				オリープ黄	オリープ黄	明オリープ灰	明オリープ灰	明オリープ灰	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	63	青磁	碗	AG-27 III a		(2.1)				明オリープ灰	明オリープ灰	明オリープ灰	明オリープ灰	明オリープ灰	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	64	青磁	碗	AD-28 III a		(2.4)				灰白	灰白	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	65	青磁	碗	AG-27 III a		(2.7)				灰白	灰白	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	66	青磁	碗	AD-27 III b		(3.2)				灰白	灰白	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	67	青磁	碗	AF-27 III b		(2.7)	(12.8)			緑灰	緑灰	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	68	青磁	碗	AH-26 III a		(2.7)	(11.5)			灰オリープ	灰オリープ	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい黒色砂粒をごくわずかに含む。	
102	69	青磁	壺	AF-27 III a		(1.9)	(9.0)			灰	灰	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。 目立つ混入物はない。	
102	70	青磁	碗	AE-29 III b		(1.9)				灰オリープ	灰オリープ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ケズリ	細かい黒色砂粒をわずかに含む。	
102	71	青磁	碗	AG-27 III a		(2.1)				オリープ黄	オリープ黄	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい黒色砂粒をわずかに含む。	
102	72	青磁	碗	AF-26 III a		(2.8)				明オリープ灰	明オリープ灰	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	細かい白色、黒色砂粒をわずかに含む。	
102	73	滑石製品	石鉢	AG-27 III a		(1.5)					ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	石材：滑石	
102	74	滑石製品	石鉢	AE-29 III b		(2.1)					ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ、スス附着	石材：滑石	

第10表 調査Ⅱ区出土土製品・石製品観察表

挿図番号	種別	器種	グリッド	層位	法量 (cm/g)			色調		器面調整		胎土/石材	備考
					長さ	直径	幅	厚さ	重さ	表面	表面		
102	75	滑石製品	パレン状	AE-30	不明	2.5	4.9	1.3	19.70		表面	滑石	
102	76	土製品	棒状製品	AE-27	III b	4.0	14.2	4.0	260	灰色	丁寧なナデ	滑石	細粒～2mm大の白色砂粒を多く含む。
102	77	土製品	棒状製品	AG-27	III b	4.6	4.9	2.6	47	灰色	丁寧なナデ	滑石	細粒～2mm大の白色砂粒を多く含む。
102	78	土製品	土鉢	AE-28	III ab		(2.1)	0.6	0.45	赤褐色	丁寧なナデ		細かい白色、黄褐色砂粒をまばらに含む。
102	79	土製品	土鉢	AE-26	III a/b		2.8	0.9	2.05	橙色	ナデ		細かい白色、黒色砂粒を少量含む。
102	80	土製品	土鉢	AF-27	III a		3.8	0.9	1.49	橙色	ナデか		細かい白色砂粒を少量含む。
102	81	土製品	土鉢	AG-27	III a		(2.8)	0.9	1.57	橙色	丁寧なナデ		細かい黒色砂粒をわずかに含む。
102	82	土製品	土鉢	AG-27	III a		(2.4)	0.8	146	にぶい橙色	ナデか		細かい黒色砂粒を少量含む。

第 VI 章 調査 III 区の調査成果

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

第 VI 章 調 査 Ⅲ 区 の 調 査 成 果

第 1 節 層 序

調査Ⅲ区における土層堆積状況を全体的にみると、基本的に西側で隣接する調査Ⅰ区、及び東側で隣接する調査Ⅳ区と同じ様な堆積状況にあるが、調査Ⅳ区との境界には南北方向に流れる水路があり、この水路と矢板を挟んで15m程の未調査区間があるので、この間で若干の変化があるように思われる。調査では現耕作土から地下水位下にある青灰色粘土層を観察対象としてⅠ層からⅣ層まで分層し、Ⅱ～Ⅳ層についてはさらに細分を行った。

なお、このⅠ～Ⅳ層の大別と各層の細分は確認調査におけるそれとほぼ対応する。基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層は表土層で現代の水田耕作土であり、Ⅱ層は近世～近代の遺物包含層で旧耕作土である。Ⅰ層、Ⅱ層のいずれも近世の遺物を主として摩滅した土器小片、陶磁器片を少量含む。Ⅲ層以下が中世以前の遺物包含層であり、Ⅱ層途中までを表土剥ぎの対象として重機により掘削した。

Ⅱ層はⅡ-1層～Ⅱ-5層に細分した。いずれも粘性はなく、かたくしまりがある。粒子の粗い砂粒が多量に含まれる。

Ⅲ層はⅢ-1層～Ⅲ-3層までに細分され、部分的にはⅢ-3a層とⅢ-3b層というようにさらに細く分けられる。Ⅲ-1層は中世、Ⅲ-2層は古代の遺物を含む。両者とも粘性を有し、酸化鉄とマンガンの集積はⅢ-1層とⅢ-2層の層界に顕著に認められ、Ⅲ-2層上部には酸化鉄およびマンガン粒が非常に多い。

Ⅲ-3層は古墳時代の遺物を含む。Ⅲ-3a層は全体的に砂質を示し、マンガン粒を多量に含んでおり、その下位のⅢ-3b層はⅢ-3a層に比べて砂質の割合は少ない。マンガン粒を粒状に少量混入する。部分的に酸化鉄の管状斑紋を認めることができる。

Ⅳ層は調査時では地下水位下にあたり、強い粘性を示す青灰色に還元された粘土層である。土壌中には砂粒などの夾雑物はほとんどない。粘性と色調によりⅣ-1層～Ⅳ-6層まで細分した。Ⅳ-1は弥生時代後期、古墳時代、Ⅳ-2～Ⅳ-3層に弥生中期～後期の土器を包含する。下位になるに従って順次粘性が強くなる。Ⅳ-4層までは地下水位の上下変動を示すとされる酸化鉄の暈管状斑紋が目立つが、Ⅳ-5層以下では認められない。

調査Ⅰ区で弥生時代の杭列が検出されたため、確認調査22トレンチを南へ延長して深掘りし、Ⅳ層下部の状況を確認した。その結果、標高4.2m付近のⅣ-4層とⅣ-5層の間に緩やかな落ち込みを示し黒色を呈する粘土層①～③層を検出した。平面的な拡がり確認できなかったが、他のⅣ層よりも色調が暗く、また非常に粘性が強い。①層は微量の焼土、炭化物を含み、②層からは弥生時代前期の土器片が3点出土している。

調査区北側のAA-20グリッド周辺では以上の基本層序とは異なる堆積が認められ、それは基底となる粘土層の重なり方や酸化鉄・マンガンの集積について顕著である。その特徴は周辺よりも高い微高地的な様相を示すものと考えられるが、これについては弥生時代～古墳時代に属する遺構のあり方と関連すると考えられるため、次節で詳説する。

調査区を南北に縦断する確認調査22トレンチの土層堆積状況からⅣ層の傾斜の様子をみる

第1節 層序

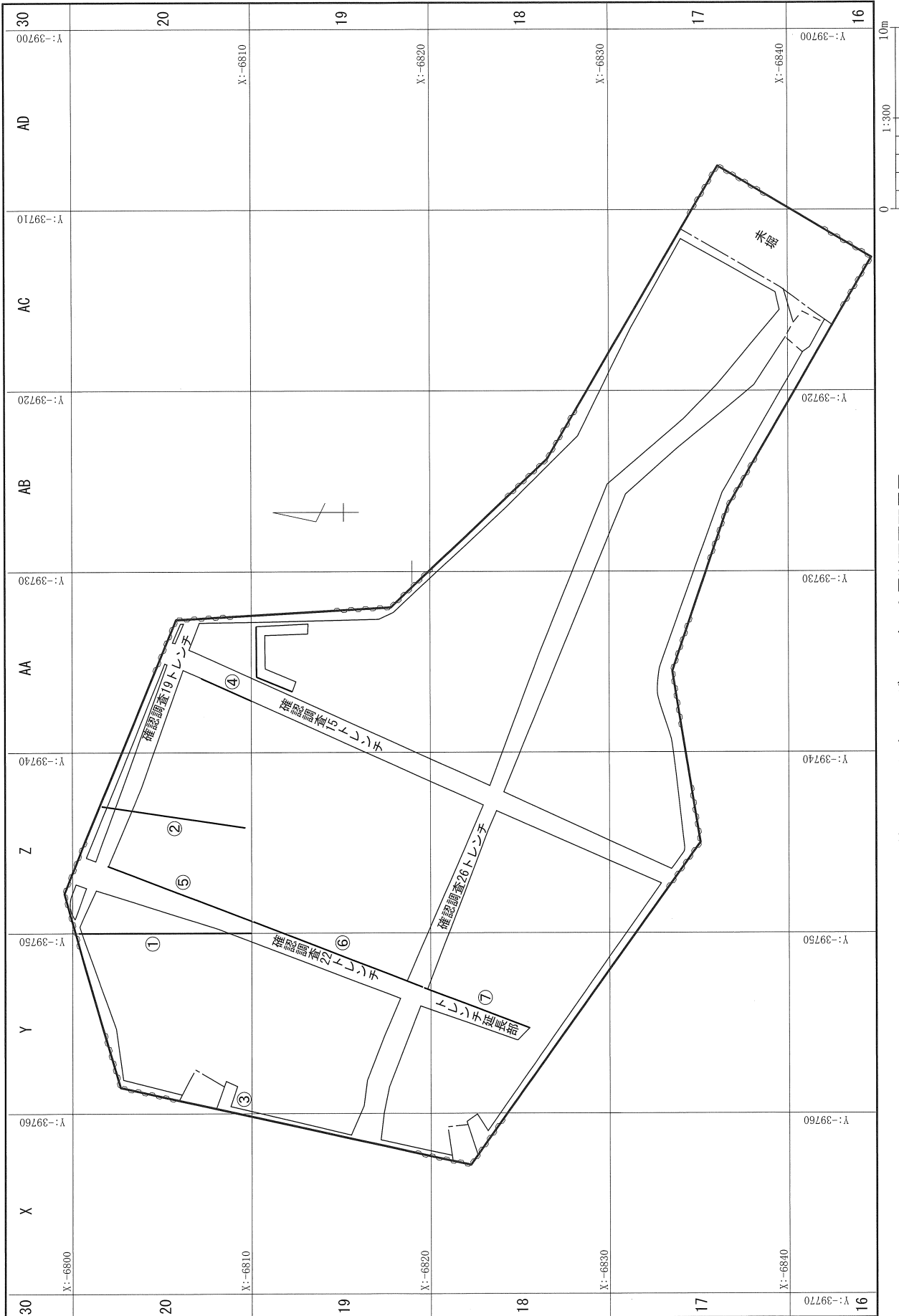
と、調査前の現況と同じく、南へ向かって緩やかに下る地形であったことがわかる。また東西方向についても、東から西へ向けて南北方向よりもさらに緩やかな傾斜を示しているようである。

層位名	色調*	特徴
I		表土層（現代の水田耕作土）。
II		近世～近代の遺物包含層で氾濫による堆積層。
II-2	にぶい黄色 (2. 5Y6/4)	しまり強く、粘性なし。粒子の粗い砂粒を多量に含む。
II-3	黄褐色 (2. 5Y5/3)	しまり強く、粘性なし。粒子の粗い砂粒を多量に含むが、白色の砂粒が多くなる。
II-4	暗灰黄色 (2. 5Y4/2)	粒子の細かい砂粒を多量に含む。
III-1	灰オリーブ色 (5Y4/2)	粒子が最も大きく、多量に含む。白色の砂粒（5mm大）を多く含む。
III-2	暗灰黄色 (2. 5Y5/2)	III-1よりは粘性が強くなる。部分的には砂質土を混入するが、微量である。上位より酸化鉄が多量に混入し、マンガンも粒状に多く含む。
III-3a	灰色 (5Y6/1)	あまりしまらず、全体的に砂質。わずかに粘性、マンガンを粒状に少量混入する。
III-3b	灰色 (7. 5Y5/1)	ややしまり強く、わずかに粘性。III-3aより砂質土の割合が多い。酸化鉄を粒状にこの層から多く含んでくる。
IV-1	暗灰黄色 (2. 5Y4/2)	しまり強く、粘性強い。きめ細かな粘性土。酸化鉄の管状斑紋を全体に多く含む。
IV-2	黄灰色 (2. 5Y4/1)	粘性強くしまる。きめ細かな粘性土。酸化鉄の管状斑紋を含むが、IV-1層よりは少ない。砂粒などの混入はない。
IV-3	黄灰色 (2. 5Y5/1)	粘性強く、しまる。IV-2に近い。酸化鉄をスジ状に含むが、IV-2よりも少ない。
IV-4	黄灰色 (2. 5Y4/1)	IV-2層よりもわずかに粘性が強いが、IV-2層よりもしまりは若干弱い。きめ細かな粘性土。IV-2層と同程度のスジ状の酸化鉄を含む。
IV-5	黒褐色 (2. 5Y3/1)	粘性非常に強く、しまる。IV-4よりはしまり弱い。きめ細かな粘性土。2cm大の暗灰色(2. 5Y4/2)をまばらに含む。
IV-6	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘性非常に強く、しまる。IV-5層よりしまる。混入物は含まない。きめ細かな粘性土。

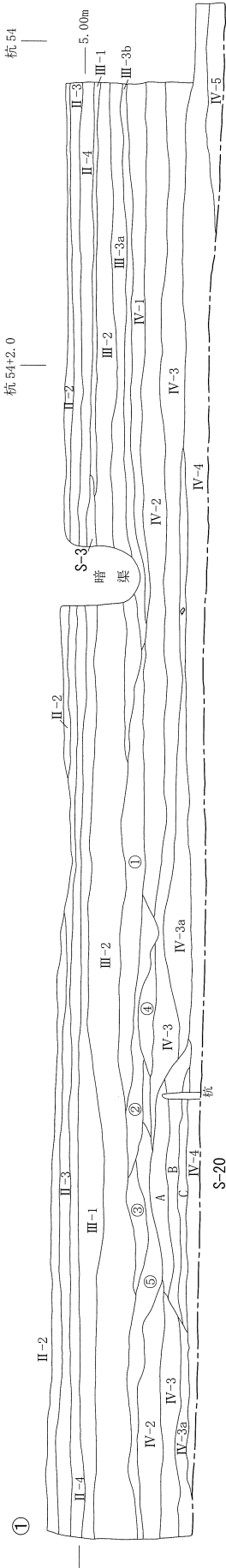
Y-20 グリッド
東側南北ベルト西壁

*小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』 日本色研究事業株式会社

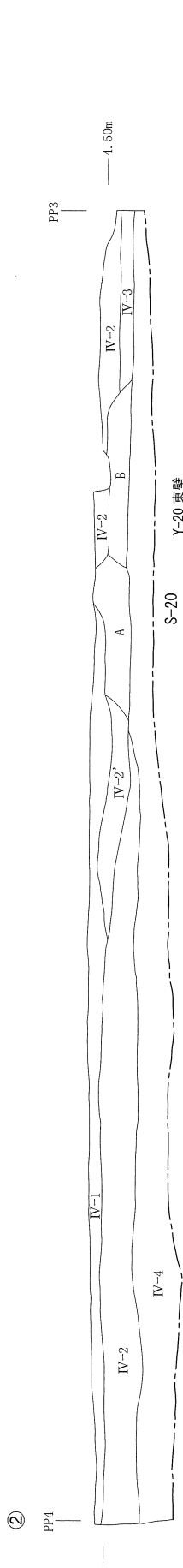
第103図 基本土層柱状図および観察表



第104図 調査Ⅲ区グリッド・土層断面図配置図



Y-20 東壁



S-20

Z-20 グリッド トレンチ東壁

Y-20 東壁

① 灰黄色土層 (Hue2.5Y 7/2)
しまりやや強く、わずかに粘性。全体的に砂質。黒褐色のマンガンを少量混入する。

② 黄灰色粘性土層 (Hue2.5Y 6/1)
①よりややしまり強く、南側にかけて粘性強くなる。部分的に砂質を多く含むところがある。

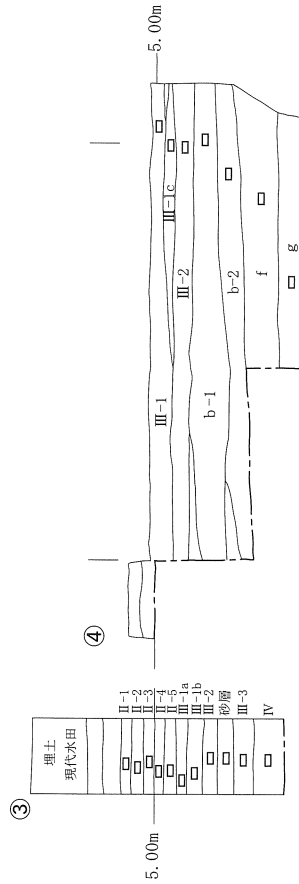
③ 黄灰色砂質土層 (Hue2.5Y 5/1)
②に近似。やや粘性強くなるが、砂質土。マンガンはほとんど含まない。

④ 灰色粘性土層 (Hue7.5Y 4/1)
しまり強く、粘性強い。砂質の割合が弱くなる。

⑤ 灰白色砂質土層 (Hue7.5Y 7/1)
しまりほとんどなく、砂質土。粒子の細かい砂を多量に含む。

IV-3a 灰色粘土層 (Hue5Y 5/1)
粘性時に強く、しまる。炭化物を微量に含む。酸化鉄を管状に上層から含む。この下位に鉄分の沈着が著しい。

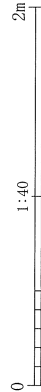
①地点 Y-19 グリッド



②地点 AA-20 グリッド 15T 西壁

Z-20 グリッド トレンチ東壁

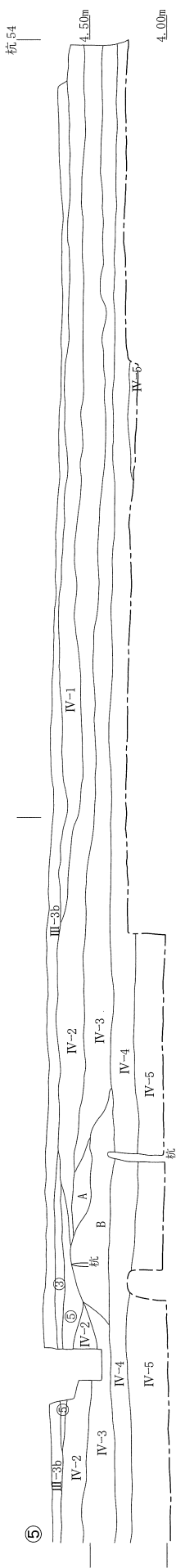
IV-3' 黄灰色粘土層 (2.5Y 4/1)
粘性あり。強くしまる。管状の酸化鉄を含む。きめ細かい砂粒を全体にわずかに含む。マンガンの混入はない。微量の炭化物を含む。



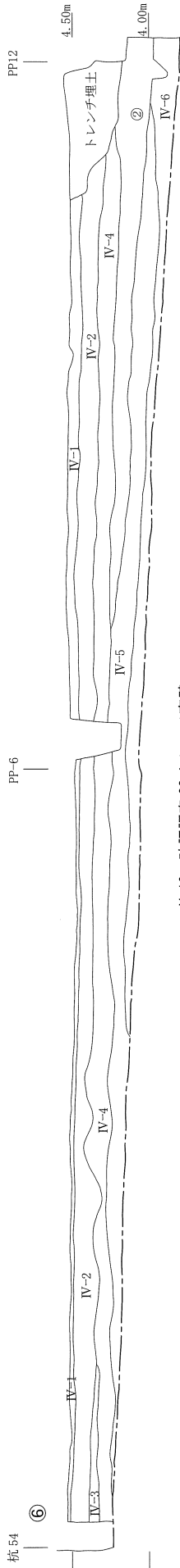
15 トレンチ西壁

b-1 灰黄色土層 (2.5Y 6/2)
ややしまり強く、わずかに粘性あり。炭化物などは含まない。砂粒の含有率が多くなる。マンガンを粒状に多く含む。

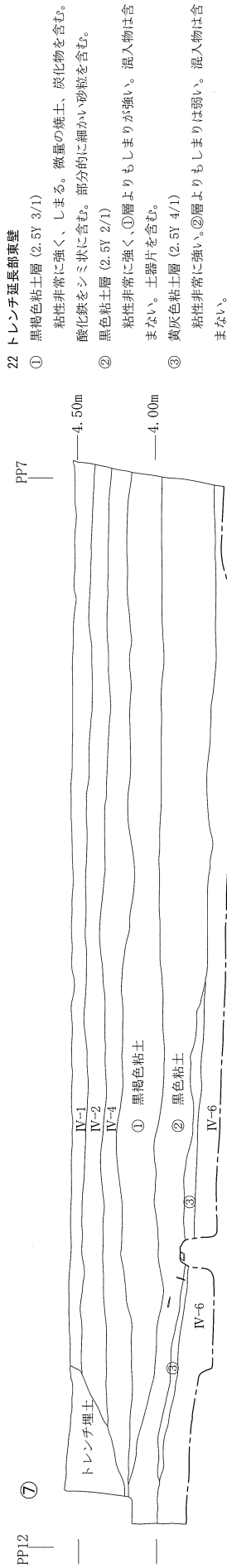
第105図 調査Ⅲ区土層堆積状況 (1)



Z-20 確認調査 22 トレンチ東壁



Y-19 確認調査 22 トレンチ東壁



Y-18 確認調査 22 トレンチ (延長部) 東壁

第106図 調査Ⅲ区土層堆積状況 (2)

第2節 遺構

本調査区において検出した遺構は、杭、畝状遺構、溝状遺構、畦畔状遺構、土坑、ピットと、祭祀遺構である。このうち祭祀遺構と畦畔状遺構1基が弥生時代及び古墳時代に属し、これを除くものは古代～中世、近世に属するものと考えられる。後者はその帰属時期を明確にしえないものが殆どであるので、以下種別ごとに述べる。また弥生時代～古墳時代の遺構については調査方法および関連する土層の堆積状況が異なるため別項をもって報告する。

1. 杭

S-12（第108図、図版60）

AA-20グリッドにて検出された。Ⅱ-4層を掘り下げた段階で杭の上部が確認され、下部の先端まで21cmある。

近世以降の杭と考えられる。

S-13（第108図、図版60）

AA-20グリッドにて検出された。Ⅱ-4層を掘り下げた段階で杭の上部が確認され、下部の先端まで23cmある。

近世以降の杭と考えられる。

2. 畝状遺構

S-1（第109図、図版60）

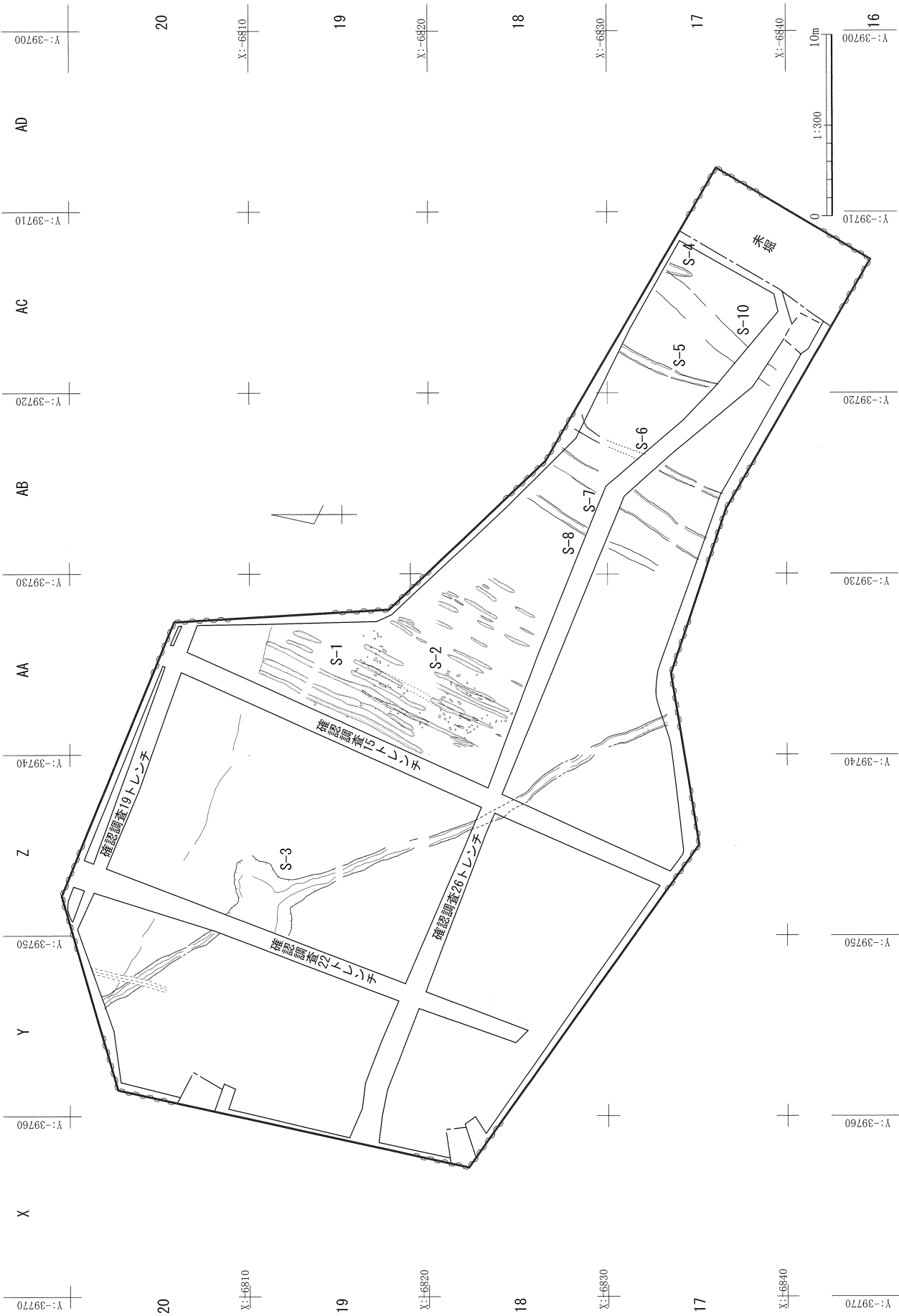
調査区のAA-18、19グリッドを中心に確認された遺構であり、Ⅱ-3層上面から検出された。南北方向に幅約20cmの浅い溝が、約1mの間隔をもって、3～4本の単位で数条あり、牛馬耕などによる犁跡か畑の畝に伴う溝にあたるものと考えられる。

また、この畝状遺構の間には形態から人の足跡と思われる痕跡が数カ所確認された。足跡には、粒子の細かい砂粒が混入していた。足跡の間隔や単位で、歩行の跡と捉えられるものは一部で、畝を横切るように西から東側の方向へ歩行したのものと考えられるものがあるが、その他は単独で不規則に残るもので明確ではない。これが、畝状遺構に伴う同時期のものか耕作等との関係は不明である。これらの遺構からは、遺物が確認できていないため、時期は特定できないが、層位的には近世末～近代である。

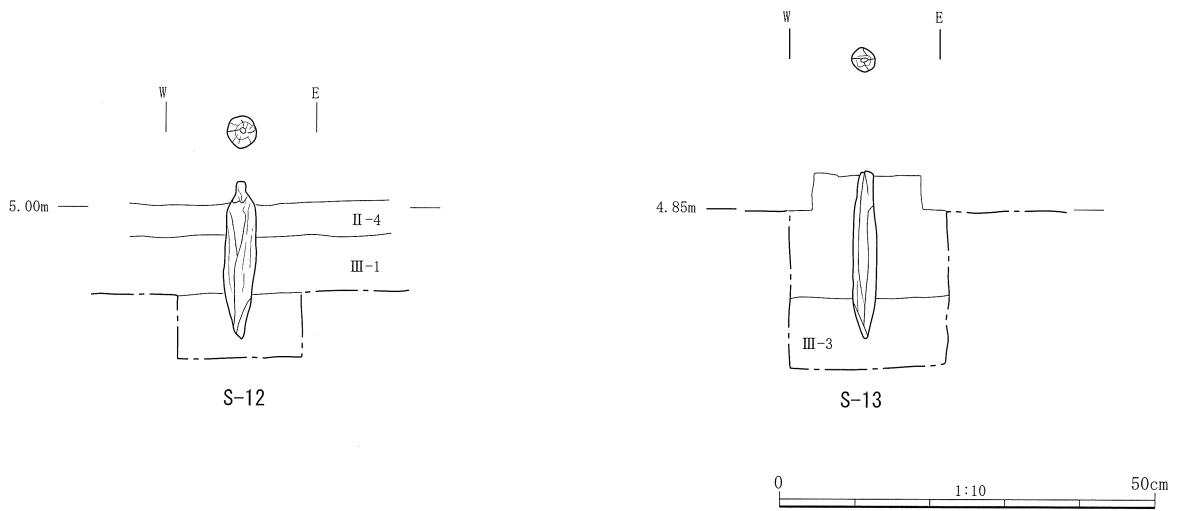
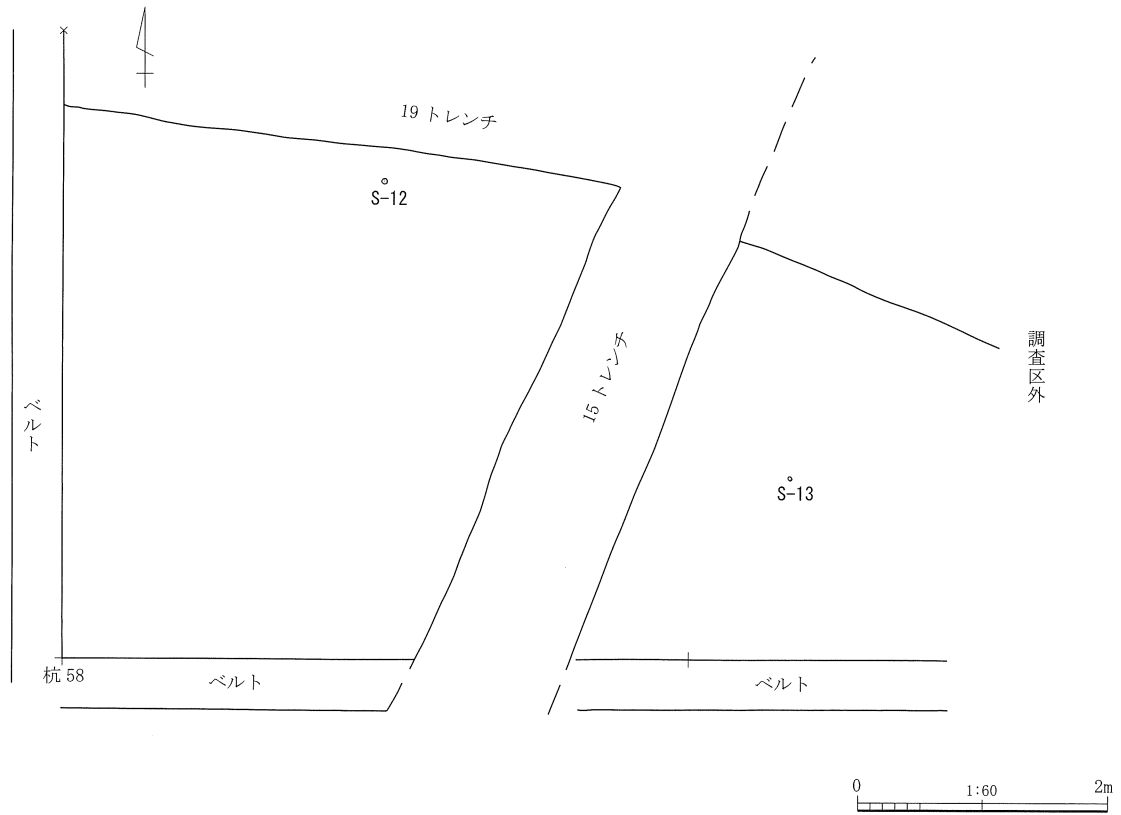
また、近世の水田跡に伴う畦畔等はベルトの断面観察でも調査区全体で確認できず、当時の田畑の区画はつかめなかったが、耕作等の方向は確認できた。

S-2（第110図、図版60）

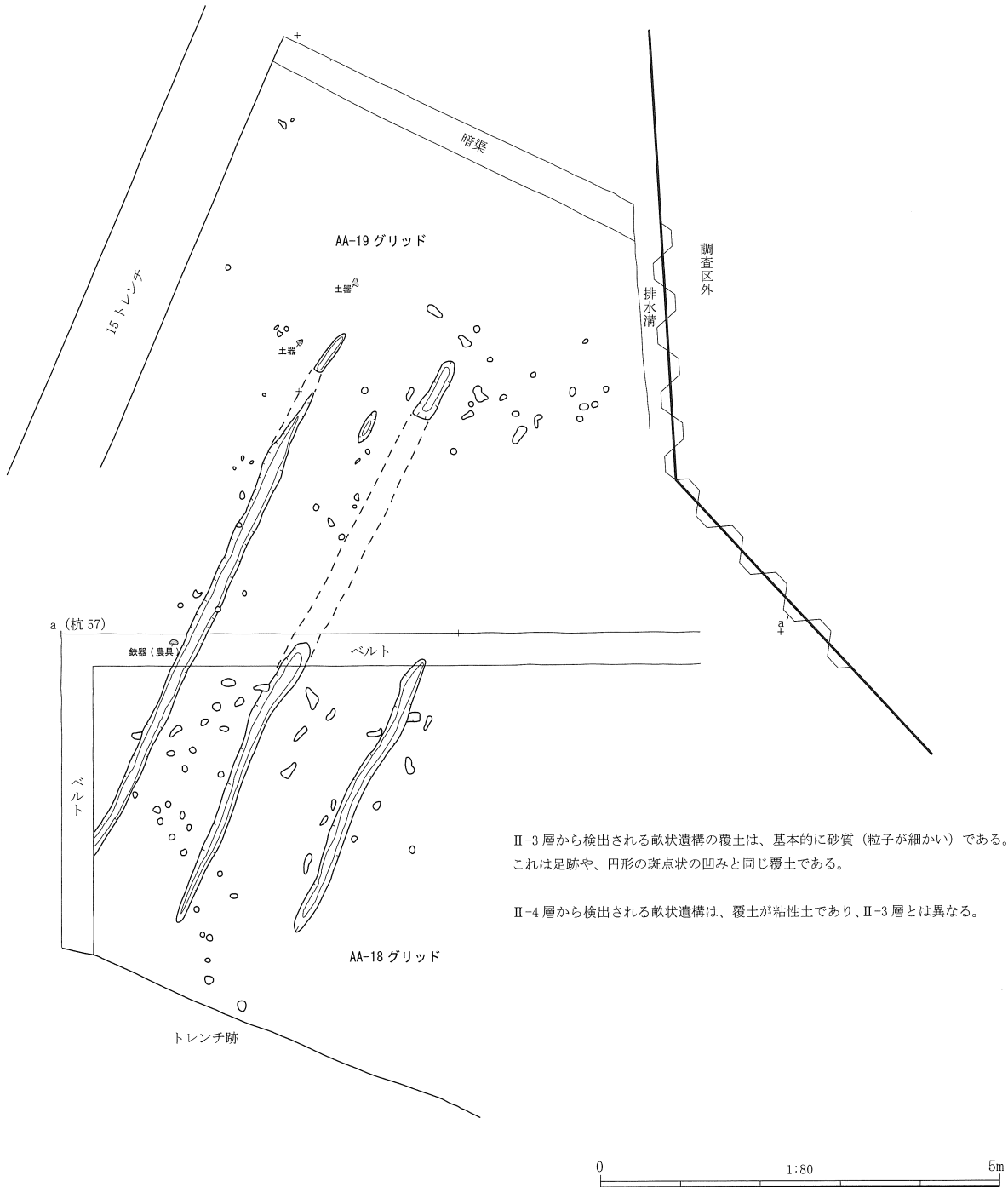
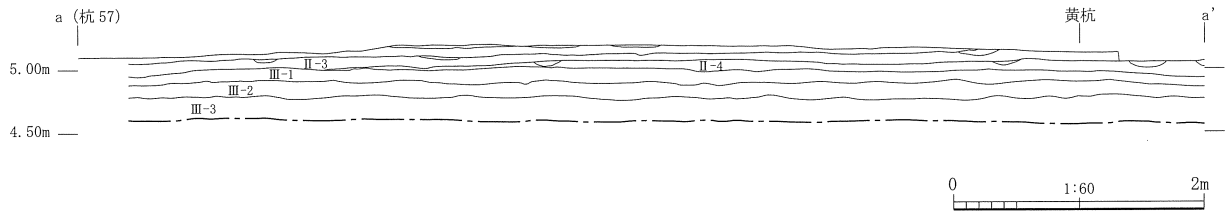
調査区のAA-18グリッド、AA-19グリッドを中心に確認された遺構であり、Ⅱ-4層上面から検出され、S-1の約10cm下位にあたる。幅や深さ、方向はS-1と同様であるが、覆土が砂質ではなく粘質という点が異なる。また間隔の単位も狭くなり、上層とのずれがある。土層断面でも上層との直接的な関連性は認められない。同じく鋤等による耕作の痕跡か畑の畝に伴う溝にあたるものと考えられる。



第107図 調査Ⅲ区遺構配置図 (中世～近世)

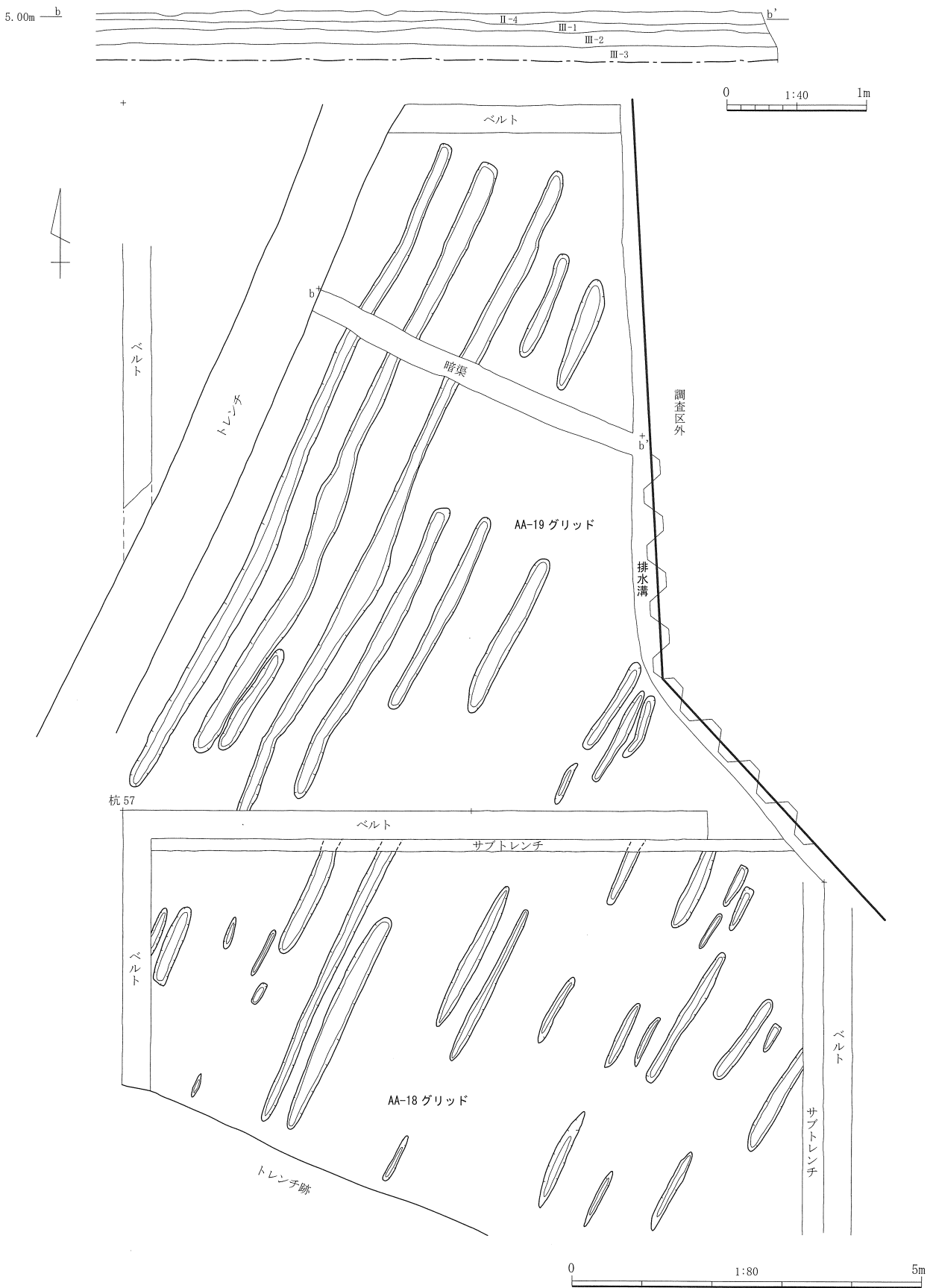


第108図 杭列配置図・杭実測図



第109図 畝状遺構 (S-1) 実測図

第2節 遺構



第110図 畝状遺構 (S-2) 実測図

層位的には近世末であると思われる。畦畔等は確認できなかったが、時期は異なってもS-1と同じ南北方向であることは、田畑の区画がほぼ同じであって、区画に沿った耕作が行われていたことによるものと考えられる。

3. 溝状遺構

S-3 (第111図、図版61)

調査区のY-20、Z-18・19、AA-17グリッド内においてⅢ-1層上面から検出された。幅約30cm、深さも10～20cmで、調査区の北西から南東にかけて細長く延びており、南側にかけて緩やかに下がっていく。しかし、この面の旧地形は、AA-20グリッドの北西角が最も標高が高く、南東にかけて緩やかに傾斜していく傾向にあり、溝は地形に沿ったものではない。水田等に伴う溝とすれば水利に反する方向ではあるが、玉名平野全体で見れば、それほど影響はない高低差なのかもしれない。

この遺構は、Z-19、20グリッドの境付近でやや不整形になり、東西方向に張り出す部分があるが、この目的は不明確である。溝の方向と直交して張り出す形状であることから、水田区画に伴う溝の交差部分である可能性もあるが、東西方向に延びる溝が検出されなかったため確実ではない。

遺物は、覆土中から中世の瓦器である摺鉢片が出土し、その時期以降の遺物は出土しなかったため、少なくとも中世以前の遺構と考えられる。

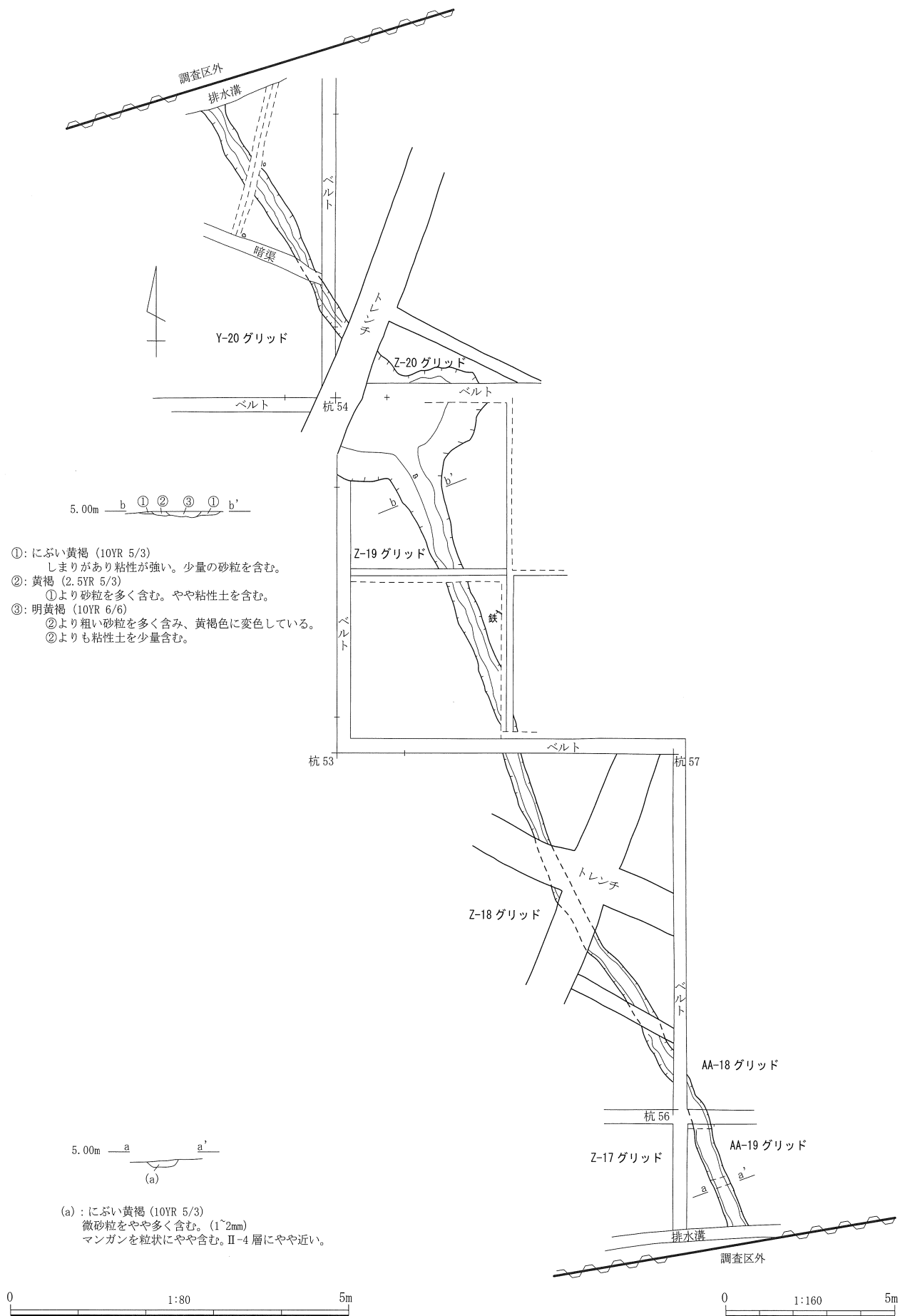
S-4 (第112図)

AC-17グリッドにて検出され、調査区の最東端に位置する。北東から南西方向にかけてほぼ直線に延びる溝状の遺構である。検出された段階で、上層からのベルトが付近になく、遺構にも接していないため、どの層から掘り込まれているのかは不明であるが、南側は上層からの耕作によって削平を受けているものと思われる。北側になるほどやや深くなる傾向にあるが、調査区内では、遺構の全体など詳細は不明である。しかし、S-5、S-6も同じような溝状遺構であり、方向や幅、深さ、覆土も近似し、これら溝と溝の間隔が約5mとほぼ同じであることから、S-4、S-5、S-6は遺構として関連性があり、同じ時期、同じ性格であった可能性が高い。いずれも遺構の中から遺物が出土していないため、時期の特定が困難であるが、全体的な層位からすれば、中世末から近世初頭にかけての遺構と考えられる。覆土は主に粒子の粗い砂であり、川の氾濫などにより埋没したか、溝内の水流に伴って砂が堆積していき埋没したものと考えられる。

南北両端の溝の高低差は5cmあり、北側から南側にかけて傾斜しているため、水も南側へ流れていたと思われる。

これら溝の間隔や単位は水田区画に伴うものと考えられるが、同じ層から検出されているS-3の溝状遺構とは方向や区画などが一致せず、ベルトなどの断面観察でも溝に伴う畦は確認できなかった。現代の水田区画とも方向が異なり、条里制の痕跡というにもやや無理があるように思われる。

第2節 遺構



第111図 溝状遺構 (S-3) 実測図

S-5 (第 112 図)

AC-17、AB-17 グリッドにて検出され、北東から南西にかけてほぼ直線に延びる溝状の遺構である。幅 0.5m、長さ 5.7 m、深さ約 6 cm の浅いもので、Ⅲ層を検出するにあたり、粒子の粗い砂が入り込むことによって確認できる状況であった。底面は凹凸が著しく、深い部分は抉れたようにして穴が開き砂が流れ込んでいる。南側にかけては削平を受けたのかさらに浅くなって消えていく。南北両端の溝底面の高低差があり、北側から南側にかけて傾斜しているため、水も南側へ流れていたと思われる。

S-4、S-6 の間にあり両方との間隔がほぼ同じである。また、溝の幅、深さ、覆土なども近似することなどから遺構として関連性があり、同一の性格があるものと思われる。

遺構の中から遺物が出土していないため、時期の特定が困難であるが、中世末から近世初頭にかけての遺構と考えられる。

S-6 (第 112 図)

AB-16、17 グリッドにて検出された。S-5、S-6 と同様に北東から南西にかけてほぼ直線に延びる溝状の遺構である。幅約 0.4m、長さ 9 m、深さ約 5 cm の浅いもので、検出面において部分的には消えているところもあり、底面と考えられる凹凸の窪みに溜まった砂によって遺構検出ができる程度であった。北側端の部分は、やや東側が広がる傾向にあるが、調査区内では全体の形状が不明である。南北両端の溝底面の高低差は 2 cm あり、北側から南側にかけて傾斜している。遺構の中から遺物が出土していないため、時期の特定が困難であるが、中世末から近世初頭にかけての遺構と考えられる。

4. 畦畔状遺構

S-7 (第 113 図、図版 61)

AB-17、18 グリッドにて検出された。幅約 1.2m、長さ 9 m を確認した。

S-8 (第 113 図、図版 61)

AB-17、18 グリッドにて検出された。幅約 1 m、長さ 8 m を確認した。

S-9

AC-17 グリッドにて検出された。

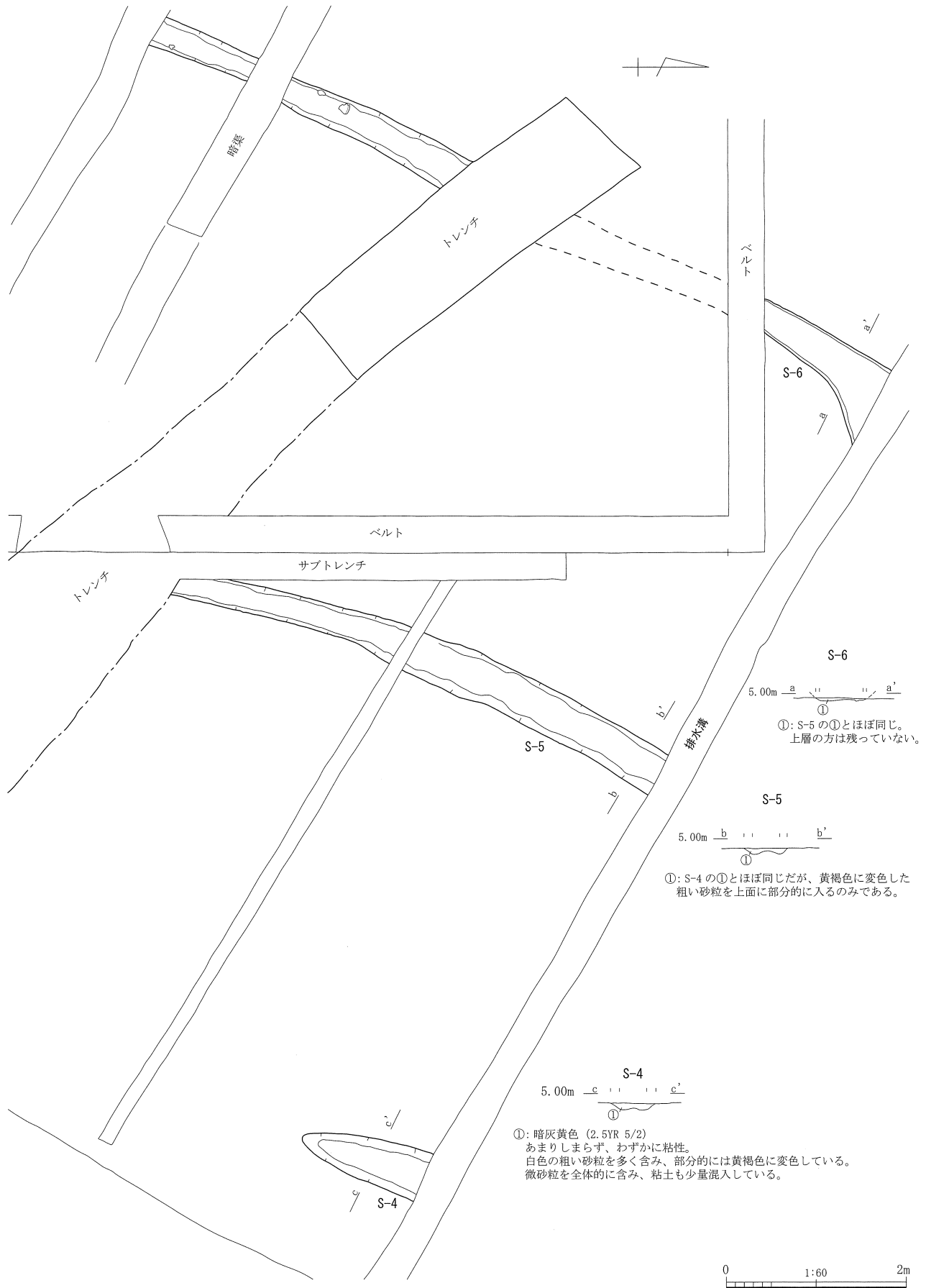
S-10 (第 113 図)

Z-20、Y-20 グリッドにて検出された。幅約 1.3 m、長さ 8.5 m を確認した。

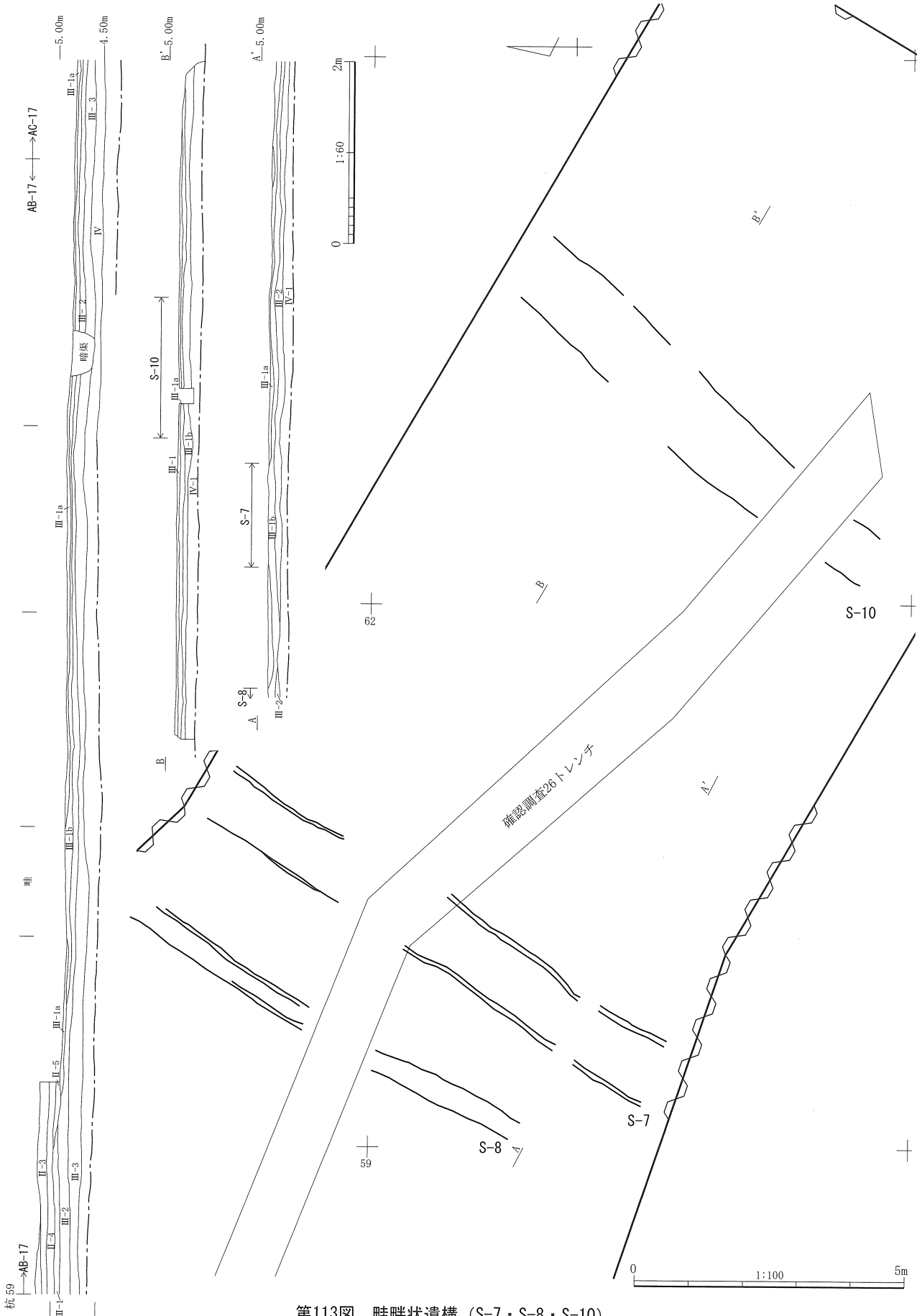
5. 土坑

S-11 (第 114 図、図版 61・62)

AA-20 グリッドにて検出した。長径 90cm、短径 54cm、深さ 30cm の楕円形を呈する。Ⅲ層を掘り下げ、自然礫石が集中して出土した範囲で、礫石を取り上げた後の下面から検出され、遺構の上部に古代の須恵器、土師器が出土しているが、検出面から掘り下げた遺構内部からは遺物



第112図 溝状遺構 (S-4・S-5・S-6) 実測図



第113図 畦畔状遺構 (S-7・S-8・S-10)

はほとんど出土しなかった。

古代の遺物が礫石と共に集中した範囲で拡散して出土しているため、この遺構に伴っていた可能性が高い。また古墳時代の祭祀遺構である S-14 を一部切った状況で確認された。

6. ピット

S-15 (第 114 図、図版 61・62)

AA-20 グリッドにて検出された。長径 15 cm、短径 12cm で深さ 8cm の楕円形を呈している。Ⅲ層を掘り下げ、自然礫石が集中して出土した範囲で、礫石を取り上げた後の下面から確認され、S-11 と同じ検出面である。覆土の断面観察では柱痕などは確認できず、遺構内部から遺物は出土しなかった。この S-15 の他、S-16、17 のピット群、S-11 を取り囲むような配置であり、覆土が似ていることなどからも、ほぼ同時期に掘られ、埋没したものと思われる。S-11 が古代の土坑とするならば、古代の段階でも微高地であり、生活空間というよりは、何らかの祭祀行為が行われていた可能性も考えられる。

S-16 (第 114 図、図版 62)

AA-20 グリッドにて検出された。長径 19cm、短径 12cm、深さ 7 cm の楕円形を呈している。S-15、S-17 のピットと類似しており、S-11 を取り囲むような配置であるため関連性が考えられる。覆土の断面観察では柱痕などは確認できず、遺構内部から遺物は出土しなかった。覆土が似ていることなどからも、ほぼ同時期に掘られ、埋没したものと思われる。

S-17 (第 114 図、図版 62)

AA-20 グリッドにて検出された。直径 14 cm、深さ 6 cm の円形を呈している。S-15、S-16 のピットと類似しており、S-11 との関連性が考えられる。覆土の断面観察では柱痕などは確認できず、遺構内部から遺物は出土しなかった。覆土が似ていることなどからも、ほぼ同時期に掘られ、埋没したものと思われる。

7. 祭祀遺構とその関連遺構

(1) AA-20 グリッドⅢ-1 層における遺物出土状況と祭祀遺構検出状況

事前の確認調査におけるトレンチにおいて、祭祀的な遺構の存在が確認されており (S-01)、その広がり把握しなければならなかったが、それは 15・19 トレンチの交差点部分において集中しており、全体的に見て遺物の出土状況に広がりはみられなかったため、当初、この範囲 (AA-20 グリッド南西部) まで祭祀的な遺構が存在することは想定していなかった。

このグリッドが微高地になるであろうことは想定していたが、周辺とは異なってⅡ-4 層を掘り下げた段階で、Ⅲ-1 層から握り拳大程度の礫石が多く出土してくると同時に、古代の須恵器片が出土しはじめた。礫石は、上層から打ち込まれた杭などの周辺でもあるので、水田耕作などによって妨げとなるために一箇所にとめて廃棄されているものと考えていた。須恵器片もこの一帯に分散した状況で出土しており、中には古墳時代の土師器と考えられる小破片も混在していた。また、東側では石製模造品である有孔円板が 1 点出土したため、確認調査の祭祀遺構 (19 トレンチ) で手捏土器と共に 1 点のみ出土していた小型の有孔円板と関連して、下

位の遺構から耕作などにより上層へ上がってきたものと考えた。確認調査で検出していた祭祀遺構のレベルと照合すると、近いレベルであったため、この礫石などを取り上げた段階で、精査し遺構検出を行うようにした。

礫石や須恵器片などの出土状況の実測、写真撮影を行った後に取り上げを行っていった。礫石の分布をみると、何らかの意図的な並びや配置が考えられなくもないが、古代の須恵器と共に古墳時代の土師器片が混在していることなどから、その後の水田耕作などによりある程度、移動しているものと考えられる。最初、礫石のみを取り上げていったが、取り上げた後を清掃すると、周辺とは異なる土質を含む部分が確認されはじめた。それは、特に古代の須恵器と土師器が重なるように集中した付近で、それを囲むように土坑状のプランが確認された。これをS-11とした。

樹木根であるS-19はAA-20グリッドにおいて検出した。確認調査時に15トレンチにおいて確認した遺構である。確認調査の際、15トレンチを重機により北側から南側に向けて掘削していたが、S-01にあたる直前の位置で、この自然木の一部が確認されていた。加工痕などもなかったため当初は、河川氾濫などによる流木のようなものと考えていた。本調査において、祭祀遺構がある15トレンチと19トレンチの交差点で、遺構掘り下げの段階で、新たに樹木根が出土してきた。

(2) 祭祀遺構の配置

調査Ⅲ区では全体的に弥生時代、古墳時代の遺物出土量は極めて少ない。そのなかでAA-20グリッドでは5m×4m程の範囲に遺物が集中する箇所が認められ、多数の土器・石製品が密集して出土した。それは2つの祭祀遺構(S-14・S-18)に分けられる。また、確認調査時には調査Ⅲ区と一部重なる確認調査15トレンチと19トレンチの交差部分で古墳時代の遺物が集中して出土し、祭祀遺構と捉えられた。また、加工のない樹木の一部も同時に出土している。

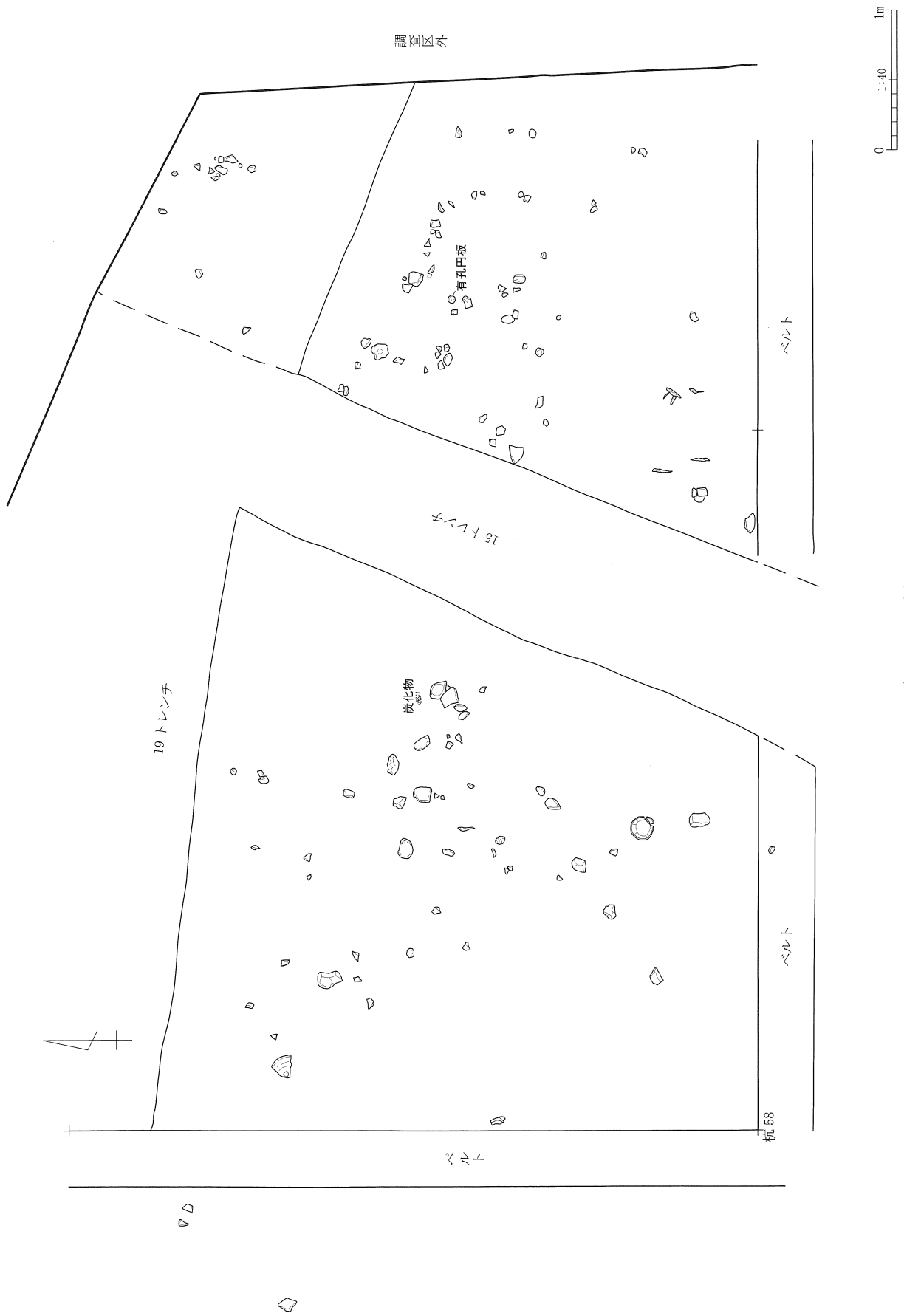
確認調査で祭祀に関連すると見られる遺物を検出したのは次の3ヶ所である。

① 15トレンチと19トレンチ交差部北側、② 19トレンチのサブトレンチ、③ 15トレンチの交差部南側の計3か所である。①は確認調査時の呼称のままS-01と呼称する。②は検出レベル、位置関係および遺物の接合状況から後述するS-18の一部であることが確実であるため、S-18の一部として扱い、実測図を合成した。③はS-18、S-14のどちらともやや離れているが出土レベルからS-18の一部として扱う。なお、確認調査時の実測図と本調査時の実測図との合成にあたっては、確認調査時に座標等の基準を記録していないことから、トレンチ壁面の位置と遺物の接合関係を元にしてしているため、若干の誤差がある。

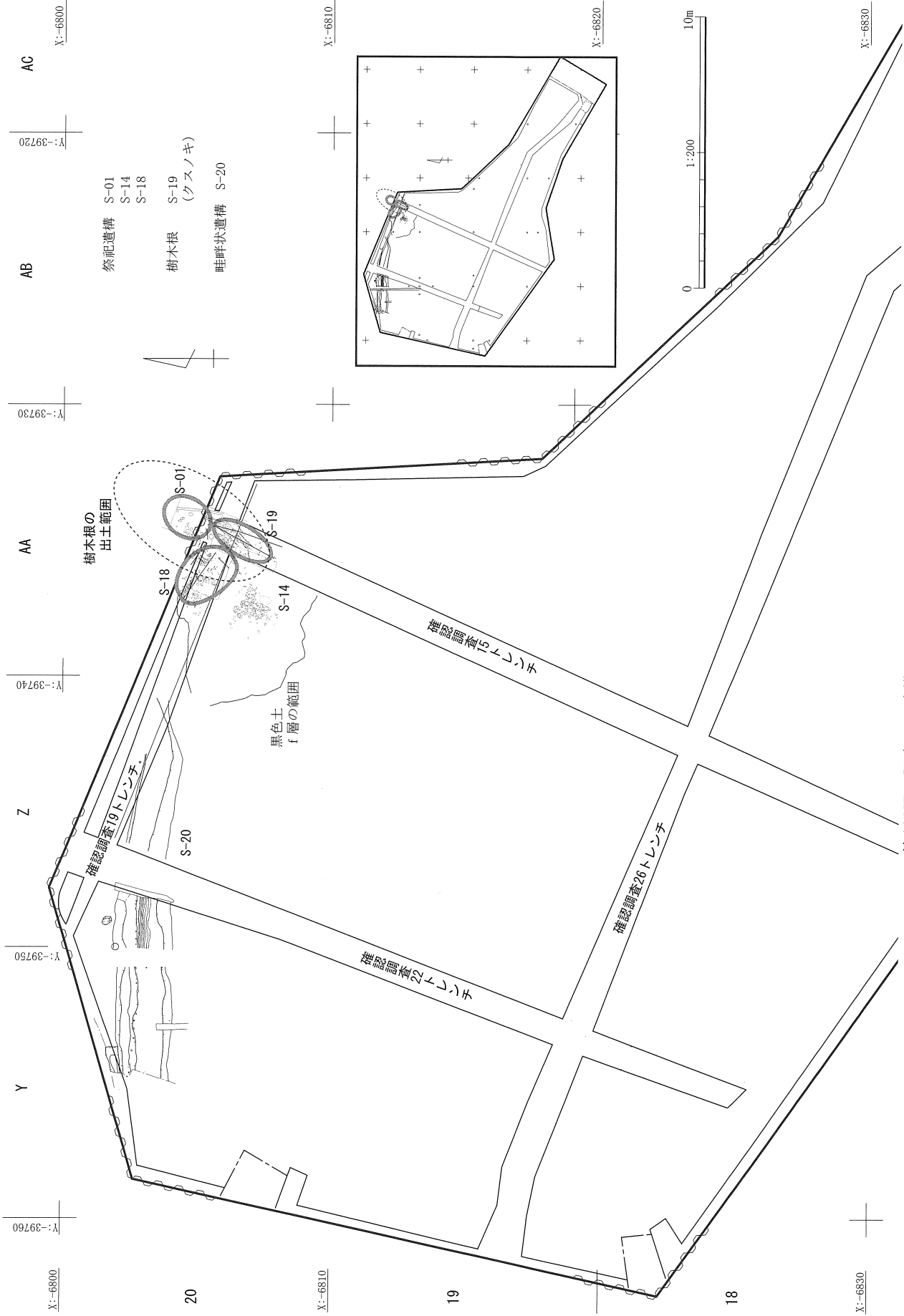
確認調査とあわせ調査Ⅲ区AA-20グリッド周辺で検出された祭祀遺構は、古墳時代のものが3基、弥生時代のものが1基であり、他に樹木根とみられる自然木がある。この祭祀遺構周辺、AA-20グリッド周辺は調査Ⅲ区における基本層序と異なる部分が認められた。

祭祀遺構は北からS-01、S-18、S-14と呼称し、S-18の東には樹木根であるS-19がある。それぞれの検出面はS-01から徐々に降下する。

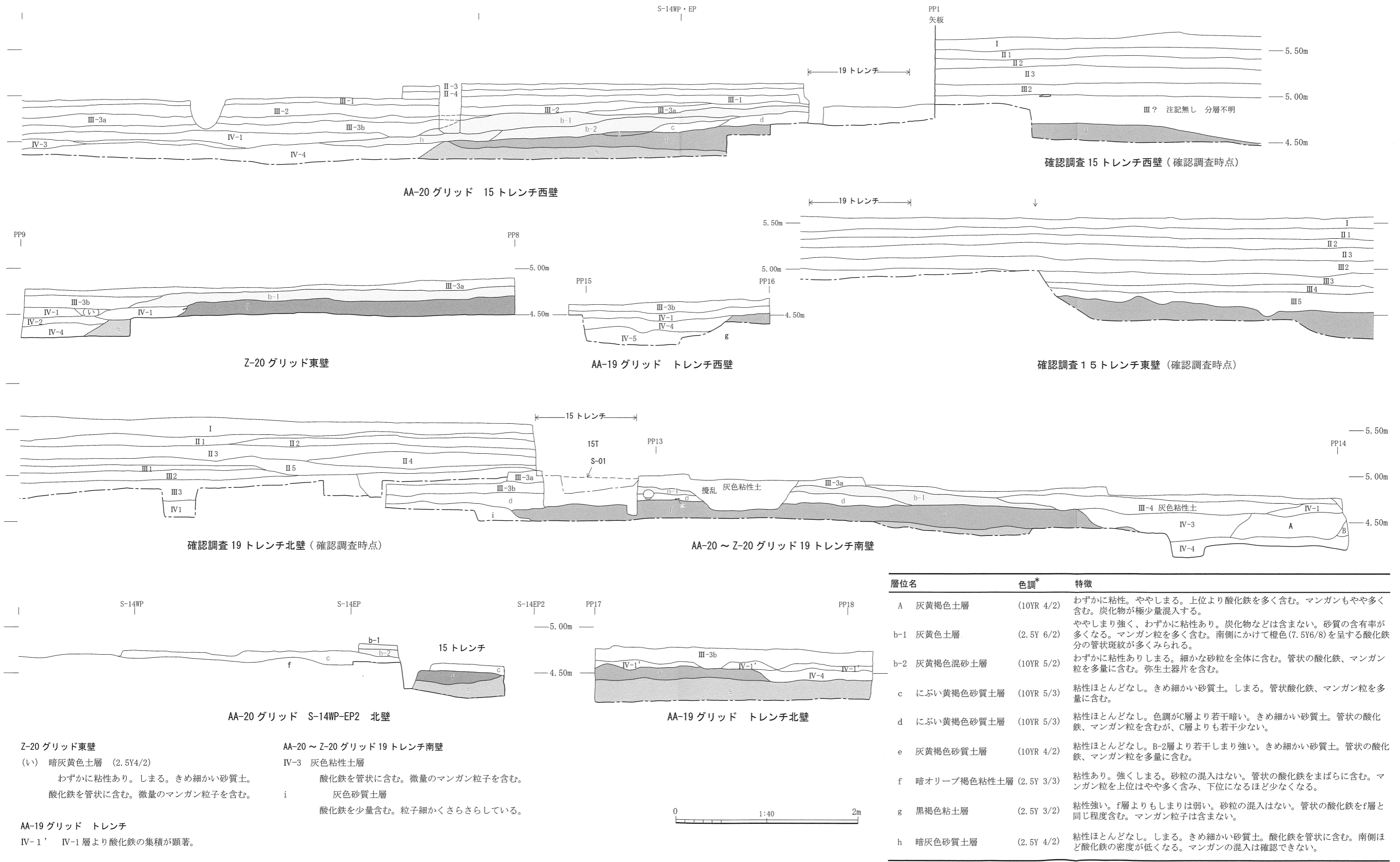
また、祭祀遺構の西側には東西方向に伸びる畦畔状遺構(S-20)を検出したが、調査範囲の制約により東側の状況は不明である。



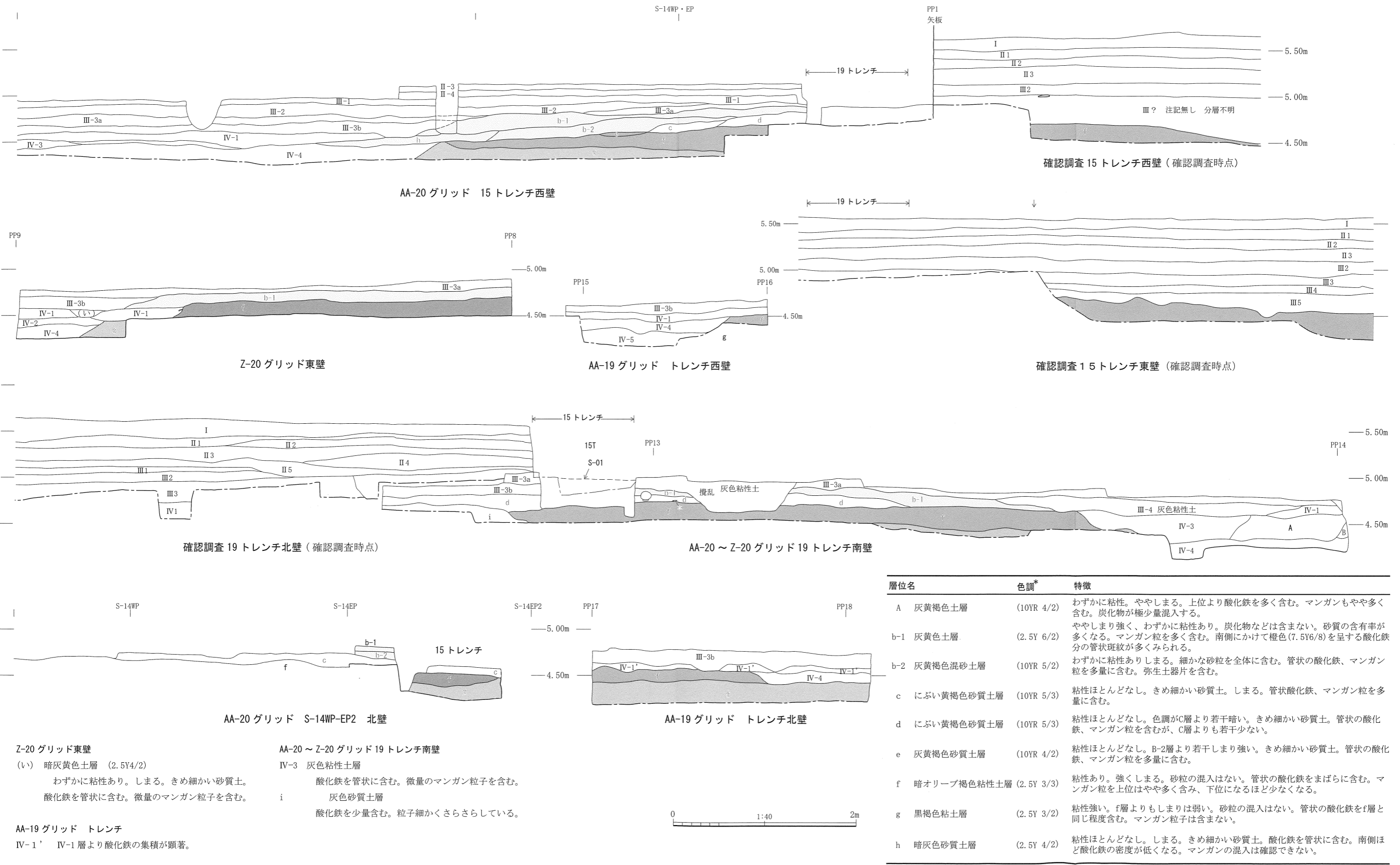
第115図 AA-20グリッド 遺物出土状況



第116図 調査Ⅲ区遺構配置図 (弥生～古墳時代)



第118図 祭祀遺構周辺土層堆積状況



第118図 祭祀遺構周辺土層堆積状況

*小山正志・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』 日本色研究事業株式会社

(3) 祭祀遺構周辺の土層堆積状況(第118図、図版77)

祭祀遺構の下部には調査Ⅲ区のお他グリッドでは認められない土層堆積(b～h層)が認められ、これらは祭祀遺構を取り巻くように広がり、AA-20グリッドを中心に南北8m、東西8mほどの範囲に分布する。下部は弥生時代、上部は古墳時代の遺物を多量に含み、また酸化鉄及びマンガンの集積が著しいという共通した特徴がある。

Ⅲ-2層及びⅢ-3a層直下に堆積するb層は古墳時代の遺物を含み、S-14を覆う土層である。b-1層とb-2層に分けられる。b-1層は砂混じりで酸化鉄の管状斑紋およびマンガン粒が非常に多く、南側へかけて顕著に見られる。b-2層もb-1層と同様に細かな砂粒を全体に含み、管状の酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。h層はb-2層の南側に連なる土層で、b-2層に土質は近いが、色調がやや暗く、b-2層よりも酸化鉄の密度が低く、またマンガン粒の混入も確認できない。

c層及びd層は確認できる範囲で南北3m、東西5m程の範囲に広がる。どちらもにぶい黄褐色を呈するきめ細かい砂質土で、管状酸化鉄、マンガン粒を全体に含むが、d層はc層に較べやや暗い色調を示し酸化鉄、マンガンの量も少ない。c層はb-2層と同等の割合で酸化鉄、マンガン粒を含むがややしまりが弱い。c層及びd層は古墳時代の遺物を含み、S-18の覆土である。e層は灰黄褐色を呈する砂質土で、色調の他はc層とほぼ変わらない。

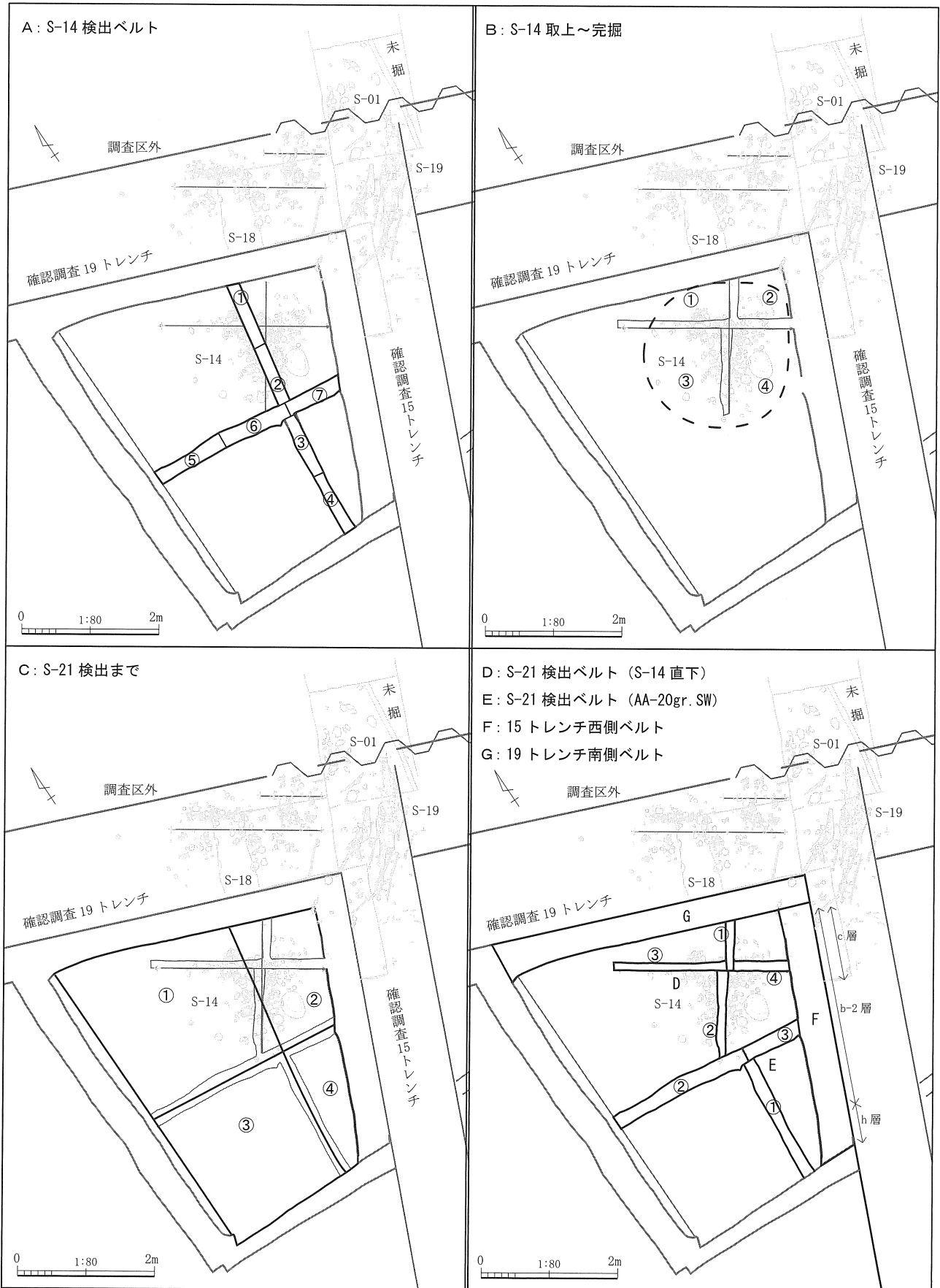
f層は暗オリーブ褐色を呈するやや粘性を帯びた土層で、確認調査19トレンチ付近が最も厚く、北及び南へ向けて徐々に薄くなりながら傾斜する。f層は上位のb～e層と異なり砂粒の混入や砂質の部分はみられない。酸化鉄の管状斑紋も疎らであり、マンガン粒はその上部にやや多く含むが、下位になるほど少なくなる。f層の上面および上部には弥生中期の土器が密集して出土した。

その下位のg層はⅣ層とは異質の粘土層で、管状の酸化鉄斑紋はf層と同じく疎らであり、マンガン粒も確認できない。

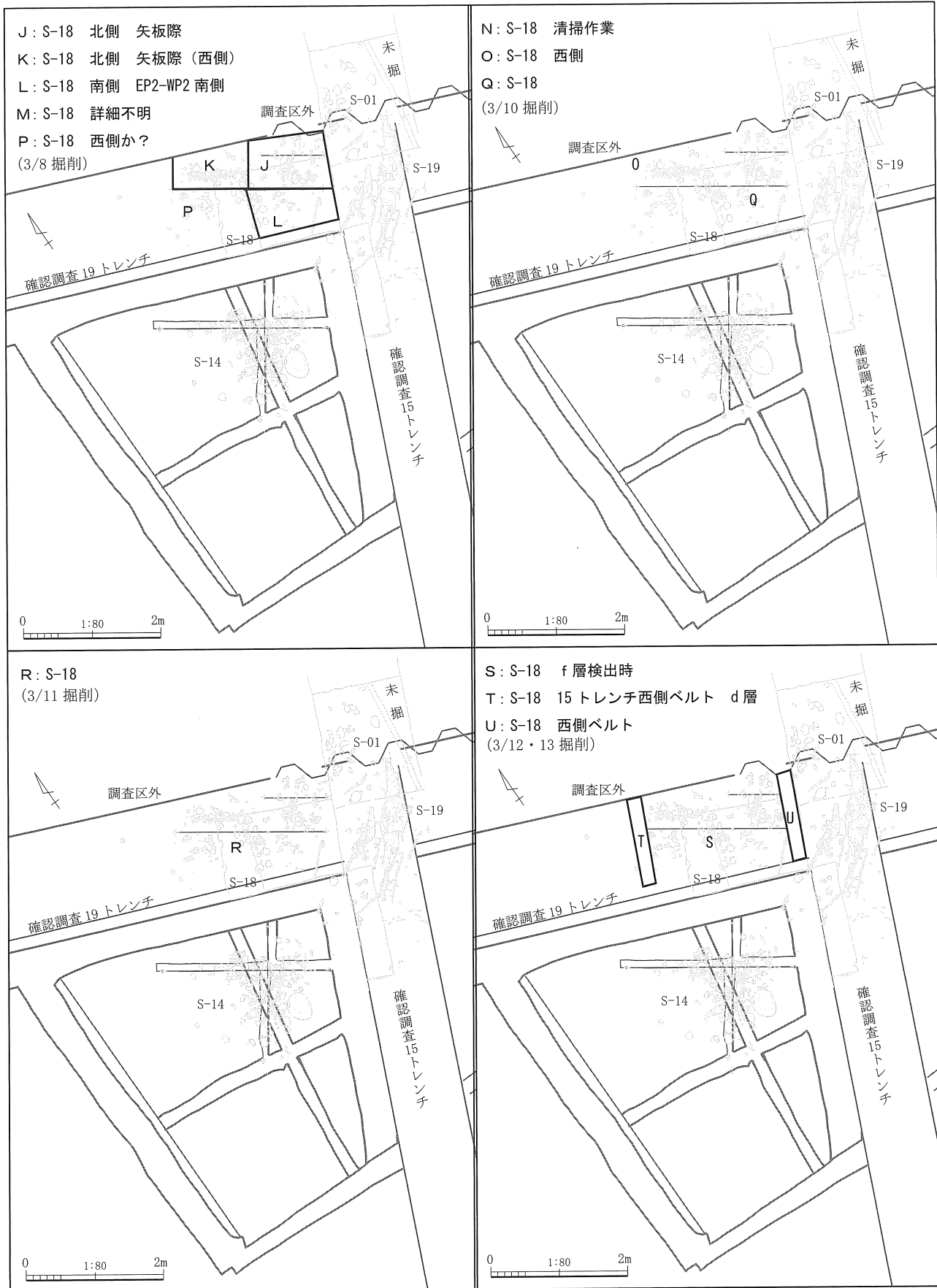
これらの土層は全体的に水平堆積を示す基本層序とは異なり、確認調査15トレンチと19トレンチ付近を頂点として東西南北それぞれの方向に傾斜して堆積している。つまり弥生時代から古墳時代にかけて、祭祀遺構の存在するAA-20グリッド周辺は微高地を形成していたと考えられる。

(4) 水洗選別(第119・120図、第11表)

祭祀遺構及びその周辺では石製模造品のチップや白玉などの微細遺物、自然遺物が出土することが予想されたため、掘削によって生じた排土はS-14の検出後から全て土嚢袋に採取し、整理作業時に水洗選別した。採取の単位はS-14に関わるものをA～Gの7単位に分け、さらに細分した(第119図)。またS-18に関わるものをJ～Uの12単位に分け、さらに細分した(第120図)。なおH、Iは出土地不明分である。その結果、白玉などの玉類の他、種子などの自然遺物を検出することができた(第11表)。発掘中に検出し得た白玉はS-14で4点、S-18で1点であったが、水洗選別の結果では、完形192点、破片221点を検出することができた。発掘中に検出できた数が少なかったことから当初これほどの出土を予想しておらず、また調査員の認識の統一が十分でなかったことから、取上単位がやや広く、厳密な出土位置が確定できるものは少ない。なお、これにより検出した土器は微細な破片であるが、3点は実測し得た。



第119図 祭祀遺構周辺土壌採取位置 (1)



第120図 祭祀遺構周辺土壌採取位置 (2)

第2節 遺構

第11表 祭祀遺構周辺土壌水洗選別検出資料集計表

取上 単位	位置	土嚢数	土器片	臼玉 完形	臼玉 破片	勾 玉	管 玉	管玉 破片	霰 玉	霰玉 破片	種 子	炭化 物	木 片	備考
A	S-14 検出時 ベルト		1 北ベルト 北半 2 北ベルト 南半 3 南ベルト 北 4 南ベルト 南 5 西ベルト 西 6 西ベルト 東 7 東 8 西側掘り下げ	3 4 3 4 4 3 3 3	5 11 6 1 4 3 1 2	1 11 1 1					2 1 1 4 1 1 1 2	1 2 1 2 2 1 1 1	1 3 2 2 1 1 1 1	
B	S-14 取上～完掘		1 北西 2 北東 3 南西 4 南東	4 6 3 12	11 2 13 79	1 4 1 107				1	13 1 2 5	11 4 2 5	13 1 1 1	貝
C	S-21 検出時 平面		1 北西 2 北東 3 南西 4 南東	25 36 7 4 3	105 101 105 19 14	36 8 15 1	118 9 12 1	0 0 1 2	0 0 1 1	0 1 1 1	9 25 5 2 2	13 29 5 3 2	2 1 2 1	
D	S-21 S-14 ベルト部分 S-14 直下のベルト		1 北 2 南 3 西 4 東	50 1 4 1 2	239 5 13 3 16	23 3 2 3	22 1 1 3	1 0 0 0	0 0 0 0	0 1 1 1	33 1 1 1	39 1 3 1 2	4 1 3 1 1	
E	S-21 ベルト部分 CDと層位的には同じ		1 南 2 西 3 東 4 位置不明	8 2 2 3 5	37 14 19 39 48	8 1 1 1 5	4 0 0 1 2	0 0 0 1 0	0 0 0 0 0	0 1 1 3 3	2 1 2 2 3	7 2 2 2 5	1 1 1 2 1	
F	15T 西ベルト	b-2 c h	b-2層 c層 h層	12 8 5 5	120 91 20 101	6 17 3 30	2 4 7 22	0 1 1 1	0 0 0 0	0 0 1 3	5 1 1 3	11 1 4 4	0 0 1 4	
G	19T 南ベルト	b-1	b-1層 d層 不明	18 1 3 1	212 3 12 3	50 3 5 2	33 1 1 2	1 0 0 0	0 0 0 0	0 1 1 3	3 2 1 3	5 1 1 5	0 1 1 0	
H	3月13日掘削分 f層検出時か			5 8	15 64	10 4	1 3	0 0	0 0	0 0	2 2	2 7	1 1	
I	不明			8 1	64 1	4 3	3 3	0 0	0 0	0 0	2 1	7 1	1 1	
J	1 北側 矢板際掘り下げ 3月8日			1 3	1 16	0 6	3 1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 1	
K	2 北側 矢板際西側? 3月8日			3 2	16 9	6 2	1 2	0 0	0 0	0 0	0 2	0 2	1 1	木片目立つ
L	3 南側 EP2-WP2 南側上半 3月8日			2 4	9 31	2 4	2 5	0 0	0 0	0 0	2 3	2 1	1 0	ガラス小玉
M	4 北 or 南 詳細不明 3月8日			4 2	31 10	4 1	5 2	0 0	0 0	0 0	3 1	1 2	0 2	
P	7 西側? 未永主任 3月8日			2 1	10 16	1 6	2 7	0 0	0 0	0 0	1 1	0 1	2 1	
N	5 清掃 3月10日			1 2	16 32	6 3	7 2	0 0	0 0	0 0	1 1	0 1	1 1	
O	6 西側 3月10日			2 1	32 10	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 1	0 1	1 0	
Q	8 S-18 3月10日			1 1	10 9	0 1	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	1 1	0 1	
R	9~1 S-18 3月11日			1 10	9 53	1 15	0 10	0 0	0 0	0 0	0 1	1 4	1 7	
S	9 S-18 3月11日			12 3	78 15	18 2	11 0	0 1	1 0	0 0	3 1	4 2	7 2	
T	10 f層検出時 最下層 3月11・12日			3 3	15 54	2 11	0 8	0 0	0 0	0 0	1 2	2 2	2 3	樹皮・木片多い
U	11 15T 西ベルト d層? 3月13日			3 3	54 16	11 1	8 2	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1	3 0	
	12 西側ベルト 3月13日			3 3	16 21	1 1	2 1	0 0	0 0	0 0	0 0	1 1	0 0	
	13 不明 不明			1 1	21 21	1 1	1 1	0 0	0 0	0 0	0 0	1 0	0 0	
				1	21	1	1	0	0	0	0	1	0	

*種子、炭化物、木片、備考の数値はそれらが検出された土嚢袋の数量を表す。

(5) 祭祀遺構

S-14 (第121～136図、図版64～71、79～85)

祭祀遺構S-14は約2m四方の範囲に広がる遺物の集中部であり、多量の手捏土器(甕・鉢・壺)、土師器(甕・鉢・壺)、須恵器(坏蓋)、土製品(土製模造鏡)及び石製模造品により構成される。これら出土遺物は基本的に完形品で、土器底部および石製品の接地面のレベルは標高4.7m前後の5cm以内に収まり、また土器は倒伏したものよりも、底部を下にした正位置を留めているものが多い。これらのことから、非常に一括性の高い祭祀遺構と考えられる。

【出土状況】

出土位置はAA-20グリッド南西部にあたり、層位的にはb-1層中に含まれるが、遺物の下面はb-2層及びc層の上面にあり、b-1層との層界にあたる。なお、南東側の一部は古代の土坑S-11に切られている。

遺物が広がる2m×2mの範囲のうちでも特に北側に遺物が密集し、2点の壺形土器を中心としてその東側に口径4cm前後の手捏土器が、西側に口径5～10cm程度の小型壺が配置された状況を呈す。石製模造品は土器群の東側に纏まり、剣形石製模造品と有孔円板とは一部密着して重なっているもののその分布範囲は異なる(第122図)。

土器は手捏土器を中心として小さいものが多く、器高20cmを超えるものは1点のみで、器高10cm以上20cm未満のものは8点、5cm以上10cm未満のものが22点ある他、約100点は器高5cm未満の手捏土器である。

遺物の広がりほぼ中央に須恵器の坏蓋が1点、天井部を下にした状態で出土した。この須恵器の北側に器高11cm前後の壺形土器2点が置かれ、その北西側に器高5～10cmの小型壺が、南東側から東、南にかけて器高5cm以下の手捏土器が二重～三重に取り囲み密集する。これらは互いに接しながら自立しており、意図的な配置をうかがわせる。土器群の核となる壺形土器2点は、その底部付近に密着して手捏土器が2～4点存在し、それらが支えの役目を果たして倒伏を免れたとみられるが、土器を据えるために地面を掘り窪めた痕跡は確認できなかった。この密集部の周辺はわずかながら間隙が存在し、土器の遺存状態や出土時の姿勢に違いがある。

この密集部の西側には、S-14出土の土器の中で唯一器高20cmを超える甕形土器が倒伏し土圧で押し潰された状況で出土した。

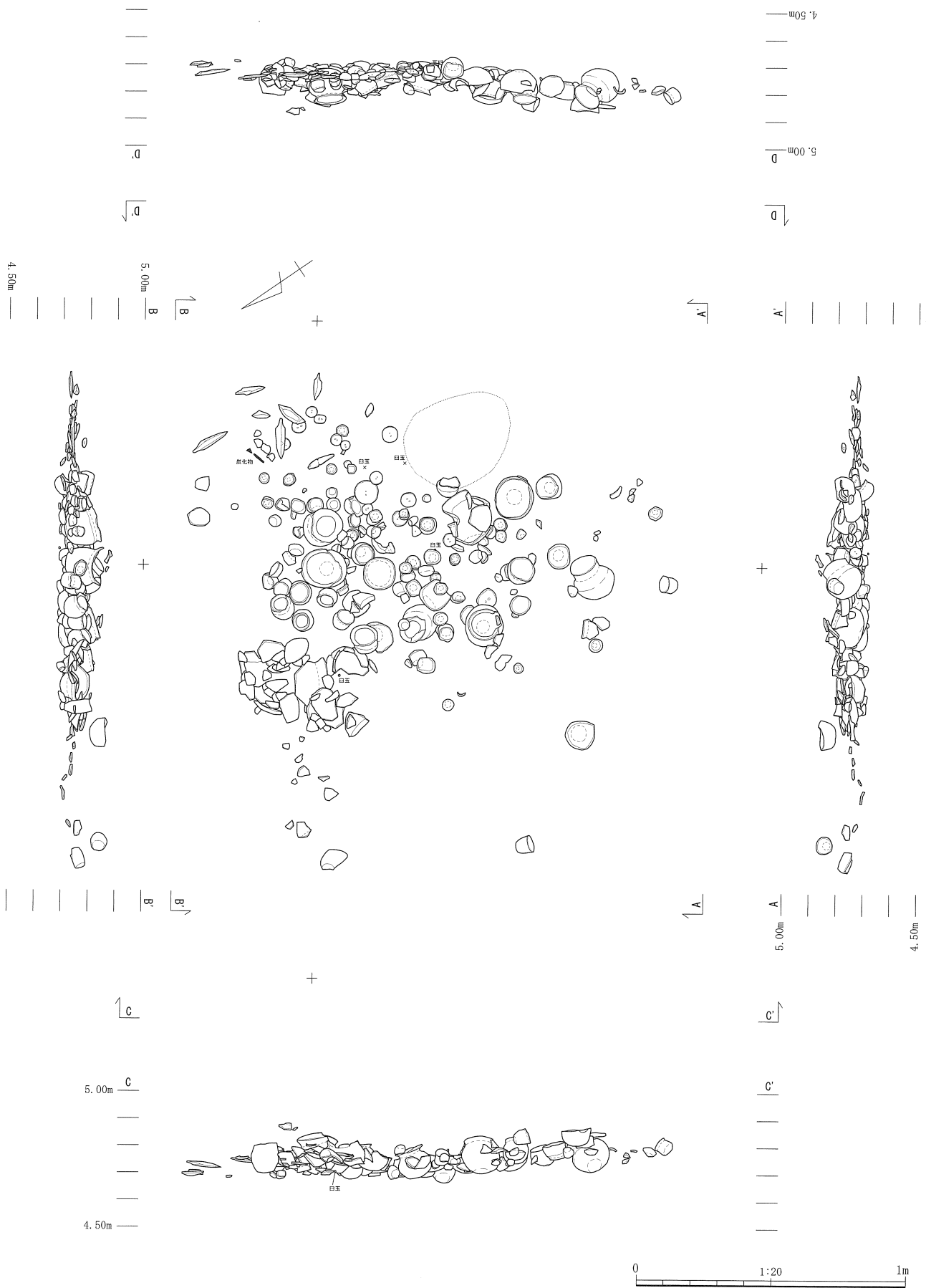
S-14で一括した遺物は殆どが完形かそれに近い状態で出土しているため、同じ場所で破片になっていたもの以外、離れて接合したものは1例のみである。12の鉢形土器は縦に半裁されたような状況で出土しており、20cmほど離れた位置にある。間に正位置の土器があり、また、上にも手捏土器が乗っている状態であった。

遺物の拡がりの縁辺部(西側)の土器はレベル的にみるとやや浮いた位置にある。また須恵器より南側の土器群は北側の土器群に比べて疎で、やや高いレベルで出土している。

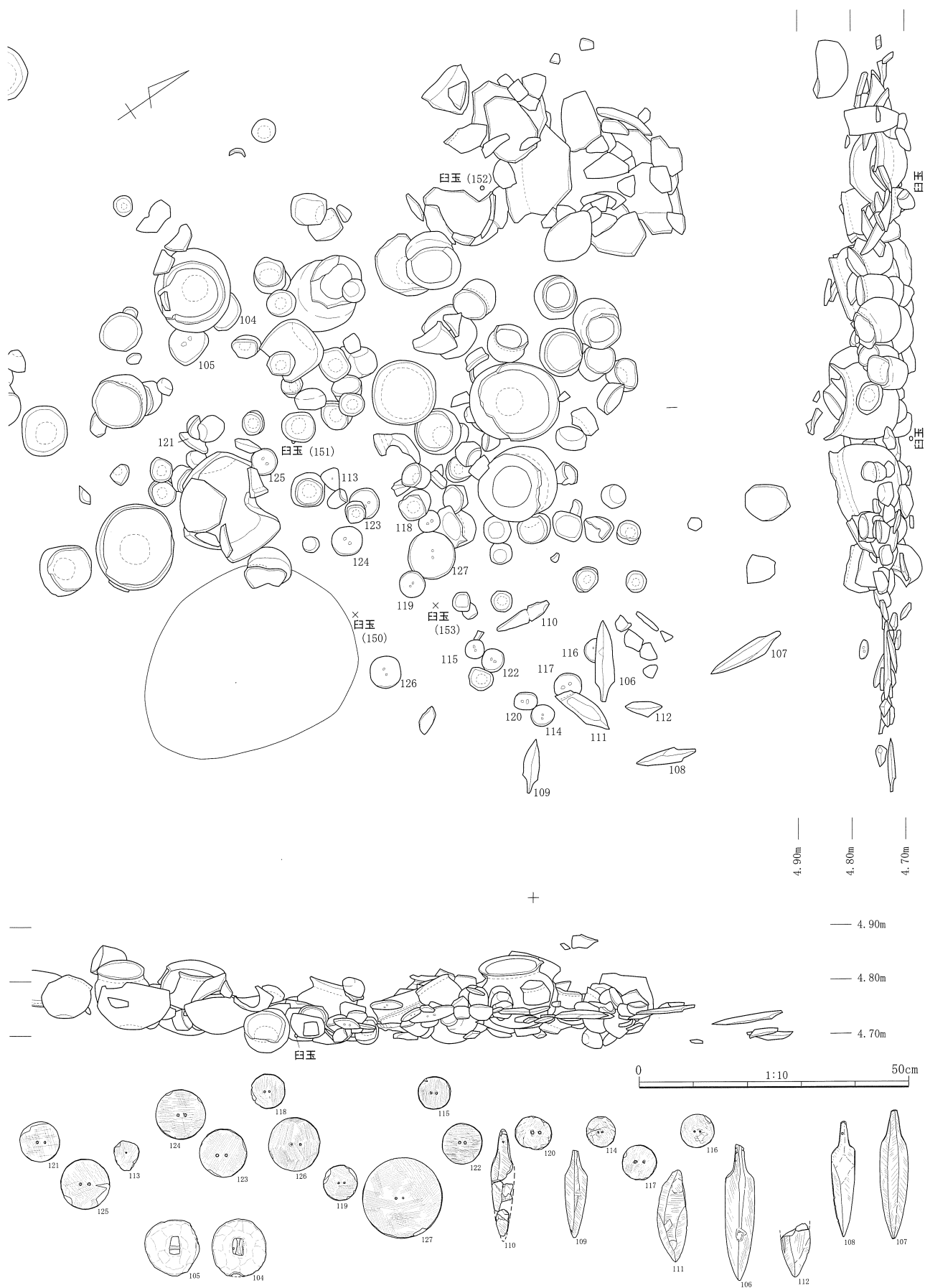
遺物の密度や配置状況、接合関係、出土レベルを勘案すると、これらS-14を構成する遺物群が一度の祭祀行為の結果による集中であるとは言い難いが、祭祀単位について明確に境界線を引くことが出来る状況にもなかった。

手捏土器は単独で存在するよりも複数の個体が器壁を接していることが多く、土師器の底部に密着して出土しているものもある。また壺や鉢の接地面よりもやや下位のレベルからもある

第2節 遺構



第121図 祭祀遺構 (S-14)



第122図 祭祀遺構 (S-14) 遺物出土状況

程度まとまって出土している。

手捏土器は、2点が土師器の壺・鉢の内部から出土している。1点は壺(11)から出土した小型の坏(88)である。鉢(48)については壺形土器(7)内器面に密着した出土状況を確認することができた(第123図)。この壺は約60度口縁部が傾いた姿勢で出土しており、その内部に壺と直交する角度で完形の手捏土器が底部を壺体部の内器面に接するように納められていた。

土製品としては土製模造鏡が2点ある。2点ともS-14南側の鉢形土器(11)の底部に密着して出土した。丸底気味の底部に接して楔のような状況にあり、支えの役割を果たしていた可能性がある。

剣形は土器群の密集部の東側にやや離れてまとまり、2点是有孔円板の上に一部が重なっている。なお107は他の剣形よりも若干出土レベルが低い。そのため、調査時には他の遺物を取り上げた後で検出した。

有孔円板は土器群の南東側にあり、東西方向に帯状に分布する。一部の有孔円板は土器と重なっており、1点(121)は手捏土器に挟まれ、立った状態で出土している。有孔円板の出土レベルは剣形を含めほぼ同じレベルに揃っているが、115は他より浮いた状態で出土した。有孔円板の分布域に1点、1孔を有する六角形の薄い滑石製品(113)があり、これも縁辺の一部が手捏土器に接しており、斜めに立った状態で出土した。

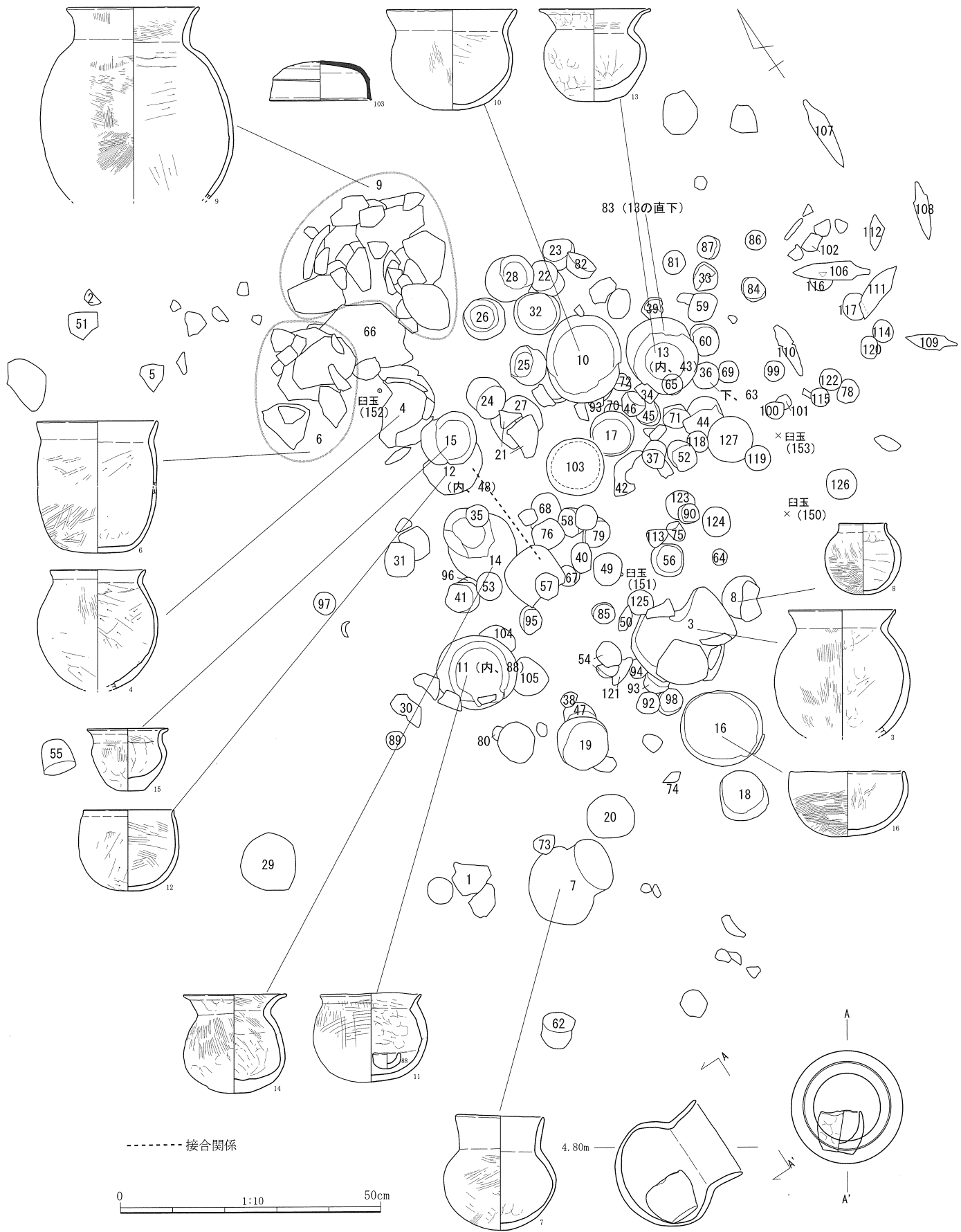
玉類は水洗選別により多数を検出したが、調査中の出土は4点のみである。これは、白玉自体が軟質の石材で砕けやすいこと、また白色～暗緑色を呈する色調が土壌中の砂粒と見分けが付きにくく、視認性が低いことに起因する。S-14の検出から完掘までの排土からは白玉だけで完形78点、破片168点を数える。また、7点の土器・手捏土器から計10点の白玉が出土している。これらは破片も多く、土器1個体に2点の白玉が出土している例が3例あるが他は1点のみであり、意図的に土器内部へ納められていたものかどうかはわからない。

玉類の出土範囲はS-14の土器群の全体に及ぶが、土器の出土範囲よりも格段に広く、少量ではあるがS-14の南側や北側にも出土しており、確認調査15トレンチの西側ベルトにもやや集中して出土している。またレベル的にもS-14の下層であるb-2・h層からも少くない量が出土している。S-14では数量的に採取単位B-④付近が突出して出土量が多く、S-14の南東側が最も多く分布していることになる。おそらく確認調査時に掘削した15トレンチ部分にも多くの白玉が分布していたと考えられる。また15トレンチより東側はまったく水洗選別していないため、その有無は不明である。

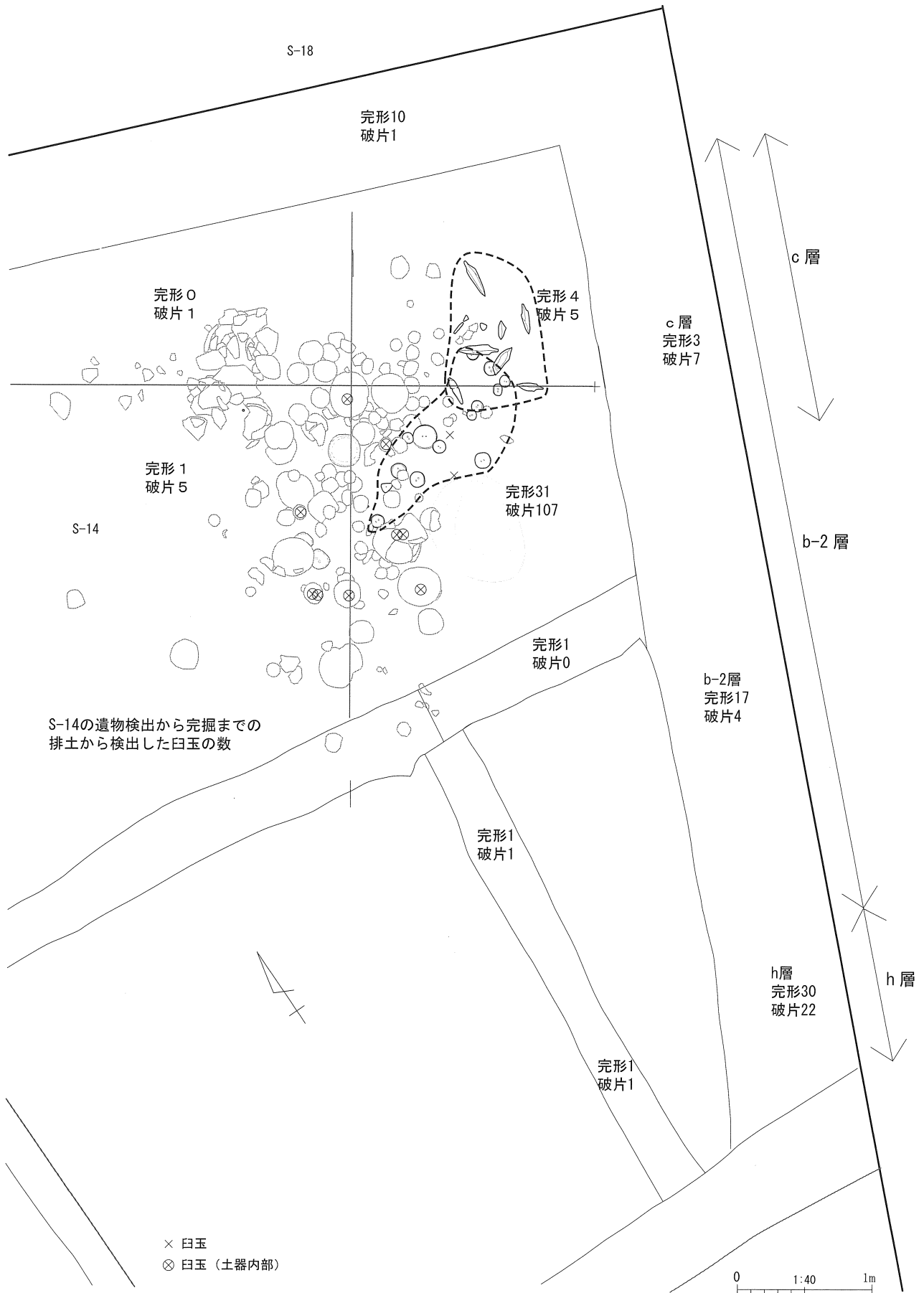
石製模造品は土器群の北東側に剣形品、東側に有孔円板、南東側に玉類と、その種類によって分布の集中範囲を異にしている。

剣形の北側に幅1cm長さ9cmの炭化物が認められたが、小片でありその周辺には認められなかった。その他、排土の水洗選別作業によって種子、炭化物、木片、貝類の自然遺物を検出することができた。その同定結果は第八章第5節にて報告されているが、クスノキ、ウリ類等の種子、イネ類が同定されている。なお、貝類は小破片のため同定不能であった。

平面及び断面観察いずれにおいても明確な土坑状の掘り込みは確認できなかった。ただし、作図しながら1度目の取上を行った後も、その下位から数点の手捏土器が出土していることを考慮すると、浅い落ち込み状の窪みが存在した可能性はあろう。



第123図 祭祀遺構 (S-14) 遺物出土状況



第124図 祭祀遺構 (S-14) 周辺石製品出土状況

【遺物】

第125～127図はS-14出土の土師器・須恵器及び土製品実測図である。

第125図1～6は甕である。1は頸部から体部の破片で、内器面は指頭圧痕による凹凸がある。2・5・6は器形や色調などから同一個体と考えられる。平底で底径も大きい。外器面はやや粗いミガキとナデを併用している。3は外器面でヘラケズリを行っているが、器壁は厚い。4は口縁を短く外反させている。内器面のヘラケズリなどで器壁は全体に薄く、外器面はハケメ後ナデを入念に行っている。

第125図7～15は壺である。7は完形の壺で、直立する口縁と球形胴を持ち、外器面はハケメ後ナデ調整を行い丁寧に仕上げている。内部に第126図48の手捏土器が入っていた。8は小型の壺で、直立する口縁部は非常に短く、胴部に較べて非常に薄い作りである。外器面は細かいハケメ、内器面には幅広のヘラケズリを確認できる。9は現存高20cmを超える、S-14で検出した土器中最大の土器である。口縁部は長めで外反する。外器面には細かいハケメ調整が入っている。10は体部最大径よりわずかに口径が大きく、甕とした方がよいかもしい。全体に器壁は薄く、丁寧な仕上げになっている。11は平底の底部から丸みを帯びて立ち上がる器形で、体部付近の器壁がやや厚い。口縁部は短く、直線的に開いている。また、その内部にはほぼ完形の手捏土器（第127図88）が入っていた。12は接合により復元できたもので、口縁端部を外側へ摘みごく小さい頸部を成形している。丸底だが底部は安定している。13～15は平底の広口壺で、遺存状態がよく、口縁の一部が破損しているのみであった。底部から大きく開き、頸部の屈曲からさらに口縁部が外に大きく広がる器形である。13は最大径が体部中位にある。14は最大径が体部下位にあり、さらに底面には直径5～6cmの粘土を貼り付けている。15は一回り小さいもので、頸部のしまりが弱く器壁が厚い。これらは胴部下半の器壁に厚みがあり重心が低いため、安定して自立する。

第126図16は直立して出土した完形の鉢で、安定感のある丸底である。口縁はわずかに内傾し、口唇はやや尖る。

第126図17～第127図100は手捏土器である。17～23は甕形で、頸部を有し短い口縁が外反する。17～20は底面が平坦で、体部と底部の境を区別している。17は全体に器壁が厚く、底面にナデ調整が施される。18は底径が1.8cmとかなり小さい。最大径のある肩部より上は器壁が薄く、口縁部はごく短い。19は体部中位に最大径を持ち、底径は18より大きい。20は薄い口縁部を欠損する。底面に木葉圧痕が残る。胴部は器壁が厚く、重みがある。21は頸部までの器壁は厚いが口縁部は薄く作られ、口唇部は尖らせることによって、外反し、頸部のある甕形を作出している。22は球形胴に外反する口縁部を持つ。口径と体部最大径がほぼ同じである。23は平底に近い底部で、22よりも口縁が外に開く。24は鉢形である。口縁は大きく広がり、胴は張らない。

25～29は甕形である。いずれも丸底の球形胴で、頸部で緩やかに屈曲する。口径と体部最大径に大きな差はない。これらにはハケメやヘラケズリなど、土師器製作で利用される器面調整が施されている。25～27は底部から口縁部にかけて器壁が薄くなる。25はハケメをナデ消しており、丁寧な仕上げである。26は外器面でハケメ・ヘラケズリを行う。27は底部が広く、体部の張り出しが強い。内器面にヘラケズリを行い、器壁は厚い。28はサイズの違いだけで基本の器形、器面調整は土師器と変わらない。小型の甕または壺か。29は甕の体部から底部

の資料であり、27に似た器形とみられる。

30～32は壺形である。30は壺の肩部で、器壁が薄い作りをしている。31は肩部・底部それぞれの屈曲部で破損している。32は球形胴の体部である。

33・34は甕形である。33はわずかに頸部を作り出している。34は尖り気味の丸底で、表面を丁寧にナデている。いずれも口縁部は直立気味でやや尖らせている。

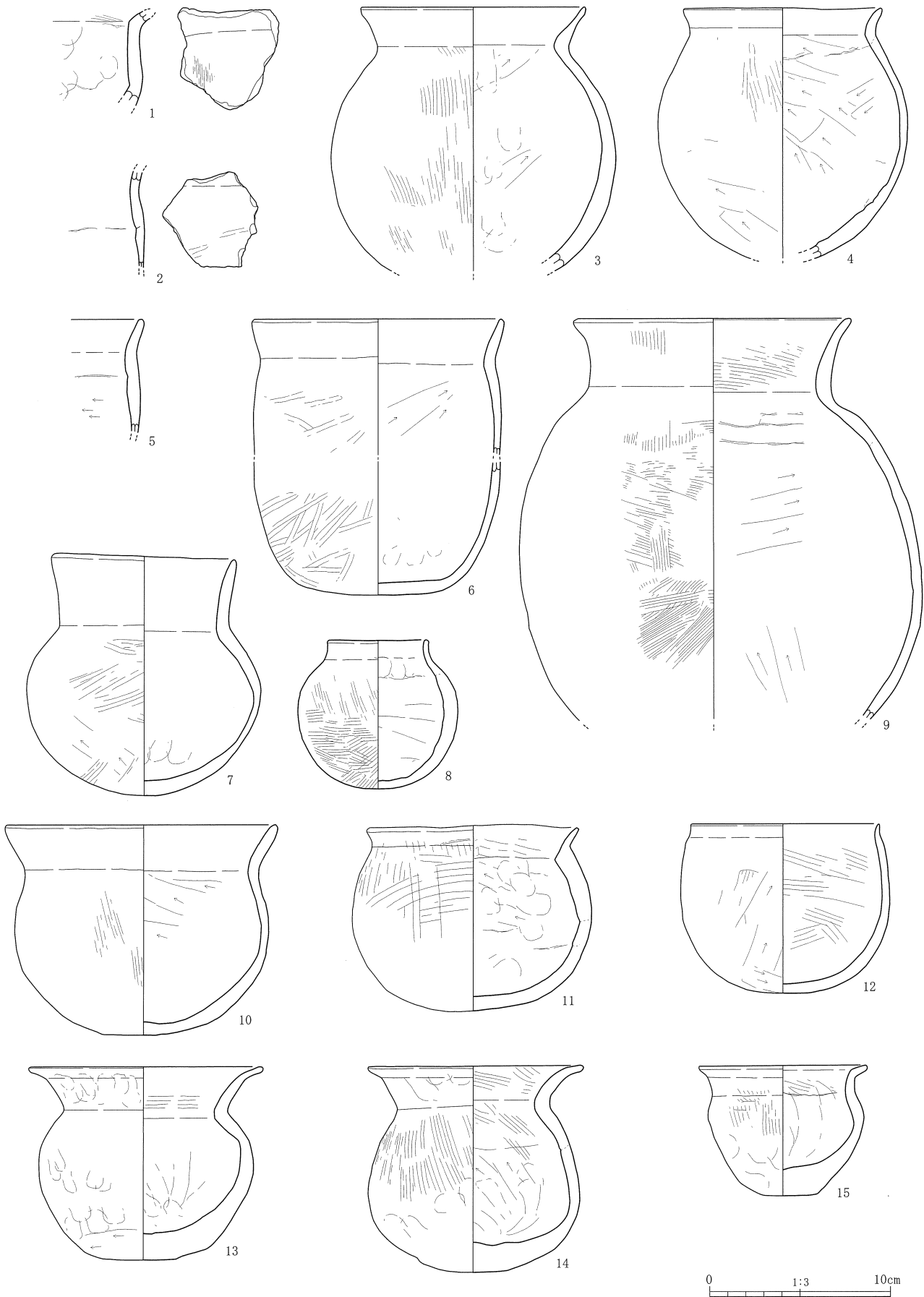
35～39は壺形で、35は頸部を意識して作り出している。器高は低い。36は平底に近い形で底径が大きい。37は体部最大径のある頸部で屈曲し、口径の方が小さい。38は直立気味の口縁部である。39は体部中位に最大径があり、頸部でわずかに窄まる。40は鉢形で、口唇が鋭く尖る。41は鉢形で、他に較べて口径・底径ともに大きい。

42～44は甕で、頸部から開く器形である。全体的に器壁の薄い作りで、42・43は頸部以下を破損している。44は体部下位まで残っているが底部形状は不明である。

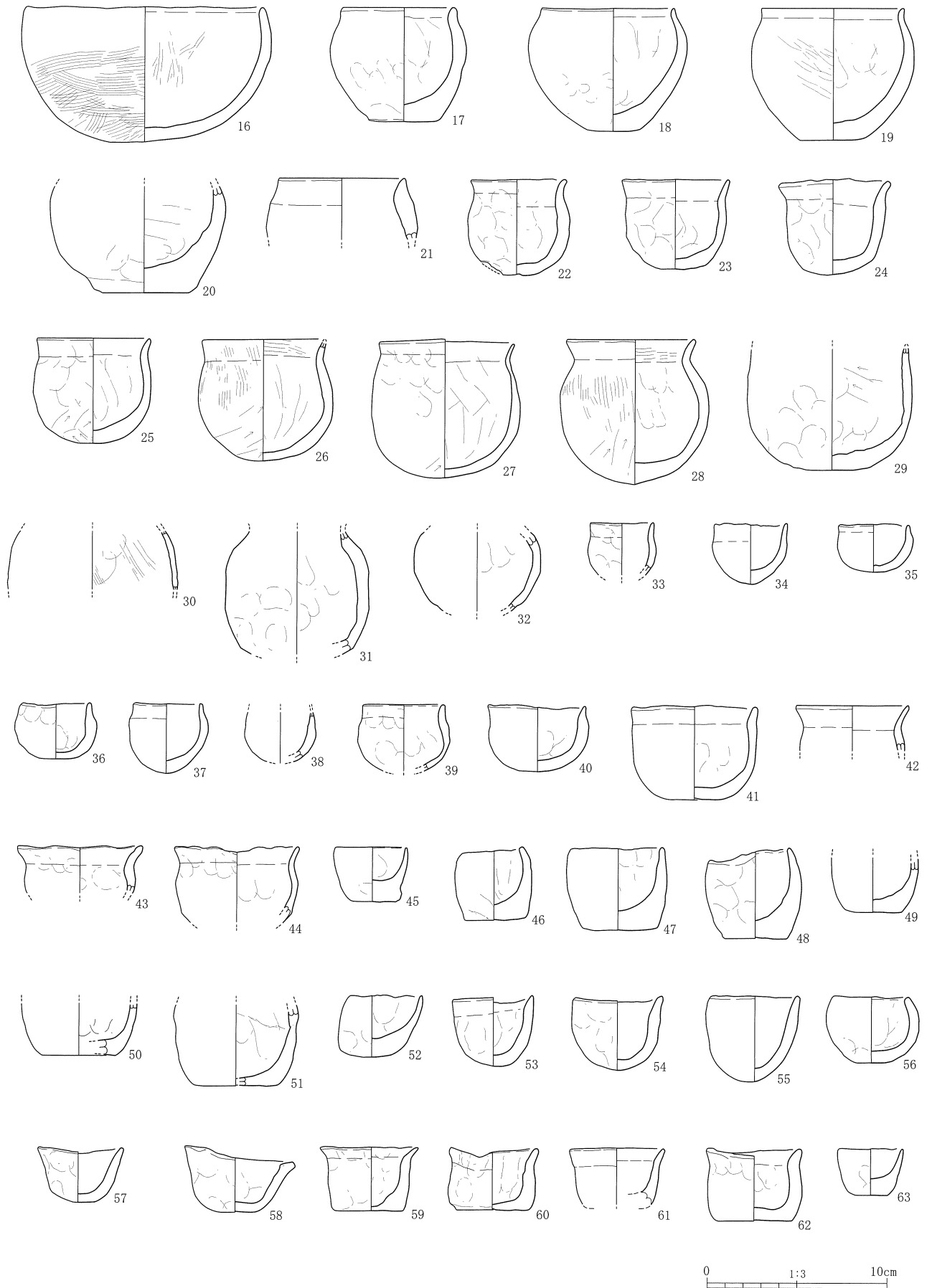
45～63は鉢形である。このうち、45～48は底部を平底にし、体部をわずかに膨らませた白のような形である。底部は厚みがあり安定している。器壁は底部付近に比べると口縁が薄く、口唇はやや尖っている。45は器高の三分の一を底部が占めており、胴部～口縁部が極端に薄い作りとなっている。46は口縁が内傾していて、内底はやや深くくぼんでいる。47は口縁がほぼ直立している。48は第125図7の壺形土器の内部に入っていたもので、口縁の一部が欠損している。49～51は底部資料で、安定した平底であることから、45～48のように口縁が直立するか、または後述する59～62のように口縁が外反する器形になると考えられる。52は歪んで口縁の一方が大きく開いてしまっている。53～55は丸底もしくはやや尖る底部から口縁部までそのまま広がっていく器形で、口唇は薄く、わずかに外反する。53はナデ調整による丁寧な仕上げである。56は丸底で口縁は内湾しており、丁寧なナデ仕上げである。57・58はほぼ平底の底部から直線的に口縁につながる器形である。59～62は口径と底径が近い安定した平底で、体部がそのまま直立し、口縁が外反する器形である。63は平底から直線的に口縁へ到るもので、口唇は尖っている。

第127図64～100は坏形である。出土した手捏土器の中でも小さな部類の一群であり、丸底の底部及び口径は3～4cm、器高2～4cm前後のサイズで、概ね半球形だが、器壁の厚さや体部形状にはヴァリエーションが認められる。64は平底の底面以外はナデ調整を行っている。65は胎土が橙色で他の土器より赤い色調である。66は底部の器壁が薄く、内底面を広くとっている。67は内器面に粘土が付着している。粘土接合痕あるいは補強のためか。68は体部の器壁は厚いが、口唇部が尖る。69は全体に器壁が厚い。70・71は口縁部が直立する口縁部が薄い作りで、70は外器面に細かいナデ調整を施している。71は口縁がわずかに内傾している。72の器壁は底部が厚く、口縁部は薄い。73・74は一定の厚さで底部から口縁部まで作っており、口縁部は鈍い。75は口縁部をわずかに外側へつまみ、頸部の稜線を作りだしている。76は坏形としたものの中では大きい部類である。77は厚手の作りだが底部との接合部分で破損しており、器高は低いものと考えられる。78は底部に平坦面があるが口縁部と水平にはなっていない。79は口縁部をわずかに屈曲させ、頸部としている。

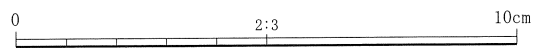
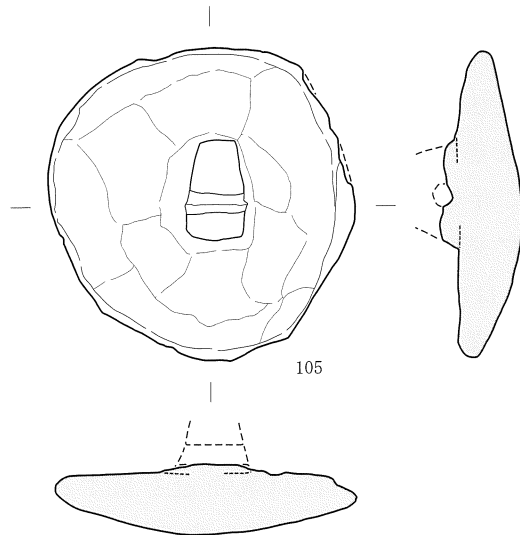
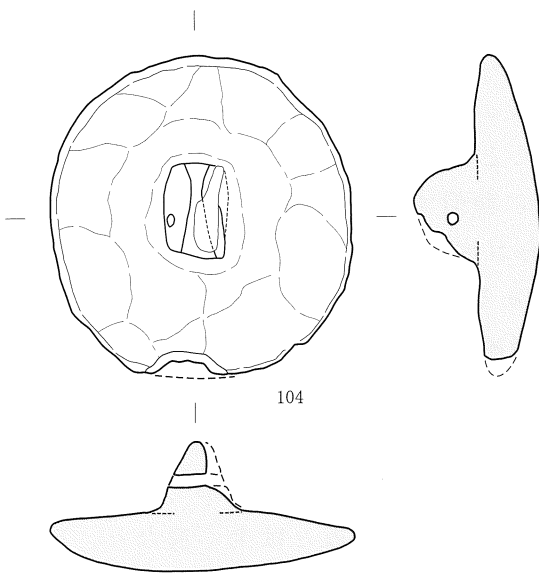
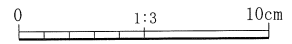
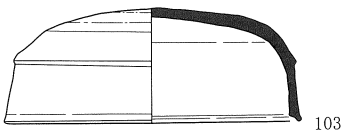
80～84は底面がやや広く、平底に近い。さらに口縁が直立するため、底径と口径にほとんど差がない。85・86は尖り気味の丸底で、体部中位で屈曲し、口縁は直立する。85は器壁が厚く、86は薄い。87は内外器面を細かくナデ調整している。



第125図 祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (1)



第126図 祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (2)



第127図 祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (3)・土製品

第2節 遺構

88～90はS-14出土土器中最小のもので、器高2cm前後と低く、容量もわずかなものである。91は底部が薄く、内底はくぼんだようになっている。88は第125図11から出土した。

92～100は丸底で口縁が開く器形である。口縁下位を屈曲させ頸部を作るものもある。器壁は薄いものが多い。

第127図101・102は弥生土器の壺である。他の土器よりも下位で出土しており、小片であることから本来S-21に伴う土器であると考えられる。101は屈曲部で外れるように破損している。102は平坦な口縁で、頸部が強く締まる器形とみられる。

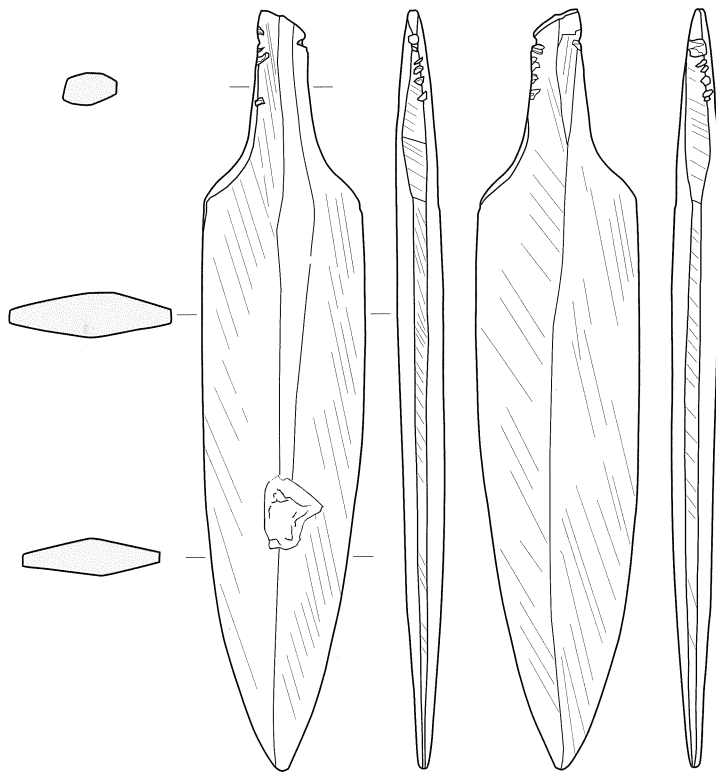
第127図103は須恵器坏蓋である。S-14出土の須恵器はこの1点だけである。完形で外器面はやや幅の広い回転ヘラケズリを天井部中位まで行っている。稜は鈍く、口縁部には明瞭な凹線がある。

第127図104・105は土製模造鏡である。どちらも直径約6cm前後の同規格で、鈕部分は平面長方形、断面半円形を呈し、両長辺に孔を貫通させている。また、鏡面は明確な反りを表現している。

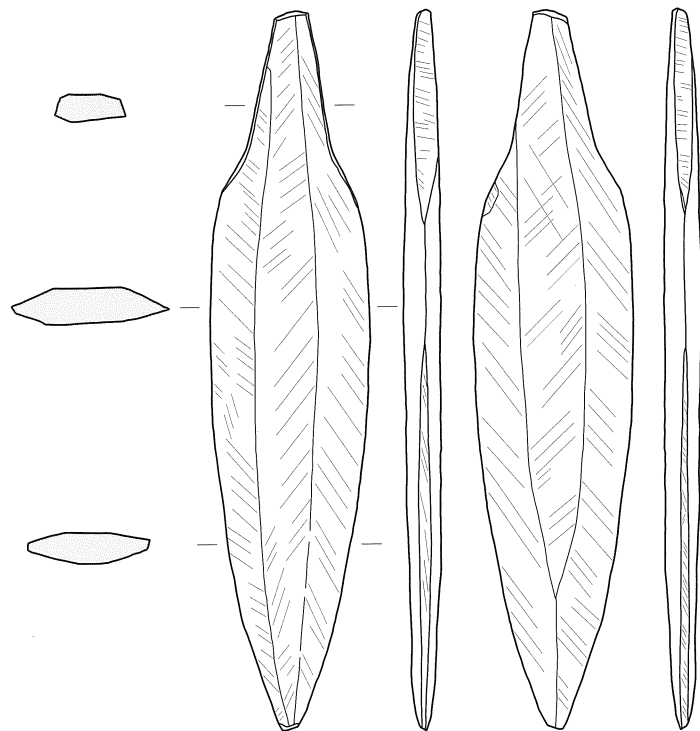
第128～136図は石製模造品である。S-14及びその周辺から出土した石製模造品は剣形7点、有孔円板16点のほか、玉類は勾玉2点、棗玉4点、管玉5点、白玉300点以上である。

106～109は完形の剣形で茎を明確に造り出し、断面形状は扁平な菱形で両面ともに鏑の表現が認められる。両面の側縁を斜めに削り出す事によって刃部を表現しているため、この加工が中心に及ばない場合は鏑が2本あるように見える。そのため刃部は鋭利ではなく角のある直線となっているが、107及び109の関に近い部分は両側縁とも比較的鋭利に整形されている。完形品の4本の長さはそれぞれ15、14、11.5、9.5cmと大振りで全体に研磨が施される。108のみ茎に小孔を有する。106は茎の側縁に4～5ヶ所の小さな抉りがあり、両側とも近似した様相を呈すことから、製作時もしくは使用時に意図的に付けられたものと考えられる。この剣形の茎は無孔であるため、垂下するための紐を結びつけるためであろうか。107は両側縁の刃部と2本の鏑に挟まれた中央の面で研磨の方向が異なる。また側面でも茎部分と刃部部分で研磨の方向が異なっている。この研磨方向の違いは109も同様で、大きさは異なるものの両者は製作技法の上で共通している。110は遺存状態が悪く、検出段階で数点の破片に分かれていた。中央部分は薄く板状に剥離しており、接合することはできなかった。全体的なフォルムは107に近く、大きさ及び茎に小孔を有する点で108に類似する。残存部の断面形状では、他の剣形に見られる刃部とそれに伴う鏑の作出が認められず、未製品である可能性がある。111及び112は剣形の未製品とみられる。残存度に違いはあるが両者ともほぼ同じ幅、厚みで鋒と見られる部分から刃部を粗く作出しようとした意図が感じられる。他の剣形とは完成度の点で大きく異なるが、使用法の上では差異は認められない。なお、これらに接合するとみられる同様の石材の剥片や素材は水洗選別においても検出できなかった。石材はすべて暗緑色を呈する滑石である。113は乳白色を呈する滑石製の扁平な六角形に近い不整形で、中央に1孔を有する製品である。石材の点では上記の剣形や後述する有孔円板とは全く異なり、白玉の中に類似したものが認められる。出土位置は剣形から離れており、有孔円板に近い位置にある。形態上大きな隔絶があるが、強いていえば扁平粗製化した段階の剣形に類似した形状を示している。

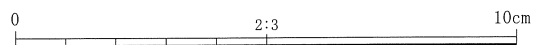
第131～133図114～127はS-14から出土した有孔円板の実測図である。有孔円板は薄く円



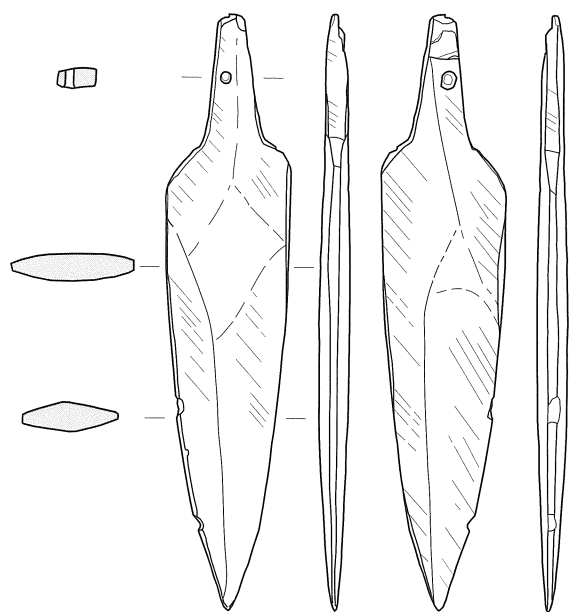
106



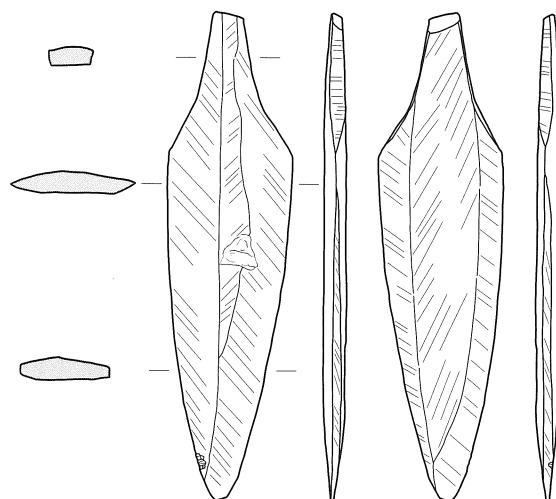
107



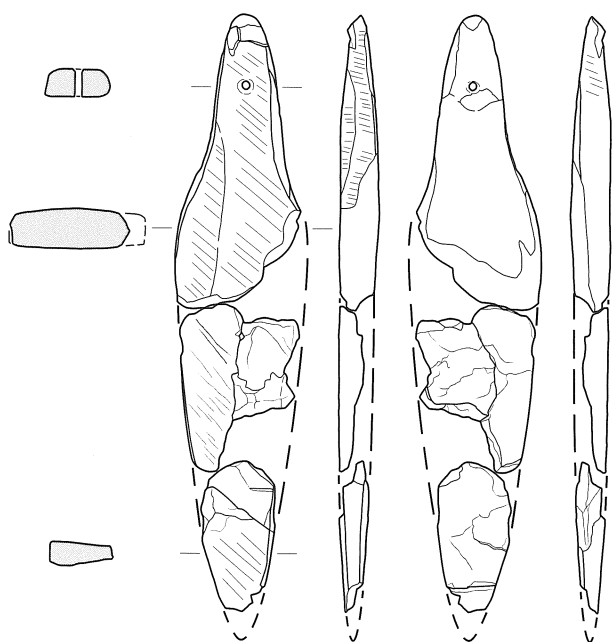
第128図 祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品



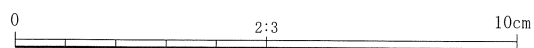
108



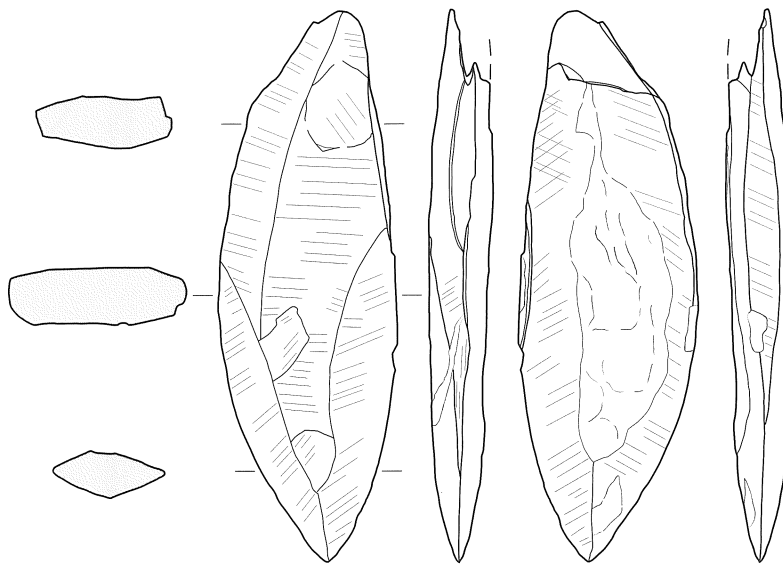
109



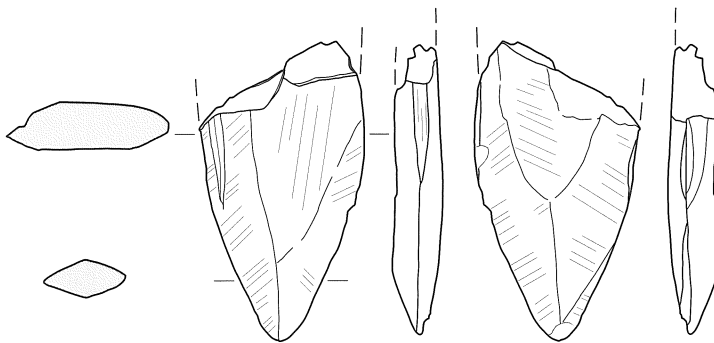
110



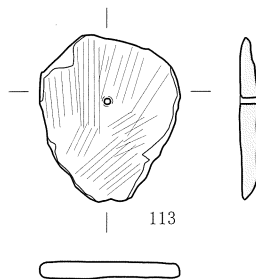
第129図 祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品 (2)



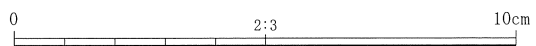
111



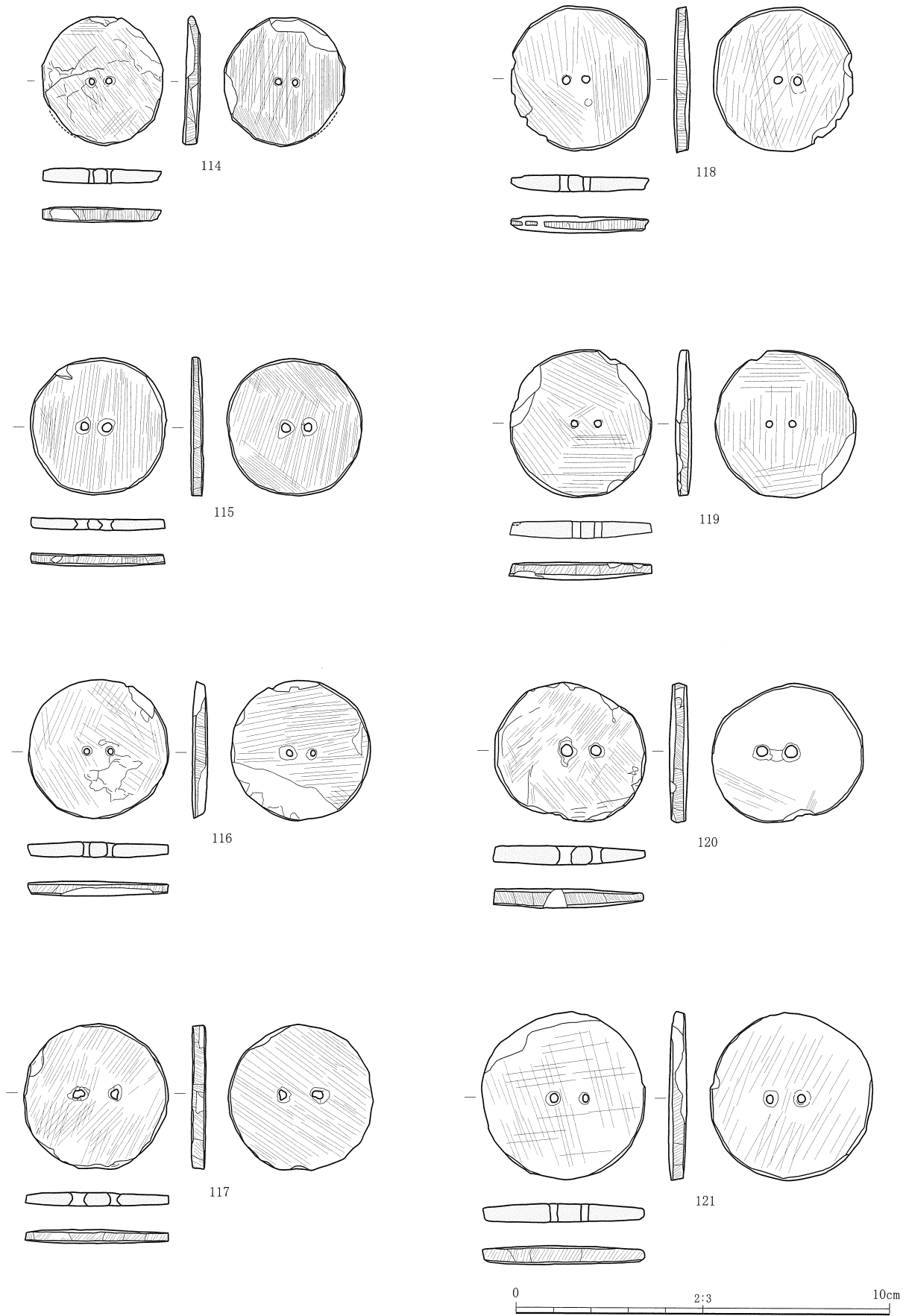
112



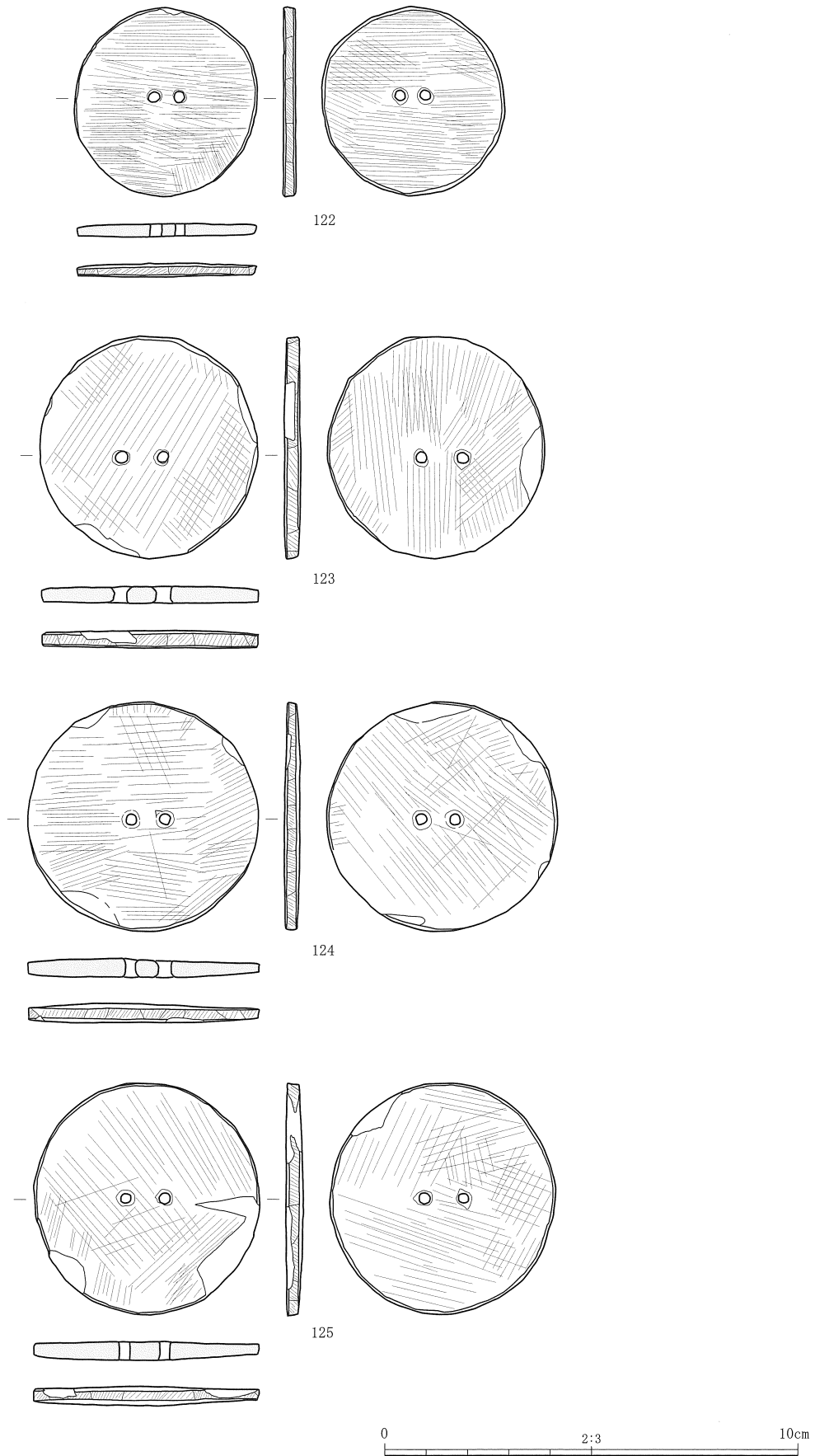
113



第130図 祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品



第131図 祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (1)



第132図 祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (2)

形に成形した緑色片岩類の石材に孔を穿ったものである。わずかに稜のある円形または楕円形を呈し、全面を細かく研磨している。特にS-14から出土した有孔円板は非常に丁寧な作りをしている。いずれも広い表裏面の研磨は方向が一定していない。一方、側面の研磨は多くが縦方向で揃っている。大ききで見ると、直径は32mmから90mmで、30mm前後・55mm前後・90mmの3つに分けることができる。最大の90mmを除いた平均直径は45mm、平均の厚さは4.4mmである。断面形状はほとんど長方形の板状だが、楕円形になるものもある。孔はどれも二個一対の双孔で、間隔は2.5mm～7mmと若干の幅が見られる。穿孔は片面から行われ、孔の直径は1～3mmだが、わずかにずれるものがある。個別に見ていくと、114はS-14出土有孔円板中最も小さく、孔はどちらも片側が広がっている。115は孔がずれ、やや歪な形になっている。116は孔が直径1mmと狭い。117は孔がずれ、大きくなってしまっている。118は双孔に近接して浅い凹みがある。凹みの直径は実際に開けられた孔と同じである。119は孔が小さい。120は裏面では研磨の擦痕がほとんど見えなかった。断面形状はわずかに楕円形を呈している。また、孔は端部が広い。121は厚さ5mmで孔の間隔が7mmと広い。122は孔がやや大きい。123～125は特に規格性が高く、近似する。126は直径が大きく、中心が膨らんだ凸レンズ状の断面形状を呈す。127は直径90mm、厚さ4～10mmと本遺跡中最大のものである。側面の研磨はその大きさのためか方向を変えて行われている。仕上げも非常に丁寧である。

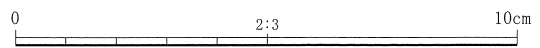
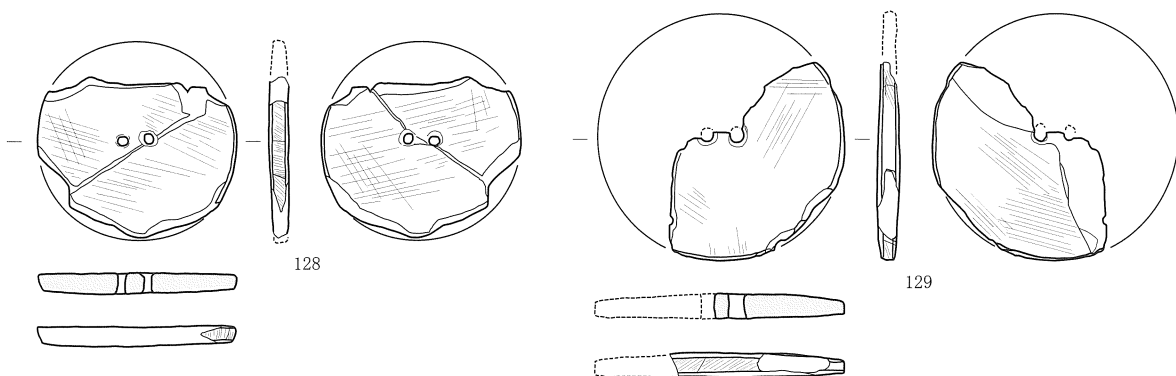
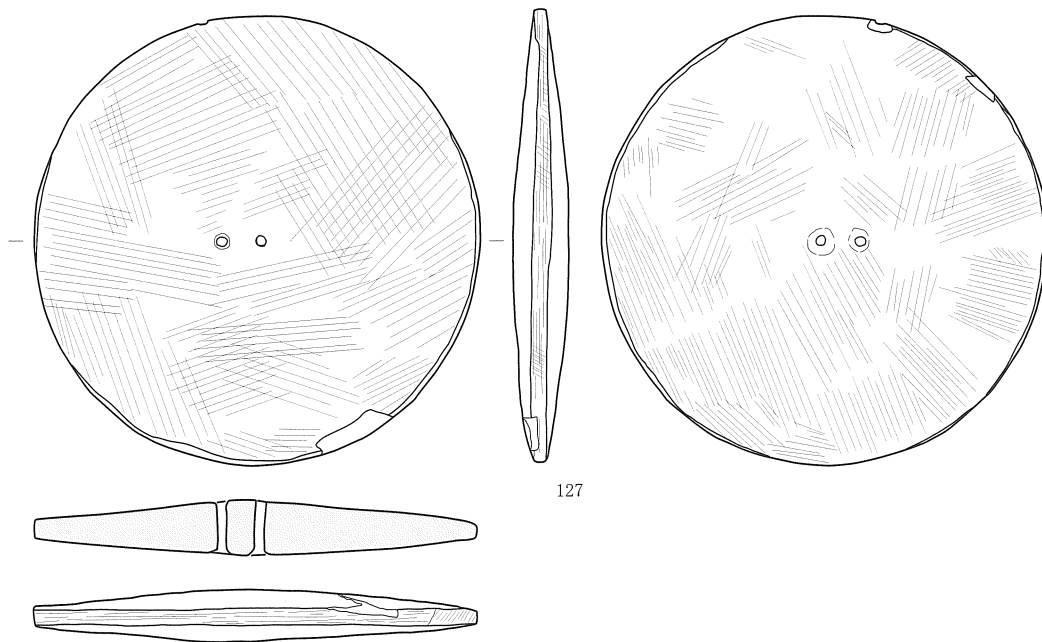
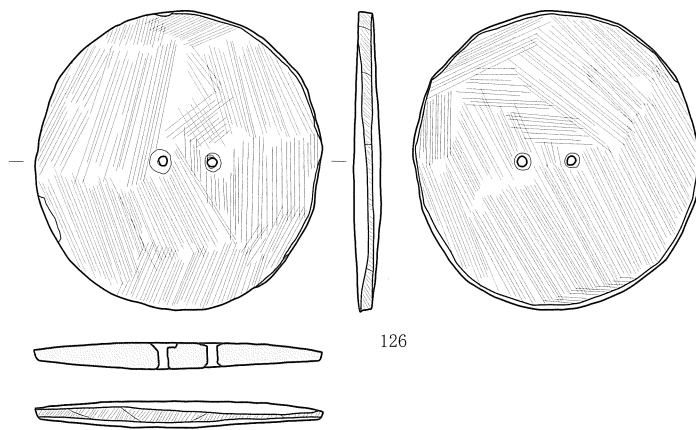
第133図128・129は遺構外の出土だが、出土場所や形態上の特徴等、S-14出土の有孔円板に非常に近いものと考えられることから、ここに掲載している。128はAA-20グリッドⅢ-2層、129は確認調査15トレンチからの出土である。

第134～136図はS-14およびその周辺から出土した玉類である。組成及び形態的特徴に共通性が認められるので、一括して扱う。

第134図130・131は勾玉である。両者とも丁寧につくられているが小型である。130は頭部の紐穴周辺に窪みがあり、片面がより顕著である。石材は暗緑色の滑石である。131は15トレンチ西側ベルトh層から出土した。全長8mmと非常に小型で、断面扁平で腹部はやや丸みをもつが背部はやや直線的である。石材は灰白色の滑石である。132～135は棗玉である。135のみ確認調査15トレンチ西側ベルトからの出土である。いずれも最大長1.2cm、最大径7.5mm前後で近似した大きさを示す。穿孔は両側から行われている。石材はいずれも暗緑色の滑石である。136～140は管玉である。140のみ確認調査15トレンチ西側ベルトh層から出土した。いずれも破片のため全長は不明であるが、直径は4～4.5mmの範囲に収まる。石材は暗緑色の滑石である。

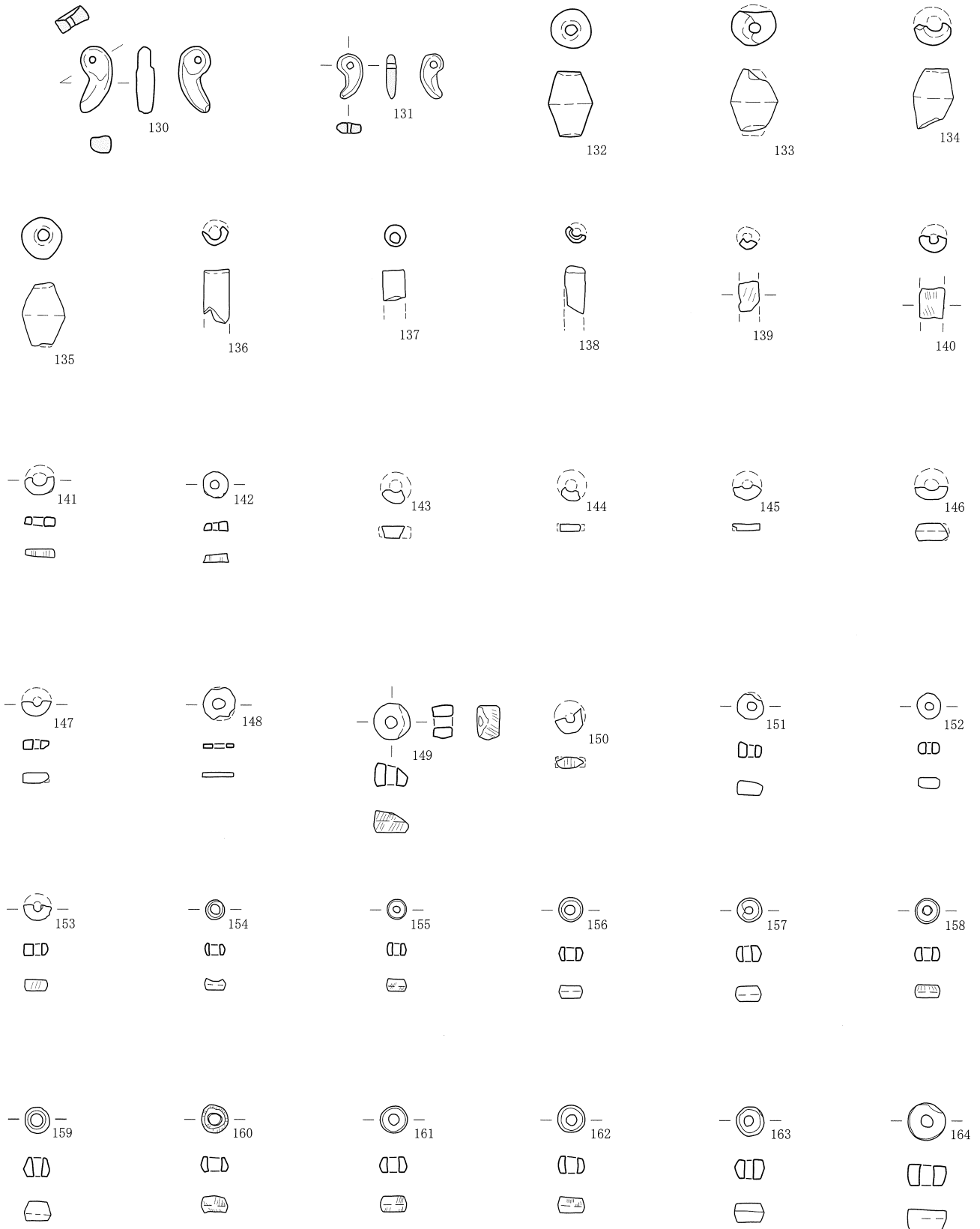
141～236は白玉である。141～149はS-14出土の土器内部から、150～153はS-14発掘中に検出した。154以降は採取した土壌の水洗選別により検出したもので、154～204はS-14から、205～230は15トレンチ西側ベルト、231以降は19トレンチ南側ベルトからの出土である。直径と厚さの比率、及び側面の稜線の有無により4分類した。直径、厚さとも個体によってかなりの個体差がある。側面に稜を持たないものが多く、7割近くを占める。なお未製品と認められるものはなかった。平均で直径4.6mm、厚さ2.4mm、孔直径1.7mm、直径に対する厚さの比率は2.1:1である。

141～149の白玉は土器7点の内部に詰まっていた土を水洗選別して検出したものであるが、破片の個体が多く、3例については2点同一土器から出土しているものの、多くは1点のみで



第133図 祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (3)

第2節 遺構

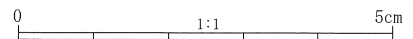
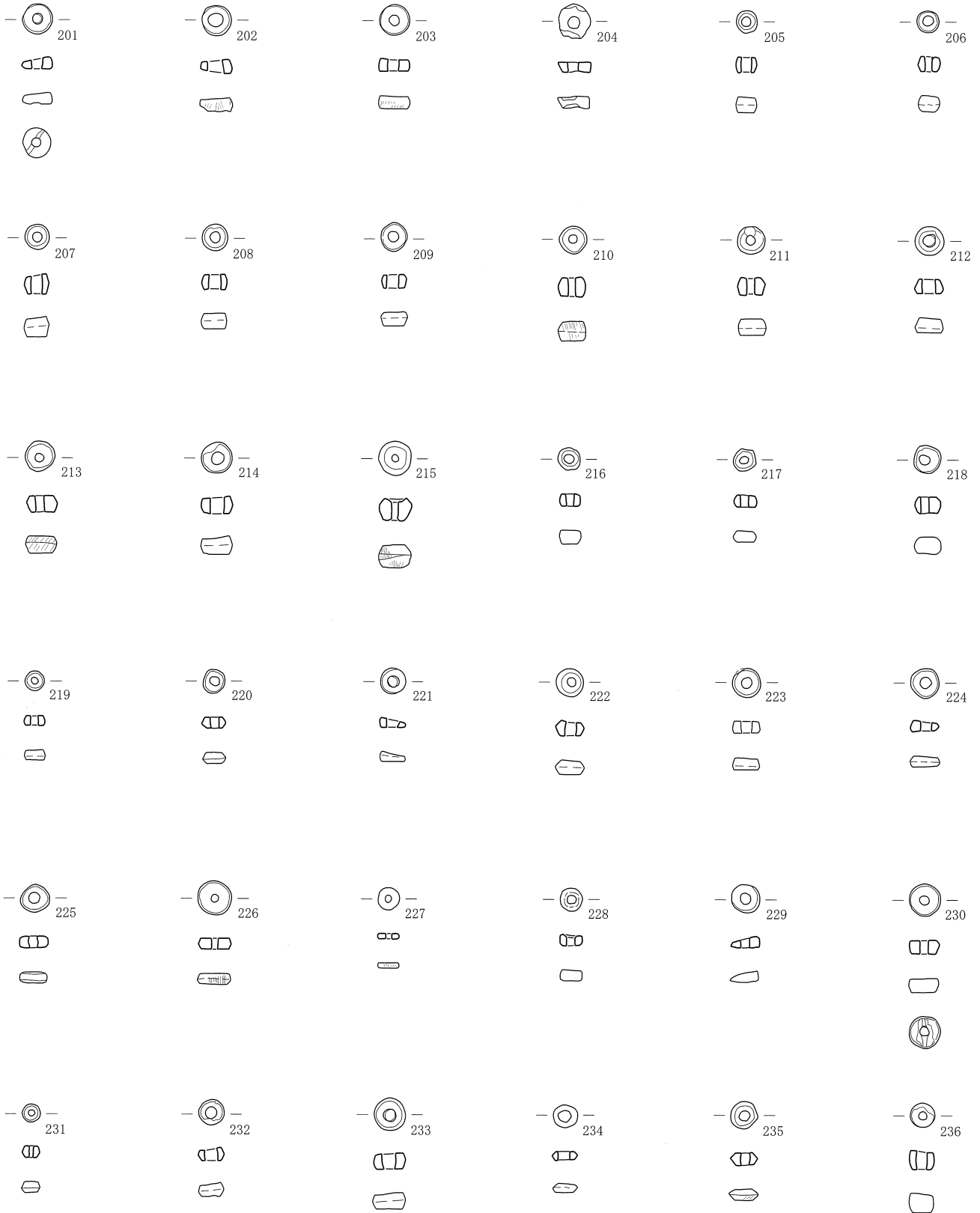


第134図 祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (1)



0 1:1 5cm

第135図 祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (2)



第136圖 祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (3)

ある。意図的に土器内部へ納められていたものかどうかは疑わしい。なお、出土した土器の位置は第124図に記した。

154～164は厚さが直径の1/2以上で側面に稜線を持つ白玉である。側面に稜が認められるものの、多くは丸みがあり明瞭でない。一部に側面に研磨痕が認められるものがあり、稜線の上下で研磨の方向が異なる。165～173は厚さが直径の1/2以上で側面に稜を有しない筒状を呈す白玉である。174～187は厚さが直径の1/2未満の扁平な白玉で、側面に稜を有する。扁平な白玉には175のように上下面と稜線が平行とならず片面が傾斜しているものが一定量存在する。188～204は厚さが直径の1/2未満で側面に稜を有しない白玉である。193のように厚さ1mmに満たない極めて薄いものが存在する。こうした薄いものは乳白色を呈する滑石を素材としている。

205～230は15トレンチ西側ベルトから出土した白玉で、205～215は厚みがあり側面に稜線を有する白玉である。215は研磨工程によるものか稜線が2本ある部分がある。また、片面の紐孔周辺が窪んでいる。216～218は厚みがあり側面にやや膨らむが、稜線は認められず研磨痕も観察できない。219～226は扁平で側面に稜を有する白玉である。220は稜線が明瞭で、221は片面が著しく傾斜している。227～230は扁平な白玉である。231～236は19トレンチ南側ベルト出土の白玉で、235のように扁平で明瞭な稜を有するもの、236のように厚みがあり稜を持たないものなど各種ある。

S-18 (第137～142図、図版72～73・85～86)

【遺構】

AA-20グリッドの調査区北端で検出した。大部分が確認調査19トレンチの掘削箇所にあっており、一部は確認調査時において出土状況の実測、遺物取上を行った。なお遺物の出土レベルは祭祀遺構S-01よりも全体的に低い位置にある。

S-18は東西方向約2.5m、南北方向約1.4mの範囲に集中して約220点の遺物が出土している範囲である。出土レベルは標高4.95mから4.65mの約30cmの範囲にある。なお、北側は調査区端部にあたり未調査のため、南北方向の拡がりは不明である。

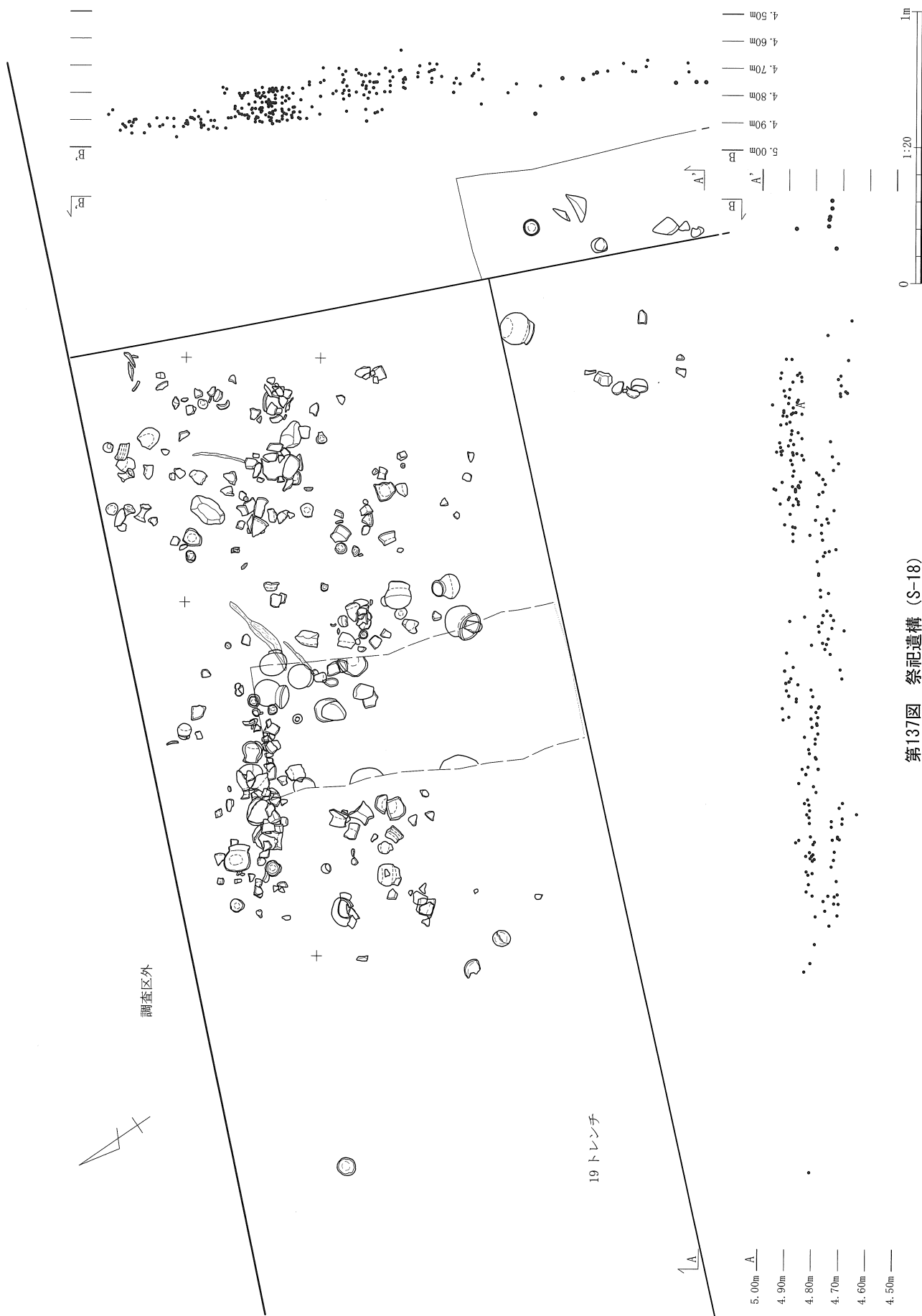
この範囲の中にもさらに遺物の粗密があり、幾つかの単位に分かれると考えられるが、調査の段階では掘り込みの有無や埋没状況等を確認することはできなかった。なお、この平面での粗密は垂直方向でも確認できるため、一括の単位を示す可能性がある。

垂直分布をみると、北側の標高4.95mを最高として南側へ向けて低くなる状況が看取される。

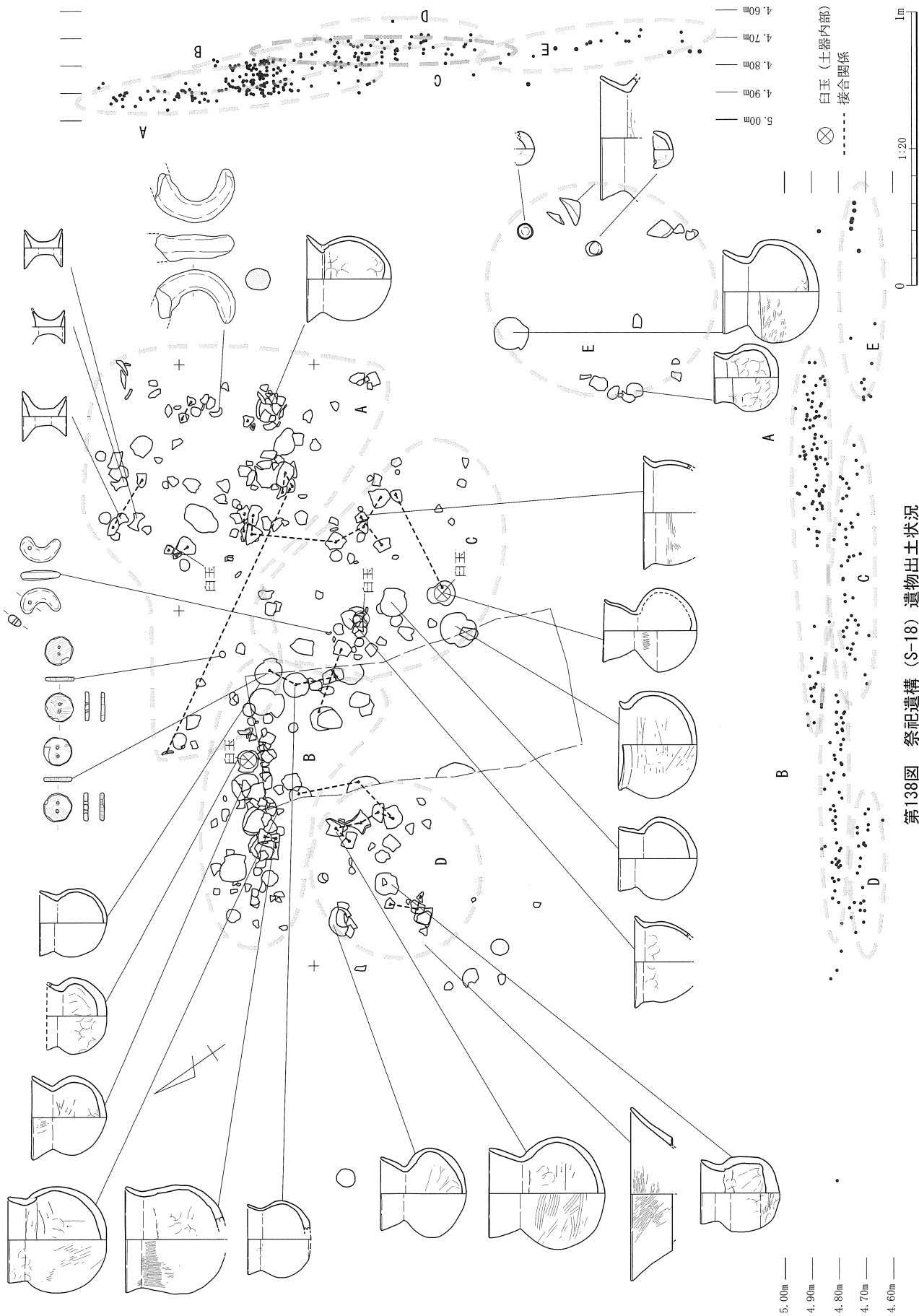
以下では、出土遺物の平面分布及び垂直分布、接合関係を勘案してA～E群に分け、出土状況を報告する。なお、この分類は発掘調査における出土状況に基づくものの、図面上から推定した部分も大きい。

A群はS-18の北東側の南北1.0m、東西1.4m、標高4.90m前後の上下10cmの範囲に出土した遺物群である。土師器のほか器高5cm以下の手捏土器(坏・高坏・器台形)、土製勾玉を含み、30cmほどの空白を挟んで西側では数点の土器片と小型の有孔円板2点が出土している。検出及び出土状況では他群に比べ破片の状態で出土した土器が多く、接合率も低い。土器の他に10～20cm大の礫2点がある。なお弥生中期の甕口縁部片が1点混入していた。

B群はS-18の北西側にあり、南北0.5m、東西1.0m、A群よりもやや低い標高4.80m前後の8



第137図 祭祀遺構 (S-18)



第138図 祭祀遺構 (S-18) 遺物出土状況

第2節 遺構

cmの範囲で出土した遺物群である。小型丸底壺等器高の低い土師器や手捏土器で構成される。S-18の範囲の中でも完形品が多く、遺物の平面・垂直分布とも密度が高い一群である。

C群はS-18の南側、A群の南にあり、0.8m四方のB群よりもやや低い標高4.75m前後の10cmの範囲で出土した遺物群である。小型丸底壺が完形でまとまって出土している他、石製勾玉が1点、ガラス玉が出土している。その他、手捏土器がある。

D群はS-18の南西側、B群の南にあり、南北0.5m、東西0.6m、C群よりもやや低い標高4.72m前後の10cmの範囲で出土した一群である。小型丸底壺のほか、壺形土師器の口縁部片が出土しているが破片が多い。

E群はS-18の南東側、A・C群からやや離れて東南方向に幾つかの土器がある。1点は完形の小型丸底壺で口縁部を斜め下に向けている。位置的には樹木根(S-19)にも近いが、レベル的にはS-19周辺出土としたものよりも高い位置にある。確認調査15トレンチ西側ベルト及び19トレンチ南側ベルト中にあたり、壺はb-1層及びd層にまたがって包含されていた(第118図)。

調査中の白玉検出はA群における1点のみであったが、いずれの群においても掘削時に採取した土壌の水洗選別によって滑石製管玉・白玉が多数検出されている(11表)。白玉は3点が土器内部(241・254・268)から出土した。水洗選別で検出した白玉は、S-18の中でも下位にやや多い。

S-18の範囲で出土した土器の接合状況を示す(第138図)と概ね各土器群内の範囲内で接合している状況が看取されるが、隣接するA群とC群、B群とC群間では群の範囲を超えて接合している。平面・垂直分布に前述のようなまとまりがあり、また各群において出土遺物の構成に差異があることは一括性を示すと考えられるが、土器の上では各群の時期差を見いだせるほどの差異はなく、S-18という土器集中遺構全体での埋納あるいは廃棄後の遺物群の埋没の時期は、短時間であった可能性がある。

【遺物】

各群毎の出土遺物は第139～142図に示した。遺物の説明は一括して概ね種別、器種毎に行う。

第139図～142図はS-18出土の土器及び土製品、石製品実測図である。

第139図237～239は甕で、口縁は直線的に伸び、頸部で屈曲する。内器面頸部以下はヘラケズリを行い、器壁は薄い。240～246は器高10cm前後の小型甕と見られる。240は内外器面にハケメが残っている。241は頸部内器面に明瞭な接合痕が残り、この部分だけ器壁が厚い。242は弱く屈曲する頸部を持っている。243は短く外反する口縁部を持ち、体部中位に最大径が来ている。底部は丸みを帯びている。244～246は頸部直下に体部最大径がある。

第139図247～第140図275は壺である。250の体部はほぼ球形である。251は接合でほぼ復元できたものである。わずかに底が尖り、体部最大径と口径はともに9cm前後である。ナデ調整で丁寧に仕上げられている。252は頸部の接合痕が明瞭に残る。253～255は安定感のある丸底である。256は壺の完形資料である。口縁はつまみ出したように短く外反している。調整は内外ともヘラケズリで、殊に外面はナデ調整と併せて丁寧に仕上げられる。257は内器面に所々ヘラケズリ調整が見られる。

259・260は安定感のある丸底の底部を持っている。261は平底を意識した作りで、外底より

も内底が平坦に作られる。肩部や体部下位などが角張った器形で、器壁は厚い。262は強く外反する口縁と見られる。263は頸部片で、全体が摩滅している。265はほぼ完形の資料で、口縁断面には凹凸があり、外見はわずかに膨らんでいるように見える。尖り気味の丸底を呈す。266は口縁が直線的に大きく開いた器形である。267は頸部以下が残る資料で、肩部が張る器形である。268は残りが良く、一部が割れているだけであった。口縁の中位で膨らみを持たせ、さらに口唇部で外反する。丁寧な仕上げである。

269～271は小型丸底壺で、口唇から頸部は直線的に伸び、体部は球形となる器形である。272は短めの口縁が直線的に広がり、肩部が張る器形である。細かいハケメ調整を行っている。273はほぼ完形に復元しているが、底部をわずかに欠く。意図的な穿孔の可能性はある。274は球形胴となる体部～底部で、器壁は薄い。275は二重口縁と見られる壺の口縁部である。器壁が薄く、屈曲部をさらに薄くしたため、この部分で破損している。

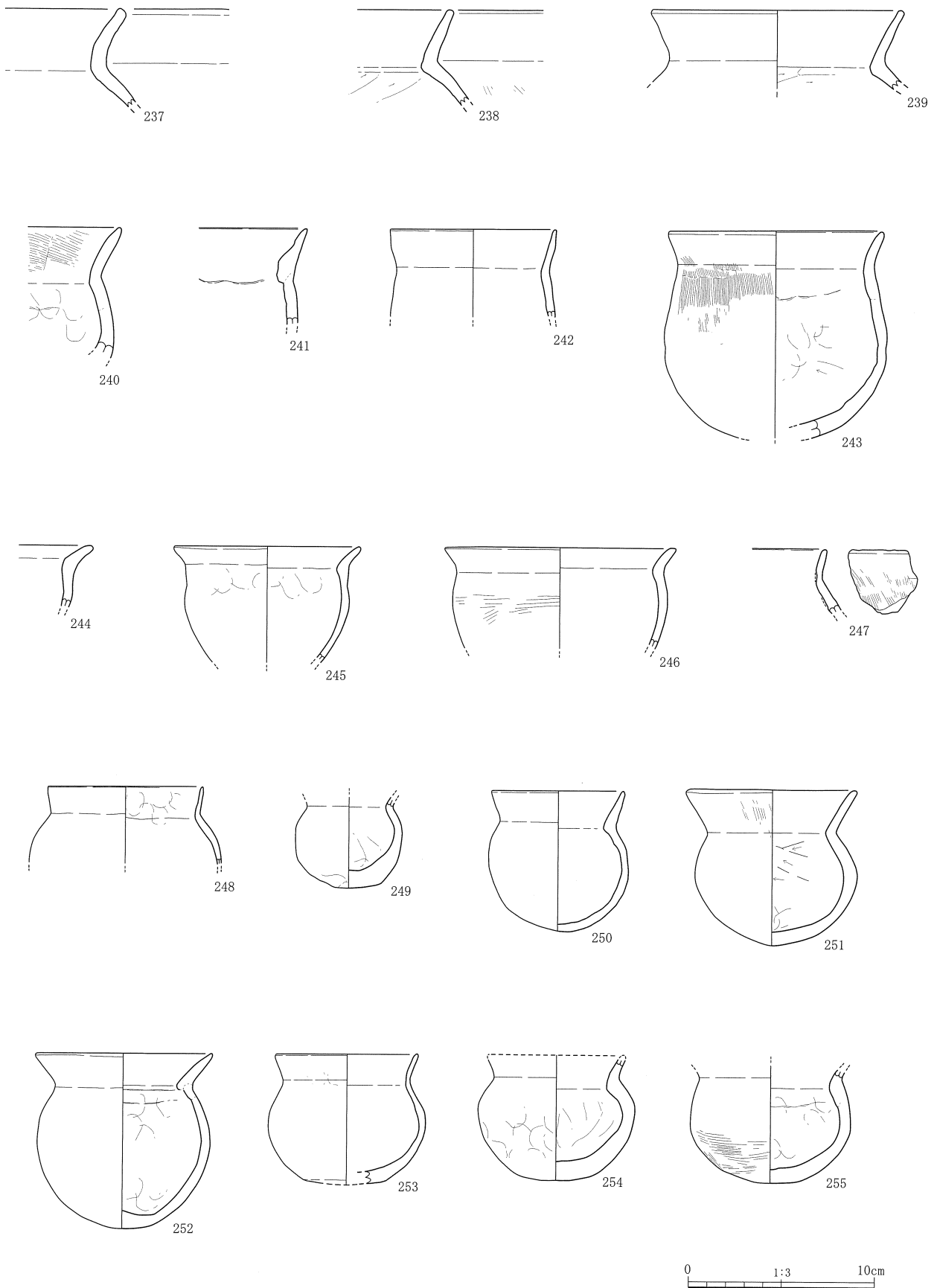
276はゆるやかに立ち上がる鉢である。

第141図 277～311は手捏土器である。277～281を壺形、282・283・289～305を坏形、284～288・306を鉢形、307～311を高坏或いは器台形としている。概ねこれらの器種を模して作ったと考えられる。277～279は口縁部が短く、口唇部はやや尖る。また最大径は肩部にあり、やや長胴の器形となる。280は頸部を持たない壺形の口縁部で口唇が尖る。281は無頸壺で、口縁が内湾している。全体に厚ぼったい。282は尖底の坏形である。口縁は弱く内湾している。283は底部で、半球形の器形である。284～287は口唇部を尖らせ、さらに外反させる事で、頸部を表現している。また、平底かそれに近い丸底の形態をとる284は外反の度合いが弱く、頸部の表現としてはわずかなものである。285～287は口縁部を明らかに外反させている。286は平底で、底部から直立しながら立ち上がり、口唇部は尖る。288は他の手捏土器と比べると器高7.6cmとやや高い。但し土師器の作りにはかなり粗雑である。口縁は緩やかに外反し、平底気味の底部となっている。外面底部付近はハケメ、体部以上はナデ調整を行っている。289は全面ナデ調整を施す。器壁は厚く、重みがある。290は口縁の外反度合いが場所によって大きく違っている。291～305は尖底気味で器高2～3cm、口径を復元すると3～5cmほどの大きさとなる。器壁の厚さや口縁形態に若干のばらつきは見られるが、基本的なサイズ、丸底、ナデ調整及び指頭圧痕による仕上げなど、同じ意匠によると考えられる。306は平底で、鉢形になるものか。

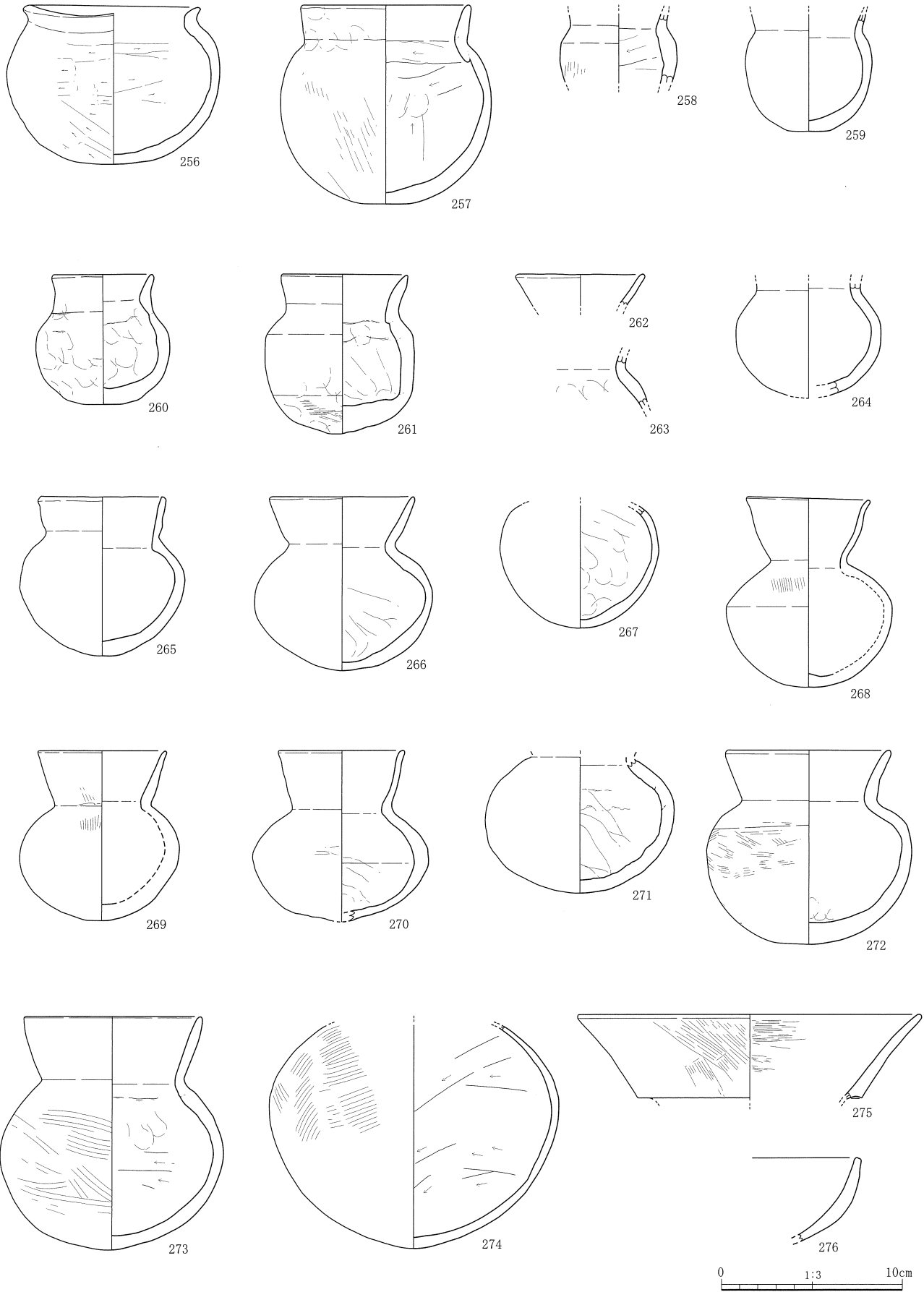
307～311は高坏或いは器台形としている。円筒の上下に坏を付けたような形で、上下の径はほぼ同じに作られる。わずかだが坏の深さには差がある。この差で上部または脚部を区別しているようである。手捏土器の中では比較的丁寧に作られる。312は弥生時代中期の甕口縁部である。遺構埋土に混入したものと見られる。313は土製勾玉である。頭部を欠いている。尾部は長く、半円形を呈する。

314・315は小型の有孔円板である。2つとも直径16mm、厚さ2～3mmで、二個の穴を穿っている。石材は片岩類と考えられる。314は孔の間隔が3.5mmと狭い。表裏面共にほとんど平坦に研磨されているため、断面形状は板状となっている。315は確認調査時に出土した。孔の間隔は5mmと広い。断面は板状である。分析の結果、石材は緑色片岩類と見られる。この2点はS-14出土の有孔円板と形状は相似形であるが、大きさ、石材の点で異なる特徴をもつ。

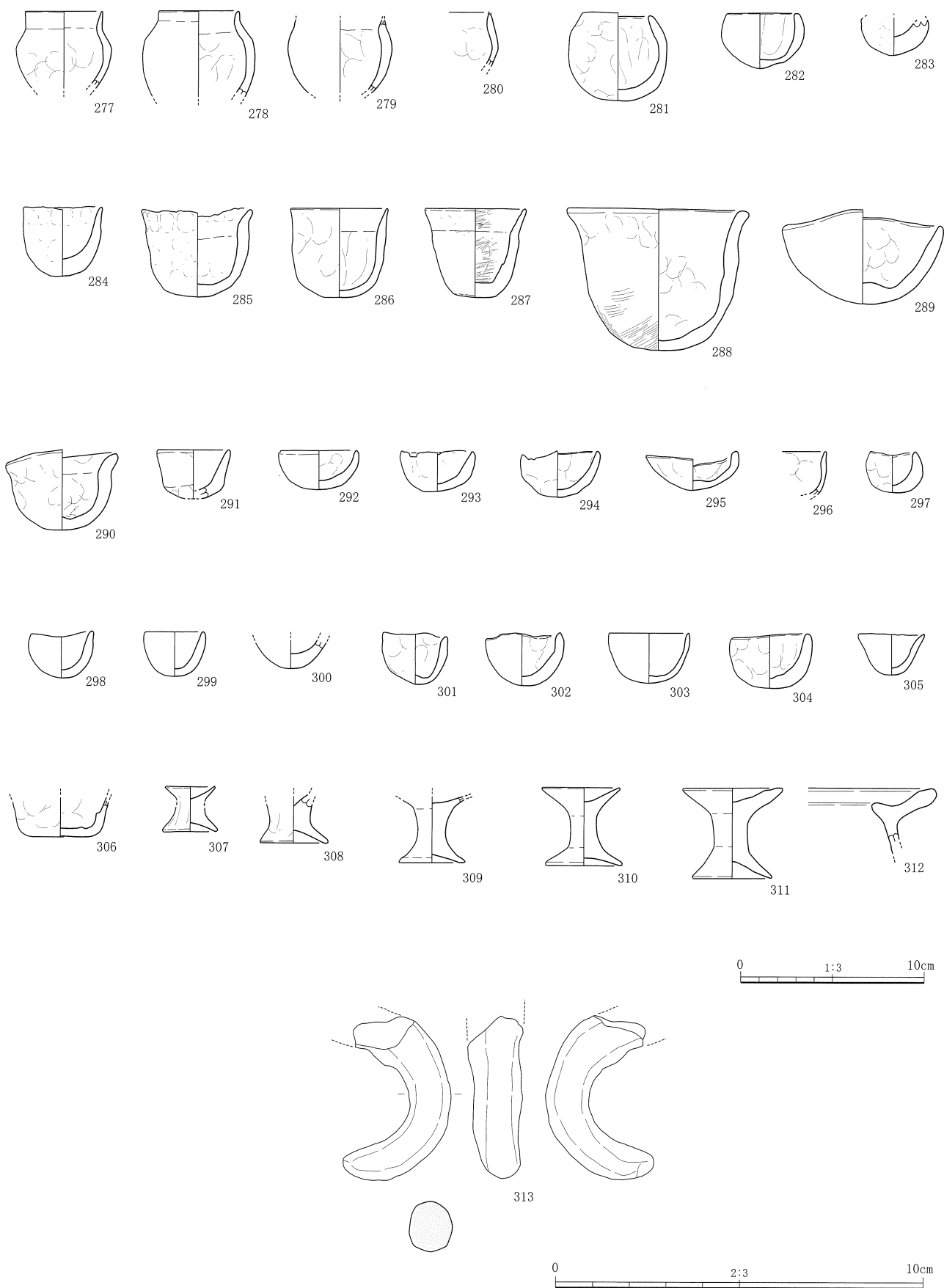
316は片岩類を利用した完形の勾玉で、半円形を呈す。長さ2.2cmで、頭部のみやや太い。



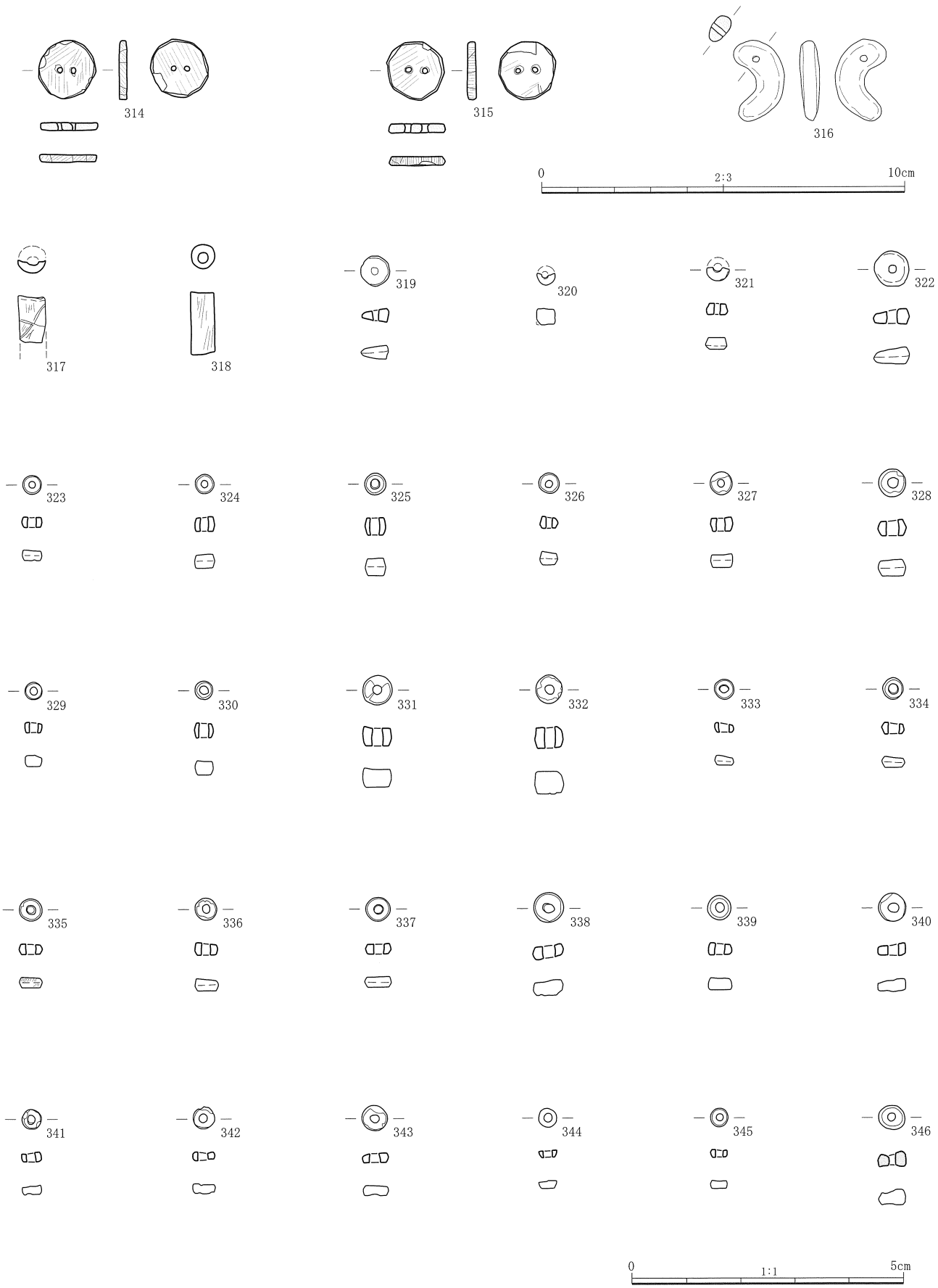
第139図 祭祀遺構 (S-18) 出土遺物 (1)



第140図 祭祀遺構 (S-18) 出土遺物 (2)



第141図 祭祀遺構 (S-18) 出土土器 (3)・土製品



第142図 祭祀遺構 (S-18) 出土石製品

第2節 遺構

317・318は管玉、319～345は白玉、346はガラス玉である。319～321の白玉は土器内部から検出、322は発掘調査中に検出し、それ以外は水洗選別により検出した。出土した白玉総数は完形52点、破片38点である。直径平均は4.1mm、厚さ平均2.2mm、孔直径1.6mmで、厚さと直径の比は1:2.06である。厚さと直径の比率、側面の稜線の有無によって分類した。側面に稜を有しないものが大半で、85%以上を占める。

317・318の管玉は直径、口径ともほぼ等しい。317は外面にX字状の線刻があるが、意図的なものかどうかは判断できない。

319・322は比較的直径が大きく上下端面が平行にならず傾斜している。323～328は厚さが直径の1/2以上で側面に稜を有する白玉である。329～332は厚さが直径の1/2以上で側面に稜を有しない白玉である。333～337は厚さが直径の1/2未満の扁平なもので、側面に稜を有する。端面が傾斜するものが存在する。338～345は扁平で側面に稜を有しない白玉である。管玉及び白玉の石材はいずれも滑石で、色調は乳白色から暗緑色のものまで様々である。

346は淡いエメラルドグリーンガラス玉で、調査Ⅲ区内からのガラス玉の出土はこの1点のみである。断面形状はやや扁平で丸みが少なく、白玉に類似する。

S-01（第143～145図、図版17～18・86）

【遺構】

祭祀遺構S-01は確認調査時に15トレンチにおいて検出された遺物の集中であり、幅1.3mのトレンチでの検出のため全容は不明であるが、確認できる範囲で南北方向には約1.7mほどの範囲に広がる。土師器（甕・壺・鉢・高坏・坏）、手捏土器（鉢・高坏）により構成される。検出した範囲においては比較的完形の手捏土器が多く、土師器も器高の低い丸底壺などであり、祭祀遺構の一部であると考えられる。

本調査では調査区外のため未調査であるが、本調査で検出した祭祀遺構との関連上、ここで出土状況及び遺物について詳述する。なお検出時の状況については第Ⅲ章第2節第2項に記した。

【出土状況】

出土位置は調査区北側端部に接する調査区外にあり、本調査におけるグリッドではAA-20グリッド北東部にあたる。層位的には確認調査におけるⅢ-3層およびⅢ-4層に含まれる。平面及び断面観察において明確な掘り込みは確認できなかった。

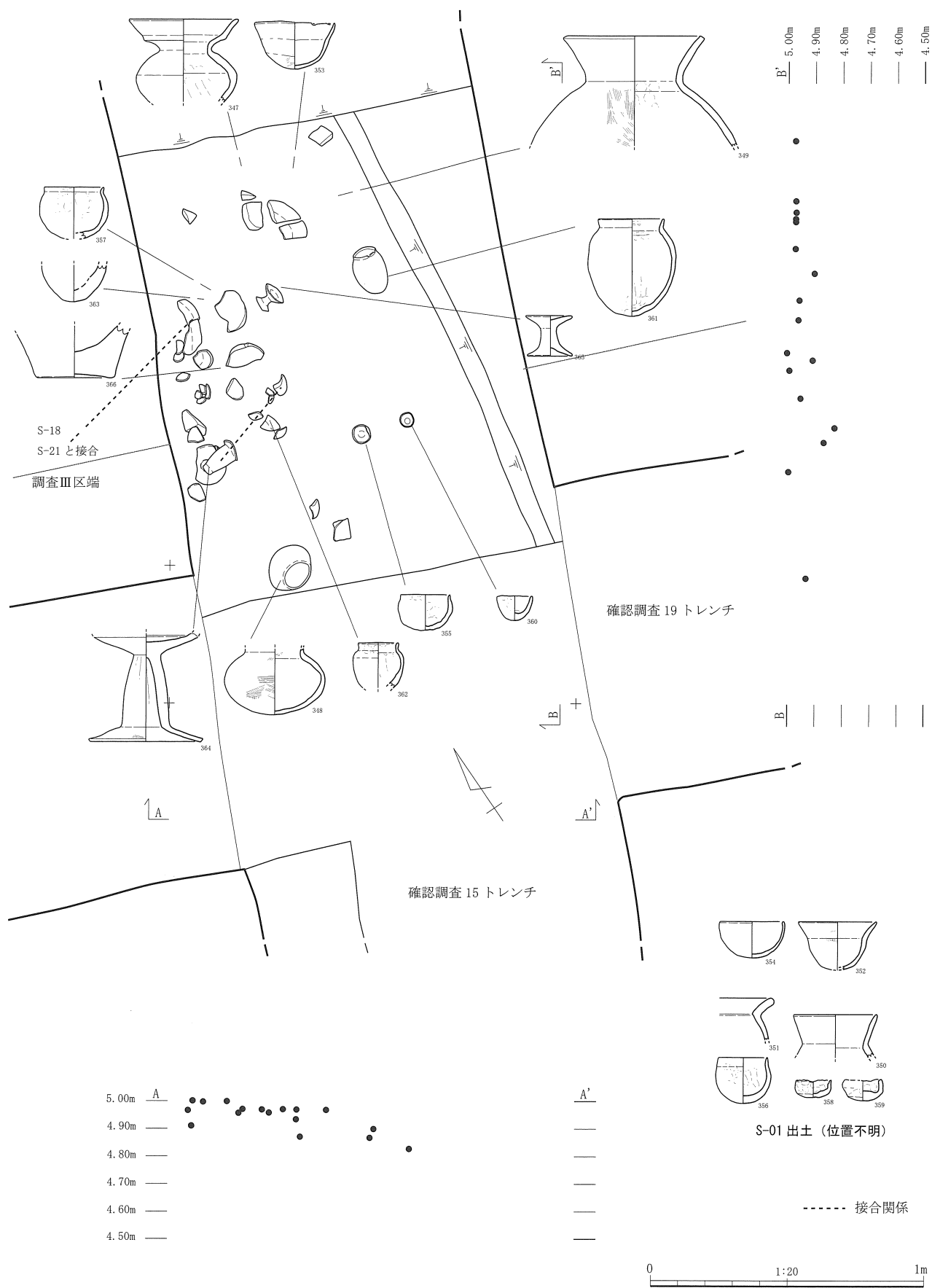
遺物はトレンチ幅の西側3分の2ほどに広がっており、トレンチ西壁に沿って0.8m×0.5mほどの集中部がある。

遺物の垂直分布をみると、西側が高く標高5.0m程から東側に向けて標高4.85mまで下がっており、上下で20cmほどの差がある。ただし、確認調査時の記録では出土した土器の上端でレベルを計っており、また取上も土器1点毎ではなく、数点を一括した単位で取り上げているため、大まかな傾向を示しているに過ぎない。重機によって掘削された排土中からの一括取上げ遺物も少なくないことを考慮すると、上述の平面及び垂直分布はあくまで検出された状態であり、本来の状態ではない。完掘できていないこととも併せ、断片的な資料であることに注意が必要である。

なお、古墳時代の遺物集中部に混じって弥生中期の甕口縁部と底部片が出土しており、口縁



第143図 祭祀遺構 (S-01)



第144図 祭祀遺構 (S-01) 遺物出土状況

部は S-21 の第 151 図 379 の甕口縁部と接合する同一個体である。混入の要因は不明である。

【遺物】

第 145 図 347 ～ 366 は確認調査 15 トレンチにおいて遺物集中箇所として祭祀遺構 S-01 を認め、取り上げを行ったものである。

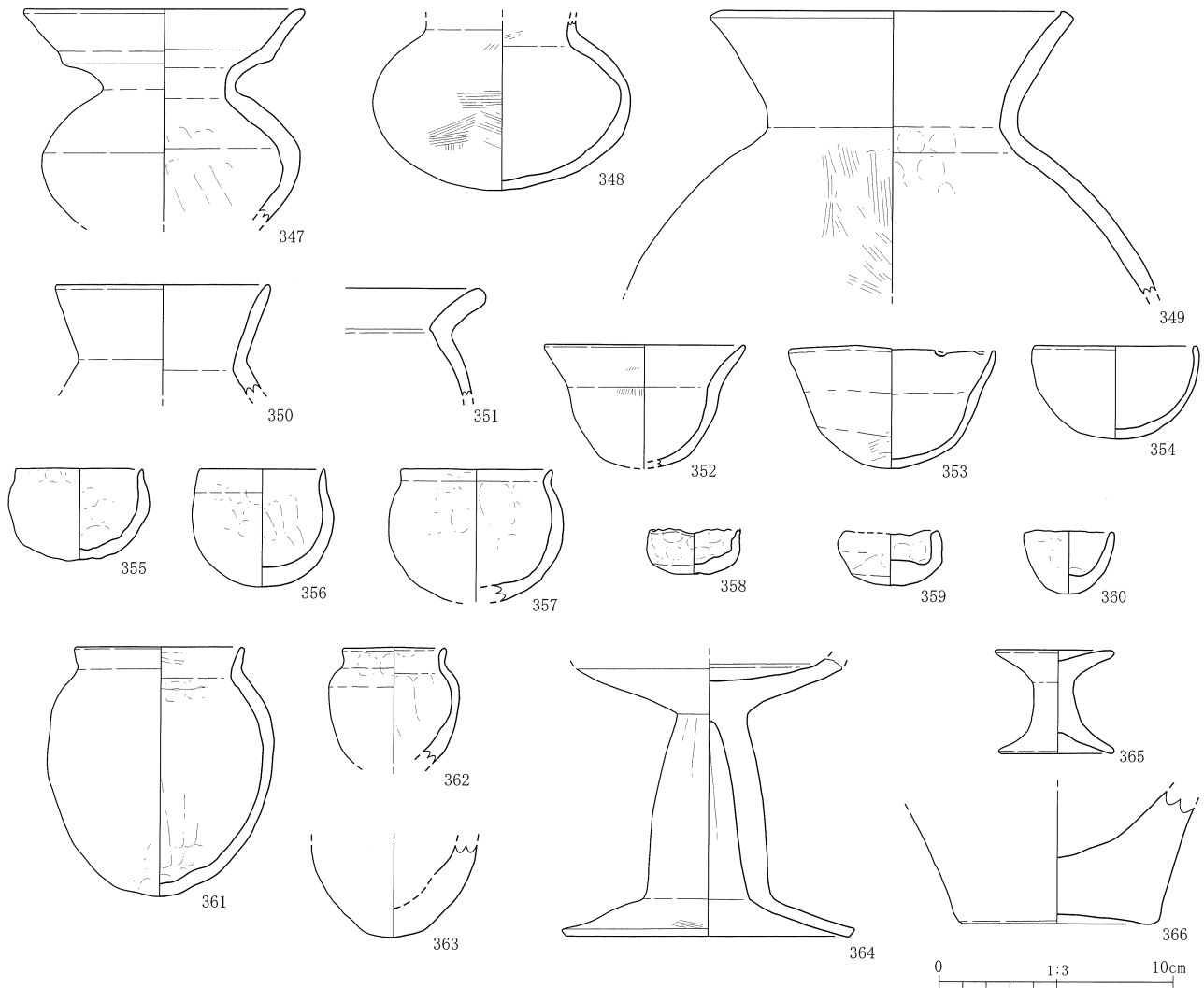
347 は二重口縁壺で、口縁部内外器面に明瞭な段を持ち、体部中央が張る。348 も壺形土器で、体部形状は 347 に似るが、頸部より上を欠くため、口縁形態は不明である。349 は単純口縁壺で、口唇内側がわずかに尖る。肩部から体部は丸く張り出している。350 は口唇が尖っている。351 は頸部で強く屈曲する。352 ～ 360 は手捏土器である。

352 は口縁が大きく開く器形をしている。353 は頸部にわずかな稜を有する。354 は頸部を持たない半球形の体部で、内湾する。355・356 は頸部でわずかに屈曲している。357 は頸が短い壺形である。358 ～ 360 は特に小さく浅い坏形である。

361 ～ 363 は小型の甕で、やや長胴となる。363 は内底部に付着物がある。

364 は高坏の坏底部から脚部で、坏体部との接合部で破損している。365 は手捏土器で、高坏か器台を模したものと見られる。

366 は弥生土器の底部で、若干上げ底となり、甕棺の可能性はある。



第145図 祭祀遺構 (S-01) 出土遺物

樹木根 S-19（第 146 ～ 148 図、図版 74・87）

【遺構】

樹木根 S-19 は長さ約 2.4m、幅 0.4m の自然木とその周辺に広がる細長い樹木根を総称する。いずれの木片にも人為的な加工は認められない。弥生時代～古墳時代に当地に存在した樹木の根部が遺存したものと考えられる。

【出土状況】

出土位置は AA-20 グリッド東側にあたり、祭祀遺構 S-01 の南、祭祀遺構 S-18 の東側にあたる。なお、S-18 では土器群と同レベル及びその下位から同様の細長い根が出土しており、こうした根や樹皮等の木片の広がっている範囲は東西方向で 3 m 以上である。また確認調査時には S-01 の北側で重機が掘削した排土から長さ約 1.5m、幅 0.6m の樹木根（図版 87）が出土しており、南北方向では 5 m 以上の拡がりがあったことがわかる。なお S-01 の遺物出土レベルと樹木根の出土レベルとの差から、S-01 の直下にも樹木根が存在しているとみられる。さらに 15 トレンチを中心として付近からは球形のクスノキとみられる種子が 10 数点出土した。水洗選別でも S-18 部分の土壌から多くの木片及び種子が検出され、S-14 付近の土壌からも少量ではあるが同様の木片、クスノキ種子が出土している。

調査区で検出した S-19 の最も大形の根の形状は南側に向かって先細りながら枝分かれしている状況にあり、その北側が樹木の中心部とみられる。またそれぞれの細長い根部分は軸をやや変えながら北東 - 南西方向を示している。確認調査時に出土した樹木根は先端が北側を向いていたらしいので、これらのことから樹木の幹があったであろう中心部は調査区北側の S-01 の東側付近にあったと考えられる。なお、東側の状況は面的な掘り下げが不十分であり把握できていない。

祭祀遺構 S-01 の下位にも存在した可能性が高いが、確認調査時には土器を取り上げた段階で掘削を止めているため確認できていない。

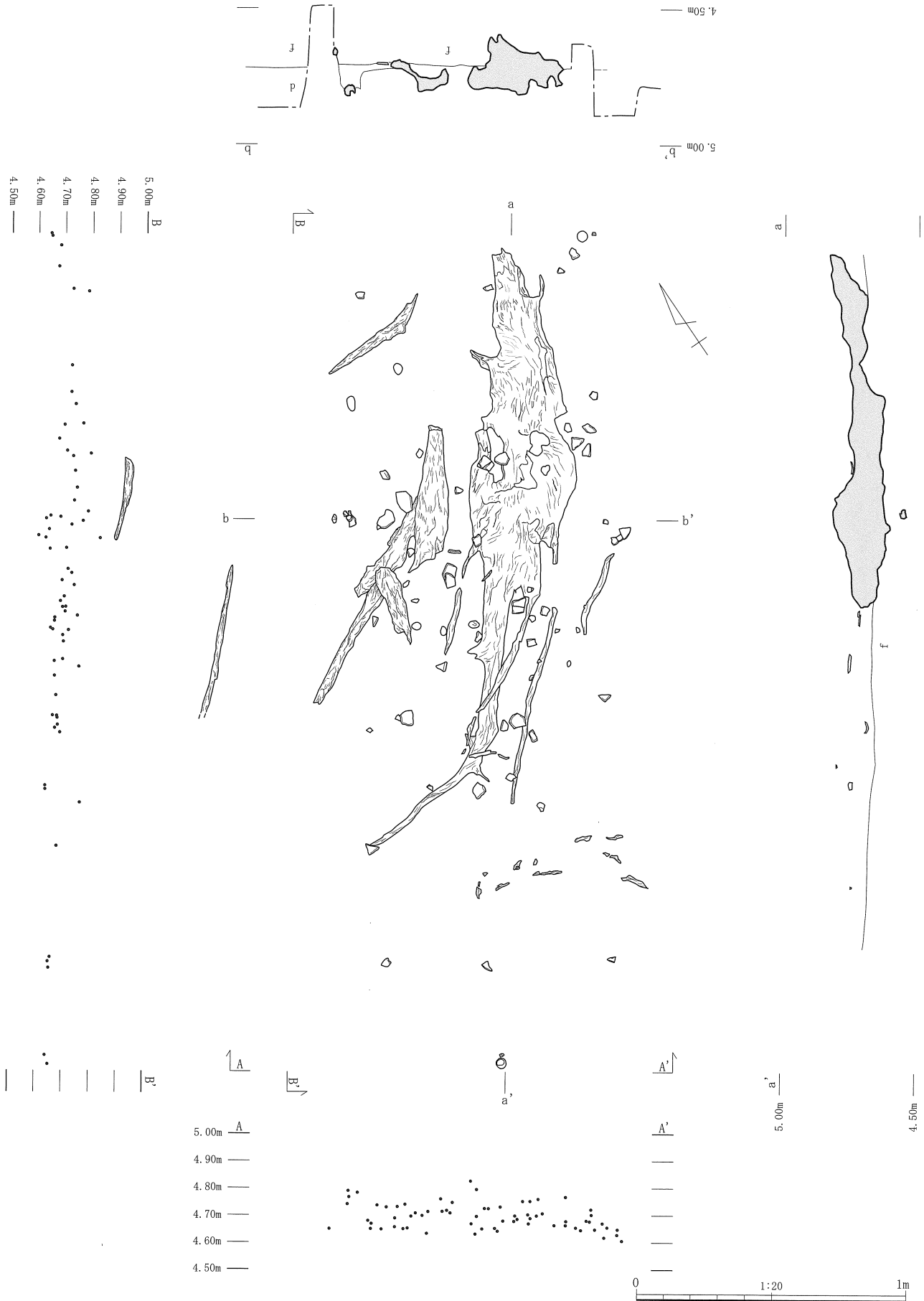
層位的には樹木根の下部が f 層の上位に、上部が d 層の下半部に包含されており、北側端部で標高 4.83m を計り、南へ向けて傾斜している。確認調査時に出土した樹木根もほぼ同じレベルとみられる。

樹木根の周囲では、ときに樹皮に密着して数十の土器片、その他 10 点前後の径 2 ～ 5 cm の安山岩円礫が出土した。土器は小破片であり帰属時期の峻別が困難であるが、焼成や胎土の特徴から弥生土器と考えられるものが多い。これらの土器片と樹木根の関係は判断が難しいが、倒木ではなく樹木根であることから同一レベルで出土していることがそのまま同時期とはし難い。

遺物の出土位置は S-19 の中央付近にやや集中しているが、多くは小破片であり、内外面が摩滅しているものも認められる。なお手捏土器は完形であるが、このまともりや樹木根自体とはやや離れた位置で出土している。接合した土器片は樹木根をまたぐような形で接合しており、10cm 以上の高低差をもって接合しているものもある。弥生土器が多いが、後述する祭祀遺構 S-21 とは遺物の出土レベルが異なり、また間に遺物が希薄な空間が存在することから関連する可能性は低いものと考えられる。

【遺物】

第 148 図は S-19 周辺出土土器である。

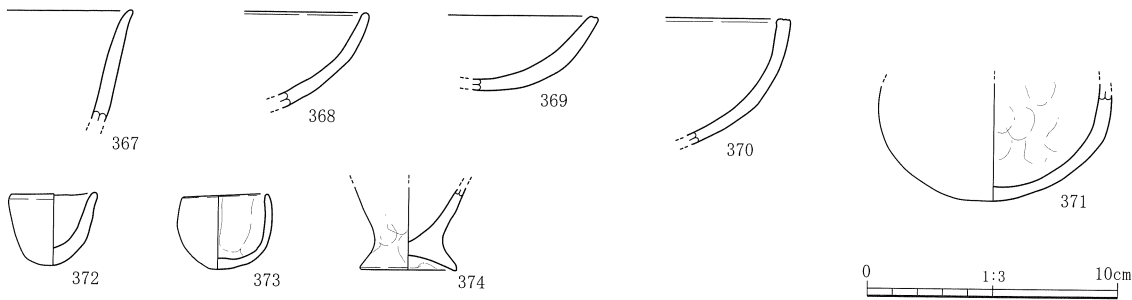


第146図 樹木根 (S-19)

第2節 遺構



第147圖 樹木根 (S-19)



第148図 樹木根 (S-19) 周辺出土遺物

第148図367は高坏の口縁部である。体部から口縁部へは直線的に伸び、口縁端部はわずかに器壁を薄くしている。

368は深めの鉢と見られる。口縁端部は丸い。369は鉢である。器高が低く口径は大きい器形と見られる。口縁端部は丸い。370は口縁がほぼ直立する鉢で、口縁端部は平坦で内外にわずかに突出する。体部下半はハケメ後ナデ調整を行っている。

371は小型壺の底部と見られる。体部中位に最大径を持っている。表面は摩滅のため、調整等は不明である。

372は手捏土器の坏である。尖り気味の丸底で、全面を細かいナデ調整で仕上げている。373は手捏土器の坏である。丸底で口縁部を薄く作る。374は手捏土器脚付きの鉢または甕を模したと考えられる。体部の立ち上がりは急で直線的である。これに対して脚部は浅く、脚径も大きい。

S-21 (第149～153図、図版75・88)

【遺構】

祭祀遺構S-21は南北約6.0m、東西約3.5mの範囲に広がる遺物の集中部であり、弥生土器(甕・壺・碗)、手捏土器、土製品(土製勾玉)により構成される。これらの遺物はいずれも破片であるが、黒褐色を呈するf層上面に張り付くような状態で出土し、全体的に弥生時代の遺物出土が極めて少量かつ散漫な調査区内において特異な密集状態を示している。また祭祀遺構S-14の直下にあたり、土製勾玉、手捏土器の存在と併せ考えると何らかの祭祀遺構と捉えられる。

【出土状況】

出土位置はAA-20グリッドの南西部にあたり、層位的にはf層上面と、その上層であるh層・b-2層・c層・d層の下位との層界にあたる。

検出状況を概略すると次の通りである。祭祀遺構S-14の検出の過程において掘削したサブトレンチにより、S-14を包含層する下位に弥生時代中期の土器片が多数存在することが確認された。またこの拡がり是一部S-18の下層にまで広がっていることが確認できた。さらに、各トレンチの断面観察によって黒褐色を呈するf層の拡がりとは一致する傾向にあることが判明した。

土器片の拡がりには6m×3.5mの比較的広範囲に及ぶが、北側はやや疎で、中央付近の幅0.5m、長さ3.5m程度の範囲で帯状に密集する部分がある。この密集部の東側は確認調査のトレ

ンチに当たっており、また西側および南側に隣接するグリッドは時間的制約から十分な調査を行うことができなかった。確認調査においては弥生土器の出土は報告されておらず、東側には広がっていないか、あったとしても疎な状態で、西側についてもこの土器の拡がりはおそらくグリッド境の土層観察用ベルトの下位で収束するものと考えられる。

垂直分布をみると、北側が標高 4.7m 前後と高く、南側は 4.5m 付近へと緩やかに傾斜している。また東西方向では西側が標高 4.7m 前後と高く、東側へと緩やかに傾斜している。この傾斜の状況は黒褐色土層 f 層のそれと同様であり、両者の関連が考えられる。しかしながら、調査期間の関係上、平面的に f 層を検出した段階までで調査を終了したため、f 層内における遺物の包含状況やその時期等については不明とせざるを得ない。

遺物の器種ごとの出土状況では、土製勾玉 2 点はそれぞれ帯状集中部の中央付近にあり、手捏土器は北側の散漫な部分にあった。ジョッキ形は底部付近の破片を図示したが他に把手片も出土している。他に、土器片に混じって径 3～4 cm 程度の小円礫が 30 点前後出土しているが、その分布は土器片と同様の粗密を示し、帯状集中部に多い。

土器片の接合状況では、隣接する土器片同士が接合するものがある一方で、2 m を超える位置から出土した破片同士が接合するものがある。本来は帯状の密集部にあった土器が埋没の過程で散在した状況が看取される。接合状況で特筆すべきは、第 151 図 379 に図示した甕が、S-21 内部において 1.2m 離れた 2 点と接合し、さらに 3 m 離れた S-18 の D 群中央の 1 片、そこから 2.5m 離れた S-01 の 1 片と接合している。S-21 の 2 点と S-18、S-01 の土器片とは垂直距離でもそれぞれ約 5cm、約 25cm 程度の距離がある。古墳時代の遺物集中の中に 1 点ずつ混在するこのような出土状況を示す要因は不明である。

【遺物】

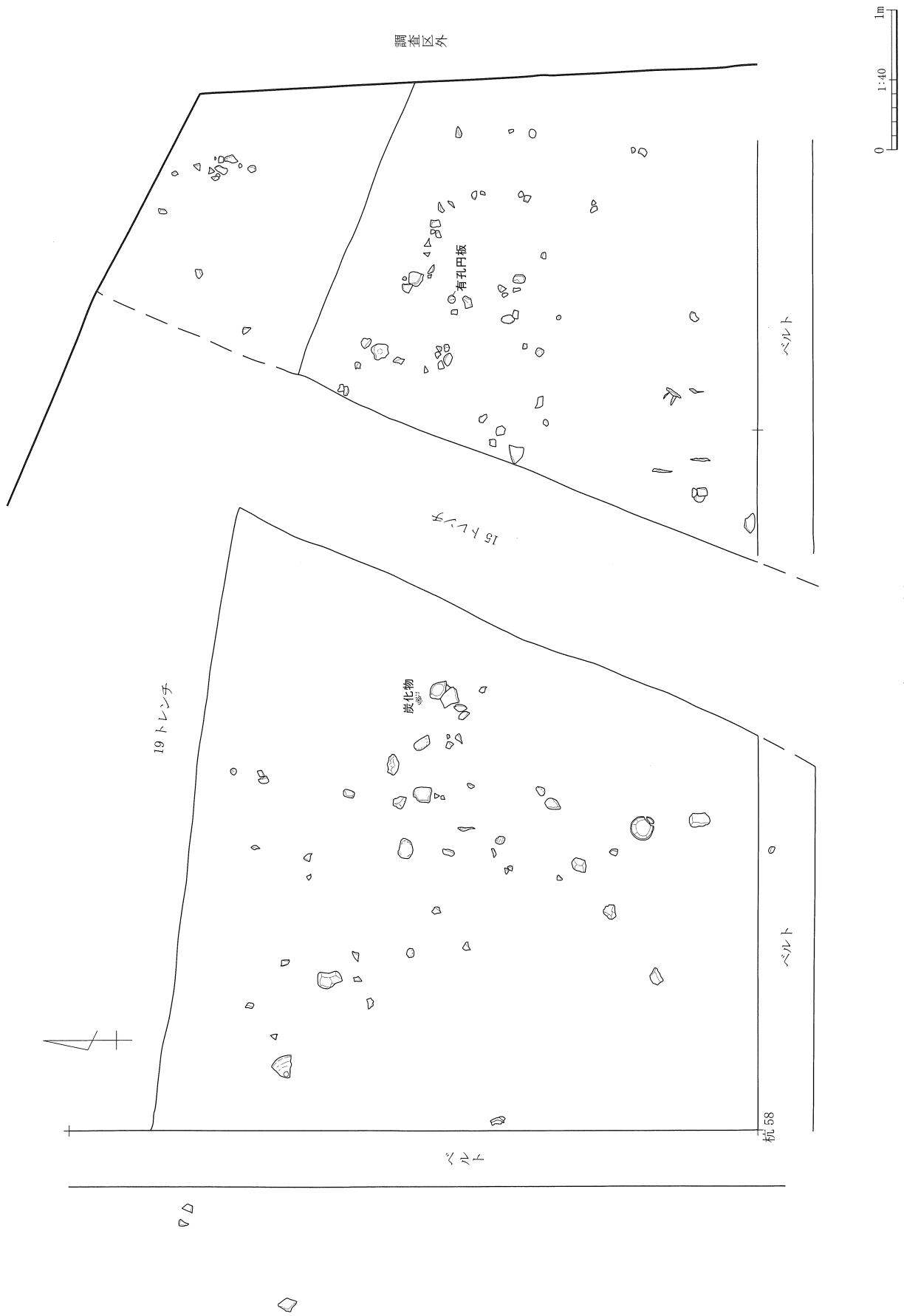
第 151～153 図は S-21 出土の土器・土製品実測図である。

第 151 図 375～385・388～393 は甕である。375～385 は口縁部が外側へ大きく張り出し、内側にも突出している。成形は内傾する口縁に粘土を貼り付けて行われる。377 は復元口径 30.4 cm で、細かいナデ調整を行っている。外器面には煤が付着している。378 は口縁端部が厚い。379 は内側への張り出し部で粘土接合痕を確認できる。381 は内外への張り出しが小さく器壁も薄い。383 は接合によって口縁付近が半周程度復元できたもので、復元口径は 24.7 cm である。384・385 は外側への張り出しが弱く、口縁断面が三角形を呈す。386 は平坦な口縁から強く屈曲し、頸部径は小さくなる壺である。387 は大型壺の口縁と見られる。388～393 は甕で、頸部を単純に屈曲させる器形である。くの字口縁といえるほど強調させてはおらず、391～393 のように内面が突出しているものもある。また、口唇形状は丸い。388～390 は頸部屈曲が緩やかである。391 は内器面に強い稜線が入る。392・393 は内面への突出を強調するもので、突出の下部にはわずかな段を有する。

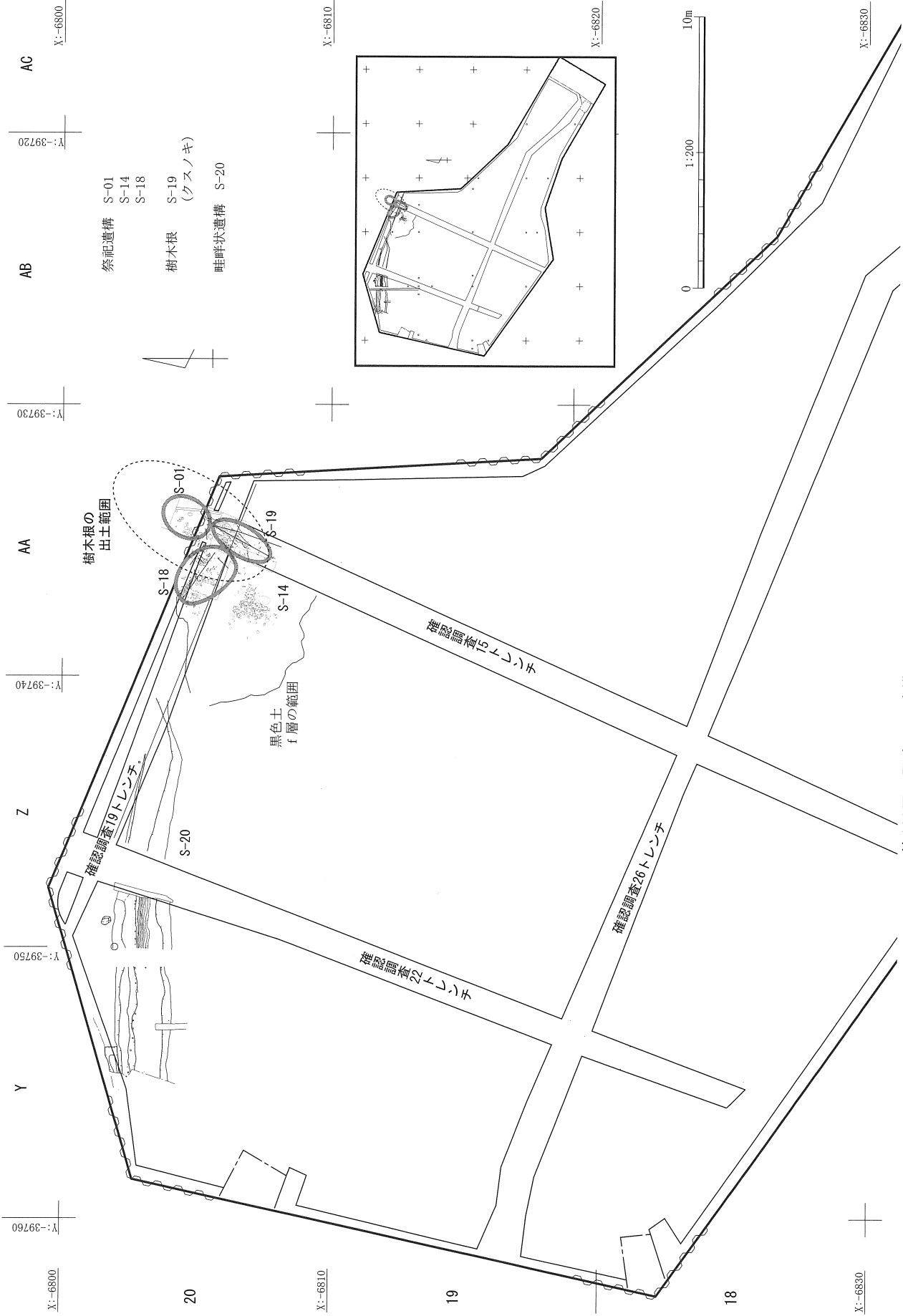
第 152 図 394～411、413・414、416・417 は壺である。394 は大きく外反し、口縁端部は四角い。395 は口唇部を上方へつまみ出すように成形している。器壁が薄い。396 は頸部で、器壁が薄いことから中型の壺と考えられる。397 は復元口径 18.6 cm、外器面頸部の屈曲はあまり強調していない。398 は復元口径 20.0 cm と 397 に近いが口縁が長く、器壁が厚い。第 153 図 399 は器壁が薄い口縁部で、口唇には沈線を 1 条巡らせている。400～406 はいずれも口縁端部は丸みを帯びるが途中で破損しているため、頸部の形状は不明である。器壁は 400 が薄く、401・402



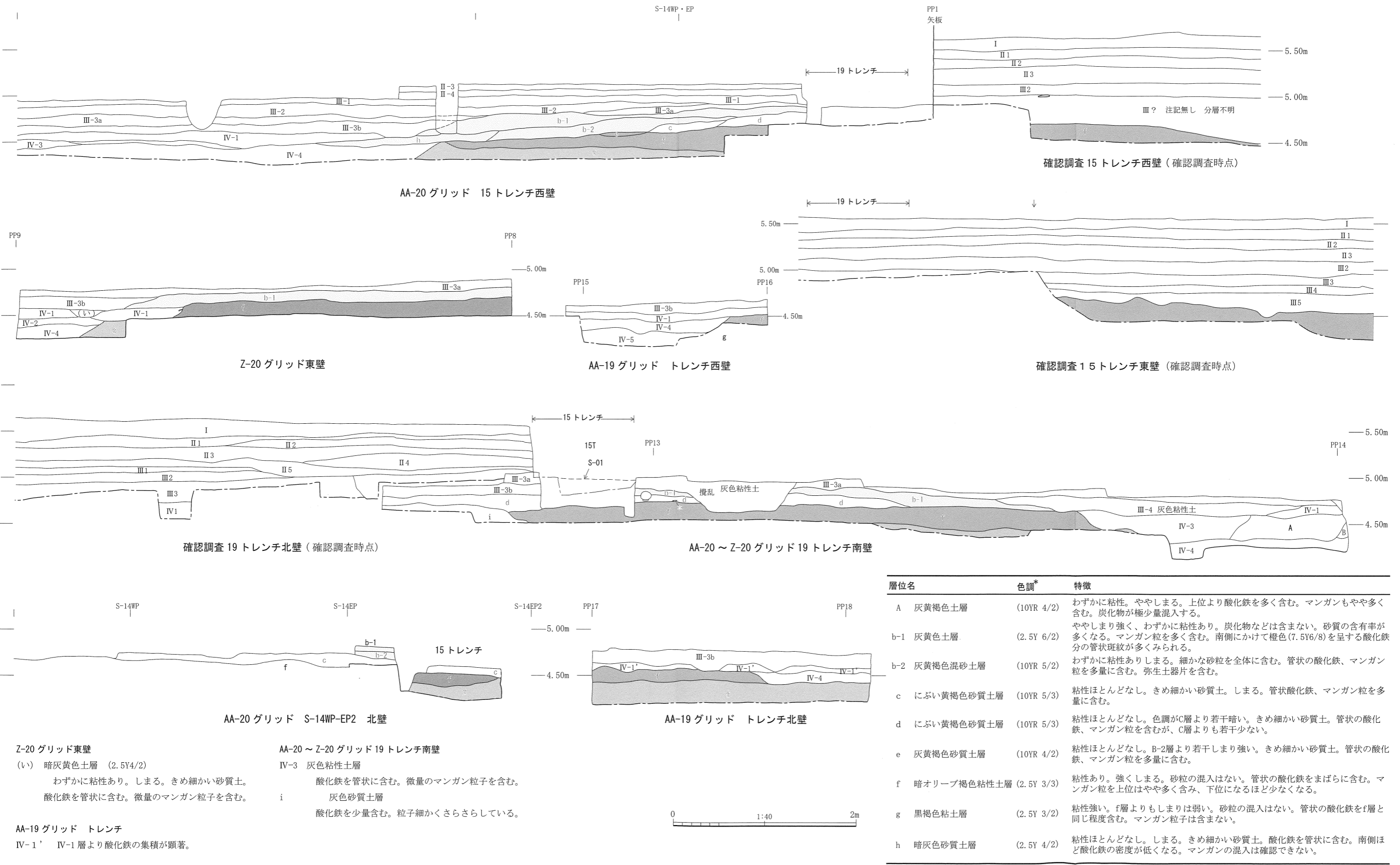
第149図 祭祀遺構 (S-21)



第115図 AA-20グリッド 遺物出土状況



第116図 調査Ⅲ区遺構配置図 (弥生～古墳時代)



第118図 祭祀遺構周辺土層堆積状況

*小山正志・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』 日本色研究事業株式会社

(3) 祭祀遺構周辺の土層堆積状況 (第118図、図版77)

祭祀遺構の下部には調査Ⅲ区のお他グリッドでは認められない土層堆積(b～h層)が認められ、これらは祭祀遺構を取り巻くように広がり、AA-20グリッドを中心に南北8m、東西8mほどの範囲に分布する。下部は弥生時代、上部は古墳時代の遺物を多量に含み、また酸化鉄及びマンガンの集積が著しいという共通した特徴がある。

Ⅲ-2層及びⅢ-3a層直下に堆積するb層は古墳時代の遺物を含み、S-14を覆う土層である。b-1層とb-2層に分けられる。b-1層は砂混じりで酸化鉄の管状斑紋およびマンガン粒が非常に多く、南側へかけて顕著に見られる。b-2層もb-1層と同様に細かな砂粒を全体に含み、管状の酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。h層はb-2層の南側に連なる土層で、b-2層に土質は近いが、色調がやや暗く、b-2層よりも酸化鉄の密度が低く、またマンガン粒の混入も確認できない。

c層及びd層は確認できる範囲で南北3m、東西5m程の範囲に広がる。どちらもにぶい黄褐色を呈するきめ細かい砂質土で、管状酸化鉄、マンガン粒を全体に含むが、d層はc層に較べやや暗い色調を示し酸化鉄、マンガンの量も少ない。c層はb-2層と同等の割合で酸化鉄、マンガン粒を含むがややしまりが弱い。c層及びd層は古墳時代の遺物を含み、S-18の覆土である。e層は灰黄褐色を呈する砂質土で、色調の他はc層とほぼ変わらない。

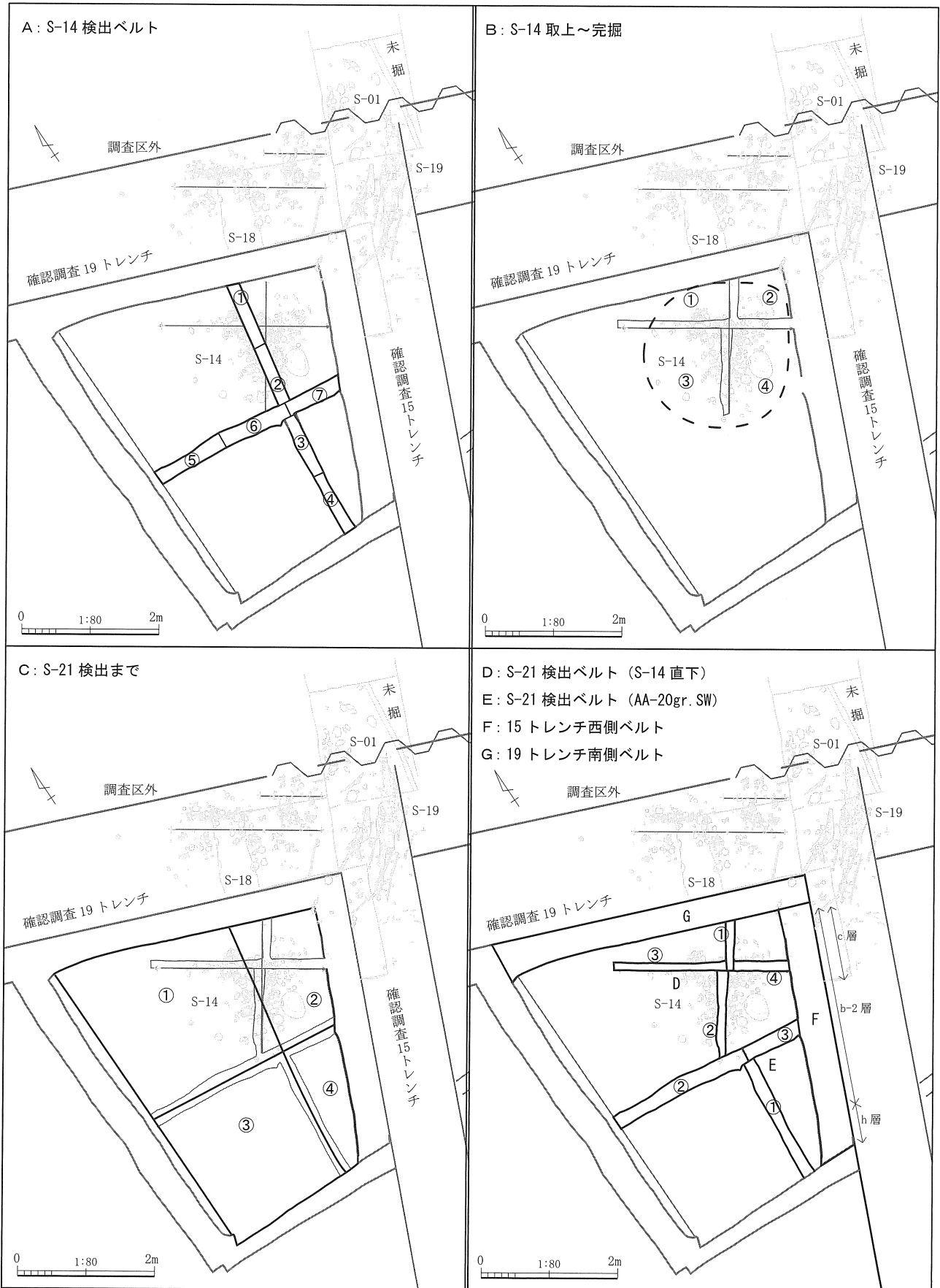
f層は暗オリーブ褐色を呈するやや粘性を帯びた土層で、確認調査19トレンチ付近が最も厚く、北及び南へ向けて徐々に薄くなりながら傾斜する。f層は上位のb～e層と異なり砂粒の混入や砂質の部分はみられない。酸化鉄の管状斑紋も疎らであり、マンガン粒はその上部にやや多く含むが、下位になるほど少なくなる。f層の上面および上部には弥生中期の土器が密集して出土した。

その下位のg層はⅣ層とは異質の粘土層で、管状の酸化鉄斑紋はf層と同じく疎らであり、マンガン粒も確認できない。

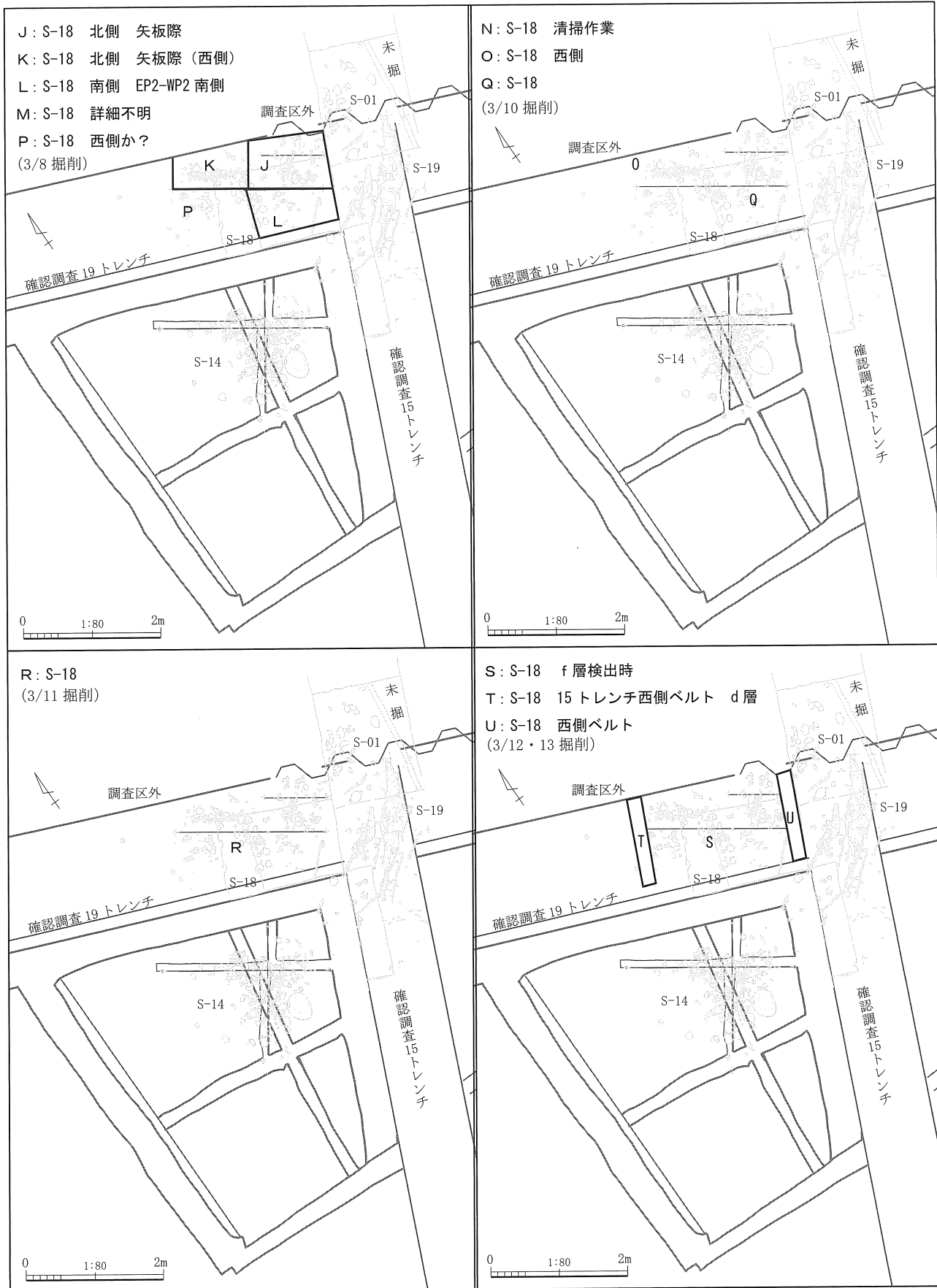
これらの土層は全体的に水平堆積を示す基本層序とは異なり、確認調査15トレンチと19トレンチ付近を頂点として東西南北それぞれの方向に傾斜して堆積している。つまり弥生時代から古墳時代にかけて、祭祀遺構の存在するAA-20グリッド周辺は微高地を形成していたと考えられる。

(4) 水洗選別 (第119・120図、第11表)

祭祀遺構及びその周辺では石製模造品のチップや白玉などの微細遺物、自然遺物が出土することが予想されたため、掘削によって生じた排土はS-14の検出後から全て土嚢袋に採取し、整理作業時に水洗選別した。採取の単位はS-14に関わるものをA～Gの7単位に分け、さらに細分した(第119図)。またS-18に関わるものをJ～Uの12単位に分け、さらに細分した(第120図)。なおH、Iは出土地不明分である。その結果、白玉などの玉類の他、種子などの自然遺物を検出することができた(第11表)。発掘中に検出し得た白玉はS-14で4点、S-18で1点であったが、水洗選別の結果では、完形192点、破片221点を検出することができた。発掘中に検出できた数が少なかったことから当初これほどの出土を予想しておらず、また調査員の認識の統一が十分でなかったことから、取上単位がやや広く、厳密な出土位置が確定できるものは少ない。なお、これにより検出した土器は微細な破片であるが、3点は実測し得た。



第119図 祭祀遺構周辺土壌採取位置 (1)



第120図 祭祀遺構周辺土壌採取位置 (2)

第2節 遺構

第11表 祭祀遺構周辺土壌水洗選別検出資料集計表

取上 単位	位置	土嚢数	土器片	臼玉 完形	臼玉 破片	勾 玉	管 玉	管玉 破片	霰 玉	霰玉 破片	種 子	炭化 物	木 片	備考
A	S-14 検出時 ベルト													
		3	5		1						2	1	1	
		4	11		11						1	2	3	
		3	6		1						1	1	3	
		4			1						4	2	2	
		4	4								1	2	1	
		3	3								1	2	1	
		3	1	1							1	1	1	
		3	2								2		1	
B	S-14 取上～完掘	27	32	1	14	0	0	0	0	0	13	11	13	0
		4	11		1						1	2		
		6	2	4	5						1	4		
		3	13	1	5						2	2	1	
		12	79	31	107			1			5	5	1	貝
C	S-21 検出時 平面	25	105	36	118	0	0	0	1	0	9	13	2	0
		36	101	8	9			3			25	29	1	
		7	105	15	12	1		2	1	1	5	5		
		4	19								2	3	2	
		3	14		1						1	2	1	
D	S-21 S-14 ベルト部分 S-14 直下のベルト	50	239	23	22	1	0	5	1	1	33	39	4	0
		1	5	3								1		
		4	13	2	1						1	3		
		1	3									1		
		2	16	3	3						1	2	1	
E	S-21 ベルト部分 CDと層位的には同じ	8	37	8	4	0	0	0	0	0	2	7	1	0
		2	14								1	2		
		2	19									2		
		3	39	1		1					1	2		
		5	48	5	2						3	5		
F	15T 西ベルト	12	120	6	2	0	1	0	0	0	5	11	0	0
	b-2	8	91	17	4									
	c	5	20	3	7							1		
	h	5	101	30	22	1		1		1	3	4		
G	19T 南ベルト	18	212	50	33	1	0	1	0	1	3	5	0	0
	b-1	1		3	1									
	d層	3	12	5							2	1		
	不明	1	3	2								1	1	
H	3月13日掘削分 f層検出時か	5	15	10	1	0	0	0	0	0	2	2	1	0
		8	64	4	3						2	7	1	
I	不明	1	1		3								1	
J	1 北側 矢板際掘り下げ 3月8日	1	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0
		3	16	6	1								1	
K	2 北側 矢板際西側? 3月8日	2	9	2	2						2	2	1	木片目立つ
L	3 南側 EP2-WP2 南側上半 3月8日	2	9	2	2	0	0	0	0	0	2	2	1	
		4	31	4	5						3	1		ガラス小玉
M	4 北 or 南 詳細不明 3月8日	4	31	4	5	0	0	0	0	0	3	1	0	0
		2	10	1	2						1		2	
P	7 西側? 未永主任 3月8日	2	10	1	2	0	0	0	0	0	1	0	2	0
		1	16	6	7						1		1	
N	5 清掃 3月10日	1	16	6	7	0	0	0	0	0	1	0	1	0
		2	32								1		1	
O	6 西側 3月10日	2	32	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
		1	10									1		
Q	8 S-18 3月10日	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		1	9	1								1	1	
R	9~1 S-18 3月11日	1	9	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
		10	53	15	10						1	4	7	
	9 S-18	12	78	18	11	0	1	1	0	0	3	4	7	0
S	10 f層検出時 最下層 3月11・12日	3	15	2							1	2	2	
T	11 15T 西ベルト d層? 3月13日	3	15	2	0	0	0	0	0	0	1	2	2	0
		3	54	11	8								3	樹皮・木片多い
U	12 西側ベルト 3月13日	3	16	1	2							1		0
		3	16	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	13 不明 不明	1	21	1	1							1		0
		1	21	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0

*種子、炭化物、木片、備考の数値はそれらが検出された土嚢袋の数量を表す。

(5) 祭祀遺構

S-14 (第121～136図、図版64～71、79～85)

祭祀遺構S-14は約2m四方の範囲に広がる遺物の集中部であり、多量の手捏土器(甕・鉢・壺)、土師器(甕・鉢・壺)、須恵器(坏蓋)、土製品(土製模造鏡)及び石製模造品により構成される。これら出土遺物は基本的に完形品で、土器底部および石製品の接地面のレベルは標高4.7m前後の5cm以内に収まり、また土器は倒伏したものよりも、底部を下にした正位置を留めているものが多い。これらのことから、非常に一括性の高い祭祀遺構と考えられる。

【出土状況】

出土位置はAA-20グリッド南西部にあたり、層位的にはb-1層中に含まれるが、遺物の下面はb-2層及びc層の上面にあり、b-1層との層界にあたる。なお、南東側の一部は古代の土坑S-11に切られている。

遺物が広がる2m×2mの範囲のうちでも特に北側に遺物が密集し、2点の壺形土器を中心としてその東側に口径4cm前後の手捏土器が、西側に口径5～10cm程度の小型壺が配置された状況を呈す。石製模造品は土器群の東側に纏まり、剣形石製模造品と有孔円板とは一部密着して重なっているもののその分布範囲は異なる(第122図)。

土器は手捏土器を中心として小さいものが多く、器高20cmを超えるものは1点のみで、器高10cm以上20cm未満のものは8点、5cm以上10cm未満のものが22点ある他、約100点は器高5cm未満の手捏土器である。

遺物の広がりほぼ中央に須恵器の坏蓋が1点、天井部を下にした状態で出土した。この須恵器の北側に器高11cm前後の壺形土器2点が置かれ、その北西側に器高5～10cmの小型壺が、南東側から東、南にかけて器高5cm以下の手捏土器が二重～三重に取り囲み密集する。これらは互いに接しながら自立しており、意図的な配置をうかがわせる。土器群の核となる壺形土器2点は、その底部付近に密着して手捏土器が2～4点存在し、それらが支えの役目を果たして倒伏を免れたとみられるが、土器を据えるために地面を掘り窪めた痕跡は確認できなかった。この密集部の周辺はわずかながら間隙が存在し、土器の遺存状態や出土時の姿勢に違いがある。

この密集部の西側には、S-14出土の土器の中で唯一器高20cmを超える甕形土器が倒伏し土圧で押し潰された状況で出土した。

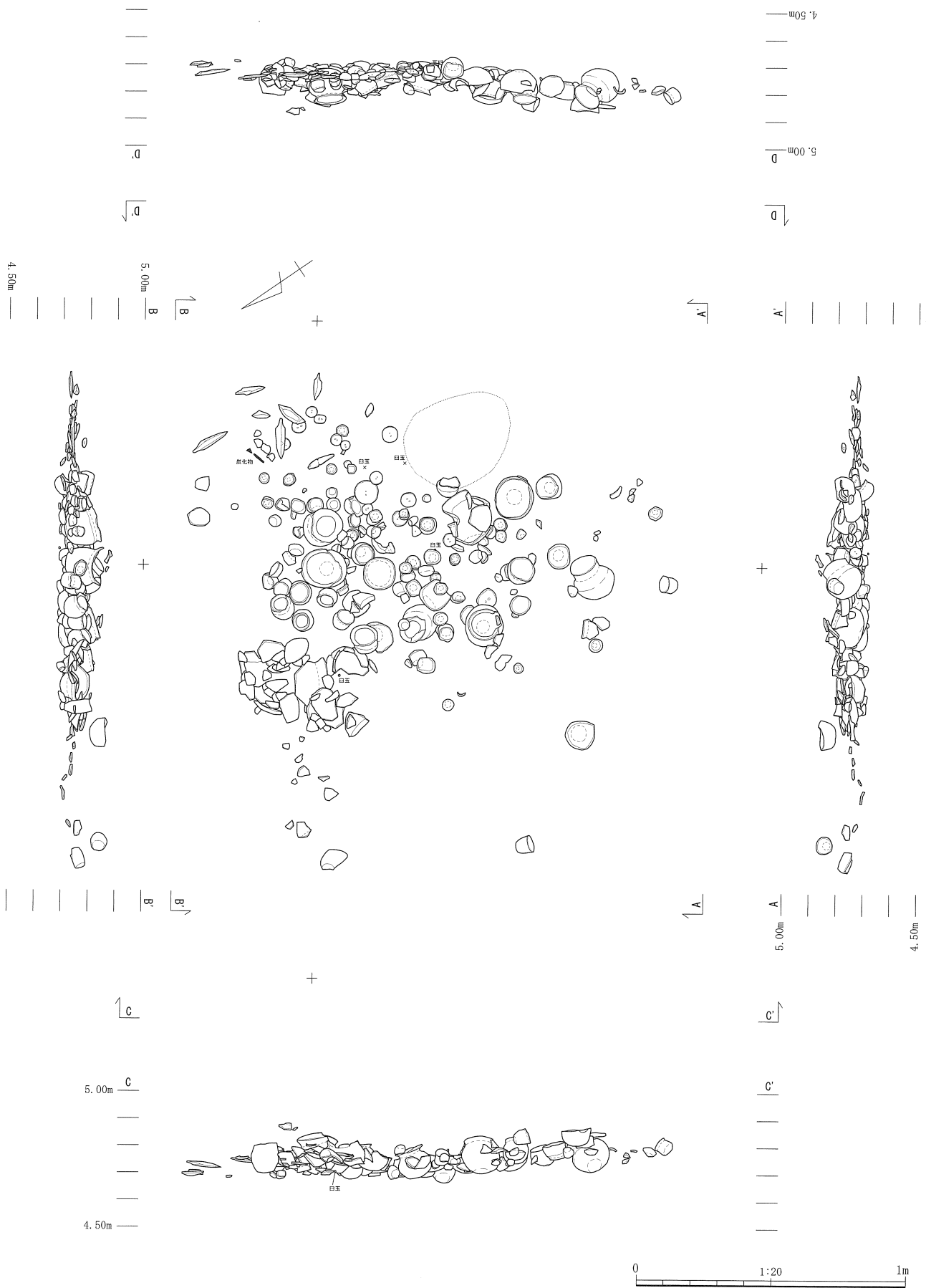
S-14で一括した遺物は殆どが完形かそれに近い状態で出土しているので、同じ場所で破片になっていたもの以外、離れて接合したものは1例のみである。12の鉢形土器は縦に半裁されたような状況で出土しており、20cmほど離れた位置にある。間に正位置の土器があり、また、上にも手捏土器が乗っている状態であった。

遺物の拡がりの縁辺部(西側)の土器はレベル的にみるとやや浮いた位置にある。また須恵器より南側の土器群は北側の土器群に比べて疎で、やや高いレベルで出土している。

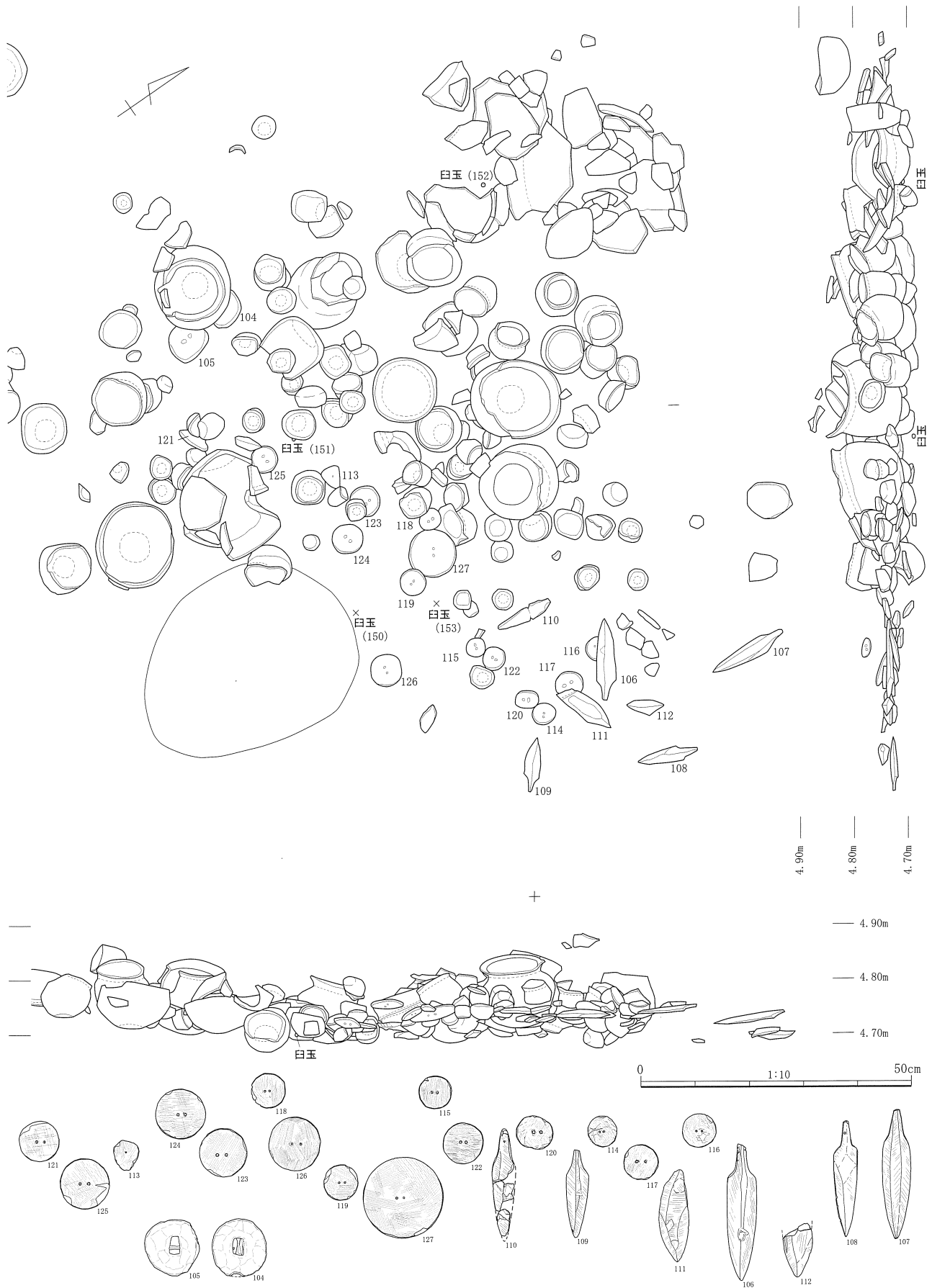
遺物の密度や配置状況、接合関係、出土レベルを勘案すると、これらS-14を構成する遺物群が一度の祭祀行為の結果による集中であるとは言い難いが、祭祀単位について明確に境界線を引くことが出来る状況にもなかった。

手捏土器は単独で存在するよりも複数の個体が器壁を接していることが多く、土師器の底部に密着して出土しているものもある。また壺や鉢の接地面よりもやや下位のレベルからもある

第2節 遺構



第121図 祭祀遺構 (S-14)



第122図 祭祀遺構 (S-14) 遺物出土状況

程度まとまって出土している。

手捏土器は、2点が土師器の壺・鉢の内部から出土している。1点は壺(11)から出土した小型の坏(88)である。鉢(48)については壺形土器(7)内器面に密着した出土状況を確認することができた(第123図)。この壺は約60度口縁部が傾いた姿勢で出土しており、その内部に壺と直交する角度で完形の手捏土器が底部を壺体部の内器面に接するように納められていた。

土製品としては土製模造鏡が2点ある。2点ともS-14南側の鉢形土器(11)の底部に密着して出土した。丸底気味の底部に接して楔のような状況にあり、支えの役割を果たしていた可能性がある。

剣形は土器群の密集部の東側にやや離れてまとまり、2点は有孔円板の上に一部が重なっている。なお107は他の剣形よりも若干出土レベルが低い。そのため、調査時には他の遺物を取り上げた後で検出した。

有孔円板は土器群の南東側にあり、東西方向に帯状に分布する。一部の有孔円板は土器と重なっており、1点(121)は手捏土器に挟まれ、立った状態で出土している。有孔円板の出土レベルは剣形を含めほぼ同じレベルに揃っているが、115は他より浮いた状態で出土した。有孔円板の分布域に1点、1孔を有する六角形の薄い滑石製品(113)があり、これも縁辺の一部が手捏土器に接しており、斜めに立った状態で出土した。

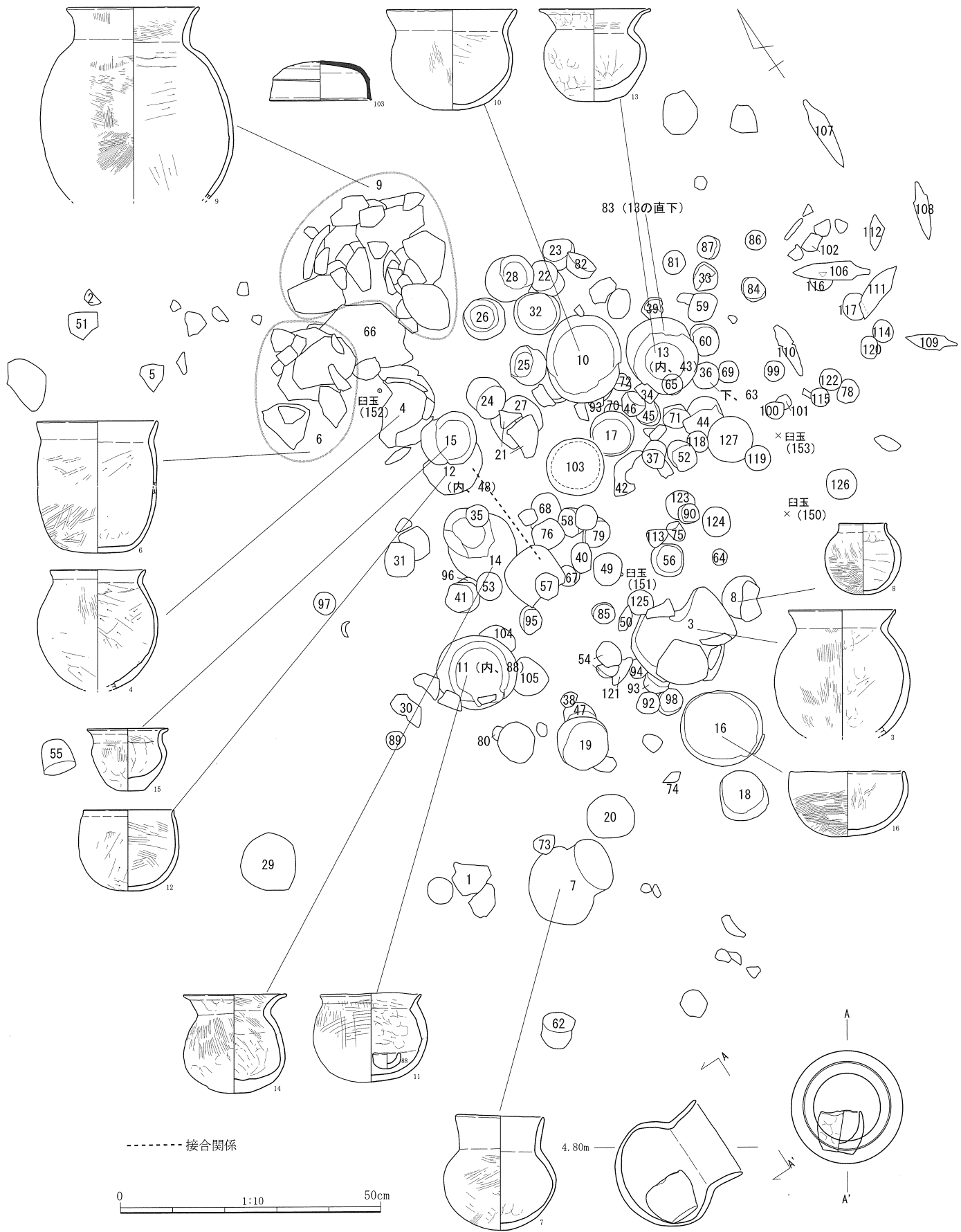
玉類は水洗選別により多数を検出したが、調査中の出土は4点のみである。これは、白玉自体が軟質の石材で砕けやすいこと、また白色～暗緑色を呈する色調が土壌中の砂粒と見分けが付きにくく、視認性が低いことに起因する。S-14の検出から完掘までの排土からは白玉だけで完形78点、破片168点を数える。また、7点の土器・手捏土器から計10点の白玉が出土している。これらは破片も多く、土器1個体に2点の白玉が出土している例が3例あるが他は1点のみであり、意図的に土器内部へ納められていたものかどうかはわからない。

玉類の出土範囲はS-14の土器群の全体に及ぶが、土器の出土範囲よりも格段に広く、少量ではあるがS-14の南側や北側にも出土しており、確認調査15トレンチの西側ベルトにもやや集中して出土している。またレベル的にもS-14の下層であるb-2・h層からも少くない量が出土している。S-14では数量的に採取単位B-④付近が突出して出土量が多く、S-14の南東側が最も多く分布していることになる。おそらく確認調査時に掘削した15トレンチ部分にも多くの白玉が分布していたと考えられる。また15トレンチより東側はまったく水洗選別していないため、その有無は不明である。

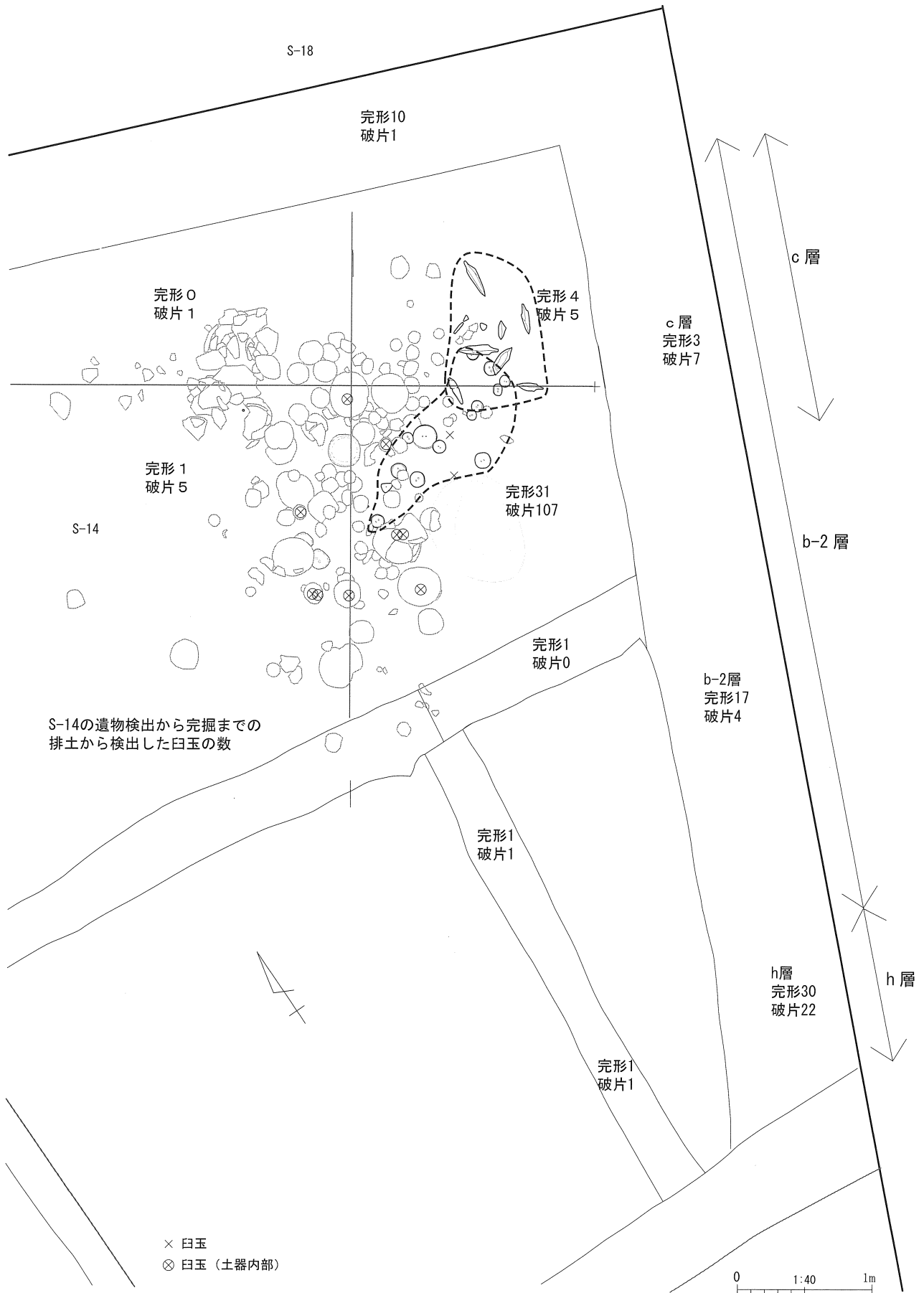
石製模造品は土器群の北東側に剣形品、東側に有孔円板、南東側に玉類と、その種類によって分布の集中範囲を異にしている。

剣形の北側に幅1cm長さ9cmの炭化物が認められたが、小片でありその周辺には認められなかった。その他、排土の水洗選別作業によって種子、炭化物、木片、貝類の自然遺物を検出することができた。その同定結果は第八章第5節にて報告されているが、クスノキ、ウリ類等の種子、イネ類が同定されている。なお、貝類は小破片のため同定不能であった。

平面及び断面観察いずれにおいても明確な土坑状の掘り込みは確認できなかった。ただし、作図しながら1度目の取上を行った後も、その下位から数点の手捏土器が出土していることを考慮すると、浅い落ち込み状の窪みが存在した可能性はあろう。



第123図 祭祀遺構 (S-14) 遺物出土状況



第124図 祭祀遺構 (S-14) 周辺石製品出土状況

【遺物】

第125～127図はS-14出土の土師器・須恵器及び土製品実測図である。

第125図1～6は甕である。1は頸部から体部の破片で、内器面は指頭圧痕による凹凸がある。2・5・6は器形や色調などから同一個体と考えられる。平底で底径も大きい。外器面はやや粗いミガキとナデを併用している。3は外器面でヘラケズリを行っているが、器壁は厚い。4は口縁を短く外反させている。内器面のヘラケズリなどで器壁は全体に薄く、外器面はハケメ後ナデを入念に行っている。

第125図7～15は壺である。7は完形の壺で、直立する口縁と球形胴を持ち、外器面はハケメ後ナデ調整を行い丁寧に仕上げている。内部に第126図48の手捏土器が入っていた。8は小型の壺で、直立する口縁部は非常に短く、胴部に較べて非常に薄い作りである。外器面は細かいハケメ、内器面には幅広のヘラケズリを確認できる。9は現存高20cmを超える、S-14で検出した土器中最大の土器である。口縁部は長めで外反する。外器面には細かいハケメ調整が入っている。10は体部最大径よりわずかに口径が大きく、甕とした方がよいかもしい。全体に器壁は薄く、丁寧な仕上げになっている。11は平底の底部から丸みを帯びて立ち上がる器形で、体部付近の器壁がやや厚い。口縁部は短く、直線的に開いている。また、その内部にはほぼ完形の手捏土器（第127図88）が入っていた。12は接合により復元できたもので、口縁端部を外側へ摘みごく小さい頸部を成形している。丸底だが底部は安定している。13～15は平底の広口壺で、遺存状態がよく、口縁の一部が破損しているのみであった。底部から大きく開き、頸部の屈曲からさらに口縁部が外に大きく広がる器形である。13は最大径が体部中位にある。14は最大径が体部下位にあり、さらに底面には直径5～6cmの粘土を貼り付けている。15は一回り小さいもので、頸部のしまりが弱く器壁が厚い。これらは胴部下半の器壁に厚みがあり重心が低いため、安定して自立する。

第126図16は直立して出土した完形の鉢で、安定感のある丸底である。口縁はわずかに内傾し、口唇はやや尖る。

第126図17～第127図100は手捏土器である。17～23は甕形で、頸部を有し短い口縁が外反する。17～20は底面が平坦で、体部と底部の境を区別している。17は全体に器壁が厚く、底面にナデ調整が施される。18は底径が1.8cmとかなり小さい。最大径のある肩部より上は器壁が薄く、口縁部はごく短い。19は体部中位に最大径を持ち、底径は18より大きい。20は薄い口縁部を欠損する。底面に木葉圧痕が残る。胴部は器壁が厚く、重みがある。21は頸部までの器壁は厚いが口縁部は薄く作られ、口唇部は尖らせることによって、外反し、頸部のある甕形を作出している。22は球形胴に外反する口縁部を持つ。口径と体部最大径がほぼ同じである。23は平底に近い底部で、22よりも口縁が外に開く。24は鉢形である。口縁は大きく広がり、胴は張らない。

25～29は甕形である。いずれも丸底の球形胴で、頸部で緩やかに屈曲する。口径と体部最大径に大きな差はない。これらにはハケメやヘラケズリなど、土師器製作で利用される器面調整が施されている。25～27は底部から口縁部にかけて器壁が薄くなる。25はハケメをナデ消しており、丁寧な仕上げである。26は外器面でハケメ・ヘラケズリを行う。27は底部が広く、体部の張り出しが強い。内器面にヘラケズリを行い、器壁は厚い。28はサイズの違いだけで基本の器形、器面調整は土師器と変わらない。小型の甕または壺か。29は甕の体部から底部

の資料であり、27に似た器形とみられる。

30～32は壺形である。30は壺の肩部で、器壁が薄い作りをしている。31は肩部・底部それぞれの屈曲部で破損している。32は球形胴の体部である。

33・34は甕形である。33はわずかに頸部を作り出している。34は尖り気味の丸底で、表面を丁寧にナデている。いずれも口縁部は直立気味でやや尖らせている。

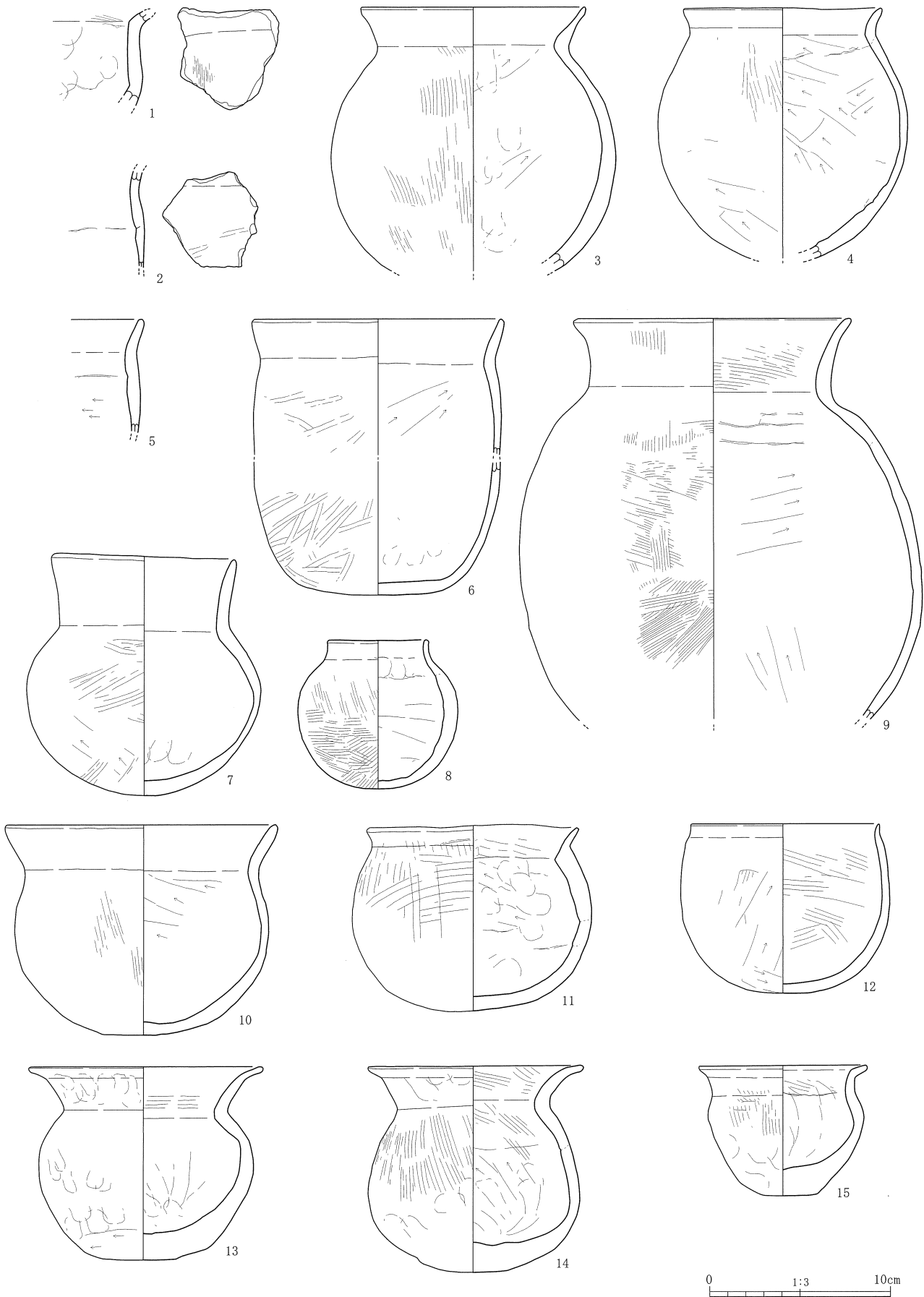
35～39は壺形で、35は頸部を意識して作り出している。器高は低い。36は平底に近い形で底径が大きい。37は体部最大径のある頸部で屈曲し、口径の方が小さい。38は直立気味の口縁部である。39は体部中位に最大径があり、頸部でわずかに窄まる。40は鉢形で、口唇が鋭く尖る。41は鉢形で、他に較べて口径・底径ともに大きい。

42～44は甕で、頸部から開く器形である。全体的に器壁の薄い作りで、42・43は頸部以下を破損している。44は体部下位まで残っているが底部形状は不明である。

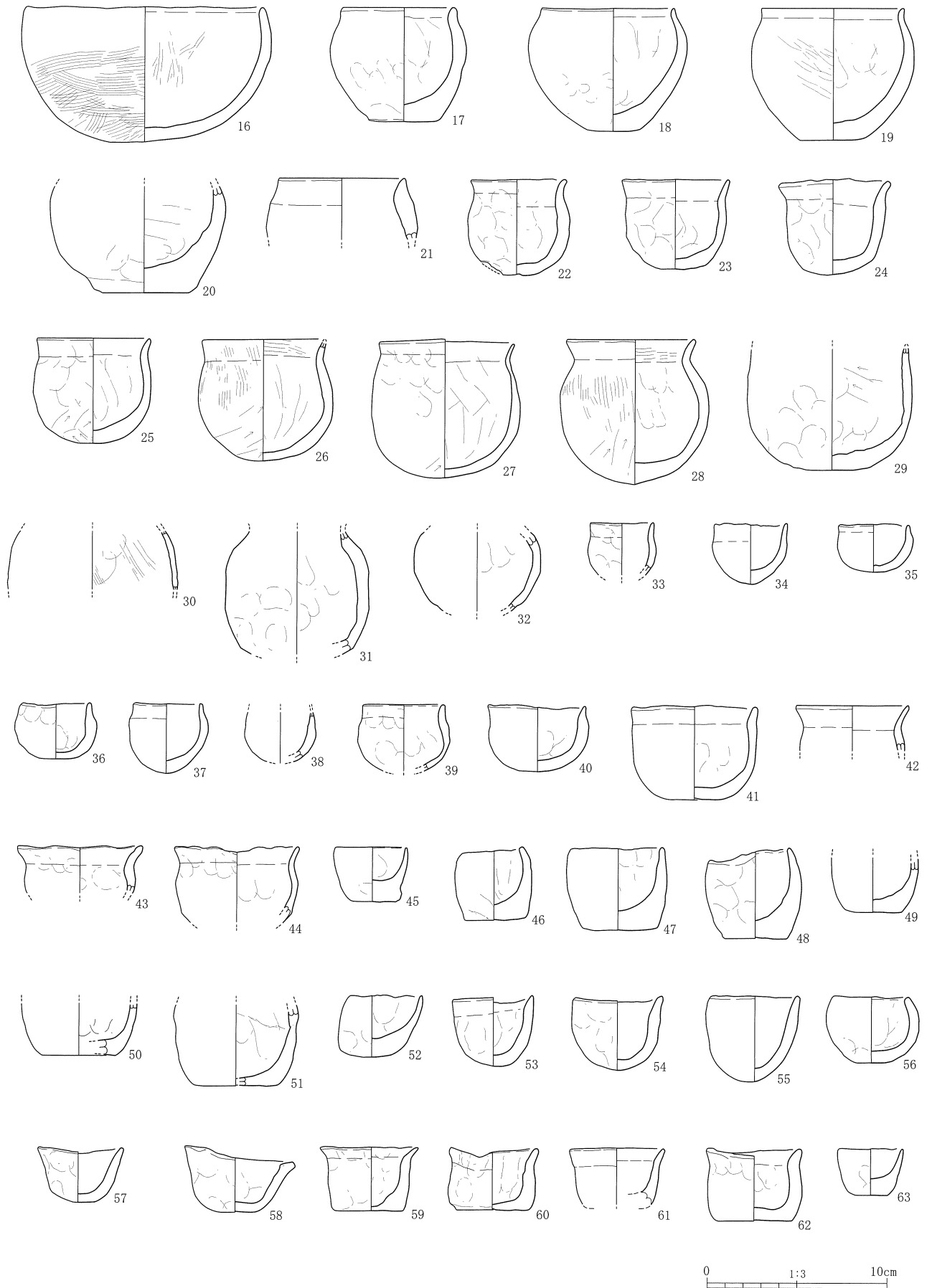
45～63は鉢形である。このうち、45～48は底部を平底にし、体部をわずかに膨らませた白のような形である。底部は厚みがあり安定している。器壁は底部付近に比べると口縁が薄く、口唇はやや尖っている。45は器高の三分の一を底部が占めており、胴部～口縁部が極端に薄い作りとなっている。46は口縁が内傾していて、内底はやや深くくぼんでいる。47は口縁がほぼ直立している。48は第125図7の壺形土器の内部に入っていたもので、口縁の一部が欠損している。49～51は底部資料で、安定した平底であることから、45～48のように口縁が直立するか、または後述する59～62のように口縁が外反する器形になると考えられる。52は歪んで口縁の一方が大きく開いてしまっている。53～55は丸底もしくはやや尖る底部から口縁部までそのまま広がっていく器形で、口唇は薄く、わずかに外反する。53はナデ調整による丁寧な仕上げである。56は丸底で口縁は内湾しており、丁寧なナデ仕上げである。57・58はほぼ平底の底部から直線的に口縁につながる器形である。59～62は口径と底径が近い安定した平底で、体部がそのまま直立し、口縁が外反する器形である。63は平底から直線的に口縁へ到るもので、口唇は尖っている。

第127図64～100は坏形である。出土した手捏土器の中でも小さな部類の一群であり、丸底の底部及び口径は3～4cm、器高2～4cm前後のサイズで、概ね半球形だが、器壁の厚さや体部形状にはヴァリエーションが認められる。64は平底の底面以外はナデ調整を行っている。65は胎土が橙色で他の土器より赤い色調である。66は底部の器壁が薄く、内底面を広くとっている。67は内器面に粘土が付着している。粘土接合痕あるいは補強のためか。68は体部の器壁は厚いが、口唇部が尖る。69は全体に器壁が厚い。70・71は口縁部が直立する口縁部が薄い作りで、70は外器面に細かいナデ調整を施している。71は口縁がわずかに内傾している。72の器壁は底部が厚く、口縁部は薄い。73・74は一定の厚さで底部から口縁部まで作っており、口縁部は鈍い。75は口縁部をわずかに外側へつまみ、頸部の稜線を作りだしている。76は坏形としたものの中では大きい部類である。77は厚手の作りだが底部との接合部分で破損しており、器高は低いものと考えられる。78は底部に平坦面があるが口縁部と水平にはなっていない。79は口縁部をわずかに屈曲させ、頸部としている。

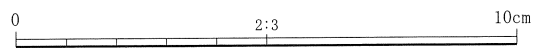
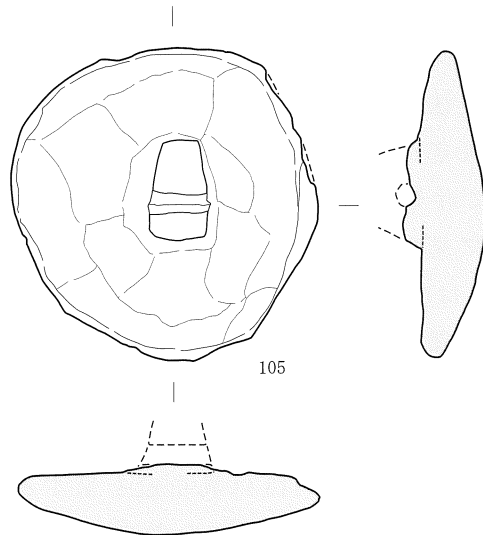
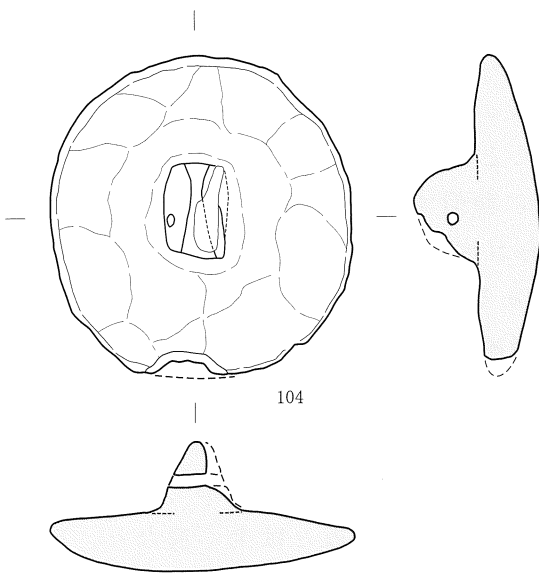
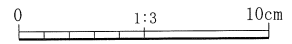
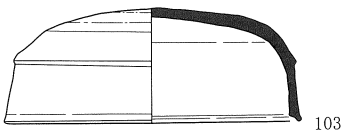
80～84は底面がやや広く、平底に近い。さらに口縁が直立するため、底径と口径にほとんど差がない。85・86は尖り気味の丸底で、体部中位で屈曲し、口縁は直立する。85は器壁が厚く、86は薄い。87は内外器面を細かくナデ調整している。



第125図 祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (1)



第126図 祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (2)



第127図 祭祀遺構 (S-14) 出土土器 (3)・土製品

第2節 遺構

88～90はS-14出土土器中最小のもので、器高2cm前後と低く、容量もわずかなものである。91は底部が薄く、内底はくぼんだようになっている。88は第125図11から出土した。

92～100は丸底で口縁が開く器形である。口縁下位を屈曲させ頸部を作るものもある。器壁は薄いものが多い。

第127図101・102は弥生土器の壺である。他の土器よりも下位で出土しており、小片であることから本来S-21に伴う土器であると考えられる。101は屈曲部で外れるように破損している。102は平坦な口縁で、頸部が強く締まる器形とみられる。

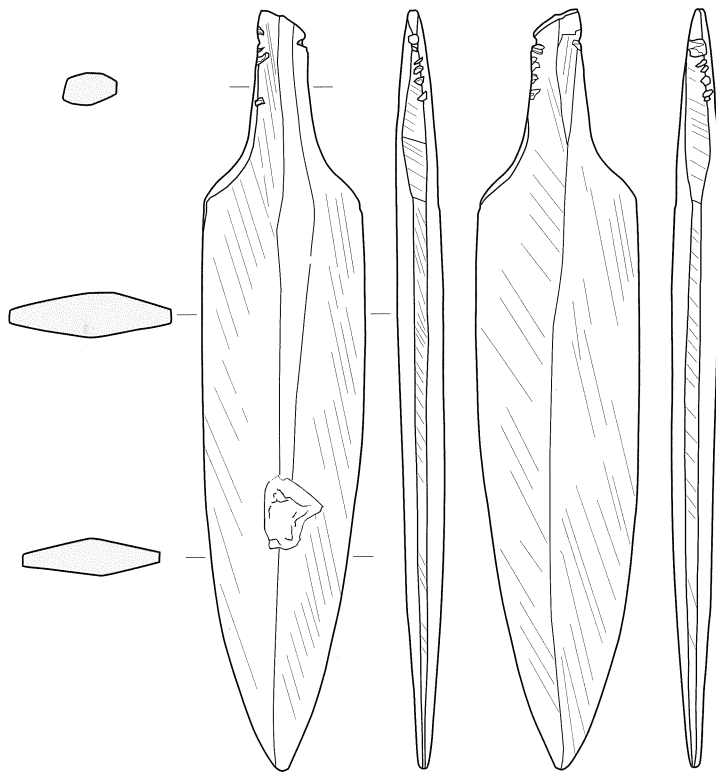
第127図103は須恵器坏蓋である。S-14出土の須恵器はこの1点だけである。完形で外器面はやや幅の広い回転ヘラケズリを天井部中位まで行っている。稜は鈍く、口縁部には明瞭な凹線がある。

第127図104・105は土製模造鏡である。どちらも直径約6cm前後の同規格で、鈕部分は平面長方形、断面半円形を呈し、両長辺に孔を貫通させている。また、鏡面は明確な反りを表現している。

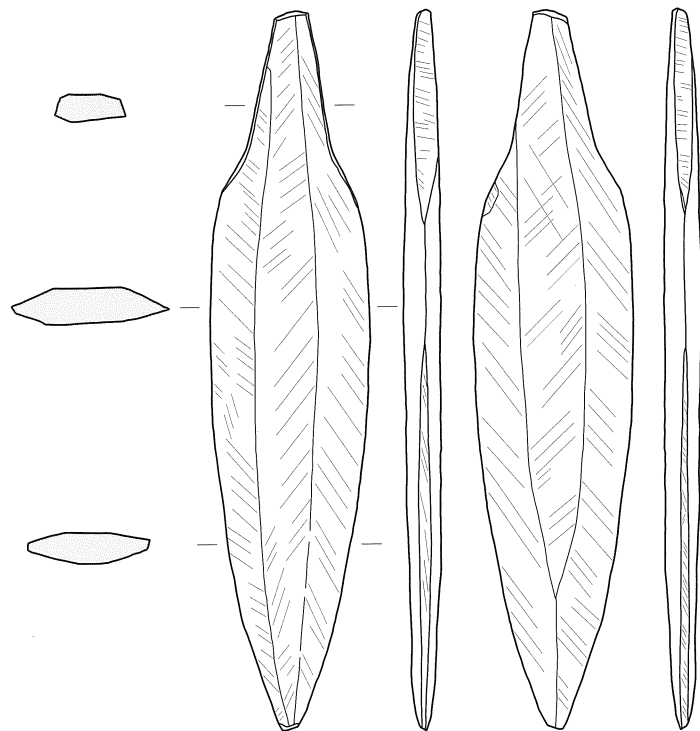
第128～136図は石製模造品である。S-14及びその周辺から出土した石製模造品は剣形7点、有孔円板16点のほか、玉類は勾玉2点、棗玉4点、管玉5点、白玉300点以上である。

106～109は完形の剣形で茎を明確に造り出し、断面形状は扁平な菱形で両面ともに鏑の表現が認められる。両面の側縁を斜めに削り出す事によって刃部を表現しているため、この加工が中心に及ばない場合は鏑が2本あるように見える。そのため刃部は鋭利ではなく角のある直線となっているが、107及び109の関に近い部分は両側縁とも比較的鋭利に整形されている。完形品の4本の長さはそれぞれ15、14、11.5、9.5cmと大振りで全体に研磨が施される。108のみ茎に小孔を有する。106は茎の側縁に4～5ヶ所の小さな抉りがあり、両側とも近似した様相を呈すことから、製作時もしくは使用時に意図的に付けられたものと考えられる。この剣形の茎は無孔であるため、垂下するための紐を結びつけるためであろうか。107は両側縁の刃部と2本の鏑に挟まれた中央の面で研磨の方向が異なる。また側面でも茎部分と刃部部分で研磨の方向が異なっている。この研磨方向の違いは109も同様で、大きさは異なるものの両者は製作技法の上で共通している。110は遺存状態が悪く、検出段階で数点の破片に分かれていた。中央部分は薄く板状に剥離しており、接合することはできなかった。全体的なフォルムは107に近く、大きさ及び茎に小孔を有する点で108に類似する。残存部の断面形状では、他の剣形に見られる刃部とそれに伴う鏑の作出が認められず、未製品である可能性がある。111及び112は剣形の未製品とみられる。残存度に違いはあるが両者ともほぼ同じ幅、厚みで鋒と見られる部分から刃部を粗く作出しようとした意図が感じられる。他の剣形とは完成度の点で大きく異なるが、使用法の上では差異は認められない。なお、これらに接合するとみられる同様の石材の剥片や素材は水洗選別においても検出できなかった。石材はすべて暗緑色を呈する滑石である。113は乳白色を呈する滑石製の扁平な六角形に近い不整形で、中央に1孔を有する製品である。石材の点では上記の剣形や後述する有孔円板とは全く異なり、白玉の中に類似したものが認められる。出土位置は剣形から離れており、有孔円板に近い位置にある。形態上大きな隔絶があるが、強いていえば扁平粗製化した段階の剣形に類似した形状を示している。

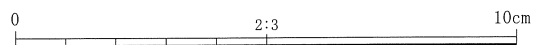
第131～133図114～127はS-14から出土した有孔円板の実測図である。有孔円板は薄く円



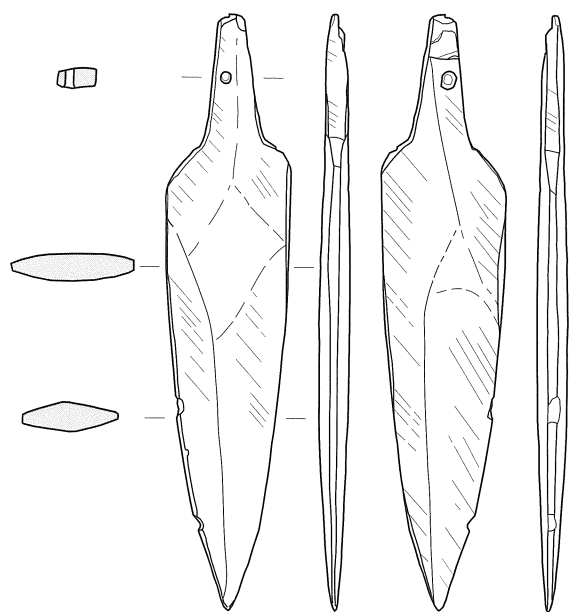
106



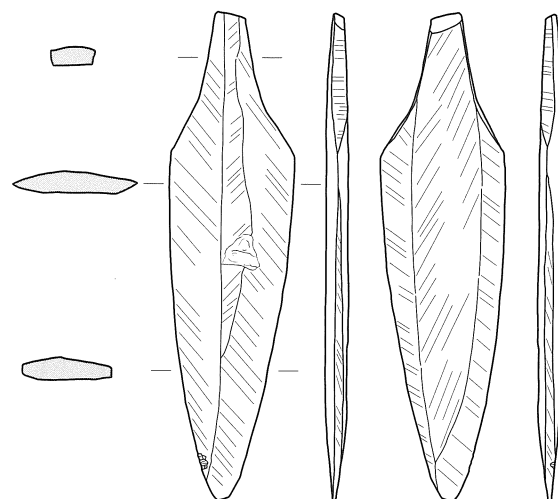
107



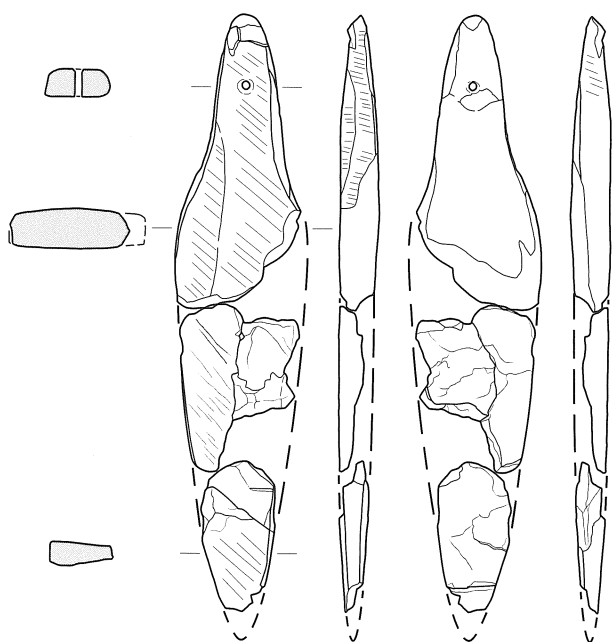
第128図 祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品



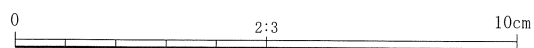
108



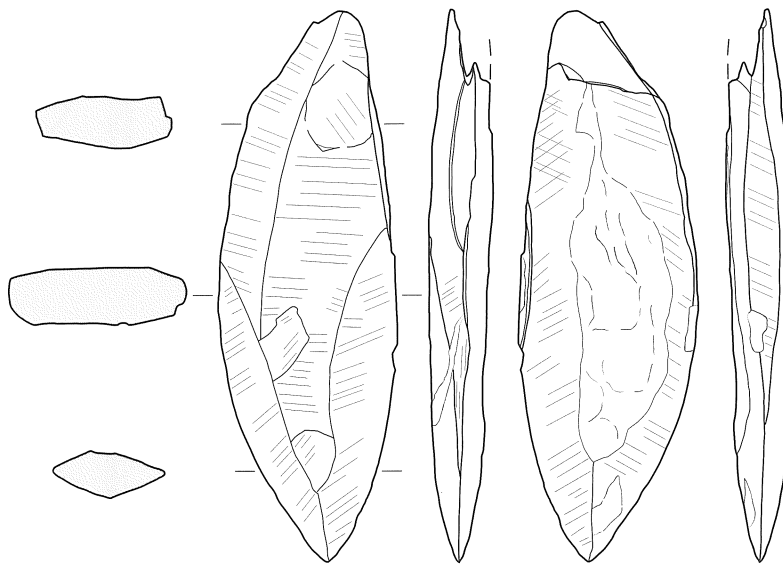
109



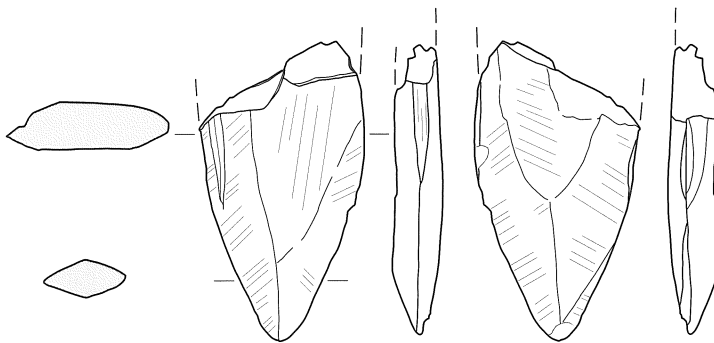
110



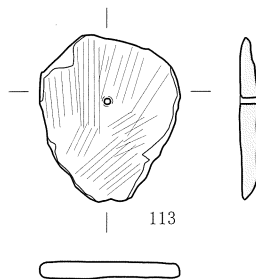
第129図 祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品 (2)



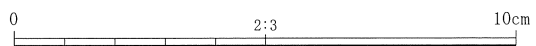
111



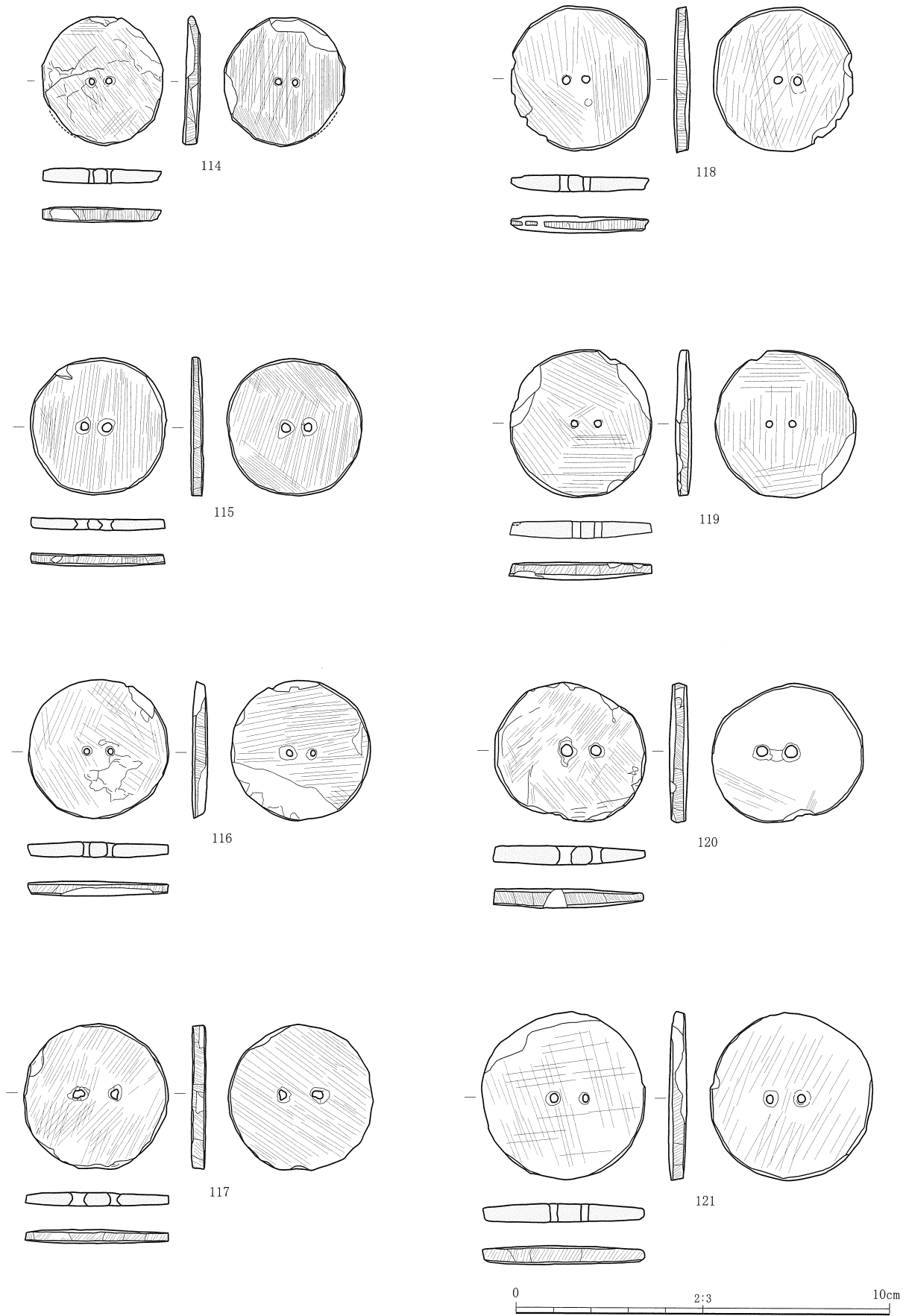
112



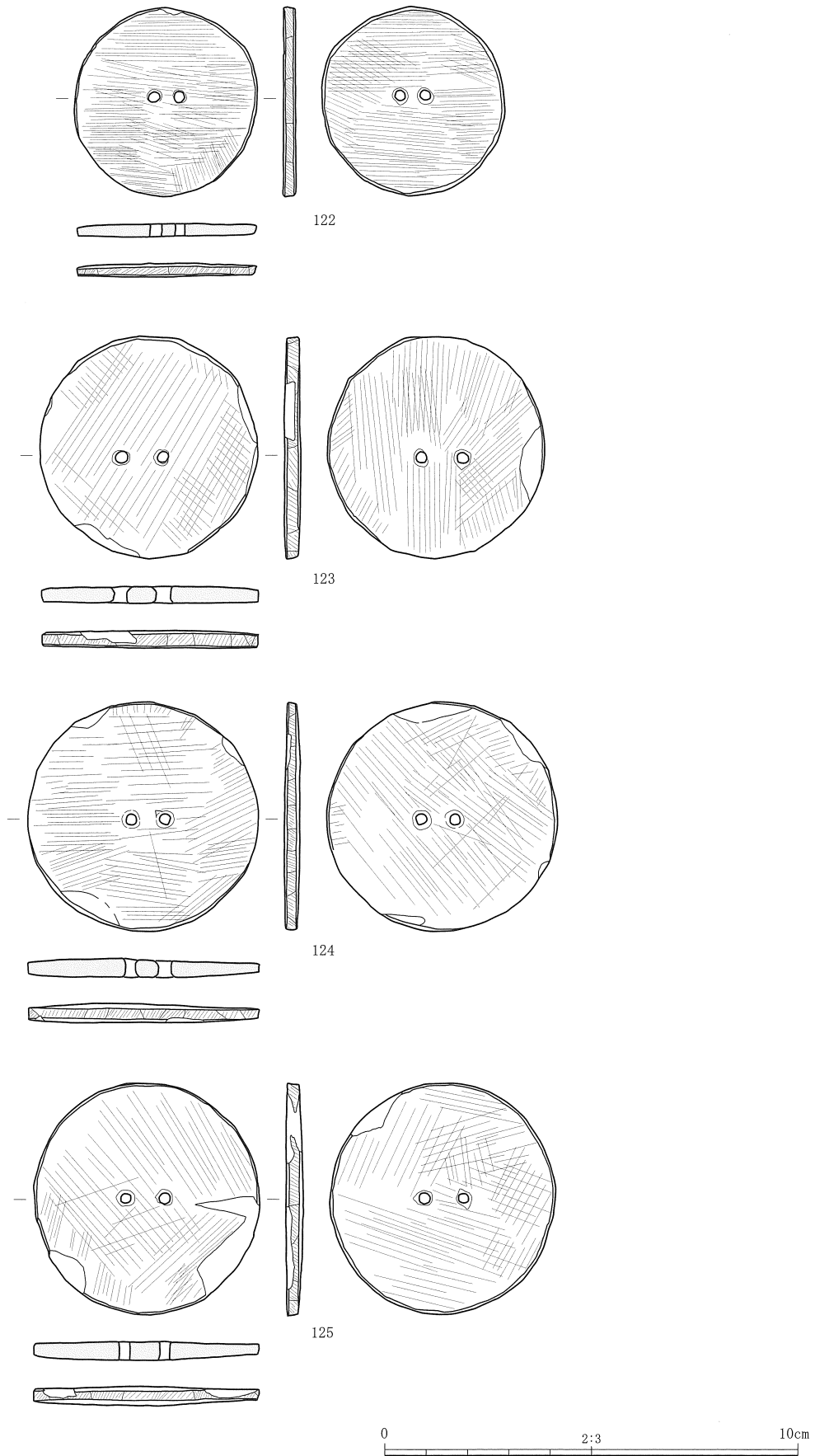
113



第130図 祭祀遺構 (S-14) 出土剣形石製品



第131図 祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (1)



第132図 祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (2)

形に成形した緑色片岩類の石材に孔を穿ったものである。わずかに稜のある円形または楕円形を呈し、全面を細かく研磨している。特にS-14から出土した有孔円板は非常に丁寧な作りをしている。いずれも広い表裏面の研磨は方向が一定していない。一方、側面の研磨は多くが縦方向で揃っている。大きさで見ると、直径は32 mmから90 mmで、30 mm前後・55 mm前後・90 mmの3つに分けることができる。最大の90 mmを除いた平均直径は45 mm、平均の厚さは4.4 mmである。断面形状はほとんど長方形の板状だが、楕円形になるものもある。孔はどれも二個一対の双孔で、間隔は2.5 mm～7 mmと若干の幅が見られる。穿孔は片面から行われ、孔の直径は1～3 mmだが、わずかにずれるものがある。個別に見ていくと、114はS-14出土有孔円板中最も小さく、孔はどちらも片側が広がっている。115は孔がずれ、やや歪な形になっている。116は孔が直径1 mmと狭い。117は孔がずれ、大きくなってしまっている。118は双孔に近接して浅い凹みがある。凹みの直径は実際に開けられた孔と同じである。119は孔が小さい。120は裏面では研磨の擦痕がほとんど見えなかった。断面形状はわずかに楕円形を呈している。また、孔は端部が広い。121は厚さ5 mmで孔の間隔が7 mmと広い。122は孔がやや大きい。123～125は特に規格性が高く、近似する。126は直径が大きく、中心が膨らんだ凸レンズ状の断面形状を呈す。127は直径90 mm、厚さ4～10 mmと本遺跡中最大のものである。側面の研磨はその大きさのためか方向を変えて行われている。仕上げも非常に丁寧である。

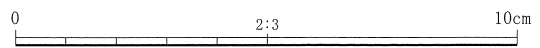
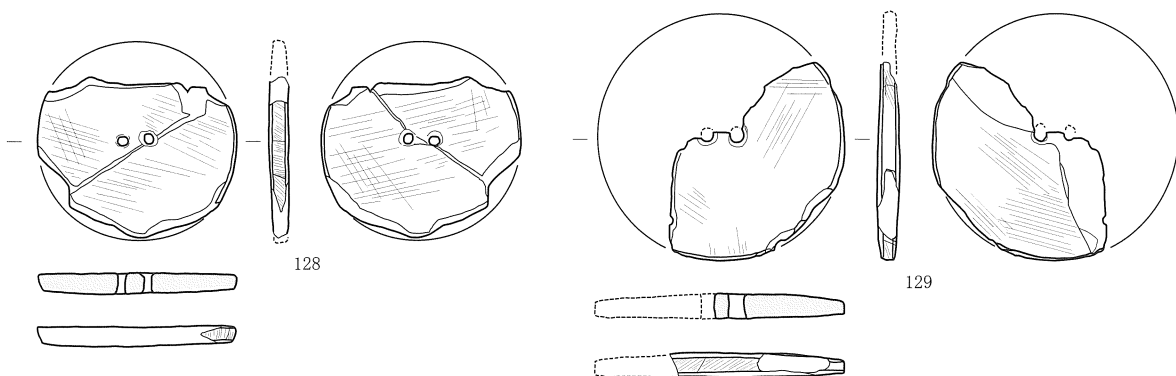
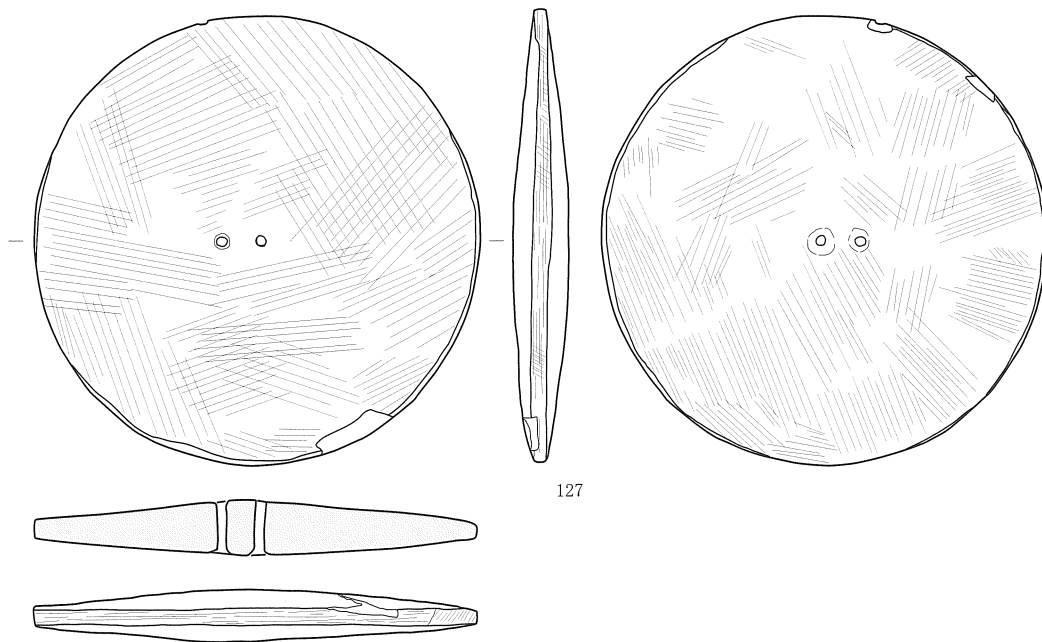
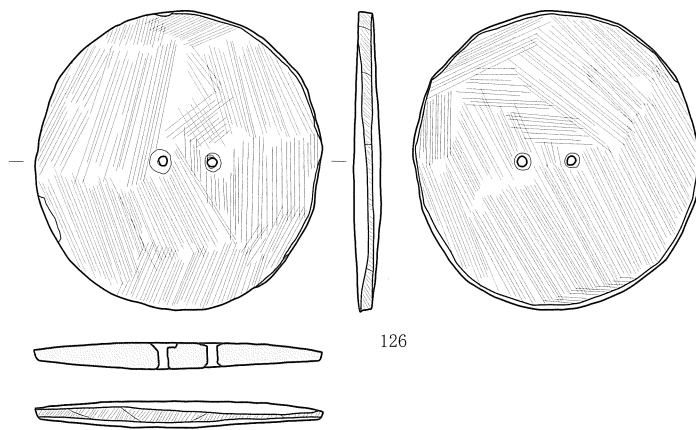
第133図128・129は遺構外の出土だが、出土場所や形態上の特徴等、S-14出土の有孔円板に非常に近いものと考えられることから、ここに掲載している。128はAA-20グリッドⅢ-2層、129は確認調査15トレンチからの出土である。

第134～136図はS-14およびその周辺から出土した玉類である。組成及び形態的特徴に共通性が認められるので、一括して扱う。

第134図130・131は勾玉である。両者とも丁寧につくられているが小型である。130は頭部の紐穴周辺に窪みがあり、片面がより顕著である。石材は暗緑色の滑石である。131は15トレンチ西側ベルトh層から出土した。全長8 mmと非常に小型で、断面扁平で腹部はやや丸みをもつが背部はやや直線的である。石材は灰白色の滑石である。132～135は棗玉である。135のみ確認調査15トレンチ西側ベルトからの出土である。いずれも最大長1.2 cm、最大径7.5 mm前後で近似した大きさを示す。穿孔は両側から行われている。石材はいずれも暗緑色の滑石である。136～140は管玉である。140のみ確認調査15トレンチ西側ベルトh層から出土した。いずれも破片のため全長は不明であるが、直径は4～4.5 mmの範囲に収まる。石材は暗緑色の滑石である。

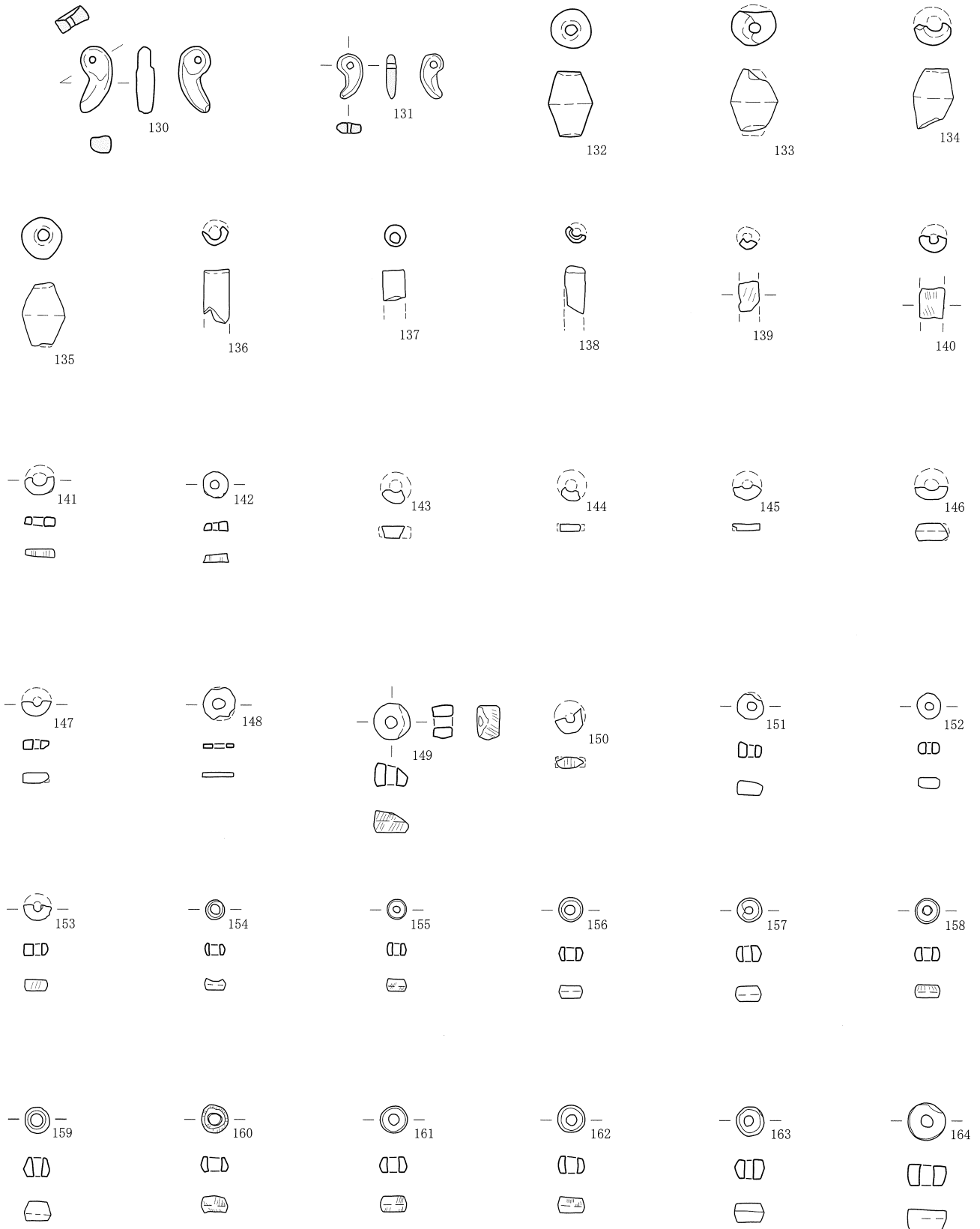
141～236は白玉である。141～149はS-14出土の土器内部から、150～153はS-14発掘中に検出した。154以降は採取した土壌の水洗選別により検出したもので、154～204はS-14から、205～230は15トレンチ西側ベルト、231以降は19トレンチ南側ベルトからの出土である。直径と厚さの比率、及び側面の稜線の有無により4分類した。直径、厚さとも個体によってかなりの個体差がある。側面に稜を持たないものが多く、7割近くを占める。なお未製品と認められるものはなかった。平均で直径4.6 mm、厚さ2.4 mm、孔直径1.7 mm、直径に対する厚さの比率は2.1:1である。

141～149の白玉は土器7点の内部に詰まっていた土を水洗選別して検出したものであるが、破片の個体が多く、3例については2点同一土器から出土しているものの、多くは1点のみで



第133図 祭祀遺構 (S-14) 出土有孔円板 (3)

第2節 遺構



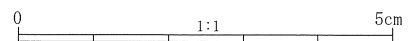
0 1:1 5cm

第134図 祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (1)



0 1:1 5cm

第135図 祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (2)



第136圖 祭祀遺構 (S-14) 出土玉類 (3)

ある。意図的に土器内部へ納められていたものかどうかは疑わしい。なお、出土した土器の位置は第124図に記した。

154～164は厚さが直径の1/2以上で側面に稜線を持つ白玉である。側面に稜が認められるものの、多くは丸みがあり明瞭でない。一部に側面に研磨痕が認められるものがあり、稜線の上下で研磨の方向が異なる。165～173は厚さが直径の1/2以上で側面に稜を有しない筒状を呈す白玉である。174～187は厚さが直径の1/2未満の扁平な白玉で、側面に稜を有する。扁平な白玉には175のように上下面と稜線が平行とならず片面が傾斜しているものが一定量存在する。188～204は厚さが直径の1/2未満で側面に稜を有しない白玉である。193のように厚さ1mmに満たない極めて薄いものが存在する。こうした薄いものは乳白色を呈する滑石を素材としている。

205～230は15トレンチ西側ベルトから出土した白玉で、205～215は厚みがあり側面に稜線を有する白玉である。215は研磨工程によるものか稜線が2本ある部分がある。また、片面の紐孔周辺が窪んでいる。216～218は厚みがあり側面にやや膨らむが、稜線は認められず研磨痕も観察できない。219～226は扁平で側面に稜を有する白玉である。220は稜線が明瞭で、221は片面が著しく傾斜している。227～230は扁平な白玉である。231～236は19トレンチ南側ベルト出土の白玉で、235のように扁平で明瞭な稜を有するもの、236のように厚みがあり稜を持たないものなど各種ある。

S-18（第137～142図、図版72～73・85～86）

【遺構】

AA-20グリッドの調査区北端で検出した。大部分が確認調査19トレンチの掘削箇所にあっており、一部は確認調査時において出土状況の実測、遺物取上を行った。なお遺物の出土レベルは祭祀遺構S-01よりも全体的に低い位置にある。

S-18は東西方向約2.5m、南北方向約1.4mの範囲に集中して約220点の遺物が出土している範囲である。出土レベルは標高4.95mから4.65mの約30cmの範囲にある。なお、北側は調査区端部にあたり未調査のため、南北方向の拡がりとは不明である。

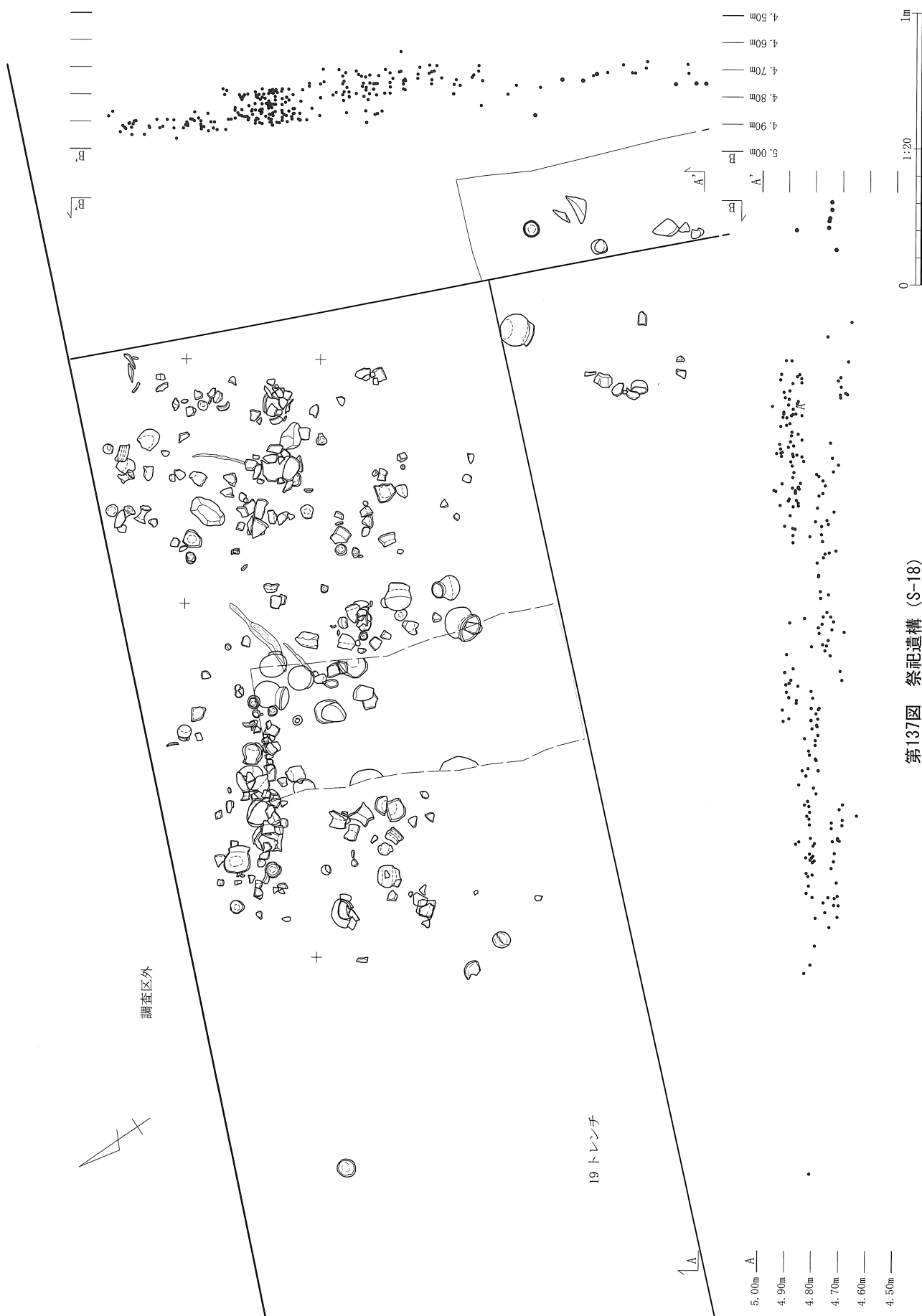
この範囲の中にもさらに遺物の粗密があり、幾つかの単位に分かれると考えられるが、調査の段階では掘り込みの有無や埋没状況等を確認することはできなかった。なお、この平面での粗密は垂直方向でも確認できるため、一括の単位を示す可能性がある。

垂直分布をみると、北側の標高4.95mを最高として南側へ向けて低くなる状況が看取される。

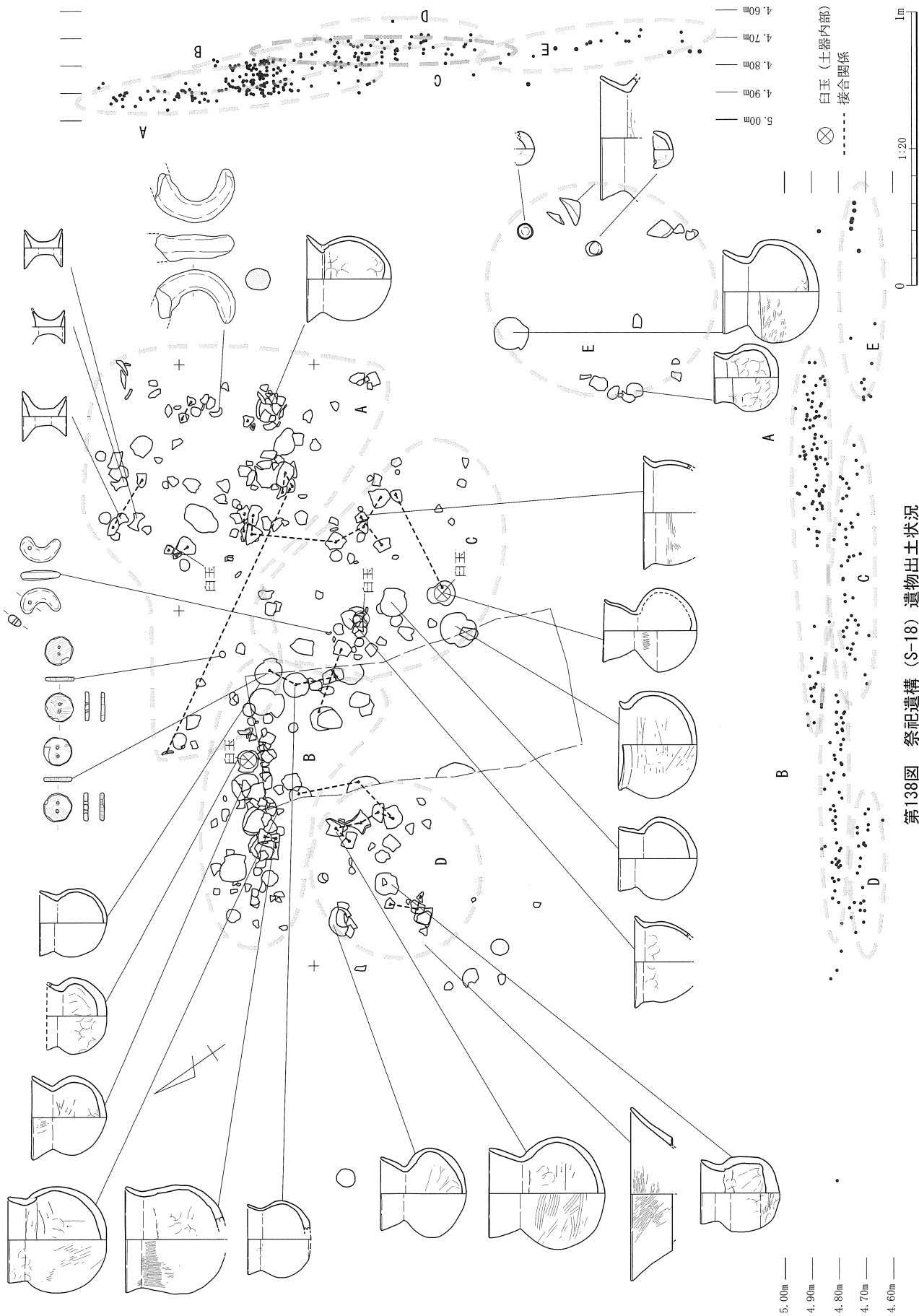
以下では、出土遺物の平面分布及び垂直分布、接合関係を勘案してA～E群に分け、出土状況を報告する。なお、この分類は発掘調査における出土状況に基づくものの、図面上から推定した部分も大きい。

A群はS-18の北東側の南北1.0m、東西1.4m、標高4.90m前後の上下10cmの範囲に出土した遺物群である。土師器のほか器高5cm以下の手捏土器（坏・高坏・器台形）、土製勾玉を含み、30cmほどの空白を挟んで西側では数点の土器片と小型の有孔円板2点が出土している。検出及び出土状況では他群に比べ破片の状態で出土した土器が多く、接合率も低い。土器の他に10～20cm大の礫2点がある。なお弥生中期の甕口縁部片が1点混入していた。

B群はS-18の北西側にあり、南北0.5m、東西1.0m、A群よりもやや低い標高4.80m前後の8



第137図 祭祀遺構 (S-18)



第138図 祭祀遺構 (S-18) 遺物出土状況

第2節 遺構

cmの範囲で出土した遺物群である。小型丸底壺等器高の低い土師器や手捏土器で構成される。S-18の範囲の中でも完形品が多く、遺物の平面・垂直分布とも密度が高い一群である。

C群はS-18の南側、A群の南にあり、0.8m四方のB群よりもやや低い標高4.75m前後の10cmの範囲で出土した遺物群である。小型丸底壺が完形でまとまって出土している他、石製勾玉が1点、ガラス玉が出土している。その他、手捏土器がある。

D群はS-18の南西側、B群の南にあり、南北0.5m、東西0.6m、C群よりもやや低い標高4.72m前後の10cmの範囲で出土した一群である。小型丸底壺のほか、壺形土師器の口縁部片が出土しているが破片が多い。

E群はS-18の南東側、A・C群からやや離れて東南方向に幾つかの土器がある。1点は完形の小型丸底壺で口縁部を斜め下に向けている。位置的には樹木根(S-19)にも近いが、レベル的にはS-19周辺出土としたものよりも高い位置にある。確認調査15トレンチ西側ベルト及び19トレンチ南側ベルト中にあたり、壺はb-1層及びd層にまたがって包含されていた(第118図)。

調査中の白玉検出はA群における1点のみであったが、いずれの群においても掘削時に採取した土壌の水洗選別によって滑石製管玉・白玉が多数検出されている(11表)。白玉は3点が土器内部(241・254・268)から出土した。水洗選別で検出した白玉は、S-18の中でも下位にやや多い。

S-18の範囲で出土した土器の接合状況を示す(第138図)と概ね各土器群内の範囲内で接合している状況が看取されるが、隣接するA群とC群、B群とC群間では群の範囲を超えて接合している。平面・垂直分布に前述のようなまとまりがあり、また各群において出土遺物の構成に差異があることは一括性を示すと考えられるが、土器の上では各群の時期差を見いだせるほどの差異はなく、S-18という土器集中遺構全体での埋納あるいは廃棄後の遺物群の埋没の時期は、短時間であった可能性がある。

【遺物】

各群毎の出土遺物は第139～142図に示した。遺物の説明は一括して概ね種別、器種毎に行う。

第139図～142図はS-18出土の土器及び土製品、石製品実測図である。

第139図237～239は甕で、口縁は直線的に伸び、頸部で屈曲する。内器面頸部以下はヘラケズリを行い、器壁は薄い。240～246は器高10cm前後の小型甕と見られる。240は内外器面にハケメが残っている。241は頸部内器面に明瞭な接合痕が残り、この部分だけ器壁が厚い。242は弱く屈曲する頸部を持っている。243は短く外反する口縁部を持ち、体部中位に最大径が来ている。底部は丸みを帯びている。244～246は頸部直下に体部最大径がある。

第139図247～第140図275は壺である。250の体部はほぼ球形である。251は接合でほぼ復元できたものである。わずかに底が尖り、体部最大径と口径はともに9cm前後である。ナデ調整で丁寧に仕上げられている。252は頸部の接合痕が明瞭に残る。253～255は安定感のある丸底である。256は壺の完形資料である。口縁はつまみ出したように短く外反している。調整は内外ともヘラケズリで、殊に外面はナデ調整と併せて丁寧に仕上げられる。257は内器面に所々ヘラケズリ調整が見られる。

259・260は安定感のある丸底の底部を持っている。261は平底を意識した作りで、外底より

も内底が平坦に作られる。肩部や体部下位などが角張った器形で、器壁は厚い。262は強く外反する口縁と見られる。263は頸部片で、全体が摩滅している。265はほぼ完形の資料で、口縁断面には凹凸があり、外見はわずかに膨らんでいるように見える。尖り気味の丸底を呈す。266は口縁が直線的に大きく開いた器形である。267は頸部以下が残る資料で、肩部が張る器形である。268は残りが良く、一部が割れているだけであった。口縁の中位で膨らみを持たせ、さらに口唇部で外反する。丁寧な仕上げである。

269～271は小型丸底壺で、口唇から頸部は直線的に伸び、体部は球形となる器形である。272は短めの口縁が直線的に広がり、肩部が張る器形である。細かいハケメ調整を行っている。273はほぼ完形に復元しているが、底部をわずかに欠く。意図的な穿孔の可能性がある。274は球形胴となる体部～底部で、器壁は薄い。275は二重口縁と見られる壺の口縁部である。器壁が薄く、屈曲部をさらに薄くしたため、この部分で破損している。

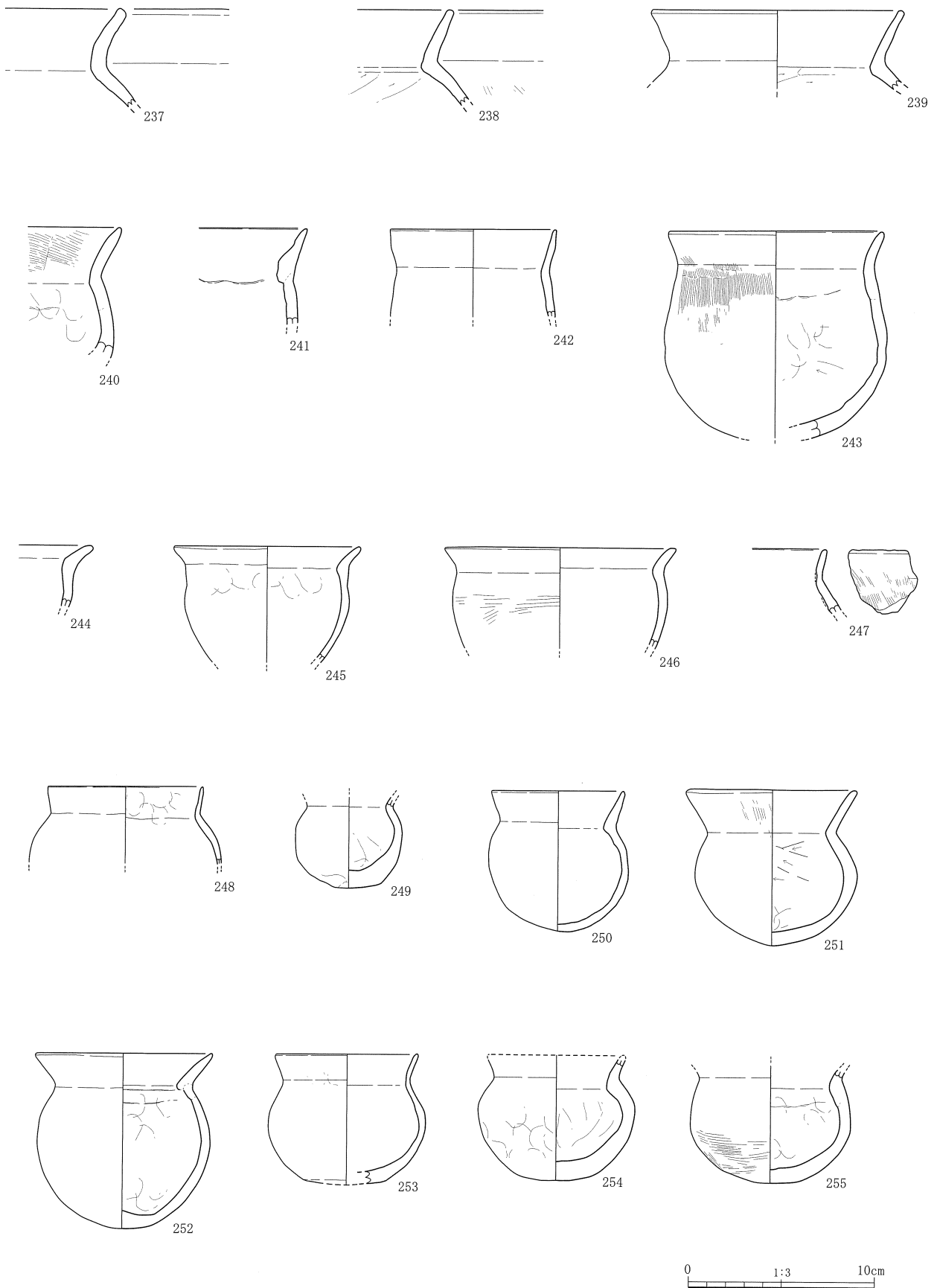
276はゆるやかに立ち上がる鉢である。

第141図 277～311は手捏土器である。277～281を壺形、282・283・289～305を坏形、284～288・306を鉢形、307～311を高坏或いは器台形としている。概ねこれらの器種を模して作ったと考えられる。277～279は口縁部が短く、口唇部はやや尖る。また最大径は肩部にあり、やや長胴の器形となる。280は頸部を持たない壺形の口縁部で口唇が尖る。281は無頸壺で、口縁が内湾している。全体に厚ぼったい。282は尖底の坏形である。口縁は弱く内湾している。283は底部で、半球形の器形である。284～287は口唇部を尖らせ、さらに外反させる事で、頸部を表現している。また、平底かそれに近い丸底の形態をとる284は外反の度合いが弱く、頸部の表現としてはわずかなものである。285～287は口縁部を明らかに外反させている。286は平底で、底部から直立しながら立ち上がり、口唇部は尖る。288は他の手捏土器と比べると器高7.6cmとやや高い。但し土師器の作りにはかなり粗雑である。口縁は緩やかに外反し、平底気味の底部となっている。外面底部付近はハケメ、体部以上はナデ調整を行っている。289は全面ナデ調整を施す。器壁は厚く、重みがある。290は口縁の外反度合いが場所によって大きく違っている。291～305は尖底気味で器高2～3cm、口径を復元すると3～5cmほどの大きさとなる。器壁の厚さや口縁形態に若干のばらつきは見られるが、基本的なサイズ、丸底、ナデ調整及び指頭圧痕による仕上げなど、同じ意匠によると考えられる。306は平底で、鉢形になるものか。

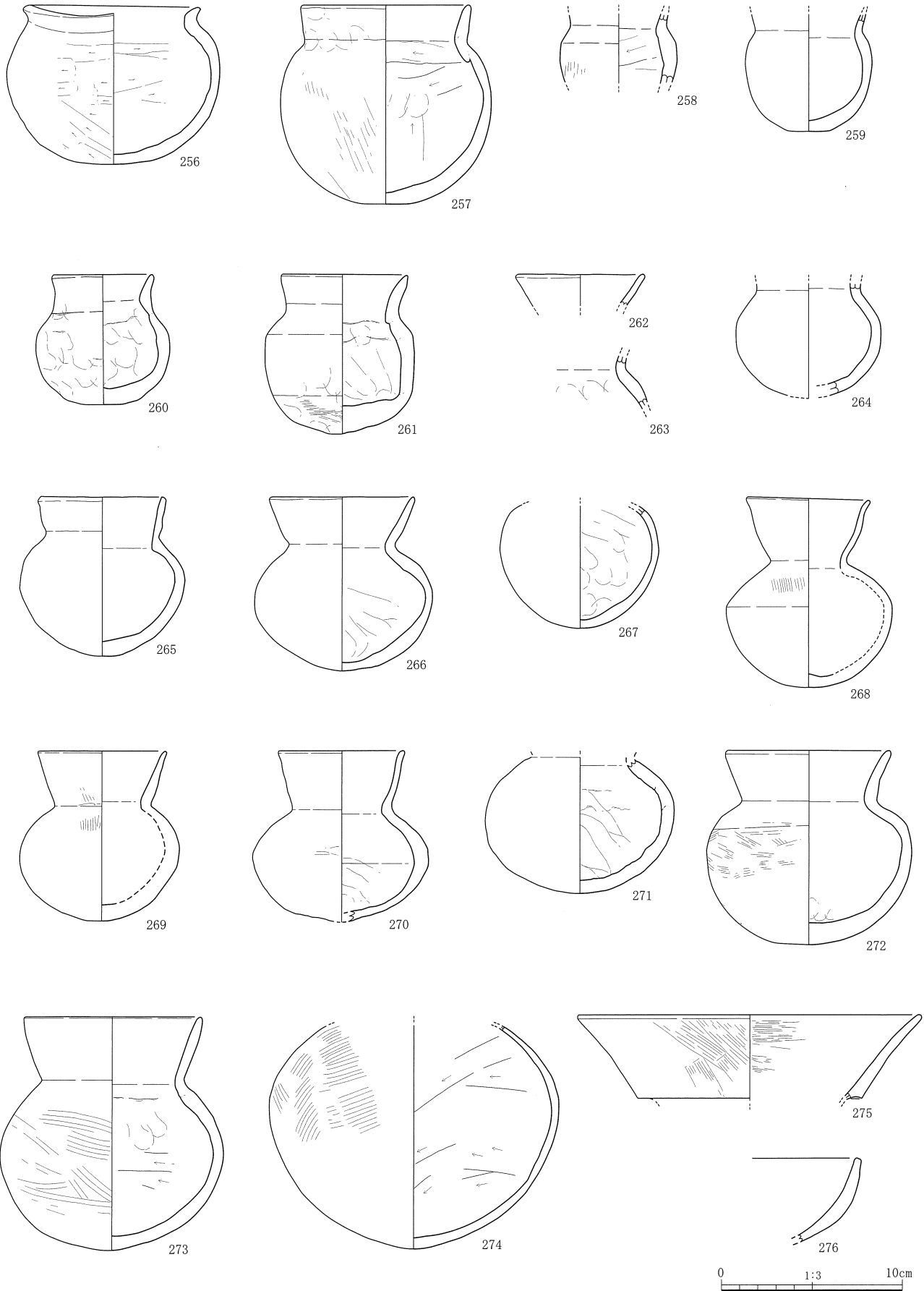
307～311は高坏或いは器台形としている。円筒の上下に坏を付けたような形で、上下の径はほぼ同じに作られる。わずかだが坏の深さには差がある。この差で上部または脚部を区別しているようである。手捏土器の中では比較的丁寧に作られる。312は弥生時代中期の甕口縁部である。遺構埋土に混入したものと見られる。313は土製勾玉である。頭部を欠いている。尾部は長く、半円形を呈する。

314・315は小型の有孔円板である。2つとも直径16mm、厚さ2～3mmで、二個の穴を穿っている。石材は片岩類と考えられる。314は孔の間隔が3.5mmと狭い。表裏面共にほとんど平坦に研磨されているため、断面形状は板状となっている。315は確認調査時に出土した。孔の間隔は5mmと広い。断面は板状である。分析の結果、石材は緑色片岩類と見られる。この2点はS-14出土の有孔円板と形状は相似形であるが、大きさ、石材の点で異なる特徴をもつ。

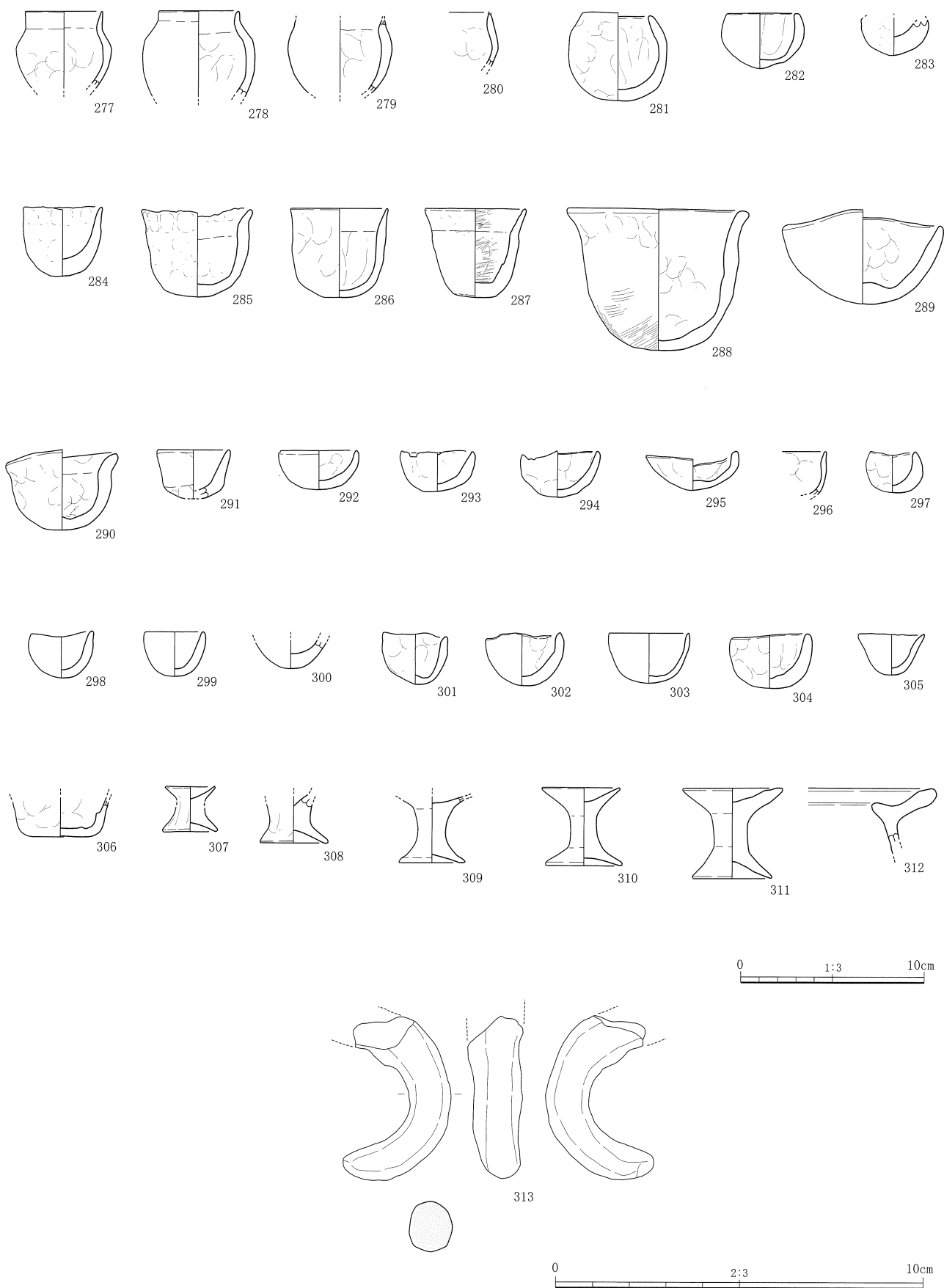
316は片岩類を利用した完形の勾玉で、半円形を呈す。長さ2.2cmで、頭部のみやや太い。



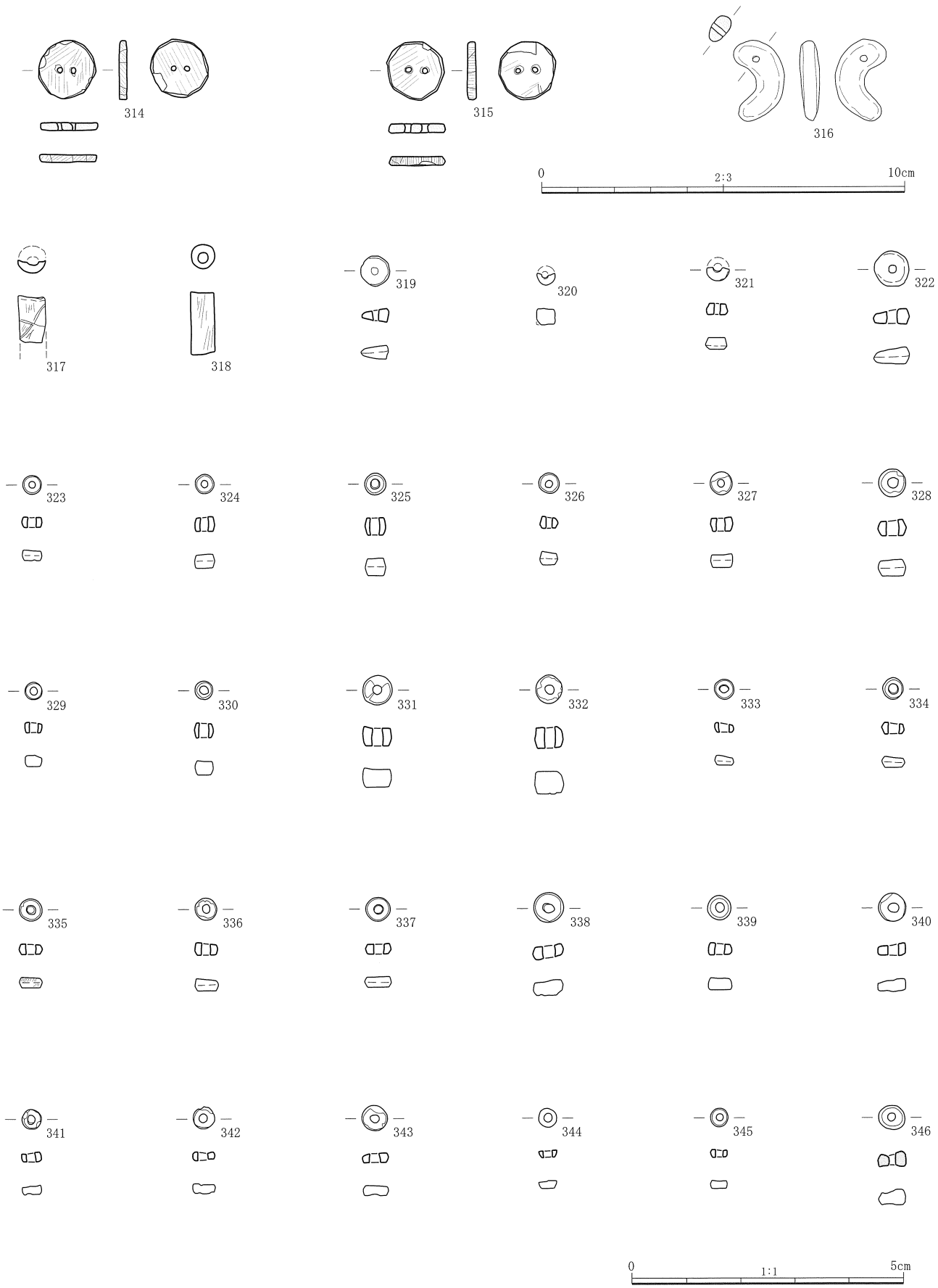
第139図 祭祀遺構 (S-18) 出土遺物 (1)



第140図 祭祀遺構 (S-18) 出土遺物 (2)



第141図 祭祀遺構 (S-18) 出土土器 (3)・土製品



第142図 祭祀遺構 (S-18) 出土石製品

第2節 遺構

317・318は管玉、319～345は白玉、346はガラス玉である。319～321の白玉は土器内部から検出、322は発掘調査中に検出し、それ以外は水洗選別により検出した。出土した白玉総数は完形52点、破片38点である。直径平均は4.1mm、厚さ平均2.2mm、孔直径1.6mmで、厚さと直径の比は1:2.06である。厚さと直径の比率、側面の稜線の有無によって分類した。側面に稜を有しないものが大半で、85%以上を占める。

317・318の管玉は直径、口径ともほぼ等しい。317は外面にX字状の線刻があるが、意図的なものかどうかは判断できない。

319・322は比較的直径が大きく上下端面が平行にならず傾斜している。323～328は厚さが直径の1/2以上で側面に稜を有する白玉である。329～332は厚さが直径の1/2以上で側面に稜を有しない白玉である。333～337は厚さが直径の1/2未満の扁平なもので、側面に稜を有する。端面が傾斜するものが存在する。338～345は扁平で側面に稜を有しない白玉である。管玉及び白玉の石材はいずれも滑石で、色調は乳白色から暗緑色のものまで様々である。

346は淡いエメラルドグリーンガラス玉で、調査Ⅲ区内からのガラス玉の出土はこの1点のみである。断面形状はやや扁平で丸みが少なく、白玉に類似する。

S-01（第143～145図、図版17～18・86）

【遺構】

祭祀遺構S-01は確認調査時に15トレンチにおいて検出された遺物の集中であり、幅1.3mのトレンチでの検出のため全容は不明であるが、確認できる範囲で南北方向には約1.7mほどの範囲に広がる。土師器（甕・壺・鉢・高坏・坏）、手捏土器（鉢・高坏）により構成される。検出した範囲においては比較的完形の手捏土器が多く、土師器も器高の低い丸底壺などであり、祭祀遺構の一部であると考えられる。

本調査では調査区外のため未調査であるが、本調査で検出した祭祀遺構との関連上、ここで出土状況及び遺物について詳述する。なお検出時の状況については第Ⅲ章第2節第2項に記した。

【出土状況】

出土位置は調査区北側端部に接する調査区外にあり、本調査におけるグリッドではAA-20グリッド北東部にあたる。層位的には確認調査におけるⅢ-3層およびⅢ-4層に含まれる。平面及び断面観察において明確な掘り込みは確認できなかった。

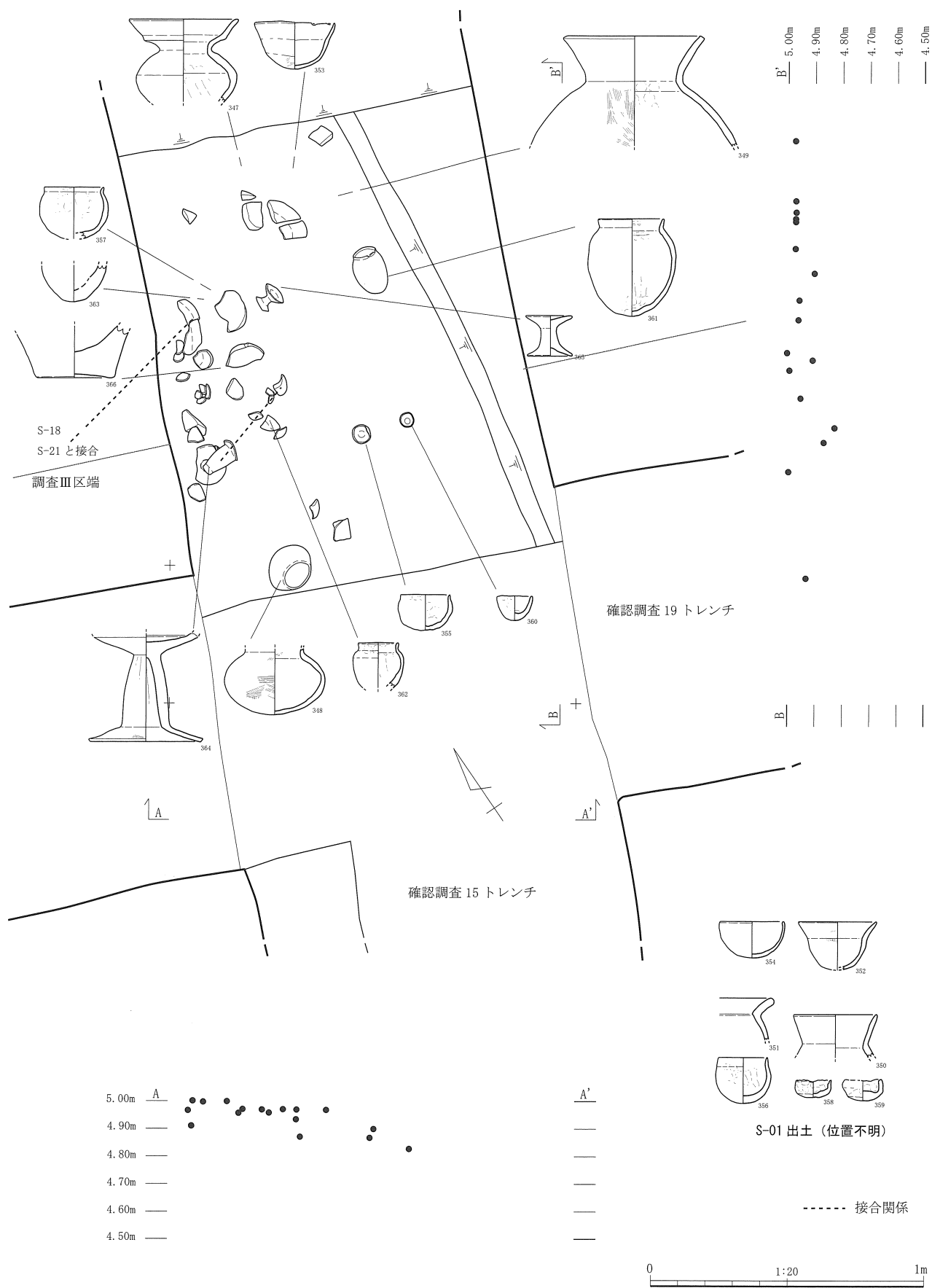
遺物はトレンチ幅の西側3分の2ほどに広がっており、トレンチ西壁に沿って0.8m×0.5mほどの集中部がある。

遺物の垂直分布をみると、西側が高く標高5.0m程から東側に向けて標高4.85mまで下がっており、上下で20cmほどの差がある。ただし、確認調査時の記録では出土した土器の上端でレベルを計っており、また取上も土器1点毎ではなく、数点を一括した単位で取り上げているため、大まかな傾向を示しているに過ぎない。重機によって掘削された排土中からの一括取上げ遺物も少なくないことを考慮すると、上述の平面及び垂直分布はあくまで検出された状態であり、本来の状態ではない。完掘できていないこととも併せ、断片的な資料であることに注意が必要である。

なお、古墳時代の遺物集中部に混じって弥生中期の甕口縁部と底部片が出土しており、口縁



第143図 祭祀遺構 (S-01)



第144図 祭祀遺構（S-01）遺物出土状況

部はS-21の第151図379の甕口縁部と接合する同一個体である。混入の要因は不明である。

【遺物】

第145図347～366は確認調査15トレンチにおいて遺物集中箇所として祭祀遺構S-01を認め、取り上げを行ったものである。

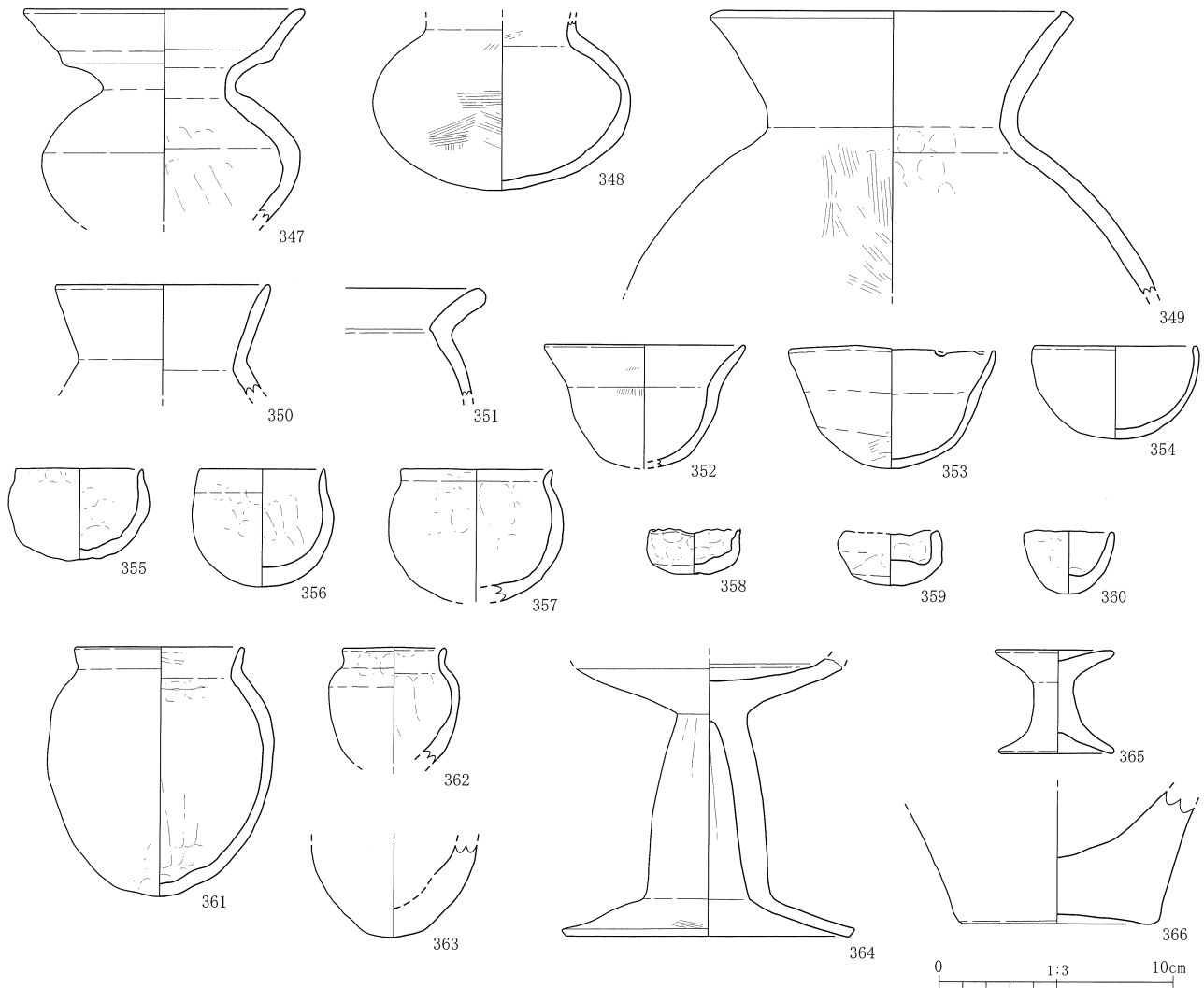
347は二重口縁壺で、口縁部内外器面に明瞭な段を持ち、体部中央が張る。348も壺形土器で、体部形状は347に似るが、頸部より上を欠くため、口縁形態は不明である。349は単純口縁壺で、口唇内側がわずかに尖る。肩部から体部は丸く張り出している。350は口唇が尖っている。351は頸部で強く屈曲する。352～360は手捏土器である。

352は口縁が大きく開く器形をしている。353は頸部にわずかな稜を有する。354は頸部を持たない半球形の体部で、内湾する。355・356は頸部でわずかに屈曲している。357は頸が短い壺形である。358～360は特に小さく浅い坏形である。

361～363は小型の甕で、やや長胴となる。363は内底部に付着物がある。

364は高坏の坏底部から脚部で、坏体部との接合部で破損している。365は手捏土器で、高坏か器台を模したものと見られる。

366は弥生土器の底部で、若干上げ底となり、甕棺の可能性はある。



第145図 祭祀遺構 (S-01) 出土遺物

樹木根 S-19 (第 146 ~ 148 図、図版 74・87)

【遺構】

樹木根 S-19 は長さ約 2.4m、幅 0.4m の自然木とその周辺に広がる細長い樹木根を総称する。いずれの木片にも人為的な加工は認められない。弥生時代～古墳時代に当地に存在した樹木の根部が遺存したものと考えられる。

【出土状況】

出土位置は AA-20 グリッド東側にあたり、祭祀遺構 S-01 の南、祭祀遺構 S-18 の東側にあたる。なお、S-18 では土器群と同レベル及びその下位から同様の細長い根が出土しており、こうした根や樹皮等の木片の広がっている範囲は東西方向で 3 m 以上である。また確認調査時には S-01 の北側で重機が掘削した排土から長さ約 1.5m、幅 0.6m の樹木根 (図版 87) が出土しており、南北方向では 5 m 以上の拡がりがあったことがわかる。なお S-01 の遺物出土レベルと樹木根の出土レベルとの差から、S-01 の直下にも樹木根が存在しているとみられる。さらに 15 トレンチを中心として付近からは球形のクスノキとみられる種子が 10 数点出土した。水洗選別でも S-18 部分の土壌から多くの木片及び種子が検出され、S-14 付近の土壌からも少量ではあるが同様の木片、クスノキ種子が出土している。

調査区で検出した S-19 の最も大形の根の形状は南側に向かって先細りながら枝分かれしている状況にあり、その北側が樹木の中心部とみられる。またそれぞれの細長い根部分は軸をやや変えながら北東 - 南西方向を示している。確認調査時に出土した樹木根は先端が北側を向いていたらしいので、これらのことから樹木の幹があったであろう中心部は調査区北側の S-01 の東側付近にあったと考えられる。なお、東側の状況は面的な掘り下げが不十分であり把握できていない。

祭祀遺構 S-01 の下位にも存在した可能性が高いが、確認調査時には土器を取り上げた段階で掘削を止めているため確認できていない。

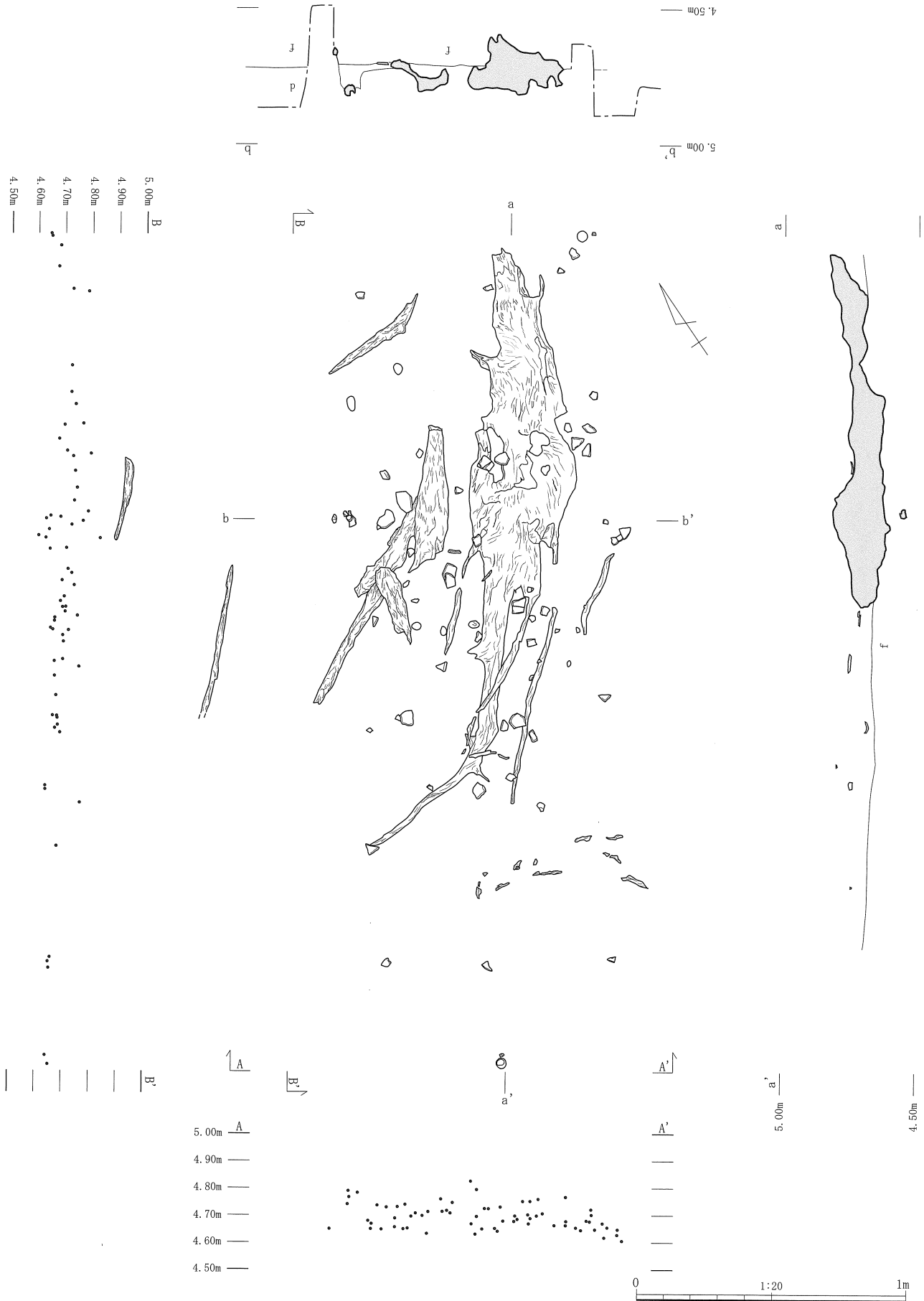
層位的には樹木根の下部が f 層の上位に、上部が d 層の下半部に包含されており、北側端部で標高 4.83m を計り、南へ向けて傾斜している。確認調査時に出土した樹木根もほぼ同じレベルとみられる。

樹木根の周囲では、ときに樹皮に密着して数十の土器片、その他 10 点前後の径 2 ~ 5 cm の安山岩円礫が出土した。土器は小破片であり帰属時期の峻別が困難であるが、焼成や胎土の特徴から弥生土器と考えられるものが多い。これらの土器片と樹木根の関係は判断が難しいが、倒木ではなく樹木根であることから同一レベルで出土していることがそのまま同時期とはし難い。

遺物の出土位置は S-19 の中央付近にやや集中しているが、多くは小破片であり、内外面が摩滅しているものも認められる。なお手捏土器は完形であるが、このまともりや樹木根自体とはやや離れた位置で出土している。接合した土器片は樹木根をまたぐような形で接合しており、10cm 以上の高低差をもって接合しているものもある。弥生土器が多いが、後述する祭祀遺構 S-21 とは遺物の出土レベルが異なり、また間に遺物が希薄な空間が存在することから関連する可能性は低いものと考えられる。

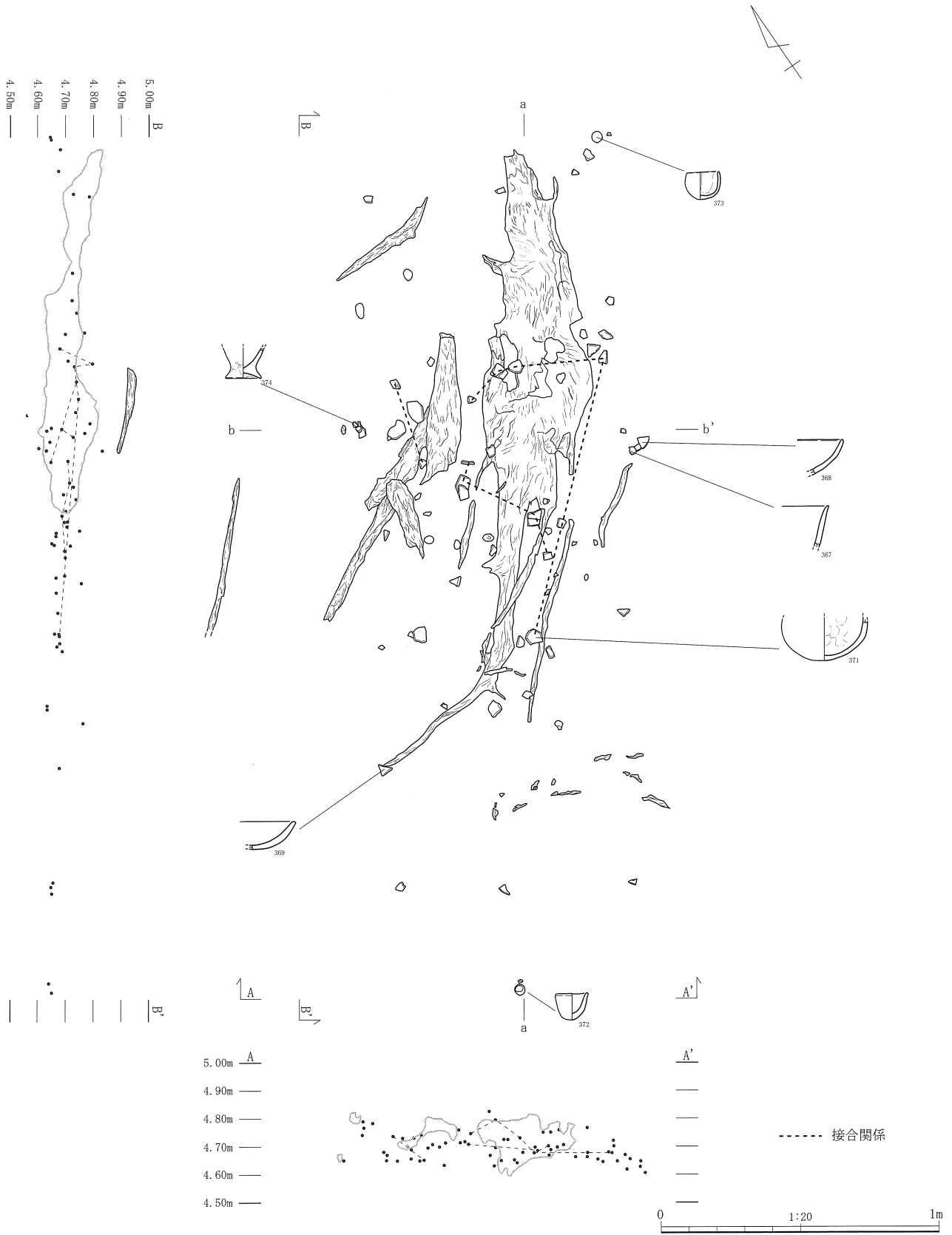
【遺物】

第 148 図は S-19 周辺出土土器である。

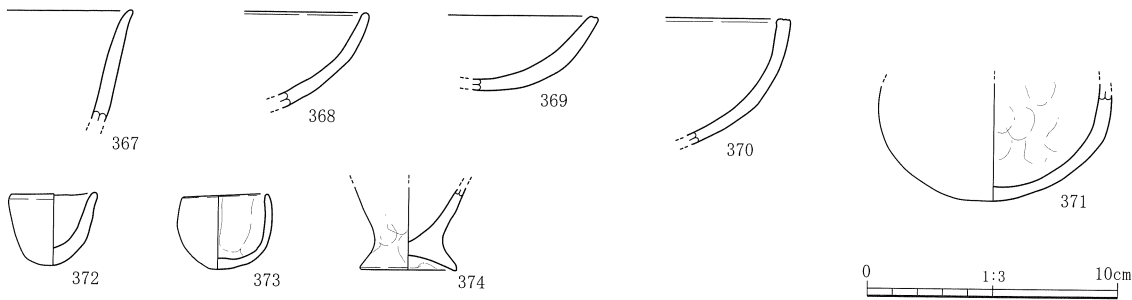


第146図 樹木根 (S-19)

第2節 遺構



第147図 樹木根 (S-19)



第148図 樹木根 (S-19) 周辺出土遺物

第148図367は高杯の口縁部である。体部から口縁部へは直線的に伸び、口縁端部はわずかに器壁を薄くしている。

368は深めの鉢と見られる。口縁端部は丸い。369は鉢である。器高が低く口径は大きい器形と見られる。口縁端部は丸い。370は口縁がほぼ直立する鉢で、口縁端部は平坦で内外にわずかに突出する。体部下半はハケメ後ナデ調整を行っている。

371は小型壺の底部と見られる。体部中位に最大径を持っている。表面は摩滅のため、調整等は不明である。

372は手捏土器の坏である。尖り気味の丸底で、全面を細かいナデ調整で仕上げている。373は手捏土器の坏である。丸底で口縁部を薄く作る。374は手捏土器脚付きの鉢または甕を模したと考えられる。体部の立ち上がりは急で直線的である。これに対して脚部は浅く、脚径も大きい。

S-21 (第149～153図、図版75・88)

【遺構】

祭祀遺構S-21は南北約6.0m、東西約3.5mの範囲に広がる遺物の集中部であり、弥生土器(甕・壺・碗)、手捏土器、土製品(土製勾玉)により構成される。これらの遺物はいずれも破片であるが、黒褐色を呈するf層上面に張り付くような状態で出土し、全体的に弥生時代の遺物出土が極めて少量かつ散漫な調査区内において特異な密集状態を示している。また祭祀遺構S-14の直下にあたり、土製勾玉、手捏土器の存在と併せ考えると何らかの祭祀遺構と捉えられる。

【出土状況】

出土位置はAA-20グリッドの南西部にあたり、層位的にはf層上面と、その上層であるh層・b-2層・c層・d層の下位との層界にあたる。

検出状況を概略すると次の通りである。祭祀遺構S-14の検出の過程において掘削したサブトレンチにより、S-14を包含層する下位に弥生時代中期の土器片が多数存在することが確認された。またこの拡がり是一部S-18の下層にまで広がっていることが確認できた。さらに、各トレンチの断面観察によって黒褐色を呈するf層の拡がりとは一致する傾向にあることが判明した。

土器片の拡がりには6m×3.5mの比較的広範囲に及ぶが、北側はやや疎で、中央付近の幅0.5m、長さ3.5m程度の範囲で帯状に密集する部分がある。この密集部の東側は確認調査のトレ

ンチに当たっており、また西側および南側に隣接するグリッドは時間的制約から十分な調査を行うことができなかった。確認調査においては弥生土器の出土は報告されておらず、東側には広がっていないか、あったとしても疎な状態で、西側についてもこの土器の拡がりはおそらくグリッド境の土層観察用ベルトの下位で収束するものと考えられる。

垂直分布をみると、北側が標高 4.7m 前後と高く、南側は 4.5m 付近へと緩やかに傾斜している。また東西方向では西側が標高 4.7m 前後と高く、東側へと緩やかに傾斜している。この傾斜の状況は黒褐色土層 f 層のそれと同様であり、両者の関連が考えられる。しかしながら、調査期間の関係上、平面的に f 層を検出した段階までで調査を終了したため、f 層内における遺物の包含状況やその時期等については不明とせざるを得ない。

遺物の器種ごとの出土状況では、土製勾玉 2 点はそれぞれ帯状集中部の中央付近にあり、手捏土器は北側の散漫な部分にあった。ジョッキ形は底部付近の破片を図示したが他に把手片も出土している。他に、土器片に混じって径 3～4 cm 程度の小円礫が 30 点前後出土しているが、その分布は土器片と同様の粗密を示し、帯状集中部に多い。

土器片の接合状況では、隣接する土器片同士が接合するものがある一方で、2 m を超える位置から出土した破片同士が接合するものがある。本来は帯状の密集部にあった土器が埋没の過程で散在した状況が看取される。接合状況で特筆すべきは、第 151 図 379 に図示した甕が、S-21 内部において 1.2m 離れた 2 点と接合し、さらに 3 m 離れた S-18 の D 群中央の 1 片、そこから 2.5m 離れた S-01 の 1 片と接合している。S-21 の 2 点と S-18、S-01 の土器片とは垂直距離でもそれぞれ約 5cm、約 25cm 程度の距離がある。古墳時代の遺物集中の中に 1 点ずつ混在するこのような出土状況を示す要因は不明である。

【遺物】

第 151～153 図は S-21 出土の土器・土製品実測図である。

第 151 図 375～385・388～393 は甕である。375～385 は口縁部が外側へ大きく張り出し、内側にも突出している。成形は内傾する口縁に粘土を貼り付けて行われる。377 は復元口径 30.4 cm で、細かいナデ調整を行っている。外器面には煤が付着している。378 は口縁端部が厚い。379 は内側への張り出し部で粘土接合痕を確認できる。381 は内外への張り出しが小さく器壁も薄い。383 は接合によって口縁付近が半周程度復元できたもので、復元口径は 24.7 cm である。384・385 は外側への張り出しが弱く、口縁断面が三角形を呈す。386 は平坦な口縁から強く屈曲し、頸部径は小さくなる壺である。387 は大型壺の口縁と見られる。388～393 は甕で、頸部を単純に屈曲させる器形である。くの字口縁といえるほど強調させてはおらず、391～393 のように内面が突出しているものもある。また、口唇形状は丸い。388～390 は頸部屈曲が緩やかである。391 は内器面に強い稜線が入る。392・393 は内面への突出を強調するもので、突出の下部にはわずかな段を有する。

第 152 図 394～411、413・414、416・417 は壺である。394 は大きく外反し、口縁端部は四角い。395 は口唇部を上方へつまみ出すように成形している。器壁が薄い。396 は頸部で、器壁が薄いことから中型の壺と考えられる。397 は復元口径 18.6 cm、外器面頸部の屈曲はあまり強調していない。398 は復元口径 20.0 cm と 397 に近いが口縁が長く、器壁が厚い。第 153 図 399 は器壁が薄い口縁部で、口唇には沈線を 1 条巡らせている。400～406 はいずれも口縁端部は丸みを帯びるが途中で破損しているため、頸部の形状は不明である。器壁は 400 が薄く、401・402



第149図 祭祀遺構 (S-21)